基礎・臨床系教育部

（1）構成

基礎・臨床系教育部（以下，本項においては本部と略称する）の平成 26 年 4 月 1 日現在の所属教員（大学院専任教員：見なし実務家教員を除く）は，教授 24，准教授もしくは講師 21，計 45 名である。本部の特徴は，所属教員の教育組織（専攻，コース）が多岐にわたることである。本部所属教員は大学院において，４つの専攻（人間教育専攻，特別支援教育専攻，教科・領域教育専攻，高度学校教育実践（教職大学院））ならびに９コース（人間形成コース，幼年発達支援コース，臨床心理士養成コース，特別支援教育専攻，国際教育コース，学校・学級経営コース，学校臨床実践コース，授業実践・カリキュラム開発コース，教員養成特別コース）にわたっている。また，教職大学院設置後は，学校現場及び教育行政の実務経験豊かな実務家教員が本部の所属していることもあって，教員のキャリアも多様である。

（2）部運営・部会議

本部の運営は，部長と評議員（本部では慣習的に副部長と称している）を中心に円滑に運営している。定例部会議は毎月第 3 水曜日の 13 時 10 分より開催している。部会議では，総務委員会，教育研究評議会の報告を行うとともに，その報告事項に関する意見交換を行っている。各種委員会の審議・報告事項についても委員からの報告に止まらず，できるだけ部としての意見交換を行うように配慮している。このような部会議の意見交換を含めて，総務委員会，教育研究評議会，各種委員会等に対して部の意向が反映されるように留意している。また，各種委員会からの報告等は事前にメールで関連資料や議事録を配付し，紙媒体の省力化に務めている。

（3）教育研究活動

詳細については後掲の教育組織である各専攻・コースの欄を参照いただきたい。各教員ともに学会発表，著書の刊行，学会誌・大学紀要等への学術論文の投稿，教育雑誌や一般著書での執筆，科学研究費による研究，附属学校あるいは教育委員会との共同研究等に，積極的にとり組んでいる。

（4）社会連携活動

教員の多くは専門分野を生かし，文部科学省や各都道府県や市町村の教育委員会等における社会連携活動や教育支援アドバイザーとしての活動等にも積極的に取り組んでいる。平成 26 年度には，特に本部所属の教員が，学力・学校力向上を契機とした徳島県教育委員会との連携活動において中心的な役割を担った。この他にも，三重県鈴鹿市教育委員会と

の連携協定に基づく活動についても本部の教員が活躍し，大学院の定員充足にも貢献している。

（5）当面する課題

①大学院における定員充足は，本部においても大きな問題となっているが，特に平成20年4月に開設された教職大学院（高度学校教育実践専攻）については，教職大学院平成26年度入学生についても，定員を満たすに至っていない。部の教員は，それぞれのコースの定員確保に向けて，教育委員会や大学訪問に取り組んでいる。また，教職大学院においては教育委員会や大学等に対する広報活動に積極的に取り組み，定員の充足に取り組んでいる。

②本部は，教職大学院において経験豊かな実務家教員が数多く所属していることもあって，教員の職位と年令の不均衡が顕著になっている。具体的には，実務家教員は採用時に年齢が高くならざるを得ず，それゆえ，教員の年齢構成が高齢化するだけでなく，教授昇任時に研究者教員と実務家教員のバランスをとることが難しくなっている。

③大学改革期において，退職教員の不補充が継続しており，このために教育機能を維持強化することが困難になりつつある。特に，教員養成大学としてその学問的基盤をなすと思われる教育学関係の教員の欠員が今後も予想され，教員養成大学における教育機能に大きな影響を与えるのではないかと危惧される。

④本部に所属する教員が多様であることもあって，大学改革に関して教員が有している情報や問題意識に大きな差があるように思われる。今後本格的な大学改革が進展する状況が予想されるが，教員が「新しい鳴門教育大学づくり」に協力して取り組めるよう，本学をめぐる状況や大学改革の進捗状況については，今後もできる限り丁寧に説明していく必要があると思われる。

人文・社会系教育部

（１）構成

人文・社会系教育部は，現代教育課題総合コース，言語系コース（国語），言語系コース（英語），社会系コースの 4 コースで構成されている。平成 25 年度当初の部構成員は、36 名であった。

平成 25 年度末に部の役員改正を行った。この結果、平成 26 年度の人文・社会系教育部の部長には山本準教授（社会系コース）が就任し，人文・社会系教育部を代表する評議員を村井万理教授（言語系コース(国語)）が務めることとなった。平成 26 年度の人文社会系教育部に所属する各コースのコース長は，太田直也教授（現代教育課題総合コース），余郷裕次教授（言語系コース（国語）），藪下克教授（言語系コース（英語）），青葉暢子教授（社会系コース）である。

人事関係では，言語系コース(英語)の伊東治巳教授の後任に石濱博之教授が，同(英語)のブラッドリー・バーマン准教授の後任にエリザベス・ヨシカワ准教授が就任した。さらに徳島県教育委員会との交流人事により現代教育課題総合コースに大平和哉准教授が就任した。また，昇任については，社会系コースの青葉暢子准教授が教授へ，言語系コース(英語)の真野美穂講師が准教授へ，総合学習開発コース田村和之講師が准教授へとそれぞれ昇任した。

（２）部運営・部会議

人文・社会系教育部の運営は，教育部長を中心に円滑に進められた。毎月第 3 水曜日に行われる部会議においては，教育研究評議会や各種委員会での審議・報告内容が報告された。教育研究評議会の内容に関しては人文・社会系教育部代表評議員である村井万理教授（言語系コース(国語)）が担当し，総務委員会，人事委員会等，部長が構成メンバーとなっている委員会の内容については部長である山本準教授が報告した。その他の各種委員会報告について基本的には、学内の各種委員会報告は担当委員が部員全員にメールを用いて報告している。部としての意見集約や決議が必要な内容については，部選出の委員が部会で報告し，議論して結論を得た。従来の講座主任会議に相当するコース長会議は，年度末に次年度の各種委員会委員の配分を決定するために開催した。

（３）教育研究活動

教育活動では，昨年度に引き続き各コースの教員が共同あるいは単独で教員採用率向上のための教育活動の充実に取り組んだ。具体的には，就職支援室が企画した教採支援事業への参加を学部生・大学院生に呼びかけるとともに，自ら模擬面接での面接官の役割を積極的に担った。また，各コース内においては，所属学生・院生を対象とした模擬授業・模

擬面接・小論文などの指導を積極的に行った。各コースの取り組みは各コースの報告を参照のこと。以下に，特徴的な活動を示す。

現代教育課題総合コースではゼミ単位での履修科目の指導，履修単位の確認を徹底させた。論文執筆に関連して，日本語の読解と表現に関する指導は徹底して行った。現在行われている院生主体の勉強会をさらに活発なものとすべく協力した。

社会系コースでは、就職支援を徹底し、受験生に模擬授業・場面指導の実践機会を設け、現職院生も交えて指導を実施した。また修士論文の作成を順調に進めるため、コース全体で修士論文の中間発表会を開催するなど、研究指導にも力を入れた。

言語系コース（国語）では，学年別オリエンテーションを実施し，教員採用試験に対する受験勉強の計画法・学習方法・受験都道府県（市）の選び方，また，就職活動全般に対する心構えなどを指導した。大学間交流協定締結校との学生間の交流を図った。

言語系コース（英語）では，TOEIC　IP テストを実施し，学部生用自習室 E-ポケットを自主学習の場として環境を整備し，授業外の学習を支援した。学部授業「英語コミュニケーション」はすべてネイティヴの教員で実施し，「英語リーディングⅡ」は全クラス一斉に TOEIC 対策の授業とし，学部生の英語運用能力の養成に尽力し，また，学生の留学を支援した。

人文・社会系教育部の各教員が科学研究費補助金の獲得に努めた。

（４）社会・国際貢献

社会（地域）貢献に関しては，人文・社会系教育部の各教員が例年通り下記のような活動をおこなった。

第 1 に，それぞれの専門性を生かし，県内・県外の教育委員会をはじめとした各種委員会委員として活動している。

第 2 に，教員免許状更新講習や県内・県外の教育委員会主催の教員研修講座の講師・助言者として活動している。

第 3 に，本学の地域支援活動の中核をなす教育支援アドバイザーの講師として活動している。

第 4 に，本学主催の公開講座の講師として，積極的に社会（地域）貢献に参画している。

第 5 に，附属学校主催の研究大会や研究授業での指導助言者として，積極的に関与するだけでなく，教育実習や共同研究の場を通じて附属学校園との連携を強めている。

国際貢献では，留学生の派遣と受け入れに積極的に取り組み，実績を上げている。

自然・生活系教育部

（１）教育部の運営

自然・生活系教育部では，自然系コース（数学），自然系コース（理科），生活・健康系コース（技術・工業・情報），生活・健康系コース　（家庭）の全ての教員と，国際教育コースの一部の教員から構成され，数学科教育，理科教育，技術・工業・情報科教育，家庭科教育，国際教育協力を学問領域とする教育研究活動と行うとともに，学内センターの運営も行っている。平成 25 年度末において 1 名の教員が退職し，平成 26 年 4 月に 1 名の教員が着任し，自然・生活系教育部は教員総数 38 名で運営した。

大学運営に関わる各種委員会委員については，各コース長と教育部長で相談して，負担に偏りが出ないように各コースの教員構成数を考慮し原案を作成し，教育部会での承認を得て決定した。各々の委員会委員に選出された教員は委員会で審議された内容や検討事項を教育部に報告するとともに，教育部における意見を委員会に戻し，教育部の意見が委員会で反映されるように努めた。

教育部会は，8 月を除き，原則毎月第 3 水曜日の 14:40 から開催した。これまで同様，教育部会開催日までにメーリングリストにより，各委員が委員会報告を部会議前に事前に提供した。教育部長はその事前報告に基づき，各種委員会の報告及び検討事項からなる議事次第を作成し，教育部会案内を構成員に送付した。各種委員会委員は，教育部会で会議内容を説明し，質問・回答により共通認識を図った。疑義が残る事項については各委員が委員会に持ち帰る等の対応を行い，積極的な大学運営に寄与した。なお，特に重要な案件については議題として設定し，十分な意見交換を踏まえて審議した。

その他，教育部として選出した各種委員会委員に加えて，大学運営に伴う各種の委員会委員や役職に就き，それぞれその役割を果たした。特に，入試企画担当副学長，国際交流担当副学長，兵庫教育大学連合大学院副研究科長，情報基盤センター所長，教員教育国際協力センター所長，長期履修学生支援センター所長を本教育部教員が併任して職務を行い，教育・研究の充実や円滑な大学運営に貢献した。

（２）教育・研究活動

教育活動においては，いずれのコースともその教科の背景のもとで，学校で行われている授業内容との関わりを意識した授業を行った。教科の専門科目においては，学校において指導される教科の内容がその根本においてどのように各教科の授業科目で教授されているかや将来どのような関わりを持つものであるのかについて，それぞれの教員が自らの専門の立場から教師としてその専門性の理解と基盤となる概念に基づく考え方の重要性を説き，単純な指導技術の獲得だけに終わらぬよう配慮した。また，教科教育科目においては，教科専門科目において培われた専門に対する深い理解のもと，実際の学校において行われている授業を見直し，その授業内容や方法を分析し，そのことを通して教材開発や授業作

りなど教育実践に繋がる授業を行った。その際，各コースの教員が横の連携を密に共通の認識を持つとともに，その到達目標を明確に設定して各々の授業の実践に当たった。

学生の修学状況については，それぞれの教員が注意してきめ細かい指導を行っているが，特にそれぞれのコース内でコース長，クラス担当教員，研究指導教員が主体となって情報共有を行い，連携を取った学生指導を行った。学部学生の指導では，将来の教員として要求される基礎力や課題を的確に捉えそれを自らの力で解決できる幅広い素養の育成を目指し，それぞれの年次の段階に応じた教育指導を行うとともに，学生生活全般に亘って充実して目標を持って勉学や生活を送ることができるよう，きめ細かい指導に努めた。大学院学生の修士論文指導においては，それぞれの学生の研究希望内容を尊重し，各自の希望に沿った研究課題が設定できるよう配慮し，指導教員を決定して指導に当たった。希望分野が複数の領域にまたがる場合や学際的な領域になる場合には，教員間の相談のもと，指導教員のみならず複数の教員が協力し，互いにカバーしながら教育できるような指導体制を組むことにより，学生の希望ができるだけ実現できるよう努めた。

具体的な指導においては各々のコースにおいてそれぞれの教科の特性があり，各コースでそれぞれに多様な工夫や目標設定を行い，学生にとってより良い研究活動ができ，また優れた研究成果を得ることができるよう指導し，学生の勉学環境，生活環境，進路指導に亘ってより良い環境が得られるよう努めた。留学生に対しては，国際セミナーや外国からの教育研修にも参加できるよう配慮し，先端的で国際的な研究にも触れる機会を設けた。ただ，長期履修学生の増加に伴い，実習や実験あるいは広く教育の質に対する影響が深刻な問題となっていることは事実である。これに加え，長期履修学生を含め，大学院生の基礎学力の格差も問題となってきている。現状は各教員の努力に任されているが，その負担は大きく，教員個人や各コースの努力では克服できない制度的な問題も浮かび上がっており，改善に向けて検討を行う時期にきていると思われる。学生の自主性の確立も大きな問題として感じられる。そういった問題を感じながらも，一方では，教員採用に向けて，就職支援室と連携しながら，教職の意義に対する指導に始まり，教員採用試験対策セミナー，論作文の指導，模擬面接等の過去問の解説による指導等，それぞれのコースで対策を講じている。

研究活動については，大学教育の基盤はそれぞれの教員の研究活動によって培われた成果とその研究姿勢が醸し出す環境にあるとの共通認識の下，教員それぞれがお互いの研究を尊重し，自らの研究を行った。その研究成果は，国内・国際学会での発表や学会誌掲載を行い，高く評価されるものも数多くある。また，学校の課題の分析や課題の解決に向けての提言，教育大学としてのカリキュラム分析等，非常に幅広い活動を行った。各教員の地道な研究に対する姿勢は，やがては大学の基盤を築く力となり，学生に与える教育の礎になると思われる。しかし，各々の教員は工夫しながら自らの時間を切り詰め，研究時間を確保しながら研究能力の維持に努めているが，そのこと自体が非常に厳しい状況になってきていることも現実である。今更言うまでもないが，研究活動は細切れに切り詰められ

た時間の合間で行うことができるものではなく，十分な時間と自由な発想の下においてのみ進めることができ，一つ一つの結果を深め，検証し，更にそれをじっくりと練り上げる根気と忍耐を必要とする精神活動である。そのためには，余裕のある研究時間と精神的ゆとりを確保できなければ，大学人としての研究を実現することはできない。大学を取り巻く状況や社会情勢等の種々の要因はあるにしても，本学では満足できる研究環境が提供されているとは言い難い状況である。研究活動ならびにその成果が大学の基盤を支えると信じながらも，現実において各教員は十分な研究時間と精神的ゆとりを確保できず，引いては学生へのゆとりある指導に発展していないことは残念である。ただ，各教員の努力により科学研究費補助金や教育研究支援プロジェクト等を受ける等，それぞれの研究課題において十分な成果を上げており，今後も積極的な研究活動を維持していきたい。

（３）附属学校及び社会との連携

附属学校との連携においては，各コースの教員が協力してそれぞれの分野において研究活動に対する助言を行うとともに，共同研究も行った。また，生徒を対象として講演や授業を行い，普段の授業とは違った立場からのものの見方や考え方を伝えることができた。特に，各附属学校の研究発表会においては事前に入念な議論や打ち合わせを行い，連携してその研究を深め，更に当日の研究授業の助言を行うことができた。教育実習時においては各コース教員が附属学校や他の実習校を訪問し，助言に当たった。

社会との連携においては，次世代科学者育成プログラム事業や教育支援講師･アドバイザー，フレンドシップ事業，公開講座等を行い，各種学校の生徒に対する啓発活動を行った。教員に対しては，10 年次研修，教員免許状更新講習，産業・情報技術等指導者養成研修をはじめとして，各種研修会において講師や委員を務め，その専門的内容や教育内容に対するより深い理解を促し，学校での教育に繋がるよう努めた。その他，地方団体主催の多くの各種研修会において，その講師や委員を務めるとともに，県や市の各種委員会委員に就任し，専門的立場から助言を行った。

（４）国際教育協力について

国際協力機構（JICA）による国際教育協力事業を関係コースで受託し，仏語圏アフリカ諸国，モザンビーク，ジブチ，パプアニューギニア，大洋州地域等に対して研修活動を行った。特に，これら研修の遂行においては，自然・生活系教育部の教員が積極的に関わることにより円滑に実施することができた。

芸術・健康系教育部

（１）教育部の運営

芸術・健康系教育部は，芸術系コース（音楽）7 名，芸術系コース（美術）8 名，生活・健康系コース（保健体育）11 名の計 26 名の教員により構成されている。なお，芸術系コース（美術）の教員のうち 1 名は，教員採用対策業務担当教員である。

教育部長は，任期により継続となる山木朝彦が務め，部長と共に教育研究評議会に出席する評議員を木原資裕が務めた。なお，同氏は教育部会議において副部長の役割を担った。

芸術・健康系教育部内の情報交換等については，昨年度を踏襲し，教育部各構成員となる教員全員に対して，メールの同時発信により教育部会議開催通知と教育部会議議事要録を配信している。このうち，議事要録については，部長とこの補佐を行う副部長が協力し，正確かつ適切な内容・表記となるよう，最善を尽くしている。さらに各種委員会からの議事要録及び資料を一斉配信する方式も，これまでの慣例を踏襲し，継続した。また，エコアクション 21 の取り組みの一環として，部会議当日の紙媒体による資料配付を原則として行わないこととし，慎重審議のために手元資料が必要な場合のみ，２名に１部の割合で配布することにした。

各教員の教育部内での役割分担等については，一昨年度・昨年度と同様，各種委員会委員名簿と構成員名簿を一覧表として作成した。新規に設置される各種委員会委員の選出ローテーションを決定する際に活用している。

（２）教育部会議

基本的に，第 3 水曜日 14 時 40 分からの開催を定例とし，教育部長が議長となって合計 11 回の教育部会議を開催した。

部会議は，原則として，検討事項と報告事項の項目に整理し，それぞれ，各種委員会から委員が部に持ち帰った課題を検討する検討事項の審議と，同様に，委員が持ち帰った重要事項の報告に大別して実施した。

今年度は，教育研究評議会から各教育部に意向を諮る流れとなる審議事項や本学の動向に係わる重要な報告事項が多かったので，教育研究評議会から評議員が持ち帰った審議事項・報告事項を他の各種委員会よりも優先させ，取り上げることで，教育部会議の構成員が大学運営における喫緊の課題について，マクロに把握し，従来よりも活発な意見交換が行えた。

総務委員会，人事委員会等の検討内容について，適宜，概略を部長が報告し，必要があれば，意見の交換を行った。なお，各コースから常時 1 名の委員を選出している学校教育学部教務委員会，大学院学校教育研究科教務委員会，学校教育学部入学試験委員会，大学院学校教育研究科入学試験委員会及び就職委員会の審議事項並びに報告事項については，各コース固有の課題等があるので，各コース会議に委ねる原則を今年度も踏襲した。

（３）教育研究活動

芸術・健康系教育部の教育研究活動は，今年度も各教員の専門領域ごとに活発に展開され，本教育部の総体を俯瞰して判断するならば，全体として堅実な成果達成ができたといえよう。その詳細等については，各コース並びに各教員の自己評価結果報告書に記載されているとおりであるが，良い意味で留意すべき事柄を簡略に記すと次の通りである。

芸術系コース（音楽）では，「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し，積極的に研究を進め，同コース（美術）では，公募団体展や地域の野外彫刻展に積極的に作品を出品することができた。生活・健康系コース（保健体育）においては，義務教育段階における運動や感覚の発達段階について，それぞれの専門学の知見を総合・統合する研究が進んだ。

（４）社会的活動・国際貢献

各教員の専門領域ごとに，その分野の学術学会や研究大会，講演会，演奏会，展覧会，審査会，競技会等を通じて，学術研究を通じた全国レベルでの社会貢献を行うとともに，地域の教育力を高めるために積極的な貢献を行った。また，大学院に在籍する留学生に対して，熱意ある論文指導等を行い，長期的視点から見たとき，国際貢献に寄与したといえよう。

芸術系コース（音楽）では，現職教員及び一般社会人を対象とした公開講座「楽しい歌唱教室」を開設した。同（美術）では，大塚国際美術館と鳴門教育大学が結んだ「地域文化財教育活用プロジェクト」の趣旨に沿うべく，近隣地域に在住する子どもたちに学生ボランティアが美術館での学びを支援する機会(N*Cap)をコース所属の教員が組織し，年間に4回実施した。また，2月に「第28回卒業展・第26回修了展」を徳島県立近代美術館ギャラリーと徳島県立21世紀館多目的活動室で開催し，展示作品を学外の方々に聴講していただいた。この時，21 世紀館ミニシアターにおいて，修士論文等，研究論文の発表会も行っている。

生活・健康系コース（保健体育）では，昨年に続き，鳴門渦潮高校と鳴門教育大学の連携協定にもとづいて，高大連携を実質的に推し進めることができた。

また，研究実績の項目とも関連するが，同コースでは，アジア諸国との研究者交流として，水泳および水球関連で成果を上げることができた。このほか，ドイツの研究機関との交流もひきつづき展開している。これらは，芸術・健康系教育部の国際貢献として，特筆に値するものである。

公開講座においては，従来から継続している「楽しい歌唱教室」「デッサン教室」を開講した。また，生活・健康系コース（保健体育）では，大学開放推進事業として，「のびのび少年剣道教室」を開講し，多くの受講者を得て，好評を博した。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
1	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	川上　綾子	【学部・大学院共通】 【学長のめざめる高度目標】 教員養成大学大学院の中と論文については、現学部や大学院等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みやこれを示して頂いて、教職大学院においては、学部或果職指導生学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般ゼミの工夫を示して頂いて、	年間を通して、ぜひ、これまでと上記目標の達成をめざすべく院生の支援に努めた。2年次のゼミ生の指導では、長期成果報告書の執筆を通して大学院入学時から1年次・2年次の実習に渡る学び全体を通じ、自身の成長と課題を明確に認識すること、修了後の現場での実践と学び続ける姿勢につなげれるようながけた。1年次のゼミ生に対しては、長期成果報告書に向けた研究テーマの設定に関して、実習（基礎インターンシップ）を通して見えてきた自身の実践上の課題と密接にリンクさせ、研究テーマを選定することが最良だとの基本方針を示唆した。研究テーマを選定することが最良だと必要な思考・技法の育成と実践的な力の向上の双方につながることを図った。	1)教員養成特別コースの院生および学部学校教育実践コース4年生に対する教員採用試験対策に、積極的に取り組む。 2)院生の学習環境をより充実させるため、教職大学院の施設担当者として、専攻全体で利用する演習室や教材室の一部の整備を進める。 3)教職大学院の院生および学部学校教育実践コースの学生をはじめとして、学生からの修学面・生活面・進路面等の相談にはすすんで応じる。	1)中間報告の通り、教職大学院教員養成特別コースおよび学部学校教育実践コース4年生の学生に対し、教員採用試験対策として個人面接や集団討論・模擬授業の練習等に、コース教員とともに積極的に取り組んだ。担任もしくは学部4年生の学生や大学院の院生の指導学生に対しては、出願時の書類作成（小論文含む）の支援等を行った。 2)A17小演習室、A47資料室の備品整理や不要物品の廃棄作業を行い、演習のためのスペースを拡張した。A17はA2模擬授業ができる演習室として、またA47は少人数の演習が行える部屋として、それぞれ教員たちに利用できるように努力した。 3)教員養成特別コースの学部学校教育実践コース4年生の生活面・進路面に関する相談、現職院生からの研究に係る相談にすすんで応じた。	1)最終年度となる科学研究費基盤研究(C)FDLプロジェクトの運用によりT個に応じた指導(8可能)による授業設計法のモデル化(a)の研究代表者として、成果と課題をまとめ、研究を総括する。 これまでの研究成果で未発表のものについてまとめ、学会誌や紀要への投稿的な投稿などに学会発表等を通して成果の公開に努める。 2)学外の研究助成の公募に積極的に申請し、外部資金の調達を図る。	1)上記の研究倫理基盤研究(C)について、授業設計法のモデル化を図り、最終年度として研究成果の総括を行った。また、成果の一つとして、本学学校教育研究紀要(第29号)に論文「学力のユニバーサルデザイン(D)の組み立て視点」の公表を行った。 2)本学の研究紀要（第30巻）に論文一本を発表した。しかし、学会誌への投稿論文はまだ執筆途中であるため、来年度は投稿を果たしたい。また、今年度は学会発表をしなかったので、来年度は積極的に発表したい。 3)中間報告の通り、今年度で院包助成を受けている科研費の研究が終了するため、新たに基盤研究(C)に応募した。	1)委員として所属する委員会等(附属図書館運営委員会、学生総合相談室アドバイザー)において、本学の運営に貢献する。 2)教職大学院における施設担当者として、専攻で共同利用する部屋の整備を進め、院生の学習環境並びに教員の教育研究環境のさらなる充実を図る。	1)上記の委員会委員等を通し、本学の運営に貢献した。 2)２－１２で記した通り、教職大学院における共同利用演習室等の整備を進め、院生の学習環境並びに教員の教育研究環境の充実を図った。	徳島県立総合大学校運営委員会委員として、同校の円滑な運営に向けサポートする。（社会貢献）	中間報告の通り、徳島県立総合大学校運営委員会委員として、広報紙作成講座の講師、及び、「とくしま学博士」認定試験の委員を務め、同校の運営をサポートした。 また、徳島県教育会教育協議会委員として、機関誌「徳島教育」の編集協力、教育論文の審査等を行った。	
2	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	藤原　伸彦	教職大学院教員養成特別コースにおいては、大学院2年間での自身の学びと変容、および教職についた際どのような実践を行いたいか、について述べた。学部成果報告書を作成する際、院生が、自身の成長に決定的なような、せいで常に問いかけていくように、と指導した。 また、コースで学修成果報告書の構成および題目の記録方法について検討しており、コース全体として取り組んでいく予定である。	特に大学院1年次生のゼミ生を対象に、本年度コース全体で設定した「題目タイム」、およびゼミにおいて実践的な観点から省察を促した。 年度末には、2014年度の1年間でどのようにとどまったかについて、題目を示に検討する時間を設けた。 また、長期成果報告書の構想発表においても院生に院生が基礎インターンシップ（附属中）における実習で実践した授業実践について 省察し、その中で院生自身の授業に対する考え方や実践のスタイルがどのように変化したかを考えられるよう、図った。 ゼミ生は、生徒との関係性を築くことが、授業の前提となることを体験的に理解できており、省察するなかでその重要性を改めて考えることができていた。 来年度も、引き続き、題目を中心に省察を促すことを試みたい。また、省察を効果的に実践するための環境を構築するため、参考文献を当たっていくようにする。	教員養成特別コース2年次および学校教育実践コース1年生の担任として、学生の教育・生活を支援していく。 特に、学期・年度末に際しては、大学生活に慣れたことが出来るよう配慮するとともに、大学院進学をイメージできるよう、院生との接点を設けつつ、働きかけていく。 大学院2年生は、コース教員と連携して支援を行った。 特に、教員就職率100%を達成できたのは、日々の支援の成果ではないかと考える。	1. 大学・大学院での学生指導に、iPadなどのタブレットを活用し、自身の取組を省略しやすい環境を構築すること、学生の教育実践力の向上を図る。 2. 業務負荷における思考力と「自由」の感覚の育成に関する研究に取り組む。	1. iPadの活用について、サーバでのデータ共有が有効であったと考える。来年度も同様に試みていきたい。 年度末に、人文系A17(A)をICT機器等を導入した模擬授業が可能な教室に改造した。 2015年度は、その活用について考えていきたい。 2. 中間報告で示した通り、成果については<SEA2014>で発表した。	1. 春川大学が主幹校となってすすめているeKAD運営を行う。特に本年度は、提供できるコンテンツを1講義分（15回分）作成したい。 2. 地域連携センター教育情報ICTユニケーションが野田当時教員として、地域連携、特に教育における(C)TOD活用に関する連携に携わる。	1. 使用する資料の著作権の問題が解決せず、コンテンツを作成することができなかった。 著作権処理の問題は、eKA全体で協議が続いているところであり、改善策が見えてきた段階で改めてコンテンツ化を図りたい。 2. 幡西市内の小学校と連携し、電子黒板の活用方法について検証した。また、春川南引田小学校と連携し、 教育における(C)活用の方法について検証した。特に、引田小学校は、メディア教育に関する大会を開催しており、 それに関わって講演等行った。	1. 院生（学部）が体験に附属小・中学校で実習を行うため、その指導に関して附属小・中学校と連携する。 2. 指導院生（現職）の指導を行うため、附属中学校と連携した。ICTを活用した実践の授業で、 現職深い実践を行うことができた。 3. 附属中学校における教育の情報化に関して、助言を行った。 4. 附属幼稚園と連携し、園長研OOの活用を推進した。 5. 院生（学年）の実習の実施に際し、幡門市各小学校と連携して実施することができた。 6. 幡門市教育委員会からの要請を受けて、各種支援を行った。特に、2014年度幡門市の小学校で導入された電子黒板の活用について、 助言を行った。 7. 中間報告に記した通り、春川高等付たが学校での研究に関わり、支援や講演会での講師を務めた。	1. 附属小・中学校と連携し、院生の実習について実施することができた。 2. 指導院生（現職）の指導を行うため、附属中学校と連携した。ICTを活用した実践の授業で、 現職深い実践を行うことができた。 3. 附属中学校における教育の情報化に関して、助言を行った。 4. 附属幼稚園と連携し、園長研OOの活用を推進した。 5. 院生（学年）の実習の実施に際し、幡門市各小学校と連携して実施することができた。 6. 幡門市教育委員会からの要請を受けて、各種支援を行った。特に、2014年度幡門市の小学校で導入された電子黒板の活用について、 助言を行った。 7. 中間報告に記した通り、春川高等付たが学校での研究に関わり、支援や講演会での講師を務めた。	
3	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	木下　光二	学部4年間で身につけた力より、更に実践力や授業力を高めるのがコースの使命であると、これまでの研究から、教材研究や指導案作成、教材研究や指導案作成等においては現のにあるほどの力をつけてきていることを感じている。しかし、来期に学校現場で授業を実施するにあたり、指導実習に授業を進めるとなるために、授業における児童理解や子どもの思考過程をキ分に把握できず、教師サイドの一方通行になっていることがよく見られる。そこで、授業が子どもサイドのものとなるよう、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点において、以下のような授業実践の展開を図ることにした。 ①子どもにとって必然性のある授業内容となる教材研究や指導案作成に配慮した授業内容を構成する。 ②学生一人一人の個性や実践力を生かした授業となるよう、講義形式ではなく、模擬授業や演習を中心とする授業を図るとする。 ③模擬授業や演習等における学生の取り組みを、より客観的に評価するため、多くの観察ツや相談員を行ったり、ワークシートを活用して振り返りを行ったりするなどの工夫を行う。	記述した3点の取組について教育では講義演習を中心に、後期では、大学院1年次生は附属小・中学校において大学院生は幡門市内のインターンシップ実習における実践に取り組んだ。その結果は、それぞれ中間までにおける教育の最終成果報告書に記されている通りであり、附属校や幡門市の小・中学校においても実践され、理論と実践の融合が図れたと考えている。	記述した内容に加え、今年度は、学校教育実践コースと教員養成特別コースにおいて自同でゼミを行い、授業演習や模擬授、生徒指導等の現場を受けまように努めている。 学生が主体的に授業に参加できるよう、討論、模擬授業を取り入れる。	文部科学省の研究開発である「初の接続期における教育課程の作成」について、本学附属幼稚園及び附属小学校との合同研究を本年度も継続的に実施している。研究の成果は、平成26年附属幼稚園研究発表会、附属小学校研究発表会において広く公表された。接続期の教育課程作成が、今後の小学校教育の教育課程のモデルとなることが期待されている。	部会議、専攻会議等での運営に参画し、その任務内容を推進する。	コース長としての職務は4年連続となり、部会議、専攻会議等の運営等で貢献を果たしている。	学部教務委員として、役割を発揮するとともに、大学院改革について、コース教員と協力しながら、その方向を議論した。	1.附属校園の研究活動に積極的に参画し、日常の教育活動から学ぶとともに、研究授業や研究大会に積極的に参加する。 2.県内外の教育研修、教育事業の企画、運営、実施等を進んで行う。 3.幡門市の小学校を中心とした教育支援活動を積極的に行う。	前述したように、附属校園と合同で研究に取り組んでいる一方、昨年度からキコース（1年次生のインターンシップ実習を附属校で実施している。）を設置し、より一層の連携を図って教育活動に取り組んでいることである。	本年度は、学校評価支援を、大学の予算の元、実施するとともに、幡門市における学校評価の改善について、教育委員会と協力して進めた。	4年間継続しての教職大学院教員養成特別コースのコース長を努め、本年度は1年次生のインターンシップ実習を附属校で実施していることもあり、より一層の連携を図って教育活動に取り組んでいることである。また、県内外での講演活動や文部科学省における講師等も務めることで、本学に貢献していると考えている。	
4	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	佐古　秀一	（教職大学院） ○　学卒院生の場合・・教職大学院においては、実践力に優れた教員の育成がめられている。このため、学級経営・教科指導に関する、大学院での学びや実習経験を、連携等を活用して相対化する作業を下準に行い、報告書の作成につなげる。これにより教育実践力としての省察力と実践改善力を高め、教師としての基盤形成につながる指導を行う。 ○　現職院生の場合・・現職院生に関しては、学校における課題解決力を有するリーダー教員の育成を行う。このため、学校の課題把握から、プランニング、学校課題解決に向けた実践、その検証に至る一連の過程（すなわち学校におけるPDCA）に沿って、院生指導を行う。とくに学校組織マネジメントの観点から、学校課題の認識から相互に至る理論とスキルを習得した教員の育成を行う。なお、学校組織マネジメントに関する院生（修了生含む）の成果については、論文等により、情報を発信するよう心がけたい。	本年度については、教職大学院におけるコース担当が変わったこともあり、主担当として学修成果報告書を指導した院生はいない。担当するFI生の指導について報告する。 ○　学卒院生指導・・コースの教員と共に、学卒院生を対象とした連携等の振り返り指導を定期的に行い、キャンパスにおける学び之実習校での経験を深める取組を行った。また、模擬授業指導では、指導案作成段階から授業の振り返りまで、院生の認識や教づきをフォローしながら、実践経験を学びに転換する省察プロセスを院生に意識させながら、院生自身の現状とあるべき姿を把握させる指導を継続的に実施し、院生の実践課題を明確にさせる工夫を行った。 また合わせて、ミッションの達成に向けて、コース独自の採用試験対策指導にも従事した。 ○　現職院生の指導・・前期の教職大学院共通科目「学校組織マネジメントの理論と実践」などの授業を通して、事例を活用しつつ、学校組織マネジメントの基本的な考え方と基本的方法論の習得に工夫を行い、教職大学院の勤務校フィールドワークおよび成果報告書の作成に資する授業を展開した。	教職大学院における主な授業については、現論と実践の双方の専門性を高めるために、以下のエスを組み込んで授業効果を高める。 ○　学校組織マネジメントに関する最適理論については、実践事例を豊富に用いて理解を促す。 ○　理論の習得だけでなく、それを活用するために、学校組織マネジメントの活用についてのグループワークを組み入れる。 ○　多様な経験をもつ教員間のコミュニケーション協働力をたかめるために、ワークショップ的な要素を組み込む。 また、教職大学院の授業評価、院生の観点別評価システムを活用して。 ○　学校組織マネジメントに関して理論と実践力の双方から、授業成果に関する検証を行う。 教職大学院の学卒院生については、本学トッションをクリアーするために、 ○　教員採用試験対策の指導を定期的に行う。	1)学生の相談への対応がスムーズに行えるように、emailを活用する。 2)講義時間内に限らず、学生の質問や相談についても気軽に応じることができるように努める。 3)学生が主体的に授業に参加できるよう、討論、模擬授業を取り入れる。	現在主要な研究テーマは、①学校組織特性の理論的・実証的研究、②学校における組織化を具体的に支援するための方法論の開発的研究（学校組織開発に関する実践的研究）、③学校組織開発理論に立脚した、諸般と効果の明確な学校管理機研修用のプログラム開発、である。。 2014年度に関しては、2011年度から4ヶ年間の継続科研費を得ているので研究の推進につとめ、成果を論文等として報告する。とくに学校組織開発理論の実践的な有効性を検証する観点から、教育委員会等と協力して、学校における実践研究をさらに展開する。	○　本年については、科研費の課題である①「学校組織開発理論をベースにした学校組織マネジメントの研修プログラムの開発とその効果検証、②学校組織マネジメントの方法論を実地に展開する学校コンサルカント活動、を知見教育委員会・教育センター等の協力を得ながら推進した。 ①まだ、文部科学省の委託研究として、徳島県教育委員会、高知県教育委員会とともに管理職養成プログラムの開発に関する調査研究を行った。 以上の研究については、それぞれ本学紀要等に2つの論文として、まとめ、発表した。また、高知県教育センター、高知県教育研究所と共に、学校組織マネジメント研修の教材（テキスト）を共同研究の一環として作成することができた。 CたはEは共に、恵都教育大学大本教授を研究代表者とする科研研究に分担者として参加し、教職大学院における現実とその改善に関する研究に従事した。	2014年度から基礎・臨床系教育部部長を命じられたので、部所属のコース、教員の意見の収集に積極的に関わ、大学改革期における、大学執行部と部のパイプ役として、また、教職大学院の定員確保が本学当面の課題であるので、専攻長を退いた後にも引き続き、この点について努力したい。 また、教職大学院の定員確保が本学当面の課題であるので、専攻長を退いた後にも引き続き、この点について努力したい。	○　部長として、部と執行部とでのパイプ役を果たすため、部会議での議論の活性化につとめた。同時に部の要望等を学長、関係理事にも的確に伝えることに努めた。 ○　教育委員会等との会合、研修等において、本学教職大学院への誤道依頼等を行った。 ○　大学改革構想検討委員会、専門職学位課程改革専門部会等の委員として、とくに教職大学院の定員充足や教育の あり方等について協議に参画し、改革の具体策（教職大学院における長期在学制度、学校マネジメントカプログラム等）の策定を推進した。	○　自らの研究テーマを社会的に還元する観点から、また実践的研究を推進する観点からも、教育委員会（センター等を含む。徳島県、幡門市、高知県、教職教育研修センター等）に積極的に従事する。これによって本学と教育委員会等の連携構築に大貢献するように努めたい。	○　高知県教育委員会、愛媛県教育委員会、幡門市教育委員会、教職教育委員会等において、学校組織マネジメント、学校評価等に関する研修を担当し、研究成果を研修という形態で還元することができた。 ○　文部科学省の委託研究を受諾にして、徳島県教育委員会、高知県教育委員会と連携したプロジェクト（管理職研修のプログラム開発）を推進することができた。 ○　徳島県教育委員会とはこれ以外に、主幹・指導教諭の研修プログラムの開発に取り組んだ。教育委員会、教育センターとも非常に意義の交流を行い、次年度以降教職大学院との協働実施の目途をつけることができた。 ○　教職用との実践推進（3年度から2ヶ年間）を推進した。 ○　徳島県学力向上・授業改善調査検討委員会の委員長として、徳島県の教育改善の施策立案に参画した。さらにこの委員会における検討をふまえて、徳島県の学校支援、研修高度化を主要な内容とするさらなる連携体制の構築につなげることができた。	○　本年の活動を振り かえってみると、大学への貢献としては、「部長」としての活動とともに、教育委員会と大学（とくに教職大学院）との連携強化に努めてきたことが挙げられる。今年度は、研究テーマである学校組織マネジメントの教育プログラムの開発を中心にして、研修プログラムの開発、実地展開等に徳島県教育委員会、高知県教育委員会等と連携した活動を展開してきた。これらの活動には多くの時間と労力を要したが、結果として研究テーマとしている学校組織開発理論の実践的展開にたずりつけることができた。それとともにその過程で教育委員会との関係を強固なものにすることができた。特に徳島県教育委員会については、学力向上問題を契機として、学校支援、研修高度化等の側面でこれまでとは異なるレベルでの本学との連携構築に資することができたと思う。 ○　教育委員会あるいはセンターの関係者と、学校や教職員の在り方について具体的に意見交換ができる関係構築に資することができたことには大きな意義があったと考える。「学び続ける教員」の実現に向けた大学、教育委員会の連携構築については、次年度以降も努力し、教員養成を専門とする本学の社会的貢献を高めることに貢献したい。	
5	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	葉上　秀文	教員養成特別コースの学卒成果報告書は、実習の経験を現場化し、今後の教育実践の基盤を構築するものになるよう、指導を行っている。これからの教師に求められる授業実践力、生徒指導力、学級経営力、協働力の観点に沿い、実践を実践させる手法は、今後の教員養成のあり方の一端を示すものと考える。	長期成果報告書のあり方をコースで議論するとともに、その方向に向けて、目の前にある、今年度の教育実践の改善に向けて、学級経営を続けている。学び続ける教師、問いをたて、それを解決する教師という力がような、報告書となるよう、問いをたてる文切だについて、議論を行った。結果として、2名の長期成果報告書について、一定の成果を上げ、相了させることができた。	一番の課題は、コース院生の教員就職率の向上である。コース教員と協力し、採用試験対策を図るとともに、実践力を高め、現場で即戦力として機能できるよう、教育に当たる。	1)学位の取得への対応がスムーズに行えるように、emailを活用する。 2)講義時間内に限らず、学生の質問や相談についても気軽に応じることができるように努める。 3)学生が主体的に授業に参加できるよう、討論、模擬授業を取り入れる。	1)学校教育におけるカリキュラム開発や授業開発に関する研究を積極的に行う。 2)小学校教育の授業理論と実践に関する研究を進め、研究会や学会等に参加する。 3)幼稚園と小学校の合同活動や接続カリキュラムを開発するための研究を行う。	キャリア教育に関して、研究成果をまとめるとともに、共同研究として、学力問題に取り組む予定である。	キャリア教育に取り組んでいる学校の教員とともに、本の執筆を進め、今年度末に刊行した。また、科研の共同研究者として、学力問題についての研究を進めた。	学部教務委員会委員として役割を発揮するとともに、教職大学院における委員の役割を果たす。	学部教務委員として、役割を発揮するとともに、大学院改革について、コース教員と協力しながら、その方向を議論した。	1.附属校園の研究活動に積極的に参画し、日常の教育活動から学ぶとともに、研究授業や研究大会に積極的に参加する。 2.県内外の教育研修、教育事業の企画、運営、実施等を進んで行う。 3.幡門市の小学校を中心とした教育支援活動を積極的に行う。	前述したように、附属校園と合同で研究に取り組んでいる一方、昨年度からキコース（1年次生のインターンシップ実習を附属校で実施している。）を設置し、より一層の連携を図って教育活動に取り組んでいることである。	今年度も、学校評価支援を、大学の予算の元、実施するとともに、幡門市における学校評価の改善について、教育委員会と協力して進めた。	長期在学制度導入に向け、コース教員と協力しながら、議論を進めたが、混乱した部分も多かった。執行部と目標を共有するとともに、先を見越した運営を進めていくことがめられている。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（１－１）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について １．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の中と連携文について、専学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して欲しい。　教職大学院において、「学校現場教育学校教育の実践」具体的にどのように示していくか、あなたの指導や一般セ○の工夫を示して欲しい。	（１－１）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について ２．点検・評価	（２－１）教育・学生生活支援 １．目標・計画	（２－１）教育・学生生活支援 ２．点検・評価	（２－２）研究 １．目標・計画	（２－２）研究 ２．点検・評価	（３－３）大学運営 １．目標・計画	（３－３）大学運営 ２．点検・評価	（３－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 １．目標・計画	（３－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 ２．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
6	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	阿形 信秀	教員養成特別コースにおける学卒院生の学修成果報告書については、これまでは教科指導（授業実践）テーマが限定され、その内容も「技術の仕方」「教材の工夫」等思の仕方」などテクニカルな問題が中心となる傾向があった。今年度は、生徒指導・学級集団づくりなどのテーマや、「教師と児童生徒のコミュニケーション」「授業における児童生徒の学び・生つの意味」などの問題も含めた、幅広い課題意識に基づく実習の実践、報告書の作成に向けた指導について、コース会議等で積極的に提案していく。 2014年度の教職大学院2年次院生の実習および学修成果報告書の指導については、小学校の現職院生の実習責任教員（主担）を担当する、実習テーマは、「教員・職員の指導過程の専門化子ども理解のポイント作成」であり、せとの指導、実習校を訪問しての面談指導を通じて、児童理解に係る実践知を深めるとともに、院生が作成する修子子子ども理解のポイントの内容と意義について、共著論文として「専門性生徒指導研究」に発表。	教員養成特別コースの学卒院生の学修成果報告書については、担当していた院生が所年度末から続いて休学したので、面接指導にあたることはなかったが、他のせたの院生に対して、適宜、助言や資料提供を行った。 教職実践力高度化コースの現職院生の学修成果報告書については、「小学校における子ども理解のポイント作成」という題目であるが、学修成果発表会や面接校での教員研修等でも高い評価を受けた。報告書の概要については、2015年度の専門性生徒指導学会誌「専門性生徒指導研究」に投稿の予定である。	教員養成特別コースの学卒院生の学修成果報告書については、担当していた院生が所年度末から続いて休学したので、面接指導にあたることはなかったが、他のせたの院生に対して、適宜、助言や資料提供を行った。 教職実践力高度化コースの現職院生の学修成果報告書については、「小学校における子ども理解のポイント作成」という題目であるが、学修成果発表会や面接校での教員研修等でも高い評価を受けた。報告書の概要については、2015年度の専門性生徒指導学会誌「専門性生徒指導研究」に投稿の予定である。 教員養成特別コースの現在については、教員採用試験合格に向けて2013年度から開始した「100%合格プラン」等を中心に、教職試験に向けた支援に取り組む。 学校教育実践コースの学生については、1期生が4年次を迎えコースの完成年度となるので、学部4年間のカリキュラムのコース運営の在り方、教員養成特別コース人の連続の在り方、6年間のスパーンでの学びの意義等について、年度末に総括を行う。	○教員養成特別コースの院生、学校教育実践コースの学生の教員採用試験合格に向けて、コース内での協力の協力による支援を全の細やく関係、一定の成果を実現したが、全員の採用試験合格は実現できなかった。 ○学校教育実践コースから教員養成特別コースへの内部進学については、結果的に0名となった。6年間を見通したカリキュラム設計の基味を再点検し、大学入学時からの勉強付けを工夫する必要がある。	2013年度に、某市のいじめ問題第三者委員会として活動した経験を踏まえて、「いじめの問題の把握とかんの難しさと大切さ」「問題にかかわる“第三者”とは何かなどかテーマの論文を まとめた。 また、現在、編集作業が進行中である、日本生徒指導学会編「現代生徒指導論」の執筆者として、分担する「学級レベルにおける生徒指導力養成の在り方」の章を完成させる。 さらに、これまでの実践・研究を踏まえた生徒指導論・教育相談論を、「ひろます、すこます、生徒を誘す ～ さぶしくてやさしい生徒指導をめざして ～」にためらわず、あきやらず、生徒を支える ～ やさしくてきびしい教育相談をめざして ～」にしてまとめる作業に取りかかりたい。	○いじめに関しては、「専門教育大学研究紀要」「専門教育大学学校教育学会誌」に、計2本の論文を投稿した。 ○日本生徒指導学会編「現代生徒指導論」については、担当章の第一稿を提出し、現在、編集継続中である。 ○ 単業の出張については実現できなかったが、関係資料の整理や新片村の文章の基礎に取り組んだ。	コース運営に関しては、2014年度から新コースとなるので、コース名を検討し、9期までの修了生を送り出した経験システムの良いあは継承しつつ、前例主義に陥ることのないように、諸文書・制度の検証・改善に取り組んでいく。 大学全体の運営に関しては、2014年度から教授とて委員会等の新たな役割を引き受けることになるので、求められる役目を的確に遂行するとともに、大学・大学院の改革に向けた施策にも、主体的に関与していきたい。	○コース運営については、新コース長として、従来の月1回のコース会議を隔週に変更化し、前例主義の克服を中指した。 ○大学運営については、予算・財務委員会と施設設備委員会の委員、教員選考委員会の主長、生徒指導支援センター設置準備室長として奮闘にあたった。	附属学校との連携については、これまで取り組んだ附属中学校での出前授業や保護者会の講演の経験を活かして、学校の要望に対応する。また、2014年度から、愛媛を会けた「附属中学校学校間各者評価員」として、附属中学校の教育の充実に寄与していく。 社会との連携については、徳島市教育研究所・教能市教育委員会・鳴門教育委員会・南山市教育委員会等との連携を継続するとともに、県外の学校からの講演出前授業の要請についても、積極的に協力する。また、教育支援講師・アドバイザー等派遣事業についても同様に対応する。	○ 附属学校との連携については、附属中学校学校間各者評価員会の委員長として、附属中学校の教育の充実に寄与していく。 ○「ダロニハな現成を持った教員を育成する海外研修プログラム策定のための調査研究」を目的に、3月に韓国の光州教育大学・京仁教育大学を訪問し、海外研修の実施についてのコンセンサス形成を図った。	特になし。
8	教職実践力高度化コース	教育実践特別コース	前田 浮一	教職大学院においては、2013年度カリキュラム改正を行い、2014年度は4の完成を目指している。このカリキュラムは、健全な学校・いわゆる学び続ける教員育成を目指したものである。2年間の修学のあとの「成果報告書」作成に、学校の改善に資するための教職大学院の目的であったと思う。学校改善に取り組むのは一人ひとりの教員である。そこで、院生一人ひとりが「教職実践力を育成しなければ、学校改善や授業改善はままのない。そこで、指導に当たっては、「教育実践力」、「自己改善力」、「改善協働力」を育成できる指導を行っていく。また、一般セ○のために、院生指導を通じて、学び続ける教員の具体的な姿を通じ、さらにやっていく。	本年度は、現職院生2名、スーパールーキー1名の指導を行った。現職院生の指導に関しては、学校での実践を効果的に行えるよう指導を行い、その成長を確認することができたと思う。その結果、学校改善に資することができたと思う。このことについては、学校管理職から高評を得ることができた。報告書についても、今後の学校改善のための貴重な資料となるものが作成できた。その成果は、教職向教育委員会との連携授業において発表し、学校改善の実践的資料として活用することができた。 また、スーパールーキーに関しては、付属校での実習、嗚門市内中学校での実践を踏まえ、授業実践力、生徒指導力など教員としてあるべき資質能力に関して、現職と実践の往復に関連しながら指導を行った。その結果、内容のある報告書を まとめることができた。 本年度は、現職教員院生、スーパールーキー院生ともに学び続ける教員としての能力開発にいてカ点を置いて指導を行った。その結果、①教育実践力、②自己改善力、③教職協働力に関する自己評価も大きく改善していると、また、スーパールーキー院生については教員採用試験においても正式採用されるという成果をとげることができた。	1)教育庁義務教育課でA事業を担当した経験を生かし、教員採用試験受験者に対して具体的な対策法を提示しながら就職支援をしていく。 2)小学3年生、4年生を担当ず、学生の教育関係はもちろんのこと、それ以外の質問や相談についても真摯に応じることができるよう心がける。	担当していた学部4年生 2名、教職大学院2年1名の採用試験受験者は、全員が正規採用となった。これは、教育庁義務教育課で人事業務を担当した経験を生かした親文指導、講師等業務の成果をとよりたものであると考えた。また、教職大学院1年生、1次試験は突破することができた。次年度の採用試験の課題がみえってくる。また、セ注目にかかわらず、それ以外の質問や相談についても真摯に応じてきた。その結果、正規採用となった学生も何人かいる。 現職院生に関しては、キャリアに応じた支援を行い、今後の教員生活における目標設定とそれに関するプランづくりに関して支援を行った。	市教育委員会、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。 研究推進センターの運営委員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。 2)業務要教員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。	市教育委員会、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。 研究推進センターの運営委員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。 2)業務要教員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。	1)「つなぐこと」「育てることと」をキーワードに、カリキュラム開発、学校組織をつなぐ体験型講座について研究を進める。 2)授業における学習者間と、学習者と指導者をつなぐコミュニケーション、特にメヤロア（対話）の効果について研究を進める。 2)業務要教員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいる。	1)基礎臨床部部長として、部全体の運営を担当する事を通して、大学の効果的・効率的運営に尽力する。 2)小学教育専修学校教育実践コースの一人担当として、学部設置での高度専門職人材として必要な資質能力育成のためのカリキュラムについて実践しながら改善を加える。 3)学校現場での経験や教育委員会勤務（教員経験、教職員人事）の経験を生かした実務的な協力を行う。 4)教職大学院の定員確保のため、関係機関や教育委員会、学校に積極的に広報活動を行う。	本年度は、基礎臨床部部長、教育研究評議会委員、学負運営会議委員、高知大学・嗚門教育大学教職大学院大学院の共同設置に関する協議会委員、専門職学位課程会専門部会委員、大学改革マスタープラン作成作業チームメンバー等務に積極的に大学運営に携わることができた。マスタープランに関して、は、今後、実行していくための責任を感じている。 特に、大学改革については、徳島県教育委員会との連携協会に成果を上げることができたと考えている。 教職大学院の定員確保に関しては、定員を超えて入学者を確保することができた。これは、教職大学院の授業環境に関する改善がさく良結している。また、学校21年度の学校の授業環境の調査研究」の推進に関する。 また、これに関しても、これまでの大学運営の調子を改善を加え入れようと考えている。	本年度は、基礎臨床部部長、教育研究評議会委員、学負運営会議委員、高知大学・嗚門教育大学教職大学院大学院の共同設置に関する協議会委員、専門職学位課程会専門部会委員、大学改革マスタープラン作成作業チームメンバー等務に積極的に大学運営に携わることができた。マスタープランに関して、は、今後、実行していくための責任を感じている。 特に、大学改革については、徳島県教育委員会との連携協会に成果を上げることができたと考えている。 教職大学院の定員確保に関しては、定員を超えて入学者を確保することができた。これは、教職大学院の授業環境に関する改善がさく良結している。また、学校21年度の学校の授業環境の調査研究」の推進に関する。 また、これに関しても、これまでの大学運営の調子を改善を加え入れようと考えている。	1)教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で学校支援専門家チーム派遣事業を通じて、小・中学校を中心とした教育支援活動を行う。 2)嗚門市の小・中学校との連携を密にし、大学と各校のそれぞれの意見を集約し、ながらインターンシップの効果に努める。 3)地域に根ざした大学づくりのための地域連携に自主的に参画し、大学とNPO法人等の団体とのパイプ役として貢献できるように努める。 4)嗚門市教育委員会、小・中学校と連携し、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員を務める。 5)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査等に関わる。	1)教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で学校支援専門家チーム派遣事業を通じて、小・中学校を中心とした教育支援活動を行う。 2)嗚門市の小・中学校との連携を密にし、大学と各校のそれぞれの意見を集約し、ながらインターンシップの効果に努める。 3)地域に根ざした大学づくりのための地域連携に自主的に参画し、大学とNPO法人等の団体とのパイプ役として貢献できるように努める。 4)嗚門市教育委員会、小・中学校と連携し、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員を務める。 5)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査等に関わる。	特記事項なし。
8	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	江川 克弘	学修成果報告書作成のプロセスにおいて、学生が主要な研究テーマとして現げている領域（例えば、学習実践について評価に結びつけできるように分析の視点を、たり、学生の考解に問い返しをして精緻化できるように力することはもちろん、学生が研究テーマとして現げている領域（例えば、「学級経営や生活指導」などについても指摘して考察できるようにする。そうすることで、様々な領域の環境に耐みゆ全ての活ないような学校教育を学生は多面的・総合的に考えれるようになることを考える。学生が、そのような技法力を身に付けることができれば、より良い教育実践の研さ安くこどができると考える。	学修成果報告書において、学生が主要な研究テーマとして現げている学習指導について評価に繋い関るとともに、今後の指針についても具体的に記述するよう指ほした。また、学生が研究テーマとして現げていない他の領域（例えば、学級経営や生活指導などについても議論（指導）に加筆・修正したものの主要に繋い関を行わせ、自分の成果と課題をについて記述するよう指導を行った。最終的な成果に結みゆ全ての活ないような学校教育を学生は多面的・総合的に考えれるようになることを考える。学生が、そのような技法力を身に付けることができれば、より良い教育実践の研さ安くこどができると考える。	授業設計において、学生が授業の目標を明確にし、児童・生徒の興味・関心や思考の流れなどを考慮して授業設計できるように、講義や演習、実習での第1週目を通じてサポートをしていく。 また、立案した授業を模擬授業や実習で行った後、授業設計時の視点を基に講師に振り返りを行うようにする。また、学生が学校教育を総合的に捉えられるように、授業、学級経営、児童・生徒理解などどのように関連しているのかをできるだけ明らかにして説明するとともに、そういう視点で学生に考えさせたり、問い返しをしていこうと考えている。 さらに、教員採用試験合格に向けて、コース独自の教員採用試験対策に精緻的に取り組み、サポートしたいと考えている。	講義やゼミを通じて、学生は授業設計において授業の目標を明確にするとはどういうことなのかといったお問題で考えようにしなっていたっしゃいた。現場は できているものの、まだまだ具体的に目標を設定することは難しい状態である。よって、これからは、学生が授業を模擬授業や実習で行った後、授業設計時の視点を基に講師に振り返りを行うようにする。また、学生が学校教育を総合的に捉えられるように、授業、学級経営、児童・生徒理解などどのように関連しているのかをできるだけ明らかにして説明するとともに、そういう視点で学生に考えさせたり、問い返しをしていこうと考えている。 教員採用試験合格に向けて、コース独自の教員採用試験対策に精緻的に取り組み、サポートしたいと考えている。	1)本年度は、教職大学院2年次院生の採用試験受験者は、全員が正規採用となった。これは、教育庁義務教育課でA事業を担当した経験を生かした親文指導、講師等業務の成果をとよりたものであると考えた。また、教職大学院1年生、1次試験は突破することができた。次年度の採用試験の課題がみえってくる。 2)学生が、セミを担当ず、学生の教育関係はもちろんのこと、それ以外の質問や相談についても真摯に応じることができるよう心がける。	1)教育庁義務教育課でA事業を担当した経験を生かし、教員採用試験受験者に対して具体的な対策法を提示しながら就職支援をしていく。 2)小学3年生、4年生を担当ず、学生の教育関係はもちろんのこと、それ以外の質問や相談についても真摯に応じることができるよう心がける。	1)本年度は、基礎臨床部部長、教育研究評議会委員、学負運営会議委員、高知大学・嗚門教育大学教職大学院大学院の共同設置に関する協議会委員、専門職学位課程会専門部会委員、大学改革マスタープラン作成作業チームメンバー等務に積極的に大学運営に携わることができた。マスタープランに関して、は、今後、実行していくための責任を感じている。 特に、大学改革については、徳島県教育委員会との連携協会に成果を上げることができたと考えている。 教職大学院の定員確保に関しては、定員を超えて入学者を確保することができた。これは、教職大学院の授業環境に関する改善がさく良結している。また、学校21年度の学校の授業環境の調査研究」の推進に関する。 また、これに関しても、これまでの大学運営の調子を改善を加え入れようと考えている。	1)教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で学校支援専門家チーム派遣事業を通じて、小・中学校を中心とした教育支援活動を行う。 2)地域に根ざした大学づくりのための地域連携に自主的に参画し、大学とNPO法人等の団体とのパイプ役として貢献できるように努める。 3)嗚門市教育委員会、小・中学校と連携し、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員を務める。 4)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査等に関わる。	1)教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で学校支援専門家チーム派遣事業を通じて、小・中学校を中心とした教育支援活動を行う。 2)地域に根ざした大学づくりのための地域連携に自主的に参画し、大学とNPO法人等の団体とのパイプ役として貢献できるように努める。 3)嗚門市教育委員会、小・中学校と連携し、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員を務める。 4)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査等に関わる。	特記事項なし。
8	基礎・臨床系教育部	教員養成特別コース	野村 篤	1)教員養成特別コースの学修成果報告書については、昨年度まで現場にいた経験を生かして指導・助言し、実践家教員としての立場から理論と実践の統合を図ることで学校教育に生かされるようにする。 2)学校教職員との連携を密にし、現場が抱えている問題に大学院生・指導教員が積極的に関わっていくことで、その取り組みを通じた学修成果報告書が学校教育の実践に役立つものにしていく。	1)PDCAへのサポートでは、総合インターンシップでの授業考察や報告書に対しての助言等、現場での経験を生かしてアドバイスをすることができた。P1へのサポートでは、本年度ゼミ生を主担としてもっていないゼミ立場を利用して、すべての院生の授業づくりや授業考察に関わることができた。また、ゼミ副担となっている2名については、授業時間以外の場面でも本年度の最終成果報告書に向けてのアドバイスを行うことができた。 2一年を通して実習校やメンターと連絡を密に取り合うことができた。特に、PDCA総合インターンシップでは教職大学院の関係より早く情報を得て、それらを共有することからプランを本然に次へこどができたと考える。	1)PDCAへのサポートでは、総合インターンシップでの授業考察や報告書に対しての助言等、現場での経験を生かしてアドバイスをすることができた。P1へのサポートでは、本年度ゼミ生を主担としてもっていないゼミ立場を利用して、すべての院生の授業づくりや授業考察に関わることができた。また、ゼミ副担となっている2名については、授業時間以外の場面でも本年度の最終成果報告書に向けてのアドバイスを行うことができた。 2)コース間及び大学院生に教育に対する情熱や教育の専門家としての力量を身につけさせる。 3)コースの大学院生に教育に対する情熱や教育の専門家としての力量を身につけさせる。	1)2013年度から開始された「100%合格プラン」を中心に、模擬授業、個人・集団面接等に職員が関わり、教員採用試験の合格率向上を図る。 2)メーリングリストを活用し、大学院生からの質問や相談に迅速に対応し、共感的・接助的にサポートできるようにする。 3)コース間及び大学院生に教育に対する情熱や教育の専門家としての力量を身につけさせる。	1)教員養成特別コースでは、教員採用試験対策の中心となって行動した。現場と学校教育実践コースの学生の教員採用試験合格に向けて、コース内での協力による支援を全の細やく関係、一定の成果を実現したが、全員の採用試験合格は実現できなかった。 2)学校教育実践コースから教員養成特別コースへの内部進学については、結果的に0名となった。6年間を見通したカリキュラム設計の基味を再点検し、大学入学時からの勉強付けを工夫する必要がある。	1)昨年度までの教職経験を踏まえ、小学校教育における教育課程や授業開発に関する研究を行う。 2)業務要教員として、現場で必要とされる教師の力量形成についての理論と実践の統合を図るための研究を行う。 3)情報教育について研究を進め、タブレット端末や電子黒板等、ICT機器を活用することの有効性について検証する。	1)院生の前で行った模範授業や学習指導案についての講義などを通して、これまでの教職経験で培ったノウハウを まとめ、指導に生かすことができた。 2)ゼミ等の機会を通し、院生が授業でやんごとき案際の指導に直接を換えて話ることで、院生の力量が高まるように指導した。 3)自島点の情報教育部会や嗚門市教育の情報化推進協議会と連携し、現場での指導や助言を行った。また、鳥村裕一准教授や藤原伸彦准教授から最新の情報等を学び、自分の研究に生かすことができた。	1)基礎・臨床教育学部部会議や高度学校教育実践専攻会議、教員養成特別コース会議に参画し、昨年度まで現場にいた経験を生かして意見を述べ、改善の必要な点については積極的に提言していく。 2)就職支援委員として、学部生や大学院生の就職を支援する。 3)地域連携委員として、教育委員会や学校、地域との連携を主体的に推進する。 4)大学院問題を通して、大学院生事業を積極的に行う。	1)年々度から教職大学院で勤務し、気がつく点が多いというメリットを生かして、大学院の授業の進め方やインターンシップの在り方、模擬授業教室のデザイン等を積極的に提案した。 2)ヨ１ーでも述べたように、就職支援室や現場の協力も得て、手厚くサポートすることができた。 3)教育委員会や実習校と密に連携し、それを大学のメリットにつなげることができた。また、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員や嗚門市通学路安全対策推進協議会の委員長として、地域に貢献することができた。 4)東京学芸大学教職員大学と訪問し、訪学名から力キュラムや教育実習の仕組み等、本コースの参考となる事柄を聞くことができた。	1)教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で学校支援専門家チーム派遣事業を通じて、小・中学校を中心とした教育支援活動を行う。 2)地域に根ざした大学づくりのための地域連携に自主的に参画し、大学とNPO法人等の団体とのパイプ役として貢献できるように努める。 3)嗚門市教育委員会、小・中学校と連携し、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員を務める。 4)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査等に関わる。	1)教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で学校支援専門家チーム派遣事業を通じて、小・中学校を中心とした教育支援活動を行う。 2)地域に根ざした大学づくりのための地域連携に自主的に参画し、大学とNPO法人等の団体とのパイプ役として貢献できるように努める。 3)嗚門市教育委員会、小・中学校と連携し、嗚門市教育の情報化推進協議会の委員を務める。 4)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査等に関わる。 5)嗚門市教育委員会の委嘱を受け、教育論文の審査をした。また、3月には嗚門市通学路安全対策推進協議会の委員長として活動し、社会との連携を図っている。	特記事項なし。
10	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	小坂 浩嗣	本年度では、平成25年度より新カリキュラムに対応した最終成果報告書の改善に取り組んでいる。その基本方針は、2年間での学び続けるとして院生自身が教職に対する今後のヴィジョンとキャリアプランをまとめたものとすることである。 その考え方に沿って、報告書を作成する段階から実習を生たる機会にして、学校現場で活かせる実践に対する院生指導に取り組みたい。 具体的取組は以下の通りである。 1）大学での学習に即する各教科院を週1時間は確保し、週録に四行日記形式を取り入れて指導する。 2）実習校での実習に関する検討時間を月1時間は確保し、実習週録に四行日記を活用し指導する。 3）最後された週録と実習録データを精緻化して最終成果報告書へのまとめを指導する。	1）については、P2ゼミを1名に対して毎週で1時間は確保して、週録指導をし、最終成果報告書に各人の他了後のキャリアプラン作成に結び付けられた。P1ゼミを3名に対しても1日は毎週で1時間を確保し、週録指導をした。四行日記の取組は継続できなかった。 2）については、P2のS名に対しては実習先校での指導時間を月1時間をほぼ確保して、実習指導をけった。四行日記の取組は徹底できなかった。 3）については、P2のS名の最終成果報告書には週録で言葉についてっまとめをキャリアプランに落とし込んで完成させることができた。	年度目標 1)「地域プロジェクトフィールドワーク」の授業実践に取り組み、その検証と改善を進める。 2)教職大学院学生の学校課題フィールドワークに関わって、フィールドでの実地指導を積極的に進めていく。 2)学生からの学習や生活等の相談が受けやすいように、オフィスアワーの明示と研究室の環境整備をと資調整を行に努める。 3)1年次生と2年次生、現役生と修了生との交流を図るため、学生主体の研究会や行事の立案・計画・運営を推進する。	1)については、事前・事中・事後学習と段階を追って授業展開したことにより設定課題に対する受講者の学び深められた。事後の成果発表には教育長の参加を得て一定の成果を挙げられた。チーム総合演習Ⅰ中教職総合力開発演習Ⅱの開催性を興味化することが課題である。 2)については、フィールドでの実地指導には述べ月1時間を確保して取り組めたことにより、院生の実習に取り組む不安を緩和させる成果を挙げられた。 3)については、オフィスアワーの明示と調整ごりにより、院生の相談に関して、の74名中の受領が多かった。 3)1年次生と2年次生においては、ボ日指導に関しり発表会での交流機会を設定した。また、現役生と修了生との交流については、8月6日に同窓会を開催した。	年度目標 1)科研・子育て困難な保護者への支援ネットワーク構築に向けた実践的条件に関する研究に関がり、協力学校の教職員や地域支援者へのインタビュー調査・分析・まとめを実施する。 2)支援者委託事業「児童生徒の人間関係形成能力やコミュニケーション能力等の育成に関する研修等の調査研究」の推進に努める。 3)「教育力の教育要員会及び学校と嗚門教育大学が協働的な関係を構築する」研究に係わって、研究分担者として支援法の開発と支援に努める。 4)生徒指導・教育相談に関わる実践事例をもとにした事例検討・事例研究法の開発に関わって、学校現場や地域での事例検討会を計画・実践し検証する。	年度目標 1)教職大学院設置検討委員として、新組織の円滑な運営に努める。 2)大学院教務委員として、円滑な教務運営に努める。 3)精神保健相談員として、教職員や学生のメンタルヘルスに努める。 4)心理・教育相談室の相談員として、相談室の運営に努める。	年度目標 1)「地域プロジェクトフィールドワーク」の授業実践に取り組む。その検証と改善を進める。 2)教職大学院学生の学校課題フィールドワークに関わって、フィールドでの実地指導を積極的に進めていく。 2)学生からの学習や生活等の相談が受けやすいように、オフィスアワーの明示と研究室の環境整備を調整を行に努める。 3)1年次生と2年次生、現役生と修了生との交流を図るため、学生主体の研究会や行事の立案・計画・運営を推進する。	1)については、教職教諭と児童相談所職員への調査結果をまとめ、10月に学会発表した。協力学校の教職員や地域支援者へのインタビュー調査を2月に実施した。 2)については、平成27のための年度での取り組みを検討した。 3)については、資料提供等の後方支援に取り組んだ。 4)については、要期に計画した公開講座が台風のため中止となった。学校現場での事例検討会のあり方に関する研修会での講師を務めた。	年度目標 1)については、教職教諭と児童相談所職員への調査結果をまとめ、10月に学会発表した。協力学校の教職員や地域支援者へのインタビュー調査を2月に実施した。 2)については、平成27のための年度での取り組みを検討した。 3)については、資料提供等の後方支援に取り組んだ。 4)については、要期に計画した公開講座が台風のため中止となった。学校現場での事例検討会のあり方に関する研修会での講師を務めた。	1)については、教職教諭・コーディネーターとともに協力して、コラボ会議、教育委員会主催の研修会等に参加する。 2)については、大学院教務委員会に全出席し教務運営の推進に協力できた。 3)については、公式の相談依頼はなかったが、非公式での相談が今へ件あった。 4)については、2件の離婚相談を担当したほかに、新規相談を1件受理し、離婚相談をしている。	1)については、教職教諭・コーディネーターとともに協力して、コラボ会議、教育委員会主催の研修会等に参加する。 2)については、大学院教務委員会に全出席し教務運営の推進に協力できた。 3)については、公式の相談依頼はなかったが、非公式での相談が今へ件あった。 4)については、2件の離婚相談を担当したほかに、新規相談を1件受理し、離婚相談をしている。	嗚門市の実習協力校へ現場に伺い、学生の指導だけでなく、現場の先生方の話を聞き、教育現場での問題を解決する支援をしたいと考えている。特に、私は学習指導や生徒の指導・学習指導・生活指導面面にわたってについては実践も研究もけっこうしているので、そのような問題について現場に貢献したいと考えている。 また、教育支援講師・アドバイザー等派遣事業にも参加していくので、依頼があれば積極的に出向き、教育現場のお役に立たたいと考えている。	1)第15回大会を滞りなく終えることができ、地域の教育委員会や学校との連携強化を図ることができた。 2)公開講座については、天候不良により開催できなかった。支援講師アドバイザーは、5件を務めた。 3)アドバイザー依頼がなかった。 4)徳島県スクールカウンセラーのスーパーヴァイザーとして、スクールカウンセラーを支援することを通して地域貢献に努める。	特記事項なし。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
11	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	末内　佳代	1）目標：実習校の課題解決の方策について①アセスメントによる課題把握（R）、②協議並びに方策の計画（P）、③実践（D）、④評価（C）、⑤改善（A）、それぞれの段階で実習校教職員との連携協働及び関係諸機関との連携を図る。 学校のニーズに合った、具体的実践例を学修成果報告書にまとめて提供することにより、実習校はもとより地域の学校の教育活動の改善に生かされることをめざす。 2）計画：①実習校の教職員と学校課題を共有し、方策を計画するために、1年次に校内で実習計画プレゼンテーションを実施する。②その計画を基に、学校全体で事例検討会や協議を行い、校内支援体制に関与する。 ③2年次、実習生と教職員が実践の振り返りや研究ができる研修時間を設定する。その内容は月ごとの通信等により実習校全体で共有する。④児童生徒、教職員の評価を得て、2年次前期の実習の成果と課題をプレゼンテーションを行い、後期での実習の改善につなげる。 ⑤「全ての教師にわかりやすい、学校教育に生かされる報告書」にすべく、レイアウトなど視覚的にも工夫が施された報告書を作成する。	計画は全て実施することができた。 ①～④の取り組みは、実習校の実態に応じたアレンジメントを行うことによって、それぞれの実習校の教育実践に生かすことができた。以下に具体を示す。 ◯A：難聴学級の生徒への学校行事を活かしたSST B：短時間で行うことができる、充実した事例検討会の工夫 C：どの子にもできる喜び・わかる喜びが体感できる音楽科の授業 D：全校児童が運動会を振り返り、自己肯定感と他者理解を深める構成的エンカウンターグループのエクササイズ 計画⑤は自他共に納得のできる「わかりやすく、学校教育に生かされる報告書」を作成を指導することができた。	1）目標：学生が気持ちよく学び、生活できる環境作りに努める。そのためには、人間関係が良好で、自由に意見交換ができ、風通しのよいチーム力を高める支援を行う。学生と「程よい距離」を大切にした信頼関係の構築に努める。 2）計画　：①学生からの週録に目を通すことにより実習や授業の進捗状況を把握し、指導助言を行う。②実習責任教員として、週1回の個人ゼミ、月1回の全体ゼミを通して、学生の主体的な学びや学生生活を支援する。 ③実習責任教員が実習校の事例検討会や研究授業に参加することにより、学生の実習課題の解決を図るだけでなく「語ること」「分かち合うこと」「つなぐこと」の大切さを現場の教師と共に体験する。	計画①と②は計画通り実践することができた。 〇7人（P1：3名、P2：4名）のゼミ生からは週1回の個別指導、月1回のゼミ生全員と教員によるシェアリングの指導構造が、昨年同様好評であった。教育支援だけでなく生活支援においても「語り」、「分かち合い」、「つなぐ」場となり得たと思う。 計画③は概ね達成できた。 〇ⅰ事例検討会、ⅱ研究授業、ⅲ実習校における構想・中間・成果の発表を実践することで、実習の実態を明確に伝えることはもとより、教職大学院と既設修士の違いの実際を確認できたという意見を多くの管理職や教員から聞くことができた。	1）目標：授業実践の目標に関連する研究テーマ「心と学習の支援」に関する研究を継続する。 2）計画：研究の成果を論文にまとめる。	これまでの実践を論文（共著1）にまとめることができた。よって、計画は概ね達成できたと思われる。 〇大学・教育員会・学校と連携した教育改善に関する実践研究（Ⅷ）－本学と鈴鹿市教育委員会との連携事業に関する学校支援の経過－：鳴門教育大学学校教育研究紀要No.29	1）目標：大学側からの要請に主体的に取り組み、職務を遂行する。 2）計画①大学院学校教育研究科入学試験委員としての職務を遂行する。 ②教職大学院広報担当としてガイドブックやパンフレットの作成に携わる。	計画①は計画通り実践することができた。 ◯徳島県の各郡市の小中の教員が一堂に会する教育会総会での広報活動計画を立案、実施した。この広報活動は本年度初めての試みである。この活動の目的は、管理職だけでなく教員一人ひとりに教職大学院の学びを伝えるという発想から生まれたものである。 教職大学院の教員としてこれからも、学生や学校現場のニーズを把握し、大学運営の一助となるよう取り組んでいきたい。 計画②教職大学院広報担当としてガイドブックの編集に携わり、職務を遂行できた。 ◯広報紙　CASE6：「つながる力で夢をかなえる」、教職大学院パンフレット、教職大学院チラシ、鳴門教育大学大学院ガイドブックの4つの広報紙の取材、編集を自ら行い、専攻全体の意見も取り入れ、作成した。次年度も、教職大学院の方向性に基いた「手にすれば誰もが教職大学院の学びが分　　かる」を モットーとした定員充足に繋がる広報活動に努めたい。	1）目標：実習校4校との教育研究活動を通じて学校運営を支援する。 ：関係機関との連携に主体的に関わる。 2）計画①徳島県の小学校2、徳島県の中学校1、愛媛県の中学校1において学生・学校・大学による教育研究活動を行う。②本学公開講座講師、教育支援講師・アドバイザーとして修了生も含めた支援を行う。 ③徳島市「学校元気アップ推進事業」における大学側運営担当及び学校支援専門家チーム講師として地域連携に協力する。④徳島市不登校問題対策検討委員会委員として地域連携に協力する。	下記の活動を行い、連携協力実習校・社会との連携に努めた。計画は概ね達成できたと思われる。延べで、計32回、各地の小学校、中学校、高等学校、教育委員会に出向いた。その内訳は実習指導17、研究授業・事例検討会10、講演3、出前授業2である。 〇三重県鈴鹿市立創徳中学校、徳島県阿南市立羽ノ浦小学校・徳島市立徳島中学校・北島町立北島北中学校、愛媛県四国中央市立三島東中学校との連携による教育研究活動を行った。 〇教育支援講師として、 兵庫県立洲本高等学校、徳島県立徳島北高等学校で出前授業を行った。 〇徳島市学校支援専門家チームとして　徳島市立宮井学校、徳島市立渋野小学校において研究授業と事例検討会の支援を行った。 〇徳島県教育委員会スクールプロフェッサー 〇徳島市不登校対問題対策検討委員 ◯徳島県放課後子供教室教育活動サポーター等研修会講師	大学院学校研究科入学試験委員として、教職大学院広報担当として、広報パンフレットを4種類作成した（Ⅱ－3参照）。
12	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	久我　直人	教職大学院が設置されて6年が経過した。この間，院生の置籍校実習を通して，学校の課題解決に取り組んできた。 具体的には，まず，学校アセスメントを通して，エビデンスベースで①児童生徒が抱える教育課題（自尊感情，主体性，規範意識の実態と課題），②教職員組織の実態と課題（協働性と個業化傾向），③教師の指導の質的特徴（統制型指導への傾斜度等）と課題を可視化した。 次に，これら3つの課題を一つの課題として捉え直し，子どもが抱える教育課題を解決するための効果のある取り組みを組織的に設定し，組織的な協働を展開した。そのことによって，①子どもの変容と，②組織化，③教師の指導の質的転換をエビデンスベースで具現化してきた。 これまでの実践研究の蓄積を通して，小学校，中学校，高等学校等の校種の違いや学校規模の違いを超えて変容を生み出せるようになってきた。 今年度は，さらにその精度を高め，学力向上やいじめ防止等，今日的課題へも効果のある指導を導入し，学校教育の改善に寄与する実践研究を蓄積したい。	教職大学院の教育を内実化し，院生の置籍校の実質的な改善に貢献するために，以下のことに取り組んできた。 まず，学校アセスメントシステムを開発し，エビデンスベースで①児童生徒が抱える教育課題（自尊感情，主体性，規範意識の実態と課題），②教職員組織の実態と課題（協働性と個業化傾向），③教師の指導の質的特徴（統制型指導への傾斜度等）と課題を可視化してきた。 次に，これら3つの課題を一つの課題として捉え直し，子どもが抱える教育課題を解決するための効果のある取り組みを組織的に設定し，組織的な協働を展開した。そのことによって，①子どもの変容と，②組織化，③教師の指導の質的転換をエビデンスベースで具現化してきた。 今年度，ゼミ生の置籍校（小学校1校，高等学校2校）において，上記，教育改善プログラムを導入し，全教職員による組織的省察の実施，課題の共有と課題解決のための取り組みの組織的設定。そして，協働的実践を1年間にわたる実習を通して実施した。結果，ゼミ生の3校ともにおいて，学力と規範意識の向上，教職員の指導の質的変容をもとらえることができた。 また，高知県教育委員会の事業の統括アドバイザーとしてこの教育改善プログラムを複数の指定校に導入し，一定の成果を上げることで一般化を進めた。 今後も学校改善に寄与する実践研究を蓄積したい。	これまでの実践研究の成果を踏まえ，理論と実践を往還した授業を構成し，展開することを通して院生の省察力の深化を促す。そのことを通して，未来展望に立った次の教育実践に活かしていくような学び続ける教師（成長し続ける）の育成を目指す。 また，ゼミ生の指導においては，「Ⅰ」で記述した学校組織マネジメントの理論（教師の主体的統合モデル（久我2011））を院生の置籍校に導入することによって，理論と実践の往還，ならびに学校改善力の育成を試みる。そのとき，学校現場の教職員との協働を生み出すことによって，院生の学びに留まらず，学校組織の改善，ならびに子どもの行動変容を生み出すことを試みる。そして，院生の成長と学校の改善を同時に具現化することを通して，本学教職大学院の存在や価値を高め，今後の教員の資質能力の総合的な向上方策のモデルを明示していきたいと考えている。 また，学卒院生，学部生等からの依頼や相談に応じて，これまで通り支援を行っていく。	これまでの実践研究の成果を踏まえ，理論と実践を往還した授業を構成し，展開することを通して院生の省察力の深化を促した。授業評価や授業毎に行っている授業感想において，「明日の教育実践に活かしていける」という内容の記述が多く寄せられた。授業評価から目指す「学び続ける教師の育成」に一定程度効果が認められた。 授業評価では，「授業の内容は，教師の専門性を高められる内容であった。」「授業の内容は，実践に活かせるのに適切な内容であった。」等の11項目において，「5．0」の高い評価が得られた。 また，ゼミ生の指導においては，学校組織マネジメントの理論（教師の主体的統合モデル（久我2011））を院生の置籍校に導入することによって，理論と実践の往還，ならびに学校改善力の育成を試みている。そのなかで，ゼミ生の置籍校（小学校1校，高等学校2校）において，こどもの学力と規範意識の向上等がとらええられた。 このことは，院生の成長と学校の改善を同時に具現化することにつながり，特に院生の2年間の振り返りの中で，組織の変容を生み出す組織マネジメント力が高まった，という実感と自信が述べられた。 このことは，置籍校や教育委員会に対して，本学教職大学院の存在や価値を高めることにつながった。 一方，学卒院生，学部生等からの個人的な相談に随時応じ，複数の院生の支援を行っている。	これまで科学研究費等を活用した実践研究を通して「教師の主体的統合理論」をベースに学校組織マネジメントの理論を構築してきた。 今年度はさらに，複数の校種，学校規模が違う学校に導入し，理論のさらなる精緻化を図るとともに，この理論をマニュアル化し，スクールリーダー育成を試みる。 また，組織マネジメントの組織論に加え，昨年度共分散構造分析によって解明した生徒の意識と行動の構造に基づいた効果のある指導を生成し，学力向上や生徒指導上の諸問題を解決する教育改善プログラムの構築を進める。 本年度は，昨年度に続き，高知県教育委員会との連携の中でこの教育改善プログラムを研究指定校6校に導入し，その検証を行う（高知県教育委員会「夢いっぱいプロジェクト」事業の統括アドバイザー）。 これら生徒の意識と行動の構造に適合し，学力向上といじめ防止等に効果のある指導を基軸とした教育改善プログラムの構築のために科学研究費の申請を行う。	科学研究費（研究代表1，共同研究3）を活用した実践研究を通して構築した学校組織マネジメントの理論を院生の置籍校や依頼を受けた学校に導入し，その成果が検証されつつある。 その中で理論のさらなる精緻化を図るとともに，この理論をマニュアル化し，スクールリーダー育成のための講習資料を作成してきた。 そして，本年度で終了する科学研究費（代表）を活用した実践研究成果を冊子にまとめた。 また，組織マネジメントの組織論に加え，昨年度共分散構造分析によって解明した生徒の意識と行動の構造に基づいた効果のある指導を生成し，学力向上や生徒指導上の諸問題を解決する教育改善プログラムの構築を進めてきた。 本年度は，昨年度に続き，高知県教育委員会との連携の中でこの教育改善プログラムを研究指定校6校に導入し，その検証を行い一定程度の成果が抽出されている（高知県教育委員会「夢いっぱいプロジェクト」事業の統括アドバイザー）。 これら生徒の意識と行動の構造に適合し，学力向上といじめ防止等に効果のある指導を基軸とした教育改善プログラムの構築のために来年度の科学研究費の新規申請を行い，採択された<「効果のあるが校づくりを促進する教育改善プログラムの開発的研究」>。	本年度も以下の8つの取組を中心にして，大学運営並びに本学の地域連携，社会貢献に尽力し，本学の社会的認知の向上と定員確保等に貢献することを目標とする。 ①静岡県，高知県等，教育委員会事務局への積極的な訪問により連携推進，協働関係を確立し，定員確保に貢献する ②教員免許状更新講習実施の主担当者としての役割を遂行する ③本学教職大学院と徳島市との連携事業（学校元気アップ推進事業）への継続的な参加と直接的な学校支援を行う ④本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業への継続的な参加と直接的な学校支援を行う ⑤高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして，生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行う ⑥教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援を行う ⑦静岡における公開講座の実施する（8／11） ⑧全国教育実践活動顕彰委員会委員としての役割を遂行する この他，各県・市等からの依頼に応じて，教育改善にかかる支援を行い，本学の社会的認知の向上に努める。	本年度，以下の取組を中心に，大学運営並びに本学の地域連携，社会貢献に尽力し，本学の社会的認知の向上と定員確保等に貢献してきた。 ◎静岡県教育委員会，静岡市教育委員会，浜松市教育委員会等の訪問を通して，県・市の教育長先生の本学教職大学院への認知を深めていただき，今後も継続して派遣する意向を得ることができた。 ◎高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業の統括アドバイザーとして，生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行い，一定程度の成果が抽出されている。その中で，高知県教育委員会の教育長先生始め，教育委員会との信頼関係を築くとともに教職大学院への派遣について理解を得ることができた。 結果，27年度から従前の派遣定数に4名の増員が決定された。 ◎各県・市・学校からの依頼に応じて，教育支援を行い，一定の成果を得てきた。そのことを通して，かかわった3校の校長先生より，「本学教職大学院へ職員を派遣し，さらに学校改善を実現したい」という申し出をいただき，本学教職大学院の定数確保につながる成果が得られた。 ◎本学の免許状更新講習の主担当者として，講習資料や成績等の確認をし，本学更新講習の運営・管理を進めてきた。 ◎免許状更新講習において，社会的ニーズを受け，いじめ対策等，生徒指導・学級経営をテーマに新規開設した。終日の講習に受講生が熱心に参加し，3．96（4段階評価）という高い評価を得た。 ◎静岡における公開講座の実施し，34名の参加を得た。満足度4．8（5段階）の高い評価が得られた（8／11）。 ◎本年度より連合大学院の「マル合」教員として，講義担当と教育実践学論集の査読者として役割を遂行した。 ◎教員免許状更新講習実施の主担当者としての役割を遂行してきた。特に，28年度から一部改正される必修選択科目の開設に向け，大学の教員の協力を得ながらその体制づくりを行った。 ◎本学教職大学院と徳島市との連携事業（学校元気アップ推進事業）へ参加するとともに徳島教師塾での講師も実施した。 ◎教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援等を5回行った。 ◎本年度より連合大学院の「マル合」教員として，講義担当と教育実践学論集の査読者として役割を遂行した。 ◎27年度より新設される本学生徒指導支援センターの一員に指名いただき，次年度開設の準備作業を行った。	いじめや不登校等，学校が抱える教育課題解決に積極的に支援に入り，教育委員会，学校現場との連携を深める。 具体的には，以下の4点を取組目標として設定している。 ①本学教職大学院と徳島市との連携事業（学校元気アップ推進事業）への継続的な参加と直接的な学校支援を行う ②本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業への継続的な参加と直接的な学校支援を行う ③高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして，生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行う ④教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援を行う この他，各県・市等からの依頼に応じて，教育改善にかかる支援を行い，本学の社会的認知の向上に努める。 また，以下の2点の取組を通して，各県の教育委員会との連携を深め，本学の教育的資源を積極的に広報するとともに互恵的な協働関係の構築を目指す。 ⑤静岡における公開講座の実施する（8／11） ⑥静岡県，高知県等，教育委員会事務局への積極的な訪問により連携推進，協働関係を確立する	いじめや不登校等，学校が抱える教育課題解決に積極的に支援に入り，教育委員会，学校現場との連携を深めている。 現在の進捗状況は以下の通りである。 ◎本学教職大学院と徳島市との連携事業（学校元気アップ推進事業）へ参加するとともに徳島教師塾での講師も実施した。 ◎高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の統括アドバイザーとして，生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行い，一定程度の成果が抽出されている。その中で，高知県教育委員会の教育長先生始め，教育委員会との信頼関係を築いてきた。 ◎文部科学省から徳島県教育委員会への委託事業である「初任者研修の抜本的な見直しにかかる研究事業」の委員として，指導助言，先進校視察の案内等を行った。 ◎教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援等を4回行った。 ◎静岡における公開講座の実施し，34名の参加を得た。満足度4．8の高い評価が得られた（8／11）。 この他，各県・市等からの依頼に応じて，教育改善にかかる支援を行い，本学の社会的認知の向上に努めてきた。結果，かかわった3校の校長先生より，「本学教職大学院へ職員を派遣したい」という定数確保につながる成果が得られた。 ◎本学が主催する全国教育実践活動コンテストについて，その運営委員と審査委員を担当し，業務を遂行するとともに本コンテストの充実・発展に努め18件の応募を得た。 ◎27年度より新設される本学生徒指導支援センターの一員に指名いただき，次年度開設の準備作業を行った。	今年度の成果として以下の点が挙げられる。 ◎科学研究費を活用した研究（研究代表1，共同研究3）を通して，学校改善や授業改善等，学校現場の改善に寄与する研究を進め，一定程度の成果を得てきた。その実践研究の成果を冊子にまとめた。 さらに，これまでの研究成果を踏まえて，来年度科学研究費の新規申請を行い，外部資金獲得を目指している。 ◎教職大学院における授業評価において，「授業満足度」，「実践へ生かせる内容」等，11項目で「5．0」の高い評価を得た。 ◎静岡県教育委員会，静岡市教育委員会，浜松市教育委員会等の訪問を通して，県・市の教育長先生の本学教職大学院への認知を深めていただき，今後も継続して派遣する意向を得ることができた。 ◎高知県教育委員会から派遣された院生指導で，学校の改善が明確に認められ，教育長先生始め，教育委員会との信頼関係を築くとともに教職大学院等への派遣について理解を得ることができた。 結果，27年度派遣定数に加えて，4名の増員を決定いただいた。 ◎各県・市・学校からの依頼に応じた教育支援を通して，かかわった3校の校長先生より，「本学教職大学院へ職員を派遣し，さらに学校改善を実現したい」という申し出をいただき，本学教職大学院の定数確保につながる成果が得られた。 ◎本学の免許状更新講習の主担当者として，講習資料や成績等の確認をし，本学更新講習の運営・管理を進めてきた。 ◎免許状更新講習において，社会的ニーズを受け，いじめ対策等，生徒指導・学級経営をテーマに新規講習を開設した。受講生からの講習評価で，3．96（4段階評価）という高い評価を得た。 ◎静岡における公開講座の実施し，34名の参加を得た。満足度4．8（5段階）の高い評価を得た（8／11）。 ◎本年度より連合大学院の「マル合」教員として，授業を担当し，教育実践学論集の査読者として役割を遂行した。 ◎本学が主催する全国教育実践活動コンテストについて，その運営委員と審査委員を担当し，業務を遂行するとともに本コンテストの充実・発展に努め18件の応募を得た。 ◎日本教育大学協会研究集会（仙台）で，本学教職大学院の現任校実習について，実践事例を報告し，学校の改善に資する実習の在り方について高い評価を得た。 ◎本学教職大学院の授業を県・市町教委関係者に観ていただく「特別授業公開」（7／24）において，ゼミ生が実習を通した学校改善事例を報告し，実習科目にかかる理解を深めていただいた。 ◎27年度より新設される本学生徒指導支援センターの一員に指名いただき，次年度開設の準備作業を行った。 ◎平成27年度の科学研究費の新規申請を行い，採択された[illegible]
13	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	阪根　健二	近年の教育現場においては、課題が山積している。そうした中、教職大学院が課せられた使命は大きい。特に、教育委員会、学校現場をはじめとして、社会的な信頼を得るためには、カリキュラム開発、実習等の改善・評価だけでなく、教育委員会や学校現場との緊密な連携が必要である。そのため、学修成果は重要であり、その報告書には、具現化された実質的な提案が求められていると考える。そこで、可視化された成果を盛り込み、例えば、現場で活用可能なノートや教材などの開発を行っていく予定である。次年度は、防災、若年教員の指導などをテーマに行っていく予定であり、その成果を広く公開していきたい。 なお、今後教員採用増が終息する2020年頃には、わが国の教員資格や資質等の高度化が注目を集め、それが現実となろう。それに向けて教職大学院モデルを確立し、量的拡充も含めて、内容の充実を図っていきたい。このためには本学の教職大学院が、今後の教職大学院モデルとなるよう、鋭意努力する所存である。	近年の教育現場では課題が山積しているため、教職大学院に課せられた使命は大きいものと考える。特に、教育委員会、学校現場をはじめとして、社会的な信頼を得るためには、カリキュラム開発、実習等の改善・評価の研究活動だけでなく、教育委員会や学校現場との緊密な連携が必要であると考えている。そのため、学修成果では、具現化された実質的な提案が求められている。そこで、可視化された成果を盛り込み、例えば、現場で活用可能なノートや教材などの開発を行ってきた。これまで防災、授業規律、進路指導のノートを開発したが、今年度は、「学校活性化のためのハンドブック一若手教員の指導にどう取り組むか」、「コミュニケーション活動を活かした授業づくり一話すこと・聞くことの指導にどう取り組むか」、「ネットいじめやケータイ問題をどう教えるか一学校で使えるワークシート集」、「社会の動きを地域・親子で考えよう一公民館・コミュニティーセンターで出来る新聞活用」を発刊し、教委のみならず、県内外に配布した。いずれも研究費、科研などの予算を活用し、300部から2000部を作成し、Webで公開している。	・学生が主体的に授業に参加できるような授業を工夫改善する。（毎時間、出席票を活用し、小テストなどの評価を行う。） ・学生にとって、"教職の意義"について理解を深められるよう、授業等の機会を通じて、現場の現状などを紹介し、教職指導を進めていく。 ・学生の進路，悩み等の相談に随時応じるとともに，将来社会人としての資質を養えるよう対応する。 ・東かがわ市との連携を活用し、多くの学生をボランティア参加をさせるとともに、徳島県防災人材育成センターや徳島県南部県民局との協働（防災実習など）を通じて、学生・院生の資質向上に取り組む。 ・危機管理の授業に、PFA（サイコロジカル・ファーストエイド：心理的応急措置）を盛り込み、災害後の支援にあたる教師の役割を示しながら、その専門的な知識と意識を育てていきたい。	学生が主体的に授業に参加できるよう、授業を工夫改善している。これまでも、毎時間、出席票を活用し、小テストなどの評価を行ってきた。マークシート、記述方式とその手法も多彩である。また、レポートでは、実際の防災グッズなどを作成させ、それを地域連携センターエントランスに展示したり、Webで公開している。いずれも学生の許諾を得て対応している。 また、教職の意義について理解を深められるよう、授業等の機会を通じて、現場の現状などを紹介し、教職指導を進めている。あわせて、学生の進路，悩み等の相談に随時応じるとともに，将来社会人としての資質を養えるよう対応してきた。外部講師として、新聞記者、民間人、校長、教員の協力を得るなど、多彩に対応している。 なお、具体的な動きとして、東かがわ市との連携事業を活用し、多くの学生をボランティア参加（のべ300名）をさせるとともに、徳島県防災人材育成センターや徳島県南部県民局との協働（防災実習：80名）を通じて、学生・院生の資質向上に取り組んできた。また、危機管理の授業では、PFA（サイコロジカル・ファーストエイド：心理的応急措置）を盛り込み、災害後の支援にあたる教師の役割を示しながら、その専門的な知識と意識を育てている。	・平成25年度に引き続き、おもちゃ王国からの外部資金を獲得し、知育玩具に関する研究を継続する。 ・科学研究費補助金（ネットいじめ研究）の研究の充実を図る。特に、海外の研究者を招聘し、国際フォーラム的な研修会を開催する。また、防災教育の研究も継続して行っていく。 ・人材GP終了後の教育支援人材認証講座（パートナー講座）等の運営及びそれに係る実践的研究を行う。ここでは、地域との連携（地域教育）を視野に入れる。 ・学会関連の研究の充実を目指す。特に、日本生徒指導学会、日本NIE学会の役員として、責務を果たす。（10月には、日本生徒指導学会鳴門大会予定）	平成25年度に引き続き、おもちゃ王国からの外部資金（50万円）を獲得し、知育玩具に関する研究を継続した。また、科学研究費補助金（ネットいじめ研究）の研究の充実を図るため、10月4日に、海外の研究者を招聘し、国際フォーラムを開催し、アリゾナ大学からラッセル教授を招聘した。その資料も作成し、Webで公開した。 防災教育の研究では、9月に実施された「5大学連携防災フォーラム」に、本学代表として登壇したり、徳島大学と香川大学が開設している防災プログラムを試行的に受講出来るように、遠隔システムを活用したりして、充実させてきた。 人材GP終了後の教育支援人材認証講座（パートナー講座）では、運営及びそれに係る実践的研究を引き続き行っており、6月及び9月に講座を実施し、約80名の参加者を得た。また、学会関連では、日本生徒指導学会を10月4，5日に本学で開催し、日本NIE学会（仙台：12月）では、防災とNIEという視点で登壇した。	・地域連携センター兼務職員として、学校、教育委員会及び近隣大学を含めた地域連携の職務を果たす。また、地域連携委員会などで、委員会運営（副委員長等）にあたる。 ・社会教育主事講習の主担当して、その運営にあたる。（7月から8月開催） ・教職大学院の副専攻長として、その責務を果たす。 ・連合大学院（先端）の講座代表として、その責務を果たす。 ・本学の定員充足のため、県教委関連の審議会など（徳島県社会教育委員長など）の依頼を積極的に受け入れ、これによって大学広報や派遣確保などに寄与する。 ・教職論などの授業での現地実習などを通して、教員採用への支援を行い、引き続き教員就職率日本一を目指す。また、今年度も、新入生合宿の講師を務め、防災、人権、教職（キャリアノート）を周知する。 ・四国5大学間連携による防災教育において協力関係を維持しつつ、本学の防災等の危機管理分野などで大学運営に貢献する。	・地域連携センター兼務職員として、学校、教育委員会及び近隣大学を含めた地域連携の職務を果たしてきた。夏期には、社会教育主事講習の主担当して、その運営にあたった。 ・教職大学院の副専攻長として、その責務を果たした。 ・連合大学院（先端）の講座代表として、その責務を果たした。 ・本学の定員充足のため、県教委関連の審議会など（徳島県社会教育委員会議会長など）の依頼を積極的に受け入れ、これによって大学広報や派遣確保などに寄与した。 ・教職論などの授業では、東かがわ市の土曜授業に参画し、多くのボランティア参加を促した。また今年度も、新入生合宿の講師を務め、防災、人権、教職（キャリアノート）を周知した。 ・四国5大学間連携による防災教育においては、その主たる担当して、連携事業に参画している。 ・平成27年度以降のサテライト運用を円滑に行うため、その窓口として対応した。	・附属学校のみならず、近隣学校と連携して、各学校の課題についての解決を図るための支援を行う。 ・民間企業、マスコミとの連携を図り、本学の活動について、広報等に寄与する。 ・とくしま地震防災県民会議会員として、地域防災に尽力する。 ・各審議会や委員会活動を積極的に受け入れる。特に、2014年度は、NIE全国大会（7月）、社会教育全国大会（10月）があり、その運営支援にあたっていく。また、学園都市構想における鳴門市との連携にも力を入れる予定である。（フォーラムでは、今後の鳴門市の教育について、テーマとする予定。）	・附属中学校において、外部講師として、生徒に講演（NIE）を行った。また、近隣学校と連携して、各学校の課題についての解決を図るための支援を行ってきた。 ・民間企業、マスコミとの連携を図り、本学の活動について、広報等に寄与した。 ・とくしま地震防災県民会議会員として、地域防災に尽力した。 ・各審議会や委員会活動を積極的に受け入れ、特に、2014年度は、NIE全国大会（7月）、社会教育全国大会（10月）の運営支援にあたった。また、学園都市構想における鳴門市との連携にも力を入れ、教育文化フォーラムでは、今後の鳴門市の教育について、テーマとして開催した。また、鳴門市の消防団のあり方懇談会、いじめ問題の審議会などに参画した。	地域連携センター主催行事として，始めて国際フォーラムを開催し，LGBT（性的少数者）をテーマに，マスコミに特集記事を掲載させるなど，広報に寄与した。新規の課題を取り上げることで，アカデミックさと新鮮さをアピールした。また，学力向上対策を県教委と行い，家庭教育・教員研修と，本学のサテライト運用との連携を示唆し，それが実現した。（平成27年度から，2名の研究生を確保した。）
14	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	村川　雅弘	①教職大学院生の専門や興味関心と実習校の実態や課題をすり合わせ，両者にとって有益な研究課題が設定できるように指導する。 ②研究課題の具体的な解決に必要となる理論的・実践的情報を提供し，院生自身が主体となりカリキュラム開発や授業づくり，教材開発等を行えるように支援する。 ③院生の研究に参考となる先進校や研究会の情報があれば提供し，必要があれば同行して授業観察及び研究協議を行う。 ④実習校での実践においては，院生の独りよがりになることのないように，ワークショップ型研修等を仕組むなどして，実習校の教職員の協働性を引出しながら具体化していくことを大切にする。 ⑤実習校での成果は他校にも援用できるように，授業や講演あるいは教育雑誌や専門書等で発信する。	①教職大学院生の専門や興味関心と実習校の実態や課題をすり合わせ，両者にとって有益な研究課題が設定できるように指導した。研究課題の具体的な解決に必要となる理論的・実践的情報を提供し，院生自身が主体となりカリキュラム開発や授業づくり，教材開発等を行えるように支援する。その結果，4名の実習生のいずれもが置籍校が抱える課題に関して具体的なカリキュラムや教材の開発，校内研修の改善を行うことができた。各学校長からも高い評価をいただいた。 ②院生の研究に参考となる先進校や研究会の情報があれば提供し，必要があれば同行して授業観察及び研究協議を行った。例えば，院生の課題にかかわる先進校として，横浜市立大岡小や関西大学初等部，横浜市立日枝小，美馬市立重清西小，丸亀市立飯山北小，新潟大学附属新潟中，戸田市立笹目中，横浜市立南高等学校附属中などを紹介し，可能な限り同行した。 ③実習校での実践においては，院生の独りよがりになることのないように，ワークショップ型研修等を仕組むなどして，実習校の教職員の協働性を引出しながら具体化していくことを大切にした。校内研修の方法について事前に協議し，可能な限り直接に赴き指導・支援を行った。 ④実習校での成果は他校にも援用できるように，授業や講演あるいは教育雑誌や専門書等で発信した。その結果，例えば，講演を通して教職大学院の取り組みを理解した鳥取県より平成27年度の現職派遣を実現できた。	[学部]「総合学習論」「教育課程論」は教科教育とは異なり，学習の目標や内容，方法を具体的に示す教科書のないカリキュラムである。教職に就いた際に，児童生徒及び学校，地域の実態に応じて，学年または学校で主体的・協同的に作り出す部分が多い。①授業内容に関しては，学習指導要領改訂の趣旨やポイントを示すと共に，研究過程において得た優れた事例を取り上げ，どのような実態等の分析・検討を元に開発したのかを考えさせる。②教育方法に関しては，カリキュラム開発や授業づくりの実践力を育成するために，具体的な手だてを示すとともに学生自身に考えさせたり協議させる活動をできるかぎり組み入れる。また，適宜ワークシートを作成し，自己の考えをしっかりと文章化させる活動も重視する。③このワークシートの記述内容も成績評価の対象とする。 [大学院]①授業内容に関しては，院生や学校現場のニーズを考慮しながら，これまでの実践的な研究の蓄積を改めて整理・検討し理論化・教材化を図る。②授業方法に関しては，これまで研究開発してきたワークショップ型の研修方法を授業の中でも活用し，学校現場に戻った際に学校や地域のミドルリーダーとしての手腕発揮のための具体的な手法の習得をめざす。③成績評価の際には，レポート以外に，ワークショップ等による協同的な作業の成果物も評価する。また，レポート自体が学校現場に戻った際に自らの実践の開発や実施を支えるデータベース的な機能を果たすように工夫する。 [学生生活支援]平成17年度の「総合演習」をきっかけにサークル（劇団「どや！」）が誕生し，その顧問を担当している。26年度においてもこのサークルを支援する。文部科学省研究開発学校制度創設（昭和51年度）以降の各校の研究報告書の大半を所蔵し，人文棟の一室（A423）に集中管理を行っている。教職大学院も7年目を迎え，この資料の重要性が高まっており，今後も資料公開を進める。これまでに指導した院生・学生は100名近くになる。本学赴任以来20数年にわたって年1～2回「鳴門セミナー」を実施し，修了生等の研究・実践交流の場としてきた。26年度も8月16・17日に実施予定である。	教職に就いた際に，児童生徒及び学校，地域の実態に応じて，学年または学校で主体的・協同的に作り出す部分が多い。①授業内容に関しては，学習指導要領改訂の趣旨やポイントを示すと共に，研究過程において得た優れた事例を取り上げ，どのような実態等の分析・検討を元に開発したのかを考えさせた。②教育方法に関しては，カリキュラム開発や授業づくりの実践力を育成するために，具体的な手だてを示すとともに学生自身に考えさせたり協議させる活動をできるかぎり組み入れた。また，適宜ワークシートを作成し，自己の考えをしっかりと文章化させる活動も重視した。③このワークシートの記述内容も成績評価の対象とした。 [大学院]①授業内容に関しては，院生や学校現場のニーズを考慮しながら，これまでの実践的な研究の蓄積を改めて整理・検討し理論化・教材化を図った。②授業方法に関しては，これまで研究開発してきたワークショップ型の研修方法を授業の中でも活用し，学校現場に戻った際に学校や地域のミドルリーダーとしての手腕発揮のための具体的な手法の習得をめざした。また，授業「ワークショップ型研修の技法」では，習得した知識や技法を協同的にプレゼン資料として整理させ，学校現場で活用可能な形にさせた。③成績評価の際には，レポート以外に，ワークショップ等による協同的な作業の成果物も評価した。また，既設修士の授業「総合的な学習の時間のカリキュラム開発」では，レポート自体が学校現場に戻った際に自らの実践の開発や実施を支えるデータベース的な機能を果たすように工夫した。教職大学院の授業「カリキュラムマネジメントの理論と実践」「総合的な学習の時間のカリキュラム開発」では，置籍校のカリキュラムや総合的な学習の年間指導計画をワークショップで分析させた。 [学生生活支援]平成17年度の「総合演習」をきっかけにサークル（劇団「どや！」）が誕生し，その顧問を担当している。26年度においてもこのサークルを支援した。文部科学省研究開発学校制度創設（昭和51年度）以降の各校の研究報告書の大半を所蔵し，人文棟の一室（A423）に集中管理を行っている。教職大学院も7年目を迎え，この資料の重要性が高まっており，資料公開を行った。これまでに指導した院生・学生は100名近くになる。本学赴任以来20数年にわたって年1～2回「鳴門セミナー」を実施し，修了生等の研究・実践交流の場としてきた。26年度も8月16・17日に実施予し，約100名の参加者があった。	これまで開発してきたワークショップ型研修は学校や教師のカリキュラム開発力向上の方法としてさらに研究を継続する。特に，25年度より3か年，「授業実践力向上を支援する総合的な研修システムの開発的研究」という課題で科学研究費補助金を獲得しているので，教育センター等の行政研修と各学校の校内研修，教師自らの個人研修を有機的に繋ぐシステムの開発を進める。これらの成果を教職大学院の授業等で紹介・吟味する。また，学習指導要領改訂では全教育活動を通して子どもの思考力・判断力・表現力・言語力・協同性を育むことが求められているが，これまでの研究実績からワークショップ型学習の有効性が明らかになってきている。学校現場と連携を図り総合的な学習や教科等において効果的な学習方法の開発とその体系化を推進する。また，今後学校教育において重要となるカリキュラムマネジメントに関する研究の成果を整理する。これらの研究成果は，書籍や教育雑誌，教育センター等での研修を通して発信し，外部評価を得て，改善や精緻化を進める。	これまで開発してきたワークショップ型研修は学校や教師のカリキュラム開発力向上の方法としてさらに研究を継続した。特に，25年度より3か年，「授業実践力向上を支援する総合的な研修システムの開発的研究」という課題で科学研究費補助金を獲得しているので，教育センター等の行政研修と各学校の校内研修，教師自らの個人研修を有機的に繋ぐシステムの開発を進めている。これらの成果を教職大学院の授業等で紹介・吟味した。また，学習指導要領改訂では全教育活動を通して子どもの思考力・判断力・表現力・言語力・協同性を育むことが求められているが，これまでの研究実績からワークショップ型学習の有効性が明らかになってきている。学校現場と連携を図り総合的な学習や教科等において効果的な学習方法の開発とその体系化を推進している。また，今後学校教育において重要となるカリキュラムマネジメントに関する研究の成果を整理している。これらの研究成果は，書籍や教育雑誌，教育センター等での研修を通して発信し，外部評価を得て，改善や精緻化を進めている。	平成25年度は教職実践力高度化コースのコース長を務める。新年度早々にコース教員から要望や課題を聞き取り，コース運営に生かしていきたい。小野瀬教授と佐藤准教授の退職により2名少ない体制であるが，院生指導において支障が出ないように気を配っていきたい。また，大学改革構想検討委員会委員としては教職大学院に所属する立場だけでなく，全学的な視野から建設的な意見を述べるようにしていきたい。	平成26年度は教職実践力高度化コースのコース長を務めた。新年度早々にコース教員から要望や課題を聞き取り，コース運営に生かした。小野瀬教授と佐藤准教授の退職により2名少ない体制であるが，コースの先生方の努力により大過なく任務を終えることができた。	附属学校園及び県内外の学校に関しては，教育支援講師・アドバイザー及び徳島市の元気アップ事業，鈴鹿市との連携事業に登録・参加しており，各種要請があれば可能な限り支援・指導を行っていく。26年度の徳島県小学校教育研究会総合部会研究大会会場校の美馬市立重清西小学校には指導講師としてかかわる。文部科学省および教育関連の各種財団の委員，独立行政法人教員研修センターや教育委員会，学校からの指導等の依頼は本務に支障のない範囲で引き受け，社会貢献を果たすとともに，可能な限り本学の大学院学生充足や教育活動等に反映していきたい。	附属学校園及び県内外の学校に関しては，教育支援講師・アドバイザー及び徳島市の元気アップ事業，鈴鹿市との連携事業に登録・参加しており，要請に応じ可能な限り支援・指導を行った。教育支援講師・アドバイザーは県内1回，県外4回受けた。鈴鹿市に関しては5回訪問し指導を行った。26年度の徳島県小学校教育研究会総合部会研究大会会場校の美馬市立重清西小学校には指導講師としてかかわった。文部科学省および教育関連の各種財団の委員，独立行政法人教員研修センターや教育委員会，学校からの指導等の依頼は本務に支障のない範囲で引き受け，社会貢献を果たすとともに，可能な限り本学の大学院学生充足や教育活動等に反映していった。	本学附属中学校にゼミ指導生の鎌田明美が実習生としてかかわった。その関係で，中川校長より附属中が進めてきた「すべ」（思考スキル）研究の成果を図るためのテスト開発を依頼された。国立政策研究所の研究者や諸企業等の協力を得ながら準備を進め，11月初旬に実施した。全国学テ問題をベースに問題作成を行い，それをモバイル機器を活用してペアで解答させ，その過程から生徒の思考の活用状況を分析するという全く新しい取り組みであり，学会に与えるインパクトも大きい。27年度に学会発表及び学会誌投稿の予定である。また，前述したが，鳥取県における講演や学校現場指導，教育委員会への説明などにより派遣枠1つを確保することができた。
15	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	芝山　明義	[鳴門教育大学学位規程第14条の規定により，名称は「最終成果報告書」と，以下記載する。] 所属専攻（教職大学院）・コースでは主として現職教員である院生を対象としている。最終成果報告書を学校教育の実践に具体的に活かしていくことをめざし，その指導や一般化への工夫として，①院生がその教職経験や現任校である実習校に係る学校アセスメント等から提示する問題意識や分析結果にもとづいて設定する実践課題に関して，その実践上の意義や取組のその後の活用への展望を丁寧に確認する（学校現場における実践課題の設定），②実習の取組を中心とする計画策定とその実践の手続・過程における成果と課題等を，実習校の現況と合わせて検討し，学校の実態に応じた教育実践上の工夫改善の要点を丁寧に確認する（学校の実態に応じた教育実践の工夫改善の要点の考察），③院生が在学中に学修した新たな知見や特に実習の取組において創意工夫した経緯等，院生の教員としての力量向上の過程に関する省察と今後の展望等を丁寧に確認する（教育実践の内容や方法・手続等と教員の高度専門職業人としての職能開発・人材育成との関連の検討）。これらの視点をもとづいた指導等に努めることによって院生が作成する最終成果報告書に示される一連の成果と課題は，他の学校現場の教育実践や教員の専門性向上の取組のための参考事例としてその一般化が期待できるとともに，院生自身が修了後も教育実践の深化・発展に取り組むことによって「学び続ける教員」としての学修の継続が期待できる。	所属する高度学校教育実践専攻（教職大学院）・教職実践力高度化コースにおいて，2014年度に指導を主に担当した2年次生については，年度当初からの実習科目と専門科目を通じて，年度目標の「②実習の取組を中心とする計画策定とその実践の手続・過程における成果と課題等を，実習校の現況と合わせて検討し，学校の実態に応じた教育実践上の工夫改善の要点を丁寧に確認する（学校の実態に応じた教育実践の工夫改善の要点の考察）」をほぼ計画どおりに進めることができた。8月の中間発表会以後も引き続き，実習校において主として実習実施責任者（校長先生）からの指導助言や同校の先生方との意見交換等により，後期の実習をより充実・発展させまた有効なものとすることがある程度できた。とくに，実習校の教育課題・目標に即した実践課題の設定と継続的な取組を実現したことに関しては，実習校の校長先生より高い評価を得ることができた。さらに，年度目標の「③院生が在学中に学修した新たな知見や特に実習の取組において創意工夫した経緯等，院生の教員としての力量向上の過程に関する省察と今後の展望等を丁寧に確認する（教育実践の内容や方法・手続等と教員の高度専門職業人としての職能開発・人材育成との関連の検討）」に関しては，院生の省察と展望を最終成果報告書と学修成果発表会におけるプレゼンによってある程度表現することができた。それらには2年間の学修成果とともに修了後の課題と展望について具体的に示されており，修了後の教育実践の深化・発展への取組による自身の学修と成長を期待できるものである。 また，指導を主に担当することが2014年夏に決定した同専攻・コースの1年次生についても，年次目標の「①院生がその教職経験や現任校である実習校に係る学校アセスメント等から提示する問題意識や分析結果にもとづいて設定する実践課題に関して，その実践上の意義や取組のその後の活用への展望を丁寧に確認する（学校現場における実践課題の設定）」に関して，積極的に学校アセスメントを進め，実習校の教育現場における実践課題を検討して，実習校の校長先生からもその実践課題に取り組む意義やその後の展望について好評を得た。その後も継続して，後期には院生の所属キャリアグループ別「合同ゼミ」や12月に実施した構想発表会を経て，実習の準備を計画的に進めることができた。	①主として所属専攻・コースにおいて，教育・学生生活支援を円滑におこなえるよう，教職員間の連携を図る。 ②主として所属専攻・コースの大学院生の教育研究環境整備を，専攻・コースの教員と協力しておこなう。 ③専攻・コースにかかわらず，学部生，院生の要望等の相談に随時応じ，学部生，長期履修生と学卒等の院生には，将来教員・社会人として必要とされる日常の生活態度等を身につけられるように指導・助言することに努めたい。	①所属専攻・コースにおける会議等に積極的に出席し，教員間の連携を図った。とくに改訂されたカリキュラムや指導体制に係るコラボレーション・コーディネーター及び所属キャリアグループ世話人として，専攻内委員会等の関連する会議等に積極的に参加するとともに，教職員間の連絡調整等を密にするよう働きかけ，その連携を推進した。 ②所属専攻・コースの大学院生に係る教育研究環境整備を，専攻・コースの教員の方々ならびにコラボレーションオフィスのスタッフの方々と協力しておこない，とくに教育研究環境整備として適宜，必要な機器等の配備や点検保守への対応をおこなった。専攻においては，とくに2年次生の学年担当として，2年次の授業科目や院生室整備等に係る庶務に関して，また専攻共通複写機の管理等に係る施設・経理担当として，大学院生からの要望等にできる限り迅速に対応した。 ③所属専攻・コースの院生を中心に学生の生活状況等について，教職員の方々との情報交換等を綿密におこなった。今年度はとくに専攻・コースにおいて，本学に着任されて日の浅い，1年次生の学年担当ならびに経理の主担当の教員の方々を補佐するとともに連携して，院生支援を進めることができた。また，専攻・コースにかかわらず，学部生，院生等学生の個別の相談や要望等に対応して，助言・支援等を積極的におこなった。	①これまでの研究テーマである学校と家庭・地域の連携と人権教育の課題に関する考察ならびに自己概念と教育達成に関する検討，また，教師教育とくに現職教育についての考察をさらに進展させ，まとめるよう努める。 ②科学研究費補助金に関して，研究分担者としてのこれまでの研究成果を学会発表，論文等にまとめることを目指す。継続中の課題については，課題に係る調査研究を積極的に進める。また，新規分については，その審査結果により，次年度の科学研究費補助金に積極的に申請し，学外資金の調達に努める。	これまでの研究テーマである学校と家庭・地域の連携と人権教育の課題ならびに教育達成と自己概念に関する研究を深化・発展させるとともに，教職大学院における教育研究との関連で継続して新しい資料を加えて，学校文化・教師文化と教師教育に関する研究に精力的に取り組んだ。とりわけ教師教育に関しては，これまでの研究成果の一部を教育専門誌に発表した。また，2012年度より研究分担者として参画している科学研究費補助金による「子育て困難な保護者への支援ネットワーク構築に向けた実践的研究」（研究代表者：岩永定教授[熊本大学教育学部]）の共同研究において，2013年度に実施したアンケート調査の集計・分析を分担し，その研究成果を日本教育行政学会第49回大会（10月11日，東京学芸大学）で発表するとともに，2014年度に実施した聞き取り調査とその分析等に参画した。さらに，本学教職大学院と鈴鹿市教育委員会との市大連携に係る共同研究に関して，前々年度・前年度に引き続いて学校診断質問紙の点検と調査の実施等を担当した。	学内の各種委員会委員等の担当において，当該委員等としての職務を積極的に果たす。各種委員会等に関しては，教職大学院コラボレーションオフィス・コーディネーター（継続予定），学術研究推進委員会委員（予定）として，本学の運営に貢献するよう務める。 また，教育部会議，専攻会議ならびにコース会議等に出席・参画し，大学の構成員として本学の運営に貢献する。さらに，所属専攻・コースの運営に係る職務を積極的に果たすことを通しても，本学の運営に貢献するよう務める。	各種委員会委員としては，教育部選出の学術研究推進委員会委員として，その職責を積極的に果たした。 また，教職大学院の運営においては，コラボレーションオフィス・コーディネーターの2年次生担当，所属キャリアグループ世話人，カリキュラム開発委員会委員，及び経理（専攻共通複写機の管理）担当，広報担当として，他のコーディネーター，委員ならびに担当者の方々と協力しながら，その務めを積極的に果たした。とりわけ，広報担当の一環として担当している教職大学院同窓会幹事（事務局）として，所属専攻の修了生等との連携や研究実践交流に係る業務等を積極的に果たした。2014年度も教職大学院同窓会の庶務を主に担当するとともに，同会に係る8月上旬の年次の諸行事（総会，懇親会，教育実践交流会）の企画・準備と開催・運営，及び同会の会報の編集と発行等の諸業務を積極的に果たした。	附属校園とともに学校や教育委員会等からの依頼・要請等に応じるなど，大学と地域・社会との交流・連携を積極的におこない，地域・社会に貢献していくよう努める。（附属学校・社会連携・国際交流）	2014年度も継続して教育支援講師・アドバイザーに登録し，社会・地域との連携を進めるべく努めた。また，研究テーマである人権教育に関連して，本年度も継続して鳴門市社会人権教育講師の委嘱を受けた。さらに，本学教職大学院と鈴鹿市教育委員会との市大連携に係る共同研究を通して連携活動に参画した。合わせて，本学教職大学院と徳島市教育委員会との連携事業である徳島市「学校元気アップ推進事業」徳島市学校支援専門家チームのメンバーに登録・参画した。加えて，今年度本学を会場として開催された社会教育主事講習の講師を務め，ならびに今年度の本学教員免許状更新講習（必修領域：教育の最新事情）の講師を務めた。	所属専攻に係る活動として，平成27年度教職大学院認証評価に係る『平成26年度教職大学院自己評価書』の執筆を分担した（副担当）。 Ⅱ－2．に記したとおり，2012年度より研究分担者として参画している科学研究費補助金による「子育て困難な保護者への支援ネットワーク構築に向けた実践的研究」（研究代表者：岩永定教授[熊本大学教育学部]）を継続してきた。 Ⅱ－3．に記したとおり，教職大学院同窓会幹事（事務局）であり，当会が本学同窓会の支部であることから，支部代表の本学同窓会役員として，本学同窓会の運営に参加してきた。 Ⅱ－4．に記したとおり，本学教職大学院と鈴鹿市教育委員会との市大連携に係る共同研究を通して，ならびに本学教職大学院と徳島市教育委員会との連携事業である「学校元気アップ推進事業」への登録により，連携活動に参画した。また，今年度本学を会場として開催された社会教育主事講習の講師を務め，ならびに今年度の本学教員免許状更新講習（必修領域：教育の最新事情）の講師を務めた。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1. 目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2. 点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1. 目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2. 点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1. 目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2. 点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1. 目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2. 点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1. 目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2. 点検・評価	Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）
16	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	大林　正史	平成26年度には、現職の院生が学校現場に戻った時に、教職大学院での学習の成果を生かしながら実践することができるように指導することを目標とする。 その目標を達成するために、現職の院生に、実習の成果だけでなく、実習を通して認識された課題に着目して学修成果報告書を記述するように指導していく。また、現職の院生に、修了後、その課題にどのように対処していくのかに関する計画を十分に記述するように指導していく。これらの工夫を通して、現職の院生が学校現場に戻った時に、教職大学院での学習の成果を生かしながら実践することができるように指導していく。	ゼミでの学修成果報告書の執筆に向けての指導において、実習で成果をあげることだけでなく、実習を通していかに新たな課題を認識し、次年度の取り組みにいかせるかがより重要であることを強調してきた。 また、実習期間内に十分な成果をあげることが難しい取り組みについても、次年度以降の実践の充実を見据え、積極的に取り組むよう指導してきた。 さらに修了後の現職院生の実践や学習を支援するため、ゼミ単位で修了後の実践報告会を定期的に開催していくことを計画している。	①「家庭・地域・学校の連携構築」の授業実践に取り組み、その検証と改善を進める。 ②オフィスアワーを明示したり、研究室に来やすい雰囲気を作ることにより、院生からの学習や生活の相談を受けやすくする。	①後期の「家庭・地域・学校の連携構築」では、2013年度の反省を生かし、授業実践を行った。結果、受講生の授業評価において、2013年度の授業よりも大幅に高い評価を得ることができた。 ②オフィスアワーを教員情報データベースにて公開した。研究室には、学生用の机と椅子を用意しており、学生が相談に来やすい雰囲気を作った。	①科研（挑戦的萌芽研究）「スクールリーダーシップの日本的特性に関する研究」に関して、事例校の教員に対するインタビュー調査の結果をもとに、論文を作成する。 ②大阪教育大学スクールリーダープロジェクトの外部評価の成果を、日本教育経営学会において共同で発表する。	①今年度、年度が始まった後に、文部科学省の委託研究である総合的な教師力向上のための調査研究事業の指定を受け、「学校管理職育成研修プログラムの開発、実施、評価に関する共同研究」に取り組むことが決まった。 そのため、「科研（挑戦的萌芽研究）「スクールリーダーシップの日本的特性に関する研究」に関して、事例校の教員に対するインタビュー調査の結果をもとに、論文を作成する」という年度当初の目標を、次年度にずらすことにした。 その代わりに、「学校管理職育成研修プログラムの開発、実施、評価に関する共同研究」の成果に関わる論文を、9月末に「鳴門教育大学学校教育研究紀要」に投稿し、掲載された。 ②大阪教育大学スクールリーダープロジェクトの外部評価の成果を、6月の日本教育経営学会において共同で発表した。	①附属図書館運営委員会の委員として、業務を円滑に遂行する。 ②教職大学院の財務、施設担当として、業務を円滑に遂行する。	①附属図書館運営委員会の委員として、業務を円滑に遂行した。 ②教職大学院の財務、施設担当として、業務を円滑に遂行した。	①徳島県教育委員会との管理職養成のあり方に関する協議を通して、大学と徳島県教育委員会との連携関係の構築に努める。 ②「小中一貫教育校による多様な教育システムの調査研究事業」に係る牟岐町学校支援地域協議会の講師として、大学と学校現場との連携関係の構築に努める。	①徳島県教育委員会との管理職養成のあり方に関する協議を、今年度はこれまで6回行ってきた。これを通して、大学と徳島県教育委員会との連携関係の構築に努めてきた。 その結果、H27年度から、本学教職大学院と徳島県総合教育センターが共同で主幹・指導教諭研修を、実施していくことになった。 ②「小中一貫教育校による多様な教育システムの調査研究事業」に係る牟岐町学校支援地域協議会の講師を、今年度はこれまで4度務めた。これを通して、大学と学校現場との連携関係の構築に努めてきた。	今年度は、文部科学省の委託研究である総合的な教師力向上のための調査研究事業「学校管理職育成研修プログラムの開発、実施、評価に関する共同研究」に取り組んできた。 また、徳島県教育委員会教職員課および総合教育センターと、徳島県における主幹・指導教諭研修の再構築について計6回、議論を重ねてきた。 その結果、H27年度から、本学教職大学院と徳島県総合教育センターが共同で主幹・指導教諭研修を、実施していくことになった。 これらの事業を通じて、徳島県教育委員会教職員課の課長や、総合教育センターの課長、高知県教育委員会との信頼関係の構築に努めた。 このような県教委との信頼関係の構築は、本学の課題である定員充足につながる可能性がある点で、本学に貢献するものと考える。
17	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	池田　誠喜	学修成果報告書においては、理論を基に、教育効果を高めるためのアセスメントや実践、効果測定の一連のプロセスが記述される。そこには理論を実践に効果的に生かす工夫や努力もしくは取り組む姿勢がある。様々な学校現場において教育実践の成果はそのプロセスを追うことによって、一般化がなされると考えられる。 従って、目標①として、妥当性や信頼性の検討を伴った実習のプロセス評価を行うよう指導し、実践プロセスを一般化できるようにすること。 次に、目標②として、	①P2院生の実習に対するプロセス評価は、前期に引き続き各実習パートにおいて、実習実施直後に児童及び教師へ達成度や感想について質問紙や自由記述での回答を求めた。その結果、取り組みのプロセスが可視化され、各々のパートを組み合わせることにより実践のプロセスを示すことができた。実践研究においては量的調査と質的調査の両方を用いて実践の効果について調査分析を示唆するなどの指導を工夫した結果 、院生が多面的な調査を実施し、しっかりしたエビデンスを示すことができた、ステークホルダーである学校長からの大学側に対する指導についての評価もたいへん高いものであった。 P1院生については、理論をそのまま実践するのではなく、院生自身の学校現場を常に想定させることで、実際的な実践研究のデザインに近づきつつある。 ②共に学ぶ姿勢については、教員側としては概ね満足できるものであった。院生の実践と成果報告書を基にして、学会誌への投稿を共同ですることができた。P1院生に対しては、当初は丁寧すぎるくらいの支援を行うことにより安心して取り組める風土を実習指導中に作り出すことができ、徐々に主体的に研究活動を行うようになってきたと考えている。		①学校現場での事例を取り上げ、それに対する理論的知識の獲得と応用方法について検討し、専門的知識を実際に活用できるようすることに重点を置く。 ・前期に引き続き、実践例をあげるとともに、現職教員院生においては、自身の現場と照らし合わせる作業を行わせることで、より実際的に課題に取り組んでいた。一例としては、生徒指導に関する関係機関との連携において、訪問先の担当者に、自身の学校現場と理論の矛盾点や合意点について積極的に質問するなどの効果が見られた。 ②講義、発表、演習を学修成果効率よく取り入れ、実践力を磨くためのGW、PBLを積極的に導入する。 ・前期に引き続きGW等を積極的に取り入れた。、学習への動機付けの高まりが見られ主体的な参加が促進されただけでなく、これまでなかった、実際的な質問やアイディアが多く出されるようになった。 ③特に形成的評価を重視し、各授業ごとにフィードバックできるような体制を構築し、学生が自己評価に加え、他者評価を形成的評価に効果的に取り入れることができるようにする。 ・引き続き学部生、長期履修院生の授業を中心に行った。毎回のレポートに評価を入れてフィードバックするとともに、その内容について授業前に詳しく説明し、課題となっている部分居着いて言及した。多くの学生が次回のレポートでは、修正したり、新しい取り組みを行ったりする効果が見られた。		①生徒指導・学校教育相談を中心とした実践事例研究についてまとめ、研究デザインを作成し、科研申請の内諾を得ることができた。今後はさらに整理し研究を深めたい。 ②レジリエンスの学校教育への適用に関するデータの収集とまとめを行う。 ・目標①②について、学会投稿論文に投稿し掲載された。また、雑誌「児童心理」にレジリエンスについての論文を掲載する機会を得て、レジリエンスを育成するためのエンゲイジメントの効果をまとめた。 ③学校教育における道徳教育の今後の動向を把握し、それを踏まえて教員養成における道徳教育の授業方法についての研究を行う。 ・附属小学校の道徳担当者と共同で授業研究を実施し、道徳の時間の授業効果について検討することができた。成果は附属小学校の発表で示すことができた。		①平成26年度P1学担として、全員が無事P2に進み、2年次の実習に入ることができた。自分自身としては満足できるものではなく、他のコース教員の力が大きいと感じた。今後は学修満足度をさらに上げることができるよう努めていきたい。 ②カリキュラム開発委員として、積極的な提案ができたと感じている。特に、自身が担当するカリキュラムに対しては、昨年度のアンケートを基にエビデンスを示して提案することができた。		①・8月に1件、鳴門市内において支援事業講師を勤めた。 ②学校心理士SVとして公立学校養護教諭及び「小学校教諭へコンサルテーションを実施した。6月に学校心理士徳島支部研修会　において講演を行った。 ③本年度は事業が中止になり依頼がなかった。 ④研究協力者として共同研究にあたっり、研究授業、発表を共同で行った。	
18	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	金児　正史	学修成果報告書は，院生が教職大学院において学んだ教職実践力を具体的に集約するとともに，今後学び続ける方針を明らかにする必要がある。すなわち，院生は学修成果報告書の作成活動を通して，学び続ける教員として何をどのように児童・生徒に伝えていくのか，指向する方向性を捉えられるようにならなければならない。私は授業研究及び算数・数学教育を担当する教員として，院生が授業で勝負できる教員に育つために，教材の学問的背景だけでなく，学習指導要領における教材の位置づけや異校種間の関連を的確に捉えられるように指導する。その上で，さらに児童・生徒の活動をきめ細かく捉えられる姿勢や態度も指導する。なお教科の専門性は既設大学院の先生方のお力もお借りする。また，児童・生徒の反応を捉える指導に当たっては，授業のVTRや授業記録，ワークシートなどを用いて考察する機会を設ける。	教科あるいは教科を横断した学習内容の教材について，学習指導要領における位置づけ，異校種間の関連，教材の学問的背景について指導し，学校の教育実践に貢献できるような論文指導をすることができた。また，授業の設計にあたっては，児童生徒をおもんぱかり，よりよい提示の仕方や発問の仕方にも思いやりを持って検討できるような教師を目指すように，院生に求めてきた。算数・数学の教科の専門性については，既設の大学院の先生方にもご相談させていただき，協議しながらより質の高い学習指導への取り組みを具現化した。	①昨年度から実施している教職大学院の新カリキュラムに沿って，それぞれの授業の質を高めるために，検証と改善を教員チームで議論して行う。 ②講義と演習を有機的に関連させ，討論，実習，模擬授業を取り入れた授業を行う。 ③P1生とP2生の交流の機会をできる限りつくり，交流を通して互いの経験をシェアしながら議論できるように工夫する。 ④ゼミでは重点目標に対応した指導を行う。	次年度以降の地域プロジェクトフィールドワークの在り方について，十分に検討するための資料を明確にして，その成果と課題を明らかにした。また，他の授業についても担当教員とできる限り丁寧に議論を重ねて，授業カリキュラムや指導内容の質を向上させた。また，授業を振り返って吟味検討し，次年度への足がかりを作った。また，ゼミでは互いの研鑽をあげるための議論を活発にして，授業改善に取り組むための教材開発のための視点を院生に自覚してもらえるよう，指導した。	①授業研究と算数・数学教育に関わる教材開発に精力的に取り組む。 ②平成27年度の科学研究費補助金などの研究助成の公募に申請し，外部資金を調達する。 ③学術論文の投稿を試み，教育と研究の成果を発表する。	学会論文(掲載証明のもの1本)しか発表できなかった。この点は次年度への課題である。授業研究や大学の授業の分析を行い，学術論文としての投稿を試みていく。また外部資金の調達を目指して，科学研究費補助金基盤研究へ応募した。国際協力機構に関わる調査研究にも携わった。	①教職大学院の専任教員として，その運営や広報活動に努めて定員確保や教育内容の質を保証する。 ②学校支援アドバイザーに登録し，アドバイザーとして貢献する。	大学院定員確保のための広報活動の結果，数名の受験と進学の成果を上げることができた。今後も継続して学生確保に取り組む。また，学校支援アドバイザーとして，徳島県下の小中学校において授業開発や研究開発を行った。特に，美馬市の中学校数学研究会は昨年度の日本数学教育学会の大会で発表準備に貢献することができた。	①付属学校園の公開授業や研究会に参加し，付属学校との連携を深める。 ②学校支援アドバイザーとして大学と地域・学校との連携構築に努める。 ③海外で教育支援を必要とする諸国の学校現場や研究会で，直接的な支援に努める。	付属学校園の先生方と密接に連絡を取り合い，よりよい学校教育のための支援を行った。また，院生指導においても，共同して指導することができた。学校支援アドバイザーや諸外国の教育支援に携わり，社会との連携を図ることもできた。	今後も学生の定員確保に努力し続けたい。
19	基礎・臨床系教育部	教職実践力高度化コース	泰山　裕	・学習成果報告書を学校教育の実践にどのように活かしていくのか 自分の専門分野である、教育工学の理念をもとにした指導を進めていきたいと考えている。教育工学とは教員方法の一般化を目指す学問であり、そのために、客観性や再現性を重視する学問である。そして、これまで教育工学の視点からさまざまな学校現場を観察し、指導助言や教員との議論を繰り返す中で、指導方法のモデル化や効果検証のための研究に取り組んできた。 このような経験を踏まえ、現職の教員である院生とのディスカッションを通して、その思いや内容を理解し、主観的になりがちな単なる実践報告書ではなく、教職大学院の学修成果報告書の作成を支援していきたい。あくまでも研究的な立場から記述する学修成果報告書に向けて助言を行い、目の前の児童・生徒にはもちろん、この先の授業実践につながり、そして、今後、授業実践を続ける中でひとつの柱になるような一般的な知見の獲得のためのサポートをしていきたい。 具体的には研究活動と実践の関係や、研究理念、そして主張を支えるためのデータの分析方法などの提案をしながら院生の支援をしていきたいと考えている。	2014年度は学習成果報告書の指導を担当する院生がいなかったが、院生のテーマに応じて個別に指導を行った。 これまでの研究の成果をもとに、主観的な成果報告書ではなく、2年間の実践によって得られた経験や知識を一般的な知見としてまとめるように指導した。成果報告書で得られた知見はなにか、それを実践現場にどのように応用できるか、などに焦点をあてて指導することで、知見の一般化に向けた指導をおこなった。	担当する学部生対象の授業、「授業研究論」は、授業の客観的な分析方法、授業研究による自己内省の方法について扱うものである。そのため、学生はそういった取り組みについての経験もなく、その必要性について実感が難しい科目である。しかし、授業を客観的に分析し、その改善策を提案する能力は、現場の教員にとって校種や専門教科の枠を超えて、必要不可欠な能力である。そのため、授業では1.授業分析のための理論を習得する，2.実際の授業ビデオを題材に授業を分析する，3.異なる教科や校種を教員を目指す学生同士のディスカッションという3つのフェーズを繰り返すことで実践的な分析能力に加え、立場の異なる相手とのコミュニケーション能力の向上を図りたい。そして、最終的には授業で学んだ理論をもとに異校種の教員を目指す学生が協同して授業設計　を行い、お互いに批評し改善策を提案するという取り組みを行う予定である。 また、大学院においては「教材・教具の実践演習」を担当する。この科目も校種や教科に関係なく必要となる能力の育成を目指している。院生の興味や問題意識に合わせてテーマを設定し、実際に教材を作成し、それをもとにディスカッションするような実践的な演習を行ないたいと考えている。これまで理論や実践をもとに得られた知見を具体的な実践現場に行かしていくための方策について、考えていく場としたい。 学部・大学院とも、対象となる学生・院生の状況に合わせて課題を設定し、自分の意見をまとめ、ディスカッションを行なう活動を取り入れながら理論的な知識の理解に加え、現場で役に立つような実践的な能力を深めていきたいと考えている。	学部生対象の授業、「授業研究論」では目標にたてたように、授業を客観的に分析し、改善点を提案するために必要な視点を獲得することを目的に理論と実践の往還を目指して授業を行った。授業では教科や希望校種の枠を超えたグループ編成を行い、理論に対するディスカッションや授業設計などを実施した。それにより授業を客観的に分析する視点を醸成できたと考えている。 また、教職大学院の開講科目である「教材・教具の実践演習」では、これまで研究を進めてきた「思考ツール」の紹介やそれをもとにした授業設計などを行うことで、単なる理論の紹介ではなく、現職院生の経験と照らし合わせ、これからの実践に応用できるものとして理解させた。	これまで研究を進めてきた「思考力育成のための授業設計方法」についての研究をより一層深めていきたいと考えている。児童・生徒の思考力をどのように育成するのかについては、現行の学習指導要領で強調される以前から重要な教育課題であるにも関わらず、その具体的な方策については充分な提案がなされていない。その中で、これまで思考力を「思考スキル」という具体的な行動として捉え、それを補助するためのシンキングツールを活用するという視点から現場の教員と共同で思考力育成のための授業方法について検討してきており、一定の成果が確認され始めている。 そこで、今後は、その方法について、授業設計のためのモデルの提案や具体的な授業をもとにした検証を進めることで、そのモデルの一般化を目指した研究を進める。	10月以降、「思考力育成のための授業設計方法」について、これまで共同研究を進めてきた関西大学初等部の教員らとともに研究を進めてきた。 学会全国大会や研究会での研究発表を行った。 今後は授業設計モデルの構築を目指して、研究を進めていきたい。	教職大学院の専任講師として、広報活動と運営に尽力する。 定員確保については、これまで関わりのあった学校園での研修，講演の際の広報を行い、教育内容の質の向上に関しては、これまでの研究活動において現場との関わりの中から得られた知見について共有することで、貢献していきたいと考えている。	これまで関わりのあった学校園での研修、講演のさいに、広報活動を行った。 また、授業において現場の情報や授業実践の情報を提供し、教育内容の質の向上を図った。	これまで関わりのあった学校への指導助言の継続と同時に、研究内容とも関わり、附属学校や地域の小中学校との新たな関係を構築し、社会貢献につとめていきたい。	大阪府下の小中学校を中心に指導助言をすすめた。 しかし、徳島県下の小中学校との新たな関係の構築はできなかった。	
20	基礎・臨床系教育部	国際教育コース	石村　雅雄	石村が修士論文指導を担当している大学院学生は、そもそも日本、諸外国の教育実践の問題の解明に取り組む者が全てであり、「専門学部の内容」を題材としていない。例えば、体罰問題、いじめ問題、僻地における教育指導のそれにあたる教員養成のあり方、外国人を親とする児童・生徒に対する指導のあり方、など、極めて実践的な課題であり、今後も修士論文の指導にあたって、論文の課題が実践からかけ離れたものとならないようにしていく所存である。課題の解明、すなわち、具体的な研究過程にあたっても、適宜現場の教員（ゼミの先輩等）の意見を聞きながら、具体的な現場の課題に応えていけるような論文の作成を促していく。	年度目標のとおり、現場経験のある方々、現職教員の方々からの意見を取り入れながら、修士論文指導を行い、日本での数学教育改革システムの検討、在外日本人学校に対する支援のあり方、など、現在それぞれの学校が直面する実践的問題に応ずる論文を完成させた。このことについては、我が国のみならず、中国非都市部での教員の確保の問題や、台湾における外国人を親としている子どもの教育問題等、それぞれの国の実践的問題にも対応するものもあった。	・外国人学生を9人担当することから、彼らの学習等に関する要求を丁寧に拾うように心がけ、本学での生活が充実したものになるようにサポートする。 ・学生の自ら学ぶ意欲を醸成するため、双方的な授業を心掛け、授業Web．ページの開設やそこに記される学生の意見に丁寧に対応するように心掛けること、及び学生達の現状把握に心掛け、形成的評価及び双方向的評価を目指すこと、を目指すため、先進的事例の収集・分析に心掛け、自らの授業に反映できる仕掛けを工夫する。 ・顧問をしている阿波踊りサークルの学生からのサポート要請（具体的には、踊りの装束、機器等の手配）に積極的に取り組む。	年度目標とおり、そして中間報告のとおり、最終的にも実施することができた。 とりわけ、外国人学生の生活支援については、その修了後の生活に付き、それぞれの学生の希望に応じて、きめ細かな指導・助言を行った。現在、日本での就職を目指し、元気にそれぞれの生活をスタートしている。 また、本学への留学希望者（今年度は7名に対応した）に対し、丁寧に対応し、できうる限り、希望に応えている。1名は、この4月から本学大学院生となり、1名は、この10月からの研究生を希望している。	1教育政策形成・実施過程研究 現在の教育に対する住民意識の変容に応じた教育政策形成・実施過程の構築を目指すため、議会が主要な役割を果たす地方政府の教育政策形成・実施過程の事例研究を進める。まずは、徳島県内で本年度に実施される地方議会選挙について、教育意思の取り上げようについて予備調査を行う。また、引き続き、現在の研究動向について、資料収集を行う。 2授業参観を基礎とした大学教育改善に関する全国的な動向、これまでの実践の整理、および理論構築を行う。 3フランス研究 大学の管理・運営研究につき、本年度は、参加概念を問い直すこととし、関係論文、判例の収集・分析を行う。この他、授業研究（Lesson Study）に関する研究として、フランスで行われている授業改善の手法であるclasse critiqueの現状と課題を明らかにする。これは、下記のフランス語圏アフリカ諸国での授業改善研究に資するものとなる。 4発展途上国教育システム研究 ベトナム・ベンチェー省、パラオ共和国及び仏語圏アフリカ諸国（コートジボアール、セネガル、カメルーン）の教育システム援助実践を理論的に考察する。そのため国際開発関連の諸業績の収集分析に努めるとともに、該当分野の専門家との研究討議を進める。とりわけ、教育援助を進める上での、周辺分野との協力、現地の自立的開発の進め方を中心に進める。また、ベトナムについては、徳島県松茂町のボランティアグループが校舎、教材を寄付したことに対し、それを有効に活用していく実践的研究を併せて進める。	中間報告時からの追記事項を述べる。 3　資料の分析を進め、フランスにおける授業改善の思想・制度をまとめた。とりわけ、Classe Critique　や　Lecon Modele についての、「フランス的特徴」に注目したもので、こうした従来の制度に対して、Etude de Lecon（Lesson Study)を導入していく際の問題点をまとめたものである。これは、今秋の日仏教育学会、日本教育制度学会で報告する予定である。 4　3月にカント一大学を訪問し、新たに、この研究場面での、同大学教育学部、国際言語学部との協力を得ることができるようになった。その第一弾として、カント一地域の学校訪問を行い、授業観察・分析を行った。ベトナムもフランス的授業改善の特徴を色濃く持っており、上記3での研究成果も生かしながら、実際の授業改善を提案していく予定である。	・本学の運営がよりスムーズになるように、自らがもつ能力（FDについての経験、国際経験等）を最大限生かしていけるように、委員等を積極的に引き受ける。既に、部から依頼のあった国際交流委員会委員を今年度も引き受けた。 ・大学のより裁量範囲の広い運営を可能にするために、科研費や民間団体等の様々な外部資金に応募し、大学独自資金の増額に努める。 ・本学の学生の増加による、余裕ある運営を可能にするために、様々な機会に本学への進学を勧める。この活動は、海外でも展開するつもりであり、とりわけ、ベトナムからの留学生の獲得を目指したい。 ・そのために、国際教育コースをより魅力あるものとするための様々な工夫を進めるとともに、宣伝広報活動に積極的に参加する。具体的には、昨年度実施し、効果がみられた、大学、専門学校訪問を行う予定である。	各種研究集会、学会等において、本学大学院への進学を勧めることができた。また、海外においても同様の勧誘を行い、新たにベトナムからの留学生の獲得の展望が出てきた。 また、第6回日中教師教育学術研究集会の準備委員、実行委員を引き受け、プログラム班班長として、同集会のプログラム作成を始め、積極的に行動している。これに関し、北京師範大学のジェン先生の招聘に関する諸事務、北京師範大学との連絡を行った。	・社会との連携：教育支援講師として、要請があれば、積極的に引き受け、専門を少しでも社会に貢献できるよう、心掛ける。 ・国際交流等：平成17年度より続いている、徳島県松茂町のボランティアグループ「は一とふる松茂」の ベトナム教育援助事業に専門家として協力し、現地での協力事業の成功に貢献するとともに、それが、松茂町の活性化にも繋がるよう、仕掛けを工夫・提案するとともに、ボランティア実践にも携わる。 ・本年度の大学院学生及び研究生（中国・台湾）への指導を通じて、当該国との交流拡大に努める。本年度は、特に、学生の修論指導で北京師範大学の協力を仰ぐので、当該校を訪問し、意見交換を行う予定である。このことは、来年度に予定されている本学と北京師範大学との教員教育学術交流会にも資するものと考える。 ・国際教育コースに関わる諸事業（サブサハラ仏語圏教員研修、南太洋州教員研修、モザンビーク教員研修等）に積極的に参加し、事業の発展に貢献する。今年度も、昨年に引き続き、フランス語による研修の質を上げたいと考えている。	上記に加え、 ・ジブチ教員研修、フランス語圏アフリカ諸国教員研修の講師として、日本の教育制度の講義を行ったほか、研修員に対する日常的支援にも勉めた。 ・徳島県立富岡西高等学校での大学授業体験講座の講師を務めた。 ・広島県立三原高等学校での学問体験講座の講師を務めた。 ・カント一大学教育学部長の本学来学に際して、本学の教育改革の説明、本学講義の観察の支援等を行った。この成果は、3月にカント一大学を訪問した際に、当該大学の教育改革に役だったとの謝辞を受けた。 ・2－3月と本学で実施された教員研修のフォローアップとして、カメルーンに出張し、当該国の授業改善の支援を行った。これについては、カメルーン基礎教育省総視学官（初等教育局長）、中等教育省視学官（本省課長）からの謝辞を得ている。 中間報告で述べたことも併せ、今年度は、非常によくこの項目で行動できたと考えている。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
21	基礎・臨床系教育部	人間形成コース	木内　陽一	私の専攻する「教育哲学」は、教育学の一領域であり、あくまで哲学的な学に主を置いた教育実践の有解を任務としている。このように考えれば、本学に着任しては、教育実践を主題におかない主題文の問題もしたことはない。 このような前提で、さらに日本と内国の教育の「比較」という観点、あるいは、「国境」のとを使った研究など、学校教育の諸側面をさらに多面的な視点から照らしたり多様な文を展開できるように努力し、学校の教育実践に寄与できるような論文指導をむかけたい。	五人の修了生全員が、学校教育実践を主題に置いた論文を執筆し、全員教職に就いた。	1)鳴門教育大学フィルハーモニー管弦楽団顧問として、この学生オーケストラの発展に寄与する。 2)授業にゲスト・ティーチャーを招き、受講生の視野をひろげ、学校教育をより広い観点から考えていけるように努力する。	1)鳴門教育大学フィルハーモニー管弦楽団は、本年3月の学位記授与式に見事な演奏を披露した。 2)ゲスト・ティーチャーを招き、受講生の視野をひろげ、学校教育をより広い観点から考えていけるように努力する。	近代日本の教育学史の研究をさらに推し進めたい。本学の研究紀要に、後藤勉男の著作「教育の本質と教育学」を検討した論文を投稿したい。	マルギッタ・ロックシュタイン著「遊びが子どもを育てる－フリードリヒ・フレーベルの（幼稚園）と教育遊具」（福村出版、全217頁）を共訳し、出版した。	委員等の任務を誠実に遂行したい。	大学院教務委員、教育・研究評価委員の任務を遂行した。	徳島県看護協会の講習会講師として、県内の看護師教育にも寄与したい。	看護士金主催の実習指導者講習会の経験は、人間形成論が看護師の養成にあっても重義あるものであるとわかった。 鳴門市からの委員の委嘱は、自分の活躍の場を広げることに役立った。	
22	基礎・臨床系教育部	人間形成コース	伊　恒信	修士論文の指導においては、従来から学校の教育実践に寄与するテーマを設定し直接に、各地の学校および教育委員会との連携をはかりながら研究を実施するように指導してきた。平成26年度においては、私の指導を求めて自ら申し出てきた福岡市の現職教生が現在政府で進められている道徳の教科化に関して多大な関心を寄せており、文部科学省の審議会で道徳教育教科化の政策推進に中心的な役割を担っている研究者や行政官などを招の主人ネットワークを活用しながら実践的な研究を支援している。また、定年まで1年を残すのみとなったにも関わらず、本学で私自身が一代表者となって監進している ESD・ユネスコスクール事業に関心を持って私の指導を希望してきた同じ1年成26年度L2）の院生に対しては、文部科学省の新しい指導要領にも明記されたESDの世界および日本の最新動向とともに、信島のユネスコスクールに指定された学校の教育実践をフィールドワークで修士論文に取り込む方法論について指導している。	学校教育における教育実践で現在関係の課題となっている「道徳教育の教科化」に関し、平成26年7月5日～8日に東京で開催された第8回日本道徳教育学会大会では その教科化を中心テーマとしたシンポジウムが企画された。「道徳教育推進を支える倫理を構築する」をテーマにしたシンポジウムでは、3名のシンポジストの一人に伴が登壇し、全国から参集した道徳教育関係者の前で活発な議論が展開された。この日本道徳教育学会には伴の指導下にいる4名の院生全員が参加し、道徳教育の研究を望んで指導下にいる院生のみならず、院生全員が大いに研究上の啓発と鼓舞を与えられたようである。11月1-4日には、教育実践フォーム研究をも兼ねて、本年日本で開催される世界ユネスコスクール世界大会に参加し、上記学会研究大会への参加を通じて院生の教育実践に対する関心や認識も高まった。	上述のように、道徳の教科化やESD・ユネスコスクールなど現代の日本および世界の教育動向を文部科学省当局と連携しながら研究を実施していく体在ではあるが、それらの内容を大学院の授業や院生の教育指導でも取意伝えていくよう努めたい。	平成26年3月、カナダのトロントで開催されていた国際比較教育学会（Comparative and International Education Society）での私の発表「The Conceptual Framework for Reconsidering the Relationship between Democracy and Moral-Citizenship Education in the U. S. and Europe」に関する研究を引き続き進めている。基盤が確保でき、展開に今年度もチェコ共和国やオーストリアでの海外出張などを通じ研究に欠いる進展が あった。	本年度から3年間、年度の切れ目も無く科学研究費の受領が決定した。上記The Conceptual Framework for Reconsidering the Relationship between Democracy and Moral-Citizenship Education in the U. S. and Europeに係る研究を引き続き推進 していく。基盤が確保でき、展開に今年度もチェコ共和国やオーストリアでの海外出張などを通じ研究に欠いる進展が あった。	こと数年、本学におけるESD・ユネスコスクール事業の代表者として徳島県下で 担任者の4つの小学校、徳島科学技術高校などのユネスコスクール加盟を実現さ せ、文部科学省および教育委員会からの本学への期待に応えて参た。平成26年度 も引き続き、教育委員会と連携しながら同スクールの支援および教職放加に貢献 していきたい。	本学におけるESD・ユネスコスクール事業の代表者として、政府関係者との連携につめるとともに、四国および高下の学校関係者へ講演や学生派遣等で啓発支援に係る活動を行った。	本学の終期関係終結校である北京師範大学の道徳分析研究センター長陸教授は、ここ3年間連続して協力しながら日中道徳教育研究集会を実施してきている。平成26年度も4回目の企画が 終り、北京師範大学と本学とが 年お交に実施していく。 5日中教育集会に向けての両大学の交流関係を実質的につなで保到を果たしてきているのである。	道徳教育に関しては日本道徳教育学会、ヨーロッパおよび世界のシンクィンズシップ教育関係研究者との研究連携協力を進めてきているとともに、文部科学省や各集ての講演や情報提供を通じて行政関係者にも敬ゃの協力を行ってきた。	
23	基礎・臨床系教育部	人間形成コース	山崎　勝之	この点については、従前より学校の教育実践に貢献することを重視して修士論文の研究とその提指導にあたった。特に、科学的思考をもった学校教育を推進する私の研究室では、既存の科学的視点の収集と精査から、不足の科学的視点の獲得に力をかけるとともに、基礎研究、そしてその基礎研究に関する学校での応用研究（主として卒入研究）を実施してきた。 今年度もこの方向を堅持・発展させたい。また、学校での入研究を実施する場合は、その教育効果を最新に科学的手法を用いて検証する姿勢を強調することができる知識とスキルを獲得させることを目指す。	本年度指導した修文は、いじめ予防教育の実践と効果評価、不登校支援、児童虐待に関する課題などから、いずれも教育実践上ニーズの高い研究テーマを扱った。この修士研究のなか、既職教育は授業実践力を高め、学校教員志望の学生（広島C合格）は不登校へのお応を実践的に学び、修士課程修了後（東京大学C合格）は児童虐待関連への自身の研究テーマの礎をつくることができた。 こうして、学長が定める重点目標は、十分に達成されたと判断される。	目標は、質高く、学校教育につなる研究に従事させること、各自の道路希望を実現するために適切な個別の指導・支援を行うこと、そして、大学院生活における健康と適応を維持させることになる。このためには、学生との密度の高い交流、そして学生間相互のサポート体制を確立することが必要になり、これらの点は活潔に運営したい。どうせ行年度は、コースの構成教員が1名減の状態となり、担当する学生数の増加が見込まれるため、より円滑システム構築と運用に邁進する。	「今年度は、概算要求事業（学校において子どもの健康と適応を守る予防教育推進・実践的応用研究事業」と科学研究費による研究「情動とインフリンリン感情への高次心的特性の統合化による予防教育プログラムの開発」が最終年度になるものの、成果をまとめ、外部に大きく発信する一年とならず、あわせて本年度につながる研究の発展を模策する必要ある。 概算要求事業は全国事業が本格的な展開期を迎え、この教育が日本の教育界に広く取り入れられかどうかの正念場となる重要な一年になる。	概算要求事業（文部科学省特別経費プロジェクト分）「学校において子どもの健康と適応を守る予防教育開発・実践的応用研究事業」と科学研究費による研究「情動とインフリンリン感情への高次心的特性の統合化による予防教育プログラムの開発」が最終年度になるものの、成果をまとめ、外部に大きく発信する一年とならず、あわせて本年度につながる研究の発展を模策する必要ある。 概算要求事業は全国事業が本格的な展開期を迎え、この教育が日本の教育界に広く取り入れられかどうかの正念場となる重要な一年になる。	引き続き、予防教育科学センター所長として、本学の概算要求事業で進める予防教育を本学の主要な担当として実践したい。多くのマスコミ（新聞、テレビ）に取り上げられながら、本学の予防教育の総括（は言葉）に上がりつつある。全国事業を規模に進めるとともに成功裏に終了することができた。予防教育事業ではその教育を全国へ展開させる基盤を構築することができ、科研研究では、インフリンリン感情の測定から時間的課題を達成することができ、平成27年度からの新規科研研究の提例につながった。	予防教育科学センターによる文部科学省特別経費（プロジェクト分）の事業の最終年度を成功裏に終えることができた。京都府、三重県、徳島県の教育委員会に修 ある事業を規国に進め、多数の非常に「おける モデル校での授業実施も円滑に進めることができ、来年度の展開へと準備が整った。	徳島県、京都府、三重県の教育委員会主導の事業を仕は決定され、来年度実施が予定されている。そのため、実際の学校との連携は各所属で改多く展開されることになる。その成果は、国内のみならず海外での学会でも公表され、国際交流の機会が多発国こなし、さらには、国際的な場で海外の研究者との交流が行うなど充実した国際交流も展開することができた。	附属学校との連携に関しては、年度目標に掲げた以上に活発した。教育支援講師・アドバイザー事業では、年間6回の目標に対し、10回を達成した。社会との連携にあたる活動として、大学院修了生の教育研究活動に対する助言・指導および活用研究、他大学の教員との研究協議やその成果発表を予定の回数を超えて実行した。他大学教員などの共同研究を継続・発展させ、その成果を社会に還元する。さらに、県立図書館協議会の年度会議への出席、勤きながら資格取得を目指している人たちの指導・支援を行う。	
24	基礎・臨床系教育部	人間形成コース	曽川　直凡	学生の関心と能力を把握・考慮しつつ、現代の学校の教育的ニーズを念頭に研究をすすめる方向に導きながら、彼らが質の高い課題研究を行うことができるよう、計画的に指導・支援していく。教員採用試験や臨床実習心理士等の資格取得についても積極的に支援する。必要に応じて個別面談や補習も行う。ゼミでの協同的活動として、学生の自発性・主体性を重視した授業実践力を高め、学校教員志望の学生（広島C合格）は不登校へのお応を実践的に学び、修士課程修了後（東京大学C合格）は児童虐待関連への自身の研究テーマの礎をつくることができた。 こうして、学長が定める重点目標は、十分に達成されたと判断される。	年度目標に掲げたとおり、計画的に指導・支援した。そのため、集団ゼミ指導に加え、必要に応じて個別面談や補習（統計学演習など）も実施した。各学生への指導を開始するにあたり、質の高い研究の条件と、修士論文の評価基準を明確に示す。すなわち、学術面での レベルの高さに加え、学校の教育実践への貢献度の高さを評価基準とすることを丁寧に説明し、十分な理解を求めたうえで指導を開始する。	学生の関心と能力の把握に努め、彼らが質の高い課題研究を行うことができるよう、計画的に指導・支援していく。教員採用試験や臨床実習心理士等の資格取得についても積極的に支援する。必要に応じて個別面談や補習も行う。ゼミでの協同的活動として、学生の自発性・主体性を重視した授業実践力を高め、学校教員志望の学生（広島C合格）は不登校へのお応を実践的に学び、修士課程修了後（東京大学C合格）は児童虐待関連への自身の研究テーマの礎をつくることができた。	年度目標に掲げたとおりの教育・学生生活支援を実行した。互いに支え合う中で生活が健全なものになるよう支援することを目的とし、ゼミでの協同的活動として行ったゼミ合宿の実施は本年度3回を数えた。その結果、1名の臨床発達心理士の資格取得に必要な臨床実習を終え、資格申請を行うはずが となっている。また、主体的教育実習において研究指導学生の評価授業のみならず、その前段階の授業も参観して助言・指導を行った。許年度修了生より採用試験合格の報告を受けたことも、成果の一つである。	日本の伝統文化（俳句、絵本、四国遍路など）に対する認識の深化と発達の過程に関する研究を中心に据え、人間の互恵に基づく認知機能とそれを基盤とするコミュニケーション機能（感情の認知・表出・制御を含む）について、実証的方法を用いて研究する。その成果を基盤として「知性と感性を結び、発達を導く教育」を構想し、実践する。前年度の研究成果を論説点に用高、それぞれ一つは上の心理学会において発表する。さらに、2本以上の学術論文の執筆と投稿を行う。	年度目標に掲げたとおりの研究を行い、年度目標に掲げたのを上回るペースで発表した。年度目標では基礎系・応用系、それぞれ一つ以上の心理学会において発表したが、計7学会で発表し、うち一つは単なる個人発表ではなく、シンポジウムの企画・開催である。また、徳島大学同窓の指導学生との連名発表も二つあるし、さらに、学術論文の執筆・投稿についても、年間2本という目標を達成した。	任期途中である委員としての職務をまっとうするとともに、新たに1つ以上の委員等にも就任する（修士課程教員養成力パキュラム研究開発委員会委員、徳島大学教育学部教育方法運営調査代表）予定。特に、大学院入学試験委員会委員として、入学試験実施業務などに入試広報活動の充実に関める。また、本学の教務、用課コースの教員、および就任した委員会のメンバーとして、各種会議に出席するとともに応分の役割を果たす。	年度目標に掲げたとおり、任期途中の委員として、また新たに就任した委員会の委員や講座代表者として、それぞれ職務を全うした（会議への出席、報告書の執筆を使命とし、新たに就任した委員会のうち1つでは、年度目標には掲げていなかった業務負担状実現化検討部会主査に就任し、その職務を全うした。各種会議にも、任期毎回出席した。	本学教育支援講師・アドバイザーに登録するとともに、各方面からの要請に応じ附属学校、公立学校等に出向いて指導・助言を行う（教頭・後輩各3回を目標とす る）。また、大学院修了生の教育研究活動に対する助言・指導および活用研究、他大学の教員との研究協議やその成果発表を予定の回数を超えて実行した。他大学教員などの共同研究を継続・発展させ、その成果を社会に還元する。さらに、県立図書館協議会委員としての職務を遂行する。心理学の専門家として、宮時制の看護学校の講師を務め、勤きながら資格取得を目指している人たちの指導・支援を行う。	附属学校との連携に関しては、年度目標に掲げた以上に活発した。教育支援講師・アドバイザー事業では、年間6回の目標に対し、10回を達成した。社会との連携にあたる活動として、大学院修了生の教育研究活動に対する助言・指導および活用研究、他大学の教員との研究協議やその成果発表を予定の回数を超えて実行した。他大学教員などの共同研究を継続・発展させ、その成果を社会に還元する。さらに、県立図書館協議会委員としての職務を遂行する。心理学の専門家として、宮時制の看護学校の講師を務め、勤きながら資格取得を目指している人たちの指導・支援を行う。 「阿波学」「四国遍路と地域文化」という、本学の特色あふ授業を学部および大学院で分担担当し、全学生あげた教員養成教育に取り組んでいる。	兵庫教育大学連合大学院博士課程の学生2名の主指導教員ならびに講師代表者を務めた。入試広報活動の一環として2つの大学を訪問し、大学院入試において当該大学からの発験生・合格者を得た。予防教育科学センターの教員を兼務して「阿波学」「四国遍路と地域文化」という、本学の特色あふ授業を学部および大学院で分担担当し、全学生あげた教員養成教育に取り組んでいる。	
25	基礎・臨床系教育部	人間形成コース	内田　啓恵子	修士論文の指導には携わらない職務のため、本テーマについて直接的にかかわることは難しいしかし、担当授業等を通じ、修士論文を構築する際の材料が提供出来るよう、心がけたいと考える。また、これまでも授業の受講学生や予防教育で関わる学生から、修士論文の内容に関する相談を受ける機会があった。そのような場合には、できる限り対応出来れば考える。	職務上修士論文に関する直接の指導へ携わることはなかったが、複数の学生より修士論文の内容について相談を受ける機会があり、対応を行った。また、3本の修士論文の副査を担当し、関係的な指導を行った。	昨年度と同様に、プログラム開発に携わるアルバイト学生に対しては、教材開発や実施へ積極的に参加を促し、将来の教育者を育成する経験を増やしたい。その際、教材の作成方法のみならず、学生自身が中学校時代にどのような授業を受けたかったのか思像させ、常に子ども目線に立ち教材の開発補助や作成に携わらせることで、積極性や創造性を育てることが出来れば考えている。また、学期、大学院の授業を通じ、学生がどのようなニーズを持っているのか探り、授業などに反映させたい。また、すべての支援を通じ、社会において必要となる礼儀作法等の指導を行いたい。	今年度も、プログラム開発に携わるアルバイト学生に対しては、教材開発や作成を通じて支援を行うことが出来た。学生にまかせる、学生同士で考え合せることを重視した指導を行うことが出来た。また、学生を通れ生徒の様子を観察することで、他職の小中学校の先生方と触れ合う機会を与え、将来の教育者を育成するための一助となる支援を行った。また、すべての支援を通じ、社会において必要となる礼儀作法等の指導を行った。	今年度は昨年度と同様に、予防教育の模索にかかわる基礎研究や実践成果について、国内外の学会において話題提供を行う予定である。海外の学会では予防教育に関するワークショップに参加し、11月の教育心理学会において、基礎研究に関するポスター発表を行う。自主シンポジウムでも指定討論者を担当した。また、3月の国際学会でもポスター発表を行った。	論文については、予防教育のプログラム内容について、本学研究紀要にまとめ、提出した。次度以下の紀要論文作成にも携わった。また、秋には科学研究費の申請を組んだ。学会発表については、10月の生徒指導学会に於いてワークショップを、11月の教育心理学会において、基礎研究に関するポスター発表を行う。自主シンポジウムでも指定討論者を担当した。また、3月の国際学会でもポスター発表を行った。	昨年度も、本学の第2期中期目標の中核の1つである概算要求事業に邁進し、現場における本学への評価向上のみから本学の運営に貢献する方向を探った。その結果、県内から多くの視察を頂き、本学の特色について多くの方に伝説えることが出来た。また、教育についても一定の科学的効果をあげることに成功した。 本年度は予防教育の実践を希望する県内外の小学校に対し、支援を行うので、本学の特色を伝え、さらなる大学の評価向上に寄与できればと考えている。	京都府の2地域それぞれより、小学校の先生方が来学され、本学において研修会をおこなった。本研修会は各先方の強い希望を受け実現したものであった。名古屋市から視察団にわたり県内での公開授業時に足を お運び頂いた。また、徳島県内においても月に1度教員主催の研修会が開催されたり、いずれの研修会や公開授業においても予防教育を通じ、本学への評価向上の点から本学の運営に寄与できたのではと考える。	本年度は、県内外複数の小学校の先生方と連携し、予防教育実施する予定であ る。県内の小学校においても、複数の関係に対して公開授業を実施し、多くの先生方にお越し頂く予定である。国際交流については、3月に開催予定の国際学会で発表を行う予定であり、海外の研究者と交流する予定である。	本年度は、三重県5校、岐阜県1校、愛知県1校において予防教育の公開授業を行った。また、徳島県、三重県、京都府では予防教育実施の事業が開始され、各所属教育委員会と連携しつつ、県内の小学校においても予防教育プログラム実施校との連携が開始され、時間の許す限り足を運んだ。また、京都府からも授業を参観して頂いたの依頼があり、足を運んだ。また2月には京都府、三重県において研修会を行った。3月の国際学会では予防教育プログラムの教育効果の発表を行い、多くの海外の研究者と交流した。	兵庫教育大学連合大学院博士課程の学生2名の主指導教員ならびに講師代表者を務めた。入試広報活動の一環として2つの大学を訪問し、大学院入試において当該大学からの発験生・合格者を得た。予防教育科学センターの教員を兼務して「阿波学」「四国遍路と地域文化」という、本学の特色あふ授業を学部および大学院で分担担当し、全学生あげた教員養成教育に取り組んでいる。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、専門職大学大学院等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みやご支援を通じて、教職大学院においては、学級経営等を学校教育の実践に具体的にどのように活かしていくか、あなたの指導や一般セミの工夫を示してください。	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
24	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	田中　淳一	1)まず、授業内容について、学校の教育実践教育として捉えておくべき本的な知識のみならず、教育現場で取りだされている問題や課題等を、本学の現職大学院生や博了生から聞きすることで、学校現場に関から内容の選択に注意する。そして、その課題などに根ざす背景や解決方法の知見等に関係した修士論文の設定を院生が相談のユで決定する。 2)次に、授業中における学生との対話を多くして、授業内容の理解度を把握しながら、修士論文の分析方法等について解説に指導する。 3)最後に、学習成績が、学校教育にいかに役立っているか検討する。	1)主として、本学の現職教了生より「現在おより近い将来の教育実践教師として働くそれぞれ多基本的な知識とは」について相談した結果、小　中学校および高等学校の教諭で授業の相違が感じられた。従って、修士の学生が希望するところ、より、同様テーマであっても修士論文の内容を考慮する必要があるように思えた。そこで、修士論文のテーマの選択は、院生と相談のよう決定を行った後に、授業内容等について十分に検討することにした。もっと多くの課題の意見を集約することが必要であるが、修士論文作成に当たって重要な事柄であることと捉えることができたことは少なからず価値あるものと考えられる。 2)授業中における学生との対話を多くすることにより、授業内容の理解を促すことを通して、修士論文の分析方法や結果の解釈について、修士の学生に時間な指導を行うようにしてきた。十分な効果が得られた面と十分ないと思われるように感じた。その原因を突き詰め、改善することで研鑽が得られると思われた。 3)研究結果を教育現場と結び付けて修士論文としてまとめるかについて検討し、教育実践についてに在立つ全体を通で実際に試行し、問題点等を抽出し改善することを大学院生に進めている。。	1)教員養成を希望する学部および大学院生に対して、学習意欲の維持や基礎知識の獲得等をめざした指導が効果的かについて検討を試みる。 2)学生の将来へ時期的な本知を図し、授業中における対論等を活用した指導に行よう に努める。 3)授業の終了時あるいはオフィスアワーに、分からないことについて積極的に質問をするように指導を行う。 4)学生からの相談に随時応じ、事攻の教員と連携し対応にあたる。	1)教員養成を希望する大学院生を持つ以外、学習意欲の維持や基礎知識の獲得等が効果的についての検証は付けなかったが、常時、一定以上の勉強時間の確保することが重要であることが、現職理了生からの意見で一致していることが明かた。そのための方策として、勉強時間のグラフ作成や解けなかった問題の地図などが有効ではないかとの相談に至った。 2)修士論文作成のみならず教員採用に役立つような対論等が活発になるように、授業中に質問時間を増やした。その結果、討論時間の変化はみられなかったが、学生からの質問数が多くなり、ある程度の達成感が得られた。 3)授業の終了時あるいはオフィスアワーにおからないことについて積極的に質問をするように指導を行った。結時以上の効果は認められなかった。特に、授業内容は理解度は低下しなかったが、学生からの相談に随時応じる体制ていたが、授業内容に関する質問以外の学生から相談はなかった。	1)必要より遠ざけた状態で「性スクロイドホルモン」による軟六行動の調節に関与する神経基盤の解析」の成果を更に発展させるための計画を立て、研究に取り組んだ。研究計画の一部分を用いて、研究は終了した。残った部分を良いで進めることと、学会発表し、論文としてまとめることが可能となったし、このことは、当初の予想を上回っており、大きな結果のつとが期待できる。 2)「グルタミン酸受容体機構のノルアドレナリン神経活動調節への関与」の成果を、神経科学関係の海外雑誌に投稿するための準備が整ったので投稿したことから、目的は達成されたと考えられる。現在、修正等の必要があがその対応を行った の、間もなく査読されると思われる。 3)従業員の研究助成へ教大学の先生と共同で出書に申請した が、資金の獲得はできなかった。これまでの研究内容とその業績が、分最用れもが、ずれていると考えられることから、今後の応募の参考にすることができたと収穫と言える。。	1)共同研究者と「性スクロイドホルモンによる軟六行動の調節」に関与する神経基盤の解析」の成果を更に発展させるための計画を立て、研究に取り組んだ。研究計画の一部分を用いて、研究は終了した。残った部分を良いで進めることと、学会発表し、論文としてまとめることが可能となったし、このことは、当初の予想を上回っており、大きな結果のつとが期待できる。 2)「グルタミン酸受容体機構のノルアドレナリン神経活動調節への関与」の成果を、神経科学関係の海外雑誌に投稿するための準備が整ったので投稿したことから、目的は達成されたと考えられる。現在、修正等の必要があがその対応を行った の、間もなく査読されると思われる。 3)従業員の研究助成へ教大学の先生と共同で出書に申請した が、資金の獲得はできなかった。これまでの研究内容とその業績が、分最用れもが、ずれていると考えられることから、今後の応募の参考にすることができたと収穫と言える。。	1)適合大学院学校教育臨床連合講座の議長および講座代表として、資格教員の推薦に勤める。 2)大学院教務委員会委員、安全管理委員会委員、臨床研究倫理審査委員会委員として、本学の運営に貢献する。 3)実験風実験等管理責任者としての任務を果たす。	1)適合大学院学校教育臨床連合講座の議長（代議員）および本学の講座代表者として、マル合教員1名、合教員2名の資格教員の審査に関係することができた。 また、講座の内容の検証、教員資格審査判定基準の改定、入学試験などの業務を遂行した。本講座の問題点等を指摘し、解決に向けて検討中である。 2)大学院教務委員会委員、安全管理委員会委員、臨床研究倫理審査委員会委員として、本学の運営に貢献した。 3)実験風実験等管理責任者　　同管理責任者および個人情報保護担当者として の任務を果たした。 4)東三期中協議　　中期計画策定プロジェクトチームの一員として、会議に参加した。	1)附属特別支援学校やその他の支援学校に見学に行き、意見交換等を行う。 2)公開講座を開催し、地域の方々と交流・連携をはかる。 3)教育支援講師・アドバイザーとして登録し、要請があれば現地において、支援（講演）を行う。 4)外国人留学生、教員研修留学生を受入れる。	1)附属特別支援学校学校へ見学に行き、意見交換等を行った。また、附属特別支援学校において、専門教育大学特別支援教育専攻連協合教会の代表者として、研究等の連絡連携を密にし、よりよい連携を図ってお互い、かゃりなくて言に進めた。 2)東三公開講座を開催し、地域の方々と交流・連携をはかった。大雨にもかかわらず、多くの方々に参加頂くことができ、有意義な講座との評価を得ることができた。 3)教育支援講師・アドバイザーとして登録を行った が、要請はなかった。 4)科学　技術者の教師実験講座の担当講師として、小　中学生を対象に脳波実験を行い、講座の目的遂行のために貢献できたと考えられる。	適合大学院学校教育臨床連合講座の議長（代議員）および本学の講座代表者として、有資格教員の増加のための広報や、申請用紙の作成指導を実施した。その結果、マル合教員1名、合教員2名の資格教員を得ることができた。
25	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	津田　芳見	学校の教育実践に貢献する修士論文の研究のためには、特別支援教育の対象となる児童生徒について、教育現場の課題を把握することが重要である。私は、その課題のなかで、医学的な内容または医学関連の分野において、研究を指導してきた。たとえば、発達障害に関して「医学的な診断の有無に関する依頼の意識」、「学習障害の学校現場における早期把握について」、「重症心身障害児のスヌーズレンにおける医療学的変化」などが、医学領域に関するテーマ化となっている。 1)医学関連の領域で特別支援教育に貢献的な記ザンスを実践できるような研究を指導したいと考える。 2)このような研究に関しては、関係機関への調整、関連機器の調整、必要に応じて、病理重度者への申請等を行った。 3)関職教員については、所属校との連携を密にとり、所属校の協力を得て、病理重度者への申請等が必要となるため、そのような現点から指導を進めたい。 3)現職の教師の場合、所属校との密な連携協力が必須であるため、所属校との連携を密にとるよう指導する。 4)フィールドなる学校や、施設と連携を密にとりたいと考えている。 5)修士論文の成果によって、学会投稿を考えるよう、指導する。	学校の教育実践に貢献する修士論文の研究のためには、特別支援教育の対象となる児童生徒について、教育現場の課題を把握することが重要である。私は、その課題のなかで、医学的な内容または医学関連の分野において、研究を指導してきた。たとえば、発達障害に関して「医学的な診断の有無に関する依頼の意識」、「学習障害の学校現場における早期把握について」、医学領域に関するテーマを主として進めた。 1)スクリーニング的手法により、学習障害に関して、重軽的なビデンスを実証できるような研究を指導した。 2)このような研究に関しては、関係機関への調整、関連機器の調整、必要に応じて、病理重度者への申請等を行った。 3)現職教員については、所属校との連携を密にとり、所属校の協力を得て、病理重度者への申請等が必要となるため、そのような現点から指導を進めたい。 4)フィールドなる学校や、施設と連携を密にとりたい。情報交換しつつ協力関係を構築し研究を進めた。 5)修士論文の成果によっては、学会投稿を行った。	1)学生の学生生活、進路、悩みなどの相談について、丁寧に相談に応じる。 2)本年生の担任として、進路、就職などについて相談に応じる。 3)心身健全センターと連携してが学生の健康問題を支援した。 4)連合大学院として、博士課程の学生の研究指導を行う。 4)連合大学院として、博士課程の学生の研究指導を行う。	1)学生の学生生活、進路、悩みなどの相談について、丁寧に相談に応じた。 2)本年生の担任として、進路、就職などについて相談に応じた。 3)心身健全センターと連携してが学生の健康問題を支援した。 4)連合大学院として、博士課程の学生の研究指導を行った。2名は連合を受験し、うち1名は合格した。	1)学内外の研究助成金に応募する。 2)研究テーマでもあり「発達障害」に関する研究を発展させ進めて、学会誌に投稿する。 3)発達障害・学習障害の「発達障害」に関する特異的発達障害に関する研究を発展させ進めて、学会誌に投稿する。 3)院生を指導し、学食への発表、論文発表を行う。 4)発達障害の原因、治療、虐待との関連、等に関して先行研究などから情報を入手する。	1)共同研究者として、科研費に応募した。 2)研究テーマでもあり「発達障害」に関する研究を発展させ進めて、学会誌に投稿した。 3)連合の研究生を指導し、学食への発表、論文発表を行った。 4)発達障害の原因・対応について、特に脳内重金属等の早期把握・早期介入について、院生を指導して、実践的研究を行った。	1)26年度は毎生学理委員会委員として、本学の運営に貢献する予定である。 2)心身健康センター(精神保健相談員)として、学生の健康相談にかかわり、本学の運営に貢献する。 3)連合大学院講座副代表として本学の運営に貢献する予定である。	1)26年度は毎生学理委員会委員として、本学の運営に貢献した。 2)心身健康センター(精神保健相談員)として、学生の健康相談にかかわり、本学の運営に貢献した。 3)連合大学院講座副代表として本学の運営に貢献した。	1)付属校との連携は、特別経費プロジェクトの継続事業として、大学特別支援教育尊攘から参加協力した。 また、演習をおこして、求めに応じ教育協力などが行う。 2)専門機関である信島県発達障害支援センター及び支援ゾーンとり主体を、研究等協力をしていく予定である。 3)また、「発達障害相談に関する実践講座」に参加し、信島県の実態について調査に協力致しました。 4)専門外とも、保健福祉の関連にて協力関係を築く予定である。 5)児童相談所と連携し、特別支援教育との関連の深い療育手帳などの業務とかかわることにより、地域社会に関係貢献する。	1)付属校との連携は、特別経費プロジェクトの継続事業として、大学特別支援教育尊攘から参加協力した。 また、演習をおこして、求めに応じ教育協力などが行う。 2)専門機関である信島県発達障害支援センター及び支援ゾーンとり主体を、研究等協力をしていく予定である。 3)また、「発達障害相談に関する実践講座」に参加し、信島県の実態について調査に協力致しました。 4)専門外とも、保健福祉の関連にて協力関係を築く予定である。 5)児童相談所と連携し、特別支援教育との関連の深い療育手帳などの業務とかかわることにより、地域社会に関係貢献する。	
26	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	大谷　博俊	修士論文作成にあたっては、1）研究に資する最新の知識の収集が欠かせない。また、特別支援教育の実践研究を行うことは容易にない。従来開発されに新しい機械等を用いれば、知的障害児や発達障害児の認知特性を詳しく探え、作動記憶や長期記憶の実態把握しやすくなるかもしれない。従って、対象児の記憶心理知の特性を正確にアセスメントする技能、アセスメント結果に基づいて個別指導計画を立案する技能、結果的に指導方針に則って教材を作成し、効果的な指導を行う技能を向上させる工夫を行いつつ、特別支援教育の現場の中で、障害のある児童の自立活動に教科の補充に関する事例研究が行えるように取り組みたい。	1)）については、指導の成果として、院生がCAN-BE以上のBISCO HOSTEL&を検索方法に熟達し、研究資料の集積ができた。このようには、ゼミナールにおいて、新規のゼミナールを立ち上げ、研究を行なう指導を行う予定である。 2）教育実践フォームが研究、並びに学校評議員を依頼された学校等への聞き取り活動に参加し、フィールドの開拓を行うことができ、院生にフィールドを紹介できる。 3）年間を通して、週毎のゼミナールを行った結果、論文作法などの技術面の共有・深化が認められた。	学生のニーズに応じるために、オリエンテーションを丁寧に行う。また、学生の特別支援教育に関する調査講演会を、指導を求めるために学生間の対論や情報提案などと調査の意見を取り入れ、講演を工夫する。学生のボランティア活動などの、様々活動への取り組みを通じるために、情報発信する。	学部の授業では、受講生との対話を重視し、演習毎に取り入れた。発表者の意見を、受講生全員で共有すると共に、特別支援教育の意点を報告することで、受講生の理解を深めた。また、相関指導を丹念に行い、受講生の事前の授業準備を把握し、その原因を発表させ、積極的に考えさせ行動を行った。その結果、受講生の授業準備が促進された。 大学院の授業では、演習のファシリテーションを担わせる。あるいは、特別支援教育の関係機関を訪問するなど、受講生の意欲を高めるように講義計画を工夫した。また、演習の内容をライブキャンパスのフォームを用いて発表させるように指導を計画した。その結果、受講生は活発な協議を促し、授業テーマの理解に深化が認められた。フォームに投稿された内容、そして、それらについて協議された内容は、学習理解として残るため、次年度の授業改善のための資料として活用する予定である。	特別支援教育、特に思春期の障害者の、社会への移行に視点をあて、知的障害特別支援学校における進路指導に関する研究を行う。 ・担当研究、発達障害幼児の保護者に対する支援のあり方を就学前指導教室に参加した保護者のアンケートから検討する。 ・担当大学病の教員等と協力し、教育の あり方等、学校で発表し、発達障害教育の指導法等について提言する。 3)この研究は、これまで教年間地道に実践を続けてきており、勉強検像の分析を進める。 2)これまで見えてきたアンケートに加え、アンケートを追加し、研究の視点を拡げ、配慮等に投稿する 3)障害者大会において発表を行う。	知的障害者のための進路指導に関する研究を「知的障害教育における進路指導に関する実践的課題の総究 ―特別支援学校の教育課題・課題の現状を・課題の進展過程からの分析―」にまとめ、博士論文として提出した（共著教育大学学術情報（ARCHIVE）HARTI）。また、同論文を さらに推敲し、「知的障害者のための進路指導論」として出版するために、平成27年度科学研究費補助事業の研究成果公開促進費の申請を行った。 知的障害者の進路指導に関する最新の知見をまとめた教育論文「知的障害者の移行支援に学ぶ」、「信濃教育」誌に掲載された。	基礎・臨床系教育部の構成員として部会議に出席するとともに、議事に対して積極的に発言した。大学院入試委員として、委員会で出題事に対して積極的に発言した。また、大学院ガイドブックの作成では、特別支援教育専攻に関する部分を朝新した。 実地教育専門部会委員として、議事に対して積極的に発言した。	基礎・臨床系教育部の構成員として部会議に出席するとともに、議事に対して積極的に発言した。大学院入試委員として、委員会で出題事に対して積極的に発言した。また、大学院ガイドブックの作成では、特別支援教育専攻に関する部分を朝新した。 実地教育専門部会委員として、議事に対して積極的に発言した。	特別支援教育実践に関わる研究・情報交換・課題の検討等の交流活動を活発に行いたい。	信島県教育委員会の依頼を受け、信島県子どもサポートネット協力し、保護の委員長を務め、子どもサポートを通じ、子どもの安全のために、見守り活動の推進の助言等を行った。技術検定では、ビルメンテナンス、接客、ICT、介護分野の調査と認定を行った。 10月と12月に信島県特別支援学校連絡指導担当者連絡協議会に出席し、連絡指導に関する教育の諸問題を検討し、協議に対する助言を行った。 附属特別支援学校から依頼を受け、11月に校内研修会の講師を務めた。 信島県から依頼を受けた発達障害支援体制整備計画委員会に3月と9月に出席した。 長野大学附属特別支援学校から依頼を受け、12月に研修会の講師を務めた。 児童発達支援センター に、継続的に助言を行った。年間を通して計4回の助言を行った。	教職大学院の専門科目「発達障害への理解と対応」の主担当になり、心理・教育・医学的な観点から発達障害への支援を行うことに役立つ授業を行った。その結果、授業評価では昨年と同様に高い評価を得ることができ、教職大学院での教育に貢献することができた。特に、カリキュラムマップ上の「生徒指導力（ファーストカ）」「授業実践力」「経験から学ぶ力」の向上に役だったと高く評価を得た。 また、学部の必修科目（教職実践演習）の主担当になり、特別支援教育専修の4年生に対して、特別支援学校や特別支援学校における職員体のロールプレー、特別支援学校における授業のロールプレーを行った。その結果、受講生の興味・関心・参加意欲を高めることができ、コアカリキュラムの成果を為すことに貢献できた。ロールプレーを通じて、コア科目や実習等で培ってきた多くの経験を有効な機会を提供したことにより、受講生の有用実践力の向上に役だった。 さらに、教育委員会が主催する研修会、教育相談支援会が主催する研修会、及び、教員免許状更新講習に参画して、本学と地元の教育界との連携を図ってきたことが、各種の事例紹介や発表・教育相談会に参画することによって、自身の研究の成果を、特別ニーズを有する児童の指導を担当する教師や保護者に還元することができた。 上述の諸点で、本学への総合的な貢献を行うことができたと考える。
29	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	井上　とも子	目標 学校の教育実践に貢献できる修士論文となるよう、指導において積極的に取組、工夫をする。 具体的手だて ①特別支援教育コーディネーター養成分野は従来より、課題研究及び修士論文の題材は、学校現場におけるコーディネーターや特別支援教育推進に係る問題点取りよけ、学校現場に直接役立つ題材を選択するよう指導してきた。この観点に照らせるメリー原置き、学校内の特別支援教育に関する題材を選択させるため、県内からの現職教員に関して、研究のフィールドを学校におけるいい場合は、国・県単位の特別支援教育の課題を整理すべ、教育者の課題に関って役立つ内容を選択させる。 2)研究デザインにおいて、学校現場に赴き、校内の支援を重ずるとともを意識支援にかり、校内教員各に関係したけするかをでテーマを取りまとめる方法を中心とすべ。C)D)・第に連る課題に対しては現象のテー、現在、特別支援教育のビックスである、支援学校のセンターの機能やインクルーシブ教育に視点に立って、進めることができていく。 指導教員としての取り組みと工夫については、院生の様々なテーマや進め方について思いや希望を充分に聞き取り、思いが強くに反映するよう、ゼミに時間をかけ、時間間立の意見の交換、文献の読み取り、データの取り方や分析の仕方について丁寧な解説に心がけた。結果については個別的な状況を踏まえ開き、十分な指導時間を確保した。	これまで同様に、院生の研究希望をよく聞き取り、院生の考え方や計に尊重する中でテーマを決めさせ、主体性を重んじることができた。コーディネーター養成分野の院生では、学校現場における「コーディネーターや特別支援教育推進に係る課題」を取りよけ、学校現場に直接役立つ題材を選択するよう指導してきた。この観点に照らせるメリー原置き、学校内の特別支援教育に関する題材を選択させるため、県内からの現職教員に関して、研究のフィールドを学校におけるいい場合は、国・県単位の特別支援教育の課題を整理すべ、教育者の課題に関って役立つ内容を選択させる。 2)次に、授業中における学生との対話を多くして、授業内容の理解度を把握しながら、修士論文の分析方法等について解説に指導する。 3)最後に、学習成績が、学校教育にいかに役立っているか検討する。	1)教員養成を希望する学部および大学院生に対して、学習意欲の維持や基礎知識の獲得等をめざした指導が効果的かについて検討を試みる。 2)学生の将来へ時期的な本知を図し、授業中における対論等を活用した指導に行よう に努める。 3)授業の終了時あるいはオフィスアワーに、分からないことについて積極的に質問をするように指導を行う。 4)学生からの相談に随時応じ、事攻の教員と連携し対応にあたる。	1)必要より遠ざけた状態で「性スクロイドホルモンによる軟六行動の調節」に関与する神経基盤の解析」の成果を更に発展させるための計画を立て、研究に取り組んだ。研究計画の一部分を用いて、研究は終了した。残った部分を良いで進めることと、学会発表し、論文としてまとめることが可能となったし、このことは、当初の予想を上回っており、大きな結果のつとが期待できる。 2)「グルタミン酸受容体機構のノルアドレナリン神経活動調節への関与」の成果を、神経科学関係の海外雑誌に投稿するための準備が整ったので投稿したことから、目的は達成されたと考えられる。現在、修正等の必要があがその対応を行った の、間もなく査読されると思われる。 3)従業員の研究助成へ教大学の先生と共同で出書に申請した が、資金の獲得はできなかった。これまでの研究内容とその業績が、分最用れもが、ずれていると考えられることから、今後の応募の参考にすることができたと収穫と言える。。	1)この研究は、これまで教年間地道に実践を続けてきており、勉強検像の分析をすることとった。 2)これまでのデータに重ねてアンケートデータを追加しており、研究の視点を拡げた。 3)年度は、論学会大会において発表を行う事ができなかった。 4)今後の研究に資する活動は継続することができた。特に県内一地域に「発達障害幼児の保護者支援プログラム」が発展継続のメどなっていて、就学前指導の研究を進めることができたと考えている。	年度目標 ・事攻の代表として事攻内を取りまとめながら、様々な事攻業務の滞りなく進行に努め、学生の指導・支援に支障を及ぼさないように、また、大学の一組織として責任が機能するよう努める。 ・県内の市町村長への実内配付。ならびに、県内外の講演講師の招聘に応じ、本学や教育の意味を案内するなど、特別支援教育コーディネーター養成分野のみなら ず、教育内の全体を意識し、大学院及び、応募者達本の周知を図る。 ・「地域に根ざす教育支援人材の育成プログラム開発と現実認証システムの実践的共同開発」のプロジェクトの法人化に伴い、その活動参画を継続的に行った。 ・大学が進しまた教員採用試験合格率の保持策に協力した。長期展望から教員採用試験合格者の指導を本事攻院生のみならず他コースの院生にも行い、また、地域、学校支援として行っている教育の学校からの臨時採用教員募集に、進んで本事攻生、修了生を斡旋するなど、協力した。 ・他事攻、他コースから求められた、学食参画や授業担当など、事務的な申し出にも必ず自ら率先して応じるなど、他事攻他コースとの連携を図るなど努力した。	年度目標 ・事攻の代表として事攻内を取りまとめながら、様々な事攻業務の滞りなく進行に努め、学生の指導・支援に支障を及ぼさないように、また、大学の一組織として責任が機能するよう努める。 ・県内の市町村長への実内配付。ならびに、県内外の講演講師の招聘に応じ、本学や教育の意味を案内するなど、特別支援教育コーディネーター養成分野のみなら ず、教育内の全体を意識し、大学院及び、応募者達本の周知を図る。 ・「地域に根ざす教育支援人材の育成プログラム開発と現実認証システムの実践的共同開発」のプロジェクトの法人化に伴い、その活動参画を継続的に行った。 ・大学が進しまた教員採用試験合格率の保持策に協力した。長期展望から教員採用試験合格者の指導を本事攻院生のみならず他コースの院生にも行い、また、地域、学校支援として行っている教育の学校からの臨時採用教員募集に、進んで本事攻生、修了生を斡旋するなど、協力した。 ・他事攻、他コースから求められた、学食参画や授業担当など、事務的な申し出にも必ず自ら率先して応じるなど、他事攻他コースとの連携を図るなど努力した。	1)附属特別支援学校内の発達障害支援センターと連携を取り合い、新たに取り組もうとしている「附属学校間連携」及び、地域における附属特別支援学校のセンター的機能の発展、および、校内の教員資質向上に関する研究に参画し、計画段階から助言・支援を進めた。 2)教育実習、教育実習フィールド研究の実践を通じ、附属特別支援学校の管理職、教員と連携を深め、これらの機会を活用して、研究等との連絡連携を密にし、よりよい連携を図ってお互い、かゃりなくて言に進めた。 3)特別支援教育コーディネーター実地教育を附属特別支援学校の地域連携室で行い、信島県教育委員会の協力を得て、所内義務研修教育委員や幼稚園の特別支援学級教員の見学会を実施した。その度毎に、校内の教員資質向上に関する研究に参画し、計画段階から助言・支援する。 4)義務教育委員会（信島県公長事務）との連携として特別支援教育推進事業の専門家チームの会議を継続して受け、各県の事業における教育相談や学校支援に携わり、大学人としての地域貢献に関して、教多くの教員研修会講師依頼を受け、努めた。 5)信島市内の通級指導教室担当教諭を中心に毎月に実施している勉強会を、対象児童保護者の見学会を実施し、その資質向上を図るために、附属特別支援学校コーディネーターにも勉強会を開放し、修了生のフローアップ化に行った。 6)信島市千曲で支援器の意調を受け、国の求めが「教育事業の現事」向上のため、国に参画し、協議、意調に積極的に参加した。2月末迄に主とされて国に提出された。 7)信島県立聴覚支援学校の学校評議員を務めた。	
30	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	島田　昌仁	心理学にはまるこの専門領域での理論的な研究が進められているが、修士論文の指導に当たっては、記憶・認知領域の理論に依拠しながらも、教育実践に資する研究を行うことは容易にない。従来開発された新しい心理検査を用いれば、知的障害児や発達障害児の認知特性を詳しく探え、作動記憶や長期記憶の実態把握しやすくなるかもしれない。従って、対象児の記憶心理知の特性を正確にアセスメントする技能、アセスメント結果に基づいて個別指導計画を立案する技能、結果的に指導方針に則って教材を作成し、効果的な指導を行う技能を向上させる工夫を行いつつ、特別支援教育の現場の中で、障害のある児童の自立活動に教科の補充に関する事例研究が行えるように取り組みたい。	①　授業においては、心理学記憶・認知の理論に依拠しながらも、教育実践に資する応用研究を行うことの重要性を強調した。具体的には、「社年開発及び応用研究の実践」、「障害児・発達障害児児童の記憶・認知の特性をアセスメントする方法」アセスメントの結果を指導に活かしてゆく方法」等について話した。 ②　授業中に実習や演習を多く取り入れ、ゼミ中に事例研究の論文を数多く講読したことにより、受講生のアセスメントを行う技能」アセスメント結果に基づいて個別指導計画を立案する技能」基本的な指導方針に則って教材作成と指導を行う技能」等を向上させることができた。 ③　障害のある児童の自立活動と教科の補充に関する指導について、体験的に学べる機会を設けることができた。	①　授業とゼミナールを通じて、知的障害児や発達障害児の心理特性について調査するとともに、WISC-IV・KABC-Ⅱ等の新しく標準化された心理検査の実習を重点的に行って、児童生徒の認知特性や学習の課題を把握するためのアセスメント法について理解を深める。さらに、アセスメント結果に基づいて個別の指導計画を立案し、特別支援教育の現場で事例研究を実施し、卒論・修論の作成につなげやく。 ②　「教職実践演習」の主担当になり、特別支援教育教職の学生向けの授業計画を立案して、本間を通じ授業を行う。当事攻の教員全員で指導に当たることを原則とし、授業実施のコア科目・主免教育実習・特別支援教育実習を結び直様した。多くの経験を、有機的に結合することを目指す。学生の教員としての資質向上に役立つユニークなカリキュラムにしたい。	1）前期の授業では、知的障害児や発達障害児の心理特性、WISC-IV・KABC-Ⅱ・DN-CAS・LDI-Rや等の新しく標準化された心理検査の内容について詳述した。後半の授業では、WISC-IV及びKABC-Ⅱの実施法の実習を行った。その一連の心理検査のアセスメントの過程をシュミレーション的に体験する演習を行った。受講生の興味・関心・参加意欲は良好であった。 2）ゼミナールにおいては、「発達障害の理解」のテキストを用いて、「教育的アセスメントの過程をシュミレーション的に体験する演習を行った。受講生の興味・関心・参加意欲は良好であった。 3）「教職実践演習」の主担当になり、特別支援教育教職の4年生に通年（1単位）の授業を行った。初めにコア科目・主免教育実習・特別支援教育実習を結び直様した。前期には、特別支援教育教職の学生向けの授業を行った。後期には、特別支援教育実習を結び直様した。 4）前期は、特別支援教育実習のロールプレーを行った。後期には、特別支援教育実習のロールプレーを行った。受講生は、授業の興味・関心・参加意欲は良好であった。	特別支援教育、特に思春期の障害者の、社会への移行に視点をあて、知的障害特別支援学校における進路指導に関する研究を行う。 ・担当研究、発達障害幼児の保護者に対する支援のあり方を就学前指導教室に参加した保護者のアンケートから検討する。 ・担当大学病の教員等と協力し、教育の あり方等、学校で発表し、発達障害教育の指導法等について提言する。 3)この研究は、これまで教年間地道に実践を続けてきており、勉強検像の分析を進める。 2)これまで見えてきたアンケートに加え、アンケートを追加し、研究の視点を拡げ、配慮等に投稿する 3)障害者大会において発表を行う。	①　学内における母校員会の委員として、本学の運営に参画する。 ②　教職大学院の特別支援教育関係の授業の主担当になり、教職大学院の運営に協力する。教職大学院の現職教員向けの授業計画を立案して、年毎の授業を行う。教職大学院の特別支援教育関係の授業の主担当になり、学生の授業計画にかかわり、本学の運営に貢献する。 ③　教職大学院の専門科目の主担当になり、全体的な授業計画を立案するとも に、心理分野の授業を行った。受講生による授業評価では、生徒指導カウンセリングの向上に関して高く評価を得た。 ④　大学院のフィールド研究において、特別支援学の専門資格の取得を目指す院生の指導を行い、協力校内で教科の補充と自立活動に関する支援を実地体験できるようにした。	①　学内における母校員会の委員として、本学の運営に参画する。 ②　教職大学院の特別支援教育関係の授業の主担当になり、教職大学院の運営に協力する。教職大学院の現職教員向けの授業計画を立案して、年毎の授業を行う。教職大学院の特別支援教育関係の授業の主担当になり、学生の授業計画にかかわり、本学の運営に貢献する。 ③　教職大学院の専門科目の主担当になり、全体的な授業計画を立案するとも に、心理分野の授業を行った。受講生による授業評価では、生徒指導カウンセリングの向上に関して高く評価を得た。 ④　大学院のフィールド研究において、特別支援学の専門資格の取得を目指す院生の指導を行い、協力校内で教科の補充と自立活動に関する支援を実地体験できるようにした。	①　小中学校・特別支援学校・教育委員会・民間認定協会等が主催する研修会に協力し、知的障害や発達障害の基礎・概念と、効果的な支援のあり方について講習を行い、教師や保護者に対する理解を図る。 ②　小中学校・特別支援学校・教育委員会・民間認定協会等が主催する事例研討会に協力し、知的障害や発達障害の情勢や発達障害児のスクーリング法について講習した。 ③　教育委員会が主催する研修会に協力し、専門資格の取得・更新を目指す教員に、海外における特別支援教育の情勢や発達障害児のスクーリング法について講習した。 ④　教員免許状更新講習の必修領域の講師として協力し、免許の更新を目指す教員に、特別支援教育の動向について講習した。 ⑤　教育委員会が主催する事例研討会に協力し、知的障害児や発達障害児の通級指導の事例について検討し、通級指導担当教員へのアドバイスを行った。 ⑥　教育委員会が主催する研修会・教育相談会に協力し、発達障害児への対応のしかたについての相談を行い、保護者へのアドバイスを行った。	①　教育委員会が主催する研修会に協力し、学校教育指導補助員（スクールアシスタント）に、知的障害児や発達障害児とのふれ合えてやさかを講習した。 ②　教職認定協会が主催する研修会に協力し、専門教員各時を目指す教員に、知的障害児や発達障害児に対するアセスメント法について講習した。 ③　教職認定協会の地方支部会の研修会に協力し、専門資格の取得・更新を目指す教員に、海外における特別支援教育の情勢や発達障害児のスクーリング法について講習した。 ④　教員免許状更新講習の必修領域の講師として協力し、免許の更新を目指す教員に、特別支援教育の動向について講習した。 ⑤　教育委員会が主催する事例研討会に協力し、知的障害児や発達障害児の通級指導の事例について検討し、通級指導担当教員へのアドバイスを行った。 ⑥　教育委員会が主催する研修会・教育相談会に協力し、発達障害児への対応のしかたについての相談を行い、保護者へのアドバイスを行った。	教職大学院の専門科目「発達障害への理解と対応」の主担当になり、心理・教育・医学的な観点から発達障害への支援を行うことに役立つ授業を行った。その結果、授業評価では昨年と同様に高い評価を得ることができ、教職大学院での教育に貢献することができた。特に、カリキュラムマップ上の「生徒指導力（ファーストカ）「授業実践力」「経験から学ぶ力」の向上に役だったと高く評価を得た。 また、学部の必修科目（教職実践演習）の主担当になり、特別支援教育専修の4年生に対して、特別支援学校や特別支援学校における職員体のロールプレー、特別支援学校における授業のロールプレーを行った。その結果、受講生の興味・関心・参加意欲を高めることができ、コアカリキュラムの成果を為すことに貢献できた。ロールプレーを通じて、コア科目や実習等で培ってきた多くの経験を有効な機会を提供したことにより、受講生の有用実践力の向上に役だった。 さらに、教育委員会が主催する研修会、教育相談支援会が主催する研修会、及び、教員免許状更新講習に参画して、本学と地元の教育界との連携を図ってきたことが、各種の事例紹介や発表・教育相談会に参画することによって、自身の研究の成果を、特別ニーズを有する児童の指導を担当する教師や保護者に還元することができた。 上述の諸点で、本学への総合的な貢献を行うことができたと考える。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	(Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1. 目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。　教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	(Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2. 点検・評価	(Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1. 目標・計画	(Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2. 点検・評価	(Ⅱ－2)研究 1. 目標・計画	(Ⅱ－2)研究 2. 点検・評価	(Ⅱ－3)大学運営 1. 目標・計画	(Ⅱ－3)大学運営 2. 点検・評価	(Ⅱ－4)附属学校・社会との連携、国際交流等 1. 目標・計画	(Ⅱ－4)附属学校・社会との連携、国際交流等 2. 点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
31	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	高原　光恵	教育実践と説明力は不可分である。倫理的に十分考慮されたテーマ及び研究方法であるか、院生自身が自分の言葉で説明できるようになることを目指す。 具体的には、子どもへの配慮、保護者への配慮、関係者への配慮、それらを踏まえた上で今なぜこの研究実施が必要なのかについてチェックを重ね、他者へ説明する力を養う。根拠となる資料収集についての指導や解釈の妥当性、また、予想される効果や批判点についての議論も重ねる。承諾書の作成や研究計画の立て方など基本事項はあるが、特に研究倫理の遵守を意識して指導する。	最終学年の院生は、配慮事項について充分検討した上で本研究の実施に進んだ。研究実施者の日頃の誠実な態度、わかりやすく説明する努力を重ねている姿から、進んで調査協力者となってくださる方も現れた。今回執筆を終えた院生たちは、修了後には倫理面の重要性について十分自覚した上で教育に携わってくれることと確信する。 初年度の院生については、ゼミでの指導や専攻内での指導、ゼミ生どうしの交流などを通して基礎的な配慮点を学び、他者へ説明する力を養っている段階である。	教育・学生生活上の相談があった場合、または気づいた場合、必要に応じて関連する他の教職員と情報共有し、対処するよう努める。	必要に応じて本人および他の教職員と情報共有や協議を行い、相談に関連するさまざまな対応を行った。	特別支援または心理に関するテーマについて発表1件、論文執筆2件、行う。	重症心身障害者の睡眠覚醒リズムの把握方法の妥当性に関する研究発表を1件行った。 触覚スケッチに関する分析結果について本学紀要にまとめた。 リラクセーション活動中の皮膚温について論文執筆中である。 質問紙の因子構造について論文執筆中である。	各種会議に出席し（代理含む）、大学運営に参画する。	各種会議に出席し（代理含む）、大学運営に参画した。 他の専攻教職員とも協力し、さまざまな活動に参画した。	附属特別支援学校との連携（実習ほか）を継続する。 教育支援講師アドバイザーに登録する。	附属特別支援学校との連携（実習、事前指導、公開授業等）を継続した。 教育支援講師アドバイザー制度へ登録し、派遣要請に複数回応えた。 他の教育機関や地域からの要請に応え、特別支援教育の専門家または大学関係者として活動した。 学術団体の運営協力、学術誌の編集発行作業等についても携わった。	教員養成の重要事項、特に特別支援教育実習に関して、特別支援教育専攻教員の一員として全学からの受講希望者に対応した。専修の学生については1年次より特別支援学校での参観含む演習の機会があり、主体的に経験を積む場や指導を受ける機会を経ての本実習参加となるが、他コースからの受講生の場合、必要である副免実習の代わりに本実習を受講することが可能なため、事前の経験の幅が大きい。しかしながら、県立学校の先生方はじめ、附属の先生方、本学の教職員の協力・連携のもと実習および事前事後指導を実施でき、各受講生への評価が得られたこと、そして今後の検討課題はありつつ、大きな改善すべき事項が生じることなく実施完了できたことは、本学への貢献事項と考える。
32	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	高橋　眞琴	実務経験（常勤としての教諭）がある研究家教員として、修士論文の指導を行っていきたい。所属学会の研究方法論に係るプロジェクト研究会においても、国立大学の教育学部、教育系大学の研究者より、「実践現場においては、研究者が提示する研究方法が実践者にも互換性があり、解釈可能でインパクトがある必要がある」と示唆されており、今後も当該プロジェクト研究会の参加を通じて情報収集を行っていきたい。従前の教育委員会委嘱研究員の経験においても、「学校教育に貢献する内容、実現可能で有用な内容」との要請があり、現職教員とのグループ研究において、学校教育現場で活用可能なチエックリストや活動プログラムの研究を行い、教育センターの公開研究発表会での発表や研究紀要の執筆を通して、研究内容を広く教育関係者や地域住民に公開してきた。また、公立の特別支援学校の教育現場においても、研究推進担当として、学校全体のテーマ研究を教職員全体で推進してきた経験がある。担当する大学院生の修士論文については、それぞれの研究関心も特別支援教育における今後の課題と密接な関係があるものとなっているため、大学院生が学校教育現場で職務に就いた際にも、学校関係者の理解・了解が得られやすく、学校全体で取り組みやすい研究方法、内容を助言していきたい。取り組みや工夫については以下の通りである。 ・長期履修学生に対しては、実践現場と研究を融合するイメージを持てるように促すため、助言要請があった現職学校教員が行う研究会に承諾を得た上で、同席させ、現場で実現可能で有用な研究が行えるように支援していく。 ・学校教育の実践に関連する研究を遂行していくための実際的手法について助言し、研究会や学会での共同研究発表を支援していく。 ・実践経験も有し、研究関心・意欲が高い担当大学院生とは、共同研究を行っている国立の研究大学等の国際シンポジウムや研究会、アクションリサーチに共に参画することで、他大学の学生や研究者との意見交換を図り、よりグローバルな視点で研究を行っていけるように支援していく。	・7名の大学院生（うち長期履修生6名）及び専攻の窓口として、長期履修生2名の学生を担当したが、特に、長期履修学生に対しては、特別支援教育が初学のケースや自身の実践フィールドを持っていないケースも多いため、実践現場と研究を融合するイメージを持てるように促すため、助言要請があった現職学校教員が行う研究会に承諾を得た上で、同席できるように支援した。また、連携している研究フィールドの実践現場へ協力依頼を行い、実際のフィールドでの演習活動等に参画できるように支援した。 ・学校教育の実践に関連する研究を遂行していくための質的データの処理方法など実際的手法について助言を行った。2014年9月には、担当する長期履修3年次生1名が日本特殊教育学会で研究成果について発表を行い、アジア地域の大学教員や国内の他大学の教員等も複数発表に来訪した。 2014年11月には、担当する長期履修3年次生1名と日本LD学会で研究成果を発表し、関東方面の実践者、研究者、兵庫教育大学の大学院生が発表に来訪した。2015年3月には、担当する長期履修2年次生と日本発達心理学会で研究発表を行い、大学教員や心理職が発表に来訪した。 ・研究関心・意欲が高い担当大学院生とは、共同研究を行っている国立の研究大学等の国際シンポジウムや研究会、アクションリサーチに共に参画した。共同研究先の国立大学での研究報告や共同研究先の大学院生と協働したアクションリサーチも行い、相互に意見交換を行い、学習を深めた。 ・今後の教育実践の参考になるように、担当する長期履修生2名が兵庫県内の特別支援学校で、国際理解教育のワークショップを実施するに当たって、当該特別支援学校の学校管理職や国際理解教育担当教員に協力依頼し、同伴の上、支援した。 上記の内容については、担当大学院生の修士論文の内容とも密接な関連があるものとなっている。	・学部2年生のクラス担任として、1年次に引き続き、定期的に情報交換会を開催し、学業や生活上の現況を出し合うことで、担当教員や学生同士が相互に相談・支援できる体制がとれるように努める。 ・専攻の長期履修生1年生が2年生に進級するが、引き続き、研究上の助言・指導を行っていく。長期履修センターからの助言内容を踏まえ、履修及び研究上の助言に努める。 ・研究室に所属する複数の大学院生の海外研修・研究の志向が高いため、相談や助言に努める。 ・本学の学部学生、長期履修生、大学院生の学修歴やリテラシーに応じた授業が展開できるように、所属学会のワークショップへの参加等を通じて情報収集を行っていく。	・学部2年生のクラス担任として、定期的に情報交換会を開催し、学業や生活上の現況を出し合った。2年次の合宿研修においても、将来の教職を見据え、面接時の自己PRへの助言を行った。また、次年度以降のゼミ所属に向けて、情報収集の方法やゼミ訪問のマナー等も指導し、円滑なゼミ所属につながるように支援した。 ・長期履修2年次の学生については、履修科目が多く、多忙な学生生活を送っているが、可能な限り、本人の希望に沿った形での履修及び研究上の助言に努めた。量的データ、質的データの処理方法など研究の実際的手法について助言を行い、できるだけ自律的に研究ができるように支援した。 ・研究室に所属する複数の大学院生の海外研修・研究の志向が高い。2014年5月には、共同研究先の国立大学の支援（大学訪問、視察先の確保）も得て、長期履修3年次生が開発途上国の障害者リーダーと交流するのを支援した。本学の学生とも意見交換を行った。 ・担当する長期履修2年次生が内閣府の「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」の派遣に際し、県内での一次選考、国内の最終選考も通過し、2014年10月に英国の障害者施策にかかわる省庁の視察に派遣された。派遣に際しての相談に応じ、学内での発表の機会も確保できるよう支援した。 ・本学の学部学生、長期履修生、大学院生の学修歴やリテラシーに応じた授業が展開できるように、所属学会のワークショップや研究会に参加し、情報収集を行うようにした。 ・博士課程進学を希望する本学の他コースの大学院生1名や他大学の大学院生2名が助言を求めてきたため、相談に応じた。本学の他コースの大学院生1名は、博士課程に合格したと連絡を受けた。また、当該学生の修士論文の査読者としても協力した。	・共同研究を行っている国立大学の研究者と、インクルーシブな実践の場におけるインフォーマルラーニングに関する研究を進める。 ・障害のある人を含む地域での活動プログラムに関する研究を継続して行う。 ・特別支援教育に従事する教員（障害のある教員を含む）のライフヒストリーに関する共同研究を進める。 ・共同研究を行っている関西地区の国公立大学関係の研究者と研究費等の獲得に向けて、研究会等で検討を行う。 ・研究室に所属する複数の大学院生による海外研修・研究内容（海外における障害者支援、インクルーシブ教育実践等）を共同研究資料としてまとめ、情報発信を行っていく。	・共同研究を行っている国立大学の研究者と、インクルーシブな実践の場におけるインフォーマルラーニングに関する研究を進め、論文が2014年9月に公刊された。 ・障害のある人を含む地域での活動プログラムに関する研究を継続して進めている。東日本大震災で被災した障害のある児童の支援活動等にも研究成果を活用した。「鳴門市生涯学習まちづくり出前講座」の一つとしても市の依頼で、登録された。 ・特別支援教育に従事する教員（障害のある教員を含む）のライフヒストリーに関する共同研究を担当する長期履修3年次生と進め、修士論文にまとめた。また、共同研究者と進めた研究は、論文として公刊予定である。 ・関西地区の国公立大学関係の研究者を中心とした研究グループで研究費等の獲得に向けて、研究会等で検討を行った。研究グループの共同研究者が所属する大学に提出した申請書が採択され、次年度以降、分担研究を行う予定である。 ・研究室に所属する複数の大学院生による海外研修については、上記Ⅰ－1の項目に示すように、担当する長期履修生が日本特殊教育学会で発表を行い、修士論文にまとめると共に、研究内容の一部を学会誌にも投稿中である。また、担当長期履修生による内閣府研修プログラムでの研修成果も発表の機会を設け、学内の学生に還元できるように支援した。	・学校教育学部教務委員として、大学教育の質の向上や学部学生の円滑な履修に寄与できるよう努める。 ・e-Learningコンテンツのための新設科目専門部会委員、特別支援教育専攻・専修のe-Learningコンテンツ制作担当者として、情報収集及び内容の検討、学校教育現場関係者への協力依頼を行う。 ・修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会の特別支援教育専攻での担当として、研究会等に参加し、可能な限り課題に関する検討に参画する。	・学校教育学部教務委員として、学校教育学部教務委員会に参加し、大学教育の質の向上や学部学生の円滑な履修に寄与できるよう努めた。 ・e-Learningコンテンツのための新設科目専門部会委員、特別支援教育専攻・専修のe-Learningコンテンツ制作担当者として、情報収集及び内容の検討を行い、特別支援学校（所管教育委員会へは、特別支援学校より確認済）や放課後児童デイサービスセンター（特別支援学校の関係諸機関）へのコンテンツ収録の内諾を得て、四国5大学連携e-learningコンテンツ分室と協働してコンテンツの収録が2014年9月、2015年3月に実現した。また、コンテンツ内容についても、四国5大学連携e-learningコンテンツ分室と連絡調整を行いながら検討を加えている。 ・修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会の特別支援教育専攻での担当として、会議に参画した上で、意見交換を行い、報告書のうち、専攻が担当する箇所について、専攻教員間での情報共有や協議、執筆を進めた。勉強会、研究会、シンポジウムにも可能な限り参画した。	・附属特別支援学校の教育実習に係る指導や研究発表会等に赴き、連携を図る。 ・教育支援アドバイザー制度に基づく講師依頼があった際には、本務に支障がない限り、要請に応じる。 ・公立学校等の研修講師の依頼があった際にも、本務に支障がない限り、要請に応じる。	・附属特別支援学校、附属小学校の協力を得て、「交流及び共同学習」に関連する調査を担当する長期履修生と実施した。附属特別支援学校での研究発表会にも参加し連携を図るように心がけた。 ・教育支援アドバイザー制度に基づく講師依頼は、1件あり、助言に赴いた。 ・障害のある人を含む地域での活動プログラムに関する研究を継続して進め、「鳴門市生涯学習まちづくり出前講座」の一つとしても市の依頼で、登録された。 ・東日本大震災で被災した特別な支援を要する児童・生徒の支援活動を担当する大学院生と継続して進め、担当大学院生が現地での造形のワークショップや音楽プログラムを実施するのを支援した。 ・公立学校等の研修講師の依頼があった際にも、本務に支障がない限り、要請に応じ、徳島県高等学校教育研究会特別支援教育学会の「交流及び共同学習」の分科会や兵庫県肢体不自由教育研究協議会の教務部会で研究助言を行った。 ・NIE全国大会（徳島大会）の特別分科会（特別支援教育）の開催に協力し、依頼に応じて、NIEと特別支援教育に関連する内容を寄稿した。 ・国際交流についても、前述のように、担当大学院生による発展途上国の障害者リーダーとの交流、内閣府「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」の派遣、学会発表など担当大学院生と連携して進め、修了生の進路予定先も国際交流と関連が深いものとなっている。	・大学院の定員充足に関する行動として、本学の四国地区の大学における行動以外に、共同研究を行っている近畿地区の8大学の大学教員および学生のべ80名に、本学の概要について説明を行った。共同研究を行っている大学で、アクションリサーチを行っている際にも、担当大学院生とともに、特別支援学校教諭免許状の取得に関心があるアクションリサーチの参加学生に、本学の概要や免許取得、大学院での生活について説明した。 ・本学は、神戸市内から1時間弱のアクセスにある。個人的な取り組みとして、専修免許取得に関心がある兵庫県の教員3名に本学の概要について説明を行った。 ・教員データベースの定期的な更新に心がけた。教員データベースの内容を閲覧した本学の大学院入試の受験を検討している学生3名（いずれも国立大学出身・在籍者）より、打診・要望があり、1名は2015年1月に、研究室で直接説明、1名は、2015年1月にe-mailでの情報提供、1名は、2015年2月にe-mail及び電話での情報提供を行った。
33	基礎・臨床系教育部	特別支援教育専攻	倉橋　誠一	・附属校園等の研究発表会に積極的に参加するよう働きかけ（日程等を告げる）、学校現場で今必要とされているニーズについての学習の機会を与える。 ・修士論文の本来の意義と本大学院の目標等について修士論文の指導開始時に再確認させる。 ・修士論文のテーマ設定時に問題の背景とテーマの意義について時間をかけ議論し，教育現場に貢献する研究となるようにする。	担当修士学生は事例研究のために首都圏にある適応指導教室に半年間通った。研究を進める中で，学生は適応指導教室に通う子どもや保護者の思いや発達障害に対する支援の状況，心理的援助の必要性を身をもって経験した。教員を希望している学生にとっては，学校以外の教育の在り方について新しい教育観が形成されたと感じられた。教育実践に貢献するためには学校現場に出向き，今，そこで実際に起こっている問題を体感することは重要だと思われる。	教職に対するあこがれを抱き入学した学生の気持ちを維持できるよう，教師のすばらしさを発信していきたい。同時に，高い倫理観を求められている教師の状況を伝え，それを意識しながら学生生活を過ごすことの必要性を感じてもらいたい。そして，学習や実習を通し，自分の教師への適性を判断できる機会を与え，自信・確信を持って採用試験に臨めるようにさせたい。しかし，すべての学生が教師に向いているとは限らない。これは能力の問題ではなく，向き不向きの問題である。自分の進むべき道で迷っている学生には，自らの判断で適切な進路決定がなされるよう支援していきたい。 動作訓練に興味のある院生に板野支援学校で実施されている障害児者への訓練会を紹介し，体験活動の機会を与えたい。	教育実習期間中（主免・副免・特別支援），ほぼ毎朝附属校に出向き，実習生の特に体調面について観察し，体調の悪い実習生には直接話を聞いた。また，実習担当教師から実習生の様子について聞き取り，気になる実習生についてはさりげなく声をかけ実習生の側から相談を持ちかけられる雰囲気を作った。また，帰宅時にはできるだけ附属校の各教科準備室に顔を出し，実習生の表情を観察した。途中くじけそうになった実習生もいたが，全員無事に実習を終えることができた。附属校の先生からは，今年度は指導案の作成がスムーズであったとの意見をいただいた。このことは主免実習（附属校）で課していた宿題（単元計画案）の効果が少なからずあったと思われる。 動作訓練会では三月まで継続して参加した学生は皆無であった。参加学生のモチベーションが続くような積極的な事務局側からの支援が必要だと感じる。	支援学校で実施されている動作訓練会に参加し，SVの指導の下で動作法の技能の習得に努める。また，臨床動作法の研修会，学会に参加し，臨床動作法の今の流れをつかみ，主流となっている技法・理論を獲得したい。また，予防教育の一環としてストレスマネジメントについて学会主催の研修会に積極的に参加し，学校現場で実践したい。 今年度より協力校では改訂された教育実習成績評価において実習が評価される。その評価結果を参考にし，附属小・中学校においてより本学の教員として身につけておくべき資質・能力がより評価されるような成績評価方法の在り方を検討していく。	徳島心理リハビリテイション研究会主催の毎月の動作訓練会と夏の集団集中訓練（3日間）に参加し，臨床動作法の理論と実践の習得に努めた。また，夏には動作法を用いたマインドフルネスとその応用についての研修を受けた。10月にはストレスマネジメント学会の研修会に参加し，学校におけるストレスマネジメントの理論と技法について，また，同時期にあった日本学校心理士会の年度大会では，Q-Uを活用した学級集団の理解と育成について研修した。予防教育の一環として学校現場ではどのような対策が必要で，どのような対策を実施することが可能なのかについて現在検討している。 実地教育分野では，教育実習での成績評価の在り方について検討し，日本教育大学協会四国地区研究集会にて実践報告をした。実習参加要件では「主免教育実習参加自己検定」の試案を作成・実施した。	実地教育専門部会の会員として積極的に大学運営に参画する。また，実地教育の内容をより充実させる。	実地教育専門部会の会員として積極的に運営に参加し，学生支援委員会の委員としても学生の支援となるよう活動した。また，6月にあった大学院説明会では担当者として専攻の院生と事前準備から連絡を密に取り，魅力のある専攻紹介になるよう工夫した。	教育実習での関わりが多いため必然的に附属学校園とは連絡を密に取る必要がある。その中で，実習生に関する情報・問題を共有し，きめ細かい，統一性のある指導・評価につなげていきたい。4月初旬には附属校実習担当者と顔合わせを行い，1年間の実習の在り方について話し合いを持つ。そして，特に実習期間中は附属学校園に出向き，実習担当者や管理職等との信頼関係を構築したい。今年度は，指導案と成績評価方法の改善について附属学校園と検討を重ねる。	附属校園の実習担当者と定期的に教育実習の日程・内容・評価等について会を開催し，意見交換を行った。 「徳島県内の大学と徳島県教育委員会の連携に関する連絡協議会」の事業である「教育実践に関する共同研究会の開催」における共同研究者として参加し，12月の共同研究会にはシンポジストとして出席した。6月には徳島市学校支援助教員研修会に講師として参加した。	
34	基礎・臨床系教育部	幼年発達支援コース	木村　直子	これまでの修士論文の指導においても、小学校、幼稚園、保育所の実践に貢献するテーマを設定し、実践研究・実証研究としてまとめられるよう指導してきた。今年度は、これまで以上に教員養成大学大学院の修士論文としての意義を踏まえ、発展的な研究となるよう指導に一層の力を入れる。具体的には、以下の3点に取り組む。 ①大学院生の修士論文作成にあたっては、研究の第一歩となる研究デザインを計画するところが最も重要であると考える。したがって、研究デザイン作成段階で実践現場における当該研究の意義を明確にできるよう指導していく。 ②現場での実践に貢献するには、研究後に行う現場へのフィードバックが欠かせない。全ての所属ゼミ生が現場にフィードバックできるような機会を設定する。 ③各院生が地域や今後の現場での実践に研究を生かすことはもとより、全国的な学会等で実践を発表することにより、日本における先進的な実践研究の発信源となれるよう貢献する。	本年は、これまでの修士論文以上に、小学校、幼稚園、保育所の実践に貢献するテーマを設定し、実践研究・実証研究としてまとめられるよう指導してきた。目標に即して報告する。 ①今年度修了した2名の院生については、研究デザイン作成段階で実践現場における当該研究の意義を明確にできるよう指導し、意義ある研究知見を得るための研究デザインを作成できたと評価する。また、来年度修了する2名の院生についても、実践現場にフィードバックできる良いデザインが描けているように思う。 ②現場でのフィードバックを意識した考察、まとめを行い、フィールドや調査協力を得た現場に修士論文の内容をフィードバックするだけでなく、得られた知見を広く報告できるように学会誌への投稿を準備中である。 ③昨年度修了した2名の院生は、修士論文の内容を、日本保育学会及び乳幼児教育学会の全国大会で口頭発表し、現在投稿に向けて努力を重ねている。 以上より、教員養成大学大学院の修士論文としての意義を踏まえ、発展的な研究となるよう指導に励んだと評価できる。	○学生が主体的に授業に参加できるよう、討論やライブスーパーヴィジョン等を取り入れた対話型の授業を行いたい。 ○複数担当の授業に関しては、講義内容の関連付けができるよう、連携を図る。 ○コース・専修内の授業間の関連付けを整理したり、担当教員の異なる専門科目と連動して、学生の実践力育成の向上につとめたい。 ○学生の進路、学習や将来に関する悩みなどに随時応じることによって、学生の充実した教育環境を整えるよう努めたい。 ○ゼミに所属する学部学生及び院生が高度専門職業人として社会で活躍できるよう、実践研究力をつけられるよう研究及び論文指導していきたい。 ○教授・准教授の先生方とも連携し、重層的な教育・学生生活支援のあり方を考える。	教育・学生生活支援として掲げた年度目標は以下のように遂行した。 ①学生が主体的に授業に参加できるよう、討論やライブスーパーヴィジョン等を取り入れた対話型の授業を行った。しかし、授業に参加するメンバーによっては、授業の討論が、学生間の軋轢等を生むことがあり、討論における教員のファシリテータとしての力量に課題を感じた。 ②複数担当の授業に関しては、講義内容の関連付けができるよう、具体的かつ実際的な連携を図った。また、異なる担当教員の実施する授業と連動させ、他の教員と連携することで、学生の教員としての全人格的な支援につながる手掛りとなったように思う。 ③学生の進路、学習や将来に関する悩みなどに随時応じた。学生からの悩み相談は、学習や将来の進路等に留まらず、日常の生活における個人的な内容が増えてきており、今後学生相談にどこまで踏み込んで相談にのるべきかという課題が生じてきている。 ④ゼミに所属する学部学生及び院生が高度専門職業人として社会で活躍できるよう、丁寧な研究及び論文指導を行い、学部2名及び修士2名の論文が完成した。今年度は、指導教員となってる学生数も多かったが、現場に出てからも学び続けることのできる専門職業人となれることを目標に積極的に指導を行った。	○科研費等による研究の研究結果の公表・公開を積極的に行う。 ○学内外の研究助成の公募に積極的に申請し、特に学外資金の調達に重点を置く。 ○講座の教授・准教授の先生方と連携し、教員養成大学における実践研究として適切な研究テーマを設定し、研究を進める。 ○研究結果の公表・公開の一環として、著書の執筆に取り組みたいと考えている。 ○学内外の先生と連携して、幼年発達支援コースの学部生・院生、さらには地域の関係機関に貢献できるような研究テーマに取り組む。	①文部科学省科学研究費若手研究（B）（研究代表者）の研究結果の公表を、2つの全国学会において積極的に行った。 ②学内の教員とともに、赤ちゃんサロンでの取り組みを通して、幼児期の学びに接続させる乳児の保育プログラムについてディスカッションし、次年度以降の研究課題を見つけた。 ③講座の教授の先生と連携し、省察力のある保育者養成に関する研究をはじめるためのデータ収集を行った。次年度以降分析する予定である。 ④兵庫教育大学他他大学の教員と共同研究、共同実践を行い、積極的に研究を行っている。 ⑤今年度は、所属ゼミの学部生や院生とともに、積極的に地域の関係機関と連携し、研究を行った（具体的には鳴門市健康企画室、NPO法人子育て支援ネットワーク徳島、鳴門市子育て支援拠点（うずしお保育園）、徳島市保育課など）。	○学部教務委員として、学部のカリキュラムや長期履修大学院生のカリキュラム、また全学的に開設している保育士養成のカリキュラムについて、整理し、円滑な教務運営ができるよう努める。 ○大学運営に関して積極的に関心を払う。 ○講師という役職上、大学運営等に関しては、知識や経験も浅く、主体的に動くことは難しいが、積極的に講座の教授・准教授に指示を仰ぎ、前向きに取り組みたい。 ○大学院の定員充足のために、徳島県下のみならず、県外の現場の先生（保育所や幼稚園）にも直接働きかけるなど、前向きに取り組みたい。	①学部教務委員として、学部のカリキュラムや長期履修大学院生のカリキュラム、また全学的に開設している保育士養成のカリキュラムについて、整理し、円滑な教務運営ができるよう、書類等を整理し、ファイリングした。 ②コース内の他の教員と幼保一体化推進の流れを踏まえて、今後のコースの運営について積極的に議論した。 ③鳴門市との連携協定に即し、鳴門市の子育て支援や市行政に関わる仕事にも積極的に取り組んだ。 ④大学院の定員充足のために、学会や県内外の研修会等で積極的に本学のアピールを行った。 ⑤大学院の定員充足のために、保育所及び幼稚園教諭に積極的に働きかけた。 ⑥現職で働く学部の卒業生に、大学院進学を勧めたり、夜間の大学院の案内をするため、一人ひとりに手書きの手紙を送るなどして、積極的に働きかけた。	○幼稚園や保育所、子育て支援センターにおいて発達障害の早期発見及び早期療育について助言したり、実施する機会をもつ。 ○幼年発達支援というコースの冠に適した地域貢献を実行する。 ○附属学校教員との連携に関する具体的な活動に関しては、講座の教授・准教授に積極的に指示を仰ぎながら、前向きに取り組みたい。 ○公開講座や大学内の赤ちゃんサロンのみならず、地域の幼稚園や保育所、子育て支援センター等での出張子育て支援を積極的に行う。	①教育支援アドバイザーとして吉野川市教育委員会における公立幼稚園研修会へ出向いた。 ②昨年度から実施している「赤ちゃんサロン」地域の0歳児とその保護者を対象とした子育て支援活動を継続し、より発展的に実施できた。 ③公開講座「ベビーケアマッサージ」や鳴門市子育て支援拠点へ「出前子育て講座」を通して、0歳児とその保護者を対象とした子育て支援を行った。 ④鳴門市の教育振興計画審議会の委員としての職務を全うした。 ⑤鳴門市行財政改革懇話会の委員としての職務を全うした。	本年度に関しては、学長の定める重点目標を踏まえ、学部学生及び院生への論文指導のための個別ゼミに力を注いだ。これからの教員に求められる資質能力を基盤とした高度専門職業人として、学生が現場で活躍できるよう、現在できる限りの指導及び学生生活支援を行った。その結果、学生の学びに対する主体性や授業に臨む姿勢に良い影響が与えられたように思うが、そこには多大な時間と労力が必要であった。高度な専門職業人を養成する教育的要素と、大学教員として求められる研究者としての資質能力を向上していく要素、そして地域の各機関（幼年の場合、各子育て機関）と連携していく社会貢献の要素、これらの要素を質高くバランスよく、継続的に実施していくための方策を考えることが、今後の課題である。
35	基礎・臨床系教育部	幼年発達支援コース	田村　隆宏	幼年発達支援コースに所属する修士課程の学生は，テーマ選択に関しても保育・教育実践に関わるものが多く，指導に関してもできるだけ保育・教育現場の実践活動を観察したり，実践記録を検討したりして，それらを分析することを中心に修士論文にかかわる研究が進められている。本年度の指導学生のテーマで，特に保育の質の向上に関わるものでは，本学附属幼稚園の実践事例を分析の対象とし，考察に関して附属幼稚園の教員とカンファレンスを行いつつ，常に保育者の実践的な意図や思考を柱にする必要があることを強調して指導を行っている。また，子どもの性格形成に関わるテーマでは，幼少期の親子関係がどのような性格を形成するかという問題意識で研究を進めるが，その成果が乳幼児の保育実践でどのように生かせるかという視点を論考の中心に据えることを強調して指導している。	本年度の指導学生のテーマのうち，特に保育の質の向上に関わるものでは，本学附属幼稚園の実践事例を分析の対象とし，考察に関して附属幼稚園の教員とカンファレンスを行いつつ，常に保育者の実践的な意図や思考を柱にする必要があることを強調して指導を行った。その結果，保育の質の向上に直接的に結びつく保育者の実践的な意図や思考がどのようなもので有るかについての示唆が得られ，保育・教育実践に貢献できる意義深い研究成果が得られた。子どもの性格形成に関わるテーマに取り組んでいた学生は，家庭の事情で現在休学中である。小学校における望ましい学級経営のあり方に関するテーマでは，実際の実践例を分析し，望ましい学級経営における教師のあり方についての具体的なポイントを抽出するという視点で分析することを重視して指導を行い，特に，個々の子どもの有能感を高める，学級への帰属意識，居場所感を高めることの重要性が示唆され，学級崩壊を改善するために教師の学級経営に関する考え方の一端が具体的に明らかにされた。この成果は特に望ましい学級経営に関する教師の具体的な考え方の一端を明確に示した点で教育実践に大いに貢献できるものである。	学部生，大学院生の就職活動については，コースが収集している採用試験に関する情報，及び過去の修了生，卒業生からの採用試験に関わる情報を学生に積極的に提供し，就職に対する意識や意欲を高める。さらに，実際に面接で質問される内容について応答してもらうなどの採用試験の準備に関わる支援活動も行うとともに，各地から送られてくる教員や保育士の募集情報を学生に積極的に提供し，学生の就職活動をサポートする。	学部生，大学院生の就職活動については，コースが収集している採用試験に関する情報，及び過去の修了生，卒業生からの採用試験に関わる情報を学生に積極的に提供し，就職に対する意識や意欲を高めた。さらに，実際に面接で質問される内容について応答してもらうなどの採用試験の準備に関わる支援活動も行うとともに，各地から送られてくる教員や保育士の募集情報を学生に積極的に提供し，学生の就職活動をサポートした。この成果として，学部生においては5人中4人が幼稚園教員・保育所保育士として正式採用・臨時採用された（1名は大学院進学）。大学院生においては，3人のゼミ修了生のうち，1名は高松市の保育士として正式作用，1名は横浜市，大阪市の小学校教員採用試験で2次試験合格，1名は福岡県の小学校教員として臨時採用されおり，支援の成果が得られている。	ここ数年，調査を進めている，大学生・専門学校生を対象とした精神的回復力（レジリエンス）に及ぼす幼小期の親子関係，及び依存心の影響に関して，特に本年度は性差に関わる研究成果を関連学会で発表し，学術誌に論文投稿をする。また，附属幼稚園との共同研究のテーマである「保育者の資質向上」にかかわる成果を附属幼稚園の研究紀要にまとめる。さらに，長期的に取組んできている幼児の語彙学習過程の発達に関する成果を学会誌に投稿する。加えて，現在編集・執筆中である「保育の心理学」に関わる著書を発行する。	ここ数年来，研究を進めている，大学生・専門学校生を対象とした精神的回復力（レジリエンス）に及ぼす幼少期の親子関係，及び依存心の影響に関して，特に本年度は性差の要因も絡めて，親との親密性の影響，及び親との同一視欲求に関する研究成果をそれぞれ日本心理学会第78回大会，日本教育心理学会第56回総会で発表し，学術誌への論文投稿を進めている。また，附属幼稚園との共同研究のテーマである「保育者の資質向上」にかかわる成果を日本保育学会第67回大会のシンポジウムで報告し，附属幼稚園の研究紀要へのまとめを進めている。「保育の心理学」に関わる著書は現在校正作業中で，間もなく発刊の予定である。 これらに加えて，保育実践力の具体的なスキルの明確化を目的とした調査研究にも着手し，保育者養成校の学生を対象としたアンケート調査が完了し，現在，結果の分析中であり，この成果を論文としてまとめ，学術誌に投稿予定である。	学部入試委員会委員として学部入学試験の業務に直接的に関わる。また就職委員会委員として，本学の学部学生・修士学生の就職率向上に向けた支援活動に背作曲的に関わる。加えて，大学院修士課程長期履修センター運営委員会委員として，長期履修センターの運営にも関わる。さらに東京学芸大学を主幹とした6大学連携人材GPに関わる社団法人の運営委員として特にカリキュラム検討を担当し，これに関わる講習会の講師を務めるなど教育支援人材育成事業に積極的に携わる。	今年度は，特に第三期中期目標・中期計画策定プロジェクトチーム委員として，大学全体の中期目標・中期計画策定に関わることで，積極的に大学運営に関わっており，現在もその責務は継続中である。また，カリキュラムマップ・ガイドライン研究協議会委員として，大学全体のカリキュラムマップ・ガイドラインの第2案の作成にも携わった。これらに加えて，就職委員会副委員長として，大阪，神戸の教育委員会に情報収集に赴くなど，本学の学部学生・修士学生の就職率向上に向けた支援活動に積極的に関わった。さらに，大学院修士課程長期履修センター運営委員会委員として，長期履修センターの運営にも関わった。また今年度は，学部入試委員会副委員長として，学部入試，センター試験実施の総括面でも貢献した。 東京学芸大学を主幹とした6大学連携人材GPに関わる社団法人の運営委員として特に地域の教育支援人材育成に関するカリキュラムの検討を担当し，これに関わる講習会の講師を務めるなど教育支援人材育成事業に積極的に携わった。	附属幼稚園との連携については，月に2～3回開催される合同研究会に参加し，保育実践に関わる共同研究に加わり，その成果を附属幼稚園研究紀要にまとめる。また，附属学校運営協議会委員として附属幼稚園の運営に直接関わるとともに，学校関係者評価委員として，附属幼稚園の保育活動ついて第三者評価を行う。 社会との連携については，教育支援アドバイザーとして複数のテーマを掲げ，講演等の依頼に対して積極的に赴くことに加え，徳島市教育委員会・社会教育委員として地域の社会教育の振興に貢献する。また，徳島県子育て総合支援センターの「子育て応援の匠」事業において子育て応援の匠として登録し，県内の子育て支援活動に貢献する。さらに，鳴門市子育て支援事業における保育カウンセラーとして，保育者や保護者の相談に応じる。	附属幼稚園との連携については，月に2～3回の頻度で開催される合同研究会に参加し，保育実践に関わる共同研究に加わり，その成果を日本保育学会第67回大会のシンポジウムで報告し，その内容を附属幼稚園研究紀要にまとめる準備をしている。また，附属学校運営協議会委員として附属幼稚園の運営に直接関わったとともに，学校関係者評価委員会・委員長として，附属幼稚園の保育活動ついて第三者評価を行い，その報告書を提出した。 社会との連携については，教育支援アドバイザーとして今年度は県内の森山幼稚園，松茂幼稚園で講演を行った。さらに徳島市教育委員会・社会教育委員として地域の社会教育の振興に貢献したとともに，県所有の社会教育施設の指定管理者選定にも関わった。また，徳島県子育て総合支援センターの「子育て応援の匠」事業において登録されている子育て応援の匠として，12月に子育てに関する講演を行った。これらに加えて，鳴門市子育て支援事業における保育カウンセラーとして，6月，12月，2月に保育者や保護者が対象の教育相談に応じた。 国際交流については南アフリカのプレトリア大学の保育者養成関連の学部から，共同研究の打診があり，着手することになった。	今年度は，特に第三期中期目標・中期計画策定プロジェクトチーム委員（自己点検・評価・情報公開チーム）の基礎臨床系教育部代表委員として，中期目標・中期計画の内容の妥当性について検討・吟味することで大学全体の運営に関わった。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献(特記事項)
36	基礎・臨床系教育部	幼年発達支援コース	浜崎　隆司	修士論文の指導および博士論文の指導において、指導教員の研究テーマである人間関係において、教育場面における人間関係、家庭における人間関係、仲間における人間関係等のテーマを学生に幅広く提示し、その中から研究テーマを選択し論文作成を行う。その研究成果は教育場面における実践に貢献できるようにする。	修士論文の指導および博士論文の指導において、指導教員の研究テーマである人間関係において、教育場面における人間関係、家庭における人間関係、仲間における人間関係等のテーマを学生に幅広く提示し、その中から研究テーマを選択し論文作成を行うことを目的としており、 実際に、修士論文として、スポーツ指導において子どもが内発的にスポーツに取り組む教師とのかかわりや小学校の学級場面における教師と子どもとの信頼関係構築に関する研究を、学級場面の観察等を通して研究のアドバイスを進めている。その成果は、教育場面における実践に貢献可能なものとして期待される。また、院生とは、添い寝における子どもと親との心理的関係、小学生・高校生における延引（引き延ばし）行動においても院生との共同研究を行い学会誌に発表した。	1．目標・計画 ・幼児教育関連の講義内容の中（保育内容人間関係等）で、幼児と保育者、幼児と親、幼児同士の人間関係を中心に、信頼関係をどのように構築し維持していけばよいのかを講義内容に含める。 ・学生の意欲を引き起こし，基礎学力や応用力をしっかりと身に付けさせるために，講義だけでなく，保育現場や家庭の親子関係の映像資料を随時用いて，興味関心を持たせ，自分自身の問題として討論させる。 ・大学院生の研究意欲を高めるために、大学院生（博士課程院生を主として）と共に教育実践に関連した研究会を設け、修士論文作成に活用するとともに、その研究成果を学会で発表し学会誌に投稿する。具体j的には児童の延引行動に関する心理学的研究。 ・心理学を専攻しているので学生の進路・悩み等についてゼミ生だけでなく，講義受講者にも相談事があれば，受け入れることを通知し，相談があれば積極的に応じる。	・幼児教育関連の講義内容の中（保育内容人間関係等）で、幼児と保育者、幼児と親、幼児同士の人間関係を中心に、信頼関係をどのように構築し維持していけばよいのかを講義内容に含めて、後期の授業保育内容人間関係を講義した。具体的には愛着や信頼という言葉や選択理論心理学で重視される7つの対人関係（相手との関係を良くする）におけるキーワードを用いて、教師と子どもだけでなく、仲間や友達、家族というさまざまな人間関係のあり方を教授した。 また、前期の授業では、学生の意欲を引き起こし，基礎学力や応用力をしっかりと身に付けさせるために，講義だけでなく，保育現場や家庭の親子関係の映像資料を随時用いて，興味関心を持たせ，自分自身の問題として討論させた。とくに親子の愛着形成に関するDVD等の映像資料を主として活用した。後期の授業ではグループ課題を行く中で、相手の意見を取り入れながら、グループをまとめていくという演習も取り入れた。学生の授業に関するコメントでは、おおむね高い評価が多かった。 ・大学院生の研究意欲を高めるために、大学院生（博士課程院生を主として）と共に教育実践に関連した研究会を設け、修士論文作成に活用するとともに、その研究成果を学会で発表し学会誌に投稿した。具体j的には児童の延引行動に関する心理学的研究で査読論文（日本応用教育心理学会）2件、添い寝に関する紀要論文（広島大学、鳴門教育大学）2件を発表した。 ・心理学を専攻しているので学生の進路・悩み等についてゼミ生だけでなく，講義受講者にも相談事があれば，受け入れることを通知し，相談があれば積極的に応じた。平成27年3月現在で6件の相談件数があった。	継続研究として、親子の信頼関係の尺度開発を行う。その成果を、論文化し投稿する。さらに、その資料を保育者対象の研修や講演・子育て相談を行う際の資料として活用する。 大学院生との共同研究（添い寝に関する研究および幼児児童の延引行動）を行い、その成果を、論文化し投稿する。さらに、その資料を保育者対象の研修や講演・子育て相談を行う際の資料として活用する。 初心者向けの保育の心理学のテキストや教材を編集執筆する。	継続研究として、親子の信頼関係の尺度開発を行った。調査は終了し、そのデータを分析した結果、さらにデータ数を増やしての検討が必要であり次年度まで継続とした。 大学院生との共同研究（添い寝に関する研究および幼児児童の延引行動）を行い、その成果は、本学授業や教育相談等で活用した。 論文（4件） ・青年の自我同一性地位と学業的延引行動の関係　日本応用教育心理学研究　第31巻 第2号　17-26（共著） ・高校生における学業的満足遅延に及ぼす動機づけ,学習方略の影響　日本応用教育心理学研究　第31巻 第2号　29-38（共著） ・添い寝時における就眠儀式についての研究－テキストマイニング法による自由記述の分析－　学習開発学研究（広島大学大学院教育学研究科学習　開発学講座）第8号　175-183（共著） ・大学生の添い寝に対するイメージと思い出について　鳴門教育大学研究紀要　第30巻　24-32.（共著：浜崎隆司・吉田美奈） 学会発表（2件） ・添い寝が依存欲求に及ぼす影響についての探索的研究 日本保育学会第67回大会発表（吉田美奈,浜崎隆司） ・幼稚園児の添い寝の状況およびその理想と現実　日本応用教育心理学　日本応用教育心理学会第29回研究大会発表（吉田美奈・ 浜崎隆司） 初心者向けの保育の心理学のテキストについては、次年度発行予定で原稿を出版社に入稿し初校の段階。	コース長を続投し、コース運営に貢献する。 専攻長として、専攻運営に貢献する。 大学訪問，説明会等を昨年よりも増やして大学院定員充足のための活動を積極的に行う。	コース長を続投（3年間）し、コース運営に貢献した 専攻長（1年間）として、専攻運営に貢献する。 大学院定員充足のための大学訪問，説明会等は比治山大学での学内説明会および東海学園大学の心理系を担当する教員を通じての広報活動を行った。	附属幼稚園と連携を図りながら，毎年実施されている自然プロジェクト等の企画に参加し支援する。 文部科学省に依頼された「幼稚園教員資格認定試験」の試験作成・採点の実施に協力する。 教育支援アドバイザーに登録し，依頼があれば優先して講演等の依頼を受ける。 徳島県内、特に鳴門市内の幼稚園等の保育相談・研修依頼・講演依頼を積極的に引き受ける。 鳴門市の子ども・子育て支援計画策定事業の委員（鳴門市児童福祉審議会会長）として参加し地域との連携を図る。	附属幼稚園と連携を図りながら，毎年実施されている自然プロジェクト等の企画に参加し支援した。 文部科学省に依頼された「幼稚園教員資格認定試験」の試験作成・採点（上越教育大学）の実施に協力した。 教育支援アドバイザーに登録し，依頼があれば優先して講演等の依頼を受ける。平成26年度依頼なし。 徳島県内、特に鳴門市内の幼稚園等の保育相談・研修依頼・講演依頼を積極的に引き受ける。平成26年度3回の教育相談を実施した。 鳴門市の子ども・子育て支援計画策定事業の委員（鳴門市児童福祉審議会会長）として参加し、子ども・子育て支援計画を策定し市長に答申した。。	
37	基礎・臨床系教育部	幼年発達支援コース	塩路　晶子	学校の教育実践に資する修士論文の指導に関して、これまでも幼小の連携や個別の学習指導、幼児教育の在り方などのテーマに関して、高度専門職としての教員をめざす学生の論理的思考力や論述力を高め、さらに教育実践につなげることができるような指導を行ってきたと考えている。そこで本年度においても、院生が幼児教育の実践現場でアクションリサーチを行うことを支援し、論理的に思考し論述するよう指導することを目標とする。	ゼミの指導学生は、幼児教育の教育実践について、新任保育者についてインタビューによって収集した資料をもとに修士論文を作成し、幼稚園教員のための新たな研修資料を作成するなど、教育実践に寄与する修士論文を作成することができた。この院生は成果を、2月21日の学術研究会において発表した。今後の院生指導にも、つなげていきたい。	学生・院生が幼児教育・保育実践を行うことを通して、知識と技能を身につけ、自ら考える力を養成するような授業を展開する予定である。 また、学部4年生の担任として、学生が希望する就職が可能になるよう支援したい。	学部授業の「乳児保育」「乳幼児教育研究法1」、大学院の授業「教育実践フィールド研究」等において、学生や院生が、実際に乳幼児とかかわって保育実践を行い、乳幼児理解、保育の環境構成、指導案の作成、実践、省察、といった一連のプロセスを展開する中で、学生や院生が保育に必要な知識と技能の身につけることができるような授業を行った。、	アメリカの進歩主義教育幼稚園史に関する研究を引き続き行う予定である。	太平洋戦争時のハワイにおける進歩主義教育幼稚園についての論文を執筆中である。 5月18日には、第67回日本保育学会の自主シンポジウム「保育環境を新たな概念で捉え直す「遊誘財」試論」において、司会を務め、附属幼稚園と共同研究を行っている「遊誘財」について研究発表を行った。	大学院教務委員会委員、実地教育専門部会委員、修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会委員を担当する予定である。	大学院教務委員会委員、実地教育専門部会委員、修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会委員を担当した。とくに、修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会委員としては、「修士課程教員養成に資する実践型カリキュラム」の提案や「新たな教育プログラム」の提案を行った。	附属幼稚園の園内研究会に定期的に参加し、共同研究を行う予定である。	附属幼稚園の園内研究会に参加し、保育カンファレンスや、討議を行った。	
38	基礎・臨床系教育部	幼年発達支援コース	湯地　宏樹	①修士論文は極めて重要な出口の評価指標であり、ディプロマ・ポリシー（DP）にも「本学の教育課程において，教育及び教育にかかわる諸課題に関する研究を深め、学位論文をまとめ、審査及び試験に合格していること」と明記されているように、学校の教育実践に貢献するものがのぞましいという認識です。 ②修士論文のテーマは、基本的に学生の希望によります。幼児教育にかかわらず希望校種によって、またもし自主的にボランティア実習などをしていたり子どもと直接かかわることをしたりしていれば、その中からテーマを見つけるように指導しています。 ③研究方法についてもテーマによりますが、先行研究を踏まえた上で、現場の先生と相談する過程で方法を改善することもあります。保育実践の研究の場合、参与観察によるエピソード記録をもとに省察するという方法をとることが必然的に多くなります。 ④当然ながら結果についてはかならず調査対象園（校）に報告します。その際、できるだけ現場への提言・助言やあらたな知見が示すように指導したいと思っています。	今年度の修士論文のゼミ生は、L3年3名、L2年3名、M1年1名の計7名であった。今年度も、以下のとおり、年度目標に掲げた4つを基本方針として修士論文の指導を行った。 研究テーマは院生の希望を最優先して相談しながら決めた結果、保幼小連携に関する研究が2件、地域の活動に関する研究が2件、メディア研究に関する研究が2件、家庭教育が1件という内訳で、どれも保育・教育実践のテーマとなった。そのうち、今年度、提出した修士論文は「私立保育園・幼稚園と公立小学校との連携における職員交流に関する研究」「子ども視点でみた保小交流活動の研究」「幼児のサッカー活動におけるコーチの役割についての一考察 」でああった。これらは、現場の先生方と語り合ったり子どもたちと対話したりしたものを記述し、省察したり考察したりした手法であり、いずれも現場の協力なしにはできない研究であった。研究成果については、学生をとおして調査対象園（校）に報告した。学生にとっては、このような研究の積み重ねが教育実践力につながると信じている。 以上、本ゼミの研究領域が「幼児教育学」や「子ども社会学」だけに、今後も必然的に教育実践とかかわる研究テーマが多くなると思うが、ディプロマ・ポリシーや教育実践力に役立つ研究ということなどを意識しながらも、教職・保育職を希望する学生が最も興味あるテーマを尊重していきたい。	本年度の教育・学生生活支援に関する努力目標は以下の3つである。 ①学部2年次生クラス担当教員 2年次のクラス担任として大学生活が安定して過ごせるように支援したい。保育実習実習の指導で接する機会も多いので、8～9月の11日間の保育実習に向けて自己課題を見つけながら取り組めるよう学修キャリアノートを含め指導していきたい。 ②卒論・修論ゼミの指導 今年度は、卒論ゼミ生3名及び修論ゼミ生3名、計6名を担当することになった。いずれもテーマはほぼ決定しているので、学生が計画的に研究を遂行できるように支援していきたい。 ③保育実習指導 4年生の保育実習に関しては「保育実習指導」の授業が新規に設けられるなど新カリキュラムがスタートするので、学修キャリアノート、実習日誌をとおして自己省察し、教職実践演習と連結できるように工夫していきたい。	①学部2年生は、8月～9月に10日間の保育実習を終え、さらに10月に10日間の施設実習と連続して実習を行った。9月には2年次合宿が淡路島であり、5名全員参加した。こうした経験によって顔つきが変わり、就職活動へと一歩踏み出したように感じられた。 ②今年度は、卒論ゼミ生3名及び修論ゼミ生7名計10名を担当し、論文指導とともに、平成26年10月29日（水）修論構想発表、11月5日最終発表、12月3日卒論発表会、平成27年2月4日（水）公開発表会に向けて、授業以外の時間などに毎週個別に指導を行った。 ③学部4年生も、8月～9月に10日間の保育実習を行った。保育実習に関しては「保育実習指導」の授業が今年度からスタートした。外部講師の授業を含め、実習直前に集中講義を行った。後期は、実習園からの実習評価と自己評価とを照らし合わせ、学生それぞれが自己課題を見出した。その課題に向けて取り組めるように、「不足している知識・技能等があれば補完・向上させ、教員として必要な資質能力として有機的に統合・形成させる」ことが目的の「教職実践演習」の授業へつなげた。 その他、「保育原論」の受講生とともに平成27年2月23日にボランティア公演「あそびのポケット」（那賀町・桜谷保育園）を行ったり、「教職論」や「おもちゃ王国プロジェクト」等において補佐役として東かがわ市立白鳥小学校土曜授業、「おもちゃ王国」等の引率を行った。	本年度の研究計画は以下の2つです。 ①コンピュータゲームの研究 スマートフォンおよびタブレットゲームに関して、幼児とその保護者と保育者を対象に調査を行う予定（科研申請中）。 ②保育カリキュラムの研究 幼稚園教育要領・保育所保育指針などの歴史的変遷についてテキストマイニング分析によって検討する。	①平成26年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)「スマートフォン及びタブレットゲームが乳幼児の心身に与える影響の研究」（研究課題番号：26350320）に採択された。今年度は、その一環として、幼児の保護者に対して質問紙調査を実施した。調査の結果は、来年度の学会及び論文で公表する予定である。 ②幼稚園教育要領・保育所保育指針などの歴史的変遷については、評価の観点をもとに分析を進めているところである。これに関しては、平成26年6月23日から2週間、国際フレーベル学会（イギリス・カンタベリー）及びOMEP（世界幼児教育・保育機構）世界大会（アイルランド・コーク）に参加し、情報収集を行った。OMEP日本委員会から依頼され、OMEPニューズ11月号に「デジタル時代の子どもたち」というOMEP大会の記事を執筆した。	今年度も引き続き大学院入学試験委員会委員として、さらに新規の教育・研究評価委員会委員として大学運営に携わる。とくに本コースは定員に満たなかったことから、「平成26年度学生募集行動計画」に昨年以上数の大学を訪問する案を提出したように定員確保のために積極的な広報活動につとめていきたい。また広報用のチラシ（新聞）を発行する予定なので、本コースの先生方と相談・協力しながら作成していきたい。	今年度は大学院入学試験委員会の副委員長として委員長を補佐するとともに、総括委員長として大学院入試として試験実施の総括等を行った。平成26年度学生募集行動計画に基づく広報活動では19大学を訪問した。5月・6月・10月の学内大学院説明会、5月の大学院説明会（高知）、6月の大学院説明会（福岡・広島）、10月の大学院説明会（徳島大学）において、全体説明を行うとともに個別の相談に対応した。また幼年発達支援コースにおいては、オリジナルホームページ、パンフレットやクリアファイルのリニューアルを目指して作業を行った。今年度は、過去5年間では最多の11名の入学者があった。 その他、教育・研究評価委員として、教育・研究評価室において設定された評価項目について自己点検を行い、「平成26年度教育及び研究に関する自己点検・評価報告書」の作成に携わった。	今年度は本学の平成26年度免許状更新講習の①必修科目、②選択科目（6時間）の両方を担当する予定である。また、昨年度どおりに依頼があれば広島県私立幼稚園協会主催の免許状更新講習（6時間）も担当する予定である。	今年度は本学の平成26年度免許状更新講習の①平成26年8月9日必修科目「教員の専門性と学校の状況：教員の専門性と学校の状況」、②平成26年7月26日選択科目「幼児理解と教師の姿勢」（6時間）の両方を担当した。選択科目では16人の受講があり、全体平均で91.7%が「よい」という評価だった。学外では平成27年1月17日広島県私立幼稚園協会主催の免許状更新講習（6時間）（広島ガーデンパレス）に行い、85名の受講があった。 また教育支援講師・アドバイザー等派遣事業に関して、平成26年7月15日進路学習会（徳島市立高校）、平成27年1月22日「電子ディアと子ども」（徳島市・白うめ幼稚園）の講演依頼が2件あった。 附属幼稚園との合同研究会（研究主題「豊かな遊誘財を創り出すために～生活プランの見直しと実践の省察から～」）に平成26年5月27日、6月17日、7月17日、10月21日、11月11日の5回参加した。平成 26 年8月1日には平成26年度幼児教育研究会「科学的思考を促す「生活プラン」の創造」（附属幼稚園）に参加した。	とくになし。
39	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	吉井　健治	修士論文の指導では、院生に対して、「自分は研究によって何を明らかにしたいのか」、「自分の研究は何に貢献できるのか」という問いかけを繰り返し行っている。こうした指導を通じて、院生は研究の目的と意義を明確化し、研究への動機付けを高めていっている。 また、「臨床心理学的研究の特質は悩んだり困っている人々に対して具体的にどのように貢献できるのか」という視点で、研究をまとめることが重要であると指導している。	2014年度はM2の6名、M1の10名に修士論文の指導を行った。 M2の修士論文の指導では、院生に対して、研究の目的を明確に文章化してもらい、研究の意義・価値・貢献について熟考してもらった。 このようなプロセスを経ることにより、学校の教育実践あるいは心理教育相談に貢献する修士論文が作成された。	①学生相談に関して他大学のシステムを参考にしながら充実を図る。 ②大学院生の就職及び臨床心理士資格試験のための支援を行う。	①学生相談に関して、学生課からの依頼に対応した。 ②院生の就職支援において、特にスクールカウンセラーや教育委員会指導員等の就職において、院生の指導・支援を行った。 日頃から各県の教育委員会との連携・協力を行うことにより、本コースの院生教育への信頼が得られている。	①著書の執筆を行う。 ②臨床心理士養成のための学外実習のあり方や方法について検討する。	①完成には至らなかったが、かなり進めることができた。 ②学外実習の状況について、コースの院生全員に調査を実施した。その結果をもとに今後の学外実習の進め方を検討した。	①委員としての任務を積極的かつ適正に遂行する。 ②大学院の定員確保のための取り組みを行う。	①予算・財務管理委員、学術研究推進委員の二つの委員としての任務を積極的かつ適正に遂行した。 ②県外の大学1校を訪問し、大学院説明会と講義を実施した。	①スクールカウンセラーの活用において徳島県教育委員会と連携を図る。 ②不登校の訪問臨床において徳島県立総合教育センター及び徳島市教育研究所と連携を図る。 ③ひとり親家庭ホームフレンド事業において徳島県子ども未来課及び徳島県母子寡婦福祉連合会と連携を図る。	①スクールカウンセラーの活用において徳島県教育委員会と連携を図った。 ②不登校の訪問臨床において徳島県立総合教育センター及び徳島市教育研究所と連携を図った。 ③ひとり親家庭ホームフレンド事業において徳島県子ども未来課及び徳島県母子寡婦福祉連合会と連携を図った。	生徒指導支援センターの設立にあたって、その準備委員会に参加し、また当センター研究員の確保のために努力した。
40	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	葛西　真記子	指導学生の修士論文のテーマは、これまで一貫して臨床心理学（特に学校教育）に関連するものを扱ってきた。今年度修士2年の学生も、学校現場での調査、事例を研究テーマとするものもいる。直接学校教育の関連しないように思われるテーマであっても、その研究内容をいかに学校教育に結び付けることができるかについて、必ず論じるようにしていく。	修士課程2年生の8名の修士論文のテーマは、学校現場に関連するものが多く、「思春期の非行からの立ち直り」「高校生にみられる関係性・受動的攻撃性」「性別違和感の発生時期（小学校から）」等、であった。また、修士課程1年生においても「不登校問題」「非行傾向行為」「性的いじめ」「スクールカウンセラーと学校現場の連携」「部活動のストレス」などであり、いずれも学校教育の実践と関連している。	修士課程2年生8名、博士課程3名、研究生2名について教育、指導を行う。教育は、特に、修士論文の指導を通して、臨床的研究の在り方について指導する。また、心理教育相談室でのケースに関するスーパービジョンも行う。 修士課程１年生については、入学後ゼミに配属になった者に対して、臨床心理学の分野での学校教育に関連する研究を主に、指導する。	修士課程2年生8名、修士課程1年生7名、博士課程3名、研究生3名について教育・指導を行った。 研究生のうちの1名は、中国からの留学生であり、平成27年度の大学院の入試にも合格した。 心理教育相談室でのケースに関するスーパービジョンも行い、臨床心理学の分野の教育・研究指導を行っている。 また、学生の国際学会での発表を支援し、博士課程の学生は、アメリカ心理学会で発表を行った。修士の学生は、日本心理臨床学会で発表を行った。	①セクシュアル・マイノリティに関する研究（基盤研究C）では、学校現場での児童生徒への支援について、またその支援を行う教員への支援に関する研究を行う。 ②心理療法の過程研究では、PQSを用いた心理療法内でのセラピストとクライエントのかかわりについての研究データをさらに集め、分析し、投稿する。 ③自己心理学の理論を用いた事例研究を行う。	①セクシュアル・マイノリティに関する研究(基盤研究C)では、学校現場からの要請もあり、児童生徒への支援も行った。その研究成果を国内・海外で発表した。 ②心理療法の過程研究では、研究発表を横浜で開催された日本心理臨床学会で発表した。 ③自己心理学の理論を用いた事例研究については、自己心理学協会での事例検討会で事例発表を行い、様々な意見交換を行った。	大学院の定員確保に関しては、引き続き、県外の各大学に資料提供を行い、研究会等で知り合いになる学生、メール等で興味を示す学生、大学院説明会等で知り合う学生に対して、積極的に大学院での教育について説明する。 修了生を中心とした研究会でも本コースの現状等を説明しながら、他の院生候補者の紹介をお願いする。	大学院の定員確保に関しては、特にセクシュアルマイノリティ、自己心理学など、専門としている分野での問い合わせがいくつかあったので、大学院進学の相談にのり、受験してもらった。その結果、合格となっている。	社会との連携に関しては、徳島県教育委員会のいじめ対策審議会の委員を務め、県内のいじめ問題への対応に貢献したい。また、徳島県内の小・中学校にスクールカウンセラーとして派遣され、不登校、いじめ、不適応になどの問題に取り組む。 国際交流に関しては、6月にアメリカから国際的な研究者を本学の招聘し、大学院生に国際的な研究の在り方についての講演をする予定である。また、アメリカ心理学会にも院生とともに参加・研究発表を行う。	徳島県教育委員会と連携し、いじめ対策審議会の副委員長をつとめ、いじめ問題への対応に貢献した。 徳島県人権教育啓発推進センターのアイポートと協力し、セクシュアルマイノリティの人権についての講演会や文化祭を開催した。また審議委員になり、県内の人権問題についても検討した。 徳島県内の小・中学校にスクールカウンセラーとして派遣され、不登校・いじめ・不適応等の問題に対応している。 国際交流に関しては、博士課程の院生、研究生を中心に、アメリカ心理学会に参加・研究発表を行った。また、中国からの研究生を受け入れた。	研究・教育・指導、社会貢献等、すべての領域において、予定通り、項目によっては、予定以上に貢献した。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1. 目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2. 点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1. 目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2. 点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1. 目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2. 点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1. 目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2. 点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1. 目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2. 点検・評価	Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）
41	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	今田　雄三	修士論文の指導に当たり、特に学校での心理教育相談に貢献できるテーマの選定、対象、研究の手法などを常に意識するように大学院生に促していく。また、研究結果をいかに学校での心理教育相談に還元し実地で生かすことが出来るのか、という視点での考察を必ず加味するよう指導を行う。	修士1年生4名に対する指導では、研究テーマの選定の段階であったが、学校での心理教育相談にどのような形で貢献できるのかについて意識するように適宜指導した。その結果、若年者の飲酒問題や対人恐怖症など、学校精神保健の領域に関わるテーマを選択する者が2名、描画療法やコラージュ療法など、学校での心理教育相談で広く用いられている面接技法に関するテーマを選択する者が2名となり、全員が学校における教育実践に貢献しうるテーマを選択した。 また修士2年生6名に対する指導では、既に研究テーマは決定しており、研究の対象や手法の選定において、可能な範囲で学校に心理教育相談に貢献ないし還元できる形となるように適宜指導を行った。なお、侵襲性などの倫理上の問題から、生徒やその保護者を調節調査対象とした研究を行った者は1名であったが、他の5名についても、調査から得られる知見が学校での心理教育相談の実践に寄与する要素を含むものとなり得ることを確認した。具体的には学校での心理教育相談において実施が可能な芸術療法に関する研究が5件（うち中高生を対象にした研究1件を含む）、学校での心理教育相談の技量の向上に資するロールプレイに関する研究が1件であり、全員が学校における心理教育相談に貢献しうるテーマを選択した。	（1）授業を通して学校精神保健の実践力の醸成を図ることを目標とする。そのための具体的な方法論として、①授業には独自に作成した資料を用いる、②授業には視聴覚機器を活用することで受講生の興味を喚起し、理解を助ける、③授業には事例検討を取り入れる、④授業で身につけた知識を実際の場面で即応的に活用できるための演習をくり返し行う、⑤受講者が主体的に論点を構築していけるための工夫を行う、の5点を徹底して実施する。 （2）臨床心理士を目指す大学院生、および児童生徒の精神保健の実践に取り組む現職教員が精神科医療の実践に触れ、体験を通して正しい知識を習得出来るように、地域の医療機関と連携し、精神科病院での一週間の短期見学実習の機会が得られるように努める。また毎週一回・継続して研修できる長期実習が行えるように努める。	（1）前期授業「精神医学研究」「学校精神保健学研究」において上記目標の①②③を、「臨床心理査定演習Ⅰ」において上記目標の①②を実施した。後期授業「学校精神保健学演習」においては、上記目標の①～⑤のすべてを、「臨床心理学演習」においては上記目標の①②③④を、「発達臨床アセスメント」においては上記目標の①②を実施し、受講生に学校精神保健の実践力の向上を図った。 （2）2014年8月と2015年3月に、3つの精神科病院で3日～5日間の短期見学実習を実施し、参加者は計29名だった。また2014年4月から12月まで、4つの医療機関において、毎週一回の長期実習を実施し、参加者は計5名であった。なお、長期実習の参加者に対しては、毎月1回実習内容に関するスーパービジョンを実施し、適切な実習活動が行えるよう指導につとめた。	（1）臨床心理士を目指す大学院生の養成における精神保健に関する知識の習得、事例研究、および描画法やコラージュ法を用いた心理査定や心理面接技法の習得に関連した研究を行う。 （2）2014年度においては、引き続き上記に関連したデータの収集を行うとともに、これまでの実践内容やデータの一部に基づき、学術誌または学内紀要論文への投稿を目指す。 （3）これまでの研究業績が連合大学院の資格審査申請の要件を満たしているかを確認の上、可能ならば新規「合」認定のための申請を行う。もし要件を満たしていない場合には、2014年度中に業績が要件を満たすように計画的に論文投稿を行う。	（1）予定通り臨床心理士を目指す大学院生の養成における精神保健の知識の習得、事例研究、および描画法やコラージュ法を用いた心理査定や心理面接技法の習得に関連した研究を継続した。その一環として8月に愛知県で開催された日本コラージュ療法学会のワークショップの講師を担当した。 （2）引き続き描画法やコラージュ法を用いた心理査定や心理面接技法の習得に関連したデータを収集している。なお今年度は臨床心理士を目指す大学院生の養成における今日的な問題と適切な指導法に関する単著論文が学内紀要に2件掲載された。 (3)連合大学院の資格審査申請の要件を満たしていることを確認の上申請を行い、2015年10月に新規「合」として認定された。	付属心理・教育相談室の室長として、相談室の運営に当たるとともに、臨床心理士養成コースの大学院生がカウンセリングの実習を円滑に行えるようコーディネーションを適切に行う。	相談室の運営について、中間報告で述べたようにコース教員と適宜協議を図りつつ適宜改善を図った。特に①ケース担当者の決定の流れの変更を行ったこと、②効果的なカウンセリング実習における大学院生への指導のあり方を見直すため、新たにケースカンファレンスに関するレポートの作成を課し、受講者の理解度や学習態度の確認を実施したこと、③成績評価について従来曖昧だったものを明確な規準を定めたこと、の計3点については今年度中に実施した。これを踏まえて次年度以降も、相談室でカウンセリング実習を行う大学院生の意識改革と技能の向上に資する相談室の運営やケースカンファレンスの形態などの改善を進めたい。	（1）徳島県精神保健福祉協会教育研修委員会委員として、県民一般を対象とした精神保健に関する啓蒙活動を行う。 （2）徳島県立徳島学院の嘱託医として、児童生徒の指導に関して教職員との連携を図る。 （3）徳島県中央こども女性相談センターの嘱託医として、医学的な判定と助言を行う。 （4）日本コラージュ療法学会の常任理事として学会の運営に当たり、コラージュ療法の普及と学術的な発展に寄与する。	（1）徳島県精神保健福祉協会教育研修委員会委員として、県民一般を対象とした精神保健に関する講演会の企画立案を行い、2015年3月に「高齢者の心の健康と生活習慣」をテーマとした講演会を実施した。 （2）徳島県立徳島学院の嘱託医として、毎月1回児童生徒と面接を行い、指導に関して教職員との連携を行った。 （3）徳島県中央こども女性相談センターの嘱託医として、毎月1回療育手帳の発行に係る医学的な判定と助言を行った。 （4）日本コラージュ療法学会の常任理事として2014年5、8月に開催された常任理事会に参加し学会の運営に当たった。また2014年8月30-31日、愛知学院大学大学において開催された日本コラージュ療法学会第7回大会において、ワークショップの講師および一般演題の指定討論者をつとめた。	教育に関して、課題研究Ⅰ（1年次）6名、課題研究Ⅱ（2年次）4名の大学院生のゼミ指導を担当したのに加え、本学の心理教育相談室で面接を担当する大学院生を対象とした面接指導基礎実習（1年次）5名、および面接指導実習（2年次）5名に対しても、課題研究に匹敵する綿密な指導を原則として毎週、グループおよび個別に実施し、高度な実践的資質を有する大学院生の養成に貢献した。 また徳島県学校問題解チーム派遣援事業スクールプロフェッサーの委託を受け、教員・保護者・児童生徒に対し適切な助言・指導を行った。なお年間の派遣回数は1件であった。
42	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	粟飯原　良造	① いわゆるグレーゾーンの児や診断されていない発達障害児，診断された発達障害児等の問題行動を見立てに従って対応策を立てる。また，その保護者との連携をカウンセリングのスキルを使って図る。 ② ①に関連して，小学校等にアウトリーチを試みる。 ③ カウンセリング理論・技法を学ぶ，具体的事例に結び付て知識と実践とを結ぶ。 ④ 実技または具体的事例に対する対応を求める記述試験を取り入れた成績評価を行う。	①②に関して，鳴門市と協力して，鳴門市内の保育所・園を巡回して保育士、保護者の相談を行い、専門機関へつないだり園での対応を助言した。また，幼稚園を巡回して4,5歳児健診を行い、保護者と教諭へ助言したり、専門機関につないだ。小学校等にアウトリーチを試みる。 ③ 徳島県臨床心理士会研究会として，「失敗事例検討会」を年4回行い、知識と実践をつなぐ検討会にした。 ④ 臨床心理面接研究Ⅱで記述試験を取り入れた成績評価を行った。	① 公開講座を鳴門教育大学だけでなく，鳴門市と共催して，発達障害児への対応等を普及させる。 ② 保育カウンセラーとして，カウンセリングやコンサルテーションを行う。 ③ 牟岐町，海陽町，東みよし町の乳幼児健診，4・5歳児健診にかかわり，育児支援，発達障害児支援にかかわる。 ④ 鳴門市の3歳児健診にかかわる。5歳児健診の準備として保育所・幼稚園への巡回相談にかかわる。また，新版K式発達検査を実施する場を大学院生に月1回，保護者対応の実践場面の体験を提供する。 ⑤ 保育園でのカウンセリング，研究，実習を大学院生に提供する。 ⑥ NPO法人育児支援センター「スキップ」で，カウンセリングを行う。 ⑦ 保育所，小中学校での講演，公共機関等主催のカウンセリング研修会の講師を務める。 ⑧ 心身健康センターのカウンセラーを務める。 ⑨ 本学心理・教育相談室相談員を務める。	① 公開講座を鳴門教育大学だけでなく，鳴門市と共催して，発達障害児への対応等を普及させことに努めた。 ② 保育カウンセラーとして，カウンセリングやコンサルテーションを2か所で，各月1回行った。 ③ 牟岐町，海陽町，東みよし町の乳幼児健診，4・5歳児健診にかかわり，育児支援，発達障害児支援にかかわった。 ④ 鳴門市の3歳児健診にかかわる。5歳児健診の準備として保育所・幼稚園への巡回相談にかかわった。また，新版K式発達検査を実施する場を大学院生に月1回，保護者対応の実践場面の体験を提供し、保護者と子どもの反応を直に体験する機会になった。 ⑤ 保育園でのカウンセリングに大学院生が陪席した。 ⑥ NPO法人育児支援センター「スキップ」で，カウンセリングを行い、専門機関につないだ。 ⑦ 保育所，小中学校での講演，公共機関等主催のカウンセリング研修会等で約20回講師を務めた。 ⑧ 心身健康センターのカウンセラーを務めた。 ⑨ 本学心理・教育相談室相談員を務めた。	① 長谷川式述部記録法を集大成する。 ② 面接技法，面接技術の習得を促すワーク，学習法を実践し，学会誌に投稿できるようにまとめる。 ③ かかわった乳幼児健診について検討して，学会誌に投稿できるように検討する。 ④ 解決志向アプローチを和風にアレンジして，学会雑誌に投稿する。 ⑤ 保育所，幼稚園，小中学校および家庭へのアウトリーチの方法を検討する。	① 長谷川式述部記録法を集大成の途中である。 ② 面接技法，面接技術の習得を促すワーク，学習法を実践し，学会誌に投稿できるようにまとめつつある。 ③ かかわった乳幼児健診について検討して，日本KABCアセスメント学会で発表したが，学会誌にはまだ投稿できていない。 ④ 解決志向アプローチを和風にアレンジして，糖尿病の事例で論文を作成中である。 ⑤ 保育所，幼稚園，小中学校および家庭へのアウトリーチの方法を検討し、来年度はスクールカウンセラーとしてさらに検討する予定である。	① 衛生委員会委員として，本学の安全性と健康増進に寄与する。 ② 大学院受験者を増やすために，学外でのアピールをする。 ④ 本学大学，大学院入試にかかわる。 ⑤ 心身健康センターのカウンセラーとして学生・職員のカウンセリングを行う。 ⑥ セクシャルハラスメント相談員として，セクシャルハラスメントの相談を行う。	① 衛生委員会委員として，本学の安全性と健康増進に寄与した。 ② 大学院受験者を増やすために，学外で、カウンセリング講習を実施してアピールした。 ④ 本学大学，大学院入試にかかわった。 ⑤ 心身健康センターのカウンセラーとして学生・職員のカウンセリングを行った。 ⑥ セクシャルハラスメント相談員として，セクシャルハラスメントの相談を行った。	① 日本小児心身医学会中国四国地方会の幹事を務める。 ② 定期的にカウンセリング研修会を開き，一般社会人や学生にカウンセリングを普及させる。 ③ 本学教育支援講師・アドバイザー等派遣事業に継続して講師登録を行う。 ④ 徳島県教育委員会のスクールカウンセラーを務める。 ⑤ 徳島県教育委員会のスクールプロフェッサーを務め，要請に応じて学校支援にかかわる。 ⑥ 徳島県総合教育センター特別支援のハートケアマネージャーを務め，要請に応じて相談を行う。 ⑦ 徳島県警察少年課の少年サポートアドバイザーを務める。	① 日本小児心身医学会中国四国地方会の幹事を務めた。 ② 定期的にカウンセリング研修会を開き，一般社会人や学生にカウンセリングを普及させた。受講生の中から本学臨床心理士養成コースへの入学を希望する者が本年度は6名出てきた。 ③ 本学教育支援講師・アドバイザー等派遣事業で，6回講師を務めた。 ④ 徳島県教育委員会のスクールカウンセラーを務めた。 ⑤ 徳島県教育委員会のスクールプロフェッサーを務め，要請に応じて学校支援にかかわった。 ⑥ 徳島県総合教育センター特別支援のハートケアマネージャーを務め，要請に応じて相談を行った。 ⑦ 徳島県警察少年課の少年サポートアドバイザーを務めた。	
43	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	中津　郁子	臨床心理士養成コースに来られる現職の教員は，臨床心理学的な観点から，現場に役立つ修士論文のテーマを見つけて書かれることがこれまでも多く見られている。その方向を尊重し継続していきたい。 また，現職の教員以外の学生に関しては，これまで心理教育相談における事例や教育現場での実践研究を修士論文にする人もいたが最近は減少傾向がみられる。事例や実践研究の論文に取り組むことで，臨床家としての基礎的な力を育成することもできることや そのような過去の実践を継承していくことの意義を伝えたい。また，保育所や幼稚園等の教育現場で行っていることに，学生が実習等で共に参加することを通して興味，関心を持たせ，修士論文につながるように考えていきたい。	幼稚園や保育所，小学校の現場に，学生が実習等で参加することを奨励し，それが修士論文に結び付くように指導，助言を行った。 ゼミ内の現職教員2名が，学校現場に出向き実践をし修論にまとめた。学校現場に役立つ研究になった。また，院生が研究したことの成果を学会や学会誌で発表した。	・小集団の演習や話し合いを授業の中に取り入れていくことを継続し，学生が主体的に授業や種々の活動に取り組めるようにする。 ・大学院生が大学の相談室で担当するケースの指導にあたっては，将来の臨床心理の力を養うことが出来るように，個別の指導の中で，個々の課題が明確になるようにしていく。 また，地域での実習経験によっても，学生の臨床の力が養育される。そのための場の確保や指導に努めたい。 ・学生の悩み等には個別に対応していく。また，心身健康センター（精神保健相談）相談員として，学生の相談に応じていきたい。	・学生が主体的に授業や種々の活動に取り組めるように，演習の在り方や話し合いの仕方を工夫した。その中で，考えを深めることが出来ている。 ・新たな保育所で箱庭の実習を実施したり，高齢者とのふれあい実習も継続してできるように実践フィールド研究の中に位置づけた。地域臨床を学ぶ機会を増やすことが出来た。 ・精神保健相談員として，学生の相談に応じたり，コース内の学生の悩みにも出来るだけ時間をとって話しを聴いた。	・保育所（園）における児童虐待予防に関する研究を継続する。現在まとめている調査結果を学会発表や論文で執筆していく予定である。 ・保育実習による，実習生や子ども・保護者に対する効果に関しては，引き続き研究する。また，保育士が気にかかる幼児へのプレイセラピー実習を昨年度から保育所と協働して行っている。今年度も引き続き実施の予定である。保育所との協働の在り方や， 実習生への指導，プレイセラピーの効果の検証等を行っていきたい。	・学会発表や研究論文（単著及び共著）を執筆した。 ・保育所での実習は，依頼により実習場所を2か所増やした。大学院生にとっては貴重な経験となり，子どもたちの成長も見られ，次年度も継続になった。研究としてまとめることが出来るように今後は考えていきたい。 ・保育士さんたちとの研究会が立ち上がり，定期的に研修を行っている。保育士さんたちの子どもを見る力の成長がみられている。今後も研究会を続け，保育士さんとの協働研究が出来ればと考えている。	・今年度は，臨床心理士養成コースのコース長としてコースの運営を通して大学運営に関わっていきたい。 ・引き続き，大学内のセクシャル・ハラスメント相談員，精神保健相談員，及び心理・教育相談室相談員として，大学内外の学生や職員，外部の方の相談に応じていきたい。	・臨床心理士養成コースのコース長として，コースの運営に携わった。しかし，様々な要因から次年度の大学院生は，定員割れしてしまった。次年度は定員確保に努めたい。 ・大学内の相談員や心理・教育相談室の相談員として，大学内外の学生や来談者の相談に定期的に応じてきた。	社会との連携 ・今年度も，県や市の子育て支援関係の委員を引き受け，地域社会に貢献していきたい。 ・子育てに関する講演会・講習会等を行い，子育て家庭の支援を継続していきたい。 ・今年度も保育所や幼稚園の相談員として，親子の話を聴き，親の子育てを支援していきたい。	・子ども・子育て会議などの委員を今年度も努め，地域の子育て支援に努めた。 また，教育支援アドバイザー講師には毎年登録し，今年度も複数回出かけた。 ・児童館職員への講習会や，ホームスタートの講習会などを行った。 ・今年度も保育所や幼稚園の相談員として，多数の保護者の話を聴き，子育てについて共に考え助言を行ったりした。	
44	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	久米　禎子	修士論文作成において，学校現場の実態に即し，また，学校現場に成果を還元できるようなテーマ設定および実践に取り組む。	学校現場での実践や保護者理解にかかわる内容の修士論文が作成された。その内容は学校の教育実践に生かせるものであるとともに，そうした論文に取り組み，執筆する過程は，大学院生自身の大きな学びとなったと考える。	学生個々の資質や到達度に応じて，学生が自ら目的意識を持って課題に取り組めるように内容や方法を工夫する。とくに「書く」「調べる」「話し合う」といった主体的な活動を積極的に取り入れたい。	授業を行う際に，まず自分自身の課題を明確にし，言語化することを求めた。そして，授業をとおしてどのような学びがあったか，課題がどのように達成されたかを，最初の自分の状態と照らし合わせて検証する作業も行った。教員からのフィードバックも適宜行った。そうした一連の作業をとおして，授業により積極的に関与し，主体的に学ぶ姿勢につながったと思われる。	箱庭療法についての研究を引き続き進めていく。また，教育実践についても論文にまとめたい。	これまでの大学院での「箱庭体験グループ」の授業実践について大学の研究紀要にまとめた。また，箱庭体験における「ぴったり感」について考察した論文を専門誌に投稿し，採択された。	大学院教務委員として，また，コースや部の一員として役割を果たしていく。	大学院教務委員として，また部やコースの一員として，役割を果たした。	徳島県教育委員会と連携し，不登校児童・生徒および保護者に対する心理的援助を行う。	徳島県教育委員会と連携し，不登校児童・生徒および保護者に対する心理的援助を行った。また，徳島市および鳴門市の保育所にて，プレイセラピーや箱庭遊びなどをつうじて，子育て支援の活動を行った。	
45	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	小倉　正義	①教育実践に貢献するためには，常に新しい教育課題に向き合い，日々取り組むための実践力が必要である。私は，修士論文を通して，そのような実践力を養成したいと考えている。 ②臨床心理学研究法の方法論の基礎を伝えた上で，自らの研究テーマを選択し，そのテーマと向き合い，その研究が現場でどのように役立つのかを常に意識して取り組めるように指導する。また，研究テーマに関わらず，できるだけ現場と触れる機会を設け，知識と実践をつなげる力を伸ばす機会を提供する。臨床心理士の専門性の一つとして，研究の力もあることを意識してもらえるように工夫する。 ③様々な学生同士の研究のディスカッションの経験することができる機会を提供することで，自分の研究テーマだけではなく，他の学生の研究テーマについて考え，ディスカッションする力を養成する。 ④ケース・カンファやスーパービジョンでも各人の修士論文をはじめ，研究とのつながりを意識して指導する。	①修士1年生，2年生ともに，年度当初の目標を掲げた通り，自らの修士論文のテーマに向き合うことを通して，常に新しい教育課題に向かい，日々取り組むための実践力を養うことができるように，研究指導に取り組んできた。 ②臨床心理士養成コースの実習の中では様々な現場とふれあう機会が設けられている。そのなかで，学生は現場の体験をするわけだが，ともすると研究とはまった別物ととらえがちなところもある。しかしながら，今取り組んでいる研究がどのように現場とつながっていきうるのか，ということを折に触れて話題にして指導してきた。中間報告で述べたように，一人一人のこれまでの経験や得意，不得意に合わせて指導を行えるように留意した。 ③中間報告で述べたように，修士1年生は集団でのゼミを行い，他者の研究発表に対して学生に積極的な発言を促すことで，自らの研究テーマだけでなく，様々な研究テーマについて考えることを要求してきた。少しずつではあるが，様々なテーマについて検討する視点が身についてきたと考えている。修士2年生は主に個人ゼミを実施していたが，文献のレビューや結果の分析，考察を通して自らのテーマにより深く検討することができるように指導している。またコースでも，修士2年生は4月に中間発表会，修士1年生は7月に構想発表会を行い，互いの研究テーマについて知り，考える時間を設けた。 ④目標に掲げた通り，ケース・カンファやスーパービジョンでも，ケースへの構えやケースを見立て考える力の養成と並行して，研究に必要な様々な角度から物事をみる力を養えるように指導してきた。	①学部生の授業は大人数の講義が多いが，大人数の講義であっても，引き続き可能な範囲で学生が自ら考えられるような授業展開を工夫したい。今年度から卒論の指導生がいないが，その分より講義や演習の中で積極的に学生に関わりたいと考えている。 ②大学院生（コース外も含む）には，学部授業（カウンセリング論・生徒指導論・発達心理学）や子ども理解と生徒指導で関わることになる。同じく大人数の講義ではあるが，学生が自ら考えられるような授業展開を工夫する。また，講義後やオフィスアワーなどを時間に，学生からの質問や相談に，ニーズがあればできるだけ応じていきたい。 ③大学院生（臨床心理士養成コース）には，講義・演習やケースのスーパービジョン，勉強会等を通して，臨床心理士の基礎的な力を養成していきたい。また，臨床心理士の資格試験に必要な知識を伝える。また研究指導では，研究者的な視点の養成を行う。 ③ゼミ生（M1，M2）を中心に，論文指導の中で研究指導はもちろんのこと，文章の論理展開の組み方や言葉の使い方についても指導する。 ④講義や演習，ゼミ等のなかで，学生の進路指導や職業意識を育てることもできるように工夫する。 ⑤その他，教員として大学生・大学院生の自己理解やメンタルヘルスをサポートする。また，サポートできる体制の構築するためにチームで検討していく。	①学部生の授業は，「カウンセリング論」「生徒指導論」「発達心理学」「発達臨床心理アセスメント」「阿波学」（集中）と担当した。「カウンセリング論」「生徒指導論」「発達心理学」は大講義の授業であるが，できる限り学生が自ら考えられるような授業展開を工夫した。「阿波学」では全日程参加はできなかったが，参加可能な日程の中で学生が体験を通して自ら考えることができるようにサポートした。「発達臨床心理アセスメント」では，知能検査について体験を交えながら，どのように現場で役立てるかについて考えることができるように指導を行った。また，生徒指導力のさらなる養成のために「生徒指導論」「カウンセリング論」の連続性や授業内容について，担当教員で密にディスカッションを行った。 ②大学院の授業では，学部授業同様，大人数の講義でも自ら考えられるような授業展開を工夫した。また，学生からの質問や相談に，講義後やメール等で可能な範囲で応えるようにつとめた。 ③大学院生（臨床心理士養成コース）には，講義・演習やケースのスーパービジョンを通して，臨床心理士の基礎的な力を養成や臨床心理士試験に必要な知識の獲得ができるようにつとめた。また，知能検査に関しては授業時間外に希望者に勉強会を開き，理解と実践力を高めるようにつとめた。さらに研究指導では，重点目標のところで詳しく述べたが，目標に掲げたように研究者的な視点をもつことができるように意識し指導している。その際に，研究者としても臨床心理士にとっても（教師にとっても）重要である倫理観について丁寧に扱った。 ④ゼミ生を中心に，論文指導の中で研究指導はもちろんのこと，文章の論理展開の組み方や言葉の使い方についても指導してきた。特に修士論文の作成にいたって「てにをは」の使い方まで細かく指導した。 ⑤講義や演習，ゼミ等のなかで自らについて考える時間を積極的に設け，学生の進路指導や職業意識を育てることもできるように工夫してきた。 ⑤一教員として大学生・大学院生の自己理解を促したり，メンタルヘルスをサポートするように心がけてきた。また，コース内でも必要な場合は連携を行い，学生にとって必要なサポートを行うことができるように心がけたり，全学でも一人一人の学生に応じたサポートできるようなシステムづくりに貢献してきた。学生支援を充実させることは，教員養成の質を高めるうえでも重要であると考えているので，今後もさらなる努力を続けていきたい。	①発達障害者の支援（特に認知的個性に関する研究，高校生・大学生への支援についての研究についての研究を中心に），発達障害児者の家族支援（ペアレント・メンターに関する研究を中心に），中高生のメンタルヘルスについての研究（ネットいじめ，インターネット依存に関する研究，不登校の子どもたちへの支援を中心に）の3つのテーマを中心に，引き続き実践性の高い研究を行う。 ②生徒指導に関する共同研究・プロジェクトを進める。 ③単著・共著含めてA論文を2本以上投稿する。 ④国際学会・国内学会ともに必要な成果発表を行う。 ⑤科研費をベースに研究をすすめるが，必要に応じて外部資金の獲得を行う。	①発達障害者の支援（特に認知的個性に関する研究，高校生・大学生への支援についての研究についての研究を中心に），発達障害児者の家族支援（ペアレント・メンターに関する研究を中心に），中高生のメンタルヘルスについての研究（ネットいじめ，インターネット依存に関する研究，不登校の子どもたちへの支援を中心に）の3つのテーマを中心に，予定通り研究をすすめることができた。 ②上述テーマの発達障害者への支援，中高生のメンタルヘルスについての研究とリンクして，生徒指導に関する共同研究をすすめていく準備ができた。 ③学校心理学研究に共同研究で2本論文が掲載が決定し，2015年4月に掲載予定である。その他，いくつかの研究をA論文に投稿したり，投稿準備中である。 ④世界精神医学会や日本生徒指導学会で発達障害者への支援に関する研究と実践の報告を，児童青年精神医学会で発達障害児者の家族支援に関する研究と実践の報告を，心理臨床学会で中高生のメンタルヘルスに関する研究発表を，日本教育心理学会で罪に問われた障害のある青年に対するネットワーク型支援システムの構築に関する自主シンポジウムを，学校適応に関する研究発表を行った。 ⑤科研費以外の外部資金への応募はできなかったが，科研費（若手B・研究代表者）で「ネットいじめの予防に関する包括的研究」，科研費（基盤C・分担研究者）で「発達障害・学習困難生徒学生の認知的個性を活かす特別支援の高大接続方策に関する研究 」を中心に研究を進めてきた。挑戦的萌芽研究に分担研究者として応募したり，そのほかの科研でも連携研究者，研究協力者として，他分野の研究に積極的に取り組んでいる。また，今後外部資金の獲得するための準備をすすめることもできた。	①大学の運営組織や運営目的をしっかりと意識し，研究や教育実践に取り組む ②臨床心理士養成コース内での責務を果たす。今年度はM1の担任なので，担任の責務を果たす。コース長，副コース長等を積極的にサポートする。 ③大学院入試委員会の役割を果たす。その一環として，大学院の広報活動を積極的に行う。昨年度に引き続き東海地方を中心に他大学に説明会・資料配付に赴く。 ④連合大学院教員としての責務を果たす	①予定通り，大学の運営組織や運営目的をしっかりと意識し，研究や教育実践に取り組んでいる ②修士1年生の担任として，特に4月・5月にオリエンテーションや学生生活全般のサポートなどの責務を果たした。その後も，学生のニーズに応じて担任としての責務を果たせるようにした。また，目的に掲げたとおりコース長，副コース長等を積極的にサポートしてきた。 ③大学院入試委員会として，その役割を果たせるように努力した。また，大学院の広報活動を積極的に行った。 ④連合大学院の〇合教員の資格を取得した。今後も連合大学院教員としての役割を考えていきたい。	昨年に引き続き，積極的に附属学校や社会貢献を行う。 ①附属小学校・幼稚園におけるスクールカウンセラーとして，特に附属学校の教育相談や特別支援教育の部門での連携を図りたい（附属学校）。 ②徳島県教育委員会や徳島市教育委員会など学校教育分野で各機関の連携し，様々なニーズのある子どもたちやその保護者への支援を行う（社会貢献） ③徳島県発達障害者支援センターなど県内外の各機関との連携を行い，発達障害の子どもたちとその保護者の方々への支援システムの構築に貢献する（社会貢献） ④研究成果などを積極的に社会に還元するために，講演や研修会活動を積極的に行う（社会貢献） ⑤教育支援講師・アドバイザー事業，公開講座，なるっ子わくわく教室に貢献する（社会貢献） ⑥その他，研究者や大学教員として，社会に貢献できることを常に考え実践する（社会貢献）	①予定通り，附属小学校・幼稚園におけるスクールカウンセラーとして附属学校との連携を図ることができ，2015年度を見据えた議論も始めることができた。また附属特別支援学校のプロジェクトにもごく一部だが協力した。今後の連携をさらに深めていきたい。 ②予定通り，徳島県教育委員会・徳島市教育委員会・石井町教育委員会などの役割を担ったり，その他各関係機関と連携を行い，様々なニーズのある子どもたちやその保護者への支援を行ってきた。また，今年度から徳島県スクールカウンセラーとしても，心理教育相談を行った。 ③予定通り，徳島県発達障害者支援センターなど県内外の各機関との連携を行い，発達障害の子どもたちとその保護者の方々への支援システムの構築に貢献してきた。また各地域の保健センターにも協力連携し，子育て支援にも貢献してきた。 ④予定通り，研究成果などを積極的に社会に還元するために，県内外で講演や研修会活動を積極的に行ってきた。 ⑤教育支援講師・アドバイザー事業は，要望があれば積極的に受けてきた（計9件）。また，公開講座（子どもパートナー認証講座），なるっ子わくわく教室（視点の変え方）も実施した。 ⑥その他，目的に掲げた通り，研究者や大学教員として，社会に貢献できることを常に考え実践している	発達臨床心理学の専門家として，徳島県内を中心に様々な現場のニーズに応えることができるように，学生の模範となるように，研究と実践のつながりを常に意識しながら，教育・研究・臨床活動を行ってきた。 徳島県臨床心理士会事務局長，NPO法人日本ペアレント・メンター研究会理事・事務局長など，社会的な役割も積極的に担ってきた。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
46	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	新見　眞子	【学部の学位・称号】 教育養成大学大学院の修士論文については、修学期中文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、教職大学院においては、学部卒業時教員を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般センの工夫を示して頂いて。	学校現場で役立つ実践的な題材の提示や助言を行った。	1）学部の授業においては、学生が主体的に取り組めるよう参加体験型の授業を取り入れながら、教員としての資質・能力の獲得を目指していきたい。 2）臨床心理士養成に向け、スーパーヴィジョンやインテーク陪席を通してカウンセリングの基礎知識や技能の習得をさせる。 3）学生との信頼関係を築き、悩みや進路相談に親身になって応じる。	1）学部学生には、参加体験型の授業形態をとおして、実践的な授業内容や方法を習得させた。 2）臨床心理士を目指す大学院生の養成に向け、スーパーヴィジョンやインテークの陪席などをとおして、 面接技法やカウンセリングの基礎知識を習得させた。 3）学生生活支援においては、常に学生の様子にも配り、信頼関係の構築に努めた。また、学生の 多岐にわたる相談には、親身になって応じた。特に、就職相談や就職支援を丁寧に行った。	1）児童生徒の示すさまざまな問題行動の理解と支援の在り方を研究する。 2）学校支援につながるスクールカウンセリングの在り方や課題について実践を通した検証を行う。 3）学校現場に活かすカウンセリングの在り方を研究する。	1）それぞれのケースから問題の理解に努め、ケースから学ぶものが多かった。 2）スクールカウンセラーと学校の連携の在り方を検討することができ、学校支援につながった。 3）アドラー心理学を学校で活用させることを目指し、文献研究や研修会に参加し、検討を行った。	1）心理・教育心理室の組織的な運営と充実を図る。 2）地域連携委員として積極的に運営に参画する。	1）心理・教育心理室の新相談室長として、インテークを担当し、相談室運営の充実に努めた。 また、地域にひらかれた相談室に向けて、誘実に相談活動を行った。 2）地域連携委員会、実地教育委員会の委員として、大学運営に参画した。	1）附属中学校のスクールカウンセラーとして、生徒や保護者、教員の支援を積極的に行う。 2）適応指導教室で実習を行う学生の指導を通して、適応指導教室への支援を行うとともに連携を図る。	1）スクールカウンセラーとして保護者や生徒へのカウンセリングを行った。矢生方とはコンサルテーションや情報交換を密に。 連携に努めた。また、松丸の生徒指導委員会に参加し、それぞれのケースに応じた対応の在り方を検討した。 2）学生が実習を行わせていただいている適応指導教室とは、適宜連携をとり、情報交換を行った。また、事例検討会でスーパーヴァイジョンを行った。	本学での勤務は最後の年となった。心理・教育相談室の新相談室長として、相談活動の充実に努めた。 日本生徒指導学会理事大会の運営に、会計として参画した。
47	基礎・臨床系教育部	臨床心理士養成コース	吉川　洋和	教育実践に貢献できるものを明らかにするために、ミビジンスに基づいた発想が必要である。したがって、修士論文指導においては、下記の取り組みと指導を重点的に行う。 ①エビデンスレベルの高い研究デザインの立案の仕方 ②収集したデータについての定量的解析 ③解析結果に基づいた論理的考察	修士論文指導においては、指導する大学院生が独自のデータ解析と論理的考察を重視した発想が者についてあったから、①-②-③のすべてにおいて年度目標を十分に達成することができた。	【教育】 年度末の授業は、臨床心理士養成コースの大学院生を対象としたものが大半であるため、具体的な実践方法を中心とした内容で授業を行う。 教育よりも研究室への来訪者が大きく増加したため、年度目標を十分に達成することができたと考えられる。 【学生生活支援】 学生生活支援においては、定期的なオフィスアワーの設定とともに研究室の訪問を随時推奨し、質問・相談に応じる。	【教育】 授業・実習について、年度目標を十分に達成することができたと考えられる。 【学生生活支援】 教育よりも研究室への来訪者が大きく増加したため、年度目標を十分に達成することができたと考えられる。	認知・行動療法の視点に基づき以下の研究を遂行する。 ①医学的処置に対する効果的な治療プログラムの開発（新手研究（B）） ②中学生の抑うつ不安は学業成績との関連についての疫学研究 ③地域に根ざした認知・行動療法の実践事例の作成	【研究の成果】 ①については、科学研究費補助金の研究代表者として、予定通りの進捗状況であった。 ②については、学校と連携し、予定通りの進捗状況であった。 ③については、他大学研究者と連携し、予定通りの進捗状況であった。	臨床心理士養成コースの大学院生の定員確保について、学外機関への情報提供などに広報活動を積極的に行う。また、大学院生の就職支援についても関連機関への紹介を行う。	臨床心理士養成コースの定員確保については、学外機関へ大学院の紹介を行った。しかしながら、2015年度定員に達しなかったために、2014年度入試に向けた取り組みが必要であるとみなした。 大学院生の就職支援については、関連機関へ積極的な紹介を行い、多くの大学院生が常勤の職員として就職することができた。	【附属学校・社会との連携】 スクールカウンセラーとして、附属中学校との連携を行う。	【附属学校・社会との連携】 付属学校との連携については、スクールカウンセラーとして、生徒・教員への相談援助活動を行った。 社会との連携については、埼玉県青少年育成審議会委員として、県内の青少年の健康・福祉の向上に寄与することができた。	
48	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	建安　利秀	声楽分野におけるこれまでの修士論文では、①声楽実技指導に関する研究と、②声楽作品に関する研究のいづれかを行うことができる。 1)の声楽実技指導に関する研究では、当然のことながら学校音楽の授業における声楽実技指導を内容とすることになる。 2)の作品研究については、小中高等学校の音楽の授業で取り扱われる作品、または伴奏楽の作品について研究することになるが、当然その中に学校教育実践との関係がついて言及することになる。 3)上記以外でも、今後の音楽教育実践に資することのできる論文内容にしていくよう指導していく。	教育実践に関する目標は、学生が将来学校教員として、子どもたちに自信をもって授業を教えていくことができるような授業を展開していく。そのために、まず学生自身が自分の能力を向上させる。それを改善していけるような授業を展開していく。 具体的には、 1)声楽の授業において、学生が自らの演奏や表現活動について客観的に観察できるような授業内容を考える。 2)学生同士でお互いの演奏を聴いて、意見交換や相互批評ができるような授業にしていく。 3)校集場面を考えた演奏表現について考え、模擬授業を行う。 学生生活支援に関する目標は、 1)学生個々と話をする場合をできるだけ多く設けず、学生が自らの目標に向かって頑張り続けることができるように支援する。 2)学生の自主性を尊重し、必要以上に口出しはしない。 3)教職を含めた進路がゴールに関しては、演奏に関する技術的な指導とともに、合唱団の運営についても助言していく。	教育支援については、学生が第に学校教員として声楽指導ができるようになることを目標として授業を進めた。具体的には受験のために使う曲としてか・ か・高等学校の音楽科の教科書にある歌唱教材を必ず含めて、その曲が自ら歌えるようになるとともに歌唱指導ができるように授業を行った。 また自らの演奏を客観的に観察できるように録音録画を利用し、授業の中でそれを見ることによって自分の演奏での反省点に気づき、また他の学生の演奏に比較することができ、それぞれの良さや改善点を知ることができた。今後の課題として、演奏についての意見交換や相互批判が普段から自由にできるような雰囲気をつくりく必要があると感じた。 一般的な学生生活支援に関しては、できるだけ学生の自主性を尊重し、必要なときだけ指導・助言をするスタンスをとった。 合唱団がパールの最終発表として、入学式や大学祭での歌唱指導と指揮、また定期演奏会の指導と指揮を行い、また運営についての指導助言を行った。	研究については、声楽における発声と聴読における発声との共通性を見出していきたい。 具体的には、 ①平成26年度から3年計画で始めた科学研究費助成事業「教員を目指す学生の「声」を育てる授業の開発」の2年目にあたるので、この研究の取り組みをさらに充実させ、現行の授業に反映させていきたい。 ②またこれまでけってきたドイツ・バロック期及びイヴリ・ロマン派の声楽曲の実践研究をさらに進める。また・ヴリアドの日本歌曲の演奏にもたをはこ。 ③声声法については、聴と朗読との関連性を明らかにし、誰でも、またグループでもできるような練習方法を考えていく。	1)すべての声楽関連の授業において学生の「声」を記録し、その時の声や姿勢について分析し、それを授業に反映できるようにした。この研究は現在も継続中で、最終的に科研費による「教員を目指す学生の「声」を育てる授業の開発」としてまとめることとなる。 2)イヴリ・バロック期及びイヴリ・ロマン派の声楽曲の実践的研究としては、9月にパッハのマタイ受難曲の演奏会を松本市で行い、6月には神戸市で明石バッハのカンタータによる演奏会を行った。また7月には堺市において後期ロマン派の作曲家R．シュトラウスの歌曲による演奏会を行った。その他東島真弓氏において多数の演奏会を行った。 3)声声法については、ドイツやイタリアの指導法を参考にしながら、日本人に合った独自の練習方法を検討し、授業等で検証を行った。	任命された委員会の運営において、大学の将来を見据えたヴィジョンを持って必要な役割を果たしていく。 また「エコアクション21」に積極的に参加し、自然資源の無駄遣いをできるだけなくしようとする。	大学院教務委員会委員、附属図書館運営委員として、大学の将来を見据えたヴィジョンをもって果たすべき役割を行った。 電気の無駄遣いをなくすため、不必要な室内点灯や冷暖房の使用を行わないように努めた。また資料等のプリントは可能な限り両面印刷を行い、不要になった紙資源は資源ごみに使えるよう処理を行った。	公開講座の開催、教育支援講師・アドバイザー等派遣事業や地域における文化事業に積極的に参加する。 具体的には： ①公開講座「楽しい歌唱教室」を通して、現職教員への声楽実技指導、また地域社会の音楽文化の促進に努める。 ②NPO法人「専門第九を歌う会」の設立趣意書及び合唱指導者として、地域社会の音楽文化の発展に努める。 ③嬬恋市の取り組み「第九プランドセプロジェクト推進協議会」教育部会副委員長として、地域社会のプロジェクトに貢献できるよう努める。 ④演奏会等を通じて、地域社会の音楽文化の促進に努める。	①公開講座「楽しい歌唱教室」を開講し、現職教員や一般市民に対し、歌唱を通して自分の声やからだと向き合い、楽しく歌唱しながら音楽文化に親しみ、健康で元気になることを目指した。 ②NPO法人「専門第九を歌う会」の設立趣意書及び合唱指導者として、6月に開催される全国規模の第九演奏会の合唱指揮を行うために、さまざまな活動を通して地域社会の音楽文化の発展に努めた。 ③嬬恋市の取り組み「第九プランドセプロジェクト推進協議会」教育部会副委員長として、地域社会のプロジェクトに貢献できるよう努める。 ④演奏会を中心とした演奏会に数多く出演し、地域社会における音楽文化の促進に努めた。	教科内容学研究プロジェクトの一環としての学校教科書門科目テキスト「音楽」の教科書作成を行い、その内容について音楽コース内での講師を取りまとめ教科書の発行に寄与した。
49	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	長島　真人	音楽科教育学の修士論文の指導に関しては、次のことに留意して取り組み、指導をこなしていきたい。 ①院生たちへ人ひとりの関心領域や問題意識に関して、対話的な指導を通して明記し、院生たちの「ふに中き（手学的に）探究可能な学問的概念に変換を通して考察することが出来るように促し、「問題の所在と研究の目的」が記述できるように指導する。 ②院生たちへ人ひとりの関心領域や問題意識に関して、対話的な指導を通して明記し、院生たちの「ふに中き（手学的に）探究可能な学問的概念に変換を通して考察することが出来るように促し、「問題の所在と研究の目的」が記述できるように指導した。特に、音楽科教育の実践に関する問題に注意が特定されるように指導した。 また、次年度からスケジュールに入り、ぜひに参加する予定の研究生や他大学の学部生から研究に関する相談を受け、まず最初に、この「問題の所在と研究の目的」を意識しながら議論が白熱する中で、 ②院生に非常に専門的概念が、院生の探究の結果、適切であった場合は、さらに専門的な学術的概念を広げて、より構造的に「問題の所在と研究の目的」が記述できるように指導した。一方、院生に非常に専門的概念が不適切であった場合は、別の学術的概念で「問題の所在と研究の目的」を再検討させ、論理的に記述できるように指導した。 ③「問題の所在と研究の目的」が論理的に記述できるように、①の段階で学術的概念が含まれるような記述が出来るように心がけた。これらの学術的概念の中から中核的な概念を特定し、これをキーワードとして研究題目を特定するように指導した。 ④研究題目が特定されたら、先行研究事例を収集させ、これらを参考にする共神に、研究の独創性を明確にさせる。 ⑤研究を通して、問題の解決への道筋を記述させ、記述された原稿が論理的整合性を持つことが出来るように指導を展開する。 ⑥考察が進むにつれて、研究題目から最のタイトルを検討させ、論文の全体構成をイメージさせる。 ⑦章の構成が定まってきたら、様々分野的に構想されるように促す。 ⑧音楽科教育の実践に発展的に活かされるような提案や課題が明確になるように論文の結論をまとめさせた。	音楽科教育学の修士論文の指導に関しては、次のことに留意して取り組み、指導をこなした。 ①院生たちへ人ひとりの関心領域や問題意識に関して、対話的な指導を通して明記し、院生たちの「ふに中き（手学的に）探究可能な学問的概念に変換を通して考察することが出来るように促し、「問題の所在と研究の目的」が記述できるように指導した。特に、音楽科教育の実践に関する問題に注意が特定されるように指導した。 また、次年度からスケジュールに入り、ぜひに参加する予定の研究生や他大学の学部生から研究に関する相談を受け、まず最初に、この「問題の所在と研究の目的」を意識しながら議論が白熱する中で、 ②院生に非常に専門的概念が、院生の探究の結果、適切であった場合は、さらに専門的な学術的概念を広げて、より構造的に「問題の所在と研究の目的」が記述できるように指導した。一方、院生に非常に専門的概念が不適切であった場合は、別の学術的概念で「問題の所在と研究の目的」を再検討させ、論理的に記述できるように指導した。 ③「問題の所在と研究の目的」が論理的に記述できるように心がけた。これらの学術的概念の中から中核的な概念を特定し、これをキーワードとして研究題目を特定するように指導した。 ④研究題目が特定されたら、先行研究事例を収集させ、これらを参考にする共神に、研究の独創性を明確にさせる。 ⑤研究を通して、問題の解決への道筋を記述させ、記述された原稿が論理的整合性を持つことが出来るように指導を展開した。 ⑥考察が進むにつれて、研究題目から最のタイトルを検討させ、論文の全体構成をイメージさせた。 ⑦章の構成が定まってきたら、様々分野的に構想されるように促した。今年度の修士論文を提出する予定の院生に対しては、中間発表会において、ここまでの成果が報告できるように指導した。 ⑧音楽科教育の実践に発展的に活かされるような提案や課題が明確になるように論文の結論をまとめさせた。	学校教育に対する今日的な社会の要請と学生・院生たちの個々の要求に注意を払いながら、授業の構想と展開、就職支援、課外指導、生活支援を総続的に推進していく。具体的な計画としては、以下のような観点に留意する。 1)平成19年度に開発した音楽科の授業実践力のスタンダードを平成22年度に開発したカリキュラムマップをふまえながら、音楽科の教科論と授業論を総合講義の見直しを継続する。 2)講義だけでなく、演習として、教材分析や指導案作り、模擬授業、ロールプレイングを活用する工夫を継続する。 3)演習の中で、具体的な作業課題を工夫し、多様なデータから評価が行えるように工夫する。 4)就職支援として、小論文や自己アピール文等の執筆方法を個別に添削指導する。 5)課外活動の支援として、構内教育大学フィルハーモニー管弦楽団の指揮者として、学生たちを指導し、演奏行事等に参加する。 6)オフィスアワー e-mail を活用して、学生の相談への対応や個別指導が円滑に行えるようにする。 7)クラス担当教員として、キャリアファイルートをガイドラインとして活用しながら、学生たちの修学や大学生活に関する支援・指導を行う。	音楽科教育学担当として継続してきた教科の思想の歴史的、哲学的な研究と音楽授業の理論的な研究を推進していくと同時に、教師教育の改善をめざした研究を推進していく。具体的な計画としては、以下のような観点に留意した。 1)継続研究である「19世紀アメリカにおける学校音楽教育研究」に関して、5月の音楽教育学会と10月の日本教科教育学会において、学会発表を行った。 2)継続研究である音楽科の授業理論の構築に関する研究を進め、研修会で講義や演習として活用する。 3)教育実践力の向上をめざす学生たちのための評価スタンダードの活用方法を検討する。 4)「教職実践演習」の内容とのに直接的に関連していくパ「キャリアファイルノート」による学生生活支援のあり方について検討する。	音楽科教育学担当として継続してきた教科の思想の歴史的、哲学的な研究と音楽授業の理論的な研究を推進していくと同時に、教師教育の改善をめざした研究を推進していく。具体的な計画としては、以下のような観点に留意した。 1)継続研究である「19世紀アメリカにおける学校音楽教育研究」に関して、学会発表や論文執筆を行う。 2)継続研究である音楽科の授業理論の構築に関する研究を進め、研修会で講義や演習として活用する。 3)教育実践力の向上をめざす学生たちのための評価スタンダードの活用方法を検討する。 4)「教職実践演習」の内容とのに直接的に関連していパ「キャリアファイルノート」による学生生活支援のあり方について検討した。 5)授業を通じて、教材研究と模擬授業の演習を行い、特に、発問の技のあり方について、検討した。 6)教育実践力の向上とまのざす学生たちのための評価スタンダードの活用方法を検討した。この成果は、6月に大阪市で開催された日本教育大学協会全国音楽部門大学部会で発表した。 7)「教職実践演習」の内容とのに直接的に関連していパ「キャリアファイルノート」による学生生活支援のあり方について検討した。この成果も、9月に札幌市で開催された日本教育大学協会全国音楽部門大学部会で発表した。	各種委員会活動やPDの活動、学生支援活動において、任務内容に即した活動を展開する。 2)地域連携委員として、積極的に運営に参画する。	各種委員会活動やPDの活動、学生支援活動において、任務内容に即した活動を展開してきた。特に、今年度は、地域連携委員として、上勝町に相談活動を行った。 2)大学の教師教育に関する研修行事に参画した。5月に札幌市で開催された日本教育大学協会全国音楽部門大学部会に出席するとともに、カナダのオンタリオ王立大学で開催された国際的な教師教育の協議会に出席した。 3)平成26年度学部入学生のクラス担当教員として、その任務を遂行してきた。学生たちは、4年生になり、一人ひとりの就職に向けての指導や進学に向けての指導を精力的に行った。7名中6名が、教員採用試験の二次試験に合格した。	各種委員会活動やPDの活動、学生支援活動において、任務内容に即した活動を展開した。特に、今年度は、地域連携委員として、上勝町で開催された本学の教育・文化フォーラムに取組を行った。 2)大学の教師教育に関する研修行事に参画した。5月に札幌市で開催された日本教育大学協会全国音楽部門大学部会に出席するとともに、カナダのオンタリオ王立大学で開催された国際的な教師教育の協議会に出席した。 3)平成26年度学部入学生のクラス担当教員として、その任務を遂行してきた。学生たちは、4年生になり、一人ひとりの就職に向けての指導や進学に向けての指導を精力的に行った。7名中6名が、教員採用試験の二次試験に合格した。	音楽科教育学の喜新情報をふまえながら、附属学校や公立学校、学会組織の研究・運営活動に参画し、連携を深めた。具体的には、以下のような観点に留意する。 1)附属小・中学校の教育研究活動に参画し、事前の研究協議会や研究大会に参加する。 2)日本学校音楽教育実践学会や日本教科教育学会、音楽教育史学会、中国四国教育学会等において、学会の組織作りや研究大会の準備、紀要編集等に協力する。 3)学部の教育実践コア科目である「初等中等教科教育実践Ⅱ」「初等中等教科教育実践Ⅲ」の講義を実施するために、教科内容学担当の教員と附属学校の教諭、公立学校の教諭と連携し、本学の教師教育のためのコア・カリキュラムの具体的な開発方法を工夫する。 4)音楽科教育学の立場から、「免許更新講習」と「10年経験者研修」の講義と演習を計画し、実践する。	音楽科教育学の喜新情報をふまえながら、附属学校や公立学校、学会組織の研究・運営活動に参画し、連携を深めた。具体的には、以下のような観点に留意した。 1)附属小・中学校の教育研究活動に参画し、事前の研究協議会や研究大会に参加した。 2)日本学校音楽教育実践学会や日本教科教育学会、音楽教育史学会、中国四国教育学会等において、学会の組織作りや研究大会の準備、紀要編集等に協力した。 2)日本学校音楽教育実践学会や日本教科教育学会、音楽教育史学会、中国四国教育学会等において、学会の組織作りや研究大会の準備、紀要編集等に協力した。今年度は、新しく設立された日本教科内容学会の理事として、学会の組織作りに参画してきた。 2学部の教育実践コア科目である「初等中等教科教育実践Ⅱ」「初等中等教科教育実践Ⅲ」の講義を実施するために、教科内容学担当の教員と附属学校の教諭、公立学校の教諭と連携し、本学の教師教育のためのコア・カリキュラムの具体的な開発方法を工夫した。今年度は、「初等中等教科教育実践Ⅲ」の実践の成果を9月に開催された日本教科内容学会で発表することができた。 4)音楽科教育学の立場から、「免許更新講習」と「10年経験者研修」の講義と演習を計画し、実践した。今年度も、若手の講義をふまえながら教材研究と模擬授業の演習を行い、発問の技についての検討を深めた。	音楽科教育研究活動とは別に、信長岡の小学校生徒指導研究部会の研究活動に参画し、助言や講演を行った。 平成26年度信長岡市の小学校と信長岡教育委員会との連携に関する連絡協議会第3回専門部会(教員養成・研修部会)の委員として、本学から参画し、教員養成に関わる情報交換や、教員研修に関わる具体的な支援や協議を行ってきた。 本学とフィンランドのタンペレ大学学校教育学部との学術交流協定の準備に関わり、9月に調印の応に出席した。 2015年に本学で開催されるICET(International Council on Education for Teaching)の大会の準備に関わり、今年度の8月にカナダのオンタリオ王立大学で開催された大会に出席し、次年度の開催向けて、活動を展開してきた。 2015年に本学で開催されるロ中学校交流研究会の準備に関わり、活動を展開してきた。
50	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	森　正	5月に行なわれる教育大学協会の全国大会において、「教員養成系大学における ピアノの実技指導」というこをテーマに提案を行なうが、ここでは実技指導における「音技な」の問題を取りげることにしている。実際のかー中学校の音楽の授業において、音ゃうな事象を言語化して生徒に伝える能力が非常に重要であると考えるからである。今回の提案は実地教育を経験した学部の学生に対して、ピアノの実技指導における「言技な」と実地教育にどのような関連があったかのかをアンケート調査し、その結果をもとに提案をまとめます。大学院の学生には、今回の提案をもとに修士論文を書く際にはこの実技指導を行なう際の言語化の問題について提起したい。	5月に行なわれる教育大学協会の全国大会において、「教員養成系大学における ピアノの実技指導」というこをテーマに提案を行なうが、ここでは実技指導における「音技な」の問題を取りげることにしている。実際のかー中学校の音楽の授業において、言ゃうな事象を言語化して生徒に伝える能力が非常に重要であると考えるからである。今回の提案は実地教育を経験した学部の学生に対して、ピアノの実技指導における「言技な」と実地教育にどのような関連があったかのかをアンケート調査し、その結果をもとに提案をまとめます。大学院の学生には、今回の提案をもとに修士論文を書く際にはこの実技指導を行なう際の言語化の問題について提起したい。	1.3年生3名、4年生4名の卒業研究を指導する学部生については、コースの主幾する学内演奏会に出演させるなど、卒業研究に向けた準備を円滑に進めさせると同時に、教員採用試験や大学院受験を含め、卒業後の進路に関して情報的な面を行い 3名の4年生が教員採用試験に合格した。 2.課題研究を受け持つ5名の大学院生については、教員採用試験を受験することを推奨する場合は、その試験に向けての準備状況等の把握に努め、適宜必要なアドヴァイスができるようにした。その結果者了したふ名の学生うち6名が教員採用試験に合格 ６ふひとりは研究生としてさらに研究活動を継続することになった。 3.また初等音楽コは、特に長期間修の大学院生に対して教職キャリア支援センターのピアノ実技指導との連携に関して検討し、可能な限り有効となる指導が出来る体制を考える。	1.3年生3名、4年生4名の卒業研究を指導する学部生については、コースの主幾する学内演奏会に出演させるなど、卒業研究に向けた準備を円滑に進めさせると同時に、教員採用試験や大学院受験を含め、卒業後の進路に関して情報的な面を行い 3名の4年生が教員採用試験に合格した。 2.課題研究を受け持つ5名の大学院生については、教員採用試験を受験することを推奨する場合は、その試験に向けての準備状況等の把握に努め、適宜必要なアドヴァイスができるようにした。その結果者了したふ名の学生うち6名が教員採用試験に合格 ６ふひとりは研究生としてさらに研究活動を継続することになった。 3.また初等音楽コは、特に長期間修の大学院生に対して教職キャリア支援センターのピアノ実技指導との連携に関して検討し、可能な限り有効となる指導が出来る体制を考える。	小林圭子氏指揮と、ベートーヴェンおよびプロコフィエフの作品を中心に室内楽の発表に関する研究を行い、その成果を10月に大阪で行なわれる演奏会で発表する。 2.バッハ、シューベルト、ドビュッシーのピアノ独奏作品の演奏方法に関する研究を行い、6月に徳島と東京で行なう演奏会でその成果を発表する。 3.三国正樹群馬大学教授と、近代のフランス人の作曲家による、2台のピアノのための作品に関する共同研究を行い、その成果を5月に東京で行なわれる演奏会において発表する。 4.「教員養成系大学における ピアノの実技指導」をテーマに、三重大学、宮崎大学、岡山大学、兵庫教育大学の教員と共同研究を行い、その成果を5月に行なわれる教育大協会の全国大会において発表として まとめ発表する。	小林圭子氏指揮と、ベートーヴェンおよびプロコフィエフの作品を中心に室内楽の発表に関する研究を行い、その成果を10月に大阪で行なわれる演奏会で発表する。 2.バッハ、シューベルト、ドビュッシーのピアノ独奏作品の演奏方法に関する研究を行い、6月に徳島と東京で行なう演奏会でその成果を発表する。 3.三国正樹群馬大学教授と、近代のフランス人の作曲家による、2台のピアノのための作品に関する共同研究を行い、その成果を5月に東京で行なわれる演奏会において発表する。	2014年度の大学院への新入生について、自分が指導教員になる学生が必ずもいるが、2 名ともに出身大学は自分がこれまで指導したことのない、初めての大学からの進学者である。このようなケースにおいて、今後の本学大学院への進学に関心付けるう、これらの大学の教員との連絡をとるよう努めたい。また、すでに2015年度大学院入試について、ピアノの実技に関する問い合わせをいただいた大学が複数あるが、これらについても連絡をとり本学の受験を学生に勧めていただけるようすすめる。	いべつかの音楽関係、及び教員養成系大学に本学大学院についての広報活動を行なったが、2015年度は、それらの広報活動を行なっていない。音楽や教育を専門にない大学から新入生を受け入れる予定である。今後このようなケースも考えられるので、大学院で新しく音楽や教育について研究を始める学生への対応を検討することの必要性を強く感じた。	社会においては財団法人日本ピアノ教育連盟の主催するコンクールやオーディション等の活動を通して、小・中・高校生のピアノ演奏に関する技術を向上させ、適切な音楽文化の発展に寄与する。	社会においては財団法人日本ピアノ教育連盟の主催するコンクールやオーディション等の活動を通して、小・中・高校生のピアノ演奏に関する技術を向上させ、適切な音楽文化の発展に寄与した。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
51	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	山田　啓明	中期目標に掲げた課題研究を受講する者はいないが、ただし、近年修士論文を指導した学生は学校管の教育実践に多かれ少なかれ関わるテーマであった。	中期目標に掲げた課題研究を受講する者はいないが、ただし、近年修士論文を指導した学生は学校管の教育実践に多かれ少なかれ関わるテーマであった。	学期3年次生、および大学院のチューターを務めるとともに、教員採用試験対策として、隔週に1回、学期3年次生の担任とともに大学院のチューターも務める。学期3年次生については、1人1人実地教育、ならびに教員採用試験に向けた取り組みが始まるので、学生達が円滑に取り組める環境整えたい。同時に学内演奏会の場も担当するので、2回の学内演奏会および卒業・修了演奏試験の実施について遺漏の無いように務めたい。	学期3年次生、および大学院のチューターを務めるとともに、教員採用試験対策として、隔週に1回、学期3年次生の担任とともに大学院のチューターも務める。学期3年次生については、1人1人実地教育、ならびに教員採用試験に向けた取り組みが始まるので、学生達が円滑に取り組める環境整えたい。同時に学内演奏会の場も担当するので、2回の学内演奏会および卒業・修了演奏試験の実施について遺漏の無いように務めた。	7月5日セグコンサート、7月27日小川明子アルトリサイタル（東京）、10月4日小川明子アルトリサイタル（埼玉）、12月21日大分大学医学部管弦楽団定期演奏会、1月25日管風楽管楽団ニューイヤーコンサート	7月5日セグコンサート、7月27日小川明子アルトリサイタル（東京）、10月4日小川明子アルトリサイタル（埼玉）、12月21日大分大学医学部管弦楽団定期演奏会、1月25日管風楽管楽団ニューイヤーコンサート	年度目標に掲げた演奏会に加え、東京藝術大学音楽学部同声合唱藝風常任指揮者演奏会（4月29日、会場：調布）、コーラスロニューヤーコンサート（1月12日、指揮）、晩門アカデミー合唱団演奏会（3月15日、指揮）も行なった。なお、3月に「とくしま芸術文化奨励賞」を受賞した。	年年で学部入試委員が4年目となるので、遺漏の無いように務めたい。	4年間、学部入試委員の業務を務めることができた。	7月21日徳島県合唱コンクール審査員	上記審査員の他に、「サンポートホール高松デビューリサイタル」審査員、徳島県合唱アンサンブルコンテスト審査員、2月以降からは香川ジュニアオーケストラの指導を務めている。	とくになし
52	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	三浦　秀憲	担当している音楽器分野の研究で、音楽の授業実践と密接に関るのは、音楽そのものの理解と実践力に加えて、呼吸法、フレーニングとアーティキュレーション、音楽の礼儀作法あるいは文化各界界隈の音程感、リズム感、アンサンブルの技術といった専門的な事項である。修士論文の指導にあたって、これらの事項を十分理解したうえ、楽曲分析や演奏解釈が行えるよう次のような取り組み・工夫を行う。 ①上記の演奏関係に係る事項に対する理解が、学生によって異なるため、その段階に応じて専門書の調査や演奏実践により一定の理解を得ることができるよう指導する。 ②研究対象とする作曲家やその作品によって特に重要となる事項（例えば、装飾法、舞曲との関連等）について指導する。 ③研究対象とする作曲家やその作品と、学校教材との関連を意識できるよう、具体的な演奏法を、学校教材の上で工夫のように展開するのかについて指導する。 ④学校現場で行われる、リコーダー合奏、器楽合奏、吹奏楽での指揮場面を想定して、必要な専門的事項を、子どもたちの学習段階に応じて、説明したり、模範演奏したりすることを意識して研究するよう指導する。	1）修士の学生の段階に応じて専門書の調査を進めた。そこで得た知識を演奏実践で確認できるように努めた。 2）授業法や教員との関連事項について指導した。 3）関連する学校教材の取り上げ方について指導した。 4）特に吹奏楽での指揮場面を想定して、説明したり、模範演奏したりすることを意識するよう指導した。	1）「音楽打楽器演奏基礎」/「管弦打楽器」の授業において、学生の状況に応じた曲目を選定し、アンサンブルの機会を作るようにする。 2）音楽法の授業で得られた学生の演奏状況や希望を参考にして、「管弦打楽器演奏基礎」/「管弦打楽器」での指導を行う。 3）音低楽器分野について学生が自学自習できるような資料の充実と利用促進を図る。 4）授業での活動がより豊かな音楽体験となるよう学内演奏会への出演を さらに促す。	1）「音楽打楽器演奏基礎」/「管弦打楽器」の授業において、学生の状況に応じた曲目を選定し、アンサンブルの機会を作った。基本的な楽曲に加え、その時々の人気曲も用い、対課で行った。 2）「音楽」の授業で得られた学生の準備状況や希望を参考にして、「管弦打楽器演奏基礎」/「管弦打楽器」での指導を行った。 3）低音楽分野について学生が自学自習できるような資料の充実と利用促進を図った。 4）授業での活動がより豊かな音楽体験となるよう学内演奏会への出演をさらに促した。	1）徳島バロックアンサンブル、広島低楽会奏団との連携により、従来からの研究テーマ（バロック音楽の研究）を継続して行なう。 2）中国及び台湾の民族音楽専門家との連携により、民族音楽に対する個々の楽器のための作品及び合奏作品について研究を進める。	1）徳島バロックアンサンブル、広島低楽会奏団との連携により、従来からの研究テーマ（バロック音楽の研究）を継続して行なう。 2）中国及び台湾の民族音楽専門家との連携により、民族音楽に対する個々の楽器のための作品及び合奏作品について研究を進める。	コース選出の就職委員会委員として、本学の運営に貢献する。 コース選出の大学院入試委員会委員として、本学の運営に貢献する。	コース選出の就職委員会委員として、本学の運営に貢献した。 コース選出の大学院入試委員会委員として、本学の運営に貢献した。	1）徳島市広島市の音楽団体との交流を行う。（社会連携） 2）台湾（台北市）の民族楽団との交流を行う。中国（北京市）の民族楽団との交流を行う。（国際交流）	1）徳島市(コーダーコンソート(徳島市)、広島低楽会奏団(広島市)との交流を行った。（社会連携） 2）琴瓶楽団(台北市)、望京民楽団及び北京冬瓜民楽団(北京市)との交流を行った。（国際交流）	なし
53	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	松岡　貴史	作曲、演奏などの音楽表現や音楽鑑賞が、自己と向き合い、自己実現することによって人間的成長を促すものであり同時に、表現や鑑賞を通じ他者と関わり合うコミュニケーションをもつことによって他者とも通れ、他者を理解する契機となる。学位論文の研究テーマや内容が音楽作曲や演奏に関わるものであっても、あるが、音楽点として上記のことを踏まえ、研究が学校の教育実践に貢献するものであるよう 指導を行っていく。	指導を担当した学位論文は、「歌作品における詩と音楽のあり方－音楽を作る立場から－」である。この学位論文は、当該学生が、明治時代の教育音楽唱歌入以降の日本における歌作品を、日本の伝統音楽としてのもの、芸術的なものそれぞれ検証しているものであり、大きのなかなかとして発展してきたものに分類したとり、山田耕筰、武満徹の作曲への音楽や歌作品のアナリーゼをとおして詩と音楽の関わり手法究し、それらの相互を結実させ、自作品「谷川俊太郎の詩によるコのうた」を作曲し、演奏したものである。作品は、作曲者の音から感性によって詩の世界が広げられ、わかりやすく、親しみやすくかつ味わい深く、歌を広えが多い、世界的機構、芸術的価値の高いものとなった。学位論文の研究テーマや内容は、直接作曲や演奏に関わるものであるが、音楽自とて、作曲、演奏などの音楽表現や音楽鑑賞が、自己と向き合い、自己実現することによって人間的成長を促すものであると同時に、表現や鑑賞を通じ他者と関わり合うコミュニケーションをもつことによって他者とも通れ。他者を理解する契機となることを前提に進めたものであり、研究が学校の教育実践に貢献するものとなり、当該学生は、現在、小学校教員として、研究を実践に活かしている。	授業において、学生が主体的に授業に参加できるよう、教員や討論を取り入れる。 ・教職教員担当授業については、講義内容の関連付けができるよう、さらに講義を図る。 ・授業が、学生が主体的に参加できるよう、学生の学びに大いなる成果があったことが教育実践で、確認できた。さらに、「初等音楽Ⅰ」については、モチルのリキュラムのテキスト作りと関連させ、授業改善が進められるよう授業担当者間で連携を図りつつ、ヴィオリンとロンボーンのための「かくぐるぐる」"so fem so nah"を発表した。また、ピアノ課題のアナリーゼ特集にて自作を含む2曲について の教育を担当した。 ・平成25年度に教科内容学の提出に基づいて作成したテキストを使用して初課音楽Ⅰの、授業を行いテキストを試行した。科研費について「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」の申請をした。	授業において、学生が主体的に参加できるよう、「初等中等教科教育実践Ⅱ」を担当し、「音楽の理論と歴史」「音楽講義Ⅰ」「作曲法Ⅰ」「作曲法Ⅱ」「楽器分析研究」「作曲実践演習」において教員表示とは詩論を取り入れた。 ・教職教員担当科目については、「初等中等教科教育実践Ⅱ」において、さらに授業改善が進められるよう連携を図り、学生の学びに大いなる成果があったことが教育実習でも確認できた。さらに、「初等音楽Ⅰ」については、モチルのリキュラムのテキスト作りと関連させ、授業改善が進められるよう授業担当者間で連携を図りつつ、ヴィオリンとロンボーンのための「かくぐるぐる」"so fem so nah"を発表した。また、ピアノ課題のアナリーゼ特集にて自作を含む2曲について の教育を担当した。 ・11月6日、東京で開催された アジア音楽祭（主催 日本作曲家協議会）にて、ヴィオリンとロンボーンのための「かくぐるぐる」"so fem so nah"を発表した。また、ピアノ課題のアナリーゼ特集にて自作を含む2曲について の教育を担当した。 ・平成25年度に教科内容学の提出に基づいて作成したテキストを使用して初課音楽Ⅰの、授業を行いテキストを試行した。科研費について「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」の申請をした。	・音低楽器、室内楽曲、ピアノ曲、合唱曲のうちいずれかの作曲を するとともに、それらの作品発表を行い、必要に応じてピアノ等の演奏をする。 ・終年度に申請した科学研究費補助金の結果に基づき、音楽コース全教員とともに「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽が教員養成のカキュラムの研究」を開始する準備をする。	・4月29日、東京藝術大学音楽学部同声合唱藝風常任指揮者演奏会（4月29日、会場：調布）、ロッシーニのオペラのアリア、及びヤッケンシスのヴァイオリンの作品のピアノ伴奏をした。他、自作、ヴァイオリンソロのための「かかしの演奏された。また、10月4日、岡山で開催された「中国・四国の作曲家2014in岡山一共生への架け橋ー」（主催：中国・四国の作曲家、共催：日本作曲家協議会他）にて、岡山県の小学生の演に作曲した音楽の演奏を教員し、ピアノのための「組想の庭」を自作自演した他、11月6日、東京で開催されたアジア音楽祭（主催 日本作曲家協議会）にて、ヴィオリンとロンボーンのための「かくぐるぐる」"so fem so nah"を発表した。また、ピアノ課題のアナリーゼ特集にて自作を含む2曲について の教育を担当した。 ・平成25年度に教科内容学の提出に基づいて作成したテキストを使用して初課音楽Ⅰの、授業を行いテキストを試行した。科研費について「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽が教員養成のカキュラムの研究」の申請をした。	芸術・健康系教育部の教員として、また芸術系コース（音楽）のコース長として、本学の運営に貢献する。	芸術・健康系教育部の教員として、また芸術系コース（音楽）のコース長として、本学の運営に関する業務を遂行した。	・教育実習や授業支援、教育実践フィールド研究等を通して、附属学校との連携を図る。 ・教育支援等を通して、地域社会との連携を図る。 ・自らの専門性を生かし、国際交流に貢献する。	・附属学校との連携として は、6月の附属中学校研究会に出席し、授業研究会で意見交換を行った。この研究授業は、山形に同校にて授業を担当し、また徳島県小学校音楽研究会で講演を行った「音楽におけ る声のリズムコンポジション」を、音楽の教諸分野来て実際したものであり、今回の授業を通めるための協力をした。また、大学院授業「教育実践フィールド研究」の一環として、附属中学校(7月11日と9日)において、大学院生によるミニ・コンサート"friendly concert"を行い、その指導教員として、大学院生のアフリーナ活動を育成するとともに同校の教育支援に貢献すべく、附属中学校には見学に連携した。 ・社会との連携については、「中国・四国の作曲家 2014in岡山ー共生への架け橋ー」（主催：中国・四国の作曲家、共催：日本作曲家協議会他）に出品し、徳島県と岡山で作曲家、演奏家と、子どもたちを はじめ、地域の人たちとの交流が広がる契機に貢献した。また、創作、ピアノ、合唱分野等のさまざまなコンクールの審査員を務めた。 ・国際交流については、11月6日、東京で開催されたアジア音楽祭（主催 日本作曲家協議会）にて、ヴィオリンとロンボーンのための「かくぐるぐる」"so fem so nah"を発表し、作曲活動を通して、アジアの諸外国のさまざまなアーティストとの交わりをもった。	教育者では、教員や討論を取り入れた授業によって学生に主体的に考えさせ、理論と実践が連関しながら展開することによって、学生の興味や意欲を引き出すことができた。 また、大学院の教育では、コア科目であるが教育実践フィールド研究において、音楽コースの特色を生かし、生の音楽を附属中学校に提供する、というアプリーナ活動を行った。今回は特に、行事時、舞楽、鑑賞、創作の4領域のバランスを考えて選曲することによって、生徒が多様な音楽に触れることができ、また、校歌等教材を通う編成で演奏することによって、生徒が興味をもち比較しながら聴くことができるよう、工夫を図り教育を実践した。 生徒が親近感や満足感をも創作への意欲を高めることができるよう、《演奏を聴くだけでなく参加や手助手として演奏する機会を設けることによって、生徒が楽しさや一体感を味わい演奏者との双方向的な活動をすることができるよう配慮し、音楽の魅力を感じさせ主体的に取り組める環境将来を実現した。 研究面では、さまざまな作曲活動を行うとともに、作年度作成した、教科内容学に基づいの学校教科書作科目テキスト「音楽Ⅰ」、初課音楽Ⅰの授業で使用し試行するとともに、その内容と問題点について討論した。このテキストが、音楽を形式的側面、内容的側面、文化的側面の認識から捉えるとともに、表現（歌唱、器楽、創作）、鑑賞、リルクーシュ を知識や技術の体系ではなく、行為の体系として捉え、初心者でも無理なく学べる実践的なものをめざすものであることを再確認し、さらなる改訂、校正の作業を進めた。 大学運営面では、芸術系コース（音楽）のコース長としての任務を果たした。	附属小・中学校との連携に関しては、教育研究活動（研究大会等）への参加等をとおして現場の課題意識に寄り添いながら附属学校教員との対話の機会をもつ。また、附属学校教員と連携し、本学学部の教育実践コア科目の講義内容を工夫する。 授業研究に参加した。 教育実践コア科目においては、現場の先生方と連携し、授業を進めた。 また、平成26年度第2回徳島県看護師等学校養成所等任教員研修会において講義「学生を伸ばす評価とは何か――パフォーマンス評価の進め方――」を行った。 日本学校音楽教育実践学会大会での分科会司会を担当した。	附属中学校における合同研修会に参加し、今年度の研究計画について対話の機会をもった。また、附属小学校研究発表会に共同研究者として参加した。さらに、研究成果についての共同での有期を行った。附属中学校における研究会に参加し、授業研究に参加した。 教育実践コア科目においては、現場の先生方と連携し、授業を進めた。 また、平成26年度第2回徳島県看護師等学校養成所等任教員研修会において講義「学生を伸ばす評価とは何か――パフォーマンス評価の進め方――」を行った。 日本学校音楽教育実践学会大会での分科会司会を担当した。	
54	芸術・健康系教育部	芸術系コース（音楽）	小山　美恵	修士論文の指導においては、学問的な探究として研究対象に接近に迫るよう指導するだけでなく、なぜその研究対象を選択するのかという学生自身の音楽科教育における問題意識を問い下げることを共に意識して指導する。	担当授業内において、学生たちに音楽科教育や教師の専門性に関する多くの問いかけをすることによって、学生自身の問題意識の自覚を促し、またそれを問い下げることを意識して指導に当たった。さらに、学生一人ひとりの問題意識や課題意識をどのように具体的な教育実践につなげていくかという点を意識した指導を行った。具体的には、学生一人ひとりの問題意識の肌とし学習指導案作成および模擬授業を行った。	教育に関しては、授業において探究的な学習や協同学習といったアクティブ・ラーニングを多く取り入れ、学生が受け身で学ぶのではなく、自ら問いを持ち、探究し、また学生どうしで学び合うことによって、教育内容の より深い理解をたちなげることを目指す。また、ワンペーン・ポートフォリオ評価法を取り入れ、学生の自己評価によって音楽科の授業 ごとに学習を学生自身の認識の変容を促す。 学生生活支援に関しては、メール連絡等を活用することによって、学生への個別指導や相談がスムーズに行えるようにする。	教育に関しては、授業において アクティブ・ラーニングを多く取り入れた。そのことによって自分では考えつかないような意見を知り、多様な考え方があることに気付いたという学生からの声があったため、協同的な学びが促進されていることが分かった。また、授業において ワンペーン・ポートフォリオ評価法を取り入れ、学生の自己評価を促した。学生との連絡には、職場的にメール連絡を取り入れた。	今年度は以下の点を柱に研究を進める。 ①20世紀ドイツにおける音楽教育方法に関する研究 ②音楽科のパフォーマンスにおける「表正性」およびその評価に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究（B））「音楽的な感性に基づく思考・判断・表現の力を育成するカリキュラムの開発」が採択された。ドイツにおける音楽教育方法について、現地での資料収集を行い、文献研究を進め、その成果を学会で発表した。また、音楽科の評価について、「新しい教育評価入門」有斐閣において、芸術教科における評価について執筆した。	以下の点に留意して、大学運営に参画する。 ・各種委員会やコース内での運営において、任務内容を推進する。 ・コース内の教育活動や行事等の運営がスムーズに進展されるよう、積極的に助 ける。	学部教務委員会および国際交流委員会の任務内容を推進した。国際交流委員会の任務においては、外国人留学生学外研修の引率を担当した。 コース内ではメール連絡を活用することによって運営がスムーズに進展されるよう、助力した。 平成26年度国際化研修に参加した。	附属小・中学校との連携に関しては、教育研究活動（研究大会等）への参加等をとおして現場の課題意識に寄り添いながら附属学校教員との対話の機会をもつ。また、附属学校教員と連携し、本学学部の教育実践コア科目の講義内容を工夫する。	附属中学校における合同研修会に参加し、今年度の研究計画について対話の機会をもった。また、附属小学校研究発表会に共同研究者として参加した。さらに、研究成果についての共同での有期を行った。附属中学校における研究会に参加し、授業研究に参加した。 教育実践コア科目においては、現場の先生方と連携し、授業を進めた。 また、平成26年度第2回徳島県看護師等学校養成所等任教員研修会において講義「学生を伸ばす評価とは何か――パフォーマンス評価の進め方――」を行った。 日本学校音楽教育実践学会大会での分科会司会を担当した。	
55	芸術・健康系教育部	芸術系コース（美術）	小川　勝	修士論文は、大学院在学生が、将来研究者として進むための基礎となるものであり、その学術的内容は高いクオリテを必要とするだろう。教科専門を担当する教 として、第一義的にはすぐれた学位論文を作成するために指導するが、もちろん、教員養成大学大学院に勤務する者として、論文の背後に教育実践への関心が赤されているのは当然のことであり、修士論文の学術的成果が、教育にどのように反わっていくのか、常に大学院生と議論を深めてゆく所存である。	教職志望の指導学生が、専門的な力水を維持しつつ、学校の教育実践にも貢献するような内容で修士論文を執筆することを、指導している。今年度の2016年1月に提出予定である。学校の教育実践を意識しずるこ、どうしても、テーマが拡散しがちになるが、教員生活を通じ、教材開発などの研究に、職場で中心的に従事できる基礎的な力を得られるよう指導している。	従来どおりの授業を担当するが、特に初等中等教科教育実践Ⅱと並の主担当者として、現場で即戦力として対応できるために、実践的な教材研究を行っており、それを少しに現場の事情に即するように洗練させてゆく。	後期には、初等中等教育実践Ⅱを担当して、美術を逆ひに関連づけて、教材開発に直接つながるように指導した。	今年度は科研基盤研究（C）「美術の起原論的アプローチに関する基礎的調査研究」の3年間の年目にあたり、初年度に確立した方法意識をより多戦化して、現地調査を行ってゆく。具体的には、シャープな洞察の現地調査に至るべく、さらに研究環境を整備してゆくことになるだろう。	科研の研究を継続するとでかで、最終年度に向けて現論を深化する試みを行い、世界各地の代表的な研究者と議論を展開するなどした。また次年度の現地調査のための基礎的な情報を入手した。	大学院入試委員会には任期の2年目にあたり、より主体的な役割を果たし、大学院への入学者の増加を目指す。 また、今年度から人権教育推進委員会にも所属するので、学内の意識向上に努めたい。	大学院入試委員会では、中期、後期の入学試験で、試験班担当という重責を担い、無事に終了することができた。人権教育推進委員会でも講演会の実施等に尽力した。	初等中等教科教育実践では附属学校と連携して、よりよい授業の構築を目指したい。また、近隣自治体との連携で講演会などにも参加したい。ったい、例年どおり、ふえ会マのイシモメ(国際近世物語詩委員会)に所属しているので、そのメンバーとして国際交流にも積極的に関わりたい。国際学会での研究発表も視野に入れて準備している。	大学院の教育実践フィールド研究では、附属中学校の教員と連携して、音楽を背景にした制作、という題材の美術教材の授業実践を指導した。	先史美術の専門家として、新聞社からコメントを求められ、それは2015年1月4日の朝日新聞に掲載され、本学の名前を表に出すことができた。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（１－１）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 1．目標・計画	（１－１）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－１）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－１）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－２）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－２）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－３）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－３）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
56	芸術・健康科学系教育部	芸術系コース（美術）	鈴木　久人	修士論文のテーマを決める段階で教育実践フィールド研究や課題研究、中間発表などの場をつかい研究内容がどのように教育現場で役立つのかを取り上げ、その論文が教育実践に対して役立つものとなるよう図す。 絵画制作を専門とする本研究室では修了論文に小えて修了制作品（作品解説を含む）を提出し、学位を認定することもできる。その制作の過程（解説文を含む）で制作、表現に対する支援のあり方や作品鑑賞の方法論ついて、またその技法材料が現場の教材開発などのより広範に亦るのかを取り上げ、学校の教育実践と深く結びついた制作となるよう努める。	中間報告に続き教育実践フィールド研究では実際に現場校において授業を実践し、授業改善を図れた。また指導した修士学生とは制作研究の場でのディスカッションを通じて、制作や鑑賞の支援の方法あかりた。技法や材料を実際に使用することで得られる教材開発の可能性を論じて、修了作品がどのように教育の現場に生かすことができるかを確認した。	授業において積極的にデジタル機器を活用し、授業改善に努める。また基礎的能力を高め、併せて応用力を身につけるための教材開発を心がける。 実技、演習科目では複数の総合制作出来状況など総合的な成績評価を確立する。 制作研究・生活を支援するためオフィスアワー以外での学生への声かけを積極的に行い、学生が意欲的に制作研究に取り組むことができるよう、環境整備に努める。 また実技室など教科専門での教員採用試験の支援を積極的におこなう。	中間報告の内容を引き続きおこない授業改善、学生支援に努めた。	これまでどおりアクリル絵具、油絵具、和紙を中心材とたたクスト・メディアでの表現、具体的には和紙や布をマチエール材として使用することでその出合が単なるマチエールとしてではなく、主題の中心的役割としての成立についての研究をおこない、年間2度以上の発表をおこなう。	中間報告の通りである。	積極的に各種委員会で活動し、大学運営を補助する。 大学院定員充足のための方策に協力する。	中間報告に続き個人研究者に依頼状付きで募集要項を送付し、その知人の紹介で後期選抜試験を受験し、本コースに入学した学生がいる。	教育実践フィールド研究(大学院)、初等中等教科教育実践(学部)などの授業や附属学校園の研究会を通して附属学校との協力連携を強化する。 教育支援講師・アドバイザー等派遣事業などを通じて地域連携活動を強化していきたい。	附属小学校の研究会に参加し、連携を図め、また教育実践フィールド研究では附属小学校から出された研究テーマについてその改善を はかり、実際に授業を実施、授業改善の提案をした。 中間報告に続き徳島県立比長病院と佐スクッキ教室講師、徳島県立近代美術館・徳島県立ニー一世紀館主催チャレンジ(ビ)と家族教室の講師を担当部門運営員、ウチ/隣を育てる会主催児童園コンクール審査委員長などを務め、社会との連携に努めた。	中間報告に続き複数の個人研究者に依頼状付きで大学院募集要項を送付し、また直接会い学生の紹介を依頼した。実際にその紹介で後期選抜試験を受験し、本コースに入学した学生がいる。
57	芸術・健康科学系教育部	芸術系コース（美術）	内藤　隆	本コース実践分野では作品制作に止る様了を一致としている。深い制作経験によって、本人の制作能力を高めた資質を できるだけ高めることにより、教育現場での活況を求める為である。自分の作品の中に、教育現場で活かせる技法や表現を考慮しながら制作を進めるよう指導している。学生は基本的には教員志望が多いが、それ以外を志す場合もあり、最終的には本人の意思を大切にし、その研究成果の進捗を最大にすることを目指している。	基本的には学生各自の制作・作品スタイルに沿って研究を深めてもらったが、毎週ゼミにおいて必ず自分の作品およびその制作センス・工程を教員に温示させることを規則に入れ各自に指導してきた。しかしながら教育応用に注ぎ、通常主流の研究の表現手法にしてしまう場合もあるため、各自の進捗具合を見ながら、相子を見てアドバイスを行った。これらは作品解題のみならず、学生が参加した課外の美術教育活動やボスター制作などにも表れていると考える。	1）．都法・サークル等の題問といりかたを通して、今後も学生支援にあたる。 2．コースの教員や学生課、心身健康研究教育センターと協力し、適宜学生生活上の相談に対応する。	1）．授業や専門内容を通じた手当てのみならず、手話サークルの題問、N＊CAPのコーディネーターといりかたもて、学生支援にあたった。 2．コースの教員と協力し、適宜学生生活上の相談に対応した。	1)、各種研修等の把握・精通に務め、教現・制作への応用を目指す。 2、作品については、現金をみて発表を心掛ける。	教員として、また各種委員会委員としてコース及び大学への貢献に務める。	教員として、また各種委員会委員として都・コース及び大学への貢献に務めた。 本年は、「教科内容学に基づくテキスト」出版に協力した。 兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科の各業務にも参加した。	大学院の授業、教育実践フィールドなどを通して、附属及び地域学校教員と連携を図る。	大学院の授業、教育実践フィールドなどを通して、附属及び地域学校教員と連携を図った。 他の項目とも重複するが、「教科内容学に基づくテキスト」出版に協力した。 また、地域児童の美術教育活動であるN＊CAPのコーディネーターなども務め、昨年に引き続き専門外のキャラクター制作に協力し、公開講座デッサン教室も講師を務めるなど貢献した。 教育支援講師として兵庫県立神本高校、徳島市立高校でデザインについての講義を行った。 日本教科内容学会での常任理事、学会誌編集委員として任務を果たした。	学部授業(関連学)の取りまとめを行った。 他の項目とも重複するが、「教科内容学に基づくテキスト」出版に協力した。 兵庫教育大学連合大学院での職務にあたった。
58	芸術・健康科学系教育部	芸術系コース（美術）	野崎　訓	修了制作について：既生が主体的に取り組む修了制作は授業では得られない様々な知見が為る。また「教育応近代美術館での教育を通じたまた、その得るものは少なくない。図工・美術が実践教科であることと、主に児童・生徒の主体的な造形表現による「成り立ってい ることなどを踏まえて「時、学校現場の要求が大きく、制作過程での表現領域の拡大は学校現場の臨貧教育等に関がり、何よりも教科の存在意義を考える契機となるかもしれないいずれにしても教育に関がるよう実践的共有を図り、学校現場を見通した実技能力の向上としたい。	修了制作（課題研究）について：既生が主体的に取り組む修了制作は授業では得られない様々な知見が為る。また「学部時代からの継続的テーマをもって研究を行うよう指導・支援した。加えて、各自が基層的に学校現場の教材研究をふまえた研究を行っている。また、ゼミ生所属の約割しあいながら制作をしていた。制作過程での表現領域の拡大が図られると3週ごとアドバイスや資料の提供をおこなった。教育実践フィールド研究における題材開発に関がっていもよりに含れる。ゼミにおいて学校現場の臨貧教育に関連した題課を提供することで、コミュニケーション能力の伸長を図りながら、学校現場を見通した実技能力の向上に努めた。	・学部の授業である「図画工作Ⅰ」「初等中等教科教育実践法Ⅰ」の授業内容が確立されてきたことから、その充実を図る。また、当該授業で身につく能力を明確に示し、学生のモチベーションを高め、授業を行う。 ・各学生の進路に応じたきめ細やかで親身な対応をしがける。その際、言葉遣い等の社会人としての礼儀を指導する。 ・ゼミにおいて各学生のプレゼンテーション能力の向上を図る。またコンクール等へ積極的にエントリーするよう図す。自主的な制作をサポートするにあたり適切な資料とアドバイスをうえる。	・特に学部の授業である「初等中等教科教育実践法Ⅰ」の内容の充実を図るべく参考作品等を制作した。次年度に活かされることもある。また、当該授業で身につく能力を明確に示し、学生のモチベーションを高め、授業を行った。加えて図的授業でも「「基礎制作研究」における参考作品も制作した。これも次年度の当授業に活かされるであろう。 ・各学生の進路に応じたきめ細やかで親身な対応をしがけた。その際、言葉遣い等の社会人としての礼儀を指導する。 ・ゼミにおいて各学生のプレゼンテーション能力の向上を図る。またコンクール等へ積極的にエントリーするよう図す。自主的な制作をサポートするにあたり適切な資料とアドバイスをうえた。	・全国的なグループ展、地域等のグループ展などに積極的に参加する。 ・制作学、美術教育に関する資料収集をし、論文作成の準備をする。 ・技術されているモニュメントの制作をし、その設置を行う。そのモニュメントの制作過程を記録し、授業などに活かす。	・全国的なグループ展、地域等のグループ展などに積極的に参加した。三重県伊賀市矢持地区市民センターにおけるグループ展などのなかも展示出品及び第3回信濃美術展無鑑賞作家制展(信濃中央公園)に協賛出品。 ・制作学、美術教育に関する資料収集をし、論文作成の準備をした。特に本学のロジックにより教科書作成のため、当該地の資料を収集し研究を行った。 ・技術されているモニュメント(岩手県立盛岡第四高等学校創立50周年モニュメント)を制作し、その設置を行った。また、除幕式の時に、これに関連した講演を行った。モニュメントの制作過程を記録し、授業などに活かした。	・本コースのコース長としてその役割を誠実に果たす。 ・大学院定員充足に向け、広報活動として野崎研究室のWebページの更新を図り、内容を充実させる。 ・教職キャリア支援センター実技能力支援分野(美術教育)の担当教員として教体育の観点に関める。	・本コースのコース長としてその役割を誠実に果たした。特に問題のある学生には面接し、コースで情報を共有するよう心した。D2 10(教員研究室)におけるプレス機の稼動に関する問題等の解決に人事を尽くした。 ・大学院定員充足に向け、広報活動として野崎研究室のWebページの更新を図り、内容を充実させた。また、芸員充足に向け、対策により他大学(京都精華大学、京都美術工芸大学)の教員に広報活動を行った。 ・教職キャリア支援センター実技能力支援分野(美術教育)の担当教員として教採実技ガイダンスの講師を他の教員とともに行い、どりまとの役を担った。	・附属学校で行われる教育研究会に積極的に参加する。 ・例年通り、本学公開講座「デッサン教室」の講師を務め、地域の文化に貢献する。 ・地域(地域企業)との関わりの中で環境造形などに取組の展示を行い、地域の文化に貢献する。	・附属小学校で行われた教育研究会に参加し、授業研究会において意見等を述べた。 ・例年通り、本学公開講座「デッサン教室」の講師を務め、地域の文化に貢献した。 さんの教員で講座を行っているが、本年度は特に全体のリまとめの役を行った。 ・地域との関わりの中で環境造形などに取組の展示を行い、地域の文化に貢献した。 ・総合教育センターにおいて徳島県教育委員会等主催の実技講座の講師をつとめた。	コース長として、コース会議において無駄に時間を浪費しないよう手順を入念に行い、効率の良い会議の運営を行った。特記事項として、D2 10(図書研究室)にあるプレス機の稼動を問題なく調ととよう様々な折衝を行った。
59	芸術・健康科学系教育部	芸術系コース（美術）	山本　朝彦	教育の修士課程の修了者である大学院生についての指導において取り組みについて具体的に説明しつつ、目標と計画についてまずこたえる。私の専攻は美術教育であり、教員養成および教育実践研究の最前線で、質の高い独立指導を行うことがあられていると自覚している。このため、学生の指導においては、現職教員はもちろん次に、学部から進学した院生についても、からなず授業後に実践を研究テーマにしたなるよう方向付けている。具体的に言えば、図書する教育課程上の学校現場の選定（小・中・高校）、実際の授業の参与観察、教科書および教育用具等封指導等の的ドキュラムの検討、題材（単元）の目標の作成、学習者の発達段階の熟知、質的・量的調査方法の指導、専門的な知識を有する教師・研究者・学識経験者などからのインタビュー、教育の教材開発、先行研究との照らし合わせ等をすべて行わせることにしている。このため、常日頃から、附属校園や公立学校や美術教育の施設に動める指導者との関係をネットワークを構築し、独立性を高めた院生が、必要に応じて、授業の見学や教師・児童生徒からのインタビュー、年間指導計画等の関係書類の閲覧などが可能となるような研究推進のための環境整備を積極的に行っている。 【目標】として、美術教育を専攻する大学院生のために、上記の環境整備をさらに充実させ、教育実践現場に深く入込み、その実態を正確に把握できるよう、指導を行うことが挙げられる。【計画】として、　授業や論文指導を通じて、　コース所属の大学院生に各教員大学院での年度末の研究テーマを面談させ、　各教員校園の研究大会への参加を促し、　そこで得られた知識と、教育実践フィールド研究での取り組み、さらに、私自身が授業者である大学院の授業や院生の研究テーマを有機的に関連づけることにより、具体的には、各教員学校での年度末の研究テーマにたかわる事象を授業などを指導の場面で取り上げ、教育実践の課題解決の方法について考えさせる。この取り組みは、意識的・間接的に修士論文指導に反映するであろう。	2014年度のL2の指導において、年度目標としていた①、②、③について指導を行った。 ①については、学生自身の学問まで の研究内容である絵画表現をベースに、学校における絵画指導の課題を探求するような研究主題を導き出した。 ②については、教育現場を強く意識し、小学校における実践プランの提示までを論文の内容とする方向で指導を行った。 ③については、現場の教員が手引きとして買い求める書籍に注目し、大手の書店に実際に出向き、書棚に並べられている書籍をその内容別に類別し、他教科と比較するという取り組みを行った。 以上の通り、当初の目標とは外道ではあった。	教育活動については、本年度も引き続き学期、大学院共に授業改善に努める。具体的には、昨年度での授業改善の成果に基づき、授業に具体的な実践的な課題を明確化し取り入れることにより、学生が主体的に学習に取り組めるように努める。 また、教員になるための学びのリアリティを高められるように、本年度も授業外で実際の授業を参観する機会を設定する。 学生生活支援としては、オフィスアワーはもとより、本年度も授業以外の時間を利用して学生からの相談に積極的に応じるとともに、専修室やゼミ室等、学生の「学びの空間づくり」を継続的に行い充実を図る。	各種の教員採用試験に出た過去問や教員採用と関連の深い教育経営などの情報を集め、授業中に取りとげ、取り組ませた。 ・図画工作や美術の学習指導において浮上している課題を精選し、講義中に意識的に取りとげた。たとえば、造形遊びや鑑賞の方法論、素材力の低い子やモダンテクニックの活用などはこうしてできた。 「初等中等教育実践基礎演習」の中の教育科研究会に同心版の「素材科教育研究法演習」において、現金あるごとに教えた。また、これからの教員とも必要な教育機器の利用の仕方やパワーポイントの作成の仕方、著作権の基礎的な知識などを授業中に獲得できるように図った。同様の試みを現在の「図画工作科教育論Ⅰ」などで継続的に試みた。 ・学部1年の「初等中等教育実践基礎演習」においては、学習指導要領に、地域の美術館・博物館の利用が謳われている点を通じ重み、授業の中で、徳島県立近代美術館に行き、学芸員の指導の下に、鑑賞の方法を考え試みを行った。 （ただし、授業とは別に「教員採用試験実践特別講義」（仮称）と称し、3月10日と11日の両日、小論形式でのライティングの練習を行った。 b.学生生活支援 ・学部生・大学院生などが協力し合えるよう、　美術部と学校との連携のプロジェクトにかかわらせるよう努力した。 この関連において、教職への就職に有利となると考えられているボランティアを積極的に紹介した。	目標 a．一昨年度に助成期間が終了した科研の「基盤研究(C)「美国ナイト・ギャラリーの教育論文活動における学校連携の方法と成果」の成果報告の過程で、これより文献の調査と美術教育実践の見直しは、個人的に芸術教育観があるのではないかと思えに陥られた。このことは、昨年度末3月20日に宮島教育文学研究センターにおける教育と芸術研究・教育・芸術思潮とその芸術に関する教育」（第8回「芸術と教育」）第2「芸術と教育」を執筆した。これは、できるかぎり多くの研究発表を目指しながら、現代の美術教育の研究の多様性を提案した。また、現代アーツにかかわる魔笛法規に関する研究的な基礎論として、2時の分担執筆を行った。それは、「現代アートの本当の学び方:社会にひらかれる学び「どうしたら社評材ができるか？」」「現代アートの本当の見方:鑑神を見る「魔笛力を鍛える見方—ユリアクライブに作品を「見る」ための3つの方法とは？」」の2冊である。とりに、フィルムアート社から出版された。また、美術科教育学会の上越大会において、「ハリーの女子ズ」は21世紀のデザイン教育論の確石となり得るかや」という題目で、実践報元浜須大学教授と共同研究発表をと月分日に上越教育大学にて行った。 新機軸として、若手研究者とメールにって、重要な文献を挑戦しる3研究会を結成し、毎月的な研究テーマについても模索し始めた。これらの取り組みと成果を踏り返えると、能率良く、当初の計画をすべて実行できたといえる。	目標・計画（下記目標と計画については切り付けていたいため、一場の称述です。） ・長崎健康系(第四部)部長、総務委員委員長、教育研究評議会委員、入事委員会委員、予算・財務管理委員会委員等として、大学運営の規利に関する義務本準に ついて、将来的な見通しについて重に検討しながら、諸説的な発言に努めた。また、その方めに、学会の理解会などの機会を通じて、他大学の改革の実態などについて、積極的に情報を収集した。 ・芸術・健康系教育部の部会議においては、適切つ効率の良い議事進行に関めるとともに、必要に応じて、長年の知行を行った。議論の活性化に努めるだけでなく、当日の部会にて、予想以上に議論が盛んだ ことで、必要な なった資料について、事前に、事務部の協力を得ながら、例し、資料の工夫を図たすよう、努力した。 また、全員の合意を得るまで、粘り強く、説明責任を果たすよう、努力した。	目標・計画（下記目標と計画については切り付けていたいため、一場の称述です。） ・附属学校との連携 ・附属幼稚園、附属小学校・附属中学校の関係・児童生徒が地域の美術館を利用し、実りある鑑賞学習ができるよう 各学校園および美術館と関係の連絡を取り合い、教育内容が充実するよう、ギャラリートークなどの授業計画作成に協力する。 ・附属中学校・附属小学校との連携を強化し、教材開発と研究協議に積極的にかかわる。	目標・計画 ・社会との連携 美術教育学会の新代表理事(学会事業部担当)として、リサーチフォーラムや地区研究会の充実に努め、美術教育研究の質の向上に努めたい。また、「なとうも教育部ネットワーク(今大阪国際美術館との「地域文化財教育活用プロジェクト」を積極的に推し進めることで、地域の教育力を高め、子どもたちや市民の美術鑑賞眼による美術・芸術の活性化と、美術教育理論の社会への応用を図りたい。 ・国際交流 昨年度、中国からの留学生を受け入れ、論文のまとも指導教員となったが、修了後も個の比較教育のセテーマの研究をサポートし、わずかながらではあるが国交流の活性化に努めたい。また、授業中に日本人の学生と留学生との交流が促進するよう努めたい。	a.附属中学校・附属小学校との連携を強化し、教材開発と研究協議に積極的にかかわっていく。特に本年は、附属が発行する研究紀要の原稿校閲などで協力した。 b.美術教育学会の新代表理事(学会事業部担当)として、リサーチフォーラムや地区研究会の充実に努め、これらの研究集会の公募制の選挙を実施中に立案した。このことによって、今年度、後半の1月には「月に1回、学会主催の大規模な研究集会が開催され、講演会となった。結果として、美術教育研究の質の向上に寄与した。また、美術鑑賞教育の観点から、Web掲載を前提にしたよくや美術館・徳島県立近代美術館・徳島県立ニー一世紀館主催チャレンジ(ビ)と家族教室の講師を務め、地域の文化に貢献した。 c.授業中に日本人の学生と留学生との交流が促進するよう努めた。また、交換留学でイギリスへ行き留学生や実習の名門美術大学を新しい開拓などに、学部1年生の「初等中等教育実践基礎演習」で回してもらう機会をつくり、大学教育の幅い拡張で、外国の大学生達の学生生活などの情報に触れさせ、国際交流の重要性に気づかせるよう努めた。	大学改革構想検討委員会と修士課程改革専門部会議委員として任事をした。
60	芸術・健康科学系教育部	芸術系コース（美術）	山田　芳明	修士論文の指導に当たっては次のような手続きを踏まえることによって学校の教育実践に貢献するテーマ決めが可能となるように導く。 ①学生個人の美術及び造形科への関心・課題意識を洗練していく過程において、図画工作科、美術科の指導法の関連性を見いだしていくように導く。 ②文献研究だけに終えず、教育現場での活用を実践に入れたシラバスまで を内容に含めるように導く。 ③そのために、修士文献研究だけではなく、アンケートや、取材等教育現場と関連づけた研究過程へと導く	2014年度のL2の指導において、年度目標としていた①、②、③について指導を行った。 ①については、学生自身の学問まで の研究内容である絵画表現をベースに、学校における絵画指導の課題を探求するような研究主題を導き出した。 ②については、教育現場を強く意識し、小学校における実践プランの提示までを論文の内容とする方向で指導を行った。 ③については、現場の教員が手引きとして買い求める書籍に注目し、大手の書店に実際に出向き、書棚に並べられている書籍をその内容別に類別し、他教科と比較するという取り組みを行った。 以上の通り、当初の目標とは外道ではあった。	中間報告の通り、本年度前期受業において、学習課題として具体的で実践的な内容を設定し、学生に実施した。その成果については授業評価アンケート結果を待たなければならいが、授業通期での学生の評価は高いものであった。 また、授業外での実際の授業参観に関しては、11月12日の大阪府貴美教育研究大会（11月13日・14日の造形教育・図画工作・美術教育全国大会長崎大会、12月12日の東京都図研大会、ならびに2月末の鳴門教育大学附属大学校の研究大会）に参加させ、 学生の学びの空間づくりとして、複合種の教備等を行った。 以上の通り、当初の目標をあまり上回る取り組みを行った。	1．目標・計画 ①図画工作科・美術科の教員の資質向上に関する研究に取り組み、科研への申請へつげる。 ②すでには年間行ってきている、絵具等下の教員並びに、全国各地の教員を集めたTeachers Summer Camp(夏本年度も開催)、教員の資質向上に関する知見の収集と向上、教育現場での活用を図る。 ③その他、研究の推進のために、科研費等の、競争的資金を獲得につとめる。	1.にに関しては、本年度に入ってから、教科書研究センターの科研の運携研究者として参画した。2014年度は、6度の会議と、3度の現場調査、及び2度の資料収集を行い、現場の教員のデジタル教科書の為ガ力について調査を進めた。 2.に関しては、本年度は8月末に本学ではなく、金沢で開催した。また、6月8日と12月6日に予定に図書の教員を集めた全国図工授業づくりユニオンを開催した。 ③現時的資金は獲得しなかった。 以上の通り、当初の目標をおおむね達成できた。	1．目標・計画 1.本年度も引き続き、大学院学校教育研究科教務委員会、附属学校運営委員会等、教職委員会等の委員会の業務を積極的に行う。 2.他の他、教員養成認定試験の問題作成委員に協力して、大学院学校教育研究科教務委員会、大学改革の推進等、全学的な事業推進についての委員を積極的に引き受ける。	1.にに関しては本年度は、大学院学校教育研究科教務委員会、附属学校運営委員会に加えて、FD委員会の副委員長を引き受け、委員会の運営ならびに、FD全体会の運行、FD報告書のとりまとめなど、精力的に取り組んだ。また、年度末には委員会の代理として、副委員長として、SPODの総会に出席し、意見交換を行った。 2.に関しては、教員養成認定試験の問題作成委員に協力して、カリキュラムマップオイラライン作成委員を引き受け、学生向けのカリキュラムガイド制作を推進に協力した。 以上の通り、当初の目標を大きく上回る取り組みを行った。	1．目標・計画 1.教育同様、附属小学校の共同研究委員を引き受け研究への協力を積極的に行うとともに、自らも附属との連携を深めるように努力を行う。 2.鳴門市・大塚国際美術館・大学の三者連携事業「地域文化財教育活用プロジェクト」に協力し、さらに市子ども向け美術鑑賞ワークショップN＊CAPの活動の推進を図った。 3.鳴門市文化のまちづくり委員会委員等、鳴門市や鳴門市教育委員会からの要請や事業協力要請に積極的に応じるとともに、全国の教育委員会や教育センターからの講演、実技講習の講師・指導助言等の依頼を積極的に受ける。 また その他全国の児童図書の審査員や評議員、民間教育研究団体の運営委員等の要請を積極的に受ける。	1.にに関しては、本年度も共同研究者を引き受け、7回附属小学校を訪問して研究打合せを行った。 2.に関しては、昨年同様に美術鑑賞ワークショップN＊CAPを推進し、予定通り4回のワークショップを実施した。 3.に関しては、本年度は鳴門市文化のまちづくり委員会委員の要請を受けた ほか、徳島県が本年度鳴門市にて開催を予定しているB国大会に向けた指導助言の要請を受けて鳴門市児童ふ学校で指導を行うとともに、11月に開催されたプレス会では低学年の助言者として指導を行った。 4.に関しては、新潟県の絵画展の審査、長岡市絵画市の絵画展の審査、大阪府の絵画展の審査等多数の審査員を引き受けた。また、本年も引き続き日本教育美術連盟の評議員、全大阪幼小年教育美術展の評議員等を受けた。 以上の通り、当初の目標を大きく上回る取り組みを行った。	

平成26年度 教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1. 目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2. 点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1. 目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2. 点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1. 目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2. 点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1. 目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2. 点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1. 目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2. 点検・評価	Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）
61	芸術・健康系教育部	芸術系コース（美術）	栗原　慶	工芸分野の研究では、特にその素材に向き合う時間を確保し「手」に技をなじませることが欠かせない。このことは「もの」がデジタルに生産される時代において、人間の創造活動の原点に立ち返る作業であって、当然ながら学校教育においても、自らの体の感覚を使って創造に携わることの大切さをしっかりと伝えていかねばならない。その点を学生自身が認識し、研究の軸となるべくよう指導していく。成果が「個人」の技術や表現の在り方を追求したものとしてだけ完結してしまわないよう、その制作を行うに至る経緯・過程を、学生個人に省察させる機会を設ける。制作研究の中で生まれた素材や工程に対する発見・疑問点や、伝統的には失敗とされることも、教材に活かせることを拾っていく作業を行うよう指導していく。	中間報告の通り前期ゼミでは、大塚国際美術館での子供向け展示企画に協力する機会を得たので、教材として使えるモザイクタイルの制作を行ったが、これは学生にとって素材を知ること、教材研究、美術館という場での発表、来場者の反応を知るといった、教育実践に直結する貴重な経験となった。その経験を踏まえて後期は、自己表現と他者のための制作の振幅を学生自身が自覚して選択し行えることを念頭に、制作を行うに至る経緯・過程を、学生個人に省察させる機会を設け、指導に当たった。また創造の原点認識のため、一年を通し様々な粘土を実際に使用させ、素材と材料の観点の違いを意識させた。	授業シラバスの目的主旨や学修課題の設定に則り、着実に授業を進めていく。また、本年度より就職委員会委員となるため、ゼミ生の指導はもちろん、教採対策についても貢献していきたい。2年生担任指導についても成績状況の把握につとめ、学生生活の慣れが緩みにならないよう注視していく。	新規担当の授業2科目も含め、シラバスの目的主旨や学修課題の設定に則り、着実に授業を進めた。学生生活支援面では、就職支援委員会での教採対策模擬面接指導の他、淡路合宿研修での指導も行った。担任学年、ゼミ学生についても、将来への相談を行なったり、生活の把握をするよう努めた。	今迄通り、青白磁と磁土の表現方法について研究を進め、全国規模の公募展に出展していく。工芸についての学生がもつ意識を授業の中で探っていき、工芸教育に求められる事項や問題点を整理・収集する。	日本陶芸美術協会陶美展、国際陶磁器展美濃トリエンナーレ、日本伝統工芸展の、いずれも全国規模以上の公募作品展に入選した。またそれら公募団体の研究会やシンポジウムでも工芸教育について取り上げており、研修の機会となった。その他企画展として日本橋三越での展覧会も開催し、著名学識者からの意見を得ることが出来るなど、一定以上の成果を達成したと考える。またこの度の日本伝統工芸展入選で日本工芸会正会員に認定された。	各委員会活動に真摯に取り組む。2年目となる教職キャリア支援センター業務もしっかりと行っていく。	委員会活動、各会議、コース運営、文科省依頼業務に着実に取り組んだ。鳴風会幹事としても貢献した。	附属学校園の研究授業、教育実習等に積極的に出席する。社会貢献活動や、公開講座も着実に行う。	学園都市化構想による鳴門中学校の授業協力や、鳴門市採用業務に協力するなどした。大塚国際美術館での夏休み企画にゼミで協力し、モザイクパズルの制作や、アンフォラの壺の再現・展示をした。また中間報告でも挙げたとおり、附属学校教育実習評価授業やインターンシップ評価授業での助言指導を行ったほか、公開講座デッサン教室でも貢献できた。	・大学院広領域コア科目「伝統文化（音楽・美術）における表現の思想と技法」が新規開設され、その担当をさせて頂いた。新規の授業実施にあたり、準備・運営で貢献できたと考えている。 ・日本工芸会正会員に認定された。
62	芸術・健康系教育部	芸術系コース（美術）	森　眞美	就職支援の立場で，修士論文あるいは学習成果報告書に直接関わる機会は少ないが，「学校の教育実践に貢献できる学生・院生を育てる」という視点で，次のように取り組む。 (1) 教採対策ガイダンス等の内容に，「学習指導力」・「生徒指導力」・「学級経営力」等学校での教育実践に結びつく力の育成という観点を盛り込んでいく。 (2) 新たに設ける「特別ガイダンス」では，模擬授業，個人面接，場面指導などの演習に，学校での実践に直結する内容を盛り込んでいく。	(1)後期の教採対策ガイダンス（基礎編）においては，「学習指導力」・「生徒指導力」・「学級経営力」等学校での教育実践に結びつく力の育成という観点を盛り込んで，講義11回，論作文2回，計13回実施した。 (2)本年度より新規に開始した「特別ガイダンス」では，模擬授業，個人面接，場面指導などの演習において，近年の教員採用試験必出の「いじめ」「不登校」「学力向上」等学校の教育課題に直結するする内容を　盛り込むことができた。	(1) 教員採用試験（審査）において学校教育学部生の正規合格者50%以上を目指す。 (2) 学校教育学部生の教員就職率80%以上を目指す。 (3) 教採対策ガイダンスの内容・使用資料等を検討・改善し，その充実を図る。 (4) 各都道府県・政令市の教員採用試験の方法や内容を分析し，学生の相談に応じる。 (5) 教員採用試験に課せられる一般教養，教職教養問題，集団・個人面接，場面指導，論作文，自己PR文等の指導の充実を図る。 (6) 二次試験対策の強化のため，模擬授業，個人面接，場面指導等の演習を中心とした「特別ガイダンス」を新たに設ける。 (7) 臨時教員希望者に対する説明会，個別の教員就職ガイダンスの充実を図る。	(1) 平成27年3月の学校教育学部卒業生114名中，教員採用試験の正規合格者は徳島県，兵庫県で各5名増になるなど，昨年より総数で10名増の58名となり，50．8%と目標を達成できた。 (2) 平成26年3月学校教育学部卒業生の保育士・進学を除く教員就職率は90．6%と目標を達成し，全国1位となった。 (3) 教職教養のみならず，論作文や面接のテーマとして必出の「教育時事」等，最新の情報を提供することができた。 (4) 教員採用試験の各自治体の情報等については，各ガイダンスの冒頭に最新情報を示すことができた。 (5) 本年度は特に「特別ガイダンス」を通して，各自治体の採用審査の実施形態に対応した場面指導，個人面接指導を充実することができた。 (6) 本年度新規に二次試験対策の強化のため「特別ガイダンス」を開設した。前期は，模擬授業，個人面接，場面指導等の演習を中心に65回実施し，延べ201名が参加した。また，後期は1月より，集団面接，　集団討論の対策として13回実施し，延べ104人が参加した。 (7) 臨時教員希望者に対する説明会を11月11日実施した。今後，卒業後の就職状況の把握と未就職者に対する就職の働きかけを行っていく。	(1) 学校教育学部における教員就職状況の追跡・考察を行い，今後の教採対策に役立てる。 (2) 教員就職希望者の多い都道府県・市の教育委員会の訪問・説明会の開催などを通して，教員採用方針や今後の採用状況の動向について把握する。 (3) 教採実技ガイダンスにおける演習形態・演習方法の効果的なあり方を研究・推進する。	(1) 卒業生や修了生のの教員就職状況については，卒業時に配布した葉書の返信，本人との電話連絡等により把握に努めた。 (2)　4月～　5月・・・・・・・受審者の多い各都道府県・政令指定都市の教採担当者を招いて説明会を実施した。　計16回。 11月～12月・・・・・・・各教育委員会を訪問しての情報収集を実施した。　計33教育委員。 10月～　2月・・・・・・・平成27年実施の採用試験に向けて都道府県・政令指定都市の教採担当者を招いて説明会を実施した。　計6回 教員採用試験の最新の情報を収集し学生や院生に提供できた。 (3) 特別ガイダンスにおける，二次試験対策については，自治体毎の実施内容に応じた実践的な実技演習（模擬授業，場面指導）や個人面接を実施することができた。	(1) 就職委員会及び学生支援委員会委員として，本学の運営に貢献する。	(1) 就職委員会委員として，教採実技ガイダンス等において，最新の資料を提供している。 (2) 学生支援委員会委員として，学校教育学部2年生次合宿研修において，講義・演習等を行い，学生の就職活動についての意識を高めることができた。	(1) 付属学校での教育実習前に「教育実習と教員採用試験との関係」についてガイダンスを実施し，教育実習の重要性を認識させる。 (2) 付属学校教員の指導力向上について指導・支援するとともに，学生の実地教育について就職支援の立場から連携して取り組む。	(1) 付属学校での教育実習前の7月に，教採対策ガイダンス（準備編）を実施し教員採用試験における，教育実習の重要性を認識させることができた。 (2) 教員採用審査で求められる，「学習指導力」，「生徒指導力」，「学級経営力」を育成するため，付属学校の教員と連携して取り組むことができた。	平成25年3月学校教育学部卒業者の保育士・進学者を除く教員就職率が90.6%と2年連続で日本一になった。また，平成27年3月卒業生の教員就職者に占める正規教員の割合は，60.5%と昨年より15ポイント上回った。これは，二次対策として，「特別ガイダンス」を実施するなど，よりきめ細かな教採対策を実施したからだと考える。今後も本学の高い教員就職率を維持し，学生たちが自信を持って教壇に立つことができるよう，学校教育の実践に結びつく教員採用対策に取り組んで行く。
63	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	乾　信之	運動技術の指導を考える際，運動技術の系統性が問題になる。その際，運動技術の階層性を同定しなければ，指導者の主観に依存してしまう。したがって運動スキルにおいて，タイミングが力の制御よりも上位の階層に位置している実験的な証拠を集めている。 さらに，個人のパフォーマンスより個人間のパフォーマンスが高いことを示し，集団の演技や演奏での高いパフォーマンスの根底にある情報処理の一端を実験的に証明しようとしている。	4人の個人間運動の実験では力と運動時間に関して全体の変動が個人の変動の総和より小さかった。また，2人の両手の個人間運動では力の制御に階層性がみられた。 いずれも，新奇性の高い実験設定を用い，結果も新しい知見が得られ，チームワークまたは社会性の中身が情報処理やシステム論の術語で説明された。	2人の学部3年のゼミ生には身体イメージに与える視覚の影響の実験と個人間運動と個人内運動の間の転移の実験を指導する。 2人の修士課程の院生には身体イメージに与える固有感覚の影響の実験と個人間運動と両手運動の階層性の実験を指導する。 ポスドクの研究生には個人間運動におけるリーダーとフォローアーの関係の実験と声かけの影響の実験を指導する。	院生の採用試験はいずれも一次試験の合格のみにとどまった。M1の院生は来年度附属中学の非常勤講師を行うことになった。	身体イメージに関する科研費の研究では学会発表と論文を作成する。	Visual and proprioceptive adaptation of arm position in a virtual environment, Journal of Motor Behavior （in press） が追加され， 3年間の科研費による研究期間中，計6篇の論文を出版した。	大学院入試委員， 国際交流委員， 学部3年生の担任， 生活・健康系連合教育講座副代表	大学院の合格者は前期と中期を合わせて20名に達した。	科学研究費委員会専門委員	科学研究費委員会専門委員	教育・研究は予想以上に成果が上がった。また，大学院の合格者も需要に助けられたのか順調に伸びた。
64	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	田中　弘之	① 保健体育学は，巨細の学際的領域としての教科の専門的特性を有しているが，体力医科学，運動生理学的視座から，教育実践の志向ができる大学院生を涵養する。 ② 修士論文指導については，これまでも教科専門としての健康科学的視座による実験実習や論文抄読等を展開してきたが，近年，子どもたちの体力問題が重要な課題となっている現況に鑑み，体力医科学領域からのアプローチを主体とした教育実践的方略へと発展させることを企図している。 ③ 内外の先行研究を渉猟し，豊富な実証データを包含した実践的課題を認識し，その課題を克服するために有用となる運動処方の策定や教材開発に関する学修を深化させている。	①②③体力医科学，運動生理学的視座から，教育実践の志向ができる大学院生を涵養するため，今年度の課題研究Ⅰでは，唾液中のα-AMYと心拍変動成分との関連というフィルターを通して，ヒトの内因性リズムを理解できるような演習及び実習を展開した。その知見を基に，最新機器を用いたデータの解析から，内因性リズムと運動能力や行動体力に密接に関与するスポーツビジョン能力との連関的研究を推進し，保健体育科における実践的応用力としての科学的な運動処方の策定能力の獲得に関する学修の深化に努めた。次年度の課題研究Ⅱでは，学校教育現場で需要度の高い教材である球技指導に資する具体的方略に関する資料の提示へと発展させる予定である。	①　長年，週2回の頻度で実施しているゼミ生に対するランチョンセミナーを当該年度も継続し，教科ゼミにおける専門性の高まりだけではなく，一般教養や教職教養を高めるための就職支援対策として強固に推進を続ける。 ②　ラグビーフットボール部，サッカー部の顧問教員として，課外活動の指導等にも一層の熱意を傾注し，多面的な方向性をもって，豊かな創造力を有する教員の養成に努める。 ③ 4年次生のクラス担当教員として，「教職実践演習」等の授業を通して，社会に貢献できる教員の育成に努める。	①②③　教科の専門性だけではなく，一般的教養を高めるための就職支援対策としても展開しているランチョンセミナーの奏功や，4年次生のクラス担当教員として「教職実践演習」の授業における保健体育科の授業への実践的指導力に関する方策等について討論を重ねた結果，本年度もゼミ生2名が教員採用試験に合格し，他の2名も臨時的任用の教職に就き，他の1名は，本学大学院に進学した。また，ラグビーフットボール部の監督としても，公務出張等がない週末は，ほぼ毎週指導に精励し，例年通り，四国地区総合体育大会で3位を獲得するなど，一定の成果を収めることができた。	①　学外者との共同研究をさらに推進し，自己の専門分野に留まらず，学際的な観点からも教育実践学の構築に努める。 ②　教育・研究活動における成果の公表に努める。	①②　徳島大学医学部及び工学部との共同研究を推進し，学会発表等を通して研究成果の公表に努めたが，審査を有する誌上での掲載までには至らず，次年度以降の課題となった。	①　附属学校部長の職責を継続的に果たすとともに，各種委員会委員等として，大学運営の分掌に努める。 ②　大学運営に関する問題点・発案等について，積極的に提言する。	①②　附属学校部長として附属学校部関連の各種の会議を統括するほか，総務委員会，教育研究評議会，人事委員会，予算・財務管理委員会，施設設備委員会，人権教育推進委員会，学長選考会議，実地教育専門部会等の常置委員会のほか，大学改革構想検討委員会，修士課程改革専門部会議，第三期中期目標・中期計画策定プロジェクトチーム会議等の臨時的委員会等において，大学運営に積極的に関与するよう努めた。	①　附属学校部長として4附属学校園を掌理し，大学との連携による教育・研究のさらなる進展に努める。 ②　教育支援講師・アドバイザーなどとして，積極的に学校現場，地域主催研修会等に出向き，指導・助言を行うよう努める。 ③　教育委員会等の学外における諸委員会の委員を積極的に引き受け，社会貢献に努める。 ④ 鳴門渦潮高等学校との高大連携推進委員会委員として，完成年度を志向した運営に努める。	① 附属学校部長として，週4回の附属学校勤務を通して，附属学校園と大学との連携による教育・研究の進展に努め，教育実習評価基準の調整や，附属学校教員の教職大学院への進学等を積極的に推進した。 ② 教育支援講師・アドバイザー等として，積極的に学校現場，地域主催研修会等に出向き，指導・助言を行うとともに，2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会連携大学担当者として地域巡回フォーラムに参加し，オリンピック・ムーブメントの高揚等にも努めた。 ③ 徳島県教育委員会子どもの体力向上対策委員会座長，徳島県体育協会理事・スポーツ科学委員長等の活動を通して，社会的貢献に努め，徳島市教育委員会からの依頼講演2回，徳島県教育委員会からの依頼講演13回，徳島県体育協会からの依頼講演3回等のほか，各種の委員会の統轄等も担当した。その他，第49回徳島県高等学校教育研究会保健体育学会，第49回全国高等学校体育連盟研究大会における指導・助言者，第6期鳴門市高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画策定委員会委員等を担当し，社会的貢献に努めた。 ④　鳴門渦潮高等学校との高大連携において，運動生理学講義，水泳実習，課題研究指導等に努め，課題研究発表会にも出席し，指導・助言者を担当した。	
65	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	木原　資裕	私の指導する院生はほとんど教員志望であるため，教育実践につながる問題意識を持っており，それらの問題意識ををできるだけ，修士論文のテーマと関連できるようゼミ活動を通して，問題点の整理と絞り込みを行っていく。さらに，全国学会や中四国大会での研究発表を行わせ，その成果を学術誌に論文として投稿する。 また，指導する院生には教育実践フィールド研究や附属学校での研究会等に積極的に参加させ，教育現場での問題意識を深めるよう自助努力させる。	今回の修了生の修士論文のテーマは以下の通りである。 「フットサルにおける体育教材としての可能性と展望」「障がい者剣道における特異性と展開―隻腕剣士の事例を中心に―」「二輪教育及びモーターサイクルスポーツ活動のあり方について」「現代剣道における『残心』の重要性とその考察」　これらのテーマからもわかるように教育実践にかかわりをもつ修士論文の内容となっている。私のゼミ活動の中では、自分の進路と興味がともに関連する内容を修士論文のテーマにするよう情報提供に心掛けている。	①学生が自分の「得意な事」を見つけ，深めていけるよう，授業，修士・卒業論文の指導にあたる。 ②剣道部顧問・監督として、剣道部の活動に積極的に参加し、学生・院生の心身鍛練の強化に当たる。 ③学生の進路，悩み等の相談に応じられるコミュニケーションをとれる機会を多くもつようにする。	①論文指導においては、院生の個性と能力を考慮して、院生の持ち味が生かせる教育実践と関わりをもつ論文となるようテーマ設定となった。内、武道に関連するテーマについては、中四国武道学会で研究発表を行った。 ②剣道部活動においては、鳴門教育大剣道部史上、初めて、四国インカレにおいて男女ともに3位入賞をはたした。また、徳島県大学剣道選手権眉山杯大会でゼミ生の山口あすかが女子個人優勝し、真嶋健司が男子個人準優勝となった。 ③学生との会話の機会を多くとるように個人ごとのゼミと全体ゼミを併用した。	年間1回の学会発表ができるよう研究成果をまとめ、さらに、論文として年間1本の全国レベル研究誌に投稿する。	投稿論文は2本とも8割方、完成しているものの、最後の詰めができておらず、投稿には至らなかった。また、中四国武道学会でのシンポジウム企画が流れたため、発表を行うことができなかった。 数年前より武道必修化をターゲットとした共著「これならできる剣道」（スキージャーナル）が発刊された。	1. 目標・計画 ①委員として学内の各種会議に出席し，職務を遂行する。 ②コース会議，部会議，教授会，全学集会へ公務が重複する以外は出席する。 ③大学運営に関する問題点・意見・発案を各種委員等で積極的に提言する。	大学運営に関しては、4部の副部長として部運営に深く関わった。 また、教育運営評議会等においても積極的に発言している。	①附属学校での研究会および附属学校との懇談会に積極的に参加し，相互の教育・研究の情報交換，討議を行い，その発展に努める。 ②教育支援講師，アドバイザーなどとして，積極的に学校現場，地域主催研修会等に出向き，指導・助言を行う。	① に関しては、附属中学校での教育実践フィールド研究のコース担当者として、その任に当たった。 ② 大学開放推進事業として、昨年に引き続き、小中学生を対象にした「のびのび剣道教室」を開催した。 ③徳島県教育委員会における中学校武道・ダンス必修化に向けた研究委員会の委員としてその任に当たった。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
66	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	藤田　智文	これまで目標してきた的名の大学院生の内訳の修士論文は、学校の体育経営体育授業、運動部活動に関する内容であり、 学校の教育・経営実践に貢献するものである。 他の4名は地域スポーツ経営、民間スポーツクラブ経営に関する内容であり、それぞれの経営現場に指導するものである。 修士論文のテーマ内容は、院生本人の関心を第一に考慮して決定しており、今後も学校を中心にした体育スポーツの教育・ 経営現場に貢献できる論文指導を心がけたいと考えている。	本年度指導した5名の大学院生の修士論文の内容は、体ほぐし運動(M2、現職教員）、ラグートレーニング(L3)、体幹トレーニング(L3)、高校学校武野球部監督の言葉が(L3)、高等学校男女バスケットボール部顧問の管理行動(L2)であった。体ほぐし運動は、小学校4年生の体育授業研究であり、体幹トレーニングは、 小学生高学年男子を対象とした、ラグートレーニングは、大学院女子を対象とした。 が、中学生・高校生の体育授業や運動部活動に生かせる内容であった。以上のように、すべて学校の教育実践に貢献できる修士論文に取り組まれ、M2・L3の4名の修士論文は、主要・副査5名による審査の結果、合と判定され、体ほぐし運動の研究は、日本教育大学院協会全国保健体育・保健研究部門への推薦論文に選定された。	1.体育実技授業では、教材を工夫し、個別指導によって学生の技能を高める。 2.講義の授業では、教員採用率の向上に向けて保健体育科の採用試験問題に触れ理解させる。 3.教員採用試験のための模擬授業・面接に協力し、実践特別講座で面前指導を行なう。 4.体育施設の整備に努め、男女ハンドボール部の顧問としての責務を果たす。 5.学生の課題、悩み等の相談に随時応じる。 6.学生の進路、悩み等の相談に随時応じる。	1）学部通年の「健康・スポーツ科学」1）では、小学校の器械運動の学習内容として例示されている技の連続回転を使用した学習資材を 作成・配布して技能の向上を図った。通年の「教育体育」1）では、授業記録のレポートを課して指導案作成の助力を高め、ミニ模擬 授業を交互で指導法の知識・技術を深めた。学部前期・後期の「運動方法Ⅰ」「運動方法演習Ⅰ」では、スマートフォンの動画撮影、 再生機能を活用し、技能の向上を図った。学部前期の「初等中等教科教育実践基礎演習」では、体育授業のマネジメントを体験させ るため、3人グループを編成してグループ20分で各種の運動領域のマイクロティーチングを実施した。後期の「初等中等教科教育 実践Ⅰ」では、授業実践力を高めるために、1人20分で各種の運動領域と保健領域のマイクロティーチングを実施した。大学院後期 の「学校体育経営演習」では、情報活用能力を高めるために、パソコンを持参させ、他力テスト評価、学習評価、体育授業研究、 必要な統計処理を行わせた。 2.学部初年生クラス担当教員として各授業時後に参加し(9/14-25)、附属中学校での実習生の研究授業の指導を行った(9/18)。 3.就職支援行事の教採実践ガイダンス（体育）において、延べ37名に器械運動の指導を行った(7/9、12)。 4.男女ハンドボール部顧問として、高松市春川総合体育館で開催された四国インカレの監督(8/28)、男子西日本学生ハンドボール選 手権大会の大会委員（7/4-6）、岡山地区ブリーフで開催された中四国学生ハンドボール選手権(秋季リーグ戦)の監督を務めた （9/6）。 5.前述した通り、M2・L3(4名)と2(1名)に対して、各自の意欲・関心に添ったテーマの修士論文を指導した。 6.就業が生い茂って草原状態になっていた陸上競技場のメインテナンス作業を日常的に行った(4月-3月)。	1）日本体育学会に於いて「高等学校ウッカー部の競技規格の規定要定に関する研究」を口頭発表した（8/27）。 2.過去教育講義(119年)に「民法ラ子の体力は高まったかと題する原稿を執筆し、発刊された(9/15)。 3.教員養成モデル(カリキュラムの発展的研究委員会)における初等教科内容のテスト(初等体育)の原稿を修正執筆した(9月)。 4.学研教育みらい)が発行する小学校新教材「改訂新版みんなの体育(冬・体育)」の編集・校正を行った(11月～12月)。 5.日本スポーツ教育学会に於いて「小学校体育における「体ほぐしの運動」の授業研究」を通冬で発表した(10/26)。 6.通年度に分担執筆した「21世紀スポーツ大事典」が大修館書店より発行された(1/20)。 7.日本体育協会のプロジェクト研究「スポーツ振興意識の評価指標開発研究」(1年次)の報告書原稿を執筆した(2月)。 8.体育科教育9月号(大修館書店)に掲載された「BMI高速動の安全管理能力を高める」の原稿を執筆した(3月)。	1.日本体育学会(1)、皇手大学(1)で「学校大会に参加するとリスクとその管理安全方法ニセブ(1)、日本体育大学(1)、愛知学院大学(1)で「水泳教育における多数決の意義と取り扱いの重要」をそれぞれ発表した。 一連の安全水泳に関する研究に関連して、出版社からの専門誌への投稿依頼もあり、受諾した。 4.th Institute of Physical Education International Conference 2014(バンコク、タイ)の基調講演として招待され、演題"Application of the scientific support to the sports competition using the normal video equipment and PC)」として講演するとともにアジア各国の体育科教育に関するディスカッションにパネリストとして参加した。	与えられた委員等を全うし、コースおよび大学の健全な運営に貢献する。	就職委員会、学部入学試験委員会、教職キャリア支援センター運営委員、それぞれの委員としてその任務を全うした。 なお、体育施設管理、特にプール&競津まわりの維持管理について、率先してその作業に取り組んだ。	今まで関いてきた地域の様々(健為高等民スポーツ課、健為県教育委員会、地元市教育委員会、松茂町、徳島県体育協会、徳島県水泳連盟、NDC、ほか)や それらにより頂きたれた投稿等の立場を法いて、私自身の専門性を高めるとともに、地域社会に貢献する。また、そのことにより、本学の地域に果たす機能を高めた。 タイ国の国立体育大学とスポーツ関光省が開催する国際セミナー、IPEIC2014に基調講演者として招待されたのでこれに応じて日本のスポーツ科学の現状を紹介するとともに、交流を図る。 徳門県総高等学校と高等高校の高大連携協定に基づき、連携事業の立案運営に関より、事業を成功させる。	徳門市スポーツ推進審議会委員として「徳門市スポーツ推進計画(案)」を策定し、徳門市教育委員会教育委員に答申した。 徳島市教育小学校アニュール高等部三者連協委員会(京都市教育委員会)では、委員として調査報告書を作成し、京都市教育委員会に提出した。 これらはアプリ等でも報道され、本学を科とともに紹介され、本学のアピールとして有効している。 また、安全水泳の実践や研究をすすめるとともにそれに関するウェブページを充実させ、学外からのアクセスも増えている。この関係で、大学関入学者・を増た。	徳門市スポーツ推進審議会委員として「徳門市スポーツ推進計画(案)」を策定し、徳門市教育委員会教育委員に答申した。 京都市教育小学校アニュール高等部三者連協委員会(京都市教育委員会)では、委員として調査報告書を作成し、京都市教育委員会に提出した。
66	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	鬼塚　隆典	自分の専門とする野外教育やレーニング講は実践科学の領域である。修士論文の指導の他、学部のカリキュラムの編成に関する方、また結論を導く過程において、現場での実践を念頭においたものにするよう心掛けている。今年度はさらに実践の過程を重視し、研究・教育・指導を進める。	修士論文指導においては、野外教育の大きな教育目的であるコミュニケーション能力の育成について、運動量や活動内容との関連について研究を進めた。野外教育においては実践的なデータ収集方法が常に問題となるが、経験始出法を活用した手法や、コミュニケーションに関する視覚的評価スケールを用いるなどの工夫により、一定の成果が得られた。評価法の開発は、実践的志向の育成に大きく寄与するものと考えられる。	○講義においてはローテスト法を実施した。基礎的な学力を習得できるよう授業方法を工夫する。授業評価を参考に、昨年度注意科の配布を減らし、メールに集記する。 9指導にたが、小テストの不成績の低下を感じた。そこで今年度は必要最小限の資料のみ方法について、工夫する。また学校現場での体育理論知識が低い印象があった。 状態が続いている。クラブ指導を希望する学生も多く、最新のコーチングについて取り入れていく。 ○ 教育・対象の場面を設け、自己肯定感と同時にコミュニケーション能力の育成を図り、また授業への積極的な参加を促し、教師としてのプレゼン能力の向上を図る。 ○ 実習については、複数のコースや学部生・院生が混在するような工夫を行い、教員としてのコミュニケーションを高める。 ○ 研究に関する相談会の他、指導教員に関わらず学生と時事の諸問題を取り上げ発表してもら時間を共用で設けている。学生の言語能力に役立つための今後も継続して実施する。 ○ 実践指導において、教員採用試験対策をはじめ、積極的に指導機会を設ける。	○ 講義においてはローテスト法を実施したが、例年以上に高校までの関連諸科学の知識の不足を感じた。資料の提示も適めながら授業方法を工夫した。より一層の工夫が必要である。クラブ指導を希望する学生も多く、最新のコーチングについて学生からの希望も多く、多くの話題について取り上げることができた。 ○ 実践実習においては、複数のコースや学部生・院生が混在するような工夫を行った。修士論文の研究で活用しコミュニケーション力高上に努めた。 ○ 研究に関する相談会を設け、指導教員に関らず学生に時事の諸問題を取り上げ発表してもら時間を共用で設けた。社会問題へ関心を高めるために工夫した。 ○ 実践指導において、教員採用試験対策をはじめ、積極的に指導機会を設けた。	○一昨年度、高崎高校との連携で多くの情報を得ることができている。東京オリンピックや体罰問題など、学校での問題点とその発生形態に、学校現場の体育・スポーツ指導に関するあらたな取り組みを考えたい。 ○野外教育については、野外教育について話題的なアプローチを行う活動に新たな教育・研究方法を開発を進める。 ○専門領域とする水泳においては、国際大会等を視野し、コーチングやゲーム分析の研究を進める。 ○シュミア前における柔軟性とコーディネーションについては、パレエの動きを取り入れた開脚前や足・脚などの動作向上や障害予防を目的としたトレーニング法を開発を進めており、卒業論文において一定の効果が得られた。	○高崎高校との連携で、測定機器を一部活用させていただくなど、研究の連携も進んできた。 ○修士論文に向い、野外教育についてコミュニケーションに関する臨床的なアプローチを行う活動に新たな教育・研究方法を開発した。 ○専門領域とする水泳においては、国際大会等を視野し、コーチングやゲーム分析の研究を進めた。C川アジアス夜は会の実施にもなったが。 ○シュミア前における柔軟性とコーディネーションについては、パレエの動きを取り入れた開脚前や足・脚などの動作向上や障害予防を目的としたトレーニング法を開発を進めており、卒業論文において一定の効果が得られた。	○ 授教務委員として、新教職大学院の為り方について現場的に取り組みたい。 ○ 課外活動などが学生との交流を持つことにより、学生の立場で効果を大学運営に活かす。 ○ 野外活動施設の整備ならびに維持管理を積極的に行う。 ○ 大学の将来像に寄与しうる発信をめざける。	○ 授教務委員を務め、授業評価専門部会では、取り組まれを務めた。 ○地域連携委員を務めている。また個人的にカバイバイザー制度に特務員し、大学間協に力を入れている。 ○ 普通免の教育職に時間的に参加している。またトレーニング室の運営を学生とともに行っている。 ○ 野外活動施設の整備ならびに維持管理を行っている。特に草刈りや浮き桟橋船の管理などを日々行っている。負担は大きいが本学の特徴である場に適した生地を生かすよう、尽力している。	○ 高崎高校との連携も年目にはいり、その連携について完成させる。 ○ スポーツ振興について、日本水泳連盟、徳島県体育協会の活動に協力する。 ○ 教急法などの安全教育に関けり、徳島県教育委員会、日本赤十字の活動に協力する。 ○ 川での環境・教育活動をすすめる「川の学校」に助力する。	○ 高崎高校との連携も年目にはいり、その連携について完成させる。 ○ 日本水泳連盟、徳島県体育協会の活動に協力し、C川アジアス会において水球男子日本代表ヒの活動に関した。 ○徳島県体育協会のシンポ教師事業に参加し講演を務めた。 ○徳島県教育委員会のスポ活指導員研修会の講師を務めた。 ○ 救急法などの安全教育に関より、日本赤十字の活動に協力。救急員養成講座を開設していも。	学内、学内の多数のプロジェクト・行事を地域連携センターが受けいれ、地域連携センター所長（併任）として運営を管理した。 科研（代表：鳴門教育大学　吉本）の報告書を47都道府県の教育委員会に送付し、本学のを紹講してもらえたと自負している。
66	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	吉本　佐知子	教育実践に貢献する内容の修士論文を指導する前に、学習意欲の向上、教育実践に関わる基礎知識を教育・指導することが先決であると考えている。この数年、校士課程（長期履修生含む）の学生において学習意欲の乏き、及び文書力の低下を痛感している。 これを踏まえ修士論文の指導は以下のように行う。 1)修士論文の内容は保健分野の教指導要領の内容に密らしあわせる。 2)一つのテーマについて、分担金を何回か開催、その都度、教育実践との関わりを考えさせる。 3)教育実践に結びつくよう修士論文全体のストーリーを考えさせる。	○修士論文のテーマは、未成年者における喫煙、飲酒の背景要因の探求とした。これらの危険行動は保健学習において指導すべき事項として従来、重要性が高まっている健康問題である。 ○修士論文では、疫学的調査結果からの背景要因を見出し、具体的指導事項について考察した。これらは有効な教育実践ための基礎知見となり得る。 ○以上の修士論文作成の指導は、秋頃金や校に結いて、教育実践に結びつく修士論文全体のストーリーを考えさせながらに行わせた。	○修士論文のテーマは、未成年者における喫煙、飲酒の背景要因の探求とした。これらの危険行動は保健学習において指導すべき事項として従来、重要性が高まっている健康問題である。 ○修士論文では、疫学的調査結果からの背景要因を見出し、具体的指導事項について考察した。これらは有効な教育実践ための基礎知見となり得る。 ○以上の修士論文作成の指導は、秋頃金や校に結いて、教育実践に結びつく修士論文全体のストーリーを考えさせながらに行わせた。	○指導学生（長期履修生3年、2名）は二人とも、信長県の中学校教員採用試験に合格した。 ○複数担当している保健分野の授業を受講時期を通して一貫性を持たせるよう、他の授業での内容を復習しながら関連性を述べて話した。 ○指導学生には机を設置し、日常的に大学に来るよう指導し、雑談、指導ができ、コミュニケーションが図るよう交流環境を提供した。 ○修士課程学生の学位論文を作成中である。	○これまでに5回行った全国規模の喫煙・飲酒・薬物乱用に関する高校生調査についての論文を作成している。 ○26年度に終了した科研（B）の高校生における喫煙・飲酒・薬物乱用に関する定点的調査の分析を行い、報告書を作成、学会に発表した。	1．目標・計画 ○地域連携センター所長を併任 ○地域連携委員会委員長としての職務を果たす。 ○教生委員会、施設整備委員会、学生相談室委員会の委員として業務を遂行する。 ○大学院生雑保のための広報活動を行う。	○地域連携センター所長（併任）としての職務を果たしている。 ○地域連携委員会委員長としての職務を果たしている。 ○教生委員会、施設整備委員会、学生相談室委員会の委員として業務を遂行している。 ○日本教育実践学会第17回研究大会（実行委員長：吉本）を11月1，2日に本学で開催した。 ○本学で行われた社会教育主事講習（7，8月）の運営に寄与し、講師も担当した。	1．目標・計画 ○附属学校との懇談会、研究会、実地教育指導に積極的に参加し、附属・大学の連携体制が必要な課題を見つける。 ○性教育、薬物乱用防止教育、生活習慣病などに関する地域の研修会、会議に積極的に参加する。	○附属学校での授業研究、研究会、実習生の授業などに毎回出席し、附属の教員と連携が図れるようにした。ている。 ○あなりのひろば（徳島教育教育委員会）、本学パイザー制度に実地乱用防止教育の講習を登録した。	学内、学内の多数のプロジェクト・行事を地域連携センターが受けいれ、地域連携センター所長（併任）として運営を管理した。 科研（代表：鳴門教育大学　吉本）の報告書を47都道府県の教育委員会に送付し、本学のを紹講してもらえたと自負している。
70	芸術・健康系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	緒引　陣美	教育実践フィールド研究を中心に、学校現場での動き づくりの課題を発見、可能な解決法を探求する。とりわけ、初等段階での体づくり、動き づくりに焦点を当て、コオーディネーション能力の発達という視点から、具体的な授業づくりに関する研究論文の作成を指導する。	教育実践フィールド研究では、大津西小学校での実践活動を通して、教育実践に即応する修士論文のテーマについて、さまざまな話題について議論する機会を得ることができた。とりわけ、教員との授業反省会のなかで提示された、現在の子どもたちの発達上の問題に、個別的に対応することの難しさについて、参加した大学院学生に多くの課題意識をもたせる要因となった。体育の授業では、さまざまな活動が展開されることも有り、そうした個性への具体的な対応が学習の良し悪しを左右する、そう した観点から、指導要領でしめされた大きな体育課題と、授業での子どもたちの学習課題に展開することが研究課題として自覚されたようである。	教育面に関しては、長期履修生と学部学生との授業での協働的な課題解決の場を設定し、他専攻の大学を卒業した長期履修生と、教員養成課程で学ぶ学部学生による学習課題の発見に関する視野的な視座の養成を試みたい。 生活支援においては、教育に関わるキャリア設計についての情報検索や情報交流の場を設け、多元的な視座から学びの相談をひらげる指導を行いたい。	長期履修生と学部学生とのゼミ交流を図し、他学部を卒業した履修生の視点や教員になる意欲から、学部学生に視野的な視野の養成につなげることができた。	ドイツにおける競技スポーツ教育学、オリンピック教育学の文献収集と、スポーツエリート養成学校での教育課程について の概観を把握する。 ドイツにおけるトレーニング学の基礎的な研究資料の分析と分訳資料の作成を行う。 スポーツ指導者養成課程で使われている教科書の抄訳を行う。	ドイツにおける競技スポーツ教育学、オリンピック教育学の文献収集、スポーツエリート養成学校での教育課程について の概観を把握することができた。とりわけ、スポーツ指導者養成の中で、利用されている教科書の翻訳をすすめる途上で、トレーニング学、動作教育学、ジュニアトレーニング学などの個別領域の成熟と、スポーツ学全体のシステムの広者視点の重視、という点が明確になった。また、ドイツサッカーのトップレベルへの長期育成システムについての研究から、わが国におけるシステムの高度化をめぐる課題も明確にすることができた。	大学院段階での高度専門職業人の養成に関わるプロジェクト研究に参加し、既設修士課程の実践的なカリキュラム作成に力を発揮する。 ゼミ長として、他コースとの連携を深め、あらたな教員養成制度改革の手がかりを得たい。 大学の将来像に寄与しうる発信をめざける。	修士課程における専修免許状の実践化に関わるプロジェクトに参画し、修士課程の実践型カリキュラムの提案書をまとめあげることに力を傾注した。	付属中学校における総合学習の時間を担当する。 鳴門市の小学校での教育実践フィールド研究を推進する。 ドイツライプチヒ大学との連携をふかめる「ライプチヒスポーツ科学交流協会」での活動を行う。	○ 高崎高校との連携も年目にはいり、その連携について完成させる。 ○ スポーツ振興について、日本水泳連盟、徳島県体育協会の活動に協力する。 ○ 教急法などの安全教育に関けり、徳島県教育委員会、日本赤十字の活動に協力する。 ○ 川での環境・教育活動をすすめる「川の学校」に助力する。	○ 高崎高校との連携も年目にはいり、その連携について完成させる。 ○ 日本水泳連盟、徳島県体育協会の活動に協力し、C川アジアス会において水球男子日本代表ヒの活動に関した。 ○徳島県体育協会のシンポ教師事業に参加し講演を務めた。 ○徳島県教育委員会のスポ活指導員研修会の講師を務めた。 ○ 救急法などの安全教育に関けり、日本赤十字の活動に協力。救急員養成講座を開設していも。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
71	芸術・健康科学系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	梅野　圭史	【研究の要点目標】 ①研究の要点は、私自身が過去3年にわたり、体育科の授業研究および体育教師研修を展開させてきているので、その度での真剣な情じょ様に基づき継続したい。具体的には、下段の「２－２研究」で記載した内容をやはりご展開させたい。 ②実践の要点は、大学院の授業を通して、「よい体育授業」の姿を現材させ、その実現に必要な教授技術について修得させたい。	中間報告のとおり。	1）このまえ、「健康・スポーツ学１（１年生）」では、「陸上運動：走り高跳び」において実際の学習指導過程を学生に沿ってなぞってデ教師として運動を教えることの意味を、「ボール運動」において、教員採用試験による実技指導を中心に「教員になることの実際を、それぞれ理解させてきた。また「初等体育１（２年生）」では「ボール運動」を担当し、そこでは学習指導要領に記載されているボール運動（ゲーム）を「低学年－中学年－高学年」の順に展開し、ボールゲームのカリキュラムを体験的に理解させてきた。ついで、「体育科教論（１年生）」では、体育科の目標・内容の歴の変遷から民主主義的体育指導のあり方との実際を理解させ、「よい体育授業」のイメージ形成を図ってきた。これらの経験的な学習指導過程を本年度も引き続き展開させたいと思っているのである。 ②私は、本学のコア・カリキュラムのうち、「教育実践基礎演習（１年生）教科教育実践Ⅰ（教授技術の修得（２年生）教育実践演習（４年生）」を担当している。おのおの内容に一貫性と整合性を付けることが年度の目標である。 ③教女パスケットボール部の顧問・監督をしているが、部員不足のため、充実した実践成果を挙げることは困難ではあるが、これまでできるだけ頑張し、よりよい実践成果を生ませてやりたいと考えている。	1）と2）に関しては、中間報告時と同様である。 3）に関しては、前期主催の30キロマラソンや春季合宿（美浜町）で行い、部員との指導体制が取れている。	1）教師教育に関する研究（社会科学編） 「同じ結果を積んでも、成長する教師とそうでない教師がいる」とする現実のメカニズムを解明するため、継続に体育授業への志向性を調査し、情報に教職経験年数を掛けた仮説設定 実施し、論文としてまとめる。 2）教師教育に関する研究（教育哲学編） 今日まで様々と継承されている伝統的な世界を取りよけ、そこに流れている実践の原理を世界的の花伝書および芭蕉をかこに照野学的アプローチを展開させる。 3）相撲まょうもに関する研究（教育実践学編） ベタクシ（教職20年前後）でそれぞれ体育授業を展開している教師と、若手で教職5年前後（すでに九州育教高を行う教師をグランポッ・ヒ学ューアプローチ法を用いて比較・検討し、「経験」の意味を具体的に深かひとかけ。	①　に関しては、「成長する教師の職能性に関する実践学的検討－NHKプロフェッショナルの流儀の質的分析を通して－」と題する論文を教育実践学研究に登載した。 ②　に関しては、奇妙の観点を深め、2編に分けて論文を製作することになった。この、世界的の視点は「自然（にんぺん）の調和から発達論を展開させる。もう一つは、「拡大と深化」の論理から「熟の論理を深める。 ③　に関しては、中間報告時と同様である。	①　大学改革構想委員会の委員として、これからの大学既構想に関する提案と活動を具体的に行っていきたい。 ②冬期オケのコース長の任が解けた年度末から、初心に戻り、教授会や委員会の仕事を積極的に望みたい。	①　大学改革構想委員会の委員として、努力した。 ②　中間報告時と同様である。	①（民間教育研究団体「身体教育研究会」）の会長として、学校現場に役立つ研究成果を世に問いたい。 併せて、この研究会への参加者は、大阪・兵庫・神戸・岡山に就職した本学の卒業生で占めているので、教師教育の実践として尽力したい。 ②運営大学院では、生活・健康系通合教育実践の講系の任が解かれた年度から、博士課程入学者および博士号取得に尽力をはたせない。 ③附属学校の研究会に参加し、授業の現代を勉強したい。	中間報告時からは、①の出版が頓挫に遭う、本年度中に発刊する予定となった。 ②と③、中間報告時と同様である。	昨年度、川西市の体育授業研究を指導助言したが、その後三田市の高千小学校から研究指導の依頼を受けた。
72	芸術・健康科学系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	廣瀬　政雄	教育研究の専門家が教育基礎大学の大学院生の修士論文コロの研究として成立しやすいテーマは、児童、生徒あるいは学生の保健に関するものと、一見、教育学とかけ離れているが、学校で問題になりやすいいじめの問題も精神保健の視点により課題となりうる。 大学院生が研究論文を完成するにの意義を考える。①日本語または英語などで記述された修士論文を読む習慣をつける。②研究テーマを決定する過程での思考訓練。③研究実施前に起案する事項（同意書、倫理審査委員会への付記などへの対応、④研究者の意味とその評価（大学院生の場合は教育研究者には）、⑤研究実施時の勤怠管理（共同研究の場合）、⑥論文作成中の文章の論理的まとめ方の検討、⑦文章と論旨の校正、⑧・⑨　修士学位の取得的な学内の研究発表、⑩・⑪論文の学術誌への投稿と査読委員との意見交換、査読意見に基づく修正あるいは反論、⑫論文掲載　の手順を段階的に体験することにあるこの段階を経験することは学生の保有な能力を高める効果があると思われる。しかし、ほとんどの大学院生は学部生の卒業研究の時期に段階了相度まで経験済みなので、大学院時代の研究とは、より高度な課題をより深く探索し新知見や新発見に至るような内容の研究をすべきである。 しかし、本学の修士論文の研究テーマの多くが、学生本人が決めることになっているために、この目的を達成できているかは疑問に陥れない。なぜなら、常識的に考えて、研究の初心者が研究テーマを自分で決めることは容易でないと考えられるからである。従って、研究の指導を行うことは当然として、研究テーマを決定する際にも、学生を甘いままの「ではなく教育の経験がより多く生かされるべきであろう。	中間報告の通り。2014年度に受け入れた大学院生には研究経験がない、また、教員採用試験に合格するための勉強を最も重視しなくてはならないと考えている。研究に力を注ぎ合格者が少なくて、将来の役立つ研究をしてもらおうと考えている。そこで、本学院生の健康データを分析対象として、健康意識と健診データの改善の関係について、平成25年度から現在まで継続的に分析する介入研究を行う予定であるが、これには、各機関に対する健診業の指導の改善を通じて健康増進に取りて組む予定である。	1．教育面では、心身の保健・健康および発生公衆衆生学を担当している。現代的時代で医学教育を系統的に行う学生が不足なので、 一般人向けに解説されたものの存在や規制して、学生にとって分かりやすくかつ興味を持つ(ハ)ものある授業を行う。細胞レベル この生命活動を理解し、その生命活動が現実のときどきに健康が失われるなどと、人体の生命活動に関する理解を深める。 生命ある理解させることが出きると考えている。秋第七ヤキストの不備なお中間感に生物について授業を行い、学生の現実とおよび連成 度を深めるように努める。不備なお中間感点は、その都度訂正し、改定に努める。所有作成できなかった他の科目（生命倫理学、衛生 公衆衛生学、健康スポーツ学）については教科書を作成する。 2．学生生活面については、健康診断活動と診療活動を通して、学生の身体面での健康維持のサポートをした。心理面などで相談に陥 れる学生に対して、心身健康センターの教職員、臨床心理士養成コースの教員および学生部の職員間で連携を密にして対応する。 様の学生活動（ボランティアなど）に参加する学生に対して、健康診断証明書を発行するなどの支援を行う。□	1．教育面では、学部生対象に衛生公衆衆生学、子どもの保健、子どもの地域保健および健康スポーツ学の講義を行った。学生にとっては かりやすかつ興味を　持てるような内容にしてあったテキストを用いて授業を行ない、学生の理解度および達成度を深めることができて きたと考えている。一方、大学院生には健康科学研究と健康科学演習を講義し、人体の生命活動に関する理解を深めた。 生命ある理解させることが出きると考えている。秋第七ヤキストの不備なお中間感点は、その都度訂正し、改定に努めた。衛生公衆衆 生学と健康スポーツ学の授業用テキストを作成したが、生命倫理学は興年の授業計画で対象年にはなかったので、次年度に作成す る。 2．学生生活支援については、健康診断活動と診療活動を通して、学生の身体面での健康維持のサポートした。心理面などで相談に陥 れる学生に対して、心身健康センターの教職員、臨床心理士養成コースの教員および学生部の職員間で連携を密にして対応した。各 様の学生活動（ボランティアなど）に参加する学生に対して、健康診断証明書を発行するなどの支援を行った。	1．今まで、修士課程の研究の指導の結果は2名に過ぎない。その内の1つは卒業後に学問誌（日本学校保健学会誌）に投稿し掲載され た。一方、学部生の卒業研究指導結果は全て、学術誌に投稿するレベルに達した研究もあり、それに対しては卒業後に学術誌へ の投稿を勧めた。それに対しては卒業後に学術誌に投稿掲載にもっぱらの 2．大学間での共同研究を進める。	研究は専門誌に投稿し、査読者の厳しい意見を経験することで完成されると考えるが、よい研究をした卒業生でも、本人の意思がそもそこまで達していない現状で、本学内に投稿することはできなかった。内容的には専門誌に掲載されてもよいものもあるので、今後の課題だったい。 1．学生支援委員会委員として、学生の支援に当たる。 2．臨床研究倫理委員会委員副委員長として審査活動にあたる。 3．入学試験、学生の各種研修および入試ボーンの大会などにおける教護活動を通じて大学運営に参加する。 4．学校保健安全法および労働安全衛生法に規定された内容に則して、大学における安全衛生保健活動を行った。	1．学生支援委員会委員として、学生の支援を行った。 2．臨床研究倫理審査委員副委員長として審査活動を行った。 3．入学試験、学生の各種研修および入試ボーンの大会などにおける教護活動を通じて大学運営に参加した。 4．学校保健安全法および労働安全衛生法に規定された内容に則して、大学における安全衛生保健活動を行った。	1．産業保健活動の実施対象として、健康診断・事後指導などの支援を行った。 2．本学Websiteに連載中の「健康手帳」で健康に関する情報を発信し、健康情報の普及と啓蒙活動を行った。 3．国際的な学術誌から査読の依頼があったが、全国保育管理研究集会で発行しているCampus Health から査読の依頼が来ていた。	1．産業保健活動の実施対象として、健康診断・事後指導などの支援を行った。 2．本学Websiteに連載中の「健康手帳」で健康に関する情報を発信し、健康情報の普及と啓蒙活動を行った。 3．国際的な学術誌から査読の依頼があったが、全国保育管理研究集会で発行しているCampus Health から査読の依頼が来ていた。	本学の学生と職員の健康維持と健康増進につくしている。
73	芸術・健康科学系教育部	生活・健康系コース（保健体育）	溝口　雅史	年度末、別年を目途する機会に恵まれていないが、修論指導についてはのように考えている。小学校教育において体育指導するなか、大学院から続いてきた問題から、「研究者としての視点から教育を見直すべい機会であったが、研究世界と学校世界との関係はいかなるものか　研究成果を現場でやっかに教育で使うことはいかなるものか」という問題を問いていた。本題の指導の進行である。 そこで　私は　教員養成大学大学院の修士論文については、「課題研究論文」につ+し、現場実践に即応する現論と実践力を高めることが必要であると考える。具体的には、大学院で学ぶ教育学全般にわたる課題の知識と、中まての実践と手ンクさせ、国各研究や実践研究を通して、新たな知見と実践力を手に入れるよう、実践から実践へ戻るターン構造をもつ在論としてとらえたい。 教職大学院については、上に書いた「課題研究」という研究方策を取り入れるべき考えている。現場重視（ならば「学び続ける教員」は）で実践力をもつためには、研究のおもしろい世界を実感するよう指導していかなければならないと考える。これは、問題意識に即現的な教育を多くの文献から用いかすことを意味するべきである。勉関しいた問題意識がつながりはじめ、はじめにしていた認知構造が、科学性に裏付けられながら進化していくプロセスを実感することができ現場教員の目からも現論的成分の検討になる考えるかもである。なぜならばこと　がかりゐよりこなって本る自分自身の変化を、「おもしろい」と感じることができる。現場に復帰してから新しいものへの興味関心と挑戦を思考するのではないだろうか。 まとめると　修士論文と学習成果報告書も同じように「課題研究」とすることで、現場教育実践のかこなる考え方と技能を身に付けられるのではないかと考える。	教職大学院生から、非公式の要望があり、課題研究論文の指導を行った。研究の進め方に関して、本年度指導教諭にてから生かせることができるようなまとめになるよう助言した。どうして、現場教員は実践方法を身につけたがる、その方法の基礎になっている理論を理解する術しを知らせたつもりでいる。課題研究は、現場に直接生かせることができる内容であることから、現場復帰してからの活躍を期待している。 ○附属小、中の実習担当の先生と月に実習指導（指導案作成、評価について話し合い、その実践時連絡を取り連携を確認しながら、9月の文化教育実習を迎える。	課題研究論文の指導を行った。 1）修士論文の提案会に参加し、教育実習の意義を深める。 ○教育実習体系化に伴い、2年次の実習（山間・沿岸都市実習、ふるさと戦略実習、海外日本人学校戦略実習）の27年度実施に向けての準備を行う。 計画：教育実習の工程表の作成、実施、WEBとの実施を現時に入れた整備を平行して行う。 ○附属小、中の実習担当の先生と月に実習指導（指導案作成、評価について話し合い、その実践時連絡を取り連携を確認しながら、9月の文化教育実習を迎える。	目標：学生　質的研究手法について、仮説を立ててフィールドワーク技術をみがいた。今年度は、主生教育実習において、実習生の変化を質的研究法によって観察する。 計画：実習生の行動を参与観察し、実習の様子をフィールドノートにまとめる。実習の様子から、どのようなかかわり（子ども、指導教員、仲間、実習詳細ムーブリック）から実習生に変化が生じているかについて解釈していく。	教育実習のふりなる充実を図るため、「教育実習自己検定」の本格実施に向けての調査準備を整備していく。具体的には、問題作成委員の組織化、自己検定実施のWEB化等、自己検定実施に向けての問題群を検討し、ひな形をつくりながら四国4大学の連携を図っていきたい。	教育実習自己検定のトライアルを実施し、問題の質について分析を行い、教実協同協議会研究集会にて発表し、現場を得ることができた。	附属学校との連携　附属小学校で体育非組授業を実践する。昨年度は、6年生、3年生、4年生で授業を行った。研究年においても運営法ついていたが、調整がつまず時ちぬしになった。今年度もできるだけ時間を調整し、現場的に授業についていきたい。このことが、教育実習指導の充実という意味においても、体育研究を行っていく現実のクラスに入り授業を行うことで、担任の先生の研修になるのではないかと考える。さらに、附属小学校研究協力者としての依頼を受けている状況にあって、できるだけの協力をしていく。 社会の連携　子どもの体力向上授業実践事業における、信長県の小学校24校、64時間の出張授業をおこなった。今年度も、昨年程度の出張授業を計画している。松茂小学校より、体育授業（体育指導の改善について相談があり、1年間の知的で松茂小学校の学校体育全般についての指導助言を行うことが決定している。 時間を調整し、松茂小学校の子どもの体力向上のために協力していきたい。	○教育実習関係において、附属各校との連携を密にでき、平成25年度の実習を無事終えることができた。 ○小学校体育学習充実のために、信長教育委員会からの依頼による体育授業向上事業について26校、松内研修講師を校、附属小学校での授業を1時間行った。 ○附属小研究協力者として、体育科運動領域1授業、保健領域1授業をサポートした。 ○松茂小学校の体育関係の充実整備について、1年間かかり、授業展開には方、教材研究について集中おちることができた。2月には本年度に向けての体育科年間計画作成について取要する予定である。	○学部2年次の教育実習充実に心付て、山間沿岸地域の少人数校での実習とふ離れにおいて、海外日本人学校戦実習を、タイ、コンケン市とシラチャ市において実現できるよう環境を整えることができた。
74	自然・生活系教育部	国際教育コース	辻森　重勲	持続可能な開発のための教育（ESD）の理念を踏まえた環境教育の授業について、の分析及び分析結果を踏まえた授業開発をテーマとするような修士論文の指導もしたい。現在ザンビア島村部において環境教育プログラムの開発に関する実践研究を実施している（本学研究の。この実践研究の成果を比較環境教育学的な視点でとらえることで、地域性に根差した環境教育の新についても指導する学生さとも心に接ぶしてみたい。また、そのやては地域に根差した知（Indigenous knowledge.）を整理しなどの活用も試みたい。	中間報告のとおり。	・昨年7月に発表した内容に、さらにクリティカル・リアリズムを採用した解析を加えて、論文としてまとめ教員教育国際協力センターの紀要に発表した。 ・平成26年11月及び平成27年2月にザンビア島村部における現地調査を実施した。ムクコニ部落とする活動の一環として、子供たちがムクコ生等をたた相を収集し、優秀者を表彰した。 ・現地の環境データ（水質及び気温）を収集しつつあり、今年7月に予定している第七、は2ヶ月分の環境データの収集を終了する。 ・実践研究の成果を比較教育学的な視点で捉えることで学会発表1件、論文1件の成果を得た。また、その成果は、算数教育に関する修士論文の作成に生かされている。ただ、環境教育については、来年度の課題である。	1）振り返りノートは活用したが、振り返りを踏まえた学生とのディスカッションは低調なまま終わった。 2）国際理解教育特論Ⅱにおいても6ESDの教師教育に関する論文を講読しすることを通して、ESDに関する概念的な理解を促すとともに修士論文作成への支援をおこなった。 3）前期において終了した。 4）前期の活動を継続した。	1）短期国際交流プログラムの評価枠組みについての研究を行う1他大学及び高校教員との共同研究）、成果の学会への報告を予定。 2）アクニエスタンに関する政治社会学的研究を行う1他機関市民などとの共同研究）：創訳のドラフト作成。 3）持続可能な開発のための教育（ESD）の理念を踏まえた環境教育プログラムの開発に関する実践研究（長期研究の2年目）をザンビア 共和国中央州モンポン地区において実施する。1年目の研究成果を学会発表すると同時にレンズングラン及び活動プログラム集のドラフト を作成する。 4）ことの関連において地域における日々の生活実践、文化や伝統を考慮に入れたESDや環境教育について理論的研究を行う。	1）学会発表の成果を論文として共同発表した。来年度も研究は継続して実施の予定である。 2）研究会の日程調整が難航し、後期は1回開催しただけであった。そのための予定より1週間ずつ遅れている。 3）平成27年1月にマプト市（モザンビーク）で開催された学会で発表した。環境教育プログラム集のドラフトは年度末までに作成することができなかった。 4）ケンケのルーリアリズム（心的）については、研究会を学内教員及び研究生と、不定期ではあるが実施し、主に論文、関連著書等の創訳等が中心となっている。	1）副学長（国際交流担当）また国際交流委員会委員長として本学の国際交流及び国際化に関する業務に従事する。	国際交流委員会委員長をはじめとして、日中教師教育学術研究集会の準備、文科省の国際的施策に関する会議や政府会へ の出席及び留学生の徴別奉職に対する対応など、大学の国際交流及び国際化に関する業務に従事した。	1）学校版環境ISO運営員会委員（信長県教委学校政策課）、学校・家庭・地域の連携による子どもの健全育成推進協議会委員（同生活学習政策課）及び信長県環境協会委員（信長県環境教育部課）としての業務に従事する。 2）教員教育国際協力センター教員として発展途上国教育開発者の研修等への実施に協力する。 3）ユネスコスクール活動の支援を昨年度に引き続き学校からの要請を受け行う。	1）学校版環境ISO運営員会委員（信長県教委学校政策課）、学校・家庭・地域の連携による子どもの健全育成推進協議会委員（同生活学習政策課）及び信長県環境協会委員（信長県環境教育部課）としての業務に従事する。 2）教員教育国際協力センター教員として発展途上国教育開発者の研修等への実施に協力する。 3）ユネスコスクール活動の支援を昨年度に引き続き学校からの要請を受け行う。	1）については、業務に従事した。 2）副学長として研修実施に関し、側面支援をおこなったのみで、具体的な協力は特になかった。 3）ユネスコスクール支援に関しては、ユネスコスクール全国大会（平成26年、岡山市）の研究発表会で、ファシリテーターをつとめた。	
75	自然・生活系教育部	国際教育コース	小澤　大成	国際教育コースの修士論文指導においては、当該大学院生の希望を踏まえてテーマを設定するが、コース所属学生は途上国を中心とした海外における教育の質向上あるいは日本における国際教育の発展に興味を持っており、必然的に学校教育を主体とした、テーマを選択する。指導する学生には概門教育大学が受託している途上国教育開発者が対象であるJICA研究への積極的な参加を呼びかけ、様々な途上国の学校教育の実態に触れさせるようにしている。また附属小学校や附属中学校の研究会に積極的に参加させ、日本の学校現場の実情に触れさせるよう努める。さらに国際教育コースの全構成員が参加するセミナーにおいて議論に参加させることで学校の教育実践に関する様々な研究アプローチを学ばせる。これらを踏まえ人修士論文を作成させる。	本年度指導している修士1年の学生（現職教員）については、本人の希望に基づき、国際理解教育の学校現場での実践をテーマとし、修士論文につながる研究を進めている。指導学生は、概門教育大学が受託しているJICA研修、ルワンダにおけるフィールドワーク　附属小中学校の研究会等に参加した。さらに セミナーにおける発表も実施させ、留学生を含めた多様な集団から見聞を広め、研究の改善につなげている。また国際教育コースの学生全体に対しては、JICA研修への参加、附属小中学校の研究会への参加、全構成員が参加するセミナーにおける議論を通じて途上国を含めた学校の教育実践に関する様々なアプローチに触れさせる。各人の研究を深めた。	国際教育コースの教育に関して以下の取り組みを行う。 1．途上国の授業改善に資する教員指導者としての能力向上を図るため、KJ法を用いた課題分析や詳細な授業分析手法の導入・定着を実施する。また模擬授業の計画・実施・省察を通じて、授業研究手法を体得させる。 2．全構成員が参加するセミナーにおいて多様な観点からの議論が行われるよう環境を整備する。 3．国際理解教育に関して持続発展の観点から様々な活動を通じて理解させる。	1．体験に関連した「国際教育協力特論Ⅱ」において途上国の授業改善に資する教員指導者としての能力向上を図るため、KJ法を用いた課題分析、ケニアでの取組。 2）模擬授業の計画・実施・省察を通じて、授業研究手法を体得させる。 3）附属校、協力校での教育実習評価のやりあわせを行い、計画通り実習生のがんばりが評価に反映されるものになったと考えている。	（1）JICA研修の評価に関して質問票の開発・分析や、帰国研修員のフォローアップ調査、専門家への聴取調査を進め、よりよい研修の在り方を探る。 （2）途上国の教員研修における授業研究の受容とその効果について調査を行う。 （3）学内外の研究資金公募に積極的に応募する。	（1）国際教育コースおよび教員教育国際協力センターの教員として本学の運営に協力する。	（1）国際教育コース長、大学院入試委員会、修士課程教員養成ガ+キュラム研究開発委員会、教育・研究評価委員会の委員、教員教育国際協力センターの教員として業務を実施し、大学運営に協力している。	（1）JICA等の国際協力事業に貢献する。 （2）公開講座や10年次研修で、地域社会との連携・交流を積極的に行い、社会に貢献する。	（1）JICA受託の大洋州研修、モザンビーク研修、ジブチ研修、PNG研修に協力し、また6ヵ国アフリカ研修ではコースリーダーとして研修を運営した。 （2）ESDと国際理解教育をテーマとして、8月20日に10年次研修を研修、8月24日に免許更新講習を実施した。 （3）NGOが実施するESD環境教育プログラムに実行委員として関与し、中学校での実践を行った。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については，理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について，あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては，学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか，あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
76	自然・生活系教育部	国際教育コース	石坂　広樹	国際教育コースでは，国際理解教育と国際教育協力の分野で活躍する人材を育成することを目指しており，各分野の専門家・教員として必要となる教育・研究指導をこれまでも行ってきた。本年度はさらに以下の点について焦点を当てた指導を行っていくこととしたい。 ①国際教育コースの学生の多くは免許取得を目指すか教員になることを目指している。しかしコースの授業科目には授業実践に直接資するような科目は少ないため，授業外にて模擬授業をする機会をコース独自でより多く設けることとし，実践的素養を研究的素養以外でつけさせる。 ②研究面で絶対的に必要となるのが研究調査能力である。特に教育実践に貢献しうる研究となるには，実践面に即したデータ・客観性の高いデータの収集と分析をする能力が必要となる。よって，担当授業「教育研究・調査」において質的・量的調査分析手法を英語・日本語両面においてレクチャーし，演習も行うこととする。 ③国際教育コースでは修士論文につながる調査のフィールドは日本国内のみならず海外の教育現場となることが多い。これまで通り，フィールドを獲得するための支援を惜しまず行うとともに，フィールドにおいては何らかの形で参加型の活動にも従事できるように努めたい。	年度目標に示した内容に即して報告する。 ①中間報告にある通り，模擬授業の実践を促すとともに，年間を通じて学生を各種学校に授業観察のため引率を行ってきた。これは国内のみならず国外も含んでいる。 ②中間報告にある通り，担当授業にて対応するとともに，コースさえも超えて，修士論文に係る調査の方法についての相談を適宜受けてきた。 ③中間報告にある国に実際に学生を引率し，国際的な素養をつけるとともに調査についてもサポートを行った。 よって，本年度の目標を十分に達成できたものと考える。	①本年度は入学する日本人学生の数が大幅に増加するとともに留学生が減少した。国際教育コースとしては日本人学生の国際的感覚の育成を重要な課題と捉えており，一時的な留学生の減少とは言え教育上の課題となりうる。そこで，年間複数回行われるJICA研修に積極的に携わる中で研修内容そのものから学ぶだけでなく，研修員との交流にも積極的に携われるように取り組む。 ②上述したが，研究面で絶対的に必要となるのが研究調査能力である。特に教育実践に貢献しうる研究となるには，実践面に即したデータ・客観性の高いデータの収集と分析をする能力が必要となる。よって，担当授業「教育研究・調査」において質的・量的調査分析手法を英語・日本語両面においてレクチャーし，演習も行うこととする。 ③生活面では，退寮時のマナーを含めありとあらゆる社会常識について改めて教育することとする。将来教員として社会人になるときに恥ずかしくない人物となるように教育して参りたい。	年度目標に示した内容に即して報告する。 ①中間報告にもある通り，JICA研修や国内外の学校での授業観察などを実施する中で，学生の研究・教育能力の向上に取り組んだ。 ②中間報告にもある通り，担当授業を活用するとともに，ゼミ生についてはそのほとんどの学生のフィールド調査に同行し，丁寧な指導・支援を行ってきた。 ③生活面では，学生間のお金の貸し借りや自転車も含む飲酒運転などないように，適宜指導している。また，目上の方へのメールや電話の仕方などまだまだ未熟な学生が多い所，この点についても細かく指導することができた。 以上の通り，年度目標を十全に達成することができた。	本年度は科研費若手Bの3年目となる。本研究は中等教育校生徒の留年の要因・心理面の状況などを国際比較するものである。これまで，シエラレオネ，ガーナ，コスタリカ，ホンジュラス，フィリピンにてすでに調査を終えた。今後，研究成果については各種学会にて発表を随時行っていく予定である。また，本年もアフリカないしアジアの国を訪問し同様の調査を行う予定である。 他方，4月・5月には国際学会にて研究を発表する予定である。さらに，論文についても科研費の分みならず複数作成していく予定である。	中間報告分に加え，下半期においても国際学会で1回発表を行った。論文についても2本投稿を終えたところである。データの電子化も進んだところ，来年度に追加の論文を書いていく予定である。よって，当初の予定以上に発表・論文作成を行うことができたものと考える。	本年度より教務委員会・国際交流委員会に所属する予定である。同委員会にて積極的に携わっていきたい。	中間報告同様に，下半期においても委員会で積極的な貢献を行っている。また，教員教育国際協力センターの業務を積極的に行っている。 同センターでは，受け入れ研修の増加を受け，担当する研修も増加した。今後も研究・教育業務以外のこういった業務についても積極的に行っていくこととする。	本年度も学校から要請されれば講師として出張講義もする予定である。また，付属学校の授業研究会には学生ともども積極的に参加していくこととする。予算の確保ができれば，附属小学校とフィリピンの小学校との交流事業も計画中である。さらに，JICA研修についてもラオスやパプアニューギニアなどが増える予定であり，鋭意取り組んでまいりたい。	中間報告分に加え，フィリピンの小学校と附属小学校とのビデオ交流活動を実施・成功裏に終えることができた。この成果については来年度の研究学会にて報告する予定である。また，JICA研修については担当する研修を増やし，積極的に取り組んでいる。	特になし
77	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	秋田　美代	教員が教育の目的を達成するためには，教員の指導と学習者の学習を改善し続ける力が重要である。院生が将来教員となったときに自律的に教育改善を行うためには，教育の質の向上に資する高い専門性と教育を自己の責任と捉え情熱をもって取り組もうとするオーナーシップが必要である。修士論文作成においては，院生の教科・教育ついての専門性とオーナーシップを高め，教育に関する研究力・実践力を向上させるよう指導する。具体的には，修士論文の作成を通して院生に次のことを考えさせ，研究と学校現場の教育実践との結びつきを捉えさせる。 ① 修士論文のテーマが現在の学校教育とどのように関係しているか。 ② 研究の成果が学習者の学習や成長にどのように貢献するか。 ③ 研究の成果は教育の質の向上にどのように貢献するか。 ④ 教育者としての自分が学習者の成長や教育の質の向上にとってどのような役割をもっているか，また，その役割を果たすために何が必要か。	学生が修士論文の作成を通して，算数・数学科担当教員としての高度でかつ実践的な指導力を高めることができるように，修士論文の指導においては年度目標に記述した①から④の内容を実行した。 ①修士論文のテーマ・内容が学校現場の算数・数学教育の質の向上とどのように関係するのかを常に問いかけ，研究が現在の数学教育の課題解決に繋がることが重要であることを学生が理解できるようにした。 ②研究の成果が学校現場で実際に教壇に立ったときに児童・生徒の学力向上等に繋がるかを常に問いかけ，学生が理論と実践の結びつきの重要性を理解できるようにした。 ③研究が現在の数学教育の課題解決に繋がるかを常に問いかけ，学生が研究成果を教育の質の向上に繋げることの必要性を理解できるようにした。 ④研究指導の中の意見交換等を通して，学生が教育者としての職務と職責を理解して自己の省察と改善ができるかを確認した。指導の節目・節目で学生に，教員として必要な力，その力のうち現在の自分自身に不足している力，不足した力を向上させる具体的な方法について考えさせた。 これら以外に，学生が修論に記載された理論・内容を，修論で題材としていない教材で実践するとどのような授業実践になるのかを頻繁に説明させ，算数・数学教育で本質的に何が重要であるかを理解できているか，教科教育の修論で研究した内容が教育現場で汎用的に活用できるものとなっているか等を確認した。	① 学生の自主的な学習活動を促すために，授業に学生同士の討論・探求的学習等を取り入れる。 ② 授業期間の途中で授業の理解状況に係わるアンケート・テスト等を実施し，授業の内容・方法の改善を図る。 ③ 学生の進路，悩み等の相談に随時応じる。	①については，学生の自主的な学習活動を促すために，授業で学生に「児童・生徒が算数・数学の学習内容を理解するためになにが必要か」「児童・生徒に算数・数学を理解させるために，教員はどのような授業を行わなければならないか」等をテーマに考えさせるなどした。その結果，学生同士で活発に討論等を行った。 ②については，授業後に学生に授業の内容から何を学んだかを記述させるなどして，学生の理解状況を確認した。学生の理解状況を基に，授業の内容・方法の改善を図るとともに，各学生が教員として成長するために必要だと思われることをこちらからも意見として投げかけ，学生自身が自分の理解度を意識するような場面を設定した。 ③については，学生の相談にはできるだけその時に応じ，時間が取れないときは後で時間を設定して対応した。 ①，②，③以外に，希望する学生に対して就職試験・採用試験対策として，「模擬授業」，「面接」の指導・助言（4月中旬～8月下旬，週3～5人程度）を行った。	① 「創造性の育成」，「算数・数学科担当教員の授業実践力向上」等に関する研究内容をまとめ，学会発表をするとともに学会誌に投稿する。 ② 学内外の研究助成の公募に積極的に申請する。 ③ 現職の算数・数学科担当教員の協力を得て，教育実践としての研究を行う。	点検・評価 ①については，「創造性の育成」，「算数・数学科担当教員の授業実践力向上」等に関する研究内容をまとめ，国際会議・国内学会等で研究発表（10件）を行った。数学教育学会・日本教科内容学会へ投稿した論文が採択された。 ②については，研究代表者・研究分担者として平成26年度科学研究費補助金を獲得した。 ③については，鳴門市，福北九州市の数学科担当教員の協力を得て，教育実践としての研究を行った。 ①，②，③以外に「数学学習に対する自律性の育成」に関する研究を行い，これについても研究内容をまとめ，1件の研究発表を行った。	① 担当する委員会の委員として，本学の運営に貢献する。	①については，担当する「学校教育学部教務委員会委員」として，本学の運営に貢献した。また，セクシャル・ハラスメント等の防止等に関する規程に基づく相談員を務めた。 ①以外に，教職キャリア支援センター，教員教育国際協力センターを兼務し，大学運営に貢献した。	①附属小・中学校の算数・数学担当教員とメールや電話で連絡を取り合い，研究活動，児童・生徒及び大学生・大学院生に対する指導等について意見交換・相互協力をする。（附属学校） ② 講座で開講する「算数おもしろ教室」等に参加し，児童・保護者に算数・数学の楽しさや不思議さを伝えること等を通じて社会との交流・連携を深め，社会に貢献する。（社会連携） ③ JICA等の国際協力事業に貢献する。（国際交流）	①については，附属小・中学校の算数・数学担当教員と大学や小・中学校での話し合い，メール，電話等で，研究活動，児童・生徒及び大学生・大学院生に対する指導等について意見交換・相互協力を行った。 ②については，徳島県教育会が開催する「わくわく算数教室」の講師を務める等により社会との交流・連携を深めた。 ③については，JICAの委託事業である平成26年度地域別研修の指導教員を担当する等により国際協力事業に貢献した。 ①，②，③以外に学校現場の教員研究会での指導助言，科学研究費補助金によるラオス人民民主共和国の理数科教育への国際教育協力を行った。	学長の定める重点目標である「修士論文の内容と教育実践をに活かすこと」及び，分野別「教育・学生生活支援」，「研究」，「大学運営」，「附属学校・社会との連携，国際交流等」のいずれの項目も目標・計画は確実に実行できた。また，当初の目標・計画に付け加えて実行できたことも多かった。したがって，平成26年度の総合的貢献度は大きかったと判断する。
78	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	平野　康之	ゼミの学生には常々，教育実践を意識して修士論文を書くように指導する。修士論文の題目については専門的すぎるものは避け，学校現場でも自分が修士課程でどのような研究をしたか，説明できるようなものにする。また，修士終了後，学校現場で次世代科学者を養成することが求められるので，修士課程では自身の数学的（科学的）センスを高めるような研究を行い，現場で生徒の将来を見据えた指導ができるように数学的専門性を高める研究を指導する。	二人のゼミの学生に対して修士論文の指導を行ってきましたが，常々，教育実践を意識して修士論文を書くように指導しました。一人は，無限について附属小学校校ですでに6回授業し，その実践結果に基づいて修士論文を執筆しました。もう一人は整数論をテーマにした修士論文を執筆し，小学校，中学校そして高校での授業を考慮した整数の話を第一部とし，第二部にはより進んだ整数の話をまとめました。私の二人の学生は共に，現場での生徒の指導を考慮して研究を進め，修士論文を完成させました。一人の学生は京都市の中学校採用試験に合格し，教員になった。もう一人も徳島県の鷲敷中学で臨時教員をしている。	① 数学講座の学生に，折にふれて，教員採用に対する意識・心構えを育成し，学生が充実した勉学・学生生活が送れるように積極的に支援する。 ② 折に触れ，自分の研究の一端や，興味あることなどを話すことにより，学生とコミュニケーションをとるとともに，知的集団としての品格のある大学の構築をめざす。 ③ 修士論文の指導及び進路・学生生活に関して，自分のゼミの学生であるなしを問わず，常に学生の相談に応対し，適切なアドバイスを与える。	① 数学講座の学生に，折にふれて，教員採用に対する意識・心構えを育成し，学生が充実した勉学・学生生活が送れるように積極的に支援した。 ② 折に触れ，自分の研究の一端や，興味あることなどを話して学生とコミュニケーションをとって，お互いに知性を高めあった。 ③ 修士論文の指導及び進路・学生生活に関して，自分のゼミの学生であるなしを問わず，常に学生の相談に応対した。 ④ ソフトボール同好会顧問として学生の課外活動を支援した。	① 現在研究中の「環の原始べき等元の交換性」を共同研究者と共に発展させ，成果を論文としてまとめ，学会誌に投稿し掲載する。 ② 有限環から複素数体への関数のなす環の構造を調べ，符号理論への応用をめざす。 ③ 学内外の研究助成の公募に積極的に申請し，研究資金の調達に重点をおく。特に科学研究費を獲得できるように努力する。	① 研究中の「環の原始べき等元の交換性」を共同研究者と共に発展させ，成果を論文としてまとめ，学会誌に投稿した結果，Communication in Algebra に掲載されることが確定した。 ② 論文 Annihilators in ideals of coefficients of zero-dividing polynomials (with Chan Yong; Kim, Hong Kee; Kim, Nam Kyun; Lee, Yang) がTaiwanese J. Math. 18 (2014), no. 3, 731-751に掲載された。 ③ 有限環から複素数体への関数のなす環の構造を調べ，符号理論への応用をめざし，現在研究中であり，すでにいくつかの結果を得た。 ④ 平成27年度科学研究費助成事業の公募にすでに申請し，研究資金の獲得を目指してる。	① 附属図書館運営委員会委員として学内の会議に出席し，職務を遂行する。 ② 国際交流委員会委員として学内の会議に出席し，職務を遂行する。 ③ 算数・数学科コース1年～4年の副担任として教員採用試験に関して学生へ援助，協力を行うことにより本学の教員採用率の向上に貢献する。	① 附属図書館運営委員会委員として学内の会議に出席し，職務を遂行した。 ② 国際交流委員会の副委員長として学内の会議に出席し，職務を遂行した。 ③ 算数・数学科コース1年～4年の副担任として教員採用試験に関して学生へ援助，協力を行った。 ④ 7月26日（土）に開催された鳴門教育大学オープンキャンパスで数学科の模擬授業を2回行った。	①教育実践，教科内容に関し，附属小・中学校の算数・数学教員との連携を密にし，問題の提供や，課題の解決に当たる。その際，可能な限りお互いに時間を調整して直接，大学，附属間を行き来して行うが，連絡に当たってはメールを利用する。（附属学校） ② 学校数学研究会等に積極的に参加し，現職数学教員たちと現場での数学教育における問題提起，解決問題解決に向けて討議を行なう。（社会連携） ③瀬戸中学校を中心とする地域の小・中学校と連携し，協議や提案を行い，実際に算数・数学授業の改善を行う。（社会連携） ④ 教員支援講師・アドバイザーとして登録し，機会ある毎に，学校現場で数学の話をし，教師の資質の向上を図る。（社会連携） ⑤ 徳島県教育会の主催する「徳島わくわく算数教室」の開催の要請があれば共催として参加する。（社会連携） ⑥ 次世代科学者育成プログラムというプロジェクトに，講座推進部会委員として協力する。（社会連携） ⑦ JICAによる研修をコースの一員として協力して行う。（国際協力）	①教育実践，教科内容に関し，附属小・中学校の算数・数学教員との連携を密にした。9月18日（木）には附属中学校LFT講師として全校生徒に対して「帰納法と鳩ノ巣原理」という話をした。またその日の午後には教育実習中の算数・数学科3年生の研究授業「身近な黄金比」（3年1組）を聴講した。（附属学校） ② 8月23日（土）に開催された学校数学研究会に参加し，現職数学教員たちと現場での数学教育における問題提起，解決問題解決に向けて討議を行なった。（社会連携） ③数学コースの一員として，瀬戸中学校を中心とする地域の小・中学校と連携し，算数・数学授業の改善を行った。（社会連携） ④ 教員支援講師・アドバイザーとして登録した。（社会連携） ⑤ 8月2日（土）に開催された徳島県教育会の主催する「徳島わくわく算数教室」に共催として参加した。（社会連携） ⑥ 次世代科学者育成プログラムというプロジェクトに，講座推進部会委員として協力した。（社会連携） ⑦ 6月3日（火）にJICAの大洋州地域の研修生12名に対して講義を行った。（国際協力）	7月26日（土）に開催された鳴門教育大学オープンキャンパスで数学科の模擬授業を2回行った。 国際交流委員会の副委員長として職務を遂行した。 昨年度の続きである次世代科学者育成プログラムのプロジェクトで，中学生3名に対して前期にプレマスターコースを実施し，後期にはマスターコースを実施した。
79	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	佐伯　昭彦	算数・数学の教育実践に貢献する修士論文の指導として，学生自身が主体的に研究課題に取り組み，自らの力で課題を解決し，研究を深める活動を通して，算数・数学教育の理論と実践に関する教育実践省察力，さらに，数学についての幅広い専門的な知識を備えた実践的教員を養成するように取り組む．	前期のゼミ指導では，学生自身（M2とM1の両方とも）が教員採用試験の準備等に追われ，予定通りには進まなかった．しかし，後期のゼミ指導では，年度目標に従って，学生自身が主体的に研究課題に取り組み，自らの力で課題を解決し，研究を深める活動を行ったため，算数・数学教育の理論と実践に関する教育実践省察力，さらに，数学についての幅広い専門的な知識を備えた実践的教員の育成が行えたと考える．	① 授業時では演習課題を積極的に取り入れ，学生同士によるコミュニケーション活動や探究活動等を通して，学生の主体的な学習を促すことにより，教育実践力に優れた教員を養成することに貢献したい． ② 授業中の演習課題，レポート，小テストを基に，学生の理解状態を把握し，授業内容・授業方法の改善を図る． ③ 学生及び院生の進路や悩み等の相談に応じる．	①学部「算数」では，教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキストを使った授業を行った．また，すべての授業において，演習課題を積極的に取り入れ，学生同士のコミュニケーション活動や探究活動を重視した．特に，大学院広域領域コア科目「数学と芸術，そして科学間の接点を探る」では，大塚国際美術館の来場者に芸術作品を数学の視点で紹介する活動を通して，教科の枠を超えた横断的・総合的な教材開発に関わる資質・能力を高めるとともに，多種多様な来場者に応じて分かりやすく説明する能力を高めることができた． ②授業中の演習課題，レポート，小テストを基に，学生の理解状態を把握しながら授業を展開した．成績評価については，定期テストだけでなく，学生同士の発表・討議における参加態度，発表内容，提出物などを取り入れた評価を行った． ③ゼミを通して学生及び院生の進路や悩み等の相談に応じた．その結果，M2の学生は高等学校の臨時教員として採用された．	① 従来からの研究テーマ「数学的活動におけるテクノロジー活用」と「数学的モデリング」をまとめ，全国学会誌に投稿する． ② 上記①の研究を発展させて，小学校，中学校，高等学校を通じて児童・生徒が確かな知識・技術を継続的に習得できる教材開発の研究を行い，学会発表を行う． ③ 科学研究費補助金の基盤研究（C）（研究代表：佐伯昭彦）において，学術研究者，実践研究者，現職教員（教員志望学生）が三位一体となって，数学的モデリングにおける理論と実践を架橋する授業研究を行い，その成果をまとめ学会発表，さらに論文投稿を行う． ④ 現職の算数・数学科担当教員の協力を得て，学習指導法に関する共同研究を行う．	①研究テーマ「数学的モデリング」に関する論文1本が国内学会誌に採択され，平成27年度に掲載の予定である．また，「数学的モデリング」に関する英文論文1本が，著書（Springer）に採択され，平成27年度に掲載の予定である．平成27年2月に開催されたCERME9（算数・数学教育に関するヨーロッパ地域の会議）に出席し，日本とオーストラリアの小学校の数学的モデリング能力に関わる比較研究についての発表を行った． ②小学校で実践した「数学的モデリング」の教材を発展させて中学校用の教材を開発し，11月25日に附属中学校の選択総合学習で授業を行った． ③科学研究費補助金の基盤研究（C）（研究代表：佐伯昭彦）において，学術研究者，実践研究者，現職教員（教員志望学生）が三位一体となって，研究会を5回，研究授業を2回実施した． ④科学研究費補助金は基盤研究（C）（研究代表：佐伯昭彦）が基盤研究（C）（研究代表：柳本哲）が継続し，基盤研究（A）（研究代表：礒田正美）が新規採択された．	① 担当する委員会の委員として，本学の運営に貢献する．	「大学院教務委員会」の委員としての任務を遂行した．	① 附属小学校・中学校の算数・数学担当教員と連絡を取り合い，研究活動及び児童・生徒の指導方法についての意見交換を行う．（附属学校） ② 公立学校，地域社会等の連携を積極的に行い，社会に貢献する．（社会との貢献） ③ JICA等の国際協力事業に貢献する．（国際交流）	①附属小学校・中学校の算数・数学担当教員と連絡を取り合い，研究活動及び児童・生徒の指導方法についての意見交換を行った．また，附属小学校が開催した第61回小学校教育研究会の共同研究者として教材開発等における助言を行うとともに，平成26年5月26日に開催された合同研究会に参加し意見を述べた．（附属学校） ②本学大学開放推進事業である「算数おもしろ教室」で講師を務め，幼稚園年長組から小学校6年生までの約40名を対象に「しきつめましょう！」の授業を行った．また，平成26年8月21日に開催された徳島県高等学校研究大会数学学会において講演（題目「事象を数学的に考察し表現する能力の育成について」）の講師を務めた．（社会との貢献） ③JICA等の国際協力事業として，大洋州地域研修に指導教員として貢献した．（国際交流）	①「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の研究協議会委員を務めた． ②「教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキスト 算数」の執筆を行った． ③大学院の授業「数学科授業研究」において，徳島県立総合教育センターと大塚国際美術館との連携による数学と美術に関する授業を設計し実施した． ④7月2日に聖徳大学で開催された「教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の試行的実践と改善第1回シンポジウム公開授業」における「算数」の授業の講師を務めた．また，12月3日に本学で開催された「教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の試行的実践と改善第2回シンポジウム」で報告を行った． ⑤10年経験者研修「特定課題研究」の共同研究として，城東高校の岡佐古拓也教諭の指導を8月以降から月1回以上のペースで行い，12月26日に徳島県立総合教育センターで開催された行動研究会でその成果を発表した．
80	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	成川　公昭	学校現場における教育実践において求められている指導は，単に教科書に記述されたものをそのまま指導書に従って忠実に行うことではない。それぞれの子ども達の発達段階や，知識，性格，能力を十分に把握し，ひとり一人の個に合った指導方法や内容を工夫し，教師が作り上げた上で実際の指導を行わなければならない。また，現在の社会や，自然科学の急速な進歩や，それに伴う意識や価値観の変化を考えるとき，既に獲得している知識や技能だけにとどまらず，それらを基礎として，更に自由な発想から全く遭遇したことのないような新たな課題にも対応出来るだけの力や考え続ける習慣を身につけなければならない。そのためにまず，修士論文指導を通して，次のことを目指す。すなわち，1）物事を科学的に考えられるだけの基礎知識を正確に習得させ，その基礎固めを行う。2）研究課題が学校現場で教えられている内容と如何に係わり，発展してきているか，またその根底においてどのように支えているのか，現場で教えられている内容を参照しながら実感させ，教科内容を深めることの必要性を実感させる。3）自らの力で物事を考え直し，更に新たな見地から課題を見直す習慣を身につける。その際，表面に現れる現象だけに目を奪われず，本質がどこにあるのか見極める力をつける。常に，以上の目的を頭に置いて指導し，特にこれら一つ一つが，実際に学校現場の教育実践において，どのように反映されるか，セミナー中に具体例を引きながら指導に当たる。	本年は2年次修士学生2名，3年次長期履修生1名，1年次修士学生2名，2年次長期履修学生1名について修士論文指導を行った。 1年次修士学生2名，2年次長期履修学生1名については，教育現場で行われている実践内容を広く高い立場から眺めることのできる基礎力とその考え方を身につけることを目的としてセミナーを行った。研究テーマについてはそれぞれの学生が希望したものを選び，指導を行った。その際，単に知識の習得が目的でないこと，本質を捉えるために多面的な考え方ができること，教科書に書かれていることを鵜呑みにせず自ら納得するまで考えることの重要性を強調し，常にそれらを意識して課題に取り組むことが習慣づけられるよう努めた。年度当初においては，テキストにはこう書かれているから，と何の疑いもなく説明していた姿勢から，なぜそのように書かれているのか，現代数学的な立場ではどのように理解できるのか，生徒に理解させるためにどのような工夫がなされているのか，等の点に注意を向けて研究を進めることができるようになった。まだそれらを分析するだけの基礎力が不十分である点も感じられるが，これらは来年度の修士論文に向けての研究を深めながら修得できるものと思っている。 2年次修士学生2名，3年次長期履修学生1名の修士論文は，学校で指導されている内容のうち，特に興味ある部分を選び，それに焦点を当てて高い立場から見直し，改善の工夫や新たな教材の提言を行うことを目標として指導を行った。特に，学校現場において言われている数学の理解の困難さや，興味の喪失の原因が数学の抽象性にあることを学生に理解させ，その解消のための方策を自ら考えるよう課題を与えた。その結果，それぞれ教科書には書かれていない具体的な現象をとりあげ，その奥に今指導されている内容が潜んでいることを明らかにした。これらの教材を示すことにより子ども達の数学に対する興味や，感動が引き起こされると思われる。学生達のこのような視点からの研究は，今後の教師として不可欠な姿勢を指し示しており，修士論文の作成を通してこのような力や態度を育成することが目的であった。特に長期履修生については，工学部出身者であり，工学部において学んだ知識や経験が活かせるよう研究テーマの設定や，研究の進め方にも工夫を行った。その経験に基づき，違った観点から物事を見ることのできる能力は，教師として非常に貴重であり，それを今後十分に活かすよう強調して指導を行った。	学生が自らの目標に向かって充実した学生生活を送ることが出来るよう，ひとり一人の学生の素直な意見や本心を聞き，ともに考え意見が交換できるような機会を積極的に持つとともに，お互いの信頼関係を構築する。特に，授業においては勿論，日頃の交流の中で，問題提示やその解決のための分析をいろいろな角度から行い，ひとつの事柄に対しても様々な違ったものの考え方をすることが出来ることを示し，更にそうすることにより，未経験の課題に対してもじっくりと分析すれば解決の糸口を見いだすことができるということ伝えたい。また，受動的に学生生活を送るのではなく，自ら考え，自らの力で工夫して生きていくことの充実感をあらゆる局面において味わってもらいたい。このために，自分の研究や，生き方等に対する考え方を学生に示し，知的関心や好奇心を持って毎日を送ることの楽しさや充実感を伝えられるよう努力する。最近の学生に多く見られる常識の欠如や基礎力の不足をこちら側から教え込むのではなく，学生自らのちからで克服出来るよう支援できればと思っている。これらは，全て相互の堅固な信頼関係の上に成り立つものであり，お互いに気楽に悩みや相談を打ち明けられるよう頻繁な声かけや話し合いを持つよう努力する。 学部4年生，大学院2年生に対しては当初の目的である教職に一人でも多く就けるよう，数年来行っている「教員採用対策塾」を本年度も開催し，各都道府県の教員採用試験過去問題や予想問題の解説を行う。解説においては，単に試験対策に終わらず，いろいろな角度から分析し，その本質が見極めることが出来るよう注意し，教員になった後もそのような姿勢で物事に当ことの出来る力を養う。	授業時のみならず，廊下で見かけた場合でも声を掛け，できるだけ学生との交流をはかり意思の疎通を行うことにより，お互いの信頼関係を構築した。その際，こちらの考えが押しつけにならぬよう心がけ，学生の意見を尊重し自主性を重んじることにより，積極的な学生生活を送ることができるよう努めた。定期試験時や採用試験前には多くの学生が熱心に質問に研究室を訪れ，それにできるだけ丁寧に応えるよう努めたが，その際，広く物事を捉え，考える習慣が身につくよう，単に質問に答えるだけではなく，いろいろな考え方があることを説明し，更に話題を広げて話すようにした。自然棟一階の廊下，ロビーでは本年も多くの学生がクラブの打ち合わせ，授業の勉強，採用試験勉強を行っていたため，励ましの一声を掛けるようにした。特に数学，理科，技術に関わる質問を多く受け，じっくりと理解に至るまで説明し感謝された。説明する側も授業時間のように，時間や内容にとらわれる必要がないため，十分に楽しんで解説を行うことができた。大学院生については多くの院生が院生室を勉強の場として利用しており，特に本年はコース長として学生からの要望を聞き，それに応えるようにし，その環境の保持に努めた。コース等で企画した各種行事（わくわく算数教室，算数おもしろ教室，学校数学研究会，科学者養成プログラム，子どものまちフェスティバルへの出店等）では学生の協力を仰ぎ，一緒になって企画・運営を行った。これらの活動により多くの学生が将来教師として必要な企画・運営力を培う結果となり，授業にもまして大きな教育活動であったと高く評価できる。 昨年度秋から引き続き，「教員採用試験対策塾」を毎週金曜日午前に2時間程度開講し，各都道府県の採用試験の過去問題や予想問題の解説を行った。これは基礎力養成のいい機会ともなっているため，単に解法を示すだけではなく，様々な角度からその問題を眺め，その奥に潜んでいる本質的な部分にも言及するよう努めた。学生も積極的にこれに参加し，自ら黒板に解答し説明するのは勿論，用意したプリントを基に，丁寧に勉強ノートを作成していた。単なる結果ではあるが，採用試験受験後に多くの学生からここで解説した問題が出題されて良かったと非常に好評であった。 本年度は修学上の悩みの相談はあったが，精神的な悩みや，学生生活における悩みを訴える学生はいなかった。	徳島大学工学部，総合科学部の教員と数年来に亘って継続中の「準線形楕円型方程式の解の構成とその定性的性質」について更に深く研究を行う。現在科学研究費にその研究の一部として，研究課題「非同次な主要部を持つ準線形楕円型方程式系の研究」を申請中であるが，採用，不採用に拘わらず，現在まで我々共同研究者の間で構築した知見をもとに研究を推し進める。具体的には，原則週1回共同研究者が集まり，それぞれの研究結果や課題を提示し，セミナーを通してその研究を深めていく。	本年度申請の科学研究費補助金研究課題「非同次な主要部を持つ準線形楕円型方程式系の研究」は不本意ながら不採択となった。それとは独立に，徳島大学における総合科学部，工学部のスタッフと時間を調整して，週に1日程度の頻度でセミナーを行い，準線形楕円型方程式に対する研究を進めた。 技術・科学者育成プログラム・プレマスターコース，マスターコース（数学分野）を月1回のペースで開設した。開講回数は，プレマスターコース5回，マスターコース7回（1回3時間），研究発表会2回，その準備各1回であった。その実践結果の一部をまとめ，本学紀要に掲載した。	自然系コース（数学）のコース長として，コースで行う種々の取り組みの調整，運営を行う。定期に開催される月1回のコース会議においては勿論，学生の情報をはじめとして各種情報を共有し，的確な対応を取ることが出来るよう自由に意見交換が出来る場を出来るだけ持つ。お互いの研究活動は尊重し，出来るだけいい環境で研究が進められるよう，各種委員会等は均等に分担し，学会等で出席が不可能な場合には他の教員が代理出席して支障が出ないよう調整する。 教育部およびコースより選ばれた各種委員会の委員として大学運営に関わり貢献する。	自然系コース（数学）のコース長として，種々の事務的業務をコース構成員の調整を図りながら行った。毎月教育部会後にコース会議を持ち，コースとしての審議事項を議論することは勿論，学生の情報をはじめとして各種情報を共有し，的確な対応がとれるよう自由な意見交換を行った。コース会議以外においても適宜臨時に会議を持ち，諸問題に当たった。コースとしての様々な取り組みにおいても協力体制を維持しながら遂行できるよう，各教員の研究環境をできるだけ配慮し，各種行事を行った。	①附属学校との連携を密にし，研究協力体制を推進する。（附属学校） ②コースで開催される地域社会への連携事業の企画，実施を行う。（社会連携） ③登録している「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」等による各学校よりの依頼があったとき，積極的にその企画を実行する。（社会連携） ④中・高等学校（数学科）教諭を対象として「県・大学連携による教職員研修」を行う。 ⑤JST「次世代科学者育成プログラム」は本年度未採択となったものの，これを引き継ぎ，昨年度から進学した児童・生徒に対して，当初予定であったプレマスター，マスターコースを実施する。 ⑥JICA等による国際協力事業をコース教員と協力して行う。	①附属中学校の研究授業に対し，数学の専門的立場から意見を述べた。JICAによる大洋州研修員が来た際には附属小・中学校を案内した。特に，附属小学校では算数教員とともに日本における算数教育と大洋州の特徴の比較研究のための議論を行った。 附属中学校2年生対象の選択総合授業を11月4日に「最小・最大値問題」というテーマで行った。 ②数学コースとして8月2日に徳島県教育会館にて「わくわく算数教室」を実施した。実施に当たってはコース長として，研究室において教育会館職員と打ち合わせを行うとともに，メールのやりとりを通して細部について計画を詰め，さらに院生の協力の下，その準備と実施に当たった。多くの子ども，保護者がこれに参加し，非常に好評であった。 毎年開催されている「学校数学研究会」を8月23日に開催し，学内外からの講演が行われた。院生の協力の下，機関誌「学校数学研究」も春・秋の2号を出版することができた。 ③城南高校の課題探求授業においてどのような研究テーマがあるか城南高校数学教師から問い合わせがあり，実際に大学に来てもらい，幾つかのテーマを提示するとともにそれぞれのテーマに対しその狙いとするところや考えられる実践形態について説明した。更に，研究が行き詰まったということで，生徒達が研究室を訪問し直接の指導を行った。大学の先生は観点が違うという感想であった。 城南高校スーパーサイエンスハイスクール事業に対して，1月23日教育支援講師として講演を行った。 ④8月19日に「初等幾何からわかること，そしてその先」というテーマで県・大学連携による教職員研修を実施した。 ⑤「次世代科学者育成プログラム・プレマスターコース，マスターコース」の数学分野を3名の数学指導教員で実施内容の検討を行い，それに基づいて実施した。開講回数は計12回に及んだ。更に，各コースの修了時にそれぞれ研究発表会を行った。3月22日に修了式が行われたが，それに先立つ研究発表会も充実した内容であり，生徒，保護者においても非常に好評であった。日程の調整に苦労したが，受講生は非常に熱心な上に優秀であり，また指導教員も非常に協力的で，それぞれの回に全員が出席し指導に当たることができた。 ⑥JICAによる国際協力事業の大洋州研修において，①で述べた附属学校引率に加え，解析分野の講義，演習を行った。	1．定期的に毎週「教員採用試験対策塾」を行い，学生の採用試験対策を補助するとともに，それを通して基礎力の定着，応用力，思考力の養成を行った。 2．「次世代科学者育成プログラム・プレマスターコース，マスターコース」の数学分野を担当し，計12回中学生に対して開講した。更に，それぞれのコースの仕上げとして研究発表会を行った。これを通して地域の自然科学の振興に寄与した。 3．コース構成教員が協力し，知り合いの大学教員に呼びかけ，結果18名の大学院入学生を得ることができた。ただ，このうち9名が長期履修希望者であり，今後，教育の質の担保に対し十分に応えられるよう，指導体制の確立と教育環境の確保をしっかりと考える必要性を感じている。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
81	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	松岡　隆	修士論文を学校の教育実践に貢献するものにするため，以下のような指導を行う。 ・まず，学校での算数・数学の教科内容に関連した研究テーマを選ぶ。選択においては，学生の意志を十分に尊重する。 ・先行研究の調査の指導を行う。 ・研究に必要な数学理論を十分に理解・習得できるよう補助する。 ・研究テーマに係る算数・数学の教科内容に対し，習得した数学理論を用いて，内容の解釈の深化，内容の体系性・発展性等に関する成果が得られるよう指導する。 ・得られた成果を用いた教材の作成にも取り組ませる。 ・成果を修士論文にまとめるための指導を行う。	2年ゼミ生（3名）については，学校での算数・数学の内容に関連した研究テーマとして，それぞれの希望を尊重した上で，「数学教材開発の手法の研究」，「平面図形の性質に関する発展的考察」，「折り紙数学の研究」を選んだ。既に1年次に先行研究の調査を終えていたため，研究に必要な数学理論を理解し，その下に研究テーマに係る算数・数学の内容解釈を深めて成果に結びつくよう指導した。その結果，3名とも学校数学の理解や教材の開発に関するオリジナルな成果を含む修士論文をまとめることができた。 1年ゼミ生（3名）については，研究テーマとしてそれぞれ「四角形の変形」，「構成主義による数学教育」，「結び目の数学」を選び，先行研究の調査と研究に必要な数学理論や数学教育理論の習得を指導した。	1．卒業・修士論文の指導に当たっては，将来教員となったときに自らの力で教材研究を行える能力を養成するため，創意工夫できる機会を十分に取ることを重視して指導する。 2．授業内容に更なる工夫を重ねることにより授業改善に努める。 3．ゼミ生に，教員採用試験対策として数学問題や教科内容などの指導を行う。	1．卒業・修士論文の指導（学部生4名，院生6名）に当たっては，自らテーマを決めさせ学生自身で創意工夫できるよう努めた。 2．学部の授業の内容については学校での内容や現実とのつながりをより重視して精選を進めた。また，自らの力で解決の道筋を発見していく必要のある課題を充実させた。大学院の授業では，各内容の時間配分を改善した。 3．ゼミ生からの教員採用試験の数学問題に関する質問に対し解説・指導した。	1．トーラス上の連続変換の周期点について，不動点定理を用いて研究する。 2．京都大学数理解析研究所の共同研究プロジェクトのメンバーとして，教員養成系における算数・数学専門科目の内容・構成・指導法についての研究を行う。 3．27年度の科学研究費の申請を行う。	1．トーラス上の連続変換の周期点について，不動点定理を用いて研究し，現在，成果を論文にまとめている。 2．京都大学数理解析研究所の共同研究プロジェクトのメンバーとして，教員養成系における算数・数学専門科目の内容・構成・指導法についての研究を行った。 3．27年度の科学研究費を申請した。 4．教科内容学の研究を進め，5月に本学で開かれた日本教科内容学会第1回研究大会において，課題研究「教科書作成から見えてきた教科内容学の方向性」において発表を行った。	いずれかの委員会委員として，会議に出席し職務を遂行する。	教育研究評議会評議員を務めた。また，学部入学試験委員会，大学改革構想検討委員会，高知大学・鳴門教育大学教職大学院共同設置に係る教育課程等検討専門部会，長期履修学生支援センター会議，修士課程改革専門部会，および人事委員会（2件）の委員を務めた。	1．附属小・中学校の算数・数学教員から質問・依頼があれば，アドバイスや支援を行う。（附属学校） 2．教員支援講師・アドバイザーの登録を継続する。学校現場から講師としての要請があれば，積極的に引き受け，生徒・児童に数学の楽しさ，面白さを伝えるよう努める。また数学に関する質問，相談があればアドバイスを行う。（社会貢献） 3．徳島県教育会主催「わくわく算数教室」において図形パズルのコーナーを担当する。（社会貢献） 4．JICA研修の講師を務める。（国際協力）	1．附属中学校において，「図形分割パズル」をテーマに授業を担当した。（11月11日） 2．教員支援講師・アドバイザーへの登録を継続した。 徳島県立城南高校において「図形の対称性と万華鏡」をテーマに授業を行った。（1月23日） 大阪高等学校教育会の顧問として，大阪府立夕陽丘高校で開かれた研究会で教材例を紹介した。（8月17日） 3．徳島県教育会主催「わくわく算数教室」（8月2日）で，図形パズルのコーナーを担当した。 4．大洋州のJICA研修の講師を務めた。（6月27日）	1．本学実施のプロジェクト「教員養成モデルカリキュラムの試行的実践と改善」のシンポジウムで以下の発表を行った。 ・第1回シンポジウム（7月2日） 「教科内容学に基づく小学校教科専門科目のテキスト開発一理論と方法一」 ・第2回シンポジウム（12月3日）「中学校教員養成における教科専門科目のあり方：数学科の立場から」 2．島根大学教育学部のFD研修会の講師として，「鳴門教育大学プロジェクトによる教科内容学研究の歩みと成果」と題した講演を行い，鳴門の教科内容学研究の成果について紹介した。（2月23日） 3．日本教科内容学会の編集委員長を務めた。 4．「教科内容学に基づく小学校教科専門教科書」の出版事業の世話人を務め，算数を含む6教科の教科書を出版した。 5．本学のFD公開授業の一環として，「幾何学Ⅱ」を公開した。（1月29日）
82	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	坂井　武司	算数・数学教育に関する修士論文のテーマとしては，「言語活動の充実」，「思考力・表現力の育成」，「算数・数学を学ぶ楽しさ」，「既習内容の活用」，「算数・数学的活動の充実」，「ICTの活用」等の学校現場で課題となっていることや算数科・数学科の特定の単元の指導法の開発や児童・生徒の数理認識等の算数・数学教育に関する学会等において教育実践に関する課題として示されていることを中心に，院生と相談の上決定する。そのため，できるだけ早い段階で，算数科・数学科の授業参観や教員へのインタビューを行う機会を設定すると共に，算数・数学教育に関する学会誌，全国学力調査及びPISA調査の報告書，学習指導要領等の先行研究に取り組ませることにより，院生に課題を意識させる。また，修士論文の内容として，学校の教育実践に貢献できるように，児童・生徒の実態の把握に基づいた指導法や指導計画の開発に取り組ませる。そのために，アクションリサーチによる実証的研究に基づき，認識調査の開発，学校現場での調査の実施，調査結果の分析と考察，指導法や指導計画の開発，教育実践，指導法や指導計画の修正という流れで研究指導を行う。また，調査を実施したり，可能な限り開発した指導法や指導計画を学校現場において実践したりしてもらえるように依頼する（院生自身が実施する場合も含む）と共に，学校現場で実際に実践していく上での問題点や改善点についての聞き取りを行う機会を設定する。調査問題の開発，指導法や指導計画の開発，統計的な分析処理には，算数・数学の本質を理解する必要があり，専門的な知識を学ぶ必要がある。これらの内容については適宜取り入れ，統計ソフト等を有効に活用させながら，院生が教員になったときに実践可能な指導法や指導計画の開発に焦点を当てて研究指導を行うと共に，教員になってからも新たな課題に対して個人研究や複数の教員との共同研究を進めていくことができる力を育成できるように，一対一の個別ゼミだけでなく，2～3人のグループで互いの研究について議論する合同ゼミを取り入れていく。	本年度指導している6人の院生の研究テーマは，「算数教育における思考力・表現力を高めるためのノート指導」（L3），「算数教育における見積もりのスパイラルな指導」（L3），「数学的コミュニケーションによる算数指導」（M2），「児童が理解に困難を示す小数×小数，小数÷小数の指導改善」（M2），「学習障害児（算数障害児を含む）の学習理解を促進する算数科の指導方法」（L2），「算数教育における確率指導の在り方」（L2）であり，どれも，院生が教員になったときに実践可能な指導法や指導計画の開発に焦点を当てた研究指導を行っている。M2とL3については，公立小学校での認識調査を行い，その分析から捉えた児童の実態に基づき新たな指導法や指導計画を開発した。また，それらの指導法や指導計画に基づいた授業実践を行い，事前事後調査を通して，授業の効果の分析も行った。L2についても，算数・数学教育に関する学会誌，全国学力調査及びPISA調査の報告書，学習指導要領等からの先行研究をまとめるとともに，公立小学校での教員へのアンケート調査とインタビューを実施し，その分析を通して，教員の実態把握を行った。また，現在，教員の抱える問題を解決するための指導法の開発を行っており，来年度，授業実践を予定している。このようなアクションリサーチによる実証的研究を通して，教員になってからも新たな課題に対して個人研究や複数の教員との共同研究を進めていくことができる力を育成し，学校の教育実践に貢献する指導ができたと考えられる。特に，本年度は，アクションリサーチとして，小学校の現場の教員との連携による研究を進めていけるフィールド作りに力を入れて取り組んだ。	①担当する科目において，豊かな教養と授業実践力をもった教員を養成するために，言語活動及び協働的な活動による演習を取り入れながら講義を進めると共に，自分の研究と授業内容とを連動させ，最新の情報を提供できるようにする。 ②教員採用試験や小学校教員資格認定試験を改題した授業に関連する小テスト等を実施し，授業内容の理解度を調べ，授業内容や授業方法の改善を図る。 ③小テストの解答を次時の授業で取り上げることにより授業内容の理解の定着を図るとともに，小テストの結果を学生にフィードバックすることにより，自律的な学習態度の育成を図る。 ④実習等での欠席に対応できるように，授業資料を作成・配布する。 ⑤研究室に気軽に相談に来られるよう，学生とのコミュニケーションを図るとともに，メール等で授業内容，研究，進路，学生生活等の相談に随時応じられる体制をとる。	①に関して，前期に担当した「数学科教材論」や「数学科授業論」において，言語活動及び協働的な活動による演習を取り入れながら講義を行った。また，研究論文等から必要に応じて資料を紹介し，豊かな教養を身に付けられるように配慮した。さらに，「数学の専門性と教育」において，自分の研究テーマである小学校算数の「割合」を題材とし，分析の手法として用いている命題論理や述語論理の活用の仕方の演習等を行い，現在進行形の研究と授業内容を連動させ，アクションリサーチによる授業研究の実際について紹介し，質の高い授業実践力を身に付けられるように配慮した。後期に担当している「算数科教育論」や「数学科教育論」では，算数的活動や数学的活動を体験する演習を取り入れ，対話的な授業を通して，学生の算数・数学の内容及び指導の実際についての理解を深められるように講義を行った。また，「数学科授業研究」では，脳科学の知見を取り入れた授業案作りにも取り組み，これまでも行われてきた支援の理論的裏付けをするとともに，新たな支援のあり方について検討を行った。これらの指導により，豊かな教養と授業実践力をもった教員を養成することに資することができたと考えられる。また，これらの成果が授業評価にも反映されている。 ②に関して，算数科教育論において，教員採用試験や小学校教員資格認定試験を改題した授業に関連する小テスト等を実施し，授業内容の理解度を調べるとともに，学生の記述した授業の感想をもとに授業内容や授業方法の改善を図った。具体的には，次時の授業の冒頭において，学生がもう少し詳しく知りたいと感想に書いてあったことの補足や資料の提示を行ったりした。 ③に関して，小テスト及び演習における個別指導を丁寧に行い，授業内容の理解度を把握し，授業方法の改善を図った。また，次時の授業の冒頭において，小テストで間違いの多かった問題の解説を行った。さらに，自律的な学習態度の育成を図ることができるよう，小テストの結果を学生にフィードバックした。 ④に関して，授業資料として，パワーポイントの資料，演習のワークシートを準備した。また，演習のワークシートについては，演習の具体的内容を書き込んだ手書きのシートを別途準備し，欠席等で求めのあった学生に対してシートの配布及び授業のポイントの説明を行った。 ⑤に関して，所属するコースに関係なく，教員採用試験問題の数学の問題の解説及び模擬授業のリハーサルを学生の求めに応じて随時行った。また，教育実習期間は，学生が実習後，大学に戻ってきて質問できるように対応し，学習指導案の作成等及び個別指導の仕方等について助言を行った。さらに，様々な場面で，学生が子どもを教える際の力量を高められるように，家庭教師での指導の仕方等，授業以外の内容であっても気軽に対応した。 ⑥就職支援課の主催する模擬授業，模擬面接，模擬集団討論に面接官として協力した。	①本年度の主たる研究として，「算数教育における割合に関する数理構造の理解を促進するメカニズムに関する研究」（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）課題番号：25381204）の研究計画にしたがい，「割合に関する概念的知識」と「割合に関する手続き的知識」の関係についての調査結果の分析・考察から明らかになった児童の割合に関する認識を変容させる教授法を開発・実施し，その効果について明らかにする。また，この研究成果について，学会等での発表を行う。 ②上記の教科内容に関する主たる研究以外についても，研究グループに参加し，共同研究者として研究を行う。	①に関して，本年度の主たる研究として，「算数教育における割合に関する数理構造の理解を促進するメカニズムに関する研究」（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）課題番号：25381204）の研究計画にしたがい，研究を進めた。研究の成果については，「算数教育における割合についての数理構造の理解に関する研究」という研究主題の博士論文にまとめている。また，「割合に関する概念的知識と手続き的知識の統合」の論文が数学教育学会誌に掲載が確定するとともに，「Logical analysis of ratio inference by children」の論文が国際数理科学協会のScientiae Mathematicae Japonicaeに掲載が決定した。なお，「割合の学習における双方向の見方に関する研究」を数学教育学会に投稿・査読中である。さらに，全国数学教育学会での「割合に関する児童の推論の論理学的考察」の研究発表（1月），数学教育学会での「割合に関する概念的知識と手続き的知識を統合する授業構成」の研究発表（3月）を行った。 ②に関して，「算数教育における児童の数学的価値としての審美性認識のメカニズム」（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）課題番号：26381237）の共同研究者として研究を行った。 また，日本教授学習心理学会第10回年会において，「算数教育における数学的推論としてのAbductionの院生に関する研究」の共同研究者として発表を行った。 ③上記の科研の研究グループ以外において，「児童の「小数×小数，小数÷小数」の学習理解度尺度の開発」の論文が数学教育学会誌に掲載された。また，数学教育学会での「算数教育における教師の授業実践力に関する尺度開発」の共同研究者として発表（3月）を行った。	大学院入試委員として，会議への出席及び職務の遂行をし，本学の運営に貢献する。また，担当する委員会以外にもコースからの代理出席をし，本学の運営に支障を来さないようする。	①大学院入試委員として，会議への出席及び前期選抜試験における試験班の職務を遂行した。また，大学院の定員充足のために，沖縄県教育委員会及び那覇市教育委員会を訪問し，大学院の説明と派遣依頼を行った。さらに，四天王寺大学の知り合いの教員のゼミ生に対し，個人的に大学院への進学について説明を行い，その結果，その学生は入学することが決定した。 ②「グローバルな視点を持った教育を養成する海外研修プログラム策定のための調査研究」の一環として，タイのコンケン大学を訪問し，教育学部長との懇談会において，具体的なビジョンの検討を行った。	①共同研究者として，附属小学校・附属中学校の合同研究会及び教育研究会に参加すると共に，推進授業や研究授業において指導助言を行う。附属学校の算数・数学教員とメールによる質問・相談等の研究協力が行える体制をとる。（附属学校） ②附属学校での教育実習の授業参観を行う。（附属学校） ③教育支援講師・アドバイザーに登録する。（社会連携） ④教員免許状更新講習の講座を担当する。（社会連携） ⑤小学生やその保護者を対象とする「算数教室」において講座を担当する。（社会連携） ⑥JICA等の国際協力事業に貢献する。（国際交流）	①附属小学校の合同研究会（5月）に参加し，意見交流を行った。研究発表会のための資料取りの授業研究会に参加し指導助言を行う（12月）とともに，研究発表会（2月）において指導助言を行った。また，附属中学校の研究発表会に向けて指導案検討に携わるとともに，第58回中学校教育研究発表会数学科分科会で指導助言を行った（5月・6月）。さらに，附属学校の算数・数学教員とメールによる質問・相談等の研究協力が行える体制作りを行った。【附属学校】 ②附属学校の教育実習期間中，自然系コース（数学）に所属する学生及び院生の授業参観を行い，助言等を行うことを通して，附属学校との連携協力を行った（9月）。【附属学校】 ③教育支援講師・アドバイザー及び徳島県生涯学習情報システム「まなびひろば」の人材・指導者情報に登録し，徳島県小学校教育研究会算数部の依頼のもと，平成26年度算数夏季研修会において「数学的な思考力・表現力を育てる算数科授業のあり方」の講演を行った（8月）。【社会連携】 ④教員免許状更新講習において，「算数教科書の数学的背景と教材研究」の講座を行った（8月）。【社会連携】 ⑤徳島県教育会主催の「徳島わくわく算数教室」（8月）における講師として，小学校1年生～6年生の児童とその保護者を対象に，「ふしぎな絵をかこう」という図形のおもしろさを実感できるような講座を行った。また，なるっ子わくわく教室の「おもしろ算数教室」（10月）における講師として，小学校1年生～6年生の児童とその保護者を対象に，「マッチ棒パズルに挑戦」という直観的な発想と論理的な思考を育む講座を行った。【社会連携】 ⑥JICAの主催する国際協力事業「大洋州地域における算数・数学教授法改善に向けた自立的研修の普及2014」に協力し，研修員のレッスンプラン作成のための模擬授業を通した指導を行った（6～7月）。また，「平成26年度国別研修パプアニューギニア「教材の質の改善（短期研修）」」に協力し，数と計算に関する指導内容の系統とその背景について講義を行うとともに，レッスンプランの作成と模擬授業の指導をおこない，研修員が具体的な指導をイメージしたカリキュラム開発ができるように支援した（11～12月）。さらに，「仏語圏アフリカ 理数科分野における教授法/教科指導法改善研修」に協力し，指導案の作成方法と活用について講義資料を作成すると共に，模擬授業に対する指導を行った（1～2月）。【国際交流】 ⑦三田市教育委員会指定研究事業である三田市立けやき台小学校の「表現力豊かな子をめざして－子どもたちの関わりを深める発問の追求－」の研究に研究協力者として参加し，年間3回の研究授業の参観及び指導助言を行った（6月，9月，10月）。また，算数科研究発表会において，「算数の授業構想と思考・判断・表現を育成する発問」の講演を行った（10月）。【社会連携】 ⑧神崎郡小学校算数担当者研修会として甘地小学校で開催された小学校算数科授業改善研修会において，研究授業の指導助言及び「数学的思考・表現力を高める活動を目指して－授業の型と発問・評価－」の講義を行った（11月）。また，甘地	①ゼミ生に対して個別に模擬授業及び模擬面接の指導を行った結果，来年度，3人が小学校，1人が中学校（数学），1人が高等学校（数学）での採用が決定した。 ②徳島県小学校教育研究会算数部の依頼のもと，平成26年度算数夏季研修会において「数学的な思考力・表現力を育てる算数科授業のあり方」の講演を行い，教育現場と大学との連携のために努めた（8月）。 ③三田市教育委員会指定研究事業である三田市立けやき台小学校の「表現力豊かな子をめざして－子どもたちの関わりを深める発問の追求－」の研究に研究協力者として参加し，年間3回の研究授業の参観及び指導助言を行った（6月，9月，10月）。また，算数科研究発表会において，「算数の授業構想と思考・判断・表現を育成する発問」の講演を行い，教育現場と大学との連携のために努めた（10月）。 ④神崎郡小学校算数担当者研修会として甘地小学校で開催された小学校算数科授業改善研修会において，研究授業の指導助言及び「数学的思考・表現力を高める活動を目指して－授業の型と発問・評価－」の講義を行った（11月）。また，甘地小学校の校内研修として，年間3回の研究授業の参観及び指導助言を行い，教育現場と大学との連携のために努めた（8月，9月，10月）。 ⑤芦屋市潮見中学校で開催された芦屋市合同授業研究会数学科分科会において指導助言を行う（10月）とともに，数学科の授業改善として，合同研究会前に数学科の授業参観及び指導助言を行い，教育現場と大学との連携のために努めた（9月）。 ⑥徳島県教育会主催の「徳島わくわく算数教室」（8月）における講師として，小学校1年生～6年生の児童とその保護者を対象に，「ふしぎな絵をかこう」という講座を行い，大学と地域社会との連携に努めた。 ⑦なるっ子わくわく教室の「算数おもしろ教室」（10月）における講師として，小学校1年生～6年生の児童とその保護者を対象に，「マッチ棒パズルに挑戦」という講座を行い，大学開放推進事業に努めた。 ⑧神戸大学から数学教育学の専門家として依頼され，非常勤講師として「数学教育論A」の講義を行った（4～9月）。 ⑨教員免許状更新講習において，「算数教科書の数学的背景と教材研究」の講座を行い，大学と教育現場との連携のために努めた（8月）。 ⑩鳴門教育大学職員宿舎粟津会の会長として，町内会の運営（月1回）に参加し，地域に貢献した。 ⑪小中一貫教育推進校港島学園（港島小学校）における算数科授業研究会の指導助言を行った。また，同校において，第2学年3クラスの児童に対し，「ペントミノで遊ぼう」という算数教室を行い，大学と学校現場との連携に努めた。 ⑫神戸市立本庄小学校において，第6学年の児童に対して，「ハノイの塔に挑戦」という算数教室を行い，大学と学校現場との連携に努めた。
83	自然・生活系教育部	自然系コース（数学）	宮口　智成	「修士課程で理学部や工学部と同様の内容を研究する」ことに対する批判が強まる中、教育系大学としての独自性を出すことが重要です。そこで、私は従来通りの「理学部や工学部並みの専門性の高い研究」を行いつつ、同時に「教育実践に継がる知識や経験を身に付けられる研究」を目指します。この二つを両立させることは大変に困難ですが、学生のニーズに答えるという意味でも大変重要です。というのは、数学コースを志望する学生の中には、専門性の高い研究を希望する人が例年一定数いるからです。 私の研究指導の中核は「少人数で専門性の高い、かつ教育実践を意識したセミナー」です。現在、数学コースでは担当する大学院生が、一教員当り 4・5 名いることから、個別指導を毎週行うことは非常に大変です。しかし、来年度も引き続き、個別指導を行いたいと考えています。また、個別でセミナーを行うことで、複数名で行うよりも専門性の高い内容まで踏み込むことができます。さらに、高度な内容の発表を毎週準備させ、その発表を (単に内容面だけでなく) 説明の仕方や板書の技術、教科内容との関連性についても適宜指導を行います (学生にとって、毎週発表の機会があることは、人前で説明する能力を磨く良いチャンスとなります)。 これらの指導は、全て学生のレベルに合わせて柔軟に行いますが、特に優秀な学生の場合は、学会発表や専門誌への論文投稿を目標とします。研究内容については、小中高生にも (問題設定が) 理解できるような、できるだけ身近な所からテーマを選びます。また、可能であれば、学校教育の延長線上にあるような問題を研究テーマに設定します。そうすることで、学校教育の内容をより広い視野から俯瞰的に位置付けられるようにします。 最後に、難しいテーマに二年という長い期間に渡って粘り強く取り組むことで、精神的・心理的な成長を促すことができればと考えます。実際、難易度の高い研究課題に対し時間をかけて一つ一つ積み重ねた経験は、生涯に渡って自信の源泉となるはずです。そうしたことを通して、高い教育実践力を持つ教員の育成に貢献します。	前期・後期を通して、担当する修士課程の学生 (長期履修の学生を含む) 5 名と毎週 4 コマのセミナーを行った (この他に学部生のセミナーも行った)。具体的には、修士 2 年生 (長期 3 年生) 2 名とは個別セミナー (2 コマ) を行い、修士 1 年生 (長期 2 年生) 3 名とは学習内容が近いため 3 名同時に 2 コマのセミナーを行った。全員個別セミナーとはならなかったが、少人数体制で細やかな指導を心掛けた。 今年度修了した大学院生の研究テーマのひとつとして、「ポーカーにおける最適戦略」という中高生にも分かる (が、実際に解析することは非常に難しい) 課題を選び、8 月に鳴門教育大学で実施された学会 (学校数学研究会) では講演も行った (講演は長期 3 年生が行った)。さらに、もうひとつのテーマとして「教員休職率の統計的解析」という、学校教育と密接に関連したテーマについての研究を進めた。これらは、理学部では決して見られない種類の研究である。 また、セミナーの内容は高度なものでも、高校数学との関連を適宜指摘するなど、学校教育との関連性を意識しながらセミナーを進めた。	------------------------------ - 年度目標の概要 ------------------------------ - 前期の目標: 前期は担当授業とゼミナールが多く、短い時間を活用して、どこまで充実した教育ができるかが問われます。週に 5 コマまたは 6 コマの授業を担当し、さらに週に 5 コマのゼミナールを予定しています (大学院 4 コマ + 学部 1 コマ)。したがって、授業とゼミナールの準備・採点等に割くことができる時間は 1 コマ当り、せいぜい 1 ～ 2 時間しかありません。この短い時間で集中して準備や採点作業を行ない、充実した授業やゼミナールを実践したいと思います。 後期の目標: 後期は逆に担当授業が少なく、時間に余裕がある分、卒業研究や修士論文研究の指導に力を入れたいと考えています。具体的には、週に 1 コマ～ 3 コマの授業を担当し、週に 6 コマのゼミナールを予定しています (大学院 4 コマ + 学部 2 コマ)。特に修士論文研究は、専門誌に発表できるレベルの研究にすることを目標に、研究指導に取り組んでいきます。 授業の進め方: 授業では、学生が主体的に取り組めるように、可能な限り「講義と演習のハイブリッド型授業」を行います。通常、(理系の) 大学における数学の講義では、演習の時間を別途取ることが多く、講義と演習は独立しています。一方、鳴門教育大学では演習の授業が無く、その分学生の計算力不足が目立ちます。そこで、講義と演習を組み合わせた授業展開を行っています (中学校の授業形式に近い形と言えます)。まず、最初の 30 分前後の講義の後、演習問題を解くことで理解を深めます。演習問題は自力で解けるように詳しい誘導をつけます。学生の授業実践力を付けさせるため、演習の解説は学生自身に行わせます。最後に、補足説明を丁寧に行います。 成績評価: また、出席点・授業への参加・レポート・中間試験・定期試験によって総合的に成績評価を行います。特に、能力が不足している学生についても厳しく評価し、単位を安易に与えないことで、適度な緊張感を醸成したいと思います。 ------------------------------ - 研究指導上主な担当授業科目についての具体的な目標	- 教育 (卒業研究・修士論文) 卒業研究指導: 2 名の卒研生の指導を担当し、「プログラミン教育を通した数学学習」 と「ゲーム理論とその応用」いうテーマで進めた。前期・後期通して週に 1 コマのセミナーを行った。さらに、1 名が教員採用試験に合格し、もう 1 名は鳴門教育大学大学院に進学することになった。 修士論文研究指導: 5 名の大学院生の指導を担当し、週に 4 コマのセミナーを実施 した。研究内容の詳細は「学長の定める重点目標」に記述したので省略する。また、 就職に関して	主要な研究テーマは、昨年度にひき続き「一分子計測実験の数理」の構築です (一分子計測実験とは、一つの分子 (タンパク質分子や mRNA など) の位置座標を長時間に渡って観測する実験であり、生物システムへの応用が近年広く行われています)。特に、細胞の情報処理において重要な役割をはたしていると考えられている「遅い異常拡散」について、そのエルゴード緩和特性 (観測に関する理論)の理論解析を完成させたいと思います。また、2013 年度は 2 報の論文を発表しましたが、2014 年度も 2・3 報の論文を発表できるようにしたいと考えています (全て国際ジャーナル)。さらに、このテーマの研究についての論文を既に 6 編出版しており、これらこれまでの成果についての口頭発表にも力を入れていきたいと考えています。 また、昨年度から準備をしていた「微小な熱揺動を受ける非線形力学系」についての研究を開始します。挑戦的な内容であるため、10 年・20 年というスパンで少しずつ研究を進めていきたいと考えています。 最後に、前年度に修士論文のテーマとして行った、「一般化ランジュバン方程式の脱出問題」の論文作成と投稿を行います (和雑誌 [京都大学数理解析研究所講究録] および洋雑誌、それぞれ 1 編づつ)。	論文 (受理 2 件; 投稿中 1 件)・プロシーディング (受理 1 件): 1 編の論文が Journal of Statistical Physics 誌 (impact factor: 1.4) にアクセプトされ、さらに 1 編の論文が米国物理学会の Physical Review E誌 (impact factor: 2.3) に速報としてアクセプトされた。Physical Review E 誌には、もう一編の論文を投稿中である。また、昨年 2 月に京都大学数理解析研究所で開催された 研究集会のプロシーディングス 1 編を数理解析研究所講究録、へ投稿しアクセプトされた。 ① アクセプトされた 1 編の論文では、トラップ時間とトラップ直後の変位に相関のある拡散モデルの理論解析を行い、エルゴード性の弱い破れの特徴付けを行った。や や特殊なモデルであるが、地震のような複雑現象や非熱的システムの理解につながる ことが期待される。 ② また、アクセプトされたもう 1 編の論文では、フラクタルなどの複雑な構造を持つ媒質中の拡散現象を理論的に解明しており、細胞内の輸送現象の現象論的モデルと して重要であると考えられる。 ③ 現在投稿準備中の論文では、高濃度高分子溶液の理論モデルであるレプテーショ ンモデルの拡散現象のエルゴード特性を理論的に調べ、解析的な結果を得ることがで きた。 ④ さらに、投稿した 1 編のプロシーディングスでは、(タンパク質の分子揺らぎなどを記述する) 一般化ランジュバン方程式の脱出問題を解析的に明かにした。	本学の主要な課題のひとつは大学院の充足率アップであると思いますが、数学コースのウェブページの充実させ、本学の受験を考えている人にアピールすることで、貢献して行きたいと思います。2012 年度から数学的のウェブページの担当となり、小まめに情報更新していますが、ウェブページの訪問者数は順調に増加しています。2014 年度も魅力的なページになるよう、引き続き作業を行っていきたいと思います。特に今年度は、「写真による紹介ページ」を充実させたいと考えています。 また、コースの就職委員、修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員として の業務を丁寧に行いたいと思います。	数学コース内の業務: 年間スケジュールや大学の行事などについての情報更新を行っ た。また、数学コースを紹介する写真のページを新たに作成した。 委員等の業務: ① 就職委員として、面接指導や集団討論の面接官などの業務を行っ た (5/24・6/21)。さらに、数学コース教員の代理で各種委員会にも出席した (計 3 回) ② また、修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員として、修士課程教員養 成カリキュラム研究開発委員会・コア領域検討部会・教科内容学検討部会 (計 5 回) に出席した。③ さらに、労働環境協議会代議委員会委員をつとめた。 その他: ① e-learning の教材として使用するビデオ撮影に協力した (8/28 午前 @ 附属中)。② 学部 2 年生の合宿研修 (9/24・25) に参加・協力した。	(付属学校との連携) 昨年度附属中学校において行った授業 (統計のはなし: 先頭の数字は何?) をさらに発展させ、再度授業を行いたい。 (社会との連携) 教員免許状更新講習の講師の業務を行います。また、数学コースとして開催している 「わくわく算数教室」や、鳴門市の「子どものまちフェスティバル」などにおいて積極的に協力をしていきたい。さらに、2013 年度から始まった、「数学コースと鳴門市の瀬戸中学校との連携」についても貢献していきたいと考えています。 (国際交流) また、JICA による研修において、依頼があれば講演 (『確率統計のはなし』) を行いたい。	附属学校との連携: 11/18 に附属中学校において授業 (2 コマ) を行なった(タイトル「統計のはなし: 先頭の数字は何?」)。 社会との連携: ① わくわく算数教室 (8/2 実施) の開催に協力した。特に、「タングラム」のコーナーを担当した。② 10/19 に開催された「鳴門子どものまちフェスティバル」に協力した。具体的には、ポリドロンと呼ばれる算数教材を使って、「おもしろかたちづくり」というコーナーを担当した (8/28・ 9/25 に開催された運営会議にも出席した)。 国際交流: JICA からの依頼で実施している、太平洋州研修では「確率・統計学分野 の教材」という内容の講義を担当した。	① また、平成 26 年度兵庫県数学教育会高等学校部会淡路支部から依頼を受け、研 究協議会において「確率・統計学とその周辺」というタイトルで招待講演を行なった。 ② 「専修免許状の実質化を図った修士課程実践型カリキュラムの開発」シンポジウ ム (2/28) は、「教科内容構成: 数学コースの場合」というタイトルで講演も行い、一定の評価を得ることができたと考えている。 ③ また、2014 年に申請した科研費(若手 B) が新規採択された。
84	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	村田　守	学長は，教育（教員養成は教育の矮小化された一部にすぎない）についての専門家ではなく，また教育現場での実情・ニーズに疎いので，文科省高等教育局の要請を受けての重点目標の設定と思われる。大変残念で失望した。初等中等教育局のメールマガジン等から判断しても，徳島県の教育現場で問題になっていることは全国的にも問題になっている。数年後，文科省の方針は嘗ての鰺坂構想のようなものに回帰するであろうが，その時にも文科省の言いなりになって，本学の修士論文の指導を変えろと言うのであろうか？文科省の行き当たりばったりの方針や世間の風潮に左右されることなく，プロとして教育の本質を捉えた骨太の基本方針を示して貰いたい。 現職教員の院生に対しての修士論文指導として，彼らが望む専門知識を与え，科学的に考える（正しく推論する）・一般化する方法が身につくように指導する。現役学生の院生は学力不足が著しいので，修士論文のレベルの研究を要求せず，教育実践をもって修士論文とする。	大学院生の修士論文の一部を理科教育学会，地学教育学会，教育実践学会で発表させることができた。理科教育学会のシンポジウムでは，院生が招待講演を行った。このことは，教育実践に多大に貢献したことの証左であろう。また，院生1名を連合大学院博士課程に入学させることができた。希望学位は学校教育学であり，このことも教育実践に多大に貢献したことの証左であろう。教科専門教員として，教科教育教員以上の成果を上げることができた。 また，教育実践学論集の査読も務め，教育実践に貢献した。	(1)プレゼンテーションの能力を身につけさせる。ゼミ等での発表，教育実習，教員採用試験の面接・模擬授業，卒研・修論発表等の発表のコツは同じであることを分からせ，教育現場に立ったときに授業に困らないようにする。 (2)自らの学力を正しく判断出来る機会を設け，自らの学びの動機付けの機会を与える：本年度重点目標実現のために，ゼミ，卒研・修論指導の他に，講義に於いても学生・院生が受け身にならないように努める。 (3)指導書に首っ引きの教員ではなく，自ら教材研究や実験方法の開発が出来る教員になれるように指導する。多くの実験・課題を課す。また，成績評価は厳格に行う。 (4)連合博士課程院生の指導のみならず他大学の院生や海外の大学の院生の指導も行う。	(1)主指導学生3名全員が複数の教員採用試験（兵庫県，香川県，岡山県，徳島県）に合格し，徳島県1名・兵庫県2名正規採用された。 (2)院生は修論の一部を理科教育学会，地学教育学会，教育実践学会で発表し，学部生は卒論の一部を「生きる力を育む学校防災Ⅲ」（協同出版）に公表した。 (3)こども達が自ら調べ，考え，判断できる教材開発を行い，現場での実践を行った。地学教育学会投稿原稿作成中。 (4)連合大学院D1主指導教員として，学会発表指導を行った。海外の博士員の指導を行い，成果の一部をSpringerの学術誌に投稿中。 (5)修士院生（現職教員）を連合大学院に合格させた。	(1)専門分野において，内外からの高い評価を得続けられるように努力する。 (2)海外学術誌等に論文を公表する。 (3)国際学会等においても積極的に発表を行う。 (4)海外の研究者と共同研究を積極的に進める。 (5)研究成果は英語で海外の国際学術誌に掲載されたものだけが論文として評価されるために，日本語による研究成果の公表に積極的でなかった。研究成果を日本社会に還元するには，日本語による研究成果の公表も必要であるので，日本語による研究成果の公表も試みたい。	(1)海外学術誌や教育実践学論集の査読者を勤めた。 (2)インパクトファクター付海外学術誌に7編，査読付国内誌に2編の論文を公表した。 (3)国際学会で4会発表した。 (4)外国人客員研究員を招聘した。海外研究者の訪問も受け，国際共同研究は順調に進んでいる。 (5)研究成果を広く社会に還元するために，国内誌に邦文論文を発表刷るだけでなく，成書を出版した。	(1)大学運営に参加する機会があれば，積極的に役割を果たす。 (2)本学が社会に開かれた大学であることのアピールできる機会があれば，積極的に役割を果たす。 (3)本学と他大学との大学間連携事業があれば，積極的に役割を果たす。 (4)連合大学院運営に参加する機会があれば，積極的に役割を果たす。	(1)各種委員，大学開放事業，教員免許更新講習（3件）等で協力した。 (2)教育支援アドバイザー講師，文科省教育文化週間イベント参加等，開かれた大学の活動を行った。 (3)大学間連携事業は無かったが，他大学教員との共同研究等に努めた。 (4)連合大学院では，自然系講座代表者，地学分野代表，教育実践学論集査読差等を務めた。	(1)附属学校・社会との連携の機会があれば，積極的に役割を果たし，大学で学んだこと・明らかにしたことを社会に還元する。 (2)国際交流の機会があれば，積極的に役割を果たす。 (3)外国人研究者の招聘や外国人研究者との共同研究・学術交流を積極的に行う。 (4)専門研究を一般社会に分かり易く普及するように努める。	(1)附属小学校に元主指導学生が赴任した。経済産業省の産学連携事業の一環として，耐火物の日本代表としてISO規格の作成，JIS原案作成委員会委員長として研究成果の社会還元を果たした。 (2)海外の研究者との共同研究以外に，IAEA（国際原子力機構）から蛍光X線分析法・X線回折法の研修員受入を行った。 (3)外国人研究者を社会連携センター外国人客員研究員として招聘した。また，多くの海外研究者と共同研究を行い，その成果の一部をインパクトファクター付国際学術誌に公表した。 (4)研究成果を一般社会に分かり易く普及するために，成書を刊行した。また，普及講演も行った。	主指導学部生3名全員の教員正規採用，修士院生の実践教育系学会での発表，院生の連合博士大学院合格と学生指導面での貢献が大きい。また，インパクト付き国際学術誌7編・査読付国内学会誌2編の論文公表も行い，鳴門教育大学の名前を高めることができた。
85	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	工藤　慎一	修士の大学院生に対し，教員自らの学問キャリアを逸脱した研究指導を行うことは，学歴詐称あるいは職歴詐称に等しい行為であろう。大学院生の研究指導においては，これまで通り教員自身の専門とする学問領域で適切な研究課題を選択することによって，修士の学位にふさわしい深い教養と論理性を養うことを目標とする。	教員自身の専門とする学問領域で適切な研究課題を選択することによって，修士の学位にふさわしい深い教養と論理性を養うことを目標に研究指導を行った。その結果，指導した大学院生は，修士の学位に十分値する修士論文をまとめ，その内容を専門学会で発表し（以下の項参照），さらには他大学大学院博士課程に進学することが決定する等。目覚ましい成果に結びついた。	研究室内セミナーや研究指導，論文執筆指導などを通じて，学生・院生の研究指導を熱意を持って行い，自然科学の最前線に触れさせることで，学生・院生の論理的思考能力の向上を目指す。	教室内セミナーや研究指導，論文執筆指導などを通じて，学生・大学院生の指導を熱意を持って行った。その結果，大学院生自ら修士研究の成果の一部を複数の専門学会で発表する（里見太輔・小笠航・立田晴記・小汐千春・工藤慎一．フタイロカミキリモドキにおける形態変異と緯度との関係．日本昆虫学会第74回大会；里見太輔・小笠航・立田晴記・小汐千春・工藤慎一．フタイロカミキリモドキにおける性的形質と配偶行動の個体群間変異．日本動物行動学会第33回大会）等の成果が	従来通り，「親の投資進化」に関する課題を中心に研究を推進する。特に，これまで科研費を受けて進めてきた「ヒラタヤスデの繁殖生態」と「ツチカメムシ類の栄養卵生産と種子給餌」ならびに昨年度から始まった新たな科研費課題「非致死的捕食に応じた栄養卵生産の可塑性」に関する研究成果を論文として国際学術誌に投稿することを目指す。	科研費課題「非致死的捕食に応じた栄養卵生産の可塑性」に関する研究は着実に進展しており，成果の一部を国際行動生態学会等の国際学会で発表した。さらに，過去に行った研究成果の一部を国内学会の学術誌上で発表した（工藤慎一・桑原保正・Zoltn Korss・市来弥生・森田将史・浅野泰久・中村泰之・田辺力．ヤスデ2種で新たに確認された抱卵行動．昆蟲（ニューシリーズ），17(4): 135-137）。さらに，国際学術誌へ現在投稿中の原稿，あるいは投稿間近の原稿が複数ある状況であ	学内委員会委員に就任した際は，教育部並びにコースと連絡を密に取って適切な活動を行う。	教育・研究評価委員会委員として，教育部並びにコースと連絡を密に取って適切な活動を行った。	日本動物行動学会の副会長並びに運営委員として，学会運営上の懸案事項の審議を積極的に進める。 エディトリアル・ボードやレフェリーとして国際学術雑誌の編集に責任を持って携わり，日本の基礎科学に対する国際社会の信頼を損なわないように努力する。	本動物行動学会の副会長並びに運営委員として，学会運営上の懸案事項の審議を積極的に進めた。 Journal of Ethology誌のeditorial boardとして活動し，またBehav. Ecol.誌など国際学術誌のreviewに携わった。 さらに，日本学術振興会の専門委員として適切な活動を行った。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
86	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	春西　武	【Ⅰ－1】 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士課程については、理学部や工学部等の専門学部の内部ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士課程の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、教職大学院においては、学術成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般モノの工夫を示して頂いて。	【Ⅰ－1】 現職教員の修士学生については、それぞれが所属する学校現場の問題である、地学野外学習の効果的な指導方法や防災教育について研究指導した。同者の研究とも、大学で研究し、構築したアイデアに基づいて在職校で授業実践を行い、反該を検証した後、修士論文とまとめる2ヶ指導を行った。その為の1年は、さらに研究を続けるため、博士課程に進学した。学部生の開生については、高等学校を希望していたため、専門的な深さと共に、教材となりうる題材を研究テーマとした。学食での発表を定期生が行い、成果の一部は論文として出版した。	【Ⅱ－1】 昨年に引き続き、指導を希望する学生に対して小論指導、面接指導などを行い、学生の就職活動を支援する。	【Ⅱ－1】 小論、面接指導、教職、専門等のアドバイスを行った。その結果、指導した3名とも採用試験に合格した。	【Ⅱ－2】 教育実践に関わる研究、専門分野に関する研究、国際貢献に関わる研究等、幅広く研究を行う。	【Ⅱ－2】 教育実践に関わる論文として編、国際貢献に関わる論文として編、専門的分野に関する論文として2編を出版した。	【Ⅱ－3】 教員教育国際協力センター所長として、JICA受け入れ研修、留学生へのアドバイス等積極的に行う。また学校現場との連携をはかり、本学が教育現場と関密な連携を図っていることを示す活動を行う。	【Ⅱ－3】 教員教育国際協力センター所長としてJICA受け入れ研修を積極的に推進し、本年度は6件、1,464,000円の受託費を獲得し、所長在任の3年間で5,004,000円の受託費を獲得した。学校現場との連携も積極的に行い、教材開発からその教材を用いた授業実践も行った。	附属学校・社会との連携、教育支援アドバイザーとしての活動や各種研究会での助言などを通して、研究成果の社会貢献をはかった。 国際交流、JICAの研修に積極的に参加し、研究成果に基づく研修を実施する。また、可能な限り現地での指導を通して、国際貢献をはかった。	附属小学校の共同研究員として、研究発表会や授業研究会に参加した。また、鳴門市美術館基等推進審議会委員として、課題解決の推進にあった。 ものづくり国で進められている少子化教育振興プロジェクトに教育専門家として参画し、約2ヶ月間現地指導を行った。また、パプアニューギニアでのJICA現地調査団員、モザンビークでのJICA研修フォローアップ調査団員として現地に派遣され、その任にあたった。	頂いた職員の中で、JICA受託研修を実施し、JICAに対する本学の貢献度を高めることができた。平成27年度は、さらに多くの研修依頼があることから、本学に対する高い評価に貢献できたものと思う。
87	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	佐藤　勝幸	○修士論文のテーマについては、限定の意向をキツに考慮しながら、教員養成大学大学院としてあめられるの面を相に決定する。たとえ教材などの基礎研究であっても教育実践力に結びつくことが重要である。本学に求められるミッションを重視しながら修士論文の指導や取り組みに努力する。	○本年度は、修士課程の学生を指導していないため、自然系コース（理科）所属の学生の修論研究に対して、教育実践力に結びつくようなアドバイスを行った。	○昨年度に引き続き、教育実践力を養うため、模擬授業を取り入れた授業の展開を行う。 ○特に、理科教育の特徴、小・中・高校での単元構成や年必要とされている理科教具としての資質・能力の充実に努める。 ○基本的な知識や実験・実習の技能の習得と自ら考えることができるための育成に努める。	○昨年度に引き続き、教育実践力を養うため、模擬授業を取り入れた授業の展開を行った。 ○特に、理科教育の特徴、小・中・高校での単元構成や年必要とされている理科教具としての資質・能力の充実に努めた。 ○基本的な知識や実験・実習の技能の習得と自ら考えることができるための育成に努めた。	○すでに学会発表した、中学校理科教具を対象とした理科教科書に関するアンケート結果を論文として書まった。 ○特に、理科教育の特徴、小・中・高校での単元構成や必要とされている理科教具としての資質・能力の充実に努めた。 ○基本的な知識や実験・実習の技能の習得と自ら考えることができるための育成に努めた。	○すでに学会発表した、中学校理科教具を対象とした理科教科書に関するアンケート結果を論文として書まった。 ○理科教育の新設で理科授業に対する学生の意識の変化について論文に書まった。 ○至かに深並する様々な物の基礎的研究をさらにすすめ、これまでの成果をまとめ、学会等で発表する予定である。 ○修士課程教員養成カリキュラムの研究を推進する。 ○教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の開発・推進に努める。	○大学院入試委員、実地教育専門部会委員として本学の運営に貢献した。 ○長期履修学生支援センター所長として長期履修学生の資質向上に努めた。 ○学部4年次のクラス担当教員として学生の教育的支援に努めた。 ○修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員として修士課程学生の資質向上に努めた。 ○学内経費事業「教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の開発・推進」に尊与できるよう努めた。 ○プロジェクト研究企画・推進室員としてその職務を全うするよう務めた。	○附属学校園における研究会での協力・援助、附属学校園の教員との教育実践に関する意見交換や講演に努めた。 ○教育支援アドバイザーなどを通して地域・社会との連携を積極的に行い、社会貢献に努める。 ○本年度も、機会ある毎に国際協力に努める。	○附属学校園における研究会での協力・援助、附属学校園の教員との教育実践に関する意見交換や講演に努めた。 ○教育支援アドバイザーなどを通して高揚県立神本高校や鳴門市立岡門中学校と連携し、教育支援に努めた。 ○JICA関連でベトナムからの研究者に学士課程のカリキュラム改革について講義を行った。 ○美味本学で行われる日中の学術会議に関する情報交換を行った。	○平成26年度本学ベストティーチャー（研究部門）に選出された。
88	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	武田　清	理科を教える教員にとって、科学的内容理解の深化は、教育内容の発達理解と、ともに重要だと思います。特に、なぜかもよく分区（科学的原理を理解することは、冬々内容理解を拡げていくためのビボッとを作るという意味で、効果的な方法と考えられる。より深い理解への興味をとることは、大学院在学中にしかできない貴重な体験である。特に、現在の高等学校では、スーパーサイエンスハイスクールなど新進性ある高度な理科教育が推進されている。そのような教育指導に対応するための最低限の経験として、学会に対する研究発表の経験を積ませる必要があることは論を待たない。従って、より専門性の高い研究に従事する機会を与えることも私のできる教育実践への貢献となる。これを実現するため、修士課程の学生は、極了以前に最低1回は専門的学会において研究発表を行うよう指導する。	修士課程の大学院学生の研究は、戦略構造改分有を明らかにすることができた。問題点ながら、この点に科学的背景の理解とて重要がポイントがあることに気がつきました。時間切れで十分な指導ができなかった。これからの高校教師には、研究指導ができる能力が要求される。この意味で、もう少し進んだ研究指導ができなかったか、と反省している。	今年度より学群1年次生のクラス担当となった。新入学生がスムーズに大学生活に入っていけるよう、支援していく。 学群教育では、理科内容の基礎的知識の定着を目指し、ビデ・イン・ストラクション を応用した授業方法を推進し、その成否について検証していく。 大学院生に対しては、専門的内容を深め、新たな知識の獲得の基礎を身につけさせるよう指導する。	学期1年生に対するクラス担当教員として最低限の役割を果たすことはできた。ピア・インストラクションを利用した授業方法は、まだ検証がやはりよくいえないが、使用するソフトウェアは、新しいものが十分に検証できなかったために印象のものを利用して行った。 大学院の「物理化学特論」では、基礎的内容を始と論ちことなく、環境に関連する内容を含めることができた。今後さらに物理化学の応用としての環境問題深化を意図した内容を付加していく。	アセレンアルコール系の平衡相図を明らかにした。新しい化合物の発見に努める。このため、DSCを用いた測定を行う。これらの結果を学会にて発表する。	エキレンジアミン－エチレングリコールの相図はほぼ完成。その各状から分子間化合物の存在を明らかにすることができた。この研究は学部学生との共同研究として、第50回記念熱測定討論会（8/28 於大阪大学）で発表を行った。その後の研究により、新たな錯問点を明らかにでき、より興味深い研究対象であることが分かってきた。今後、さらに研究を進める。	学生支援委員としての職責を全うする。	学生支援委員および附属学校運営委員としての職責を全うしている。 学生支援委員会より大学祭運営委員会顧問を務めた。	「全国化学グランプリの提為発表機責任者として、グランプリ1次予選の実施と、グランプ1説明会・問題解説会の開催・運営を行う。	「県総合教育センターとの共同開催として、同グランプリの説明会・過去問題解説会を開催し、県内の高校生を対象とする講習会を開催した（5/22 於徳島大学総合科学部）。 全国化学グランプリの会場責任者としてグランプリ1次予選の実施を主導した（7/2 於徳島大学総合科学部）。 附属中学校授業研究会に出席した（6/6 附属中学校）。 附属校実習の研究授業を参観した（9/18 附属中学校）。 日本学生科学賞徳島県審査会に運営委員長を務めた（11/5 於徳島県総合教育センター）。 進大内容接続のための情報交換会に出席した（12/3 於徳島県総合教育センター）。	
89	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	本田　亮	2014年度大学院修了予定者の課題研究指導を行っていないので、ここに記すべきことはない。	目標通りの内容であった。	従来どおりに授業を行う。学生からの授業内容についての質問に関しては、オフィスアワーを設けずに柔軟に対応する。学生生活の支援に関しては、学生からの相談を受けた場合、適宜対応する。	従来からの方法を踏襲し、授業内容に関する質問に適宜対応した。	本学設置の実験装置を利用した物性物理に関する研究のテーマとして行う。また、物理関係の教材開発として、その評価を中心に行いたい。	物性物理および物理教育に関する研究について、学会発表を共著で行った。	研究・教育に支障のない限り、割り振られた委員の委員会に出席し、その内容報告を部会議・教育コース会議で行う。	教育部内で担当している学内委員会に出席し、部会議で委員会での内容を報告した。ただし、出張で委員会を欠席しなければならなかった時は、代理を立てた。	外部から依頼があって、協力可能であると判断したときは、研究、教育などの業務に支障のないようにその都度計画を立て協力を行う。	鳴門市立大津西小学校でのフレンドシップ活動の支援を行った。	
90	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	栗田　高明	研究(課題研究)および修士学位論文(と実践(教育実践)は相反する概念であり、実践的研究などあり得ないと考えている。また学問内容の深い理解なしに学校現場での実践はないと考えている。教育実践は一般性が乏しく応用のれ小ない 場合に、1)的な内容にならざるを得ず、それらを行って大学院時代の貴重な年間あるいは2年間を無駄に過ごすべきでないと考えている。学習指導要領の改訂により 理科や野で は学習内容が増加するとともに、多くの発展的な内容が教科書内に現れた。教育現場で教員はこれらの内容をより理解し、授業に取り入れる必要性がさらに増してきている。これらの内容を有機的につなげ、各科目間の相互的な関連性を理解するためには数理的な開発力、論理的な思考力、題解を素現した水平思考力などが極めて重要である。修士論文作成ではこのような力を自ら向上させられるような、高度な科学研究をテーマにし、汎用性の高い応用力を身につけさせることを主眼に置いた指導を行う。	本年度、研究室に指導する修士課程学生はいなかったが、後期の授業「物理学特論II」では下の本時を実施した。受講者は現職小学校教員および中学校教員であったため、「放射線とわたしたちの生活」というテーマを取りあげ、放射線の基礎的内容、原子力発電の原理や福島第一原発の事故の概要、身の回りの放射線、放射線の医療への応用などを紹介し内容の講義を行い、最近の放射線に関する研究内容についてゼミナールを行った。また文部科学省委託事業「教育現場の放射線危機管理力向上のための人材育成 」に実行委員と関わった関係で、放射線を可視化する霧箱作成キットを提供いただき 放射線の軌跡を可視化の実験を行った。また この教材について学校現場での利用について発講者と議論を深めた。1月には、静岡大学の協力の下、受講者2名が中部電力浜岡原子力発電所での研修に参加し、原子力発電所の安全規制や放射線線量の管理などの内容を実地で学習した。これらの経験を学校現場でいかに応用していくかについて、現職教員の受講者と活発な議論を行った。	従来からの方法を踏襲した。	物理的な内容は、概念をモデル化した視覚的な理解では不十分な場合が多く、数理的な理解が必要である。本学に入学してくる学生は、高等学校で高度な数学を学習していると思がが少なく、物理的内容の講義に入る前に、理解を深めるために必要な解析および微型代数の内容をプリントを配り詳細に説明した。また複雑な式変形や重要な定理の導出は高度な数理的処理が必要であるが、必要に応じてオフィスアワーを通じて細やかな指導を行った。	放射線と物質の相互作用に関する研究を推進するため、京都大学原子炉実験所共同利用研究の公募に応募。研究を推進する。また蛍光鉱物を収集し、その光物性を明らかにする研究を同時に進める。	H26.9およびH27.1に共同利用実験を京都大学原子炉実験所で行った。また引き続きH27年度の共同利用研究の申請を行い採択された。H25年度から2年間、京都大学原子炉実験所共同利用研究委員会委員をつとめ、主に共同利用研究の審査を行った。	大学院教務委員会委員として、本学の運営に貢献する。	大学院教務委員会委員として、委員会にて部の代表として意見を述べることなく部会議等で内容を報告した。□	免許更新講習、講演や授業研究会などに附属学校園や外部からの講師、助言者等の依頼があれば積極的に引き受ける。	徳島県教員研修（8/1，総合教育センター，教育支援アドバイザー）、教員免許更新講習（8/25）、兵庫県立淡路三原高等学校出前授業（12/19，教育支援アドバイザー） 京都大学原子炉実験所共同利用研究委員会委員（再掲）、文部科学省委託事業「教育現場の放射線危機管理力向上のための人材育成 」実行委員会委員、徳島県立鳴門看護専門学校非常勤講師（物理学）	教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の試行的実施と改善（第2回シンポジウム登壇者（12/3）

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士課程については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士課文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、教職大学院においては、学術成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように活かしていくか、あなたの指導や一般センの工夫を示して頂いて。	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
91	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	小沢　千春	教員養成高校からかつて、理学部等の専門学部に異なる科学があるわけではない。昨今の児童・生徒の理科離れを勘案しても、教師自らが理科、ないしは科学を楽しむ人間であるとはならない考える。従って、もし私自身に小学校の学生がいた場合には、専門学部に引けを取らない修士課文のテーマと内容をきちんとやる、科学とはどのような営みであるかをきちんと実践的に体験させる。	私自身にいている修士の学生はいないが、他の教員にいた修士の学生の研究および修士論文作成をサポートするとで、目標に通わない方法を行っている。	教員養成大学・大学院といえど、卒業研究や大学院の修士課程の研究においては理学部等の専門学部と同じ専門性とオリジナリティーが要求されるのは当然である。さらに、将来の日本の科学・技術の発展をになうべき子供たちへの理科教育を行う教師は、理学部などに科学の専門性を身に付ける必要があるのは当然である。従って、理学部等の専門学部に引けを取らない科学的内容をもった研究を遂行し、卒業論文および修士論文を書けるよう、学部学生・大学院生を指導するつもりである。 具体的には国際学術誌に掲載された論文を読む、原書で専門書を読む、専門の学会で発表する、などの経験を通して、最先端の科学の営みを体験させる。	学部学生および大学院生と原書で専門書を読み、国際学術誌に掲載された論文紹介およびそのための指導を行った。また、大学院生の学会発表の指導も行った。	現在行っているウメスカシクロバおよびカミキリモドキ類の配偶戦略に関する研究を引き続き推進する。	ウメスカシクロバについては、国際シンポジウムで海外の研究者と議論し、新たな方向性を検討した。カミキリモドキ類の配偶戦略についての研究も継続に進んでいる。	各種委員会やコースでの仕事ついては、誠意をもって遂行する。また、研究室を紹介するホームページの更新を随時行い、最新の情報を発信する。	いずれも自分にできうる限り、誠意を持って遂行した。	本年も教職10年経験者研修を行う予定である。また、学外から専門分野についての意見を求められたり、専門分野に関する講演を依頼されたりした場合は適切に対応する。	大阪の高校で、理系クラスの生徒相手に講演会を行った。	
92	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	草藤　泰雄	学習者の科学的な探究力と論理的な思考力の育成を目的とした科学研究の修生を取り入れた教材開発は、先進的な科学技術の研究成果を活用した実験教材および全国を対象実験材料に用いた演習教材が多くあり、いずれも「研究及び探究のプロセス」から「科学研究のシステムを効果的に導入する事が重要であると考えている。そして、指導・実践する教員の教育環境に応じた実践システムを構築する事で、指導的に活用可能で実効性ある教育効果の高い教育実践に繋がると考えている。 ・修士論文の指導において、上記の内容を重視しながら、生活に身近な素材を実験材料に用いたテーマを選択し、教科横断的な領域型を加味した科学実践プログラムの開発を行い、小学校・中学校・高校・大学に広くに対に進んでいる。 ・教育現場及び公開講座で実践し、その有効性と成果に基づいた実践的な検証を教育研究に関する事を意識した取り組みを継続する。	学習者の科学的探究力と論理的な思考力の育成を目的として、修士論文の指導テーマにおいては、高校の化学の反応速度論を想定した「イ．イーリアセチルフェノールフラレンのアルカリ加水分解反応における速度論的解析」、高校の理科環境探究を想定した「GFPモデル蛍光物質を用いた科学実験教材の開発」が「生徒に自主的なグアマニール酸を作る酵素の分子構造の抗酸化活性」について教科横断的な広領域型を重視した科学実験教材を開発した。	1)学部授業科目「初等理科教育論」」において、学生の模擬授業及び実験・観察の技術指導を積極的に指導している。また、化学教室のセミナーを通して、学部生及び大学院生に対して、理科教材開発研究室に教育実践研究に関する理解を深められるように積極的に支援した。 ・卒業研究に従事している指導学生2名が教員養成小学校教員、高等高等学校教員に採用された。また、修士研究に従事している指導院生2名が高等高等学校教員、高等高等学校教員に採用された。 2)学生の科学的に探究及び思考する能力と技術の育成を目指して、「スライム電池を用いた理科実験教材」を研究室の大学院生・学部生と共に開発した。	1)研究テーマ「種々の身近な素材を用いた科学実験教材の開発研究」に関する論文を主との教育学会誌に投稿する。 2)学内外の研究助成の公募に積極的に申請し、教育研究資金の調達に重点を置く。	1)ベンズアルデヒドのカニッツアーロ反応を用いた化学実験教材の開発と実践を教育実践学論集に投稿し、受理された。 「電池を題材として科学的に考えるカを育てる科学実験体験」を理論教育に執筆した（第119号，pp.50-57，2014）。 2)科研費基盤研究(C)に申請した。が、不採択であった。	1)就職入試委員を担当し、コース及び)に大学の運営に積極的に貢献する。 2)専門教育大学「科学・技術者の教師・養成講座」における本学独自の現教員分野に直結した生徒の資質や能力を伸ばすことに重点を置いた体系的な教育プログラムにおいて、理科領域（化学分野）の実施担当者として積極的に貢献する。 3)危険物取扱者（乙種4類）の国家資格を基に、本学の危険物倉庫（有機溶媒等の保管室）の管理に務めた。	1)就職委員を担当し、大学及び)にコース運営に貢献した。 2)学内プロジェクト「専門教育大学　科学・技術者の教師・養成講座」を通じて小学校・中学校・高校・大学の科学・技術者ー」、ならびに本学独自の現教員分野に直結した生徒の資質や能力を伸ばすことに重点を置いた体系的な教育プログラムにおいて、理科領域（化学分野）の実施担当者として積極的に貢献する。 3)危険物取扱者（乙種4類）の国家資格を基に、本学の危険物倉庫（有機溶媒等の保管室）の管理に務めた。	1)小学校・中学校・高校と大学との連携による授業・教育実践を積極的に行い、自身に貢献する。（社会連携） 2)科学的に探究する能力と技術の育成を目指した種々の身近な素材を用いる科学実験教材の開発に関する教育研究活動を通して、その研究成果を学会発表する事により社会的アピールに務力的に取り組む。また、学校現場との連携における教育実践の実施を目指して、開発した実験教材を教育現場で実施可能な形に改後、検証した実験プログラムの有効性を検証する実践活動を通して、地域社会へ情報的に貢献する。（社会連携）	1)教員養成教育委主催の「子ども科学教室2014」の実施責任者として、子ども52名と保護者42名を対象に、「電池をつくろうースライム　電池をつくろう－」を実施した。 ・日本化学会信島地区の幹事を担当した。化学グランプリの信島地区選定委を担当した。 ・日本教育実践学会第17回研究大会の実行委員を担当した。 ・附属小学校の教育研究会における共同研究者を担当した。 2)「却下化学を活用した有機化学反応の可視化カニッツァーロ反応の電子論的解析」を テーマとして、日本理科教育学会第64回全国　大会（愛媛大学）において学会発表した。 ・信島教育委会主催の第71回「科学作品展・科学経験発表会」の審査員を担当した。	平成26年度「教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の試行的実践と改善」における教科内容学研究協議会の委員を担当した。	
93	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	難波　忠高	教育実践は、教科の内容を教大授業生徒を育てることに重要であるが、教科内容についての深い理解がなければ教育実践とは成に結びかることも重要である。修士論文の指導では、まず、学生の教科内容についての深い理解を促さるとため、化学ではが明らかかっていない課題を研究してもらうし、その研究成果の価値を化学や科学だけにとどまらず、他の分野との つながりで捉えられるように指導していきたい。さらには、研究成果を教育実践における価値に結びけるため、教材化の試みを行ってもらうことを考えている。ただし、本年度は教員、学生とともに十分な準備ができていないため、可能性を考慮するなどの方法で対応したい。	修士論文の指導は今迄通りたが、予期しない興味深い結果が出まされた。また、修士論文提出に向けた計画を学生と議論して動めているが、修士論文の内容に環境教育への示唆が含まれたが、本年度は十分な成果が得られたと考える。	本年度は授業方法の改善を図りたい。昨年度は授業中に学生との対話を促進することが十分でなかったので、質問しても答えられない学生が多く見受けられた。そこで、本年度は、対話を通して授業理解を促進するツールとして、授業記録を学生に取らせることを考えている。具体的には記録用紙のフォーマットを作成し、授業で実践したい。	本年度は、対話を通して授業理解を促進するツールとして、授業記録を学生に取らせることを考えている。具体的には記録用紙のフォーマットを作成し、授業で実践したい。	昨年度、生命の起源に関する研究テーマで科研研究費を提携できた。本年度はその研究をさらに進め、7月に発表で開催される国際会議で発表することを考えている。発表の準備と学会の議論で深められた考察をもとに、本年度は少なくとも2つの論文を発表したい。 また、教育現場のテーマについては、担当している学生実験でマイクロスケール実験を試みたい。本学の学部生を対象として行うことで、学生が教育現場ですぐに使える実験教材として提示したい。他、本年度4月にトルコで行われる国際学会での招待講演の依頼を受けたので、その発表を触えて、教育論文を英語で発表する予定である。	4月にトルコで開催されたICETED2014では、1件招待講演で研究発表し、2件ポスター発表の合計3件の発表を行った。この招待講演では、教育現場で使える、各種に合まれる酵素を利用した実験教材の開発について発表した。この発表をもとに、日本化学会の「化学と教育」誌に論文を投稿した。また、ポスター発表で行った1件については「科学教育研究」に論文投稿した。さらに、もう1件のポスター発表については研究論文を執筆中である。7月で発表で開催された生命の起源学会（Origins2014）でポスター発表1件を行い、この発表に関連した論文をOrigins of Life応募誌、astrobiolに投稿し、すでにネットより公開されている。それとは別に日本化学会欧文誌Bull. Chem. Soc. Jpnに論文を投稿し、2014年11月号に掲載された。さらに、Viva Origin誌に論文をさ2投稿し、受理され、2月に掲載された。現在、平成末で開催されたロアビ誌についての国際会議で発表したポスター発表の内容を現在論文として執筆中である。 以上に示した内容を含め、本年度は審査付原著論文を15本投稿し、そのうち化学に関する論文12本のうちまはすでに掲載されい3本は審査中）、教育に関する論文3本のうち、2本はすでに掲載され（2本平可、1本審査中）となっている。	1)本学の学生に対して、「教育現場の実践を図った修士課程教員養成カリキュラム開発」における教科内容開発のテーマを提示しているが、本年度はその プロジェクトの一環として、全国の中高等学校の教員を対象としたアンケートを実施する予定である。 2)国際教員が中教員養成系大学間に対を求めている。そして、大学院で学んだことは学問だけの場合ばとどが違うと考えているかを調査したい。	1)「教育免許状の実践化を図った修士課程教員養成カリキュラム開発」における教科内容開発については全国の小中高等学校約1000校の現役教員に対して、アンケート調査を行い、すでに410校余りから回答が返送されてきた。アンケート内容結果の集計による。特に高等学校の現職教員の通学動や教科内容について大学院で研究したいと考えている。	1)「教育免許状の実践化を図った修士課程教員養成カリキュラム開発」における教科内容開発については全国の小中高等学校約1000校の現役教員に対して、アンケート調査を行い、すでに410校余りから回答が返送されてきた。アンケート内容結果の集計による。特に高等学校の現職教員の通学動や教科内容について大学院で研究したいと考えている。	連携講師として登録するとともに、依頼があったら積極的に受け入れ、協力していきたい。	現状では講師の登録はしているが依頼は受けていない。依頼が受けられるようなわかりやすい講座名に変更することを考えていきたい。	研究会の度では、招待講演、国際学会での口の発表など、今までにない多くの研究成果を得、それを発表することができた。また、来年度平成28年3月に生命の起源および進化学会を専門教育大学で開催することが決定した。	
94	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	寺島　幸生	修了者が、将来学校現場で実験・観察を中心とした授業や発展的な探究活動を積極に実践できることを目指して、専門的な内容だけでなく、一般的な研究対面から論文執筆に取かこと。さらに、これまでは上に実験・観察、討論、演習等を実践した指導を行う。	当該年度は主指導教員として修士論文の指導を担当しなかったが、学生の要請に応じて適宜助言を行った。	大学で学ぶ専門的知識・技能が教育現場でどのように役立つのか、その有用性を意識した教育活動を行う。 これまでの高校教員の経験を活かし、実際の授業における工夫や注意点など、学校現場のニーズに即した柔やかな指導に努める。 ゼミ等を通して、小グループまたは個別に教員採用試験の指導・助言を行う。	日々の授業、卒業研究指導、合宿研修等を通して、年度目標を達成した。	小・中・高校を通して全面移行となる新しい学習指導要領を踏まえ、今後の理科教育の充実・発展に寄与する実験教材を開発し、その有用性を検証する実践的研究を試みる。 同時に、教材開発の基盤となる専門的研究を継続して進行し、その研究成果を関連する学会や学術誌上で発表する。	日々の研究活動の成果を論文や学会等で発表し、年度目標を達成した。	所属する教育部、コースおよび委員会等の組織において、任された職務を全うできるよう努力する。	所属する教育部、コースおよび委員会等の組織において、任された職務を全うした。	附属学校等での教育実習や研究活動を積極的に参観し、連携可能な教育・研究活動を模索する。 教育支援講師・アドバイザー事業等を活用しながら、地域の学校の教育活動の充実・発展に貢献できるように努力する。 所属するコースや委員会において、国際協力関連事業に貢献できるよう努力する。	附属小学校の研究活動に共同研究者として関わったり、附属中学校で探究型授業を行ったりして、附属学校と連携した教育活動を実践した。地域の学校や教育機関の理科教育に協力した。ウタズの現役科教育支援に携わり、当面の教育課題の解決に向けた教育研究を行った。以上の取組を通して、年度目標を達成した。	特記事項なし。
95	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	足立　俊津子	修士論文では、観察や実験から得られた事実を客観的にとらえ、科学的な知識や概念を用いて合理的に判断し、科学的にまとめることが求められる。地学現象を取り上げ、一連の思考方法を身につけさせることは、学校での教科教育の実践にも貢献するものであると考える。先ずは、地学現象を対象として、観察・実験手法や基礎知識を習得させること、さらに、科学的に考え・まとめる方法を身につけさせる。そのとき、学生のテーマが、小学校や中学校・高等学校の各分野とどのように関係しているのか、また、どのように応用させることで、授業実践に発展させることが可能なのかも意識させ、修士論文としてまとめるように指導する。研究テーマに関しては、学生の適正や進路、職対を考慮した上で、身近な地域や素材なども活用させていく。 また、修士研究の方法は、高額な実験機器を必ずしも必要とせず、その基本（野外調査や顕微鏡観察など）は、学校教科書においても結びされている。修士研究を通じて、学生に野外調査や観察・実験の方法を身につけさせ、学校現場で野外調査や観察など取り入れた授業をおこなうことが出来るように指導したい。	地学現象（特に石区岩）を対象に、野外観察方法や実験手法、室内での観察試料作成方法や観察方法、科学的に考えをまとめる方法などを基礎的な事柄から指導した。これら一連の研究で身につけた知識は、学生がおこなった「地質の野外学習のための教材開発」に大発揮されている。但し、修士論文では、学生の研究テーマが、小学校や中学校・高等学校の各分野の内容とどのように関けついているのか、さらに日常生活などのように関わりがあるのかに関して、十分時間をとって議論することができなかった。今後の指導では、これらの観点を意識しながら引こに研究指導を進めていきたい。	1) 前年度の授業を通じて、学生の地学に関する基礎知識の不足を実感している。学生の理解を深めるために、さらに基礎から詳しく時間をかけて各テーマの説明をおこなう。パワーポイントと板書、配布プリントの使い分けを工夫し、学生の理解を促進するように心がける。 2) 観察の知識だけでなく、自然現象を実験観察・分析し、何を読み取るのかを理解できるように、野外実習や実験を工夫する。特に、中学校や高等学校教科書で明示されている実習や実験に関しては一通り習得できるように授業内容を工夫するとともに、さらに内容を深めるようにする。 3) 学生が、各授業内容を正確に理解しているのか確認するために、小テストやレポートを適宜おこなう。理解出来ていない箇所については、再度解説をおこない不足部分を補うようにする。レポートに関しては、授業の始めにレポートの書き方を解説するとともに、毎回レポートのチェックをおこない　日本語文章の書き方からふまえた方までの指導をおこなう。	本年度は、学生の地学に関する研究テーマで科研研究費を提携できた。本年度はその研究をさらに進め、7月に発表で開催される国際会議で発表することを考えている。発表の準備と学会の議論で深められた考察をもとに、本年度は少なくとも2つの論文を発表したい。 また、教育現場のテーマについては、担当している学生実験でマイクロスケール実験を試みたい。本学の学部生を対象として行うことで、学生が教育現場ですぐに使える実験教材として提示したい。他、本年度4月にトルコで行われる国際学会での招待講演の依頼を受けたので、その発表を触えて、教育論文を英語で発表する予定である。	1) 科研費採択課題「カンブリア紀後生態系から探る温室期の海洋生態系と地球表層環境の変遷」の推進に力を尽くす。そのために、国内外の研究・教育機関とも連携して研究を進める。本課題の最終年度であるので、成果のまとめをおこなう。 2) 大学院学生との共同研究については、修士論文としてその成果をまとめることが出来た。 3) 研究成果は、国際学術誌、国内・国内学会にて積極的に公表する。 4) 研究活動から得た成果を、教育にも積極的に還元する。	1) 科研費採択課題「カンブリア紀後生態系から探る温室期の海洋生態系と地球表層環境の変遷」の推進に力を尽くす。そのために、国内外の研究・教育機関とも連携して研究を進める。本課題の最終年度であるので、成果のまとめをおこなう。 2) 大学院学生との共同研究については、修士論文としてその成果をまとめることが出来た。 3) 研究成果は、国際学術誌、国内・国内学会にて積極的に公表する。 4) 研究活動から得た成果を、教育にも積極的に還元する。	1) 科研費採択課題「カンブリア紀後生態系から探る温室期の海洋生態系と地球表層環境の変遷」の推進に力を尽くす。そのために、国内外の研究・教育機関とも連携して研究を進める。本課題の最終年度であるので、成果のまとめをおこなう。 2) 大学院学生との共同研究については、修士論文としてその成果をまとめることが出来た。 3) 研究成果は、国際学術誌、国内・国内学会にて積極的に公表する。 4) 研究活動から得た成果を、教育にも積極的に還元する。	1) 学術研究推進委員として大学運営に協力する 2) 1年生の担任補佐として、学生の教育・学生生活のサポートをおこなう。	1) 大学運営に積極的に協力をおこなった。また、学内での会議や教員説明会にも参加し、常に情報収集をおこなった。 2) 主担任の先生を補佐し、副担任として1年生の実習などにも協力した。	1) 付属校でおこなわれる研究発表会や授業等に参加し、教育研究の相互支援体制を強化するための望ましい連携のあり方について前年度に引き続き模索する。 2) 社会への教育・研究成果の還元活動にもカを注ぐ。アドバイザー支援事業等にも協力し、大学での研究成果や教育を社会に還元する取り組みをおこなう。 3) 海外の教育・研究機関と連携して、国際共同研究を推進する。特に、中国北京大学との共同国際野外調査を推進する。 4) 日本地質学会「炭酸塩の起源と地球環境」セッション世話人として、学会運営に協力をおこなう。	1) 付属校でおこなわれる研究発表会や授業等に参加し、附属校との連携について現場を深めるようながった。 2) 小中学校教員の研修にも協力をおこなった。研修の際には、最新の研究分野の話題や、自らの研究成果（特々な実物標本）も取りあげるように取り組んだ。また、教員が若手実験をカ「野外観察」も研修ではおこなった。 3) 本年度は、中国北京大学やモンゴル科学アカデミーと国際共同研究を推進した。 4) 地質学会（炭酸塩分野分野）の運営にも協力した。	
96	自然・生活系教育部	自然系コース（理科）	佐藤　信淑	1) 前年度の授業を通じて、学生の地学に関する基礎知識の不足を実感している。学生の理解を深めるために、さらに基礎から詳しく時間をかけて各テーマの説明をおこなう。パワーポイントと板書、配布プリントの使い分けを工夫し、学生の理解を促進するように心がける。 2) 観察の知識だけでなく、自然現象を実験観察・分析し、何を読み取るのかを理解できるように、野外実習や実験を工夫する。特に、中学校や高等学校教科書で明示されている実習や実験に関しては一通り習得できるように授業内容を工夫するとともに、さらに内容を深めるようにする。 3) 学生が、各授業内容を正確に理解しているのか確認するために、小テストやレポートを適宜おこなう。理解出来ていない箇所については、再度解説をおこない不足部分を補うようにする。レポートに関しては、授業の始めにレポートの書き方を解説するとともに、毎回レポートのチェックをおこない　日本語文章の書き方からふまえた方までの指導をおこなう。	1) 穴埋め方式の配布プリントを毎回作成するなどの工夫をおこなった。また、講義では基礎的な内容から詳しく学生に説明をおこなうようながけた。 2) 実験や実習では、毎回授業の目的や手法をまとめたプリントを配布した。また、提出されたレポートには、コメントをつけて後日返却するようにした。 3) 授業では、毎回レポートか小テストを課すようにした。特に、レポートでは、授業内容をまとめさせることも重要である。どのような事柄を学生は正確に理解出来ていないのか、教員自身が知る機会になる。また、理解出来ていない箇所を指摘することで、学生自身は誤り を打正する機会を得る。このような取り組みは、学生・教員の双方向的な理解を深める。今後も進めていきたい。	1) 科研費採択課題「カンブリア紀後生態系から探る温室期の海洋生態系と地球表層環境の変遷」の推進に力を尽くす。そのために、国内外の研究・教育機関とも連携して研究を進める。本課題の最終年度であるので、成果のまとめをおこなう。 2) 大学院学生との共同研究については、修士論文としてその成果をまとめることが出来た。 3) 研究成果は、国際学術誌、国内・国内学会にて積極的に公表する。 4) 研究活動から得た成果を、教育にも積極的に還元する。	小・中・高校を通して全面移行となる新しい学習指導要領を踏まえ、今後の理科教育の充実・発展に寄与する実験教材を開発し、その有用性を検証する実践的研究を試みる。 同時に、教材開発の基盤となる専門的研究を継続して進行し、その研究成果を関連する学会や学術誌上で発表する。	日々の研究活動の成果を論文や学会等で発表し、年度目標を達成した。	所属する教育部、コースおよび委員会等の組織において、任された職務を全うできるよう努力する。	所属する教育部、コースおよび委員会等の組織において、任された職務を全うした。	附属学校等での教育実習や研究活動を積極的に参観し、連携可能な教育・研究活動を模索する。 教育支援講師・アドバイザー事業等を活用しながら、地域の学校の教育活動の充実・発展に貢献できるように努力する。 所属するコースや委員会において、国際協力関連事業に貢献できるよう努力する。	附属小学校の研究活動に共同研究者として関わったり、附属中学校で探究型授業を行ったりして、附属学校と連携した教育活動を実践した。地域の学校や教育機関の理科教育に協力した。ウタズの現役科教育支援に携わり、当面の教育課題の解決に向けた教育研究を行った。以上の取組を通して、年度目標を達成した。	特記事項なし。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（１－１）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、修学期や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に実習する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、教職大学院においては、学術成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように活かしていくか、あなたの指導や一般七〇の工夫を示して頂いて。	（１－１）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－１）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－１）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－２）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－２）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－３）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－３）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
96	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	金　貞均	教員としての高度な専門性と教育実践力を身につけさせるため、修士論文の指導はその点を工夫する。 1．専門領域の理論（生活学）と実践（住教育）を関連づけ、「実践を通した理論の検証・深化」が「理論に基づいた実践」を実践したテーマ・内容設定を指導する。 2．即から専門性に深いこだわりを持ち、授業研究等を通して、「研究成果を現場に生かすことができる実践的研究を実践した指導を行う。 3．修士論文の題目は、「実践を通した理論の検証・深化」を目的とした「理論に基づいた実践」を実践したテーマ・内容設定を指導する。 4．本学の留学生の教育・生活相談に随時応じ、留学生活を支援する。	教員としての高度な専門性と教育実践力を身につけさせるため、修士論文の指導では、「理論（住居学）と実践（住教育）を関連づけ、「実践を通した理論の検証・深化」が「理論に基づいた実践」を実践したテーマ・内容の設定、立場から専門性に基づいた教育相談、授業研究等を通して、「研究成果を現場に生かすことができる実践的研究を実践した指導を行ってきた。その成果は上の表で示した研究行の修士論文タイトルに表されている。題目例：小学校家庭科における環境配慮型住教育に関する実践的研究／高等学校における住教育教材一色則を用いて／地球に根ざした住教育の あり方－教師への支援体制づくりを目指して－／学校教育における子どもたちに「学習に関する研究－NPOは人の連携を通して－／高齢者福祉の現点から考える住教育－地域の実態を考慮した教材開発に向けて－」、これからもこの方針を堅持しながら学生の希望を反映して、より実践的な研究指導を行っていく。	1．キャリア教育の実施、オフィスアワーの積極的な活用により、学生の教育活動を支援する。 2．学生の進路や悩み等の相談に随時応じ、大学生活を支援する。 3．授業やゼミを通して教員採用試験の対策指導（専門と小論文、面接等）を行う。 4．本学の留学生の教育・生活相談に随時応じ、留学生活を支援する（実績16名）。	1．授業（初等中等教育実践基礎演習）やゼミにおけるキャリア教育の実施、オフィスアワー（毎週木曜日11~12時）を中心に積極的な授業相談活動を通して学生の教育活動を支援した。 2．学生の進路や悩み等の相談に随時応じ、大学生活を支援した（実績16名）。 3．授業やゼミを通して教員採用試験の対策指導（専門と小論文、面接等）を行う。 4．本学の留学生の教育・生活相談に随時応じ、留学生活を支援した（実績16名）。	1．学術研究助成基金助成金による研究課題の本年度研究計画分の調査研究費を支出、関係学会話等に投稿・発表する。 2．日本と韓国の住宅比較調査をまとめるため、資料調査を行う。 3．日本建築学会四国支部「四国住色教育研究会」における住教育実践研究活動（国際教育共同ワ研修会の実施、研究会報告集の発行等）を行う。	1．学術研究助成基金助成金による研究課題の本年度研究計画分の調査研究費を支出、関係学会話等に投稿・発表する。 2．自然・生活系教育部の構成員としての役目を果たし、部会の運営に貢献する。 3．就職委員会委員、国際交流委員会委員（学長指名）、日本教育大学協会の評議員として、本学の運営に貢献する。	1．本コースの構成員としての役目を果たし、コースの運営に貢献する。 2．自然・生活系教育部の構成員としての役目を果たし、部会の運営に貢献する。 3．就職委員会委員、国際交流委員会委員（学長指名）、日本教育大学協会の評議員として、本学の運営に貢献する。	1．本コースの構成員としてコース内の仕事を分担し、コース会議の出席及び提案交換を通してコースの運営に協力した。特に平成26年度は教科内容学に基づくの学校教科専門科目テキスト「家庭」を分担執筆した。 2．自然・生活系教育部の構成員として部会議への出席及び意見交換等を通して部会の運営に貢献した。 3．就職委員会委員、国際交流委員会委員（学長指名４年目）、教員養成モデルカリキュラムワップ・ポイラウム協議会委員（カリキュラムガイドブック第二版第一次分取り まとめ）、日本教育大学協会四国地区評議員（平成26年度日本教育大学協会四国地区研究集会「専門美術」の運行役等）として、本学の運営に貢献した。	1．附属学校の授業研究・教育実習等に積極的に参加し、教科の教育研究活動を支援する。 2．社会との連携を図るため、自治体の各種審議会において地域社会に必要な専門的行見言を行う。 3．韓国の研究者と共同で、日本と韓国の住宅比較調査をまとめるための資料調査を実施する。 4．韓国の協定大学や交流大学の教員との教育・研究交流を進める。	1．附属学校の授業研究・教育実習等に積極的に参加し、教科の教育研究活動を支援する。 2．社会との連携を図るため、自治体の各種審議会において地域社会に必要な専門的行見言を行う。 3．韓国の研究者と共同で、日本と韓国の住宅比較調査をまとめるための資料調査を実施する。 4．韓国の協定大学や交流大学の教員との教育・研究交流を進める。 5．韓国の協定大学である忠仁教育大学校教員と教育・研究交流を行い、共同調査を進めた（日本と韓国の青少年の異文化理解に関する調査研究）。 6．平成27年2月19～27日、光州教育大学校学生の本学訪問・交流事業（訪問団・教職員4名、学生20名）を支援した。	1．第7回日・韓教育大学学長フォーラム（10月15日～10月17日、上越教育大学主催、長野市）において韓国の協定校との交流を支援し、大学の国際交流に貢献した。 2．グローバルな視点を持った教員を養成する海外研修プログラム策定のための国各研究（東京心関連して、韓国の京仁教育大学校と光州教育大学校への訪問調査推進を支援した（平成27年1月19日～23日訪問調査実施）。
97	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	福井　典代	修士論文のテーマ設定にあたり、学生が作成した卒業論文のテーマの希望に合わせた内容としている。また、本学に進学する学生は、就職先として家庭科教諭を希望する場合が多いので、希望する校種に合わせた教材の作成も行っている。教材の内容は、修士論文のテーマと同じ内容として、論文の構成上、無理のない範囲としている。教材の位置づけを明確にすることで、学校現場で実践できるように、希望する校種が学習指導要領や教科書の改訂に伴っている。学習指導要領や教科書の内容を正しくとらえ、教員採用試験の専門に関する科目の知識にもつながる。	1．後期の講義科目である「初等家庭科教育論」において、150名の受講生に対して実験・実習を行い、それらの実験・実習を活用した模擬授業を実施した。 2．授業の始めに成績評価について具体的に説明している。また、大人数の授業であっても、毎回レポートを提出させ、それらの評価と即来試験から総合的に評価した。150以上と大変に上位の成績を受けられるバランスバスに明記している。 3．卒論指導の4年生が教員志望の学生なので、教育から進体入にかけて細心遠、指導練習と模擬授業の指導を行った。その結果、鳥根県小学校教諭に採用された。 4．クラス担当の学部3年次生と、専学した学生1名に対して、個別に相談に応じるとともに、8月と月始めに全員参加して相談した。さらに、1月の教育実習で出実習に参加した5名全員の授業を参観して指導・助言を行った。	1．「地域の特色を生かした染色教材の開発」アンペンアニン系色素を含む植物について」という題目にて、日本家政学会で発表する。 2．従来から共同研究を進めている「高等学校家庭科における消費教育に関する授業実践」をまとめて、日本家庭科教育学会で発表する。 3．科学研究費補助金の申請を行う。	1．「地域の特色を生かした染色教材の開発-アンペンアニン系色素を含む植物について」という題目にて、日本家政学会第64回大会（北九州市）で研究発表を行った。「市の廃棄物の高いポテンシャルを見出だす試みを考える」という題目にて、第61回日本家政学会中国・四国支部研究発表会（広島市）にて研究発表した。「高等学校家庭科における50の視点に立った消費者教育に関する授業実践」「大学生の家庭科に対する意識の変化-「初等家庭科教育論」の受講を通して-」という2つの題目にて日本教育実践学会第13回研究大会（鳴門市）にて研究発表した。 2．高等学校家庭科における消費者教育に関する授業実践-階層構造分析法を用いた教室の購入意識の変化について-」という題目にて、日本家庭科教育学会第51回大会（岡山市）で研究発表を行った。 3．造船研究の申請を、「科学的な視点に基づく利断能力を養うための家庭科教材の開発」という研究課題にて提出した。	1．教育研究評価委員会、教職実践演習実行委員会、エコアクション21専門部会の各委員として、大学の運営に貢献する。	1．教育研究評価委員会、教職実践演習実行委員会、エコアクション21専門部会の各委員として、大学の運営に貢献した。	1．教育実践講師・アドバイザーに登録し、地域・社会との交流・連携を行う。 2．日本家庭科教育学会四国地区会の副会長として役務を遂行する。 3．附属小学校で実施される研究会（3月10日）に参加した。 4．放送大学講師として、第1学期基礎授業を実施する。 5．日本家政学会代議員として、学会の運営に貢献する。 6．鳴門市情報公開・個人情報保護審査会の委員として、審査会の運営に貢献した。 7．平成26年度中学校教育研究大会技術・家庭科部会（全国大会）の指導助言を行う。	1．教育支援講師・アドバイザーに登録し、地域・社会との交流・連携を行う。 2．日本家庭科教育学会四国地区会の副会長として役務を遂行する。 3．附属小学校で実施される研究会（3月10日）に参加した。 4．放送大学講師として、第1学期基礎授業を実施する。 5．日本家政学会代議員として、学会の運営に貢献する。 6．鳴門市情報公開・個人情報保護審査会の委員として、審査会の運営に貢献した。 7．平成26年度中学校教育研究大会技術・家庭科部会（全国大会）の指導助言を行う。 8．徳島県消費生活審議会委員、消費者教育推進部会部会長として、審議会の運営に貢献した。 9．徳島県鳴門わかめ認定審査委員会委員として、審査委員会の運営に貢献した。	平成26年度中学校教育研究大会技術・家庭科部会（全国大会）の指導助言を行った。
98	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	西川　和孝	年度目標 本学は教員養成大学大学院であり、高度な教職の専門性と教育実践力を身に付けた教員養成のため、以下の修士論文の指導を行う。 ①教育に関する基礎研究として、専門が家庭科食物領域であるため、主に食品学、栄養学及び調理学の基礎研究を実施する。 ②学校の教育現場に実践できるように、上記①の研究を基礎とし、家庭科食物領域の教材開発を行う。また、開発した教材の効果を確認するため、教育実践を行い、アンケート等によって教育評価を行う。	本学は教員養成大学大学院であり、高度な教職の専門性と教育実践力を身に付けた教員養成のため、以下の修士論文の指導を行う。 ①教育に関する基礎研究として、専門が家庭科食物領域であるため、主に食品学、栄養学及び調理学の基礎研究を実施する。 ②学校の教育現場に実践できるように、上記①の研究を基礎とし、家庭科食物領域の教材開発を行う。また、開発した教材の効果を確認するため、教育実践を行い、アンケート等によって教育評価を行った。	1)修士論文の指導をした学生は、当初、親と料理の継承について調べたい意向であったが、家庭科教育との関連で「行事食」に変更 そもよう3名選し、学生はそのように変更した。 2)家庭科学習指導要領の内容から、行事食の扱いが小学校では難しいため、対象を小学生として調査を行った。 3)修論では、調査結果を生かした家庭科の授業案を提示させ、どのように教育実践に貢献することができるのか考察するよう指導した。	1)授業の欠席が重なってる学生に、細やかな教育支援を行う。 2)学生が就職活動に生かせるよう、礼儀マナー や言葉遣いについて随時、指導していく。 3)進路や悩みの相談にどがある学生には随時応じる。	1)学会誌に論文を少なくとも1本は投稿できるように研究を進める。 2)学会に積極的に参加して、研究発表を行う。 3)研究助成の公募に申請し、学外資金を得ようと努力する。	1)論理的な研究だけでなく、教育実践に役立つ研究を行った。 2)大学間連合学校教育研究科の教員育成教員（マル合）に申請を行い、DマルB合教員と認定された。 3)科研研究費補助金に申請を行った。 4)学術論文（少なくとも1編）を投稿した。 5)研究成果を学会にて発表した（日本食育学会誌、日本家政学会誌にて発表した）。	年度目標 1)学内の各種委員会に出席し、職務を遂行する（学部教務委員、安全管理委員等）。加えて、病気等で休まれる先生の代理出席を積極的に行った。 2)コース長として、コース会議を運営し、家庭科の意見をまとめた。 3)家庭科コースのe-Learningコンテンツを作成した。 4)教科内容学研究協議会委員として貢献した。	1)学内の各種委員会に出席し、職務を遂行した（学部教務委員、安全管理委員等）。加えて、病気等で休まれる先生の代理出席を積極的に行った。 2)コース長として、コース会議を運営し、家庭科の意見をまとめた。 3)家庭科コースのe-Learningコンテンツを作成した。 4)教科内容学研究協議会委員として貢献した。	年度目標 1)附属小学校教員、附属中学校教員と連携・協力した。 2)研修会等にて、大学間への入学を呼びかけた。教員免許更新講習にて実施した。 3)外国人研究者、留学生の希望者があれば受け入れる（希望者がなかった）。 4)本学主催の公開講座を実施した（5月10日実施）。 5)平成26年度教員免許更新講習の講師を務めた（8月1日実施）。 6)教員支援講師・アドバイザーとして、徳島市立高等学校に授業を行った（10月3日実施）。 7)平成26年度小学校教員資格認定試験（文部科学省）の問題点検を担当した。	1)附属小学校の第4回教育研究会（2/7）の共同研究者となり、2回の合同研究会（5/26、3/2）、推進授業（11/25）にも参加した。 附属中学校第10回教育研究発表会に参加した。 2)教育支援講師・アドバイザーとして、5回担当した。（放育講演会、ものづくりコンテスト審査員、授業研究会の指導助言など）また、県立高校にて、高校生を対象とした進路に関する講話を4回行った。 3)全日本中学校技術・家庭科研究大会（11/13、14）に指導助言者として参加するとともに、審判の授業研究会で授業の相談に応じた。免許更新講習を担当し、学校現場の家庭科教員の授業づけを支援した。	平成26年度家庭科コース長として、コースの取りまとめを行った。 家庭科コース（修士課程）の大学院入試改革を実施した（入学者選抜方法の変更、ホームページの変更等）。
99	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	黒川　衣代	1)テーマ設定において、小学校と中学校の家庭科学習指導要領を良く読み、指導内容に関連するテーマを設定するよう指導している。 2)教育実践につながる研究（主に調査）を行うため、できるだけ調査対象を小学生か中学生に設定した調査票を作成するように指導している。 3)調査結果をたかしと授業時案を作成するほか、調査の結果はどのように教育実践に貢献することができるのか、考察に必ず記述するよう指導している。	1)修士論文の指導をした学生は、当初、親と料理の継承について調べたい意向であったが、家庭科教育との関連で「行事食」に変更 そもよう3名選し、学生はそのように変更した。 2)家庭科学習指導要領の内容から、行事食の扱いが小学校では難しいため、対象を小学生として調査を行った。 3)修論では、調査結果を生かした家庭科の授業案を提示させ、どのように教育実践に貢献することができるのか考察するよう指導した。	1)授業の欠席が重なってる学生に、細やかな教育支援を行う。 2)学生が就職活動に生かせるよう、礼儀マナー や言葉遣いについて随時、指導していく。 3)進路や悩みの相談にどがある学生には随時応じる。	1)後期授業の履修学生の5うち1名が学校に出てこなくなり、担任と連絡をとりあった。 2)礼儀マナーや言葉遣いについて、気がついたことは随時、伝えるようにしている。 学部、院生ともにゼミを中心に教員採用試験に合格した。 3)ゼミを中心にゼミ生は教員採用試験に合格した。気持ちをくみ取りながら丁寧に話を聞くように。 この学生も教員採用試験に合格した。	1)学会誌に論文を少なくとも1本は投稿できるように研究を進める。 2)学会に積極的に参加して、研究発表を行う。 3)研究助成の公募に申請し、学外資金を得ようと努力する。	1)10月に韓国で光州ビエンナーレ国際シンポジウムに招聘された。その時の発表論文「The lifestyle of the elderly in a small town in Japan to live a worthwhile life」が Lecture Series Proceedings に掲載された（pp. 503-513）。 共著の本「家族生活の支援 －理論と実践－」（一社）日本家政学会家政教育部会編、建帛社、2014（5月発行、全157ページ）が 出版された。「第2章　家族について理解する」（pp. 23-28）の執筆を担当した。 2)今年度は、日本家政学会（3月）、日本家庭科教育学会（6月）、国際社会学会（7月）、韓国光州ビエンナーレ国際シンポジウム （10月）、アメリカ家族関係学会（11月）、において発表した。 3)公益財団法人アサヒグループ学術振興財団の2015年度学術研究助成募集に、代表者として応募した。 また、日本学術振興会「国際共同研究事業共同研究プログラム」に研究分担者として申請した。	1)学内の担当委員会、教授会等に出席し、職務を遂行する。 2)上記の他に委員等の依頼があれば、引き受ける。	1)大学院教務委員会、コース会議、部会議、教授会に出席した。 2)大学院教務委員会では副委員長を務めた。これに付随して、実地教育専門部会委員も務めた。 3)その他として、2年生担任、学年連絡会代表（担任役）を務めた。 4)教科内容学に基づくの学校教科専門科目テキスト「家庭」を分担執筆した。	1)附属校との授業実践研究や附属校で行われる研究大会に、積極的に関わり参加する。 2)社会との連携を図るため、自治体の各種審議会において地域社会に必要な専門的行見言を行う。 3)韓国の研究者と共同で、日本と韓国の住宅比較調査をまとめるための資料調査を実施する。 4)韓国の協定大学や交流大学の教員との教育・研究交流を進める。	1)附属校での授業実践、研究大会に出席し、授業観察の後の研究会に積極的に参加した。 2)教育支援アドバイザー講師や行政の委員会委員の要請があれば積極的に引き受ける。また、地域社会との交流・連携の機会があれば積極的に行う。 3)留学生、外国人研究者の希望者を積極的に受け入れる。	1)附属校での授業実践、研究大会に出席し、授業観察の後の研究会に積極的に参加した。 2)教育支援アドバイザー講師に加えて、鳴門市の希望により鳴門市生涯学習まちづくり応択講座に登板した。 免許更新講習の講師を担当した。また、後期の授業（保育学）においてていずみ保育園（名西郡）、園見たちと交流した。 3)留学生、外国人研究者の希望者はなかったが、韓国光州市で開催された光州ビエンナーレ国際シンポジウムにシンポジストとして 招聘され、韓国の研究者たちと交流した。	小学校資格認定試験の問題検討を担当した。
100	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	速水　多佳子	学校現場の課題解決や家庭科教育の発展・充実に資する内容をテーマとした修士論文に取り組むように指導する。研究の過程では学校現場の実態をキヤに把握するように努め、学校現場の協力を得て授業実践を取り入れ、その効果の検証を行う。また、その成果を学校へ報告し、その後の教育に生かせるようにする。	本年度指導した学生の修士論文のテーマは、「高等学校家庭科における「消費者の権利と責任」に普及した授業開発」である。家庭科の中で消費者教育はすべての分野に関する基礎家庭科であり、中学校家庭科では市売や生活色活色授業の授業を行った。他の研究室所属の学生に対して、論文内容（題材設定の理由や学習指導案の書式）についてアドバイスを行った。 ・長期履修学生については、学部授業「初等家庭科教育論」の中で、学校現場で活用できる実験・実習教材を取り上げ、学生自ら実験・実習することを通しての学校での活用方法を考えさせている。	1)担任する家庭コース4年次生の学生生活や卒業後の進路に関する相談に応じた。 2)担当する卒論生、修論生の指導を下記に行う。 3)長期履修学生支援センターの兼務教員として、学生の指導を行う。 4)教員採用試験対策として、学生主体の勉強会に毎週参加して指導を行う。	1)担任する家庭コース4年次生17名全員が教員志望であったため、教員採用試験対策として集団討論や個人面接、小論文などの指導を細心面し行った。その結果、7名全員が1次試験に合格し、最終的には小学校4名、高等学校1名が2次試験に合格、残る2名は来年試験試験となり、7名全員の進路を決めることができた。 2)担当する卒論生2名、修論生1名の論文指導や進路指導を下記に行った。卒論生は小学校教諭と高等学校家庭教諭試験となり、修論生は高等学校家庭科教諭として採用された。また、修論生は論文の内容について、2回の学会発表を行った。 3)長期履修学生支援センターの兼務教員として、毎週木曜日に実施している支援講座や支援演習を担当した。また、学生の生活や進路に関する相談に随時応じた。 4)教員採用試験対策として、学生主体の勉強会に毎週参加して指導を行う。	1)学校現場を支援する家庭科教育に関する研究を行う。 2)学会に積極的に参加して、研究発表を行う。 3)研究の成果をまとめて論文を投稿する。	1)家庭科の授業開発を中心に研究を行った。 2)日本家政学会全国大会1報、日本家庭科教育学会全国大会3報、同四国地区大会2報、日本食育学会1報、日本家庭学会1報、日本教育実践学会1報の計9報の発表を行った。 3)研究成果をまとめて投稿し、掲載された。 「大学生の家庭科に対する調査、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題」（日本家庭科教育学会誌第31巻第1号pp14-5） 「中学校技術・家庭科（家庭分野）における体験的学習活動を中心とした教材開発」（鳴門教育大学実践研究第19号pp14-6） 「家庭科住居領域の指導内容に関する考察-高等学校家庭科の教科書分析-」（鳴門教育大学研究紀要第30巻2015.3） &ぼ教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキスト 家庭」を分担執筆した。（2015.5発行）	1)長期履修学生支援センターの兼務教員として、大学院生の学生生活や修了後の進路実現のための支援を行う。 2)学内の各種委員会の委員として、大学の運営に貢献する。	1)長期履修学生支援センターの兼務教員として、毎週実施されている支援講座、支援演習を担当した。主免教育実習については、鳴門市内の中学校5校を担当し、事前・事後指導を行うとともに、実習中は中学校訪問を行い実習が円滑に実施できるように支援した。 2)学生支援委員会、学生総合相談室相談員、ハラスメントに関する相談員、修士課程教員養成カリキュラム研究開発室員を担当した。また、小学校資格認定試験の問題検討の取りまとめを行い、無事に役目を果たすことができた。	1)附属小学校、附属中学校の研究会に積極的に参加する。 2)学校現場との交流・連携を積極的に行う。 3)学校現場の家庭科教員の教育実践を支援する。	1)附属小学校の第4回教育研究会（2/7）の共同研究者となり、2回の合同研究会（5/26、3/2）、推進授業（11/25）にも参加した。 附属中学校第10回教育研究発表会に参加した。 2)教育支援講師・アドバイザーとして、5回担当した。（放育講演会、ものづくりコンテスト審査員、授業研究会の指導助言など）また、県立高校にて、高校生を対象とした進路に関する講話を4回行った。 3)全日本中学校技術・家庭科研究大会（11/13、14）に指導助言者として参加するとともに、審判の授業研究会で授業の相談に応じた。免許更新講習を担当し、学校現場の家庭科教員の授業づけを支援した。	年度の教員採用試験対策として、約20名程度の学生が自主的に集まって行っている勉強会に毎週参加し、集団面接の指導を15回、個人面接の指導を11回行った。毎回テーマを変えて、学級経営、生徒指導、保護者対応、危機管理などの内容について話い、自主的な集まりにもかかわらず、学生は熱心に参加していた。教員としての心構えなどについても取り入れ、採用試験対策とは、本学の合格率の向上だけではなく、教員としての資質向上にも貢献することができた。また、家庭コースの学生が家とした授業を11回開き、参加者4名の全員が1次試験に合格し、最終的には中学校教諭にも、高等学校教諭にも的が採用された。 すでに教員として採用されている卒業生や修了生との交流を定期的に行い、教員校での授業や生徒指導、同僚教員との関係などに関する相談に乗り、充実した教員生活が送れるように支援した。	平成26年度家庭科コース長として、コースの取りまとめを行った。 家庭科コース（修士課程）の大学院入試改革を実施した（入学者選抜方法の変更、ホームページの変更等）。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
101	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	松本　哲郎	【学部・生活系専門学部の内容」と「学校の教育実践に貢献するための」を重点的に取り組むことが、修士論文の研究課題や研究目的が学校教育の教育内容や教材開発とその改善の実践に関係するかどうかの点で、明確に区別されていないように思われる。 修士論文においては、教科の専門的な課題・研究内容を扱う点で同様に、専門分野に関係せず、他分野とのつながりを意識しながら研究を深めることに留意する。また、その研究課題がどのように教育現場で生かされ、実践されうるのか、修士課程の学生には専門的な探求を深めると同時に、研究内容を教育実践につなげる手法でも教材化や指導案の作成・工夫等具体的に当面する段階にまで到達することを目標とする。	修士論文の研究において、今日の我が国の食生活において問題の多い栄養素の1つとされる脂質に着目した基礎研究を実施した。特に妊娠の少ないランス自治体の脂質摂取における実態について評価し、脂肪摂取における食産とその関連性などが新知見が得られつつある。基礎研究に加えて、脂質に着目した教科書分析、大学生を対象にした中高の家庭科教科書の脂質に関する事項についての知識調査を実施した。この調査から脂質に関する家庭科教育に関して新たな課題を見出すことができた。さらに、大学生の栄養調査を通して、大学生の脂質の摂取状況が明らかになった。今後はこれらの研究をさらに深め、課題解決のための指導案の作成や教材開発等の研究を進めていく。本年度は、この研究目的に向けた基礎的データ・ログ教育実践に向けた新しい課題の発見等土台作りができたものと考える。	1) 授業・研究等、オフィスアワーを含めて、学生が質問できる時間を十分に設けるために対応する。 2) 専門分野においては、専門的・技術的サポートを積極的に行う。 3) 実験・実習をともなう授業では、学生の安全に十分に留意する。 4) 卒論および修論作成の指導において、基礎的知識・手技から応用的な手法まで丁寧な指導を行う。	年度目標において、 1) 学生が質問しやすい時間を十分に設け、オフィスアワーも含めて対応した。 2) 専門分野において、学生にアドバイスや技術的なサポートを行った。教育フォーム・実践研究において指導及び助言を行った。 3) 実習をともなう授業では、学生の安全に留意した。 4) 卒論および修論作成の指導において、基礎的知識・手技から応用的な手法まで丁寧な指導を行った。	1) 食品付属文雅誌へ研究成果を発表する。 2) 科学研究費補助金に申請を行う。 3) 研究成果を国内外の関連学会等で発表する。	年度目標において、 1) 現在、かつおだしの種対性や機能性に関する論文執筆を進めている。 2) 科学研究費補助金の申請を行った（新規で交付内定）。 3) 研究成果の関連学会での発表に向けて準備中である。	1) 大学院学校教育研究科入学試験委員会委員として、前期選抜試験、中期選抜試験、後期選抜試験など関連業務を遂行した。 2) 1年生担任として関連業務を遂行した。また、履修や学校生活の相談なども精力的に行った。	年度目標において、 1) 大学院学校教育研究科入学試験委員会委員として、前期選抜試験、中期選抜試験、後期選抜試験など関連業務を遂行した。 2) 1年生担任として関連業務を遂行した。また、履修や学校生活の相談なども精力的に行った。	1) 附属学校での研究授業や研究会に積極的に参加する。 2) 教育支援講師・アドバイザー派遣事業に登録する。	年度目標において、 1) 附属学校での研究授業、研究会（第56回附属中学校教育研究発表会、、第61回小学校教育研究会、鶴附東夏、ふれあい東夏、附属中学校教育実習「研究授業」および研究会）、主体教育実習の評価授業に参加・見学等を行った。 2) 教育支援講師・アドバイザー派遣事業に登録した。 3) 平成26年度大学・研究機関等研修（10年次研修）の研修講師を担当・実施した。（8-5）	・修士論文研究においては、基礎研究のみならず、より教育実践・学校現場に役立つ内容のものを扱い、基礎研究の成果と のつながりを考え、教育実践への貢献への不立てを考えることができた。授業においても学校現場を意識した授業展開を心がけた。 ・平成26年度大学・研究機関等研修（10年次研修）の研修講師を担当した。食物に関する授業に合わせて、授業に組み込める短時間から簡易な食物実験や実習をセレクトし、研修で実際に実験を行うことで、現場の生方の日頃の家庭科の実習に役立つ情報や技術の提供をできたものと思われる。
102	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（家庭）	阪本　有芳	1）小中学生の生活習慣、金銭管理、時間管理、ICT利用など日常生活に関わるテーマを取りよげた共同研究を現場とともに実施し、生活経営力の向上に結びつく教育実践を検討していきたい。 2）現在自らがアンケートやヒアリングなど調査を実施できるよう図し、調査実施を通じて児童生徒や保護者の実態理解を深められるよう支援する。 3）論文指導を通じてデータ・リテラシー、ビジョナリーを涵養させ、教育現場において21世紀が できる人材を育てる。	昨年度に研究室紀要5号の学生に対して、小中学生の生活習慣、金銭管理、時間管理、ICT利用など日常生活に関わるテーマを取りよげた研究を図し、生活経営力の向上に結びつく教育実践に必要なエビデンスの収集方法を指導した。さらに学期3年生向けの演習の授業を通じて、テーマ・ごとに大統計データの収集や加工、文献収集および整理の課題や、環境教育をテーマとした調査の企画・実施の課題を課すことにより、データリテラシー、ビジョナリーの向上をうながした。	1） 学生の自主的な学習活動を促せるよう、事前・事後課題を課すとともに、授業で学生同士の討論・探求的学習等を取り入れる。 2） 授業開始の遅刻・授業の理解状況に関わるアンケート等を実施し、授業の内容・方法の改善を図る。 3） 家庭科コースの学生に積極的に声をかけ、相談しやすい雰囲気をつくる。	学期2年生向けの授業では毎週の事前課題を課し、事前の予習に基づいた討論の授業を実施した。ただし、事前課題を行わない学生に対する対策が不十分であった。学期1年生向けの授業では、授業内で学生同士が話し合う課題を毎回設けるとともに、探求的学習をうながす事後課題を課すことができた。 家庭科コースの学生が消費者教育を題材とした模擬授業を準備する際には、様々なアイディアの資料を提供したり相談に応じたりするとともに、進捗などの相談にも応じた。	1）2012年度に実施した調査を分析し、国際学会誌に査読付論文を1本投稿する。 2）2013年度に代表者として実施した受託研究の成果をまとめ、編著、著者として1冊の書籍を出版する。 3）国際学会で1本、国内学会で1~2本のロ頭発表を行う。 4）小中学生の生活経営力向上を目指したアクションリサーチを企画し、科学研究費補助金等、外部資金が獲得できるよう申請書を提出する。	・2013年度に代表者として実施した受託研究の成果をまとめ、編著、著者として1冊の書籍を出版する。 ・国際学会で1本、国内学会で4本（うち代表は1本）のロ頭発表を行った。 ・結果形態と生活時間、消費活動との関連を実証的に検討する研究を企画し、科学研究費補助金の申請書を提出した。 ・英国、オランダの研究者とともに自己基用者の生活と社等の成り立ちをテーマとした国際比較調査を企画し、日本学術振興会を通じて欧州の社会科学分野における国際共同研究プログラム（ORAプログラム）に応募した。	1）入試委員としての責務を果たす。 2）大学の運営内容・方法に対する理解を深め、新任教員としてリを受けられる職務を積極的に担う。	学勢入試委員として毎回委員会に出席し、コース中盤への報告を行うとともに、必要業務を滞りなく行うことができた。大学内の職務も担当可能なものは積極的に担った。	1） 附属学校の授業研究・教育実習等に積極的に参加し、教科の教育研究活動をいかに支援できるかを学ぶ。 2） 教育支援講師・アドバイザー派遣制度等を通じて積極的に地域の学校に出向き教育支援を行う。 3） 講師や委員会委員の依頼があれば積極的に受ける。	附属学校の授業研究・教育実習等に合計9回参加し、現場での実践を学ぶとともに学生の授業実践に対する指導・助言を行った。 ・10月初に附属中学校でのLIFEの講師を務め、「オランダに学ぶこれからの働き方」と題する講演を行った。 ・11月11日に附属中学校で「中学生の時間管理・金銭管理」に関する家庭科授業を実施した。 ・12月1日には教育支援講師の依頼を受け、奥馬市三島中学校生徒に向けて「中学生の時間管理・金銭管理」に関するワークショップを実施した。	
103	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	能地　章	○基盤となる専門知識を活かし、学校教育に関連する諸問題の解決を行う修士研究を指導する。	○基盤となる専門知識を活かし、学校教育に関連する諸問題の解決を行う修士研究を指導する。 昨年度は、教育を大学院生として受け入れ、基盤となる専門知識を活かしながら学校教育に関連する諸問題の解決を行う修士研究を指導した。なお、留学生指導では専門的な内容を考慮しながら学校教育への展開を検討した。現職派遣大学院生の指導では教育現場での授業展開について指導した。	○授業内容・方法の更なる改善を図り、学生の学習意欲を向上させる。 ○学部ならびに大学院（修士）の授業において、実習を多く取り入れた授業内容の変更を図る。	学生の学習意欲を向上させるよう授業内容・方法改善を図った。また、実習を多取り入れて学部ならびに大学院（修士）の授業内容の変更を図った。	○学生の研究指導を徹底し、学会発表に結びつける。 ○自己の研究を発展させ、学術論文としての成果を出す。 ○連合大学院学生を指導し、研究内容を深化させる。また、学会に論文を投稿させる。	修士課程学生に地区大会ならびに全国大会での学会発表をさせた。また、他大学の連名で国際学会で発表した。さらに、連合大学院学生との連名で全国規模の学会に審査有学術論文を掲載した。	○自然・生活系教育部長として大学運営に貢献する。 ○教育研究評議会委員として大学運営に貢献する。	自然・生活系教育部長、附属委員会委員、教育研究評議会委員、大学改革委員会委員等として大学運営に貢献した。また、学外委員として兵庫県、	○中学校教員に対する現職研修を本学で実施し、本学の知名度を高めることにより大学運営に貢献する。 ○附属学校との連携を進め、学生の教育実習等の活性化を図る。	全国規模の中央研修として、5日間の中学校教員に対する現職研修を本学で実施し、本学の知名度を高め大学運営に貢献した。また、附属学校との連携を進め、学生の教育実習等の活性化を図った。	大学内の教育分野での学生生指導と全国規模の現職研修の充実、研究分野での活性化、大学内外の各種委員等、幅広く大学運営に貢献した。
104	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	尾崎　士郎	「理学部や大学院等の専門学部の内容」と「学校の教育実践に貢献するための」を重点的に取り組むことが、修士論文の研究課題や研究目的が学校教育の教育内容や教材開発とその改善の実践に関係するかどうかの点で、明確に区別されていないように思われる。 修士論文においては、教科の専門的な課題・研究内容を扱う点で同様に、専門分野に関係せず、他分野とのつながりを意識しながら研究を深めることに留意する。また、その研究課題がどのように教育現場で生かされ、実践されうるのか、修士課程の学生には専門的な探求を深めると同時に、研究内容を教育実践につなげる手法でも教材化や指導案の作成・工夫等具体的に当面する段階にまで到達することを目標とする。	平成25年度は学部・大学院共に教員採用試験2次合格者が多く、特に学部4年生は全員が正規採用となった。学生とコース教員の取り組みの成果であり、その一人として貢献できたのではないかと思う。ボランティア活動の支援も行い、題問を行っている調査活動技術の引通既も非常に活発し多数の表彰を受けた。設学長2年目に就業の活動ができるかどうか不安であったが、周囲の協力や努力もあって予想以上の成果があった。平成26年度はこれまでにない取組の個別指導も経験する可能性があり、十分な手当てがなされるように現実的指導配慮したい。 これらの通じあるいはそれ以上の成果をあげることが出来るかどうか非常に不安である。取り組みたい内容は以下の通り。 1．講義・演習では、これまで通り、ディスカッションを取り入れるなどの工夫を行って教員としての資質向上を図る。 2．技術の専門科目では実習の科目が無いもの、学生の実技・実験等力量の低下が無いように、教育課・演習等での教材開発等実習を含む内容の充実を図る。また卒業後に、教員採用試験対策も積極的に取り入れて、学生の現職力としての基礎的かつ実践的な資質・能力の向上を図る。 3．研究室配属学部生・大学院生の指導や生活、研究指導等相談、進路等試験支援の充実を考慮して、ゼミの指導を工夫する。 4．地域連携として位置付けている全国中学生ものづくり技技大会後島県大会の中学生に対する技術指導を、地下の技術教員と本学学生がプレイアとして参画して実施する。また ウチ/海海沢小国で開発の専門作教育委員会等主催"こどものまちフェスティバル"のオホニよるものづくり体験コーナーに学生が参加予定。学生に対する事前の技術指導と子供に対する指導法の特別を行って貢献してもらう予定である。また、他県と学生交流交換の一環として、各種教員研修では、学期・大学院生には積極的に補助として参加。 5．これまでに徳島県森林審議会に委員として加わり県産材材用促進条例の制定に携わり、その第1条に"木育"を加えたことから、木育を県民に広く理解していただくために県管理運営のもとで、徳島県林水産技術支援センターにおいて将来会議を実施し、平成26年度はさらに具体的な啓発活動を県管理運営のもとで全国に展開したいと考えているが、できることは木育を教育的な側面から支援するために、研究室の学生、本学学部・大学院生の有志と共にボランティアとして参画するための教材開発基礎研究を行いたい。 6．前述と関係にあるが、県管理運営の徳島県森林利用研究所内に木材利用創造会議が設置され、その委員を担当している。現会議は徳島県建設士会と大連建築士会の建築士、木材産業技術者、山林所有者、徳島県試験研究機関の研究者が行政職員等から構成され、県産材利用促進を図るための利用マニュアルやスハイ/集等資料を開発・作成中であり、平成26年度も継続する。（作成中！） 7．調査活動では、可道就職活動にて採用指導の方策を図りたいが、時間を十分に	職域支部での教育・研究を目指しているが、近年、学生の興味が職域から離れているように感じており、職域学習キットを用いた実習を行い、学生自らが取り組めるように工夫する。 3D-CAD や3Dプリンタを用いた新しいものづくりを用いた教材開発に取り組む。 「工業科教育論 」において、厚紙を使ったエンジンの構造模型製作を通して、学生自らが取り組む工夫をする。 効果的なラーニング教材開発に関する研究に取り組む。	昨年は学部・大学院共に教員採用試験2次合格者が多く、特に学部4年生は全員が正規採用となったが、昨年度は2教員採用試験2次合格者が多くなったが、平成26年度はそれでも学部の50%を超えた。学生とコース教員の取り組みの成果であり、その一人として貢献できたのではないかと思う。ボランティア活動の支援も行い、題問を行っている調査活動技術の引通既も非常に活発し多数の表彰を受けた。 ・講義・演習、技術の専門科目とゼミでは授業の目的を異たせるように工夫し、教員採用試験対策も積極的に取り入れて、学生の即戦力としての基礎的かつ実践的な資質・能力の向上を図るように工夫した。 ・地域連携として位置付けている全国中学生ものづくり技技大会徳島県大会の中学生に対する技術指導を、地下の技術教員と本学学生がプレイアとして参画して実施した。徳島県内の中高学校教育の現場で、徳島県林水産技術支援センターにおいて、内卓会議を実施し、徳島県森林利用研究所内の木材利用創造会議委員として、徳島県建設士会と大連建築士会の建築士、木材産業技術者、山林所有者、徳島県試験研究機関の研究者が行政職員等が協力して、県産材利用促進を図るための利用マニュアルやスハイ/集等資料を開発・作成し、技術支援を継続した。	従来からの技術教育に関する教材開発、木質材料の物性、手加工と機械加工のカニズムに関する基礎研究、徳島県産材および地域の伝統技術の特徴を生かした利用技術の検討とその教育材料に関する研究を継続する。また徳島の森林資源の有効利用に関連する研究、徳島県産材利用促進条例に反映した木質に関する教育研究活動の基礎研究はさに取り組む。 1．技術教育に関する教材開発と授業実践研究 ・木によるものづくり教育で行われるクライス切断作業のメカニズムと生成した切屑性状の分析（※1） ・作業配分と健康等危険技術を応用した高度な作品製作技術の開発と授業実践への応用 ・各種加工技術と学習者の技能との関係の定量的分析方法の開発 2．木質材料に占める間伐資源が、量産と安管特性を考慮した材質評価の検討とされる応用した新しい教材の開発（※1） ・不定形木材小片の定量測定法の検討と回転切断の被削性評価への応用（※1） ・可視光および紫外線光照射による間伐木材表面の窓色発色促進と光応却制に関する研究（※2） 3．木質材料の切削および機械加工に関する基礎研究（名古屋大学との共同研究） ・環境教育に配慮した教育現場における施策材の再利用 ・木材および竹材の切削機構と切屑性 ・回転切削における刃先運動と切屑生成機構の幾何学的解析と切削精度（※1） 4．地域の技術を活かした新しい素材の開発と教育的利用 ・木材の曲げおよび技術の高精度化と教育的利用 ・木質材料の間伐技術を応用した新しい体験型ものづくり教育プログラムの開発（※2） ・自官学連携による徳島県産森林資源の有効利用総合技術参画のための教育支援プログラムの開発（※1） 5．「技術科教員養成での標準基準の作成及びその基準による検定制度と競争的教育環境の構築」に関する研究 本研究は科研費による研究として取り組んできたが、平成23年度で終了したしかし、学会とて研究継続中で、将来的には、試験制度の実用化に関する研究を行われるので、今後も市民や評価の検討等では継続して協力し貢献したい。 （※1：学外機関との共同研究、※2：Seeds発掘試験研究調査の継続研究）	従来からの技術教育に関する教材開発、木質材料の物性、手加工と機械加工のカニズムに関する基礎研究、徳島県産材および地域の伝統技術の特徴を生かした利用技術の検討とその教育材料に関する研究を継続する。また徳島の森林資源の有効利用に関連する研究、徳島県産材利用促進条例に反映した木質に関する教育研究活動の基礎研究はさに取り組む。 1．技術教育に関する教材開発と授業実践研究 ・木によるものづくり教育で行われるクライス切断作業のメカニズムと生成した切屑性状の分析（※1） ・作業配分と健康等危険技術を応用した高度な作品製作技術の開発と授業実践への応用 ・各種加工技術と学習者の技能との関係の定量的分析方法の開発 2．木質材料に占める間伐資源が、量産と安管特性を考慮した材質評価の検討とされる応用した新しい教材の開発（※1） ・不定形木材小片の定量測定法の検討と回転切断の被削性評価への応用（※1） ・可視光および紫外線光照射による間伐木材表面の窓色発色促進と光応却制に関する研究（※2） 3．木質材料の切削および機械加工に関する基礎研究（名古屋大学との共同研究） ・環境教育に配慮した教育現場における施策材の再利用 ・木材および竹材の切削機構と切屑性 ・回転切削における刃先運動と切屑生成機構の幾何学的解析と切削精度（※1） 4．地域の技術を活かした新しい素材の開発と教育的利用 ・木材の曲げおよび技術の高精度化と教育的利用 ・木質材料の間伐技術を応用した新しい体験型ものづくり教育プログラムの開発（※2） ・自官学連携による徳島県産森林資源の有効利用総合技術参画のための教育支援プログラムの開発（※1） 5．「技術科教員養成での標準基準の作成及びその基準による検定制度と競争的教育環境の構築」に関する研究 本研究は科研費による研究として取り組んできたが、平成23年度で終了したしかし、学会とて研究継続中で、将来的には、試験制度の実用化に関する研究を行われるので、今後も市民や評価の検討等では継続して協力し貢献したい。 （※1：学外機関との共同研究、※2：Seeds発掘試験研究調査の継続研究）	1）入試委員としての責務を果たす。 2）大学の運営内容・方法に対する理解を深め、新任教員としてリを受けられる職務を積極的に担う。	学勢入試委員として毎回委員会に出席し、コース中盤への報告を行うとともに、必要業務を滞りなく行うことができた。大学内の職務も担当可能なものは積極的に担った。	1） 附属学校での授業研究・教育実習等に積極的に参加し、教科の教育研究活動をいかに支援できるかを学ぶ。 2） 教育支援講師・アドバイザー派遣制度等を通じて積極的に地域の学校に出向き教育支援を行う。 3） 講師や委員会委員の依頼があれば積極的に受ける。	・もものづくり教育等を通じて、附属学校教員や徳島県下の現職教員と連携し、現職教員の各種研究会活動等の支援に貢献する。 ・徳島県総合教育センター中央所等を介して、地域社会の教育活動や職し物に出無し貢献する。また昨年度に現実された現職向けの次世代科学・技術普及プログラムが、今年度は不採択となった。片面実施の途中であり、非常に残念である。しかし、災害・生徒は生まれ、本学生やこれから地域の優秀大学、教育委員会、現職教員等と協力して実施した。 何とか実施してみたいと願っている。 3．地域連携として全国中学生ものづくり技技大会の技術指導を徳島県下、中国四国地区9県、全国の全日中研究会現職教員との交流と連携を図りながら実施する。 4．もものづくりに関する地域の職し物に研究室学生他と積極的に出無し、地域住民、子供達、青少年や保護者との交流を拡充する。 5．これまでに徳島県森林総合技術センター、工業技術センター等徳島県研究機関との協力関係について充実する努力を継続する。 6．とくに木質産材利用促進向けて、研究室等学生と共に、徳島県および研究機関、産業界との連携協力を推進する。	・附属中学校の研究授業等もの づくり教育のほか、同学校教員や徳島県下の現職教員と之共に、中学校技術・家庭科研究会の全国大会と中国・四国大会の研究大会実施に向けて、授業研究の準備と当日の指導助言等に協力した。 ・全国中学生ものづくり技技大会準備、実施と技術指導（教員研修を兼ねる）について、また次世代科学・技術普及プログラムのフレイズスターとマスターコースについて、本学生やローカルに地域の複数大学、教育委員会、現職教員等と協力して実施した。 ・徳島県産材利用促進を図るために、徳島県産材利用会議会員を務め、同時に、材料として の木材の良さやその利用の意義を学ぶ「木育」とも言うべき木材利用に関する教育活動、試験研究等の企画・立案等を、徳島県下及び試験研究機関、徳島県建設士会、木連建設士会、県内企業及び一般消費者と協力して実施した。次年度以降も継続予定である。	
105	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	宮下　英一	修士論文の内容については、近い将来に学校教育への導入を目指して最新技術を用いたものづくり、ゥラーニング、エネルギー教育に関する実践的なテーマを扱うことを目指し、学生の教育と希望進路に合わせて専門性の発揮を図ることいるが、つまり中学校の教員志望者には学校での授業実践を想定した実践的な内容に、土業高校の教員志望者には専門性の高い内容を設定する。	修士学生の希望を尊重して、3Dプリンタの教育利用に関する研究に取り組んだ。3Dプリンタは、新しいものづくりのツールとして学校教育に導入される可能性があるために、学校における教育実践につながる研究成果を早づけるように図した。 2014年度の研究では、中学校に導入可能な廃棄寒のエクリンタの性能面からの検証を行い、従来の切削加工との違いを技術科教員に理解していただくための資料を作成した。また3Dプリンタを使ったものづくりのために必要となるCADとして各種製品を比較した結果、中学生の技術レベルや中学校の情報システム環境を考慮して、DesignSpark Mechanicalを推奨することにした。これらの結果を活かして、2015年に協力校における研究授業を実施する方向で学校や教員と準備を進めている。	1）技術教育に関する教材開発、木質材料の物性、手加工と機械加工のカニズムに関する基礎研究、徳島県産材および地域の伝統技術の特徴を生かした利用技術の検討とその教育材料に関する研究を継続する。また徳島の森林資源の有効利用に関連する研究、徳島県産材利用促進条例に反映した木質に関する教育研究活動の基礎研究はさに取り組む。 ・木によるものづくり教育で行われるクライス切断作業のメカニズムと生成した切屑性状の分析（※1） ・作業配分と健康等危険技術を応用した高度な作品製作技術の開発と授業実践への応用 ・各種加工技術と学習者の技能との関係の定量的分析方法の開発 2．木質材料に占める間伐資源が、量産と安管特性を考慮した材質評価の検討とされる応用した新しい教材の開発（※1） ・不定形木材小片の定量測定法の検討と回転切断の被削性評価への応用（※1） ・可視光および紫外線光照射による間伐木材表面の窓色発色促進と光応却制に関する研究（※2） 3．木質材料の切削および機械加工に関する基礎研究（名古屋大学との共同研究） ・環境教育に配慮した教育現場における施策材の再利用 ・木材および竹材の切削機構と切屑性 ・回転切削における刃先運動と切屑生成機構の幾何学的解析と切削精度（※1） 4．地域の技術を活かした新しい素材の開発と教育的利用 ・木材の曲げおよび技術の高精度化と教育的利用 ・木質材料の間伐技術を応用した新しい体験型ものづくり教育プログラムの開発（※2） ・自官学連携による徳島県産森林資源の有効利用総合技術参画のための教育支援プログラムの開発（※1） 5．「技術科教員養成での標準基準の作成及びその基準による検定制度と競争的教育環境の構築」に関する研究 本研究は科研費による研究として取り組んできたが、平成23年度で終了したしかし、学会とて研究継続中で、将来的には、試験制度の実用化に関する研究を行われるので、今後も市民や評価の検討等では継続して協力し貢献したい。 （※1：学外機関との共同研究、※2：Seeds発掘試験研究調査の継続研究）	小型船舶の動力源として広く使われている船外機の電動化に関する研究を続ける。 3D-CAD や3Dプリンタを用いた新しいものづくりを用いた教材開発に取り組む。 潮流発電に関する研究を推進する。今年度は国内の主要海峡の特性を考慮した電動サーピンの形状に関して実験を進める。 効果的なラーニング教材開発に関する研究に取り組む。	小型船舶の動力源として広く使われている船外機の電動化に関する研究を行いエネルギー資源学会誌文集第30巻第3号 pp.29-34,2014年11月に研究論文「電動船外機を用いた小型船の航行特性」が掲載された。 電動船外機船の経済性について研究を行い、日本産業技術教育学会に研究論文「品質高度化対策にした電動船外機船と従来型船」を投稿し査読中である。 3D-CAD や3Dプリンタを用いた新しいものづくりを用いた教材開発に取り組み、日本産業技術教育学会全国大会において研究発表「3Dプリンタを用いた教材開発の研究」を行った。 13th Hawaii International Conference on Education（HICE）において、研究発表「Development of Mechanism Learning Kits Using 3D-Printer」を行った。 潮流発電に関する研究を推進する。今年度は国内の主要海峡の特性を考慮した発電用タービンの形状に関して実験を進める予定であったが、海上交通との周辺の面で長い解決策を模索している。 効果的なラーニング教材開発に関する研究に取り組み、平成28年度ゥラーニングによる関連を目指して新規授業「学校教員の世界（取則）」の内容を制作中である。	大学運営ｅ-Learning教育支援センター専門教員大学分室室長として、本学に後輩のあるゥラーニングのあり方を模索し推進する。 戦略的大学連携GPI（四国の知）の学内委員長として支障なく業務を遂行する。	大学運営ｅ-Learning教育支援センター専門教員大学分室室長として、本学に後輩のあるゥラーニングのあり方を模索し推進した。 戦略的大学連携GPI（四国の知）の学内委員長として支障なく業務を遂行した。	独立行政法人教員研修センターが主催する平成24年度産業・情報技術等指導者養成研修の講師を担当した。 徳島県教育委員会が主催するスーパーオンリーワンハイスクール事業およびFNPPONJ探求スクール事業審査委員会本審査委員を担当した。 ・エネルギー環境教育に関する徳島県のアドバイザーを担当する。	独立行政法人教員研修センターが主催する平成24年度産業・情報技術等指導者養成研修の講師を担当した。 徳島県教育委員会が主催するスーパーオンリーワンハイスクール事業およびFNPPONJ探求スクール事業審査委員会本審査委員を担当した。 エネルギー環境教育に関する徳島県のアドバイザーを担当した。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
106	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	米延　仁志	【Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、修学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂ない。夜間大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように活かしていくか、あなたの指導や一般ヒ％の工夫を示して頂ない。 これまでも専門的な研究に関連したテーマにおいて、研究内容を深め入れ、新しい授業案作成や指導案提案の対応などをどうして行ってきた。また、教員採用試験の面接のための模擬授業を指導してきた。この方針で今後も修士論文指導を行う。	年度目標のとおりに遂行した。	・担当授業の学習内容の精選とテキストの更新に取り組む。 ・学生の相談に随時応じ、自らの課題解決について、学生が自律的・主体的に取り組むことを促す。 ・教員採用試験対策等に積極的に関与する。	年度目標のとおりに遂行した。	・教採試験の科研課題の推進に全力を尽くす。 ・研究成果を纏め、論文を出版する。 ・協域複合的・国際的な共同研究を法人化に行う。	科研課題を遂行するために時間が十分に得られなかった。そのため経費の執行と研究成果の生産に大幅な遅れが生じた。	担当する委員会等に参加し本学の運営に貢献する。	年度目標のとおりに遂行した。	・国際的な共同研究を推進し、本学の存在感を国際的に高める。 ・附属学校での教材作成への協力や提供を行う。	研究成果の学校教育、社会への普及活動を積極的に行った。 ・教員研修講師「現代における環境教育－福井の地層（年縞）から世界を見る」福井県教育研究所（主催）（H26.8.8） ・公開シンポジウムを開催した（H26.2.8、H26.2.23） ・研究成果に関連した一般向け書籍を3冊刊行した。 ・上記の活動に関連した新聞記事（日本経済新聞・新刊、福井新聞・新刊）、雑誌記事（時評等）ネットニュース（マイナビニュース等）が掲載された。	教学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(H21-25)の事後評価で、研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの成果があったとの所見が得られた（評価A）。 教学術領域研究「古代アメリカの古殻文明論」が2期連続で採択された。
107	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	菅根　康人	プログラミング教育で問題になっている問題の一つに、プログラムの実習を授業で行なうことが困難になっていることが挙げられる。それを解決するために、ソフトウェア開発現場で用いられているタスク管理システムを活用することで、授業でやらない修士の学生と共に取り組んでいる。また学校における「セキュリティ」の問題について、PDF文書などで意図せずにユーザー名などの情報が漏れている場合があるが、その問題について修士の学生と調査をすすめている。	高校でのプログラム実習において、より現実的なプログラミング開発経験を体験させるために、テスト駆動開発の考え方を導入することを修士学生に指導し、修士論文にまとめるとともに産業技術教育学会四国支部大会でも講演で発表した。またパソコンでファイルを作成したファイルに意図せず個人情報が残っていた問題についても、学生を指導し修士論文にまとめることができた。こちらも産業技術教育学会四国支部なら共に電気関連学会四国大会でも講演で発表した。	研究室での研究活動を活発には、学生の学会発表を促す。 LMSを活用し、オンラインの教材提示やパテストを行う。特にICT機器の操作について情報基盤センターと協力して シャードデオクリップによる説明資料の整備により、学生がICT機器操作を自主学習できる環境を整備する。	産業技術教育学会四国支部、電気関係学会四国支部連合大会で学生が発表し、 情報基盤センターの利用認定試験として、オンラインテストを導入し、入学時の講習会をスムーズにすすめることができた。 またシステム更新に伴い、特別な利用方法が必要とされる端末の利用についてシャードビデオを作成し、説明に利用した。	情報セキュリティに関する研究を進め、学会発表を行う。	電気関係学会四国支部大会に加えて、産業技術教育学会四国支部でもファイルに含まれる個人情報についての研究成果を報告した。	情報基盤センターに導入された第4期のコンピュータシステムが頻繁に稼動させ、学内のICT環境整備を進める。	システムの改善を続けたことにより、当初と比べてかなり安定したシステムにチューニングすることができた。 新システムの改善は引き続き継続するが、利用に支障が出るような致命的な問題は当分発現しと考える。	附属学校のネットワーク運営およびICT環境の整備に協力し、ICTを活用できる環境を目指す。	附属中学校のICT推進委員会の委員として、附属中学校でのICT機器活用方法に関する相談、指導を行なった。	科学・技術者の発掘・養成講座のプリマスター、マスターコース 情報領域担当として中学生を指導した。 阿南、徳島サテライト教室をテレビ会議で接続するための技術的なサポートやシステムの調整を行なった。
108	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	伊藤　陽介	1)大学院生の意向を重く受けとめ修士論文の研究課題を設定する。 2)学問的な研究内容において教育実践に貢献できることを目指す修士論文とする。	1)教科内容と教育実践との関連性を明確にする授業を行う。 2)実習を含む授業では、ものづくり情報に関する技術を体得させる取り組みを行う。 3)研究指導している学生に対しては、研究指導に加え就職支援も行う。 4)学部1年次セクラス担当教員として学生から相談があれば親身になって対応する。	1)については、教科内容を取り扱う授業において学校教育や教育実践との関がりを意識して実施した。 2)については、ハードウェアとソフトウェアの両面を加味した教材を使用し、学生自らが手を動かしものづくりを実習を十分時間をかけて行った。 3)については、研究指導している学生に対してキャリア指導も丁寧に行った。今年度研究指導した卒業・修了生を法人の学生2名は、とともに大学院に進学した。 4)については、学部1年次セクラス担当教員として親身に面接指導を行うとともに、学修キャリアノート等を利用して教育指導した。また、学生から相談があれば親身になって対応し、常に信頼されるように心がけた。	1)情報技術および情報技術教育に関する専門的な研究を推進する。 2)研究発表で得られた成果をまとめ、学術図書に論文投稿する。 3)積極的に学術講演会等に参加し、研究成果を公表する。 4)学術研究助成金が获得された場合、その研究計画に沿って実施する。	1)については、主に地球観測技術と計測・制御技術に関する研究及びそれらの教育利用化研究に取り組み、科学研究費補助金による研究、学術図書研究開発推進とかの共同研究、並びに、連合研究科共同研究プロジェクトを進行した。 2)については、論文(編)内容現行全(編)が完結され、小学校教員養成を目的とする教科書(「初等技術・情報」全分冊)執筆した。 3)については、国際会議(特、国内学会発表)3件を行い情報的に研究成果を公表した。 4)については、平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))が新規採択となりその研究計画に沿って実施した。	1)情報基盤センター所長及び技術・工業・情報コース長として、本学の運営に貢献する。 2)高専教育大学大学院連合学校教育学研究科生活・健康系教育連合講座代表者として、本学の運営に貢献する。 3)各種委員会委員として、本学の運営に貢献する。	1)については、情報基盤センター所長として、教員養成系大学・大学院として特色ある情報環境となるように情報基盤を維持・管理・運営した。さらに、技術・工業・情報コース長として、コース運営にあたるとともに、大学院生の環保のために積極的な相談指導を行った。 2)については、生活・健康系教育連合講座代表者としての各種業務を行った。 3)については、知的財産室設置委員として、四国法学連携イノベーション共同推進機構運営委員を担当し、産学連携マッチング情報システムの利用環境整備等を行った。さらに、就職委員会委員として本学の運営に貢献した。	1)附属学校校舎高等学校の情報環境サポートをセンタースタッフと協力することで連携を深める。(附属学校) 2)大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会に貢献する。とくに今年度は学校図書館用書教諭講習、社会教育主事講習等も担当する。(社会連携) 3)留学生の研究指導や交流、国際会議を通じて実践的な国際交流を図る。(国際交流)		情報基盤センター所長、技術・工業・情報コース長、知的財産室副室長、連合大学院生活・健康系教育連合講座代表者として本学の運営に特に貢献した。さらに、公益財団法人ムーブ（公益進財団の評議員、ならびに、第17回技術教育賞銘の世界「エネルギー利用」技術作品コンテスト（主催：日本産業技術教育学会）の専門教育大学における開催事務局を担当し、本学の知名度を上げることに貢献した。
109	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	林　秀雄	学生が本学大学院学校教育研究科の修士課程において、「修士（理学）」や「修士（文学）」等ではなく「修士（教育学）」の学位を取得するうえで、その専門分野の特徴や高い生涯学ぼうとする（研究指導）ことに今日的課題として「学校教育において現代の諸課題を取り上げる場合、単一科学の理論や方法をもって解決ができないことが多く、知の再構築を行って、総合的知をもって今の解明と解決に当たる要が生じていることが挙げられたため、他領域や周辺領域との関連性に留意し、広い視野から総合的にアプローチできる教育成を図る指導をすることによって、学校の教育実践に貢献するように重点の一つをおいている。		本年度は、教育・学生生活支援に関わる情報環境の管理・運用をセンタースタッフ等と協力して円滑に進めることで、学生が主体的に活動しやすいように サポートする。さらに情報基盤コンピュータシステムは今年2月に導入したところであり課題が洗出されていくことから、それらを協力して改善していきたい。また、博士課程の学生を受け入れたことにより、これまでは上に研究指導等に時間を要することが予想されるため、健康にも留意して進めていきたい。		本年度は、第4回目となる知識創造とイノベーションに関する国際ワークショップをオーガナイズし、徐々に広がりつつある研究領域を一層拡大させていく計画である。		大学運営においては情報の基盤を支える情報基盤センターの果たす役割を認識し、業務が効果的に進められるように、しっかりサポートすることで、関係的に本学の運営に貢献する。また、教育研究評価委員会等の業務も円滑に進めていきたい。		1)附属学校の情報環境サポートをセンタースタッフと協力することで連携を深める。(附属学校) 2)大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会に貢献する。とくに今年度は学校図書館用書教諭講習、社会教育主事講習等も担当する。(社会連携) 3)留学生の研究指導や交流、国際会議を通じて実践的な国際交流を図る。(国際交流)		
110	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	宮本　賢治	現場の教員と積極的に打ち合わせを行うなどして、教育現場での課題を研究テーマに反映し、学生と教員や学生同士の間でのディスカッションが活発になるように指導する。授業実践に向けた必要な教材・教具の検討・開発や予備実験の実施、授業展開の検討等を十分に行い、入念に事前準備をするように努める。	現場の教員と積極的に打ち合わせを行うなどして、教育現場での課題を研究テーマに反映し、学生と教員や学生同士の間でのディスカッションが活発になるように指導した。授業実践に向けた必要な教材・教具の検討・開発や予備実験の実施、授業展開の検討等を十分に行い、安全対策等、入念に事前準備を行った。電気パンを題材として附属中学校で授業実践を行い、本研究成果を専門教育大学研究紀要　第30巻へ投稿し、掲載された。	1)昨年度の授業評価結果を踏まえて、学生の理解や技能が授業の到達目標を達成できるように、授業の構成やテキスト、教材の工夫等の授業の改善を図る。 2)修士論文や卒業論文の指導に関して、質の高い論文を完成できるように きめ細かく指導する。 3)セルの学生を対象にして、教員採用試験に向けた指導を行う。	1)昨年度の授業評価結果を踏まえて、学生の理解や技能が授業の到達目標を達成できるように、適宜、授業の構成やテキスト、教材の工夫等の授業の改善を図った。 2)修士論文や卒業論文の指導に関して、質の高い論文を完成できるように きめ細かく指導した。 3)セルの学生を対象にして、教員採用試験に向けた指導を行った。	1)負イオンビームの光学シミュレーションの研究については、外部の研究機関との間で共同研究を進めて、研究成果を学会で発表したり、学術論文誌へ投稿する。 2)電子顕微鏡解析のためのイオン薄検を用いた前処理方法に関する研究については、研究成果を学会で発表したり、学術論文誌へ投稿する。 3)初等・中等におけるものづくりや理科の教育に関する教材開発等の研究を進める。	1)イオンビームの光学シミュレーションについては、豊応大や日本原子力研究開発機構等の外部研究機関と共同研究を進め、研究成果を下記の国際学会のAn International Symposium on Negative Ions, Beams and Sources(2014. 10. 6~10)で発表した。また、AIP conference proceedingsに投稿し、掲載が承認された（査読有）。 2)電子顕微鏡観察のためのイオン薄検を用いた前処理方法に関する研究については、研究成果を医学生物学電子顕微鏡技術学会誌へ投稿し、掲載が承認された（査読有）。 3)初等・中等におけるものづくりや理科の教育に関する教材開発等の研究を進めた。研究成果は日本産業技術教育学会　第31回全国大会(2014. 8. 23. 24)で共通セッションとして学会発表した（2件）。また機門教育大学研究紀要　第30巻へ投稿し、掲載された。	1)学部入試委員として、本学の運営に貢献する。 2)知的財産室委員として、本学の運営に貢献する。	1)学部入試委員として、本学の運営に貢献した。 2)知的財産室委員として、本学の運営に貢献した。 3)修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員として本学の運営に貢献した。「奉仕免許状の実践を図った修士課程実践型カリキュラムの開発」シンポジウムにおいて、「教科内容構成」の開発（技術科）の発表をした。	1)中学ロボットコンテスト大会等を通じて、附属中学校と積極的に教育・研究活動の交流を図る。 2)教育支援講師・アドバイザー等事業に登録し積極的に参加する。 3)日本産業技術教育学会主催の「エネルギー利用」技術作品コンテストに実行委員として参加する。 4)四国法学官連携イノベーション共同推進機構の運営委員とアソシエイトを務める。 5)教育・研究活動や戦略会等を通じて、コースに在籍している外国人留学生と積極的に国際交流を図る。	1)中学ロボットコンテスト大会等を通じて、附属中学校と積極的に教育・研究活動の交流を図った。 2)教育支援講師・アドバイザー等事業に登録した。 3)日本産業技術教育学会主催の「エネルギー利用」技術作品コンテストに実行委員を務めた。 4)四国法学官連携イノベーション共同推進機構の運営委員とアソシエイトを務めた。 5)教育・研究活動や戦略会等を通じて、コースに在籍している外国人留学生と積極的に国際交流を図った。	連合学校教育学研究科教員資格審査においてマル合を取得した。

平成26年度 教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1. 目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、理学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に貢献するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してほしい。 教職大学院においては、学修成果報告書を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般化への工夫を示してほしい。	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2. 点検・評価	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1. 目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2. 点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1. 目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2. 点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1. 目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2. 点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1. 目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2. 点検・評価	Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）
111	自然・生活系教育部	生活・健康系コース（技術・工業・情報）	畑中　伸夫	従前，私の場合には工学部の専門研究科におけるような修士研究のテーマであった．そして，修士論文をまとめる段階で，「おまけ」のように研究内容と関連付けて「教育実践への適用」として，苦し紛れの論述を行ってきたきらいがある．今後は，当初から修士論文のテーマ設定において，教育実践とどのように結びつけるかを念頭に置いて行う必要がある．しかし，学問体系の中で，同じ範疇に属するものは同じ原理に基づいて構成されているはずであり，その内容が初等教育で取り上げられるか，大学院の研究テーマになるかの違いに過ぎないことも多くある．時に，あまりにも奇異なテーマ設定も見聞するが，それが本学における常態であるわけではない．修士論文のテーマをあまりに狭く拘束することは，闊達な学問研究の根幹を損なうことになるのではないかと危惧する．	中間報告にも記したが，本年度は修士の配属がなく，修士課程の授業についても履修希望者がなく，修士の指導については不十分な年であった．しかし，他の研究室所属学生に対しても，ものづくりをはじめ関連する分野の指導・助言は行ってきた．	①本コースの特質である「ものづくり」の楽しさを担当する全ての科目で体得させる． ②4年生担任として，全員「正式採用」を実現した実績に基づき，2014年度4年生・修士学生の採用試験を援助する． ③学生と日常的な接触を意図的に追及する． ④第3学年の仮配属学生，卒業研究配属学生の指導を一層重視して行う．□	①ものづくりの楽しさを「機械の力学Ⅱ」「設計製図」「機械工学演習」「教科教育実践Ⅱ」等の授業を通して，学生に享受させている．学生には好評であり目標は達成しつつある． ②卒業研究や「3年生ゼミ」では，学内外を問わず，大型の機械加工を体験させ将来に備えさせている． ③教員採用試験に関しては，卒業研究配属学生が採用試験に失敗したため，大学院への進学を指導した． ③多くの学生と日常的に接している．仮配属学生，卒業研究配属学生とは，綿密な計画の元，研究を進めている．学会発表，査読付き論文の掲載に至っている．	①専門分野である「塑性加工」に関する研究を継続して進める．研究成果を，学会等で講演する． ②科学研究費による研究を推進し，成果を出す． ③教育大学の教員として，中学校：技術科教員，高等学校：工業科・情報科教員の具備すべき知識・技術について研究を進める．□	①学会発表は，軽金属学会中国四国支部大会講演会，日本産業技術教育学会四国支部講演会（3本：学生2本，自身：1本），で行った． ②学術誌への掲載は，軽金属学会8月号に1篇，軽金属溶接協会12月号に1編，軽金属学会3月号に1編の計3編が掲載された．65歳・退職最終年としては努力したと評価されると考える． ③来年度は特任教授として勤務するが，与えられた条件の中で研究を進め後進の指導にも当たりたい．	①全学的な学校改革の取り組みに積極的に参加する． ②大学院入試委員は交代したが，大学院受験生の募集強化に努力する． □	大学院生の募集に，2大学へ行った．	①附属学校教員（特に中学校技術科教員）と連携を深める．その中で，教材・教具の改善・開発を教育実践フィールド研究や卒業研究を通して取り組む． ②産学・産官学連携の研究・製品開発に取り組む．また，地域から依頼があれば「出前授業」等を積極的に実施する．"□	今年度は，附属学校が技術科の全国研究会の会場になったことから参加した．しかし，アイデアロボットコンテストには調整がうまくいかず，学生も参加させることができなかった．	
112	人文・社会系教育部	教職実践力高度化コース	西村　公孝	教職大学院の定員確保について ①教員養成特別コースの15名の定員確保のために東海地区の私立大学を中心に大学訪問を実施する。 ②教職実践力高度化コースの35名の定員確保のために徳島県教育委員会との連携を強化するとともに、各市町村教育委員会の担当者と連携を密にする。 ③教職大学院修了生の同窓会組織を充実させ、広報活動に力を入れる。 ④在学している院生に広報活動を依頼する。 ⑤全国学会等に参加した際に、広報活動を行う。 教職大学院学修成果報告書のテーマ・内容指導について ①社会科授業実践による改善、ユニバーサルデザインの考えの活用、キャリア教育カリキュラム開発など、学校教育の課題を取り入れたテーマについて、理論と実践の往還を図る指導を行う。	"1. 目標・計画 教職大学院の定員確保について ①教員養成特別コースの15名の定員確保のために東海地区の私立大学を中心に大学訪問を実施した。 ②教職実践力高度化コースの35名の定員確保のために徳島県教育委員会との連携を強化するための訪問を実施するとともに特別公開授業を実施し、各市町村教育委員会の担当者と連携も密にした。 ③教職大学院修了生の同窓会組織を充実させるために、同窓会の総会を実施し実践交流会に力を注ぎ、講演や会報などにより広報活動に力を入れた。 ④在学している院生に前期入試に向けての広報活動を依頼した。 ⑤全国学会等に参加した際に、広報活動を行った。 以上の①～⑤の努力の成果として50名の定員を確保した。 教職大学院学修成果報告書のテーマ・内容指導について ①社会科授業実践による改善、ユニバーサルデザインの考えの活用、キャリア教育カリキュラム開発など、学校教育の課題を取り入れたテーマについて、理論と実践の往還を図る指導を行った。□	①教育・学生支援としての授業、ゼミ、合同ゼミ等を計画的に行い、教育支援を充実させる。 ②茶花道部の顧問として部活動支援と大学祭における華展を支援する。 ③連合大学院博士課程に在学している二人の院生の教育・生活支援・指導を行う。	1. 目標・計画 ①教育・学生支援としての授業、ゼミ、合同ゼミ等を計画的に行い、教育支援を充実させた。 ②茶花道部の顧問として部活動支援を毎週木曜日に行い、秋の大学祭を成功させた。 ③連合大学院博士課程に在学している品川さんと保立さんについて、教育・生活支援を計画的に行った。その結果、品川さんは博士候補認定試験の審査を受けられることになった。□	①日本公民教育学会の会長として科学研究費補助課題について、今年度から三年間組織的に取り組む。 ②日本グローバル教育学会事務局長として、グローバル教育研究の充実を図る。 ③社会科・公民科教師のための政治教育の在り方について、研究課題を探究しその成果について学会に発表するとともに学会誌に投稿する。	"1. 目標・計画 ①日本公民教育学会の会長として、科学研究費補助課題について6月に研究会を実施し10月に2回目の研究会を行った。 ②日本グローバル教育学会事務局長として、第22回の全国大会を支援しグローバル教育研究の充実を図ってきた。また、日本学術会議の登録申請を行い、登録のメドがたった。 ③社会科・公民科教師のための政治教育の在り方について、総務省のホームページに明るい選挙推進のための開発教材を提供した。"□	①教職大学院の専攻長として定員確保に努めるとともに、組織の運営を円滑に行う。 ②連合大学院社会系教育講座の議長として、講座の運営に努力する。	"1. 目標・計画 ①教職大学院の専攻長として定員確保のために、教育委員会回りと長期在学制度の導入に向けて組織的な取組を行った。その結果定員の確保につながった。 ②連合大学院社会系教育講座の議長として、講座を運営し9月の会議でマル合教員2名、合教員4名の登録が承認された。本学の社会系ではマル合が1名、合が2名の登録になった。□	①徳島県明るい選挙推進委員会委員として社会と連携し社会教育に貢献する。 ②金融経済教育推進委員会の委員として、児童生徒の金融経済リテラシーを育成するカリキュラム開発及び授業実践を検証する。 ③免許更新講習の講座を八月に二回実施し、教員の資質向上に貢献する。 ④海外日本人学校との交流を図り、教職大学院及び学部二年次での実習の可能性を探る。 ⑤愛知県岡崎市の小学校二校（矢作南小学校、井田小学校）の研究支援を行い、その成果を秋に発表する。	"1. 目標・計画 ①徳島県明るい選挙推進委員会の委員として活動した。 ②金融経済教育推進委員会の委員として児童生徒の金融経済リテラシーを育成するカリキュラム開発を協同で手掛けた。また、教職大学院の授業において外部講師を招き教員のリテラシー向上に努めた。 ③免許更新講習を7月と8月に実施し、「子どもの社会形成力」育成に関するテーマにより60名の教員の資質・能力向上の講習を行った。 ④海外の日本人学校との交流を図るために、実態調査を計画したが、日程等が合わず来年度の目標とすることになった。 ⑤愛知県岡崎市の井田小学校の「ふるさと学習」及び矢作南小学校の「ユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業づくり」支援を行い、秋に成果を発表する会をもった。 その他として、新たに徳島県キャリア教育推進委員会の委員長として昨年度に策定した推進の指針を広めるための活動を行い、各校に計画書を提出するように県教育委員会を通してお願いした。□	
113	人文・社会系教育部	現代教育課題総合コース	藤村　裕一	○本年度から遠隔教育プログラム担当として，現職教員等，現在教育現場にある者の修士論文指導を行うため，彼らの問題意識と教育現場の今日的課題を踏まえ，就寝分のテーマ・内容を決定させる。また，これまでの文部科学省・総務省・経済産業省関連の各種教育に関する委員会の委員長・座長・主査等を務めた経験，教育委員会での指導主事の経験，教員経験等をも生かし，学術的にも価値がありながら，教育現場の改善にも資する「教育実践学」の立場に立った指導を行う。	○遠隔教育プログラムの正規履修生である4名の現職教員に対し，前期，『人間科学　研究法ハンドブック』をテキストとして，「学術研究と実践研究との違い」「研究の内容と各種研究方法，研究倫理，各種の留意点」などについて，後期はそれぞれの修士論文題目に合わせた専門的研究の内容と方法について指導してきた。 ○夏休み以降は，夏季スクーリング時，12月の「修士論文構想検討会」時，宮崎・福岡・北海道での集合型出前対面ゼミ，ゼミ生の希望により土日に大学へ来ての対面ゼミなど，休日出勤もしながら対面ゼミも数多く行い，遠隔ゼミと併せて，文部科学省・総務省・経済産業省関連の各種教育に関する委員会の委員長・座長・主査等を務めた経験，教育委員会での指導主事の経験，教員経験等をも生かし，どのようにしたら専門的に高度でありながら，学校の教育実践に貢献する学術研究になるのか等について濃密な指導を行い，大変好評であった。 また，業務と研究との両立について悩む院生もいたため，現職教員の経験を生かしてアドバイスしたり，主任メンターに協力を求めて，支援してもらうようにしたりして，その悩みの解消を図った。 ○冬季休業中に，全国の教育委員会で指導主事を務めたり，学校現場で主幹教諭・教頭などを務めたりして活躍している本学大学院修了生，文部科学省や総務諸運の委員会の委員・文部科学省中央研修講師などを務める東京からのゲストティーチャー5名に来学してもらって，ゼミ生4名が発表し指導を受ける「修士論文・構想検討会」を実施し，さらにインターネットを通じた継続指導もお願いして，学外の教育力を導入し高度に専門的な指導を受けるという遠隔教育ならではの良さを生かした教育実践学に関する大学院教育の質保証を行えるようにした。	○遠隔教育プログラム受講生に対し，主任メンターと連携しながらインターネットや電話等を通した研究指導を親身になって行う。 ○通学生の学生に対しては，従来通りパソコン等のICT利用について，不具合対応や研究のためのICT活用相談，生活相談を随時行う。	○遠隔教育プログラム受講生に対し，主任メンターと連携しながら遠隔ゼミ修了後に各大学院生の相談にのったり，メールや電話によって相談にのったりした。また，大学院生からの要望で，対面ゼミの機会も増やし，直接相談にのる機会も多くした。 ○通学生の学生から，個人所有のパソコン不具合の修理依頼に対応したり，院生室のパソコンを修理したりするなどしてICT関係の利用支援を行った。 ○通学生の学生からの研究相談や生活相談には，その都度応じ，学生たちも気軽に遠隔教育プログラム推進室に相談に来るようになった。	○専門である，校務の情報化・情報セキュリティ・授業の情報化・情報教育等の教育工学について，文部科学省・総務省・経済産業省・NHK及びその関連団体と連携して実証実験等も行いながら，研究を深化させ，その成果を学会・各種メディアで発表する。 ○学校における1人1台端末の利用・教育クラウドの利用等に関する実証実験を通した研究について，国際学会で発表する。 ○校務の情報化に関して，文部科学省・総務省・全国の教育委員会・民間企業等と共同研究を行い，高等学校の学習者情報（指導要録等）と健康情報（健康診断表等）の全国標準仕様を作成・公開する。	○今年度は校務の情報化と授業の情報化の連携の在り方について重点的に研究を進め，随時研究発表を行った。また，その研究を評価され，文部科学省と総務省の推薦により，校務系システムと学習系システムを連係動作可能とする国際標準仕様策定委員会の副座長に就任し，デジタル教科書・教材，教員・児童生徒・保護者認証，学習記録データ等の国際標準仕様策定について研究を進め，報道発表も行い，国際的にも注目されるようになった。 ○NHKとの共同研究により，ICTや学校放送番組，体験や活動などを，メディア特性に応じて効果的に組み合わせて活用する方法について研究し，藤村が監修してその成果をDVD化して，全国の小・中学校・教育委員会へ配布した。 ○文部科学省予算により，タブレットPCや電子黒板等のICTの効果的活用事例について研究し，優れた授業実践と効果的ICT活用のポイントに開設に関する解説を映像化して，全国の教育委員会・小・中学校へ配布した。 ○学校における1人1台端末利用・教育クラウド利用等に関して，15億円の予算を獲得して行ってきた実証実験「教育スクウェア×ICT」の研究成果について，研究報告書，普及促進のためのパンフレット等を作成し，国内外の学会等で発表した。 ○校務の情報化に関して，文部科学省・総務省，熊本県・世田谷区・三鷹市・倉敷市等々の教育委員会，NEC・富士通・NTTなどの民間企業等と共同研究を行い，高等学校の学習者情報（指導要録等）と健康情報（健康診断表等）の全国標準仕様の策定を進め，ほぼ完成に近づいたが，文部科学省の健康診断表全面改定作業が遅れており，健康診断表の標準仕様を平成26年度中に確定させることができなくなった。そこで，作業はほぼ終えているものの，正式な標準仕様公開は，文部科学省・総務省とも協議の上，平成28年度に公開することとした。	○遠隔教育プログラム推進室長として，本年度から正式発足する同プログラムを成功させるために，遠隔プログラム推進室員の力を最大限に引き出し，関係各課と協力しながら業務を推進する。 ○遠隔教育プログラムに関する広報と教育・研究内容の質保証のための具体的方策を積極的に行い，より本学大学院の定員充足に貢献できるよう努力する。	○遠隔教育プログラム推進室長として，各室員の力を最大限に引き出し，関係各課と協力しながら業務を推進できるよう努めて，無事遠隔養育プログラムを実施することができた。 ○実施開始後発生した諸課題に関しても，各室員・関係各課と協議しながら，受講生の利益を最優先して解決に当たるように努めた。 ○昨年度までの教育委員会対象の広報に加え，今年度は現職教員等に直接広報することを重視し，後援会や研修会などの場で積極的に広報を行った。その結果，全国各地及び中国・上海からも入学生を得，正規履修生8名・科目等履修生1名の合計9名と，昨年度の約2倍の学生を確保し，本学大学院の定員充足に寄与した。	○附属中学校の教育の情報化に関する助言を行い，概算要求や環境整備などについて支援する。 ○文部科学省，総務省，経済産業省，NHK及びその関連団体，全国各地の教育委員会などと連携し，教育の情報化や情報教育に関する研究成果を教育現場や社会に還元する。 ○被災後3年目を迎えた被災地のニーズを把握し，東日本大震災の復興支援活動を本学の学生・教職員等と連携して積極的に行う。	○附属中学校への最新鋭可動式電子黒板の導入に当たって，仕様策定委員会委員長，情報環境委員会委員を務めると共に，導入に当たっては民間予算も確保してよりよいものを導入できるようにした。また，タブレットPC導入や無線LANの導入と活用に関しても助言した。 ○文部科学省，総務省共管の「全国地域情報化推進協会（APPLIC）教育WG主査」として，我が国における校務の情報化の責任者を務め，総務大臣任命の「地域情報化アドバイザー」として全国各地の教育委員会に対して，研究成果を基にした最先端の教育の情報化の在り方を助言して，研究成果を教育現場や社会に還元できるようにした。 ○文部科学省，経済産業省共管の「日本教育情報化振興会」では，「ネット社会の歩き方講師育成セミナー検討委員会委員長」として，情報モラル教育指導資料の開発を行い，全国の教員や保護者を対象に，情報モラル教育の指導の在り方と具体的指導法について研修会を開催し，社会に還元できるようにした。 ○文部科学省・総務省の推薦で教育情報化の国際標準仕様策定のためのICT CONNECT 21幹事，同技術標準化WG副座長を務め，国，教育委員会，学校現場に最先端の研究成果を還元できるようにした。 ○NHKでは，番組企画委員として各種教育番組，デジタル教材の開発を行い，「NHKティーチャーズライブラリー編集委員会委員長」として，全国1000校以上の学校に対し教育番組のみならずプロジェクトX，NHKスペシャルなどの教育で利用できる一般番組もDVD化して貸し出し，教育の情実に貢献できるようにした。また，東日本大震災で教材が不足している陸前高田市及び周辺の教育委員会，石巻市・東松島市・女川町の教育委員会に対し，教材DVDを一括大量貸し出しを行って，教育活動の充実を支援した。 ○東松島市の仮設住宅自治会と連携し，被災者のニーズを把握しながら，現地を訪問し，支援活動を行い，その活動の様子は朝日小学生新聞等でも報道された。また，岩手県教育委員会などと連携し，鳴門教育大学・徳島大学の大学院生・学部生徒ともに防災教育・復興教育に関する教材開発も行い，その様子がNHKにより報道された。	遠隔教育プログラム推進室長として，数々の困難を乗り越えながら遠隔教育プログラムを実施すると共に，広報活動強化して国内外から予定受入数5名の2倍近い9名の入学者を得，平成27年度は正規履修生が昨年の3倍12名・科目等履修生1名の合計13名で遠隔教育プログラムを実施することができるようになった。 また，不測の事態にも室員と共に柔軟に対応しつつ，円滑な実施に努めてきた。 さらに新採用教員として，徳島県教育委員会との交流人事による教員1名も確保し，自由選択科目を解説すると共に，さらに充実した学生指導ができるようにした。
114	人文・社会系教育部	現代教育課題総合コース	太田　直也	言うまでもなく教育実践を支えているもののひとつは教師の人間性に裏打ちされた指導力である。学校・教育現場でのノウハウなど教育を短いスパンで考えた場合にも様々な研究テーマがあるだろうが、基本的には長期的スパンで教育を考える姿勢に基づく論文指導を行いたい。すなわち、小手先のテクニック等ではなく、論文執筆者が児童・生徒指導を、教師生活を続けてゆく間にも「学び続け」「考え続ける」教師となれるような、「人間」を意識したテーマ設定を促したい。その際に、教育の現状も考慮するようにさせることも忘れないつもりである。	「人間が教える事」、「人間が学ぶこと」が指導生のバックボーンとなるように指導したつもりである。結果として、教育実践にとっても極めて有意義な修士論文を提出することができたと自負している。	・授業においては質問、討議の時間は十分に設ける。 ・オフィスアワーにとらわれることなく、可能な限り学生・院生の相談に乗る。 ・サークル活動の支援をする。	・授業において討論の時間を十分に設けることができた。 ・学生、大学院生の相談には十分に乗ることができた。 ・ふれあいアクティビティ、軽音楽部を中心に学生のサークル活動に協力することができた。	・ディラン・トマスに関する学会発表を行う。 ・ディラン・トマスに関する著書を刊行する。 ・イギリスにおける文学教育について調査を行う。	・日本カムリ学会において「日本におけるディラン・トマスの受容」と題して研究発表を行った。 ・『海のように歌ったウェールズの詩人　ディラン・トマス』は刊行が遅れたが、4月下旬に彩流社から出版される。 ・2～3月にかけてイギリスにおける文学教育に関する資料を収集した。	・委員会等、与えられた任務を遂行する。特に学生相談員としての自らの役割についてはその重要性を十分に認識して仕事に臨みたい	・学生支援委員会（副委員長）、学術研究教育委員会の委員、学生相談員として可能な限煮の仕事をした。	・愛知県の複数の小学校と外国籍児童の問題について懇談をする機会を設けたい。 ・関西ウェールズ会の支援を行う。 ・震災被災者への支援は続けたい。	・愛知県の西保見小学校及び岩田小学校において外国籍児童の授業を参観し、様々な問題について懇談をする機会を設けた。 ・関西ウェールズ会の支援を行った。 ・震災被災者への支援は続けた。	主として学生支援委員会副委員長、学生会・院生会顧問、学生相談員として、学生のために可能な限りの時間を捧げたと自負している。
115	人文・社会系教育部	現代教育課題総合コース	谷村　千絵	修士論文の指導において留意していることは、学生の知見を広げること、深めること、そして、それを学生自身の行動に結びつけることの3点である。これらの留意点は、学生が自身の教育実践に対する何らかの関心や問題意識においてテーマを選出し、考察を進めることで、おのずと学生自身の教育実践に貢献するものとなると考えられる。そのための修論指導上の工夫として、①学生が教育実践にかかわる自身の関心や問題意識を語り、仲間や教員に聴いてもらえる場を保障すること（ゼミはもちろん、コース内の修士論文中間発表会をグループセッション形式で行うこともこのためである）、②問いかけによる対話を通し、実践的知識を産出するコミュニケーションが身に着くよう支援すること、③自分の考えを言語化して発表し、過誤や不足を補い、推敲するプロセスを保障することが挙げられる。	目標に挙げた留意点に基づき、①～③の指導を実践している。 修士論文を指導した4名の学生の論文は、いずれも優秀であると審査の結果、判定された。 うち3本は教育実践への示唆に富み、また残りの1本は、博士課程での研究へと発展する内容のものであった。	授業やゼミでは、学生同士のコミュニケーションが活発になるように支援するとともに、学生が興味を持ちやすい映画や絵本を題材として、主体的に考え、学び研究する面白さを伝えていきたい。 学生生活の支援においては、随時、生活相談、進路指導を含め、随時、対応する。 教育実践フィールド研究の授業では、一昨年度から引き続き、防災教育をテーマに取り組む。	授業やゼミでは、学生同士のコミュニケーションが活発になるように支援するとともに、学生が興味を持ちやすい映画や絵本を題材として、主体的に考え、学び研究する面白さを伝えていけるよう、実践している。また、特別ゼミとしてのワークショップも2回（6月と2月）開催した。 教材としては、新たに絵本を使った授業を考案し、実践した。 学生生活の支援においては、随時、生活相談、進路指導を含め、随時、対応した。 教育実践フィールド研究の授業では、一昨年度から引き続き、防災教育をテーマに取り組み、黒崎地区での液状化体験の授業は、初の試みとなり、新聞でも報道された。（朝日新聞、1月17日朝刊）	「教育実践フィールド研究」で行った防災教育の取り組みについて、学生へのアンケートならびにインタビュー調査のデータをもとに、授業実践研究をまとめる。 「現代教育人間論」で考察した、レヴィナスとエリクソンの子どもへのまなざしの違いについて、共同執筆の論文をまとめ、発表する。	「教育実践フィールド研究」で行った防災教育の取り組みについて、学生へのアンケートならびにインタビュー調査のデータをもとに、授業実践研究をまとめ、日本教育大学協会の研究誌に投稿し、受理された。 「現代教育人間論」で考察した、レヴィナスとエリクソンの子どもへのまなざしの違いについて、共同執筆の論文をまとめ、本学研究紀要に投稿した。 家政学とクリティカル・リアリズムについて、家政学会中国四国大会で共同発表し、論文を投稿した（現在、査読中）。 教育とクリティカル・リアリズムに関する研究に着手し、二国間交流プロジェクト（南アフリカ）ないし科研費申請を行った。	教育・研究評価委員会委員を務める。 コース会計を担当する。	教育・研究評価委員会委員を務めた。 コース会計を担当した。	鳴門市黒崎小学校と連携し、小学生を中心とした黒崎地区の防災教育について年間の取り組みを行う。 可能であれば、徳島大学とも連携する。	鳴門市黒崎小学校、黒崎幼稚園と連携し、黒崎地区の防災教育について年間の取り組みを行った。一部は新聞報道もされた（上述）。 徳島大学工学部の光原研究室とも、防災教育の実践を相互に参観し、連携のありようを検討している。 徳島県人権教育指導員として、「災害と人権」をテーマに、県内の学校等で6回の講演・研修を行った。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（１－１）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について １．目標・計画	（１－１）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について ２．点検・評価	（Ⅱ－１）教育・学生生活支援 １．目標・計画	（Ⅱ－１）教育・学生生活支援 ２．点検・評価	（Ⅱ－２）研究 １．目標・計画	（Ⅱ－２）研究 ２．点検・評価	（Ⅱ－３）大学運営 １．目標・計画	（Ⅱ－３）大学運営 ２．点検・評価	（Ⅱ－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 １．目標・計画	（Ⅱ－４）附属学校・社会との連携、国際交流等 ２．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
				【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、現学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、指導大学院においては、学部或果敢指導を学校教育の実践に具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般モニの工夫を示して頂いて。										
116	人文・社会系教育部	現代教育課題総合コース	小西　正雄	①コースは「つなげて考える」の合言葉のもと、教科等の既存の枠にとらわれない柔軟かつ機動的な教育・研究をめざしている。したがって現学部や文学部等の専門学部ではまず「非常にかもしれないであろう」などやってもらえるかどうか、という点で、ある意味ある。評価できれば、教員の専門分野を超えて指導することをにしるコースの使命と考えている。また「実践と研究」という言葉に、教育にかかわる諸問題を視野にとどめつつ、現実に関れることや現想に考えることのない研究をめざしているが学校教員養成プログラム受講学生が新しく新しい「問題を提起する」、コースでは当該学生たちの教育研究への意欲を喚起するため4月に開催する修士論文構想発表会を、従来の学術発表型からグループセッション方式より開自のプログラムにあらためている。その意義や成果の一端は日本教育大学協会研究大会（2013.10、札幌市）において報告している。修士論文の指導に関しては、以必コース相談けにのっとって行う。	今年度はせ引高学生3名全員が小学校教諭（兵庫県、大分県、北海道）として現ちつこになった。指導教員としてのより高い喜びである。3人の修士論文は「学校における新しい支援」の実践／非日常体験の大切さ」「絵本教育を通じて、一見小学校教員としてのこれからの実践には関係のない内容に思われがち、いずれも、学級経営、生徒指導面において、その基礎となるべき重要な課点を全に研究できた。この基礎的な知見をもとに、現場での多くの実践経験を加えて、人間力あふれる教師として成長していってほしいと念願している。	授業については、24年度から、これまで広領域コア科目として開設していた「現代の課題総と学校教育Ⅰ」を「領域等内容科目」に移行させることになったのにともない、同１と２との内容構成を根本的に変更し、さらに「現代総合学習論」「文化とコミュニケーション」の授業もあわせて４つの授業における最適な内容構成を試みた。「現代総合学習論」では、生涯学習の有成という観点から、アメリカその他で開発された新しい教材の紹介を試みた。学生支援については、修了年度の3人のゼミ生がいずれも採用試験に挑戦するとのことで、それを視野に入れた指導を考える。	「現代の課題総と学校教育Ⅰ」（教育共通科目）「ならびに「「総合」（領域等内容科目）は、今年度いずれも大学院の講義としてはほぼ適正な受講者数となったため、おおむね所期の目的を果たせられた様義開始となった。いずれの講義においても、新型試験を実施し、答案はもちろんのこと復数分析の正解例に加え、さらにそれを次の課題物形すべてのキキスどのにして直結し、ポートフォリオ評価やこあるべしとつ頑統行動とするとともに、評価の明朝性を確保した。「現代総合学習論」では目標にあるように海外の新しい教材を用いたが受講生の実大該新能力が想定以下であったため、次回からは検討を要する。	「文化とコミュニケーション」において再構的地元主義ないし自文化中心性用について取りとり、人口に偏りがちな多文化共生論やエ化相対主が必ずしも有効に機能しない現実を紹介した。このことは、大きな話題であるように思えて、じつは学級経営とい多数といての身近な課題に直結するものである。「みんなちがってみんないい」がしばしば学級現場の現場となることを現知させるにはどのような講義内容が必要か、さらに検討を進めたい。	これまでの経験を生かし、大学院定員確保のための広報活動を、尾崎副学長との協議を通じ、さらに現実の課題として展開する。	中間報告の通り、尾崎副学長と協議して、5月には長崎県立大学、長崎純心大学、活水女子大学、福岡大学、福岡工業大学、久留米大学、聖真学院大学、学習院大学、立正大学、青山学院大学、明治学院大学、法政大学、東京理科大学、中央大学、明星大学を訪問して、本大学大学院の広報活動を行った。中間報告は後は、大学院現代教育課題総合コースの中期合格者に対する「呼び小付け状」を作成した以外は、特別的なこともあり、特段の広報活動は行っていない。	11月に予定されているホルル弦楽器研究会の授業研究会にだけて必要な講師を行う。	12月にホルル・補習授業校向けの社会科年間指導計画「レインボープランの2015を完成させ試行した。校長からは非常な感謝の言葉があった。これを当けて1月にホルル・校長補習校を訪問し、授業の実際についてさらに学ぶとともに教員との個別面談も実施し、その成果をもとに現地教員と協働で報告書を作成中である。	コース長として数多の事務処理をこなした。とくに現実の課題となっている大学院定員確保については、コースの地のメンバーの奮闘もあり、定員を超える合格者を出せた。また教務委員会委員として、所管業務の処理にあたった。
117	人文・社会系教育部	現代教育課題総合コース	田村　和之	修士論文においては、単純な専門的知識を追求する研究ではなく、様々な観点から物事を教育・教育実践に結めて考え、研究するように指導する。また、異なる複数の分野に跨がって研究する学生が共に切さで研究内容を話し合い、質問し、あうことで、より視野の広い研究へと発展させ、教育実践に貢献出来る内容となるように指導して行く。	後期のゼミにおいては研究テーマの違う4人にそれぞれ自分の研究について、その進ごけった研究内容や今までの研究ではかったことを等を発表新しい文章として効率に出あがってもいい。全員で出ないの文章に構正やコメント等を加えしてもらい、全員でディスカッションを行った。その結果、学生個人や教員と各個人で相談するよりも幅の広い視点からの意見などを見えるようになり、非常に有意義な指導ができたと思われる。 また、同語動はテーマが違う学生にとっても、他人の文章のどのような箇所が弱いのか、どのように文章を書くべきなのかの勉強にもなった。	授業では学生への一方的な講義を行うのではなく、できるだけ学生主体の、学生同士が自由に討論出来る授業を行うように目指す。また、通常の教科授業では思いつかないような発想を取り入れ、学生の視野を広げる授業を行う。 また、学生生活の支援としてはリターンジ研究室となるように心がけ、自分のモとセローカル内の学生に関して、他コースを含む様々な学生の相談にのれるよう努める。	人間と環境 Ⅰの授業では前期の「人間と環境 Ⅰ」で作った授業を近森先生が実際にセサンゼーナで現地の先生に行ってもらったことを基に、どのように改善を加えるべきかを教員・学生を交えてディスカッションを行った。 また、あの環境をテーマにのように活動（アクティビティー）が有効かを考え、実際に授業内において全員で実践・改善を行った。	環境教育のみならず、国際教育（特に現地教育）等にも視点を合わせ、よりグローバルな視点から研究を進めていく。 また、現能力あれば国内と国外の教育を比較しながらより幅の広い研究を行えるよう広基盤を作る。	本年度、1年間を通じて研究を行って来た方オスの現科教育について、国内（国際学会に３２発表（含：単語・連名）、論文：紀要を６本（含：単語・連名）を執筆し、同校要に出来る研究を有効事中である。 そして環境教育については発展途上国から学ぶことが非常に多いことが分かり、日本が何を学べるかや後研究課題して作ない。 また、2014年2月にフィリピンで得たデータを基に12月のラオスの国際学会で１つの発表（連名）を行い、論文：紀要を３本執筆した。現在、2015年1月にフィリピンを訪問したことを基に他の関係者と共に複数の論文・学会発表を計画中である。	コース内での担当業務をはじめとして、大学での各種委員会でもその責務をしっかりと遂行する。 また、それ以外でも大学運営に関する仕事にも積極的に参加する。	大学院入試委員としてコースでの役割、また委員会内での責務を無事に果たすことができた。 また、コース内においても、担当している役割を滞り無く果たすことができた。 その他にも次世代科学・技術者養成講座の運営に当たってもしっかりと役割をこなすことができた。	附属学校間や県内外の市町村から要請があれば積極的に協力して行きたい。 また、国際交流面においても教員教育国際協力センターの研修やイベント等に積極的に参加する。 社会の連携では、地域の人達と勉強会で交流したり、地元の小中学生に向けた次世代科学者養成講座等に参加して理科教育（物理学・天文学）の楽しさを伝えて行く。	10月からの附属小学校にはじめとデザレター録新も頑張に続めり、2015年1月末にフィリピンに無事送りとどけることができた。また、同時にフィリピン滞在中に高度のビデオレター撮新し、コースに同様の学校１４年生の方達に見せることができた。 フィリピン附属の学校の子供たちを全員が非常に興味深くを感じ、実際に海外の子供たちも関がっているという実感を持つことができたとうれし、来年度も続けて行きたい、という意見も子供たちからもいう様に聞こえた。 次世代科学・技術者養成講座の私が担当する平面物理学講座（受講生４名）では３月をもって無事に１期生のマスターコースが修了した。 教育実践フィールド研究では日聖・あすたちゃんどの連携も無事終了した。 協力機関にとってもメリットが多く、来年度の教育実践フィールド研究も協力する方向で話を進めている。 10月に報告公民館で「宇宙おもしろ探検隊」の一環として大場系についての講座を地島町の子供たちに行った。 国際交流では場門教育大学で研修を行ったラオスやパプアニューギニアからのJICAの研修員と一緒に研究を行ったり、講師をしたりした。	
118	人文・社会系教育部	現代教育課題総合コース	金野　誠志	長期履修制度を利用して学校教員養成プログラムを受講する教育研究の方法論等にセッションが決定されたり学校の教員の意義」－昭和初期における保福森「三春愛子れ」を事例として「現代社会における スポーツの教育的意義」「流されるという生き方の再検討－自分探しからの非常を機で－」という タイトルに関していろいろ実践にから、教育研究の方法論等のレディスカの差が大きいと考えられるため、図書館の活用、視聴図書の紹介、又献の収集や整理、論文の書き方等、1つずつ確認しながら支援を行う。 3学生のニーズに対応できるように、オフィスアワーだけに限定せず、HPでスケジュールを公開して支援可能な時間を示しておく。	1）ワークショップ形式を前面に出すことにより、主体的に学ぶことができる授業が構成できた。 2）現職教員の院生がいることを大いに活用し、効果的な教育・学生支援ができた。ゼミでは、後期はテーマの個人発表を前面に出しつつ、個々の院生のニーズに適応することができた。 3）HPでのスケジュールを開示するとともに、院生にはメール等で頻繁に連絡を取り合い、対面での直接指導とメールを介しての指導を組み合わせて、密な指導ができた。	1）新たに日本国際理解教育学会、日本グローバル教育学会、日本道徳性発達実践学会に加入し、「地球市民/自己認識」「価値・文化」「コミュニケーション」の領域性についての研究を進める。 2）研究テーマに沿い学会発表を行う。 3）研究テーマに沿い学会誌に投稿する。	1）日本国際理解教育学会、日本グローバル教育学会、日本道徳性発達実践学会に加入し、「地球市民/自己認識」「価値・文化」「コミュニケーション」の領域性についての研究を進める。 2）4月に本国際理解教育学会で「地球市民になるための愛保条件－他者との関係性に着目して」、日本国際文化学会で「地球市民の自己認識－その可能性をめぐって」を題目とした発表を、12月には、日本道徳性発達実践学会で「地球市民の育成と国際理解」を題目とした発表を合計3回行った。 3）国際異文化学会の学会誌「異文化研究」に、「地球市民としての自己認識－その可能性をめぐって－」、グローバル教育学会の学会誌「グローバル教育」vol12に、「ユスモ的ジンムシィディンシップの育成のために－相互和強論からの考察－」が「計2本掲載された。また、日本文教出版の「どうとのひろば」No.132に「自ら生見つめ、自らに問いかけるために」が発頭論文として掲載された。場門社会科教育学会に、メディアリ テラシーの育成に関する論文を投稿中である。	担当する委員会で職務を果たす。	所属している研職委員会、附属学校委員会の委員会には必ず出席し、その際の内容は速やかに教育コースに伝えるなどして、各委員会での職務を堅実に果たしてた。	1）教育・研究評価委員会の委員を担当した。 2）修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会の委員を担当した（Ⅱ－２－１と関連）。	1）初等中等教科教育実践センター附属小学校・鳥谷町子育協、附属中学校・長谷美奈教育協と連携し、教育研究の事前指導を行った。（Ⅱ－１－２と関連） 2）四国英語教育学会の事務局長・徳島県支部理事を担当した。全国英語教育学会徳島研究大会（2014年8月9-10日開催）の事務局長を担当し、研究大会の準備・運営を行った。 3）教育支援講師・アドバイザー派遣制度等を通して長生小学校において教室英語授業に関する校内研修会の講師を担当した（10月30日）。 （未本学関係の公開講座（8月20日）と免許更新講習（8月20日）において「教室英語（Classroom English）の使用について」と題し、講義・演習を担当した。		
120	人文・社会系教育部	英語系コース（英語）	山森　直人	1）教育現場の問題を対象とした修士論文指導を行う。 2）修士論文の作成を通じて、教育研究における理論と実践との関係について学ニ考えさせる指導を行う。	1）指導学生（M1生7名、M2生1名、L3生4名）に対して英語教育の問題を扱った研究指導を行った。 2）文献研究と英語教育の状況・実態把握や実践を関連づけ、教育実践における教育理論の意義を考えさせる研究指導を行った。	1）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の英語力向上につなめる、学生に英語科目試験の受験を進めるとともに、そのための学習環境を整備し、試験対策に協力・支援していく。 2）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の教育実習に事前事後を必ず指導的に関わる。 3）ゼミから英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生に積極的に声をかけ、学生生活、勉学、進路などに関して相談しやすい雰囲気をつくる。 4）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の就職支援に積極的に取り組む。	1）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の英語力向上をねらい、TOEIC・IPテスト（5月31日）を実施した。また、同テスト の事前対策英語勉強会（10日間）を開催し、テスト対策を協力・支援した。 2）「初等中等教科教育実践II」を通じて英語科教育コースの学生の教育実習事前指導を行った。特に、本学附属小学校・鳥谷特子教諭および附属中学校英語科・福吉美咲教諭と連携し、同授業内で模擬実習（附属学校において授業を実施）を行った（Ⅱ－４－１と関連）。 3）ゼミごとから英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生に対し積極的に声をかけ生活了後後を設け、学生生活、勉学、進路などに関して相談しやすい雰囲気をつくるようにがけた。 4）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の就職支援を積極的に行った。具体的には、進路や留学に関する相談にのったり、教員採用試験の受験対策・準備を促した。指導担当の大学院生2名が小学校教諭として採用された。	1）教員養成・現職教育に関する実践的な研究を推進する。 2）学校現場の現実や問題を踏まえた教育研究を進める。									
121	人文・社会系教育部	英語系コース（英語）	伊東　治己	自分自身教科教育学（英語教育学）を専門としているので、これまでの修士論文の指導においては、学校での教育実践との関がりを意識したテーマ設定を指導学生に促し、指導学生もそれに答えて、教育実践との関がりの深い修士論文を仕上げた。この方針は、今後も堅持する予定で、かつ、この基本学問において太新し感覚された学位論文審査基準（修士課程）を重視し、「現代の教育的課題を設定え、「学位論文」「研究成果」が学術的な意義をもち、教育実践につながる教育的・社会的な貢献をなしうるものになるよう、最善の努力をするつもりである。	本年度は3名の院生の修士論文の指導を担当したが、いずれの修士論文も学校での実践教育の課題との関係に向けた実践を視野に入れたもので、①「A Study on Teachers' Attitude towards Teaching English at Primary School in Nepal and Japan.」、②「Suggestions for the elementary and junior high school English curriculum, considering the link between elementary and junior high schools.」、③「A Study on Optimal Support for Successful Understanding of English Sentence Structures by Junior High School Students：Applying the Concept of Chunks」、学長の重点目標を十分達成できたと思われる。	1）オフィスアワーやゼミ等をフルに活用し、個々の学生の能力や希望に応じた学習支援を行う。 2）海外研修や留学に関する相談に随時応じて、学生による国際交流活動を促進する。 3）英語コミュニケーションV（学生海外派遣プログラム）を実行し、本学学生に海外生活体験の機会を与えた。本年度は13名の学部生・大学院生が参加した。なお、本年度のけ参加いは英語コースの修正表教授が担当した。 4）留学生が本学での留学生活をスムーズに行えるよう、学業面・生活面で支援する。	1）オフィスアワーやゼミ等をフルに活用し、個々の学生の能力や希望に応じた学習支援を行った。 2）海外研修や留学に関する相談に随時応じて、学生による国際交流活動を促進し、現在、自身のゼミを（大学院2年生）が未国の大学院交流協定校に留学中である。 3）英語コミュニケーションV（学生海外派遣プログラム）を実行し、本学学生に海外生活体験の機会を与えた。本年度は13名の学部生・大学院生が参加した。なお、本年度のけ参加いは英語コースの修正表教授が担当した。 4）留学生が本学での留学生活をスムーズに行えるよう、学業面・生活面で支援した。本年度はネパールからの私費外国人留学生を1名、インドネシアからの教員研修留学生を1名、指導した。私費外国人留学生は修士論文を仕上げ、教員研修留学生は研修報告書を仕上げ、所定の目標を達成できた。	1）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、学会で口頭発表をする。 2）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、学会誌に投稿する。 3）現在特に力を入れているフィンランドの英語教育に関する研究をさらに進める。	1）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、特為大学で開催された関東甲信越英語教育学会第30回千葉研究大会学会、学習院大学で開催された日本英語教育学会第大会、東京国際大学で開催された第12回英語教育改革フォーラムで口頭発表を行った。 2）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、日本教科教育学会と四国英語教育学会の学会誌に投稿し、掲載が認められた。 3）現在特に力を入れているフィンランドの英語教育に関する研究をさらに進めた。 本年度は、フィンランドでの小学校英語担当教員の養成に焦点を当てた基研究（CD）の初年度にあたり、フィンランドを訪問し、特に小学校での英語を担当できる教員の育成方法について、現地調査を行い、来年度以降研究を深めるための基礎資料の収集に当たった。	コース内での担当業務をはじめとして、大学での各種委員会でもその責務をしっかりと遂行する。 また、それ以外でも大学運営に関する仕事にも積極的に参加する。	1）小学校英語教育センター所長として、大学の運営に参画するとともに、同センターの存在感のさらなる強化を図るため、小学校英語担当教員を対象としたワークショップとシンポジウムに参画した。 2）大学院入試委員会、および就職委員会の委員として、本学の教育活動のさらなる発展に貢献した。特に入試委員会委員として、下関市立大学と東京国際大学を訪問し、同大学大学生を対象にした大学院定員充足に向けての宣伝活動に従事した。 3）適合大学院英語系教育講座の主担当教員として、同講座の運営に参画するとともに、博士論文の副指導教員の職責を通じて同講座における本学の存在感を強めることに努力した。	附属学校間や県内外の市町村から要請があれば積極的に協力して行きたい。 また、国際交流面においても教員教育国際協力センターの研修やイベント等に積極的に参加する。 社会の連携では、地域の人達と勉強会で交流したり、地元の小中学生に向けた次世代科学者養成講座等に参加して理科教育（物理学・天文学）の楽しさを伝えて行く。	1）附属学校での研究会に積極的に参加するとともに、附属中学校での研究大会での指導助言者）、同校教員と連携し英語教育分野について協同研究を進めるとともに、附属学校での国際交流にも貢献する。（Ⅱ－４－１と関連） 2）教育委員会等から委嘱された委員会活動や講演活動、ならびに本学主催の公開講座・免許更新講習や教育支援講師・アドバイザー等制度などを通じて、大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会貢献に努める。（社会連携） 3）国際交流協定校をはじめとした海外の教育・研究機関との協力事業に貢献する。（国際交流）	1）附属学校での研究会に積極的に参加するとともに、附属中学校での研究大会での指導助言者）、同校教員と連携し英語教育分野について協同研究を進めるとともに、附属学校での国際交流にも貢献する。（Ⅱ－４－１と関連） 2）教育委員会等から委嘱された委員会活動や講演活動、ならびに本学主催の公開講座・免許更新講習や教育支援講師・アドバイザー等制度などを通じて、大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会貢献に努める。（社会連携） 3）国際交流協定校をはじめとした海外の教育・研究機関との協力事業に貢献する。（国際交流）	米国の大学間交流協定校へのゼミ生の留学支援、私費外国人留学生の指導、教員研修留学生の指導、タンペレ大学との大学間交流協定の締結への尽力、本学生を対象としたオーストラリア英語研修の実施やオーストラリアのFalth Secondary SchoolへのII本語TAの派遣への関与など、特に本学の国際交流の推進に寄与した。その貢献を認められ、本年度の年報賞を受賞した。
122	人文・社会系教育部	英語系コース（英語）	山森　直人	①教育現場の問題を対象とした修士論文指導を行う。 ②修士論文の作成を通じて、教育研究における理論と実践との関係について学ニ考えさせる指導を行う。	①指導学生（M1生7名、M2生1名、L3生4名）に対して英語教育の問題を扱った研究指導を行った。 ②文献研究と英語教育の状況・実態把握や実践を関連づけ、教育実践における教育理論の意義を考えさせる研究指導を行った。	1）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の英語力向上とつなめる、学生に英語科目試験の受験を進めるとともに、そのための学習環境を整備し、試験対策に協力・支援していく。 2）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の教育実習に事前事後を必ず指導的に関わる。 3）ゼミごとから英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生に積極的に声をかけ、学生生活、勉学、進路などに関して相談しやすい雰囲気をつくる。 4）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の就職支援に積極的に取り組む。	1）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の英語力向上をねらい、TOEIC・IPテスト（5月31日）を実施した。また、同テスト の事前対策英語勉強会（10日間）を開催し、テスト対策を協力・支援した。 2）「初等中等教科教育実践II」を通じて英語科教育コースの学生の教育実習事前指導を行った。特に、本学附属小学校・鳥谷特子教諭および附属中学校英語科・福吉美咲教諭と連携し、同授業内で模擬実習（附属学校において授業を実施）を行った（Ⅱ－４－１と関連）。 3）ゼミごとから英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生に対し積極的に声をかけ生活了後後を設け、学生生活、勉学、進路などに関して相談しやすい雰囲気をつくるようにがけた。 4）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の就職支援を積極的に行った。具体的には、進路や留学に関する相談にのったり、教員採用試験の受験対策・準備を促した。指導担当の大学院生2名が小学校教諭として採用された。	①教員養成・現職教育（特に英語教師の授業実践力や教室英語力の育成）に関する新しい研究テーマを模索した。また、本学の修士課程教員養成カリキュラムの研究開発委員会に携わり、将来の修士課程の教員養成カリキュラムについて検討した（Ⅱ－３－２と関連）。2014年10月に英語科教育に関する概論書「教師教育講座 第14巻 中等英語教育」（定塚清治編著、協同出版）が出版された（執筆担当：第7章第1節「英語教師の資質と能力」）。 ②2014年度の大学院授業「教育実践フィールド研究」において大学院生とともに中学校を対象とする英語コミュニケーション活動に関する実践的研究を行った。また、2013年度末に投稿した2013年度の教育実践フィールド研究の実践報告「中学校英語科授業のプラス1時間にどのように対応するか－英語スキルアップトレーニング法の開発－（その4）」が「場門教育大学授業実践研究」（第13号）に掲載された。									
123	人文・社会系教育部	英語系コース（英語）	山森　直人	1）教育現場の問題を対象とした修士論文指導を行う。 2）修士論文の作成を通じて、教育研究における理論と実践との関係について学ニ考えさせる指導を行う。	1）指導学生（M1生7名、M2生1名、L3生4名）に対して英語教育の問題を扱った研究指導を行った。 2）文献研究と英語教育の状況・実態把握や実践を関連づけ、教育実践における教育理論の意義を考えさせる研究指導を行った。	1）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の英語力向上につなめる、学生に英語科目試験の受験を進めるとともに、そのための学習環境を整備し、試験対策に協力・支援していく。 2）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の教育実習に事前事後を必ず指導的に関わる。 3）ゼミごとから英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生に積極的に声をかけ、学生生活、勉学、進路などに関して相談しやすい雰囲気をつくる。 4）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の就職支援に積極的に取り組む。	1）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の英語力向上をねらい、TOEIC・IPテスト（5月31日）を実施した。また、同テスト の事前対策英語勉強会（10日間）を開催し、テスト対策を協力・支援した。 2）「初等中等教科教育実践II」を通じて英語科教育コースの学生の教育実習事前指導を行った。特に、本学附属小学校・鳥谷特子教諭および附属中学校英語科・福吉美咲教諭と連携し、同授業内で模擬実習（附属学校において授業を実施）を行った（Ⅱ－４－１と関連）。 3）ゼミごとから英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生に対し積極的に声をかけ生活了後後を設け、学生生活、勉学、進路などに関して相談しやすい雰囲気をつくるようにがけた。 4）英語科教育コース/言語系コース（英語）の学生の就職支援を積極的に行った。具体的には、進路や留学に関する相談にのったり、教員採用試験の受験対策・準備を促した。指導担当の大学院生2名が小学校教諭として採用された。	1）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、学会で口頭発表をする。 2）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、学会誌に投稿する。 3）現在特に力を入れているフィンランドの英語教育に関する研究をさらに進める。	1）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、特為大学で開催された関東甲信越英語教育学会第30回千葉研究大会学会、学習院大学で開催された日本英語教育学会第大会、東京国際大学で開催された第12回英語教育改革フォーラムで口頭発表を行った。 2）従来からの研究テーマ（英語教育学）をまとめ、日本教科教育学会と四国英語教育学会の学会誌に投稿し、掲載が認められた。 3）現在特に力を入れているフィンランドの英語教育に関する研究をさらに進めた。 本年度は、フィンランドでの小学校英語担当教員の養成に焦点を当てた基研究（CD）の初年度にあたり、フィンランドを訪問し、特に小学校での英語を担当できる教員の育成方法について、現地調査を行い、来年度以降研究を深めるための基礎資料の収集に当たった。	コース内での担当業務をはじめとして、大学での各種委員会でもその責務をしっかりと遂行する。 また、それ以外でも大学運営に関する仕事にも積極的に参加する。	1）小学校英語教育センター所長として、大学の運営に参画するとともに、同センターの存在感のさらなる強化を図るため、小学校英語担当教員を対象としたワークショップとシンポジウムに参画した。 2）大学院入試委員会、および就職委員会の委員として、本学の教育活動のさらなる発展に貢献した。特に入試委員会委員として、下関市立大学と東京国際大学を訪問し、同大学大学生を対象にした大学院定員充足に向けての宣伝活動に従事した。 3）適合大学院英語系教育講座の主担当教員として、同講座の運営に参画するとともに、博士論文の副指導教員の職責を通じて同講座における本学の存在感を強めることに努力した。	附属学校間や県内外の市町村から要請があれば積極的に協力して行きたい。 また、国際交流面においても教員教育国際協力センターの研修やイベント等に積極的に参加する。 社会の連携では、地域の人達と勉強会で交流したり、地元の小中学生に向けた次世代科学者養成講座等に参加して理科教育（物理学・天文学）の楽しさを伝えて行く。	1）附属学校での研究会に積極的に参加するとともに、附属中学校での研究大会での指導助言者）、同校教員と連携し英語教育分野について協同研究を進めるとともに、附属学校での国際交流にも貢献する。（Ⅱ－４－１と関連） 2）教育委員会等から委嘱された委員会活動や講演活動、ならびに本学主催の公開講座・免許更新講習や教育支援講師・アドバイザー等制度などを通じて、大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会貢献に努める。（社会連携） 3）国際交流協定校をはじめとした海外の教育・研究機関との協力事業に貢献する。（国際交流）	連合大学院の平成26年度学生参加プロジェクトのコーディネーター教員を担当した。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
121	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	Gerard Marcheseau	In my position as a native speaker of English, I am not directly supervising specific students, but will help all students with their research interests. Specifically, I am involved with Fuzoku elementary school and in that capacity, I will help students doing research with the elementary school in many ways. as I have last year, such as accompanying students on visits to the school, assisting students with material development and so on. I will work specifically closely with Hatae-sensei's 3ro-sense's and Yamammori-sense's students in the English Course in this regard.	I assisted students with their research interests in my capacity as a native-speaker of English. I also helped students with research at Fuzoku elementary school, as I have been participating in lessons and supervising there once a week. I assisted with material development and so on at the elementary school, working closely with Hatae-sensei and 3ro-sensei.	I am in charge of the ESS club I will be in charge of TOEFL training I help students to develop their English skills in extra-curricular volunteer sessions("Gerry's Session")	I was in charge of the ESS club. We planned various events such as a barbeque with Western Carolina University students and a Christmas session for elementary school students. I was in charge of TOEFL training. I conducted volunteer conversation sessions ('Gerry's Session') once a week in the evenings I helped with proof-reading students' thesis	Since MEXT is looking toward making English a subject at elementary school, I will be doing a lot of research on classroom practice and students' skill-based development. Specific areas of interest are: Phonics introduction Team teaching Content-Based Instruction	I conducted research on phonics at elementary schools and worked with Hatae-sensei in research about phonics with the students of Fuzoku elementary school has participants. I also have been conducting research on ALTs and elementary school English and presented my research at a conference in Singapore as well as the English Course. I also presented research in Content-based language teaching at a Shikoku regional conference and published writtn thesis in proceedings of the Singapore conference.	I will carry out my roles as an English 'Course' faculty member, including: TOEFL 担当 Recreation leader I am also a member of the Center for English education in elementary school and will carry out related duties, including: Editing the yearly research bulletin Attending meetings and other functions I will also take an active role assisting other professors in charge of the foreign part-time teachers.	My duties have been: TOEFL 担当 English Course　Recreation leader I am also a member of the Center for English education in elementary school and carried out related duties, including: Editing the yearly research bulletin Attending meetings and other functions I also took an active role assisting other professors in charge of the foreign part-time teachers.	We are starting a large project at Fuzoku Elmenary school and I will be helping to facilitate that project. I will also be involved in team-teaching at the elementary school as well as assisting with research, through the elementary school.	We have been developing curriculum at Fuzoku Elementary school which I have been actively involved in I have also conducted lessons once a week at the elementary school I coordinated and conducted workshops for teachers and supporters in the community at Fuzoku elementary school in the evenings I have helped to foster ties between Naruto University of Education and Western Carolina University. I visited a Japanese school in New Jersey in September as well.	I have not been involved in integrated studies much but have assisted international students with their daily lives in Japan.
122	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	秋津　裕子	英語コースの学問全ほぼ全ての英語教育に興味を持って、英語教育専門の先生がなぜ？つく、私や担当先生のせいにく学生は文学に興味があるから？、人数が極少少なくが、ぜ生が学ったことは彼らの言葉に合わせたぜ生をしている。ごちらから決して文学を押しつけてるわけではない状況の中で、「修士論文は文学部の専門内容ではなく学校の教育実践に貢献するものとい論に否定されるのは非常に新しい。 文学は、なぜ各種人物がここでこう言っているのか、こう考えているのか、ということを背景を深み取りながら考える人間についての学問である。それは教師として様々の学生に向き合うさに必要な力である。個人的には、文学研究のテーマそのものよりも、文学研究を通じて学生が身につけている多角的な視点や洞察力が、将来的に学校教育の実践に活かされていくことを願わない。 そう述べたとて、もしこれから演劇と教育の関連（演劇が教育の中で果たす役割）などに興味を持つ学生が出てきた場合は、テーマそのものが教育実践に繋がるよう出来ての指導ができると思う。しかしこちらとしては、そういう選択肢も用意しつつ、学生の興味関心を無理に変更させるようにとはしないつもりである。	中間報告で書いたことは向こ付け加えることとしては、ぜ生ては英文を丁寧に読み、また英作文の練習をするなど、修士論文を書くという目標にとどまず、将来の英語教員として確かな実践力をつけるべく指導をしている。	○ぜ生の卒業研究を指導し、ある程度の論文がかけるようにする。 ○ぜ指導では、採用試験対策も視野に入れて、英作文の指導なども平行して行う。 ○ぜ生（修4年生）の中に、卒業が危ない単位状況の学生がいるので、学習状況を把握し、支援する。 ○それぞれの授業内容をより充実したものにしつつ、英語コースの学生や授業で接する他コースの学生たちとコミュニケーションを図り、必要な学習支援を行う。	○修士、学部のぜ生とともに、最低でも週1回は指導をし、学期4年生は無事に卒論を書き上げた。 ○ぜ生では英作文の指導や英語論文を読む指導を行った。学期のぜ生の3ちへ人は大学院進学志望なので、引き続き英語力そのものの指導も続けた必要がある。 ○卒業の危ない学生について、論文指導を含めてこちらからすべき指導は全て行った。 ○授業はいろも全力で行ったが、反省点があるときは次年度に役立てるべくノートに書き留め、また多くはっていた授業もマンネリ化しないように新たな案を練っている。 ○今年度後期の大学院の授業では、初めて戦争と言明ふいうテーマに取り組んだが、他コースの学生を含めた受講生の協力もあり、自分でも大変楽見した。学生達と良いコミュニケーションをとりながら行えた授業だったと思う。	○平成23年度から科研費の研究金で行っているエリザベス朝の演劇ネットワークに関する研究を引き続き行う。 ○上記の科研費が最終年度となるにあたり、著書の出版に向けて原稿を執筆する。 ○5月の日本英文学会全国大会での発表が決まっているので、準備をして発表を行う。 ○10月の日本英文学会九州支部大会でのシンポジウム登壇が決まっているので、準備して発表をする。 ○徳笑高近代初期演劇研究会は、今年度すでに2015年3月も含めて5回研究発表をこのへ、科研費に関する調査研究を進めている。	○エリザベス朝研究会でもメンっている科研費を使い、海外出張を含めて有効に研究ができた。 ○上記の科研費のメンバーで出す著書は出版助成を申請中で、2015年度中の2016年1月に出る見込み。 ○5月の全国大会の発表は好評だった。 ○10月の九州支部大会でのシンポジウムも登壇が決まっているので、準備して発表をする。 ○徳笑高近代初期演劇研究会は、今年度すでに2015年3月も含めて5回研究発表をこのへ、科研費に関する調査研究を進めている。	○英語コースの中で諸先生方と協力し合い、コースに貢献する。 ○担当の委員会や専門部会の仕事を果々と行う。特に初めて入試委員になるのでいろいろ学びながら仕事をする。	○英語コースの中で諸先生方と協力し合い、コースに貢献する。 ○担当の委員会や専門部会の仕事を果々と行う。特に初めて入試委員になるのでいろいろ学びながら仕事をする。	○教師更新講習で、教育現場で活かしてもらうような講習をする。 ○教育支援アドバイザー制度に登録し、要請があれば地域の中高生を対象に講義をする。（2015年度より初めて呼ばれるようになった。） ○留学生の積極的に関わり、必要な支援を行う。 ○附属学校での3ヒ実習や、教育実習支学を通して大学と附属校園の連携を図る。 ○地域の公開講座を行う（毎年、松茂町立図書館の大学連携講座を行っていて、今年も12月に予定）。	○教師更新講習で、演劇と教育現場に活かすアイデアについて講習した。 ○教育支援アドバイザー制度に登録し、要請があれば地域の中高生を対象に講義をする。（2015年度より初めて呼ばれるようになった。） ○留学生の積極的に関わり、必要な支援を行う。 ○附属学校での3ヒ実習や、教育実習支学を通して大学と附属校園の連携を図る。 ○地域の公開講座を行う（毎年、松茂町立図書館の大学連携講座を行っていて、今年も12月に予定）。 ○12月に松茂町立図書館で公開講座を行った。　松茂町立図書館の公開講座は今年で5回目で、毎年話題を変えて講義をさせて頂いている。今年も大所帯の中、たくさんの方が関心に来て下さった。	
123	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	飯田　一平	自分は自身、文学研究科出身者であるので、修士論文指導において教育実践につなげたい論文がふささ方法のない。しかし、学校教育であれていふ技術力、教考力、表現力の養成を目指文学作品をテキストとして指導することは教育実践的観点から重味のあることと思われた。本年度の目標として、英語リーディングにおいて、修士論文では、学生同士集なる英語の特徴の解明に取り組みながら、ぜひ自のやすそれぞれの成果を発表しあうことで、自分のテーマ以外に関しても議論を行えるようエ夫している。 英語という言語の特徴を研究することは、それがどのような特徴であっても、将来の英語教育（校種も関係なく）に貢献につながるものであるため、英語への興味を深めること、多角的な観点から英語を分析できる力を持てることを目指したいとぜ行う。	中間報告のおけりである、いわゆる内容学が確立していない中で、アメリカ文学研究を英語教育に応用あるいは温次することに対に苦闘である。それでも、英語ウ2ストの読み（リーディング）および異文化理解（特に人種マイノリティ文学研究）に結ぶ付いた修士論文指導を実施し、結果的にすべてた修士論文3本に結実したことは良足している。しかし、内容学の介の確立と同時に、アメリカ文学研究を英語教育実践に連携させることは今後の大きな課題である課題している。その分、本年度の評価については、当初目標は現況に達成できたが、厳密には内容学としての貢献な状況を実現できていないというもので分ではなかったと評価せざるを得ない。	本学学生の現点である基礎学力不足を補う授業を心掛け、特にぜミでリメディア教育を実施する。 ○学員が定める重点目標と重複するが、アメリカ文学研究当者として、文学教材を用いて読解力・思考力・表現力の養成を実践した授業をこなする。 ○学生生活支援としては、ぜミを的指導において生活全般にわたる目配りをする。学期1年生のクラス担任として、大学生活への慣応を支援する。コース全体として、留学や就職の支援、英語検定試験の受験支援をする。	○ぜミのリメディア教育については通1回、ぜミ生全員（7名、うち1名は作況のため文理に実施）で効果を上げていると評価する。あリメディア教育は担当教諭個人支援のインジビュー全受け、その記事は「教育2014　大学が支える下　学び直し新たな価値」（7月21日朝刊）として写真付きで掲載された。 ○現指導言語のキーワード「言語力」を意識して、文学研究の知識を之う読み表現するかを意識した授業は全講生から好評あり、目的を少り達成していると判断する。 ○学生生活支援としては学期1年生のクラス担任として必要な指導を実施した。また、学生が相談しやすい関係を作り、教人の学生から学習、留学、同好会設立、プライベートの問題など、相談を受け対応した。ぜミ生一の指導としては、学業以外に就職、進学などの相談を受け、これらに対応した。大学院ぜミ生3名中、1名は育児書などのため主解に、1名は他大学博士課程進学検討中、1名は博士1年高校英語教員内定、学部ぜミ生2名のうち、1名は食品系中学英語教員臨時採用時ち、1名は高原県小学校教員内定（本学修士課程進学決定）という結果である。	○日本アメリカ文学会の天会運営委員として大会の実施に向けて尽力する。 ○日本ヘミングウェイ協会評議員・事務局長として協会の運営に尽力する。 ○日本英文学会中国四国支部理事として、同学会の運営に尽力する。 ○中四国アメリカ文学会の評議員として、同学会の運営に尽力する。 ○アジア系アメリカ文学研究会の役員として、同研究会の運営に尽力する。 ○現在進行中のヘミングウェイ伝記（仮称）の執筆担当分野を完成させ、同書の出版にこぎつける。 ○ハワイ日系人の歴史と文学を新研究分野として、研究に着手する。	○日本アメリカ文学会天会運営委員を務め、同学会の天会運営に携わった。再来年度からシンポジウム担当も決定している。 ○日本ヘミングウェイ協会評議員・事務局長として協会の運営に尽力する。 ○日本英文学会中国四国支部理事として、同学会の運営に尽力する。 ○日本英文学会中国四国支部理事として、同学会の運営を担った。会員の選挙により、次期も理事に選出された。 ○中四国アメリカ文学会の評議員として、同学会の運営に携わった。また、来年度天会のシンポジウムを担当することも決定している。 ○アジア系アメリカ文学研究会の役員として、同研究会の運営に携わった。 ○現在進行中のヘミングウェイ伝記（仮称）の執筆担当分野を完成させた。出版は遅れているが、来年中には出版の予定。 ○ハワイ日系人の歴史と文学を新研究分野として、ようやく研究に着手した。しかし、予定していたハワイの現地リサーチは実現できなかった。	○コース長としての職責を果たす。 ○大学改革検討委員会の委員として尽力する。 ○大学院教務委員等の学内各種委員会委員として尽力する。 ○学部1年生のクラス担任として、クラスの指導助言にあたる。	○コース長として大学院改革の重責を担う。責任をもって職責を遂行した。 ○大学院改革検討委員会委員および修士課程専門部会委員として、特に小学校英語教育分野の創設に携わった。 ○大学院教務委員会委員および図書館運営委員として任務を果たした。 ○学部1年生のクラス担任として、クラスの指導助言にあたった。その内容はＩ－1教育・学生支援に記述のとおり。	○教育実習を参観し、研究授業で助言をし、附属教員との交流を図る。 ○教員支援講師として情報があれば進んで応募・講演を実施する。 ○国際交流として留学生に留学を勧める。留学生が受講する授業は英語を併用するよう努力する。	○教育実習の観察を附属中学校および観住小学校で行い、高校の教員と実習を中心に協議するなど交流を深った。 ○教育支援講師として登録はしたが、依頼はなかった。 ○国際交流としては、ぜミ生に留学生との交流を勧め（研修旅行に参加し通訳を務めるなど）、光州教育大学の学生たちとの交流に英語の学生参加者を募り、多くの参加者を得た。また、コースとして留学を支援し、ウェスタン・コロライナ大学留学に英語の大学院生が1人、推薦を得ている。	
124	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	曲下　克彦	現在指導している修士論文のテーマの一つに、「英語（科）教育における「構文」の語句な指導とはどこから扱っている。現在一般的に行われている構文の指導方法は、それぞれの構文に対応する日本語訳をただ単にあるとおり当ておはめる形式である。例えば、「I'm ～ that ・・・」は、「とてもうなので ・・・」という意味です」のように方法である。この方法は、"Mary is so attractive that I'd like to make friends with her."の様な構文文の場合には、問題が表面化しないが、"Mary is not so attractive that I'd like to make friends with her."の様な否定文の場合、上の方法では、「メアリーは、良い魅力がではないので、私は彼女と友達になりたい。」という意図されていない間違った解釈になってしまう。これは、上の指導が" I'm ～ that ・・・"の構造を正しく認識していないものであることから起こる不都合である。ここでは、"so ～ that ・・・"の正しい構造とその解釈がどのようなものであるかの説明はしないが、言語学・英語学は、正しい構造・意味分析に必要な分析方法を提供してくれる。従って、英語（科）教育の現場で実践されているが、学習者の要になる文法理論を、言語学・英語学的分析により、何が問題かを明確にし、それに基づき、適切な方策案を提案することができる。英語科にかかわらず、どの教科においても、現場では一般的にないる指導内容・方法を理論的に再検討し、より良い指導内容・方法を提案するのは、教科教育関連・分野の教科教育に対する重要な課題の一つであり、教科内容学の研究分野の一つであると思われる。このような意味での教科内容学的アプローチで修士論文指導の実践ができたことに満足している。	指学はもちろんのこと、生活、進路に関する相談、教採対策など　幅広く学生の教育・生活支援を行っていきたいと思っている。特に、担任をしている英語コース学部3年生の2年次に引き続き、3年次もクラス長の外国人に、学生の相談などに対応しているところである。	1月に、留学をしている一人を除き英語コース学部3年生全員と是食会を設け、雑談をしながら学習、生活全般のことを聞いたが、和気藹々とした雰囲気で、中間ごとの近況報告がかり、よきクラスメートとしてのグループ意識が構成されていることが感じられうれしく思った。是食会などのみんなで会う場では、話しにくい事柄、たとえば、進路、ゼミ決め、転生活などのことは、研究室で話を聞き、個別に対応した。	○　昨年度、英語の "only" に関しての意味・語用論の研究成果である論文　"A Modal Scalar-Pragmatical　Analysis of Only"が、2014年、Springer社から発行された研究書　Formal Approches to Semantics and Pragmatics に掲載された。現在、"only" の分析のさらなる精緻化をめざす研究を進めている。 ○　8月3～4日に本学で開催された第1回日本教科内容学会大会において、「Yako Ono そもそも Ono Yako ?一中学校英語教科書における日本人名の語序について」という題目で研究発表を行った。内容は、現行の検定済語科教科書のすべてにおいて、日本人の名前がOno Yakoのように第一名の語序で書かれている事実を紹介し、一方、現在において、英語圏ならば書いたりする場合において、日本人のほとんどがYako Onoのように名一姓の語序で自分ならばに他の日本人の名前を変う事実があり、その一方、全世界の英語によるコミュニケーションにおいて、日本人名に限らず人名一般の語序は名一姓のカが圧倒的に優勢であるため、英語によるコミュニケーションの場では日本人名を変うさきがYako Onoの様に、名一姓の語序で書ラ方が、伝わる確率が高くなり、かつスムスなコミュニケーションの確率がかなりなる。従って、名一姓の語序が第一名の語序よりも「合理的」であることをグーム理論を用いて明らかにした。さらに、発表では、なぜ「非合理的」な名一名の語序が教育英語科教科書で用いられているのかという疑問に対し、平成8年（1993年）の文部大臣諮問「新しい時代に応じた国語施策のあり方について」に対する平成12年（2000年）12月8日付けの国語審議会答申「国際社会に対応する日本語のあり方（答申）」において、日本人の姓名をローマ字表記する場合、並びに、学校教育における英語等の指導において、第一名の語序で表記することが望ましいとされたことに起因していることを指摘した。教科内容学関係の現在の研究テーマとしては、学校教育では過去30年近くコミュニケーション重視」の名の下、英語科教育が行われてきたが、その結果、日本人の英語コミュニケーション能力が上がったという社会的評価も客観的証拠がないし、そればかりか、「話がメアリーを愛し、ていますか」が英語で言えない大学生が増えしているという現状は、「コミュニケーション」とか何とか言う以前の問題として、英語科教育のやり方に根本的な問題があることを表している。この問題に対して、専門である（理論）言語学の立場から、少しでも、特に、文法指導、発音指導に関しての貢献をするべく、研究を進めた。その成果を、平成27年度に発表する予定である。 ○　上で述べた教科内容学関係の研究テーマと関連して、小中高における英文法の指導の実態と問題点を研究する課題で、科学研究費補助金などの研究助成公募申請に向けて準備をしたが、残念ながら申請に至らなかった。	地域連携委員会などに下等・財務管理委員会委員としての仕事を中心に大学運営に真摯に取り組む。	予定通り、地域連携委員会などに下等・財務管理委員会委員としての業務を中心に大学運営に真摯に取り組んでいる。	授業（「教科教育実践」、研究授業）などの機会に、附属学校教員との交流を深め、共同研究の環境づくりに務める。（附属学校） ○　大学と地域・社会さに留学生との交流、相互理解を図りたい。（社会連携、国際貢献）	○　担任をしている学部3年生の附属校での教育実習、研究授業、並びに、「初等中等教科教育実践」の授業の一環として附属小学校訪問などで、附属学校教員との交流を深めていらが、残念ながら、共同研究の実施にまでは至っていない。 ○　ぜミを1学期の秋実習で対世話になった観住無小学校に詳細授業の参観に行き、校長先生はじめ他の先生方と、地域での小学校教育に関する現状を詳細、意見交換を行った。 ○　ブラジル、ホンジュラス、インドネシア、ネパールからの留学生と日本人学生をボットラックパーティーに招き、国際交流、異文化理解の機会を持った。	「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の教員養成モデルカリキュラム研究開発委員会委員、カリキュラム・マップ・ガイドライン研究協議会委員を務め、「カリキュラム・ガイドブック第二試案一」の作成に携わった。	
125	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	濱野　美穂	私の担当は英語学であるが、学生は英語という言語の特徴をつきつめることに興味を持って修士論文のテーマを選択している。言語というのは様々な側面を持つものであるが、その一つの側は音韻だというものがある。 言語教育とは、単に決まった文を覚えこませるような簡単なものではなく、その言語の多角的な特徴やその背景にある考え方をも知ることが必ずとされる。 そのため、修士論文では、学生同士集なる言語の特徴の解明に取り組みながら、ぜミのなかでそれぞれの成果を発表しあうことで、自分のテーマ以外に関しても議論を行えるようエ夫している。 英語という言語の特徴を研究することは、それがどのような特徴であっても、将来の英語教育（校種も関係なく）に貢献につながるものであるため、英語への興味を深めること、多角的な観点から英語を分析できる力を持てることを目指したいとぜ行う。	中間報告でのおけりである、ぜミ生は英語の学び直しの時期であり、英語学に関わっている英語の特徴、音韻解釈の問題など、英語教育に非常に重要になる点を学ぶことができたのではないかと考えている。 現在、来年度の修士論文に向けて、研究を進めているふくも、それぞれ英語教育でも非常に重要な言語現象（学習者の発音、日英語の音色の違い、表現形式による意味の差異）を扱いながら、英語と母語である日本語の違いについて多角的な観点から観察を行っている。英語ネターゲットについて研究をこ学び、それを主幹し発表しあうことが決まった。 ○留学生プログラムコーディネーターとして、ガリエンケーション、研修旅行の引率などを行った。協定校であるWCUとの共同ちけい、WCUからの一日訪問の際には、地門で日研修内容を検討し、実行し、協定校との関係を強めることができたと考えている。	本学学生の現点のために、以下の内容を実行したい。 14年生担任として、就職支援を行う。そのため、各自の学習・生活状況の把握、就職・進路の相談をしっかり行い、各自にあった支援を目指したい。 2コース内外、授業内外で積極的に学生とコミュニケーションを図り、支援の必要性の検討、問題や悩みの早期発見と解決に向けての取り組みを行う。 3オフィス・アワーを設け、学習・生活相談に応る。 4ぜミを通し、採用試験対策や英語力の向上を目指す。 5留学生プログラムコーディネーターとして、留学の支援を行う。	今年度の研究上の目標・計画は以下のとおりである。 1)昨年度研究発表を行った現在の数量表現について、引き続き研究を深め、その成果を論文にまとめ投稿する。 2)昨年度終了した国立国語研究所プロジェクト（移動類型論プロジェクト）における成果を学会で発表する。 3)現在公表している科研費（学習者の移動表現に関するもの）が採択されれば、その研究を開始し、英語学習者の英語表現の特性について解明を目指す。 4)英語外来語について昨年度行った研究発表をもとに、さらに研究を つ当ず、成果を論文にまとめる。 5)昨年度に引き続き、本学一般英語カリキュラム改善に向けての研究を行う。	研究上の計画は以下のように実行することができた。 1)昨年度国際学会で発表を行った数量表現についての論文は改訂作業を行い、オンライン上で公開された。 2)移動表現の第二言語研究の成果発表を2月にシンガポールで行われた国際学会で、1月に国立国語研究所で行われた国際シンポジウムで発表した。また、同様にシンガポールでの発表内容を改訂し、$selected-papers に投稿中である。 3)昨年度公表した科研は採択されなかったが、申請書を少し改訂し、今年度も応募を行い、採択された。 また、国際交流活動と教育現場についての科研の分担者として、応募に参加した。 4)外来語についての研究は現在進行中であり、来年度初頭に投稿予定である。 5)一般英語カリキュラムの改善については、コース内で平成28年度からの小学校英語教育分野の開設に向けて対応を検討中である。	大学運営に関する目標・計画は以下のとおりである。 1)教務委員会委員（予定）として、学生の学習支援を積極的に行いたい。4年生の担任でもあるため、最終学年である学生の就職・進学支援により、大学運営に貢献したい。 2)国際交流委員会委員として、留学生や留学希望学生を支援したい。 3)現在本学の学生に必要な英語力とそれに合う一般英語カリキュラムの検討を行いたい。	大学運営に関する計画は予定通り進めることができた。 1)教務委員として、4年生の担任でもあるため、学生の学習支援を積極的に行った。また、担任である4年生の支援は、教職実践演習内、そして担当に対応しつつ、進めることができた。 2)国際交流委員として、9月にアメリカの協定校を訪問し、今後の交流活動について交流文化祭を行うことができた。また、コース内での留学希望者の支援も行い、来年度は1人の学生がWCUへの留学生、そして学生の1人がオーストラリアへの留学生決まった。 また、協定校であるWCUが幅門を訪問した際には、その研修に協力を行い、多数の学生の参加者を集めることもできた。 3)一般英語カリキュラムの改善については、コース内で平成28年度からの小学校英語教育分野の開設に向けて対応を検討中である。	以下の目標を持ち、活動を行いたい。 1)附属学校での研究会や、実習時に積極的に参加し、教育・研究面で連携を深めたい。 2)中年度末で国立国語研究所で行っていたプロジェクト（移動類型論プロジェクト）の成果を発表するにあたり、英語学習者の移動表現の実態を明らかにし、英語教育に貢献したい。 3)公開講演、免許更新講習、アドバイザー事業に積極的に携わりすべてを手更し、地域への教育研究活動の活況を目指す。 4)国際交流委員として、積極的に留学生支援や国際交流活動への支援を行いたい。	附属学校・社会との連携・国際交流活動も頑張に進めることができた。 1)附属学校での研究会には参加することがなかなかなかった。実習時の研究授業や研究討論を積極的に行った。 2)移動類型論プロジェクトの成果は今年度二つの国際学会で発表を行い、英語学習者の移動表現の実態について、成果発表を行うことができた。 2)免許更新講習を1件、アドバイザー事業を2件行った。 4)留学生支援の一環として、留学希望学生の支援、協定校訪問などを行った。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
126	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	畑江　美佳	教員養成大学大学院の修士論文については、小学校英語教育における英語活動の実証研究の修士論文を指導する。特に、附属小学校との連携が即できるため、院生の研究テーマを話し合い、それを附属小で授業を実践しながらデータを取ってみ研し、それを将来の小学校英語教育に生かしていけるような内容を指導する。	修士論文の指導では、附属小学校との連携から可能になった「4年生への文字指導の一貫として、2014年12月よりsight word readingを導入し実証実験した結果を論文にしている。この論文は本人の研究のみならず、附属小学校、本学小学校英語教育センター（いくは教育）が決定し今後の動向が注目される全国の小学校英語教育に影響を及ぼすものとなる可能性がある。	教育実践科教育学専門コース（英語）の修士論文については、小学校英語教育における「言語活動」の中から、研究テーマを思いだす力は、学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、教職大学院においては、学術成果報告書（学校教育の実践）具体的にどのように生かしていくか、あなたの指導や一般モノの工夫を示して頂いて。	1）模擬授業や共同討議など、授業内で学生が活動する場を多く取り入れてきたが、おおむね実践的に評価されている。今年度もこうした授業形態を継続し、授業を通して実践的能力の育成を目指す。 2）ゼミや演習においては、学生・院生が積極的に発言し合える学習環境を作ることに努める。また、各自の課題に応じて、研究の手引き、レポート・論文の書き方等について講習、助言・指導を行う。 3）学生・院生の学術相談には随時応じて、学生・院生と良好な関係を築き、必要に応じて支援を行う。	1）学部科目「初等中等教科教育実践Ⅱ」「中等国語科教育論」において、「言語活動実践」、「国語科授業実践」などにおいて、目標「ことばとの向き合い方」の授業を実施した。授業評価の結果からも、おおむね肯定的に受容されている。 2）ゼミや演習などで、学生・院生が活発な議論が展開できるよう少学習環境を つくることに努めた。議論が白熱して散時間にあがることもあり、きわめて良好な学習・研究状況であったと考えている。また、授業内においても研究、学習について指導・助言を積極的に行った。 3）卒業論文・修士論文の指導、教員採用試験対策の他、履修相談、学外での関き取り調査の引率など、講かでも積極的に学修指導、支援を行った。	教育プログーバルな視野を持つ英語教員の育成のため、授業はディスカッション形式を多用し、留学生や海外から招聘した教員に授業で講義をしてもらうなど工夫した。また、「コミュニケーションと言語・教育」の授業では、他コースの院生に向けて、英文化理解教育の重要性を説いた。 「学生生活支援」学部2年生の担任として、ミーティングを月1回開き、授業では行われないような内容のディスカッション等を行い、問題が起きたときはそれを早い段階で対処した。来年度の教員実習を見据えて、選別などが多い学生に対して厳しく接した。	研究」チが英語教育センターの附属小学校とのプロジェクトを進行し、小学校3年生から高1時間の英語活動の先進的カリキュラム研究を行う。また、個人で は、コロンビア大学の研究員との共同研究である、小学校からの文字指導について の研究を続行し、日本及びアメリカでの学会等で積極的に発表する。	附属小学校との「英語活動の先進的カリキュラム研究」プロジェクトに沿って連携を密にしながら英語授業を行い、それを1年目の研究成果としてまとめた。また、来年度から附属小学校との連携をふまえたに校長及び英語教員との連絡を取り合い話し合いを持つ予定である。 また、個人としては、科研費での研究を進め、コロンビアスチューチャーズカレッジの研究員やニュージャージー日本人学校の英語教員との共同研究を進めている。	昨年度から引き続き「教員養成モデルカリキュラム」の研究において、教員養成大学として重要となる教科内容学を通究した英語教育のカリキュラムを確立するために研究、開発を行う。小学校英語教育センターセンター長として、お疲語研修等を積極的に行い、本学の小学校英語教育の先進的な取り組みを内外に知らしめる。	小学校英語教育センターの業務は外に向けての仕事が多く、お疲語研修、英語絵本のためのワークショップ、小学校英語教育シンポジウム等で本学の英語教育実績の力を発揮した。小学校英語教育講の授業の立ち上げに尽力した。	附属学校・社会との連携｜附属小学校との連携を密にし、英語活動の支援、附属小研究発表会へ向けての共同研究等を行う。将来の小学校英語教科化に備えて「公募ならか一中連携を全国に附属中学校の英語教員との連携を開き発表交流を行う。鳴門市教育委員会と連携をとり、小学校英語活動に対する助言、支援を行う。 ｜国際交流｜教員留学生を積極的に附属中心の交流の機属にもし、お互いの留学生とそれぞれ学ぶ場合を年間10回以上設定した。海外から英語教育者を招聘した際、附属小、附属中、大学学部生、院生への授業をしてもらうなど、積極的に交流、生徒、学生のために交流活動を行った。	附属学校・社会との連携｜附属小学校との連携を密にし、英語活動の支援、附属小研究発表会へ向けての共同研究等を行う。将来の小学校英語教科化に備えて「公募ならか一中連携を全国に附属中学校の英語教員との連携を開き発表交流を行う。鳴門市教育委員会と連携をとり、小学校英語活動に対する助言、支援を行う。 ｜国際交流｜教員留学生を積極的に附属中心の交流の機属にもし、お互いの留学生とそれぞれ学ぶ場合を年間10回以上設定した。海外から英語教育者を招聘した際、附属小、附属中、大学学部生、院生への授業をしてもらうなど、積極的に交流、生徒、学生のために交流活動を行った。	附属小学校と連携し、英語活動を通じて、小学校英語教育における英語活動の実証研究の修士論文を指導する。特に、附属小学校との連携が即できるため、院生の研究テーマを話し合い、それを附属小で授業を実践しながらデータを取ってみ研し、それを将来の小学校英語教育に生かしていけるような内容を指導する。
127	人文・社会系教育部	言語系コース（英語）	吉川　エリザベス	My classes focus on improving students' competence and confidence in using English. I conduct classes only in English and encourage student to use English as much. I will help all students to improve their English skills through both conversation and being available to proof read their written work include theses and other written work for English competions. As a new instructor where students have had limited experience with interacting with me, I am using this situation to encourage students to explore and reflect upon how they utalize their second language skills in our interactions to improve the way they commicate. As a doctoral student, I am exploring ways to improve communicative course cirriculum to encourage greater fluency in English (as a foreign language) fluency. My studies am not only to improve how I address the issues of language acquisition in class, but how I present the materials to students in relation to their needs.	To improve student's competence and confidence in using English I conducted classes in English only as much as possible and encouraged students to use English as much as possible. I helped all students to improve their English skills through both conversation and being available to proof read their written work include theses and other written work for English competions and the TOEFL and TOEIC tests. As a new instructor where students have had limited experience with interacting with me, I am used this situation to encourage students to explore and reflect upon how they utilized their second language skills in our interactions to improve the way they commicate. As a doctoral student, I continue to explore ways to improve my communicative course cirriculum to encourage greater fluency in English (as a foreign language). Upon reflection of the past year I am to continue to not only to improve how I address the issues of language acquisition in class, but how I present the materials to students in relation to their needs to improve their English skills.	I will assist students with Japanese and international students with the proof-reading of their thesis and exploration of their research topics. Furthermore I hold informal writing workshops for students who are entering speech competitions. I assist them with the proof reading of their speeches. I am assisting students with TOEFL training.	I helped both Japanese and international students with the proof-reading of their thesis and exploration of their research topics. Furthermore I have held informal writing workshops for students who are entering speech competitions and training for the TOELF test. I assisted them with the proof reading of their speeches and how to proof read their written work. I have helped students who are studying for the TOEFL test with studying for the written section of the test.	I will be conducting research into the following areas in English acquisition in conjunction with my doctorate studies: - transferability of teaching methodologies developed in one culture and used in another culture - the understanding of how language polices influence the language classroom - how students can develop their critical thinking skills so that they can develop as proficient second language speakers. - how to help students to understand different cultures through using art My research will be published in: -　Korea Tesol conference proceedings 2013 (in press) (peer-reviewe) - Tokyo JALT magazine 2014 (in press) (peer-reviewe) I will be presenting at - JALT national conference (November 2014) - TESOL Annual Internation Conference (March 2015)	I have been be conducting research into the following areas in English acquisition in conjunction with my doctorate studies: - transferability of teaching methodologies developed in one culture and used in another culture - how students can develop their critical thinking skills so that they can develop as proficient second language speakers. - how to help students to understand different cultures through using art - the understanding of how language polices influence the language classroom To this I have been researching how foreign language educational policies are met/ realized in the university setting. My research was published in: -2014. "Considering Context: The Implementation of Visual Thinking Strategies." Tokyo JALT Journal p. 21-34. (peer-reviewed). Available at http://www.tokyojalt.org/tj/-issue-2-2014.html 2014. "Getting students to speak on topics of interest." Korea TESOL 2013 Conference Proceedings. p. 261-267. (peer-reviewed). 2014. "One-minute speeches: Students developing speech and presentation skills." Journal of Sapporo University and Culture of Hokkaido. 12. 61-72. The Hokkaido Linguistic Circle. ISSN 1882-6296. (peer-reviewed). I presented at - JALT national conference (November 2014) - TESOL Annual Internation Conference (March 2015) - and was an invited speaker at "早長と女性研究者の懇談会" President and Female Researchers' meeting. I also did - two presentation at Peru TESOL International Convention in Lima, Peru in August 2014 and - Cambodia TESOL in February 2014.	Just arrived at the university in October, so as of yet, I do not have a position in any committees. However, I am already assisting with the following: -TOEFL preparation - Helping to develop open communication lines between the part-time teachers and full-time instructors.	As I only arrived at the university in October, I did not have a position in any committees. However, I have assisted with the following activities: -TOEFL preparation - Helping to develop open communication lines between the part-time teachers and full-time instructors. - Interview tests of undergraduates for entering the university. - Proof reading faculty conference papers and abstracts	I am helping to foster a connection between this university and the University of Western Carolina by assisting students to prepare for their potential participation in the exchange program. Through developing ties with the community I avail myself upon request by local schools to judge English contests, provide English support, and so on, in the capacity that the requesting party needs.	I have helped to foster a connection between this university and the University of Western Carolina by assisting students to prepare for their potential participation in the exchange program. Through developing ties with the community I availed myself upon request by local schools to judge English contests, provide English support, and so on, in the capacity that the requesting party needs.	I have ensured that I have worked with faculty, staff and students to the upmost of my ability. I have availed my help wherever I could and made myself available for my office to help others whenever they requested help. I have continued to do research and attend conferences so as to improve my knowledge and ability to teach students and share ideas with others so as to improve the teaching and learning situation at our university.
128	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	鵜田　伸司	1)教員が教科教育を専門としているため、修士論文のテーマも必然的に教育実践に関連するものとなっている。それらを踏まえて、具体的な研究課題の絞り込みに関して、教育実践につながる課題の選択肢を院生とともに考える。 2)学術に関してまかれる指導助言の対象において、教材としても用者、学習者の立場から見た場合など、「教育という現点から考えれば」という考え方を提示する。	1)平成28年度修了生に関しては、修々のテーマを固ならぶまたうえて、教職語指導・メディアリテラシーについてのカリキュラム研究、NIE実践の研究といった、国語科教育に関する修士論文指導を行った。 平成26年度入学生4名については、各自のテーマを踏んで教科学習に関するテーマで修士論文指導を行っている。 2)ゼミ等での修士論文作成に関する指導助言に関しては、目標ごとに示したような軸点もふまえ、適宜指導を行った。	1）模擬授業や共同討議など、授業内で学生が活動する場を多く取り入れてきたが、おおむね実的に評価されている。今年度もこうした授業形態を継続し、授業を通して実践的能力の育成を目指す。 2）ゼミや演習においては、学生・院生が積極的に発言し合える学習環境を作ることに努める。また、各自の課題に応じて、研究の手引き、レポート・論文の書き方等について講習、助言・指導を行う。 3）学生・院生の学術相談には随時応じて、学生・院生と良好な関係を築き、必要に応じて支援を行う。	○模擬授業・演習形式の授業を積極的に行うことにて、事前指導の時間を設け、相互指導を充実させる。 ○正規の授業時間外に、教員採用試験に向けて、以下のような支援を行う。 1．自己PRに関する個人指導。2．専門試験（言文・漢文分野）に関する指導。3．模擬授業・模擬集団面接の指導。 ○学生・院生に積極的に言葉掛けを行い、円滑な人間関係を作る。	○学部前期授業「国語学Ⅱ」「語学・文学総合演習Ⅰ」「中等国語科教育論」において、「言語活動」、「国語科授業実践」などにおいて、目標「ことばとの向き合い方」の授業を実施した。授業評価の結果からも、おおむね肯定的に受容されている。 2）ゼミや演習などで、学生・院生が活発な議論が展開できるよう学習環境をつくることに努める。議論が白熱して散時間にあがることもあり、きわめて良好な学習・研究状況であったと考えている。また、授業内においても研究、学習について指導・助言を積極的に行った。 3）卒業論文・修士論文の指導、教員採用試験対策の他、履修相談、学外での聞き取り調査の引率など、講かでも積極的に学修指導、支援を行った。	○模擬授業・演習形式の授業を積極的に行うことにて、事前指導の時間を設け、相互指導を充実させる。 ○正規の授業時間外に、教員採用試験に向けて、以下のような支援を行う。 1．自己PRに関する個人指導。2．専門試験（言文・漢文分野）に関する指導。3．模擬授業・模擬集団面接の指導。 ○学生・院生に積極的に言葉掛けを行い、円滑な人間関係を作る。	○研究テーマ設定に関して、以下のような支援を行う。 1．自己PRに関する個人指導。2．専門試験（言文・漢文分野）に関する指導。3．模擬授業・模擬集団面接の指導。 ○学生・院生に積極的に言葉掛けを行い、円滑な人間関係を作る。	○5月1日～6月4日、9月18日～20日の2回にわたり組織中にて、常国一切経目録（全5冊）の年度内の刊行を目指して、組織中において最終調査を実施し、最終原稿を整える。 ○『東頭の力』をテーマにした、教育実践や、プロジェクトを計画し、試行する。 ○学会・研究会活動については、以下のことを目標とする。 1．全国文学国語教育学会が『年任理事』に選出されたので『言に詠語して地区理事』の任も解かれた。学会には部分的にでも可能な限り参加したい。 2．『編集委員』の任期が1期残っているので、任務をまっとうする。 3．日本語書学会の機関誌『語書科学』の編集委員の任務を遂行する。	○就職委員会委員（副委員長）、施設委員会委員の委員として、その職務を遂行した。 ○他コースの教員選考委員会委員などの依頼について、積極的に引き受けた。	○学部・附属国語科連絡協議会に参加し、附属学校園教員との連携を図る。 ○教育委員会などの協力要請に関して、積極的に応じる。	○学部・附属国語科連絡協議会（6月26日）に参加し、附属学校園教員との連携を図った。 ○教育委員会などの協力要請に関して、積極的に応じる。	○就職委員会委員（副委員長）、施設委員会委員の委員として、その職務を遂行した。 ○他コースの教員選考委員会委員などの依頼について、積極的に引き受けた。
129	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	原　卓志	身の回りに存在する様々な事象（特に「言葉」に関する事象）の中から、研究テーマを思いだす力は、学校の教育実践において、子ども達の言語生活や、身の回りの言葉遣いの問題は語彙に乏しい、研究の種を育てる。 2．言語科学習指導の理論と実践の歴史的事例を「知識」にとどめず、現代に即応するために主体的研究として再発見できるように支援する。 3．各院生修士に不足がちな基礎的知識・技術・考え方を段階的・本格的に補充していく語言を工夫する。 4．問題解決・成果達成のために、個人の力と集団の力を組み合わせ、あるいは集約していく研究課題・研究方法を開発する。 学生に対して、以上のことを達成するために、自らの研究・実践を実演させる。	修士論文研究方法として、従来は、「文献による研究、②自己の実践を省察する研究、のどっちを採用してきた。2014年度初めて「実践研究」の手法の開発を試みた。 「つのは、現職教師（中学・高知県）院生の修士論文研究に、実践現場の観察・参与・共同研究を導入することができた。フィールドとなる授業場面を提供いただいたのは島高等下の公立中学校で、大学院修了生が法務している現場である。成果は次の1点である。1．問題意識の明確化現職院生の言葉・動力を十分用いた研究ができた。2．文献研究のみでは得られない生徒を対象としたアンケート調査・観察・教育実習への参与などに実践者としての「手応え」が提携された。2．4月から1月迄での入門部カリキュラムを考える具体的な手がかりが得られた。2つのは、自らが非常勤講師として勤務する私立高校をフィールドとする「書くことを通じて読むこと」でも、カリキュラム研究である。学力的には難しいレベルにある高校生を「学ぶ」に引き込むための実践的な研究が行われた。本人の人柄と誠のない工夫の成果がはた。3人目の各院生修士（スキーム）は生徒相談員を務めて現実研究を行った。本人の持ち前の知的資質を十分に発揮して成果を挙げた。 「実践フィールドを用いる研究」手法は、条件が整わねば実現できないが、これからの発展可能性が大きい。	1）学部科目「語彙科学」「言語学」「文学総合演習Ⅰ」「中等国語科教育論」において、「言語活動」、「国語科授業実践」などにおいて、目標「ことばとの向き合い方」の授業を実施した。授業評価の結果からも、おおむね肯定的に受容されている。 2）ゼミや演習などで、学生・院生が活発な議論が展開できるよう学習環境をつくることに努める。議論が白熱して散時間にあがることもあり、きわめて良好な学習・研究状況であったと考えている。また、授業内においても研究、学習について指導・助言を積極的に行った。 3）卒業論文・修士論文の指導、教員採用試験対策の他、履修相談、学外での聞き取り調査の引率など、講かでも積極的に学修指導、支援を行った。	○学部前期授業「国語学Ⅱ」「語学・文学総合演習Ⅰ」「中等国語科教育論」において、「言語活動」、「国語科授業実践」などにおいて、目標「ことばとの向き合い方」の授業を実施した。授業評価の結果からも、おおむね肯定的に受容されている。 2）ゼミや演習などで、学生・院生が活発な議論が展開できるよう学習環境をつくることに努める。議論が白熱して散時間にあがることもあり、きわめて良好な学習・研究状況であったと考えている。また、授業内においても研究、学習について指導・助言を積極的に行った。 3）卒業論文・修士論文の指導、教員採用試験対策の他、履修相談、学外での聞き取り調査の引率など、講かでも積極的に学修指導、支援を行った。	○『対話理理論の研究』は、止まっては いないが緩やかな進行に留まった。原因は「大学紀要」執筆を中心ふみなが」を思したことである。しかし3月に提出した『言語科学』紀要等論文は（単種2・共著1）を公刊した。また、全国大学国語教育学会、NIC全国大会、日本教育実践学会において研究発表3回（共同2、単独1）を行った。 ②③ 説明的文章指導の改善にかかる共同研究について、上記のように全国大学国語教育学会で1件（共同発表）の研究発表を行った。ただし、科研費の申請には至らなかった。	○今年度の人文・社会教育部の副部長に選出されたので、職務遂行に尽力する。 ○モデルカリキュラム開発委員会委員として仕事を遂行する。 ○大学院教務委員会委員（任期2年目）として、責務を果たす。	○人文・社会教育部の副部長・評議会委員として会議に出席し、部会で報告する業務を行った。 ○連合大学院「言語表達会講座」の講長（1年目）を勤めた。 ○モデルカリキュラム開発委員会委員の職務を担い、シンポジュウムで発表した。 ○大学院教務委員会委員（2年目）を勤めた。 • 学部・修士課程のカリキュラム実践をに向けて、自己の担当する授業でレポート課題「授業の作業」等に改革を行い、教科書改訂作業に着手しつつある。	附属小学校・附属中学校の校内研究に関して、「研究分担・協力者」（附属小）、研究活動の協力・助言者（附属中）として、協力した。 学部附属連絡協議会には連続之形分参加した。 2．「教育実践フィールド研究」学公立学校の協力を得て、予定どおり進行した。 3．第15回徳島国語教育実践研究大会を開催できた。 4．月例研究会活動、そのメンバーを通じてNIE全国研究大会に協力した。また、個人としては大学教会のコーディネーターをつとめた。 5．第2分回徳島県小学校国語教育研修大会・第52回鳴和国語教育研究会における「ネットディスカッション『子どもたちが生き生きと楽しく学ぶ国語力授業づくり』」（司会・徳島台センター　宮本浩子氏）において、石川憲巳教諭（鳴門第一小）、田上純教諭（美馬市立郡里小）とともに、パネラーを務めた。	附属小学校・附属中学校の校内研究に関して、「研究分担・協力者」（附属小）、研究活動の協力・助言者（附属中）として、協力した。 学部附属連絡協議会には連続之形分参加した。 2．「教育実践フィールド研究」学公立学校の協力を得て、予定どおり進行した。 3．第15回徳島国語教育実践研究大会を開催できた。 4．月例研究会活動、そのメンバーを通じてNIE全国研究大会に協力した。また、個人としては大学教会のコーディネーターをつとめた。 5．第2分回徳島県小学校国語教育研修大会・第52回鳴和国語教育研究会における「ネットディスカッション『子どもたちが生き生きと楽しく学ぶ国語力授業づくり』」（司会・徳島台センター　宮本浩子氏）において、石川憲巳教諭（鳴門第一小）、田上純教諭（美馬市立郡里小）とともに、パネラーを務めた。	○徳島県小学校国語教育研究会委員として、平成26年7月31日・8月1日の両日にわたって第19回NIE全国大会徳島大会を開催し運営した。本大会では、各国提案および相談を担当し、発表した。
130	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	村井　万里子	現代の言葉の学習・国語科教育の実態や自らの具体的学習経験をふまえ、学生自身の主体的な問題意識を養い、研究の種を育てる。 2．言語科学習指導の理論と実践の歴史的事例を「知識」にとどめず、現代に即応するために主体的研究として再発見できるように支援する。 3．各院生修士に不足がちな基礎的知識・技術・考え方を段階的・本格的に補充していく語言を工夫する。 4．問題解決・成果達成のために、個人の力と集団の力を組み合わせ、あるいは集約していく研究課題・研究方法を開発する。 学生に対して、以上のことを達成するために、自らの研究・実践を実演させる。	修士論文研究方法として、従来は、「文献による研究、②自己の実践を省察する研究、のどっちを採用してきた。2014年度初めて「実践研究」の手法の開発を試みた。 「つのは、現職教師（中学・高知県）院生の修士論文研究に、実践現場の観察・参与・共同研究を導入することができた。フィールドとなる授業場面を提供いただいたのは島高等下の公立中学校で、大学院修了生が法務している現場である。成果は次の1点である。1．問題意識の明確化現職院生の言葉・動力を十分用いた研究ができた。2．文献研究のみでは得られない生徒を対象としたアンケート調査・観察・教育実習への参与などに実践者としての「手応え」が提携された。2．4月から1月迄での入門部カリキュラムを考える具体的な手がかりが得られた。2つのは、自らが非常勤講師として勤務する私立高校をフィールドとする「書くことを通じて読むこと」でも、カリキュラム研究である。学力的には難しいレベルにある高校生を「学ぶ」に引き込むための実践的な研究が行われた。本人の人柄と誠のない工夫の成果がはた。3人目の各院生修士（スキーム）は生徒相談員を務めて現実研究を行った。本人の持ち前の知的資質を十分に発揮して成果を挙げた。 「実践フィールドを用いる研究」手法は、条件が整わねば実現できないが、これからの発展可能性が大きい。	学部生・院生（現職・非常勤講師・長期履修生・ストレート学生）など、様々な立場の学生の「学習支援」を、状況に合わせて様々に配慮し、支援する。 1．学会や研究会への参加を積極的に図る。 2．資料作成・学習材収集に関わって、研究費を有効に活用する。 3．学習支援のリズムづくりやその維持に配慮する。 4．学生・院生同士の学業・生活面面にわたる相互扶助を促し、支援する。	○4期了生（休国の心配された院生は回復し、自らの課題一自己の前りよげた方法・信念を即ですぐ結向を省略現して見ないまず自さ一を携帯できた。また、この院生がからこなって、ゼミ活動が「行事」と並べてこっかに活動に行われた。現場に戻り研究主任（職担当する予定である。私立高校非常勤講師もしながら修士課程2年間を通こした院生は、他元の教員量から業績のあった特別支援学校の実践講師（中講課程）を選択して職場への第一歩を踏み出した。経験の蓄生ばず、様々な生徒の様態に応じた方の向上が期待される。長期履修院生は、広島県の採用試験に合格し、小学校教員となって新しい改任地へ旅立った。 ②学生（M1修了生）・院生は現在である。「本は理解できるが「理論研究」に強い興味をもって講義し理論と実践を連接現行つけるよう」目的」達成を目的としている。本学学部から進学した3ストレート院生は、学部卒業研究では部かったが「具体に基づく現論研究」の思弁性が乗り出し、自力で取り決く考ええる力が出てきて頼もしい。外部の大学から進学した院生は「人柄」がよく研究的には「これからである。研究対象ふさ「語彙指導・大村は対研究」の深とか明既とか現場理解が成果の種ともろう。	M2修了生（休国の心配された院生は回復し、自らの課題一自己の前りよげた方法・信念を即ですぐ結向を省略現して見ないまず自さ一を携帯できた。また、この院生がからこなって、ゼミ活動が「行事」と並べてこっかに活動に行われた。現場に戻り研究主任（職担当する予定である。私立高校非常勤講師もしながら修士課程2年間を通こした院生は、他元の教員量から業績のあった特別支援学校の実践講師（中講課程）を選択して職場への第一歩を踏み出した。経験の蓄生ばず、様々な生徒の様態に応じた方の向上が期待される。長期履修院生は、広島県の採用試験に合格し、小学校教員となって新しい改任地へ旅立った。 ②学生（M1修了生）・院生は現在である。「本は理解できるが「理論研究」に強い興味をもって講義し理論と実践を連接現行つけるよう」目的」達成を目的としている。本学学部から進学した3ストレート院生は、学部卒業研究では部かったが「具体に基づく現論研究」の思弁性が乗り出し、自力で取り決く考ええる力が出てきて頼もしい。外部の大学から進学した院生は「人柄」がよく研究的には「これからである。研究対象ふさ「語彙指導・大村は対研究」の深とか明既とか現場理解が成果の種ともろう。	○個人の研究活動については、以下のとおり計画する。 1．自らの研究課題「対話理理論の研究」を計画的に進める。 2．「言語の力」をテーマにした、教育実践や、プロジェクトを計画し、試行する。 3．学会・研究会活動については、以下のことを目標とする。 ・全国文学国語教育学会が『年任理事』に選出されたので『言に詠語して地区理事』の任も解かれた。学会には部分的にでも可能な限り参加したい。 ・編集委員」の任期が1期残っているので、任務をまっとうする。 2．可能な限り、学会発表を行う。 3．日本語書学会の機関誌『語書科学』の編集委員の任務を遂行する。	1．「対話理理論の研究」は、止まっては いないが緩やかな進行に留まった。原因は「大学紀要」執筆を中心ふみなが」を思したことである。しかし3月に提出した『言語科学』紀要等論文（単種2・共著1）を公刊した。また、全国文学国語教育学会、NIC全国大会、日本教育実践学会において研究発表3回（共同2、単独1）を行った。 ②③ 説明的文章指導の改善にかかる共同研究について、上記のように全国大学国語教育学会で1件（共同発表）の研究発表を行った。ただし、科研費の申請には至らなかった。	○研究費委員会委員、カリキュラムマップ・ガイドライン研究協議会委員として、学内業務に貢献した。 2．附属校での授業参観・指導助言を教育実習生に対して積極的に行い、受け入れ校園との連携を図った。 3．上記委員として、カリキュラムマップガイドブックの改訂、評価報告書の作成を行った。	1．附属小学校・附属中学校の校内研究に関して、「研究分担・協力者」（附属小）、研究活動の協力・助言者（附属中）として、協力した。 学部附属連絡協議会には連続之形分参加した。 2．「教育実践フィールド研究」学公立学校の協力を得て、予定どおり進行した。 3．第15回徳島国語教育実践研究大会を開催できた。 4．月例研究会活動、そのメンバーを通じてNIE全国研究大会に協力した。また、個人としては大学教会のコーディネーターをつとめた。 5．第2分回徳島県小学校国語教育研修大会・第52回鳴和国語教育研究会における「ネットディスカッション『子どもたちが生き生きと楽しく学ぶ国語力授業づくり』」（司会・徳島台センター　宮本浩子氏）において、石川憲巳教諭（鳴門第一小）、田上純教諭（美馬市立郡里小）とともに、パネラーを務めた。	コアカリキュラムの実践をベースに編集した教科内容学の教科書を、授業において レポート課題に取りよげ、学生の反応を研究した。 より効果的・効率的な実践に向けて、TTを組む教員と協力し、教科書作りを通じて関係分野のコース教員とともに、実践研究を進めた。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、履学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示して頂いて、教職大学院においては、学術成果指向型大学院教育の実践に具体的にどのように活かしていくか、あなたの指導や一般センの工夫を示して頂いて。	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び夜間大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
131	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	赤坂　裕文	○　修士課程や長期履修生の修士論文については、従来から教員になることを目指して指導を行い、研究者養成ではないことに心を砕いてきた。<br　今後も、学生の教員希望（幼教園、小学校、中学校、高等学校）に応じた修士論文の研究課題設定を行い、課題研究の指導を行う。	○　修士課程や長期履修生の修士論文については、従来から教員になることを目指して指導を行い、研究者養成ではないことに心を砕いてきた。<br　今後も、学生の教員希望（幼教園、小学校、中学校、高等学校）に応じた修士論文の研究課題設定を行い、課題研究の指導を行う。<br　歴史を振り返ってのみに終わらず、今日や現在の自分自身の国語科教育の問題や課題を明らかにするように指導した。学生は、兵庫県の小学校教員として活躍採用され、研究を実践に生かす場を得た。<br　○　在学院生も、「小学校国語科における「読むこと」の研究ー子どもの経験と言葉とをつなぐ「読むこと」の指導を中心にー」など学校や教育実践に貢献する研究課題に取り組んでいる。	○　教員採用実技ガイダンスを担当した。（5月21日、6月21日）。 ○　学部学生、大学院生に対して、日頃から教員就職を促し、教員採用に関する助言相談に精力的に応じた。 ○　個人的に地頭された進路指導、模擬授業の指導等に精力的に応じた。 ○　希望者に対して、個別に小論文の添削指導を行う。 ○　学部4年生の担任として、学生の様々な相談に懇切ていねいな対応を行う。	○　教員採用実技ガイダンスを担当した（5月21日、6月21日）。 ○　学部学生、大学院生に対して、日頃から教員就職を促し、教員採用に関する助言相談に精力的に応じた。 ○　個人的に地頭された進路指導、模擬授業の指導等に精力的に応じた。 ○　希望者に対して、個別に小論文の添削指導を行う。 ○　学部4年生の担任として、学生の様々な相談に懇切ていねいな対応を行った。 　担任した12名のうち、7名が小学校教員として採用決まった。その1名は、猛予制度によって本学院大学院に進学した。 　残りも点の力を生かす形において講師として勤務している。1名は進為義の青少年更正施設で非常勤職員として勤務している。2名は大学院生（本学）・研究生となった。	○　10年以上取り組んでいる「絵本とその読み聞かせ」の教育的効果に関する研究を継続し、その成果を全国大学国語教育学会等で研究発表した。 ○　絵本とその読み聞かせの教育的効果について、実践的・実証的研究取り組んだ。 ○「絵本とその読み聞かせ」に関する絵本センター設置の研究論文を執筆し、学術研究誌等に発表する。 ○「絵本とその読み聞かせ」に関する単行本「絵本のひみつ Ⅱ」の出版に向けて準備する。	○　10年以上取り組んでいる「絵本とその読み聞かせ」の教育的効果に関する研究を継続し、その成果を全国大学国語教育学会等で研究発表した。 ○　絵本とその読み聞かせの教育的効果について、実践的・実証的研究取り組んだ。 ○「絵本とその読み聞かせ」に関する絵本センター設置の研究論文を執筆し、学術研究誌等に発表する。 ○「絵本とその読み聞かせ」に関する単行本「絵本のひみつ Ⅱ」の出版に向けて原稿を完成した。	○　児童図書室室長として、児童図書室の充実・発展のために努力した。児童図書室が開催するワークショップ（11月19日）を担当した。大学の地域貢献に協力した。 ○　本学が参画する一般社団法人「教育支援人材認証協会」の認定評価委員として事業の運行に努力した。認証講座「こどもサポーター（読み聞かせ）」（10月4・5日）を担当した。 ○　教員免許有情更新講習の選択分野の講座を複数（7月26日／7月27日／8月16・17日／8月23・24日）担当した。	○　児童図書室室長として、児童図書室の充実・発展のために努力した。児童図書室が開催するワークショップ（11月19日）を担当した。大学の地域貢献に協力した。 ○　本学が参画する一般社団法人「教育支援人材認証協会」の認定評価委員として事業の運行に努力した。認証講座「こどもサポーター（読み聞かせ）」（10月4・5日）を担当した。 ○　毎月90～60回程度担当している講演会・研修会・講座等において、社会に対する大学・大学院の宣伝活動を続けた。 ○　放送大学の面接授業を担当する他、県・大学連携による教員研修担当、地域的に社会と連携する。 ○　内国人留学生研修プログラム「日本の教育と文化」に係る講義を担当する。	○　国語科学部・附属連絡協議会を継続開催し、附属学校との研究協力活動を発展させる。 ○　本学の大学教員講演の一環として、附属中学校の授業「総合選択講座」（11月16・18日）を、附属教員と共同で担当した。 ○　50回程度担当した講演会・研修会・講座等において、社会に対する大学・大学院の宣伝活動を続けた。 ○　放送大学の面接授業を担当する他、県・大学連携による教員研修担当、地域的に社会と連携する。 ○　内国人留学生研修プログラム「日本の教育と文化」に係る講義（6月16日）を担当した。	平成26年度のベストティーチャー賞（教育育部門）を受賞した。
132	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	小野　由美子	1）　これまで同様、授業においてわが受けてきた学校教育を振り返る機会をできるだけ多く設ける。 2）　学校教育が直面する課題を授業で扱い、関連する論文、研究を紹介する。 3）　実践的研究のありかた、すすめ方について、授業で指導する。	1）授業オリエンテーション、授業でのディスカッション、授業のリフレクション・ノートなどにおいて特に留意して指導し、自らの学校教育経験を反省的に思考させてみがけてきた。 2）現文化関教育学会紀要所収の研究論文を主たる資料として、外国にルーツを持つ子どもたちが日本の学校教育の中で直面する課題や、教師の課題について議論し、思考・認識を深めることができた。 3）アクションリサーチや事例研究など教育実践における質的研究の方法について指導しその意義を理解させることができた。	1）学部・大学院に在籍する日本人学生に対して、さまざまな異文化体験を企画・実施する。 2）学部・大学院に在籍する日本人学生に対して、多様化する公学校の学習者に柔軟に対応できるスキル・開発を支援する。 2）院生並、非進同好会を通して、留学生と日本人学生、外国人研修生と日本人学生との交流を企画・実施する。その際、学生自身が実施プロセスにエネルギに関わるように工夫する。	1）学部・大学院に在籍する日本人学生に対して、さまざまな異文化体験を企画・実施する。 2）学部・大学院に在籍する日本人学生に対して、多様化する公学校の学習者に柔軟に対応できるスキル・開発を支援する。 2）院生並、非進同好会を通して、留学生と日本人学生、外国人研修生と日本人学生との交流を企画・実施する。その際、学生自身が実施プロセスにエネルギに関わるように工夫する。	1）1．ルクンデ国外研修を企画実施。本学大学院に在籍する学生を4名を派遣した。研修場所、研修内容について相談にのり、現地では指生主体で研修を行った。日本に在住するベトナム人が支援する学校の視察、Tumba College of Technology（TCOT）での「日本文化講話」、近隣の子どもを集めての野外活動、現料実験教室、現地人教師による現料授業参観と授業実践討論での指導助言など、多様にわたる活動を行った。その成果は研修報告書としてまとめ印刷、配布した。また研究報告会を実施し、異文化への関心を促すような啓発活動を行った。 2）ラベルアート、リタ小動材関係の専門家を招き、多様化する学習者への支援に活用できるよう深堀を行った。 3）本学が受託する20人研修員に対して、茶道クラブ一期一会によるお茶体験を実施した。また、担当する授業の受講生を中心にボランティアを募り、受託研修員にたいして日本語レッスンを実施した。これらの企画は学生主体で行ったと意識し、機会の提供と側面支援をしかけた。	1)途上国における「教育研究」に関して、これまでに蓄積したデータを分析して、論文としてまとめる。 2)科研（基盤B、挑戦的萌芽研究）の研究成果を学会で発表し、論文として投稿する。	1)途上国における「教育研究」に関して、これまでに蓄積したデータを分析して、論文としてまとめる。 2)科研（基盤B、挑戦的萌芽研究）の研究成果を学会で発表し、論文として投稿する。	1)国際交流委員として、本学の国際化に貢献する。 2)留学生コーディネーターとして、留学生の教育・学生生活の改善に貢献する。	1）　国際交流委員として、プレハリア大学との交流の充実・発展の視点にもとづきグローバルなマインドをもった学生の育成を目的としたコンケンス大学での海外研修、実習を実施させるため、現地担当教員を派遣した。 2）　留学生オリエンテーション、日本語補講、課外体験他、留学生の教育、学生生活に関係する事項について取組した。	1）　国際交流委員として、プレハリア大学との交流の充実・発展の視点にもとづきグローバルなマインドをもった学生の育成を目的としたコンケンス大学での海外研修、実習を実施させるため、現地担当教員を派遣した。 2）アフリニスタン諸学教育国際プロジェクトに専門家として参画し、第3国研修に出て現地人材の総力強化を行う。 3）ルクンデでのJICAプロジェクトに短期専門家として参加する。	1)International Council on Education for Teaching（ICET）の2015年大会を晴門教育大学で実施するために、準備委員長として多方面と協力して準備にあたる。 2)アフリニスタン諸学教育国際プロジェクトに専門家として参画し、第3国研修に出て現地人材の総力強化を行う。 3)ルクンデでのJICAプロジェクトに短期専門家として参加する。	1）ICET2015年大会（於：晴門教育大学）の準備委員長として学内に準備委員会を設置し学術委員会委員としたに多方面の協力を得ながら準備を進めることができた。 2）アフリニスタン諸学教育国際プロジェクトに専門家として参画し、所期の成果を得ることができた。 3）ルクンデでのJICAプロジェクトに短期専門家として参画し所期の成果を得ることができた。 ④　ミャンマーでのJICAプロジェクトに短期専門家として参画し、所期の中後の初等教育教員養成について貴重な異星を行えた。 ⑤　「わくわくなっきょ」で大洋村の受託研修員と地域の小中学生の交流を企画実施した。異国に触れてはお学院生を含めたことから、現在にとっても異文化理解だけでなく、イベントの企画実施、計画の良い経験となった。	本学の国際交流に対して、ルクンデ、ミャンマー、アフリニスタンを中心に活動し、その活動・研究成果を学内だけではなくICKPKの関係学会にも還元している。また、学生・院生を機会をふたご国内でのフィールド活動に参加させ、その活動・研究の理解を広げ、その成果を学内はもとより国内外での学会において発表させることに努めている。これまでのこうした国際交流活動を基盤として、本学における「ICET開催（2015年6月）に向けての取り組みは、本学・教員のこれまでの国際交流の深化・拡充に対して大いなる貢献を新出している。
133	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	小野　勝次	小野　勝次 1）古典文学関係の修士論文を書く学生が多い。「現代国語古典文体集」という教科書に掲載される古典文学教材の相互関係を認識させつつ文献研究に取り組ませ、教育実践における教材研究にのるように指導する。 2）修士論文を執筆する段階では、調査した情報を整理・分析して、それを論理的に構築することが必要になるが、この段階において今・高校の「国語」の教科書に使用されている評論文と対応させ、その論理構成の把握を行わせる。これによって、「国語科」教材の評論文「読み」が書く指導能力をより高めることをめざす。	1）今回、小倉のもとで修士論文を書いた学生は、「現代国語古典文体集」という教科書を テーマとしていて、小・中・高校の教科書に採録されることはない歌集である が、和歌はいずれの校種の教科書でも必ず採用されるものである。修士論文についての研究をすすめ、和歌全をおさえ、また和歌の伝統的技巧と思考のパターンを探求されたと当該作品の分析をしていったため、教育実践の現場で役に立つ教材研究の基礎を形成することができた。 2）修士論文執筆の段階では、集めた材料を整理・分析して、論理的に組み立てるという プロセスがあったが、小・中・高校の国語科において重要な論説文（小学校に おいては説明的文章）の組み立ての分析・理解と、作文・小論文の指導方法につ なぐ手びなどった。	年度目標時に設定したとおりの内容を実践した。また、留学生については、本学での研究の成果を自国での日本語教育に役立てられるよう、日本国内だけでなく自国の日本語教育の現状についても充分に理解させ、その問題点や不足分を解決（解消）できるように研究を目指した指導を行った。	・1年生のクラス担任として、移植的に学生の支援・指導を行う。 ・学部のゼミと大学院のゼミを有機的に関連付けることで、学部生と大学院生が互いに学び合い、教え合えるような環境を構築する。 ・留学生からの要望に基づき、アカデミック日本語作文、日本語プレゼンテーション、日本人の考え方等の授業を行い、留学生の日本語（表現）力の有成に努力する。（「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本事情・日本文化」） ・日本語教育関連の授業であっても、日本語教育の現場だけでなく、国語科教育の現場にも役立てられるような内容にすることを目指す。（「日本語文法研究」「日本語音声表現研究」「日本語語彙論」など）	年度目標時に設定したとおりの内容を実践した。特に、ゼミ活動においては、他のゼミの学生にも自由に参加してもらったり、修了生にも研究発表に来てもらうなど、幅広い視点からの意見交換を行った。	・これまでと同様、日本語文法や意味に関する研究を行い、成果を公表する。 ・昨年度に引き続き、日本語教育、特に地域日本語教室における効果的な指導のあり方についての研究を行い、成果を公表する。 ・科学研究費補助金（若手研究(B)）に申請する。	・「現代教育大学授業実践研究」第13号に投稿していた論文（日常生活に直結する日本語を生活者としての外国人に習得させることを目指した授業実践についての論文（共著））が採択された。 ・「教育実践学論集」第16号（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）に投稿していた論文（意思文課題における技術のアピールの日所対照についての論文（共著））が採択された。 ・地域の特性に合った生活密着型の日本語を生活者としての外国人に習得させることを目指した授業実践についての論文を「専門教育大学授業実践研究」第14号に投稿した。（共著） ・「第20回専門教育大学国語教育学会」（8/24(日)開催）において、「意味の理解と知識状態の変化」と題した特別研究発表を行った。 ・2014年度日本語教育学会春季大会（5/31(土)-6/1(日)）に参加し、研究者としての研鑽を積んでいた。 ・2014年度日本語教育学会秋季大会（10/11(土)-10/12(日)）に参加し、研究者としての研鑽を積んでいた。 ・日本言語学会140回大会（11/15(土)-11/16(日)）に参加し、研究者としての研鑽を積んでいた。 ・言語使用者の知識の蓄積・整理・統合に関する総合的研究についての計画調書を、科学研究費補助金（若手研究(B)）に新規申請した。	・外国人留学生プログラムコーディネーター、国際交流委員、地域連携委員、個人情報保護担当者など、様々な立場から大学運営に貢献した。 ・6月と10月の大学院説明会（まとたて学内実施分）のコース別説明会にコース教員の一人として参加し、入学希望者にコースの説明等を行った。	・外国人留学生プログラムコーディネーター、国際交流委員、地域連携委員、個人情報保護担当者など、様々な立場から大学運営に貢献した。 ・6月と10月の大学院説明会（まとたて学内実施分）のコース別説明会にコース教員の一人として参加し、入学希望者にコースの説明等を行った。	附属校園の教員と互いに知識や問題意識を共有し合い、連携を強化する。 「公開講座」や「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」の運営に参加し、地域社会の貢献に応える。 ・公益社団法人日本語教育学会研究集会委員会の委員（四国地区）の役割を果たす。 ・留学生の学習・研究・生活のサポートを行う。 ・専門ボイントーシャクフェ大学と専門ボランティア日本語教室に携わり、地域日本語教育に貢献する。 ・徳島県教育委員会が進める「徳国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル」事業に携わり、外国人児童・生徒の学習支援に貢献する。	附属校園の教員と互いに知識や問題意識を共有し合い、連携を強化する。 「公開講座」や「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」の運営に参加し、地域社会の貢献に応える。 ・公益社団法人日本語教育学会研究集会委員会の委員（四国地区）の役割を果たす。 ・留学生の学習・研究・生活のサポートを行う。 ・専門ボイントーシャクフェ大学と専門ボランティア日本語教室に携わり、地域日本語教育に貢献する。 ・徳島県教育委員会が進める「徳国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル」事業に携わり、外国人児童・生徒の学習支援に貢献する。	【附属学校との連携】 ・「ふれあい実習」「主免教育実習」などの際に附属学校を訪問し、連携に取り組んだ。 ・学部附属連絡協議会（6/26(木)、2/26(木)）に出席し、附属校園の教員と知識や問題意識を共有することで、連携を強化することができた。 【「社会との連携」】 ・6/28(土)に本学で開講された公開講座「知ってるようで知らないことばの世界ー日常のことばを解剖するーJ」講師の一人として参加した。 ・徳島県国際交流協会（TOPIA）が主催する「日本語指導ボランティアスキルアップ講座」（全10回）の7名、5/24(土)と7/5(土)に講師として参加した。 ・10/20(月)に徳島県庁で開催された「平成26年度　徳国・外国人児童生徒支援連絡協議会」に、指導助言者の一人として参加した。 ・1/31(土)に徳島県国際交流協会（TOPIA）会議室で開かれた「平成26年度徳島で暮らす外国人のための日本語教育事業　第2回　運営委員会」に、第三者委員の委員として参加した。 ・「徳国・外国人児童生徒支援モデル事業」の一環として徳島県教育委員会から本学に委託された日本語教育研修業務」に携わり、本学教員の担当者の一人として（12/4(土)に本学で開催された「徳国・外国人児童生徒支援のための研修会」の運営に当たった。 【国際交流】 ・留学生3名（大学院生、学部特別聴講生）の指導教員として、学習・研究・生活の指導および サポートを行った。 ・専門ボランティア日本語教室の運営に携わり、地域社会（特に日本語の支援を必要としている方々）に貢献した。	・ICET（International Council on Education for Teaching）の本学開催（の準備委員を務めた。 ・日中教師教育学術研究集会企画委員を務めた。 ・10/29(水)と2/2(月)に「徳島県庁で開催された「平成26年度 徳島県内の大学と徳島県教育委員会の連携に関する連絡協議会 第1回事門部会（グローバル人材育成部会）・第2回専門部会（グローバル人材育成部会）」に本学の代表として出席した。 ・「2014年度日本語教育学会研究集会　第7回　四国地区」の本学開催（11/8(土)）に尽力した。
134	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	田中　大輝	これまで自身が携わってきた日本語教育分野の修士論文では、成人学習者（大学の留学生や地域日本語教室で学ぶ学習者）に対する日本語教育への貢献を念頭に置いて指導することが多かった。しかし、昨今は日本語指導が必要な外国人児童・生徒が増加傾向にあることから、学校教育の現場でも日本語教育分野の知見や経験が求められるようになってきている。そこで、今後の修士論文の指導に際しては、全国の外国人児童・生徒の受け入れ状況や国の施策等を理解するとともに、実際に受け入れを行っている学校の取り組みや問題点等についても調査させるなどし、幅広い学習者に対応できる研究となるよう、導いてゆきたい。	年度目標時に設定したとおりの内容を実践した。また、留学生については、本学での研究の成果を自国での日本語教育に役立てられるよう、日本国内だけでなく自国の日本語教育の現状についても充分に理解させ、その問題点や不足分を解決（解消）できるように研究を目指した指導を行った。	・1年生のクラス担任として、移植的に学生の支援・指導を行う。 ・学部のゼミと大学院のゼミを有機的に関連付けることで、学部生と大学院生が互いに学び合い、教え合えるような環境を構築する。 ・留学生からの要望に基づき、アカデミック日本語作文、日本語プレゼンテーション、日本人の考え方等の授業を行い、留学生の日本語（表現）力の有成に努力する。（「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本事情・日本文化」） ・日本語教育関連の授業であっても、日本語教育の現場だけでなく、国語科教育の現場にも役立てられるような内容にすることを目指す。（「日本語文法研究」「日本語音声表現研究」「日本語語彙論」など）	年度目標時に設定したとおりの内容を実践した。特に、ゼミ活動においては、他のゼミの学生にも自由に参加してもらったり、修了生にも研究発表に来てもらうなど、幅広い視点からの意見交換を行った。	・これまでと同様、日本語文法や意味に関する研究を行い、成果を公表する。 ・昨年度に引き続き、日本語教育、特に地域日本語教室における効果的な指導のあり方についての研究を行い、成果を公表する。 ・科学研究費補助金（若手研究(B)）に申請する。	・「現代教育大学授業実践研究」第13号に投稿していた論文（日常生活に直結する日本語を生活者としての外国人に習得させることを目指した授業実践についての論文（共著））が採択された。 ・「教育実践学論集」第16号（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）に投稿していた論文（意思文課題における技術のアピールの日所対照についての論文（共著））が採択された。 ・地域の特性に合った生活密着型の日本語を生活者としての外国人に習得させることを目指した授業実践についての論文を「専門教育大学授業実践研究」第14号に投稿した。（共著） ・「第20回専門教育大学国語教育学会」（8/24(日)開催）において、「意味の理解と知識状態の変化」と題した特別研究発表を行った。 ・2014年度日本語教育学会春季大会（5/31(土)-6/1(日)）に参加し、研究者としての研鑽を積んでいた。 ・2014年度日本語教育学会秋季大会（10/11(土)-10/12(日)）に参加し、研究者としての研鑽を積んでいた。 ・日本言語学会140回大会（11/15(土)-11/16(日)）に参加し、研究者としての研鑽を積んでいた。 ・言語使用者の知識の蓄積・整理・統合に関する総合的研究についての計画調書を、科学研究費補助金（若手研究(B)）に新規申請した。	・外国人留学生プログラムコーディネーター、国際交流委員、地域連携委員、個人情報保護担当者など、様々な立場から大学運営に貢献した。 ・6月と10月の大学院説明会（まとたて学内実施分）のコース別説明会にコース教員の一人として参加し、入学希望者にコースの説明等を行った。	・外国人留学生プログラムコーディネーター、国際交流委員、地域連携委員、個人情報保護担当者など、様々な立場から大学運営に貢献した。 ・6月と10月の大学院説明会（まとたて学内実施分）のコース別説明会にコース教員の一人として参加し、入学希望者にコースの説明等を行った。	附属校園の教員と互いに知識や問題意識を共有し合い、連携を強化する。 「公開講座」や「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」の運営に参加し、地域社会の貢献に応える。 ・公益社団法人日本語教育学会研究集会委員会の委員（四国地区）の役割を果たす。 ・留学生の学習・研究・生活のサポートを行う。 ・専門ボイントーシャクフェ大学と専門ボランティア日本語教室に携わり、地域日本語教育に貢献する。 ・徳島県教育委員会が進める「徳国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル」事業に携わり、外国人児童・生徒の学習支援に貢献する。	【附属学校との連携】 ・「ふれあい実習」「主免教育実習」などの際に附属学校を訪問し、連携に取り組んだ。 ・学部附属連絡協議会（6/26(木)、2/26(木)）に出席し、附属校園の教員と知識や問題意識を共有することで、連携を強化することができた。 【「社会との連携」】 ・6/28(土)に本学で開講された公開講座「知ってるようで知らないことばの世界ー日常のことばを解剖するーJ」講師の一人として参加した。 ・徳島県国際交流協会（TOPIA）が主催する「日本語指導ボランティアスキルアップ講座」（全10回）の7名、5/24(土)と7/5(土)に講師として参加した。 ・10/20(月)に徳島県庁で開催された「平成26年度　徳国・外国人児童生徒支援連絡協議会」に、指導助言者の一人として参加した。 ・1/31(土)に徳島県国際交流協会（TOPIA）会議室で開かれた「平成26年度徳島で暮らす外国人のための日本語教育事業　第2回　運営委員会」に、第三者委員の委員として参加した。 ・「徳国・外国人児童生徒支援モデル事業」の一環として徳島県教育委員会から本学に委託された日本語教育研修業務」に携わり、本学教員の担当者の一人として（12/4(土)に本学で開催された「徳国・外国人児童生徒支援のための研修会」の運営に当たった。 【国際交流】 ・留学生3名（大学院生、学部特別聴講生）の指導教員として、学習・研究・生活の指導および サポートを行った。 ・専門ボランティア日本語教室の運営に携わり、地域社会（特に日本語の支援を必要としている方々）に貢献した。	・ICET（International Council on Education for Teaching）の本学開催（の準備委員を務めた。 ・日中教師教育学術研究集会企画委員を務めた。 ・10/29(水)と2/2(月)に「徳島県庁で開催された「平成26年度 徳島県内の大学と徳島県教育委員会の連携に関する連絡協議会 第1回事門部会（グローバル人材育成部会）・第2回専門部会（グローバル人材育成部会）」に本学の代表として出席した。 ・「2014年度日本語教育学会研究集会　第7回　四国地区」の本学開催（11/8(土)）に尽力した。
135	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	黒田　俊太郎	文学的教材は校種を問わず国語科教科書に載録される。文学的教材を児童・生徒に教え伝えたのには、教師はその文学的教材に対する理解を事前に深めなければならない。修士論文の指導にあたっては、この理解を深化させる方法を検討してもらうことを重視し、次のような取り組みを行っている。 1)文学的教材に関する情報（作者情報・同時代評・時代背景・先行研究）収集の方法の伝達。 2)文学的教材の読解に際し要求される方法・理論の紹介。 3)参考にされるべき参考文献の紹介。	・修士論文を執筆した学生、及び執筆中の学生に対し適切な指導を行い、年度目標は達成された。 1)文学的教材に関する情報を適宜伝達し、学生自身の文献調査に際しては、調査方法について適切に伝達した。 2)文学的教材の読解の際に必要な方法・理論を紹介し、その方法・理論の理解を促す助言を行った。 3)文献調査・理論に関する参考文献を、適宜紹介した。	1)ロで取り上げたことに意識的に取り組み、学生の実践能力の向上を図る。 2)相互生とのコミュニケーションを密にし、卒論・修論の完成に向けて、綿密な卒論・修論指導を行った。 3)専担2年次セクラス担当教員として、教育の充実を図るとともに、生活面等に対する指導を行う。	1)ロで取り上げたことに意識的に取り組み、学生の実践能力の向上を図った。 2)相互生とのコミュニケーションを密にし、卒論・修論の完成に向けて、綿密な卒論・修論指導を行った。 3)専担2年次セクラス担当教員として、講義・合宿研修などを通じて、教育の充実を図り、また生活指導も行った。	1）　ロマン主義文学とナショナリズムとの関係に関する研究を継続して行い、学会・紀要に投稿した。 2）中四国・関西地方を中心とした学内外の研究者と積極的に交流した。 3）地域文学に関する調査研究を行う。	1）　ロマン主義文学とナショナリズムとの関係に関する研究を行い、学会・紀要に投稿した。 2）中四国・関西地方を中心とした学内外の研究者と積極的に交流した。 3）地域文学に関する調査研究を行う。	1)ロマン主義文学とナショナリズムとの関係に関する研究を行い、学会・紀要に投稿した。 2)教育実践についての研究に平成25・27年度（2年目）にあたる今年度は、「風木系統」代表的本文である富岡平・乙木の相本の作者間に関する調査研究に取り組む。 2)「風木系統」本文と他系統の本文との相互関係の解明について、研究の第一段階である総合作業に着手する。 2)上の1)の研究テーマに関して単著論文を書き、レフリー付きの学術雑誌に投稿する。	1)国際交流委員として、本学の国際化に貢献する。 2)留学生コーディネーターとして、留学生の教育・学生生活の改善に貢献する。	1)学部入試委員会委員として梅門高校の学部・学科ガイダンスに赴いた。また大学入試センター試験・学部入学試験（推薦・前期期）の円滑な運営・実施につとめた。 　学生支援委員会委員として、「学園だより」の編集業務に携わった。また学生の生活面に関する相談の整備につとめた。 2)同窓コースの予算管理・設備の充実等、担当する業務を滞り無く遂行した。 3)教育実習生の研究授業・評価授業に参加し、受け入れ校と連携しながら指導・助言を行った。	1)学部入試委員会委員として梅門高校の学部・学科ガイダンスに赴いた。また大学入試センター試験・学部入学試験（推薦・前期期）の円滑な運営・実施につとめた。 　学生支援委員会委員として、「学園だより」の編集業務に携わった。また学生の生活面に関する相談の整備につとめた。 2)同窓コースの予算管理・設備の充実等、担当する業務を滞り無く遂行した。 3)教育実習生の研究授業・評価授業に参加し、受け入れ校と連携しながら指導・助言を行った。	1)學部附属連絡協議会・附属校園の授業研究会等に参加し、適切な指導・助言を行った。 2)「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」に登録し、講師として地域社会に貢献する。 3)徳島開催の研究会に参加するなどして地域社会との交流をはかり、地域の文化的活動の新興に貢献する。 4)各学会委員として役割を遂行する。	1)學部附属連絡協議会・附属校園の授業研究会等に参加し、適切な指導・助言を行った。 2)「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」に登録し、講師として地域社会に貢献する。 3)徳島出身の作家生田花世に関する文献を収集し、地域文化の発掘につとめた。 4)島崎藤村学会学会実行委員として、大会開催に向けた取り組みをおこなうなど、学会委員として役割を遂行した。	言語系コース（国語）のコース長として、コースの業務全体を主導する任を果たした。特に平成25年度は、平成25年度末に転出した国語学（現代語）担当教員の後任人事が進まされ、教員1名減の状態でコースの運営にあたることとなったが、現有の教員で一致団結して活力ある学部を作ることができた。
136	人文・社会系教育部	言語系コース（国語）	小島　明子	1)「古典文学」に関する修士論文を書く学生が多い。「現代国語古典文体集」という教科書に掲載される古典文学教材の相互関係を認識させつつ文献研究に取り組ませ、教育実践における教材研究にのるように指導する。 2)修士論文を執筆する段階では、調査した情報を整理・分析して、それを論理的に構築することが必要になるが、この段階において今・高校の「国語」の教科書に使用されている評論文と対応させ、その論理構成の把握を行わせる。これによって、「国語科」教材の評論文「読み」が書く指導能力をより高めることをめざす。	1)今回、小倉のもとで修士論文を書いた学生は、「現代国語古典文体集」という教科書を テーマとしていて、小・中・高校の教科書に採録されることはない歌集である が、和歌はいずれの校種の教科書でも必ず採用されるものである。修士論文についての研究をすすめ、和歌全をおさえ、また和歌の伝統的技巧と思考のパターンを探求されたと当該作品の分析をしていったため、教育実践の現場で役に立つ教材研究の基礎を形成することができた。 2)修士論文執筆の段階では、集めた材料を整理・分析して、論理的に組み立てるというプロセスがあったが、小・中・高校の国語科において重要な論説文（小学校においては説明的文章）の組み立ての分析・理解と、作文・小論文の指導方法につなぐ手びなどった。	・修士論文を執筆した学生、及び執筆中の学生に対し適切な指導を行い、年度目標は達成された。 1)文学的教材に関する情報を適宜伝達し、学生自身の文献調査に際しては、調査方法について適切に伝達した。 2)文学的教材の読解の際に必要な方法・理論を紹介し、その方法・理論の理解を促す助言を行った。 3)文献調査・理論に関する参考文献を、適宜紹介した。	1)ロで取り上げたことに意識的に取り組み、学生の実践能力の向上を図った。 2)相互生とのコミュニケーションを密にし、卒論・修論の完成に向けて、綿密な卒論・修論指導を行った。 3)専担2年次セクラス担当教員として、教育の充実を図るとともに、生活面等に対する指導を行う。	1)ロで取り上げたことに意識的に取り組み、学生の実践能力の向上を図った。 2)相互生とのコミュニケーションを密にし、卒論・修論の完成に向けて、綿密な卒論・修論指導を行った。 3)専担2年次セクラス担当教員として、講義・合宿研修などを通じて、教育の充実を図り、また生活指導も行った。	1)　ロマン主義文学とナショナリズムとの関係に関する研究を行い、学会・紀要に投稿した。 2)　中四国・関西地方を中心とした学内外の研究者と積極的に交流した。 3)　地域文学に関する調査研究を行う。	1)ロマン主義文学とナショナリズムとの関係に関する研究を行い、学会・紀要に投稿した。 2)教育実践についての研究に平成25・27年度（2年目）にあたる今年度は、「風木系統」代表的本文である富岡平・乙木の相本の作者間に関する調査研究に取り組む。 2)「風木系統」本文と他系統の本文との相互関係の解明について、研究の第一段階である総合作業に着手する。 2)上の1)の研究テーマに関して単著論文を書き、レフリー付きの学術雑誌に投稿する。	1)国際交流委員として、本学の国際化に貢献する。 2)留学生コーディネーターとして、留学生の教育・学生生活の改善に貢献する。 3)教育実習生の研究授業に可能な限り参加し、受け入れ校と連携しながら適切な指導・助言を行う。	1)学部入試委員会委員として梅門高校の学部・学科ガイダンスに赴いた。また大学入試センター試験・学部入学試験（推薦・前期期）の円滑な運営・実施につとめた。 　学生支援委員会委員として、「学園だより」の編集業務に携わった。また学生の生活面に関する相談の整備につとめた。 2)同窓コースの予算管理・設備の充実等、担当する業務を滞り無く遂行した。 3)教育実習生の研究授業・評価授業に参加し、受け入れ校と連携しながら指導・助言を行った。	1)學部附属連絡協議会・附属校園の授業研究会等に参加し、適切な指導・助言を行った。 2)「教育支援講師・アドバイザー等派遣事業」に登録し、講師として地域社会に貢献する。 3)徳島出身の作家生田花世に関する文献を収集し、地域文化の発掘につとめた。 4)島崎藤村学会学会実行委員として、大会開催に向けた取り組みをおこなうなど、学会委員として役割を遂行した。	言語系コース（国語）のコース長として、コースの業務全体を主導する任を果たした。特に平成25年度は、平成25年度末に転出した国語学（現代語）担当教員の後任人事が進まされ、教員1名減の状態でコースの運営にあたることとなったが、現有の教員で一致団結して活力ある学部を作ることができた。

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び奈良大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び奈良大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
136	人文・社会系教育部	社会系コース	青笠　輪子	経済学を学ぶ意義は、単に効率を追求する目的ではなく、自分の効用や利益を最大にするために何をしたらよいのかを考え、実践していくことである 自分の夢を実現するために、何をしたらよいのか、そのためには費用がかかり、その費用を作るためには働かなくてはならない。 今日の教育のなかでは、児童や生徒が「生きる力」を育成すると言いながらも、どうすれば「生きる力」を身につけることができるのかについて教えられない そのために、多くの変者がパラサイトシングルなど親元で暮らかい生活をしている。 私は修士論文の指導にあたり、院生自身が「生きる力」を身につけて、児童や生徒の「生きる力」を育成することができるようなテーマ設定を考えさせている。	本年度のゼミでは修士論文のテーマとして、児童や生徒の「生きる力」を育成すること で、教育から職業へのトランジションがスムーズに行われることを目ざ ている。教員養成大学大学院の修士論文として、十分に学校の教育実践に貢献する内容になると期待している。	授業実践のツールとして、統計、表やグラフの作成やパワーポイントを使いこなせるように指導する。	大学院に臨らず、学部の授業の中でも、教材開発のために統計の手法、表やグラフの作成、パワーポイントを用いた授業実践ができるように指導している。	9月に日本経済学会で日本の非正規雇用についての研究報告をして 年度内に学会報告の論文を投稿する予定である。	日本経済学会での学会報告を基礎に、現在モデルビルディングを行っている。	9月の日本経済学会の会場は福岡市の西南学院大学である 研究報告の後、福岡近辺の大学に噴門教育大学大学院の広報活動を行う予定である。	ここ2年の間、他大学を訪問して噴門教育大学大学院の広報活動を行い、噴門教育大学大学院の良さがあまり知られていないことを実感したのは今後の広報活動に不向である。 立地条件や長期履修制度、就職支援室における下寮なサポート体制などをさらにアピールしていこと考えている。	徳島県土地利用審査会委員、 徳島県環境審議会委員、 徳島県リサイクル認定制度審査会委員、 徳島市中小企業振興対策委員会委員 徳島市中小企業振興対策委員会委員	経済学の専門知識を生かして、徳島県土地利用審査会委員、徳島県環境審議会委員、徳島県リサイクル認定制度審査会委員、徳島市中小企業振興対策委員会委員を務めて、地域貢献を行った。	
137	人文・社会系教育部	社会系コース	藤生　多聞	修了研究と学校での教育実践力向上を統ぱつつ目ぬふいて記載する。私が主 修する法学ゼミでは、本学修任務後から、論文の最終前に「教員養成大学における研究とその意義」という項目を必ず設定し、学生にみよりも見地からの調査を求めて来た。法学の専門的な研究に終始するのではなく、あくまで教員養成大学に所属する学生がシラデイシティ(ティ)を常に意識させつつ、教育現場・社会で活用可能な研究を、年度毎に学生に指導していきたい。	上記目標をキ分達成できたと考えている。年度末は修了研究論文執筆者は3名おり、「特定秘密保護法の運用と課題」「排外子相続分差別規定をめぐる研究」「ネルソン・マンデラ大統ア(リ)カ共和国憲法」ゆ下一つとなっている。社会的に注ゆ目を向ける内容を修は研究して論文にまとめればよいという姿勢ではなく、常に教育現場との関連性を意識させつつ修了研究に臨むよう学生に指導してきた。本職員 教職員自己 に関しては、ゼミ内では一年間にわたって世界史に関する包括的で最新の文献を、ゼミ構成員全員による読書会形式で読み進めている。ここれにより、どもすれば狭くなりがちな自らの修士論文のテーマを越えて世界史(歴史)に関する広範な知見や方法論を修得することを目指すが、そのことが現場での指導の一助になるのではないかと考えている。	学生生活支援としては、セクシャルハラスメント相談室相談員、学生生活総合相談員、講外活動連絡協議会委員などを年度毎に担当することとなっているので、これらの職責をしっかりと果たしていきたいと考えている。 また、経費部額問として、2013年度には「チャウウルメーダーシップセミナー」に出席し、学生の集団討論の指導にあたった。顧問教員として当該セミナーに出席する教員の取は非常にまれ。私は2014年度も出席し、国外活動における学生生活支援に取り組みたいと考えている。 また、例年学生からの要請に応じて提供している教員採用試験対策サービスは、今年度も継続にしっかりと応じていきたい。	2014年度は、我ロ日本の論文を発表済みである「「南スーダンPKO自衛隊による駆国軍への弾薬供与問題」(法学セミナー2014年4月号)が、民主主義科学者協会法律部会および法律時報編集部からの論稿を寄せ、思想面からアプローチする平和主義に関する論文を8月10日締切で執筆することになっている。3か月の期間にしっかりと研究を要請し、その成果を論文にまとめたいと考えている。 また、2014年度は、全国憲法研究会・インテルスクループの代表を務めるよう依頼されており、これに応じた。10月初の学会でインテルスト・グループの研究会が開催されるため、研究会が十分な成果をあげることができるよう努めたい。	2014年度は、上述のように研究成果をあげることが出来た。そのほか、「イギリス文化事典」(丸善出版、2014)、高市正博編「憲政史料-ことばからみる集団的自衛権・戦争をしない国を守るために」(合同出版、2014)などにも関載した。10月初の全国憲法研究会では、インテルスト・グループによる共同研究会を無事に開催することが出来た。代表としては最小限の仕事しか出来なかったように思うが、平和憲法研究会に所属する生方から大きなご助力をいただいた。関西大学の付田良彦教授による「集団的自衛権行使解釈と安保法制整備」という報告をいただき、活発な討論を展開することが出来たことは大きな収穫であった。	2014年度は、社会系教育コース教事、就職委員会委員を担当することになっているので、これらの職責をキ分に果たしたいと考えている。	上記目標を達成できたと考えている。	今年度の法学ゼミでは、3名の学部生が新たに所属することとなった。ゼミ生の教育実習が9月に実施される際、研究授業への出席や実習参観を積力的に行い、学生の教育実践力涵養に関わりたいと考えている。	上記目標を達成できたと考えている。	
138	人文・社会系教育部	社会系コース	町田　哲	「私は、これまでの授業実践でも、知識の伝授だけではなく、歴史を考える視点の 獲得を目指して来た。そうした視座を持ち思考できることこそが、意義でか・つ深みのある教材を作成するかどうかであり、ひいては学校の教育実践に貢献することになると考えている。したがって、修士論文の指導においては、従前の研究成果を踏まえつつ、院生自身が自らの手で「具体的な事例」を検証し、そこから議論を組みかさて、課題を解明していくプロセスを重視したい。こうした応用可能な力量をつけることができるように、院生に指導・助言していく。	私は、これまでの授業実践でも、知識の伝授だけではなく、歴史を考える視点の獲 得を目指して来た。そうした視座を持ち思考できることこそが、意義でか・つ深みのある教材を作成するかどうかであり、ひいては学校の教育実践に貢献することになると考えている。したがって、修士論文の指導においては、従前の研究成果を踏まえつつ、院生自身が自らの手で「具体的な事例」を検証し、そこから議論を組みかさて、課題を解明していくプロセスを重視した。そこで、院生自身が自らの手で「具体的な事例」を検証し、そこから議論を組みかさて、課題を解明していくプロセスを重視した。こうした応用可能な力量をつけることができるように、院生に指導・助言した。具体的には「ゼミ」に所属する院生を名に対象に、院生自身が「社会的に歴史資料を探り、検証し、解明していく課題を重視して、その指導をすすめた。	1)社会科教育で重要な、地域史の方法と実践について、理解を深められるよう授業を進めた。具体的には、地域で観察に生きる人々の営みが歴史を動かしていることの理解が得られるよう努力する。 2)担当講義（日本史）の充実を図るため、授業内容のリニューアル変更を行った。 その際、通史的視点と、その時代の特徴を多角的に捉えるよう視点、このように多角ラスに留意した。 3)学生の自主・自立を尊重しながら、学生の進路・悩み等の相談に随時応じた。	1)科研費研究補助金（基盤研究C）「近世列波における森林資源と地域社会に関する構造論的研究」(3年間）の2年目である本年度は、昨年度までの成果を必ず反森林資源という視点から、阿波、どりわけ那賀川流域における山村社会の歴史的研究を推進する。 2)昨年度に引き続いて徳島県から受託予定の、四国八十八カ所札所寺院の文化財調査報告書の、その歴史的解釈を目指す。 3)近世後期の阿波の半馬皮流通について、検討を深める。	1)科研費研究補助金（基盤研究C）「近世列波における森林資源と地域社会に関する構造論的研究」(3年間）の2年目である本年度は、昨年度までの成果を必ず反森林資源という視点から、阿波、どりわけ那賀川流域における山村社会の歴史的研究を推進した。新出史料にもとづき、「近世後期阿波における森林の分水と林間」について原稿を執筆した。「噴門教育大学研究紀要」50で発表できた。 2)札所寺院の文化財調査報告書について、本年度は県庁の事情により調査はなかったが、昨年度までの調査成果をまとめる作業を進めた。恩山寺文化財調査報告書を作成し、今年度中に徳島県教育委員会より2015年3月に刊行できた。 3)近世後期の徳島藩における御用反の調達をテーマに論文を執筆し提出できた。	社会系コース、人文・社会系教育部の一員として、所定の各種会議に参加し、職務を遂行する。	人文社会系教育部の一員として、予算財務委員会に参加し、職務を遂行した。	1)徳島県教育委員会からの受託を予定している四国八十八カ所寺院の文化財調査報告書をすすめ、その史料的価値の監修を果たすことで、その成果を広く社会に還元している。 2)噴門大学後や歴史資料保全ネットワーク等における研究および実践活動を通じて、地域との人的、学術的な交流を図る。 3)附属小中学校の実習・研究会等にできるだけ参加・支援する。	1)授業参観や附属学校教員との意見交換などを通じて附属学校での実習指導を支援する（附属学校）。 2)噴門大学後での活動を通じて地域社会との人的・学術的な交流を推進するとともに、自治体の公開講座を担当することで市民に向けて情報発信を行う（社会連携）。 3)留学生を積極的に受け入れる（国際交流）。	1)海外出張のため9月中に行なわれた指導学生の教育実習授業参観ができなかったが、11月での調査実習では附属学校に出向き、授業を参観し、指導を行うとともに、附属学校教員と意見交換を行った。（附属学校） 2)噴門大学後の代表として大会（10月）および年4回の例会を企画運営した。特に、研究大会に関しては噴門ボイイ館と協力して「第一次世界大戦と終戦収容所」のテーマで板東および青野原（高麗庵）の収容収容所に関する講演会を実施し、多くの一般市民が来場した。また、11月には松原市図書館と連携して「世界史の中のヨーロッパ統合」のテーマで市民向け公開講演を行い、約30名が参加した。（社会連携） 3)残念ながら、今年度は留学生を受け入れる機会がなかった。（国際交流）	特に以下の3点で貢献した。 ①授業の充実（方法・教材など）を積極的にはかり、学生の外国史への理解を可能な限り容易・具体的にするように努め、結果として授業アンケートなどで学生の高い評価を獲得することができた。 ②科研費研究補助金（継続）を獲得し、本学の外部資金獲得に貢献した。 ③イメリで来分与史料の収集を行い、新たに発見した史料を用いて査読付き論文2本を投稿し採用された。	とくになし。
139	人文・社会系教育部	社会系コース	須田　貴博	教員（特に中等学校）にめのられている能力には、生徒指導や学級経営の能力に加えて、教科を指導する専門的な能力が挙げられる。その場合に重要となるのは、教科内容に対して教員自身が興味・関心を抱いて研ぎ活部ど、教科書の記述をその背景を含めてきちんと理解し、広く教材を研究する能力であろう。このことを踏まえて、修士論文の指導に当たっては、「歴史学（世界史）研究の公開点として、学生の興味・関心に応じたテーマを選択させるとともに、教科書記述や学校教育の中でのあり方についても検討させる。立中・高等学校の世界史分野においてみずから題材的に教材研究を進められるように関連文献の広範な涉猟とその読解を行わせるといった点に重点を置いた指導を行いたい。また、修士論文の研究とは別に、ゼミ内では一年間にわたって世界史に関する包括的で最新の文献を、ゼミ構成員全員による読書会形式で読み進めていく。これにより、どもすれば狭くなりがちな自らの修士論文のテーマを越えて世界史（歴史）に関する広範な知見や方法論を修得することを目指すが、そのことが現場での指導の一助になるのではないかと考えている。	目標に掲げたように、修士論文の指導においては、歴史学（世界史）の内容について、学生の興味・関心に応じたテーマを選択させるとともに、教科書記述や学校教育の中でのあり方についても検討した。なお、ゼミでは学部学生3名、大学院生3名を指導した。 2)教員採用試験を受験するゼミ所属学生には大学が行う諸行事・説明会への出席を促し、卒業・修了年次の指導学生3名全員が教員採用試験を突破した。	1)授業・ゼミ・会議以外は研究室を開放して、ゼミ所属学生や講義受講者などの質問・相談に随時接種的に対応した。なお、ゼミでは学部学生2名、大学院生3名を指導した。 2)情報提供や日常の対話などを通じて、指導学生の就職指導を行い、特に教員採用試験の受験または大学院への進学に対する動機づけをはかる。	1)科学研究費補助金の申請（継続）を行う。 2)現在の科研テーマに関して夏期休暇中に進捗して史料収集を行い、その分析を進める。 3)これまで収集した史料と併せて分析・検討を加えていき、論文あるいは学会発表を通してその研究成果を公表する。	1)科学研究費補助金（継続）が採択された（基盤研究C）。 2)4月下旬から9月にかけて調査し、予定通り科研テーマに関する史料調査・収集を実施し、その後、収集した史料の分析を行った。 3)歴史学の専門雑誌（査読あり、人類文）および大学（現代史の専門雑誌（査読あり）に論文を投稿し、いずれも掲載されることになった。	1)学内での委員としての職責を果たし、本学の運営に貢献する。	大学院入試委員会の委員として委員会に出席し、コースとのパイプ役を果たすとともに、学外説明会（福岡・岡山）を担当した。	1)授業参観や附属学校教員との意見交換などを通じて附属学校での実習指導を支援する（附属学校）。 2)噴門大学後での活動を通じて地域社会との人的・学術的な交流を推進するとともに、自治体の公開講座を担当することで市民に向けて情報発信を行う（社会連携）。 3)留学生を積極的に受け入れる（国際交流）。	1)海外出張のため9月中に行なわれた指導学生の教育実習授業参観ができなかったが、11月での調査実習では附属学校に出向き、授業を参観し、指導を行うとともに、附属学校教員と意見交換を行った。（附属学校） 2)噴門大学後の代表として大会（10月）および年4回の例会を企画運営した。特に、研究大会に関しては噴門ボイイ館と協力して「第一次世界大戦と終戦収容所」のテーマで板東および青野原（高麗庵）の収容収容所に関する講演会を実施し、多くの一般市民が来場した。また、11月には松原市図書館と連携して「世界史の中のヨーロッパ統合」のテーマで市民向け公開講演を行い、約30名が参加した。（社会連携） 3)残念ながら、今年度は留学生を受け入れる機会がなかった。（国際交流）	特に以下の3点で貢献した。 ①授業の充実（方法・教材など）を積極的にはかり、学生の外国史への理解を可能な限り容易・具体的にするように努め、結果として授業アンケートなどで学生の高い評価を獲得することができた。 ②科研費研究補助金（継続）を獲得し、本学の外部資金獲得に貢献した。 ③イメリで来分与史料の収集を行い、新たに発見した史料を用いて査読付き論文2本を投稿し採用された。	
140	人文・社会系教育部	社会系コース	伊藤　直之	私の専門は教科教育学（社会科教育学）であり、なかでも地理的領域に強い関心を寄いている。また、研究方法としては、授業開発のほかに、諸外国のカリキュラムや単元などの比較考察を特色としている。そのため、これまでのゼミでの研究の方 向は、小学校社会科地域学習や中学校社会科地理的分野での"実践"を前提とした授業開発や、イギリスにおける市民性教育に寄与する教育プログラムの分析などを指導してきた。これらの研究は、いずれも学校の教育実践に直接的に貢献するものである。今後も引き続き、本学の教員養成大学の大学院であることを踏まえ、将来の教育実践にダイレクトに寄与する授業開発研究や比較分析研究の指導を行っていきたいと考えている。	私の専門は教科教育学（社会科教育学）であり、なかでも地理的領域に強い関心を寄いている。また、研究方法としては、授業開発のほかに、諸外国のカリキュラムや単元などの比較考察を特色としている。そのため、修士論文では、小学校社会科地域学習や中学校社会科地理的分野での"実践"を前提とした授業開発や、イギリスにおける市民性教育に寄与する教育プログラムの分析などを指導してきた。これらの研究は、いずれも学校の教育実践に直接的に貢献するものである。 2014年度も、上述の教科教育学（社会科教育学）の方法論にもとづき、小学校社会科地理的分野での"実践"を前提とした授業開発研究の修士論文指導を行った。 今後も、学校の教育実践に貢献する修士論文指導を行うことに変わりはない。	(1)主免教育実習の取り組みを可能な限り参観し、実地教育における学生の教育実践力の向上に貢献したい。 (2)卒業論文および修士論文指導において、教育実践にダイレクトに寄与する授業開発研究や比較分析研究の指導を行う。 (3)現式野球部顧問として、学生のクラブ活動のさらなる充実のために、支援する。	(1)主免教育実習の取り組みを積極的参観し、実地教育における学生の教育実践力の向上に貢献した。 (2)卒業論文および修士論文指導において、教育実践にダイレクトに寄与する授業開発研究や比較分析研究の指導を行った。 (3)現式野球部顧問として、学生のクラブ活動のさらなる充実のために、支援した。	(1)科学研究費補助金に基づく、イギリスをはじめとする諸外国の社会系教科教育の調査にもとづく成果発表。 (2)教員養成プログラムの充実を目指して、未熟な教育実習生が陥りがちな授業構成上の課題と改善に向けた展望に関する授業開発プロセス解明研究の成果を、地域正義・諸田智仁編「教育実践学」、「市民性教育研究の歩武」風間書房（2015年3月刊行）に載した。 (3)著書および論文業績の積み増しを図る。	(1)科学研究費補助金に基づく、イギリスをはじめとする諸外国の社会系教科教育の調査にもとづく成果発表。11月2日に全国社会科教育学会（愛媛大学）で発表した。 (2)本熟の教育実習生が陥りがちな授業構成上の課題と改善に向けた展望に関する授業開発プロセス解明研究の成果を、地域正義・諸田智仁編「教育実践学」、「市民性教育研究の歩武」風間書房（2015年3月刊行）に載した。 (3)業績として著書（分担執筆）1件追加した。もう1件は発行の遅れのため、2015年初には刊行される見込みである。	(1)科学研究費補助金をはじめとする外部資金の獲得 (2)業務先における本学大学院のPR (3)「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」への貢献 (4)「修士課程における専修免許状の実質化を図るカリキュラム開発」への貢献	(1)科学研究費補助金（基盤C）を獲得した。 (2)業務先において本学大学院のPRを行い、関心ある学部生を本学および附属中学校へ案内した。 (3)「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」において、公開授業者やシンポジウム登壇を通じて「特記事項参照」貢献した。 (4)「修士課程における専修免許状の実質化を図るカリキュラム開発」で「教科内容構成」のシラバス作成に尽力した。	(1)附属小学校・中学校の研究大会における研究協力および指導助言、（附属学校） (2)徳島県小学校教育研究会社会部会・中学校教育研究会社会部会への協力。（社会連携） (3)中日教師教育学研究集会開催に向けた準備協力。（国際交流）	(1)附属小学校や教育と共同研究を進め、その成果を梅津正美・原田智仁編「教育実践学」として社会科授業研究の探求」風間書房（2015年3月刊行）に著した。（附属学校） (2)徳島県内の社会科教育研究会（社会部会）や、中学校教育研究会（社会部会）への協力。 (3)中日教師教育学研究集会開催に向けた準備を進めている。（国際交流） (4)韓国の研究者と市民性教育に関する歴史的調査を進めており、現在も継続中である（国際交流）	「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」第1回シンポジウム（2014年4月：聖徳大学）における教科内容学「社会」の公開授業の担当し、一定の成果を得た。 また、その後、第2回シンポジウム（2014年12月：梅花女子大学）において、その成果を発表した。 以上の通り、本学の重点的取り組みに積極的に参画することで、総合的貢献を果たした。	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）系履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）系履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
141	人文・社会系教育部	社会系コース	大石　雅章	【学生の求める資点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、専学部や文学部等の専門学部の内容ではなく学校の教育実践に直結するものが求められている。学校の教育実践（心理教育相談を含む）に貢献する修士論文の指導について、あなたの取り組みや工夫を示してください。　教職大学院においては、学部卒業後教育学研究科の実践に具体的にどのように活かしていくか、あなたの指導や一般セ○の工夫を示してください。	教育内容学とその日本史学ゼいに教えるのか、または中世点から修修作成にいおいていかに指導すべきか、常になぜ?などがすすめている。平成24年度修了の院生ら人もうでるが、多の場合入学以前からテーマを決めている場合がそ、ものテーマをたがしながら、社会科教員として必要な取力、日本・世界の歴史と、地域の歴史と年刊などなどもたった指導し教える能力を身につけさせるように努めている。一例を挙げれば、徳島県から派遣された中学校教員（現在中学校教諭）が、本学の遠隔研究でたどりへ力を活かして、子どもたちに地域での課き取りや石造物の調査を指導し、生きた地域学習を行いながら、日本の文化や歴史を学ばせている。このような実践的な学習を担える教員としての能力を身につけさせるように努める。	1)授業では、受講生が教員としての実力を高めるために、実践的な授業づくりに努め、学生の意見にも積極的に応える。また自国語語に関する地域社会支援へのボランティア活動を通じて、学生たちの教員としての資質を高めるよう努める。 2)学生生活においては、学生支援担当の副学長として、本学の学生生活の指導と その環境の充実に努める。また教員としては指導学生を中心に学生とのコミュニケーションを絶やさず、彼ら が学ぶ学習に支障のない生活環境を維持できるよう、可能な限り支援する。	1)学生の特色となっている教育実践力を見据えた遠路を活用した教育研究活動をチームとしてすすめる。 2)自己の研究テーマである中世中院史研究をさらにすすめている。それにあわせて、教育においてもその成果を活用できるように努めた。その成果の一部は記載に「中世後期の地域寺院である観心寺の文配」を報告した。	中間報告 1)本学の特色となっている教育実践力を見据えた遠路を活用した教育研究活動をチームとしてすすめる。 2)自己の研究テーマである中世中院史研究をさらにすすめている。それにあわせて、教育においてもその成果を活用できるように努めた。その成果の一部は記載に「中世後期の地域寺院である観心寺の文配」を報告した。	1)学生生活支援・就職支援担当副学長として、責任を果たせるよう可能な限り努め、とくに専門職業人としての教員養成大学として学生のキャリアアップを目指した教育支援（就職支援）および大学生活支援をすすめ、その成果が大いに発揮できるよう努める。 2)東2棟の中規模程が必ず達成できるよう、学生支援委員会・就職委員会などを通じて学内の運営に努める。	中間報告 1)学生生活支援担当副学長として、責任を果たせるよう可能な限り努め、とくに専門職業人としての教員養成大学として学生のキャリアアップを目指した教育支援（就職支援）および大学生活支援をすすめ、その成果が大いに発揮できるよう努める。 2)東2棟の中規程が必ず達成できるよう、学生支援委員会・就職委員会などを通じて学内の運営に努める。	1)附属学校との実習など含め実践的な教育活動を、副学長として学生生活支援から可能な限り支援する。また教員として、指導学生をはじめ学生の実習などを指導し、支援する。 2)地域に根ざした大学を支える教員として、社会との連携に可能な限り努めると、とくに四国遍路プロジェクト等で示唆された地域社会の活性ゼ々のノハーを活かして、大学の社会連携活動を支援する。	1)附属学校との実習など含め実践的な教育活動を、副学長として学生生活支援から可能な限り支援する。また教員として、指導学生をはじめ学生の実習などを指導し、支援する。 2)地域に根ざした大学を支える教員として、社会との連携に可能な限り努めると、とくに四国遍路プロジェクト等で示唆された地域社会の活性ゼ々のノハーを活かして、大学の社会連携活動を支援する。 4)四国遍路の世界遺産へ向けての四国4県の徳島県庁文化財課室活動などにおいて委員として支援した。	
142	人文・社会系教育部	社会系コース	藤木　哲郎	始めに、私は在職者の職務としての書類を提出するが、それが私の到安を断ったものではないことを伝えておく。これまで、私に対する期待は、私に知らされないうちに私が断ったことがあ、消えてきた。その記憶を回者たいと思うからである。 教育実践に資する修士論文の指導と言うことであれ、私のゼ!そのような指導は試みようと思えば、ずいぶ学生が教育実践を念頭に置きながら、私が指導する範囲内で研究テーマを設定し指導に当たれる。ケーマにも拠るが、その後、学校現場での授業教授法や授業に対する学生達の出会・興味の乗し方等が大変ず検証され、そこに見出された課題をどのように解決し、それに見合った授業方法をどのように創出するのかに関心があった。自身、この課題の解決のためにどのような取組みを様ことにもろう。	この報告の提出が私の到安を断ったものではないことは年度目標・中間報告の場合と同じ。このことを示唆しておく。修論の指導を教育実践を念頭に置いて行う場合、指導はいろのはやはりスキル面が中心となる点を大きい。けれども、それが内容学的観点から高度の専門性を求められるのであれば、スキル面だけでなく、実に授業内容にて扱われることを念頭にして、その高度かつ専門を求める必要が出ある。その作業は中間報告でも述べたように、研究者が一中の学生のために教科書を編集する作業にも似よう。このレベルでの修論の制作とは、自身の専門を活用を尽けたが、修等の研究に対する関心を深めることができた思う。 国の場に解放することに関がり、修士論文の制作と教育実践のこれまでになかった新たな関わりを深ことにもろう。	学生の学習指導や生活指導に関心、指導意欲は、私の授業のやり方が学生達の授業の参考になる知識である。とりわけ言葉の使い方に対して、難し順思ずもこのように言えば学生達に接触してもらえるようりが方で、その要素例を示し、ひゆきたいと思う。生活面では、学生達からの質問や相談には可き る限り応ずるようもりである。中でも学生達からの質問や問ったことの相談には、親身になって聞かたたい。	「後進の指導」を研究テーマ以して四年になる。今年はこれまでの研究を「（春秋）」と後進の指導」として纏めようとの考えをもっている。 中国の研究者達との交流を積極的に行いたい。	「後進の指導」と研究活動の両、「春秋友花会の成立と展開」の部分はこれまでの稿を大幅に改め、原稿（1600字×64頁）に仕上げて提出する。また、原代の教科書や関係書籍を新たに入手、出版社の「春秋」を教え教授法を考察されていた。また、この授業では中国からの留学生がと受講されていて、私は時年から始めた中国語による授業国時間を中年もやることにした。その成果は稿の工夫が、留学生に質問して行き届いた指導が様ってた。また、人間形成コースに所属する名の現職教員からは修論に関する質問を受けたが、修等の研究に対する関係を示すことができた思う。 この他、学生課題から様々な集いに招いて戴いた所、私は時折長崎に足運のもとに、それらの集いに参加することが出来かった。学生課題の研究には感謝する。	今年は授業面で学生の質問を受けることが多かった。特に「哲学倫理学研究」の授業では、現職の教員の方からの依頼で、授業の実際について課題を出の授業を行てもらい、その中の方を通体験していただき、その教員は小学校、中学校の教諭、高等学校の教諭を含む。 現の「教育と教育」を教え教授法を考察されていた。また、この授業では中国からの留学生がと受講されていて、私は時年から始めた中国語による授業国時間を中年もやることにした。その成果は稿の工夫が、留学生に質問して行き届いた指導が様ってた。また、人間形成コースに所属する名の現職教員からは修論に関する質問を受けたが、修等の研究に対する関係を示すことができた思う。 この他、学生課題から様々な集いに招いて戴いた所、私は時折長崎に足運のもとに、それらの集いに参加することが出来かった。学生課題の研究には感謝する。	今年は、「中国の教育の方からの依頼で、授業の実際について課題を出の授業を行てもらい、その中の方を通体験していただき、その教員は小学校、中学校の教諭、高等学校の教諭を含む。 現の「教育と教育」を教え教授法を考察されていた。また、この授業では中国からの留学生がと受講されていて、私は時年から始めた中国語による授業国時間を中年もやることにした。その成果は稿の工夫が、留学生に質問して行き届いた指導が様ってた。また、人間形成コースに所属する名の現職教員からは修論に関する質問を受けたが、修等の研究に対する関係を示すことができた思う。	与えられた職責を全うする。また、大学内で通む記憶出を防ぐために、できるだけの努力をする。	学内業務の依頼を引き受ける度に、その時に頼いている私に対する期待の依頼を私が断ったとて相手大学に伝えられることがずっと続いている。今年は特に顕著で多いて、業務難易士で「難ヤは時間を使ったまで全職務が成遂された。（その ように対応するよう）向打部から指示が出ていた」などである。私はこれを私に対する期待であると解ゆしている。記憶をとめて出たり前の正義や道理が守られる大学であって欲しい。ここではこのことを特に記しておきたい。	現事を務める「日本道教学会」「中国出土資料学会」から委嘱された職務（学会運営・学会賞の選考・論文審査等）を忠実に果たす。 国際学会には積極的に参加して、海外の研究者との交流を図りたい。	出張だけではなく、今年は遠路時に久重説的な事ひの体 自たい を受けた。記入は本学の役員から依頼を受けた人物であった。本学の記憶に仕収入に至てエスカレートしつつあ る。ただちに記憶を止めて戴きたい。 「参道活動に応力できなかったのは」記の事情が明瞭はもはや本学の自助努力だけでは無なりかかもしれない。司法当局の捜査とその判断を待ちたい。	本年度も私に対する日本学士院賞の受賞を免状するか否かの問い合わせがあったようだ。一大事事である。だが、そのことが私には知らされず、本学の責任者に通告がて見賞できなかった。この記事の掲載はもはや本学の自助努力だけでは無なりかかもしれない。司法当局の捜査とその判断を待ちたい。	
143	人文・社会系教育部	社会系コース	梅津　正美	・修士論文指導において、院生が提案する社会科教育学の理論（仮説）の学校教育実践における有効性を提案する実践・実証的な研究方法を一緒ふまえるように努める。	・2014年度には8名のゼミ生が修士論文を提出し、修了した。3名とも高等学校地理歴史科・公民科における授業開発に取り組んだ。指導教員としては、開発した授業の実践を活用に指導を行ったが、学年学生であることもあり、教員採用試験準備と修士論文研究との並行による今の4年院内小中学校現場での実践授業にまで至に至らなかった。しかし、彼らは中高等学校への実地調査や教育実習フィールド調査での授業実践をふまえ、実践可能性の高い授業モデルを提案した。	・担当授業について、シラバスに明記した到達目標と学修課題にそもした実践を行うとともに、学生の学習成果を適切に実施するための評価を実施する。 ・文部科学省特別教育研究「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」において開発した「カリキュラム・ガイドブック」をDVD化版の教育実践及び「学校実習」に活用し、ガイドブックをより実践性と汎用性の高いものに改善し切く。 ・ゼミ生の卒業論文・修士論文及び「副指導教員を務める修士論文について、学生の関心や研究目的をふまえながら、学校教育実践に資する質の高い論文を完成できるよう丁寧な指導を行う。	・担当授業のすべてにおいて、到達目標と結ん「「評価の観点」「「成点基準表」を作成し、成績評価を行い単位認定を行った。 ・本学カリキュラムの体系と学修の順序性を図明した「カリキュラム・ガイドブック」の作成について、研究協議会の開設等を通じ、2015年3月に活用マニュアルを添え、5第二次試案を完成させ、本学全教員に配布した。「カリキュラム・ガイドブック」の内容構成と活用法については、2014年10月3日の「2014年度行政基準案全体会」において発表した。 ・2名の学院ゼミ生、5名の修士ゼミ生、1名の博士ゼミ生、1名の博士課程学生について課題研究を実施した。修士課程修了生3名は、修士論文の成果を、第26回社会系教科教育学会全国研究大会（高崎教育大学）で発表するとともに、「社会認識教育学研究 第30号記念論集」（梅門社会科教育学会誌）に投稿した。当該論文は、査読を経て掲載が決定した。	・連合大学院共同研究プロジェクトのリーダーを務め、第3年次の研究を推進・総括した。その成果として、梅津正美・須田智仁編著「教育実践学とその社会科教育研究の探求」2015年3月風間書房刊、全384頁、連合大学院基準A相当研究書」を刊行した。 ・科研費受領研究の成果として、加藤義朗教授（高崎大学教授）と共著で以下の2論文を学会誌に投稿し、査読を経て掲載が決定した。 ①加藤義朗・梅津正美「中学生の社会的思考力・判断力の発達に関する横断的研究－歴史的分野の調査を中心として－」全国社会科教育学会編「社会科教育論集」第44集（査読を経て掲載決定、印刷中、連合大学院基準A論文。 ②加藤義朗・梅津正美「中学生の社会的思考力・判断力の発達に関する縦断的研究－歴史的分野の調査を中心として－」日本教科教育学会編「日本教科教育学会紀要30号」（査読を経て掲載決定、印刷中、連合大学院基準A論文。 ・第63回全国社会科教育学会全国研究大会において「社会科社会科授業改善のCLASTLAのシステムの構築」と題する研究発表を、秦明秀教授（大阪教育大学教授）と共同で行った。	・評価担当副学長として、法人評価・自己点検評価等の大学評価を滞りなく、確実に遂行する。 ・大学改革構想検討委員会委員として、大学改革に関する提言を精極的に行う。 ・総務委員会・国際交流委員会等与えられた委員の任務を遂行する。	・評価担当副学長として、法人評価に係る平成28年度教育実績報告書を執筆・作成した。また、第3期中期目標・中期計画の作成のひまとりまとめを行った。 ・自己点検・評価に係る教育・研究評価室長、教育・研究評価委員会委員長、教員養成等推進委員議長を務め、議事と報告書のとりまとめを行った。 ・大学改革構想検討委員会委員・修士課程改革専門部会委員・大学改革マスタープラン作成作業部会副委員として大学改革に関する提言を行うとともに、マスタープランをとりまとめた。 ・総務委員会委員・国際交流委員会委員の職務を遂行した。	・附属の・中学校の実習及び研究推進に積極的に参画する。 ・教育支援アドバイザー、総合教育センターの研修講座、発表び都市の授業研究会等における助言・講演などを通じて、地域の教育関係機関との連携を深める。	・学部・附属小学校共同研究体制の社会科委員として、平成26年度の附属小学校の研究課題「学習内容の本質に迫る学び の創造（考え方）の推進に参画し、2015年2月1日の小学校教育研究大会で共同研究発表として取り扱・指導を行った。 ・神戸大学附属中等学校の文部科学省指定開発研究「高校地理歴史科における新科目「地理基礎」「歴史基礎」の開発研究」に対して、運営指導委員として参画し、教育・指導を行った。 ・徳島県教育委員会（教育文化政策課主幹）の「あわえ化財活用学習の開発研究」三運営委員として参画し、学習材モデルを構成し、指導書を執筆した。 ・近畿中学校社会科教育研究大会（平成28年10月）に向けた神戸市中学校社会科教育研究会（担当市）の指導助言者、高崎教育大学校教育研究会地理歴史・公民部会研究大会の指導助言者を務めた。 ・教育支援アドバイザー事業1件。 ・全国社会科教育学会常任理事、社会系教科教育学会理事・幹事として全国学会の発展を運営した。 ・中学校歴史的分野教科書編集委員として平成28年版教科書の編集・執筆をした（文部科学省検定合格）。	
144	人文・社会系教育部	社会系コース	辻田　裕士	修士論文（研究）のテーマを、常に地理学全体および隣接分野の広汎な問題領域のなかにおいて把えることができるよう、広い視野を持たせるべく指導すること也が今を、具体的には毎に調査において基本的文献を講読し、また参考文献を指示するとともに自ら探索できるように指導する。	指導した修論生は、修論の課題を広汎な文献において把えるとともにそれを解決するための資料を操推することができた。	・修論指導に当たっては上記(1-1)に記した点に留意する。 ・講義その他において、学生に文章を書かせる場を設けるよう努める。	・修論指導においては上記(1-1)の目標にそって指導した。 いずれの講義のおいても、文章を書かせまた地図を作成するなどの課題をだすことで、受講者の自ら認べまた考える機会を設けた。	近代の世界旅行にかかわる研究を進め、発表する。	日本人の世界旅行を研究する途中で、近代風土記という観点があることに気づき、そもちに着手した。 下記の論文・口頭発表となった: ・「公的図書館における新風土記蔵書の所蔵状況: 新風土記蔵書の普及について考えるために」(「梅門教育大学研究紀要」第30号 ・「近代日本の風土記」(日本地理学会2015年度春季学術大会　2015年3月28日) ・「子どもの風土記: 風土記型の研究」(笠間の現論研究会　2015年3月30日)	課せられた業務を行う。	課せられた業務を行った。 ・大学院教務委員（2014年9月まで）・学部教務委員・学部入試委員・社会系コース長・AOオフィサ	・徳島地理学会を通して徳島県下の地理学・地理教育の振興を図る。 ・梅門西小学校で地図教室を開く。 ・「県・大学等連携による教職員研修」を担当する。	中間報告に記載したもののほかはは下の通り ・徳島地理学会の事務局を担当し、県下の地理学・地理教育の振興に寄与した（第22回定型・生徒の地図作品展開催（2014年12月6ー7日）など） ・高校教員に対するGIS講習会を開いた（2015年3月8日）。		
145	人文・社会系教育部	社会系コース	山本　準	学生が良き教員になれるよう、講義・演習・ゼミを通して教師としての実践力を高めるとこに役立つような教育指導を行っていく。ゼミの大学院の学生には、修士論文の作成指導を行うとともに教員採用試験に向けての指導を行う。学部のゼミの学生に対しては卒業論文作成の指導をするとともに、教員採用試験のための面接や小論文への対策と指導を行う。	学生が良き教員になれるよう、講義・演習・ゼミなどを通して支援するという年度目標をたてた。この結果、ゼミ所属の大学院生2人は両人とも教員採用試験に合格した。学部のゼミ生については3人の内1人が採用試験に合格。2人は大学院に進学した。年度目標をおすすめ達成できたのではないかと考えている。	教育に関しては一方的な講義という授業をすることなく、学生との双方向的な授業を展開するようなかける。具体的には、学生の発言を促し、また学生の意見も聞きながら授業を展開する。また演習等を利用し、学内だけではなく学外での学習活動を積極的に進めるようにする。 また学生生活支援に関しては、学生個々の生活状態や学習状態に配慮し、安心して学生生活が過ごせるように指導する。	講義では一方的に講義をするという形式ではなく、学生に主体的に講義に参加できるよう、学生の発表機会を多く設けるようにした。また学生が学生生活を無事送れるよう、数多くの学生から様々な相談を受けた。	現在研究を進めつつある写し置場の調査研究をさらに進展させる。具体的には県内の写し置場の全数を調査し、領域ごとに調査結果をまとめていくことにする。徳島県内に在する写し置場の調査は、まだ数少ない徳島の調査が残されているのでそれを完了させることとする。また、従来から研究を続けていた、近代化過程におけるムロ構造の変動についても研究を進める。	学内の職務をこなしながら出来る限り研究にも時間を割こうと考えていたが、十分に研究を進めることが出来たとはいえない状態である。部長という職務を勤めながらでも、研究にも時間を割くことができるよう、より効率的な時間配分を考えなければならないと考えている。	人文・社会系教育部の部長としての活動を通して、大学運営に寄与する。	大学運営に関しては、人文社会系教育部の部長として、人文社会系教育部の円滑な運営ににながけた。	社会との連携に関しては、地域の審議会や委員会等への委員の就任を要請された場合、積極的に参加し地域への協力と連携を行う。 附属学校との連携に関しては、教育課題研究で付属学校・園からの要請があれば積極的に応じることする。 国際交流に関しては、留学生が安心して研究できるように環境整備に努めるとともに、生活の支援にも細心の注意を払うこととする。	社会との連携に関しては、行政との関係では徳島労働審議会会長、鳴門市情報公開審査会会長など、研究活動では徳島地方自治研究所理事長など、社会との関係では徳島新聞へのコラム連載など、研究で培った知識や技能を社会に広く還元すべく活動した。	なし	

平成26年度　教員による自己評価

No.	教育部	コース等名	氏名	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 2．点検・評価	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
146	人文・社会系教育部	社会系コース	井上　奈穂	【学長の定める重点目標】 教員養成大学大学院の修士論文については、専門学部の内容に加え、教科教育の視点が内包されている必要がある。そのため、以下のような授業実践の展開を考えている。 ①指導内容：自己教材研究をしていくか・教育内容に取り組む姿勢の育成 ・教師から一方的な知識の伝達にとどまらず、取りとげたテーマについての知識を自ら収集し、まとめ再構成できる場としての第べ学習の充実を図る。 ②指導方法：アウトプットする力の育成 ・学生主導の学習環境を整えるために、話べたことの発表・意見交換の場の充実を図る。 ③文章力の向上・他者に伝えることを意識する力の育成 ・文章の校生・検討を充実させ、自身の文章をよくするための試行錯誤の場の充実を図る。	後期の授業について以下のような工夫を行った。 ①指導内容：自己教材研究をしていくか・教育的課題に取り組む姿勢の育成 「社会科・公民科教材論」において、ITを活用し、図書など資料を活用した模擬授業を実施し、相互に批評・検討を行った。 ②指導方法：アウトプットする力の育成 「幼等社会科教育論」において、幼等社会で扱う内容の特徴について、目標、内容（知識の構造）、学習方法の観点から分析させ、また、その結果の発表・意見交換の場を通して、理解の充実に努めた。 ③文章力の向上・他者に伝えることを意識する力の育成 「社会科・公民科教材論」において、指導案を相互に検討し、「他者に伝わる」指導案を作成するための試行錯誤の場の充実を図った。	年度目標 ・授業時間外においても可能な限り時間を取り、学生が質問等をしやすい状況をつくる。 ・学生が全体的に学ぶ環境づくりに努める。 ・ゼミ生を中心に、学校生活について相談があれば、随時相談にのり、充実した学生生活が送れるように支援する。	・次年度の教員採用試験に向けて、勉強の仕方・心構え等についての指導・助言を施課後等に行った。 ・授業では、「作業課題」を明確にし、授業の目的と到達点を明らかにすることで主体的な環境づくりに努めた。 一後期の作業課題（1）教材の作成、（2）授業の「よさ」の分析、（3）授業の分析仮説の作り ・教育実習生の授業づくり等についてのアドバイスを行った。 ・ゼミ生を中心に、学校生活について相談があれば、随時相談にのり、充実した学生生活が送れるように支援した。 ・ゼミ生を中心に、卒業・修了後の生活についてのアドバイスを行った。	・社会科教育における授業や評価に関する研究について、学問的な見地を踏まえた論文、研究者での発表等を通して積極的に発信する。 ・附属学校等の研究会に積極的に参加し、自らの専門分野を踏まえた助言等を通して、教育現場におけるアップデートな社会科教育に資するよう心がける。	＜研究会＞ 筑波大学附属高等学校の研究会に参加し、平成27年度の研究課題についての講に参加した（2014.12.6） 埼玉教育大学附属小学校の合同研究会に参加し、平成27年度の研究課題についての講演に参加した（2015.2.7） ＜書籍＞ 井上奈穂「学習指導要領における位置づけと取扱い」草原和博ほか編『「国語・国土・信土」教育の論点争点－過去に学び、世界に学び、未来を開く社会科授業の新提案－』明治図書、平成26年10月。 井上奈穂「中等社会系教科の学習評価論」柳橋健治編『中等社会系教育』協同出版、平成26年、10月。	・図書委員として、会議に参加し、専門教育大学附属図書館の現状・課題についての理解に努める。	図書委員として、会議に参加し、専門教育大学附属図書館の現状・課題についての理解に努めている。 寄生委員として、会議に参加し、本学の労働環境等の現状・課題についての理解に努めている。	年度目標 ・附属小学校、中学校の研究会に積極的に参加する。 ・大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行う。	・附属小学校の研究会に指導助言者として参加した（2015.2.7）。	設定した課題はおおむね達成できたと言える。 来年度も、今年度に引き続き、教育・研究・社会貢献の面においての本学への貢献をより一層行いたい。
147	人文・社会系教育部	社会系コース	桑山　輝雄	学長の定める重点目標に基づき、昨年度以上に関係大学等への呼び掛けにより大学院の定員確保に努めたい。	小・中・高の地理分野における四国地方の地誌的内容のひとつとして、嗜門の浜崎戦元の実態について調査・研究した修士論文の指導を実施した。	高校で地理を受講しておらず、地理学の基礎知識に欠ける学部生・大学院生が多いため、地理学の基礎から丁寧に講義をしたい。また、授業内では教授しきれない部分も多ふた。授業外で院生・学部生の卒業に応じて個別指導を開催したい。 さらに卒論・修論についても、フィールドワークを重視しながらオリジナリティのある研究ができるよう指導したい。	教員の人文地理学特論・地理学研究、後期の地理学概論では、学生・院生の理解度に合わせて授業を進めた。また、地理学が苦手な院生が多いため、授業外で個別指導も実施している。さらに、ゼミにおいて修士論文・卒業論文作成に向けたフィールドワークも実施した。	2013年度の研究に引き続き、徳島県内の地域問題を研究し、県内の地域に還元できるよう努力する。具体的には、公共施設へのネーミングライツの導入と地域への貢献、市町村合併後の地域の現状、2015年4月の介護保険制度改定に向けた県および市町村の動きについて研究を進めたい。	徳島県内のネーミングライツの実態について研究論文が刊行され、社会に還元することができた。また、2015年度から大幅に改定される介護保険制度に向けた徳島県内の市町村の現状についてアンケート調査を実施し、その結果を報告書として執筆し社会に還元した。さらに、三好市三野地区においてデイサービスを中心としながら過疎集落の維持を行っている事例について現在調査中である。	所属する委員会・部会で貢献できるよう職務を遂行したい。	所属する委員会・部会で職務を遂行した。	所属学校とは、教育実践フィールド研究において、中学地理のより良い授業開発を目指した交流・連携を行いたい。 社会との連携については、公開講座での市民との交流や、研究を地域社会に還元することで実現したい。	所属学校との教育実践フィールド研究において、中部地方の動態地誌に関する授業を実施し、その結果をポスターにまとめた。 また、社会との連携については、7月に市民公開講座において世界遺産の基礎知識に関する講座を開催し、受講者から好評を得た。	授業、委員会など大学の職務を全うした。また、前任校において大学院受験者に関する広報をし、2名の受験者・入学者を確保した。

平成26年度　コース等による自己評価

No.	コース等名	コース長	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援，及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅰ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4）附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
1	人間形成コース	山崎　勝之	【学長の定める重点目標】 本学大学院修士課程には、長期履修学生制度を活用し学部の修業履修で教員免許を取得するとともに修士の学位を取得する学生が学んでいる。この制度は、教員を志望する学生のニーズに応えるものであり、本学の教員養成の特色の一つとなっている。教員を目指すこれらの学生に対してどのような指導や支援を展開すればよいか、具体策（コースの取り組みについて）①授業内容，②授業方法，③論文指導の観点から示してほしい。なお、臨床心理士養成コースにあっては、当該コースとして可能な支援策を示してほしい。教職大学院においては、過去5年間の学生定員充足状況を分析・検証し、定員確保のために どのような具体的方策で取り組むか、目標達成に向けての方法を示してほしい。	本コースでの各期履修学生への支援では、学校教員への連携を実現するために、授業や研究指導において、基礎学力のトレーニングはもとより教員の実践力（授業方法や学級運営）を高めることに重点を置き、実施してきた。また、修士論文の研究では、各学問領域での基礎力を十分に確立した上で、修士研究に求められる独創性の高い研究へと指導した。	今年度は、本コースの構成員数は1名減となる。そのため、各教員の担当は増えるものと予想される。つまり、各教員が担当する学生数が増えることになるが、本コースの特徴である学生の状況やニーズに合わせた指導や支援はこれまで通り実施したい。とりわけ、個々の学生の生活状況には気を配る必要があり、そこから学生生活への適応と健康には注意したい。	1名の教員（教育変）が不足する中、所属教員の恵良緑通を検討ほかに、学生の健康・適応状態を互いに報告、把握しながら進めることができた。その共同や連携は主として、健康上は大きな問題もなくことはなく、修全で意義高い生活に導けたと考えている。	従前どおり、本コースの各教員の特徴となっている、国際的共同研究と学校との連携研究を継続させたい。国際的研究では、その広がりをヨーロッパ諸国、北米、中国等に広げ、学校との連携は感染風に広まらず、他府県にも広げたい。	各教員が国際的な共同や学校との連携を十分に実施することができた。また、学校との連携も信頼関係内外に広く実施することができた。この共同や連携は主として教員個人の単位で実施されたが、コース全体として観察な成果となった。	各教員は、大学の委員会活動のみならず、各自の教育研究特色を生かして、職門教育大学の知名度をよげるような活動を展開する。とりわけ、他府県における研究と教育の展開ならびに共同は、このことを達成する可能性が高く、重視したい。	従前どおり、信島県内外で学校との連携をはかり、また、国際交流では、ヨーロッパ、アメリカ、中国との研究やセンターとの共同、さらには国際学会での研究公表を実施する。	信島県内外の学校との連携をはかることができて、海外の研究者との連携も十分に達成できた。	
2	幼年発達支援コース	浜崎　隆司	本コースでは、幼小接続など幼児期の教育と完全就学の教育の連続性が重視されているとされる現在を踏まえ、長期履修の学生制度を活用し、1年次よりコースの教員による様々の学生への綿密な学修指導および実習指導、さらに教員になるための心構えや動機づけについての支援を行う。2年次からは、コースが改集していく段階試験に関する情報、及び過去の修了生、卒業生からの採用試験に関する情報を学生に積極的に提供し、就職に対する意識や意欲を高める。また、就職支援室で企画される模擬授業、模擬集団討論等の就職支援事業への積極的参加を促し、学生の就職活動をサポートする。①授業内容・評価生との共通の授業の中で、幼児と関わる保育技術を学ぶ。②授業方法：講義だけではなく、実践重視の保育技術を学ぶ。③論文指導：将来の教育実践に活用できるような研究テーマを推奨する。	1年次よりコースの教員による様々の学生への綿密な学修指導および実習指導、さらに教員になるための心構えや動機づけについての支援を行った。 学生が実習先での問題等は、その学生の指導教員だけでなく、コース教員全員が問題を把握し、解決できるよう協力体制をとった。2年度は、実習にかかわるケース1件、学生生活に係るケース2件、修学に係るケース3件それぞれに コース教員全員で対応した。 授業のやり方、幼稚園教諭・保育士資格に係る情報を提示し、就職情報も随時提供できるよう努めました。また、就職支援室で企画される模擬授業、模擬集団討論等の就職支援事業への積極的参加を促し、参加率を高めた。 ①授業内容・評価生との共通の授業の中で、幼児と関わる保育技術を学ぶ。②授業方法：講義だけではなく、実践重視の保育技術を学ぶ。③論文指導：将来の教育実践に活用できるような研究テーマを推奨する。	教育に関しては、学生の教育実践力向上を図るため、附属幼稚園教員や幼年発達支援コースの修士課程を修了した保育士に、幼児教育、保育内容に関する講義の現代講師として登用し、保育現場における同じ実践的指導力の養成を目指す。さらに、卒業論文・修士論文の指導に関しては、年2回の中間発表および最終発表時の発表を通して、専修・コースの教員全員による指導が受けられるよう指導体制をとる。特に、実習や授業でのトラブルや悩みを持つ学生、研究論文作成が遅れがちな学生に対しては、コースの内教員で状況を共有し、学生への即応態勢をとる。	教育に関しては、学生の教育実践力向上を図るため、附属幼稚園教員や幼年発達支援コースの修士課程を修了した保育士に、幼児教育、保育内容に関する講義の現代講師として登用し、保育現場における同じ実践的指導力の養成を目指した。具体的には幼児教育実践や実地教育実習指導の授業で附属幼稚園の先生や本コースを修了した保育士を現代とした授業を行った。 卒業論文・修士論文の指導に関しては、中間発表2回、最終発表会1回を実施した。 論文発表会を通して、専修・コースの教員全員による指導を行った。また、実習や授業でのトラブルや悩みを持つ学生、研究論文作成が遅れがちな学生に対して は、コースの教員で対応を協議した。実際には、詳細な内容は省略するが、1名の学生に対して教育実習がスムーズにいくよう配慮を行った。	コースの教員が各自、科学研究費の申請や研究充実のための環境整備に努めた。 コースの教員が共同で幼児教育に関する教材開発を行い、年度2回年度は、保育の心理学に関するテキストをコースの教員を中心として共同執筆を行う。3月末で初稿の段階で、27年度発刊予定。 さらに、コースでの共同研究を作年に続きフレンドシップ事業等として立ちあげ、研究を展開する。 昨年に続き、連合大学院の博士課程後期の学生と共同研究体制を組みその成果を、学会発表、論文化することを目的とする。	科学研究費の申請については、平成26年度は、若手（B）1件、基盤研究（C）1件が研究のみた。 コースの教員が共同で幼児教育に関する教材開発を行い、平成26年度は、保育の心理学に関するテキストをコースの教員を中心として共同執筆を行う。3月末で初稿の段階で、27年度発刊予定。 さらに、コースでの共同研究を作年に続きフレンドシップ事業等として立ちあげ、研究を展開する。 昨年に続き、連合大学院の博士課程後期の学生と共同研究体制を組みその成果を、①. 青年の自我同一性地位と学業的疲労行動の関係 日本応用教育心理学研究 ②.高校生における学業的満足感認に及ぼす勤務ウツ学習方略の影響 日本応用教育心理学研究 ③.遠い環境における認知機能についての研究ーテキストマイニング法による自由記述の分析一　学習開発学研究 広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座 ④大学生の遠い環に対するイメージと思い出について　門門教育大学研究紀要　で発表した。	大学運営の眼目となる博士養成に広東し、職務を遂行する。特に、学部教務、大学院教務関係及び学生入試、大学院入試関係、さらに学生支援関係、就職支援関係の運営に積極的に関わる。	コースの教員で、学部教務委員、大学院教務委員、大学院入試委員（副委員長）、学部入試委員（副委員長）、就職支援委員等の委員として運営に関わった。	1．目標・計画 以下の具体的な活動を通して附属学校・社会貢献活、及び国際貢献を進める。 1）附属幼稚園や協力園との連携を教育実践フィールドや共同研究、共同プロジェクト研究として深めるとともに、相互の教育・研究の発展に努める。附属幼稚園と連携を図りながら、毎年実施されている自然プロジェクト等の企画に参加し支援を行った。 2）文部科学省委嘱事業「幼稚園教員資格認定試験」の実施に協力した。 3．教育支援講師・アドバイザーをはじめ、職場的に保育所・幼稚園等に出向き、助言等を行う。 4．地域の子育て支援事業に学識経験者や専門家として参加し地域連携を図る。特に子育て支援に関しては 　本学で開催している「あらっかんやロンリ」で子育ての保護者への支援および門門市の「門門市芸登稲佐重議会」の委員として協力する。 5．国外の留学希望者を積極的に受け入れる。	1）附属幼稚園や協力園との連携を教育実践フィールドや共同研究、共同プロジェクト研究として深めるとともに、相互の教育・研究の発展に努める。附属幼稚園と連携を図りながら、毎年実施されている自然プロジェクト等の企画に参加し支援を行った。 2)文部省は省略するが、文部科学省委嘱事業「幼稚園教員資格認定試験」の実施に協力した。 3）教育支援講師・アドバイザーをはじめ、職場的に保育所・幼稚園等に出向き、助言等を行う。 4）地域の子育て支援事業に学識経験者や専門家として参加し地域連携を図る。特に子育て支援に関しては 　本学で開催している「あらっかんやロンリ」で子育ての保護者への支援および門門市の「門門市芸登稲佐重議会」の委員として協力する。 5）国外の留学希望者は、次年度受け入れるための個人面接やメールでの面接を2名行い、27年度の1名の院生の受け入れを決定した。	
3	現代教育調査コース	小西　正雄	小コースは「実践に即とした調査」を合言葉に、教育にかかわる諸現象を視野にどのように、現実に調査をしたらよいのかを研究するのが、このコースのミッションです。いわゆる長期履修学生が新しく来られるのが現実である。彼らが本コ以ぞれも教育研究の方法論等にヶ分なレディネスを備えていない。そこでコースでは、当該学生たちの教育研究への意欲を喚起するため4月に開催する修士論文構想発表会を、従来の学会発表型からグループセッション方式という独自のプログラムにあらためている。これはすべての参会者がすべての構想発表にグループ単位で参加し、主体的に議論にかかわることを可能にした画期的なプログラムであり、それに対する学生の感想、意見について送次双集しそれを次回に反映させている。その恵義や成果の一端は日本教育大学協会研究大会（2013.10.札幌市）において報告した。長期履修学生の指導・支援にあたっては、26年度もこれまでのコースの取り組みを踏襲することで教育成果を求めたい。	年度目標に示したグループセッション方式については、コース所属学生の多さからその効果的な運営が危惧されたが、コース担当教員のエネル努力によって、時間的にはかなり調整され状態であったが、これまでどおり実施することができた。発表者には、発表ならびに実録定義の結果をもとにこれからリシート作業中が、それをもとに指導教員とさらなる協議を行えるよう示した。このような学年でを課におこなった長期履修学生にも研究への取り組を踏ませることができた。	コース単位で教育にかかわることができる唯一の機会である「教育実践フィールド研究」の1年次の計画は、狙入時点では完全には実現まっていないが、これまで年間の実績から運携ほかも継続を強く期待されている防災教育（南内義嗣小学校）は中心として、環境、国際分野をイかえてコツつのプログラムを用意して学生の多様なニーズに応える予定である。なお、このような選択方式はコースとしてはふいりの企画である。 学生支援については、例年通り、メーリングリストを利用して教員からの情報発信（就職関係情報など）、学生相互の情報交換（スポーツ行事の案内など）に関わった。	上記１で言及したグループセッション方式のさらなる改善を行う。	グループセッション方式を基本的に踏襲し、運営上の細かな改善を行った。とくに教室間の移動時間を確保し、全体オリエンテーションの際の移動要領の説明を徹底したため、例年以上にスムーズな運行が見られた。	発足以来つねに最先端を走るをオーバーしているが、大胆的な見地から、これまで同様、入試担当部学長と連携しつつ継続的に私学助問を行うなどして、大学院全体の定員確保に協力する。	次年度に向けてコースパンフレットを全面的に改訂するとともに、開業地区ならびに九州地区の私立大学を中心に広報活動を行った。これら努力が実ひして、今度も募集定員を上回る入学者を得ることができた。また藤村准教授が主宰する連隔教育プログラムは、沖縄の離島から北海道まで安国寺地で広範の結果、各教育委員会・教職員の認知度も高まり、毎年度から名の入学生を得、夏休休期中のスクーリングも無事終了した。平成27年度入学者選抜試験では定員の倍近いも名の入学生・合格者を得ることができた。	田村准教授を中心にフィリピンの小学校、小西教授を中心に在アメリカの小・中学校との連携を行う。	田村講師によるフィリピン、ラオスの小学校（教育施設）訪問、小西教授によるアメリカの補習授業見訪問を実施した。	学生指導ならびに大学設定義務保については十分な成果をあげることができた。
4	臨床心理士養成コース	中津　郁子	臨床心理士養成コースには長期履修生はいないが、授業の中や学生の支援に即して関わっている。授業においては学生の個々の現様状況を把握しながら、教員を目指すものとしての資質を高めていきたいと考える。 1)授業内容，②授業方法に関しては、 ・学生にわかりやすい授業をふかげ、多例等も交えながら理解を促すようにする。 ・現職教員の話を聞く時間を設け、教職に対する興味や意欲を高める。 ・可能であればグループでの話し合いを取り入れるなどの授業方法を工夫していく。 ・個々の学生の経問等には、個々の現状に応じて丁寧に答えていくことに努める。 また、心理的に問題を抱えている学生に関しては個別に対応し、学生生活が豊かにされるように例面からの支援を行っていく。	臨床心理士養成コースには、長期履修学生はいないが、授業の中や学生の支援に即して関わっている。 1)授業内容，②授業方法に関しては、 各教員が工夫し、年度目標に掲げたことは達成できたと考える。 また、心理的に問題を抱える学生に対しては、個別に面接等を継続し、学生生活を充実して送できるよう工夫を行ってきた。	1)将来の臨床心理士の育成を基本として、相応しい人り方を指導していく。 ②現在までの目任制や、修士課程1年生との親睦を深めるためのコース旅行は、継続していけう。また、出来るだけ多数の教員が参加する。 3)修士論文の指導や、心理・教育相談室でのケースのスーパービジョンや外部実習での指導などを重視。将来の臨床心理士としての臨床の力が育成できるようにする。 4)臨床家としてだけでなく、社会人としてのふかいハマナ一を身に着けることも重視し、特に外部実習を通しての指導に努める。 5)個別の配慮が必要な学生に関しては、コースの教員がチームを組み、必要に応じて学生課とも連携しながら、学生にとって必要な支援を行っていく。	①臨床心理士を養成することを基本として、個々の学生が自分の力量や、将来の仕事として向き不向きなどを自分で判断できるように指導を強化した。 ②今年度もコース旅行を計画し、仕事に支障のない範囲で教員も参加し学生との親睦を深めた。 ③将来の臨床心理士としての相応しい力量を養うため、修士論文の指導及び研究の日々に関する話し合いに努めた。 ④月例家庭は参加されたが、それぞれの教員が、実習生の相応しいマナーに関しての指導に努め、特に実習先からの不満等はなかった。 ⑤個別の対応が必要な学生が数名みられたが、コース内で話し合い、検討し、対応に努めた。特に大きな問題もなく学生たちは修了・進級した。	①各教員が研究活動を積極的に行い、著書や論文の執筆や学会発表を行う。 ②文部科学省科学研究費補助金の申請を行う。 ③日本生徒指導学会第15回大会幹門大会では、教職大学院と共に運営や学会発表等を行っていく。	①各教員は、積極的に様々な学会等で発表や論文執筆を行った。また、様々な共同研究にチームの一員として参加し研究・実践を行った。 ②文部科学省科学研究費補助金の申請は新規及び継続の研究があった。 ③日本生徒指導学会第15回大会幹門大会では、教職大学院と共に運営や学会発表等を行った。参加者も多く盛況に終わった。	①各教員がそれぞれの委員会に出席し、職務を遂行する。 ②連合大学院、会、③各教員を増やす。	①各教員はそれぞれの委員会に出席し、職務を積極的に遂行していた。また、各種委員会や事務からの依頼にも応じ、積極的に対応した。 ・2連合大学院のお合の教員が増えた。 ・次年度のコースの大学院入学者は、志願者の減少等の要因があり、定員を割ってしまった。今後、志願者の増員に向けて取り組み、定員確保に努めることをコース内で話し合った。	信島県のみならず他府県の学校との教育との連携や共同を十分に実施することができ、本学の知名度をよげるという点で大学に貢献できたと考えられる。	従前どおり、信島県内外で学校との連携をはかり、また、国際交流では、ヨーロッパ、アメリカ、中国との研究やセンターとの共同、さらには国際学会での研究公表を実施する。	信島県内外の学校との連携をはかることができて、海外の研究者との連携も十分に達成できた。	
5	特別支援教育専攻	大谷　博俊	目標：長期履修学生に対し、教員としての使命や態度から教育技術までその基礎的資質の構築を支援する 具体的方策は、 1)特別支援教育の現状「個の教育的ニーズに応じた支援」の基盤となるテメ1を明確にするために、学級経営における重要な要素である母親支援を学び内容の充実を図る。 ②自らの方で教育現場が図れるようになるまで、基礎的内容を講義によって、実践的内容を演習や実習を通して学ばせ、学生と教員の双方向のやりとりを充実させ、個別的に支援する ③研究テーマの設定から論文作成に至る全過程を個別的に対応し、自発的修学を促す	目標：長期履修学生に対し、教員としての使命や態度から教育技術までその基礎的資質の構築を支援する 具体的方策として、 1)授業内容・特別支援教育の現状である「個の教育的ニーズに応じた支援」の基盤となるテメ1を明確に関して、実践的個々実態の分析の方法から、実際の支援への活用の仕方で方等の指導技術から、学級経営における重要な要素である保護者支援、連携の仕方方で内容の充実を図ることが できた ②自らの力で教育現場が図れるようになるまで、講義によって基礎的内容を理解させた。特に、長期履修学生と通常の修士課程2年生が共に学修することによって自らゆり関係(指導技術を開発させ、また、学生と教員の双方向のやりとりを充実させることによって、個々の特別支援教育に関する現場未来や支援技術未来に基かせ個別的に支援する事ができた ③研究テーマの設定から論文作成に至る全過程を個別的に対応し、個々に異なる教現技術（文章表記の方等）に関しても的確から指導をし、できる限り修士課程院生として自発的修学を促しながら支援した。 ④本専攻で積った実践力を教員採用試験の際にも発揮できるよう、情報提供し、就職支援として、教員採用試験に向けた指導を就職支援室と共に進め、特業第・コース別生を由め、各研究室独自でも模擬授業案作成等を支援するなど、労を惜しまず支援した。また、臨時教員採用など、特別支援学校や県立支援学校と連携し、就職支援に尽力した。 ⑤内部の自前の長期研修に参加すべく、申請の支援及び、研修期間中の本学における授業調整等、院生と共に進めきめ細かな支援を行い、結果、海外研修が叶った。 ⑥本専攻院生のみならず、他専攻、コースの長期履修学生の支援指導など、まめに応じて本学の教員として尽力した。 | 目標：学生の教育・学生生活上の相談に対して、専攻教員全員で対応できる支援体制で臨む。 具体的方策 1)学年担任及び指導教員を中心にカリキュラムについての指導を入念に行い、専攻教員が協力して環境とのアドバイスの連携指導を随時行う。また専攻会議に参加して常に学生や院生についての情報を交換し、教員全員が情報を共有できるように努める。 2)「学生・院生に対し、研究や教育へのための組かいサービスが提供できるように、教材・教具・研究用機器・機材の整備充実を図り、見今等で教育研究補助のための便宜を図り、教育面・研究面での支援を充実させる。 3)学部生と院生が合同で歓迎会を行う等、学生相互間、及び教員－学生相互間の親睦を深めることに努める。	目標：学生の教育・学生生活上の相談に対して、専攻教員全員で対応できる支援体制で臨むことができた。 具体的方策 1)学年担任及び指導教員を中心にカリキュラムについての指導を入念に行い、専攻教員が協力して環境とのアドバイスの連携指導を随時行った。また専攻会議に参加して常に学生や院生についての情報を交換し、教員全員が情報を共有した。 2)学生・院生に対し、強いながらも快適な学習環境のための設備の充実に努め、教材・教具・研究用機器・機材の整備充実を図り、見今等で教育研究補助のための便宜を図ることができた。研究や教育全般へのための組かいサービスを提供することができた。 3)学部生と院生が合同で歓迎会を行う等、学生相互間、及び教員－学生相互間の親睦を深めることに努めた。 4)長期入院した院生に対して、充分な治療が受けられるよう配慮し、その間の授業や教員会の情報提供、後日指導を補習に行った。また、生活面での相談にも応じ、安心して健康維持できるように配慮支援した。	目標：専攻教員全員の研究活動の活性化を図り、高度な専門性の維持・向上を図る。 具体的方策 1)卒業論文や修士論文のテーマを教員が協力して指導し、学会や専門雑誌等に共同で研究発表できるように努める。 2)文部科学省のプロジェクトをすすめる附属支援学校と連携しながら、地域における特別支援教育の在り方にかかる研究を進める。 3)対話を通した問題提示では、障害者本人からの真意な話を踏まえた現状と課題の把握ができるよう、県内の特別支援教育の要として広範な実践的研究・実践活動を展開するに努ました。 4)連合大学院の博士課程に合格するまでの支援指導を重ね、合格に至らせることができた。この間、連名での学会発表や論文投稿、教現書籍発表共会書籍申請を行うなど、研究活動の活性化を図ることができた。 5)大学院生の研究フィールドに参加し、共同で研究を進め、研究生協働で行うやさ約の組かい指導支援と共に、専攻内教員として高度な専門性の維持・向上を図ることができた。	目標：委員として各種委員会や会議において協力的に職務を遂行するとともに、免許状更新講習等を通じて大学運営に寄与する。 具体的方策 1)特別支援教育専攻の代表として、主要な委員会（図教務、学部教務、院入試、学部入試、就職）のすべてに専攻の教員が出席するとともに、大学改革に見る取りキュラム・ウフロクラム、教育体制等にかかる各種委員会でも、具体的な策を提案した。 2)基礎・臨床系教育部に所属する教員として各種委員会（新、専門部会、ワーキングなど）に出席し、積極的に部会の運営に務めた。 3)教員免許状更新講習の必修領域や選択領域に積極的に参画し、講習内容の充実と、県内外の対象教育現場の充実に努めた。 4)科学研究費のみならず、他の研究支援団体等の助成金に応募するなど、外部資金の獲得に努力した。	目標：専攻院生の各種委員会や会議において協力的に職務を遂行するとともに、免許状更新講習等を通じて大学運営に寄与する。 具体的方策 1)特別支援教育専攻の代表として、主要な委員会（図教務、学部教務、院入試、学部入試、就職）のすべてに専攻の教員が出席するとともに、大学改革に見る取りキュラム・ウフロクラム、教育体制等にかかる各種委員会でも、具体的な策を提案した。 2)基礎・臨床系教育部に所属する教員として各種委員会（新、専門部会、ワーキングなど）に出席し、積極的に部会の運営に務めた。 3)教員免許状更新講習の必修領域や選択領域に積極的に参画し、講習内容の充実と、県内外の対象教育現場の充実に努めた。 4)科学研究費のみならず、他の研究支援団体等の助成金に応募するなど、外部資金の獲得に努力した。	次年度に向けてコースパンフレットを全面的に改訂するとともに、開業地区ならびに九州地区の私立大学を中心に広報活動を行った。これら努力が実ひして、今度も募集定員を上回る入学者を得ることができた。また藤村准教授が主宰する連隔教育プログラムは、沖縄の離島から北海道まで安国寺地で広範の結果、各教育委員会・教職員の認知度も高まり、毎年度から名の入学生を得、夏休休期中のスクーリングも無事終了した。平成27年度入学者選抜試験では定員の倍近いも名の入学生・合格者を得ることができた。	1．附属学校との連携 目標：附属特別支援学校との教育・研究面での連携を強化させる。 具体的方策 1)附属特別支援学校のテーマ等について、専攻教員が関わり、協働研究を進める。 2)事例検討会や教育実習等を通じ、附属特別支援学校に専攻教員全員で関わり、附属特別支援学校の教育力推進に寄与する。 3．社会との連携 目標：公立の諸学校や保健・福祉・医療機関との連携を拡充し、社会貢献する機会を増やす。 具体的方策 1)公開講座・教育支援アドバイザー等の活動を通して障害についての啓発を図るとともに特別な支援を要する子どもについて取要を行う。 2)県義務の障害福祉や教育に関する研修会の講師招聘に応えて県下の特別支援教育の推進に寄与する。	1．附属学校との連携 目標：附属特別支援学校との教育・研究面での連携を充分に図ることができた。 具体的方策 1)常に附属支援学校長と連絡を取り合い、附属特別支援学校の文部科学省委嘱プロジェクト研究について、専攻教員が関わり、効果的に研究を推進したり、人事面の相談に乗るなど、連携充実に努めることができた。 2)大学院授業の附属支援学校教員への公開や、事例検討会、教育実習等を通じ、附属特別支援学校に専攻教員全員で関わり、附属特別支援学校の教員の資質向上と教育力推進に寄与した。 2．社会との連携 目標：公立の諸学校や保健・福祉・医療機関との連携を拡充した。社会貢献することができた。 具体的方策 1)公開講座・教育支援アドバイザー等の活動を通して障害についての啓発を図るとともに特別な支援を要する子どもについて保護者、学校、専門機関等への助言を行う事ができた。 2)県義務の障害福祉や教育に関する研修会の講師招聘に応えて県下の特別支援教育の推進に寄与する。	入試委員会が推し進める、定員充足にかかる取り組みは以外に、専攻独自で、近畿、四国、関東エリアの大学に広く、受験者募集のための訪問を多数（十数大学）行い、専攻内教員全員で定員充足に向けて努力した。	

平成26年度　コース等による自己評価

No.	コース等名	コース長	（Ⅰ－1)長期履修学生への支援、及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画 【学長の定める重点目標】 本学大学院修士課程には、長期履修学生制度を活用し学部の授業履修で教員免許を取得するとともに修士の学位を取得する学生が学んでいる。この制度は、教員を志望する学生のニーズに応えるものであり、本学の教員養成の特色の一つとなっている。教員を目指すこれらの学生に対してどのような指導や支援を展開すればよいか。貴専攻・コースの取り組みについて①授業内容、②授業方法、③論文指導の観点から示してほしい。なお、臨床心理士養成コースにあっては、当該コースとして可能な支援策を示してほしい。教職大学院においては、過去5年間の学生定員充足状況を分析・検証し、定員確保のためにどのような具体的方策で取り組むか、目標達成に向けての方法を示してほしい。	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅱ－1)教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅱ－2)研究 1．目標・計画	（Ⅱ－2)研究 2．点検・評価	（Ⅱ－3)大学運営 1．目標・計画	（Ⅱ－3)大学運営 2．点検・評価	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅱ－4)附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
6	言語系コース（国語）	余郷　裕次	長期履修学生への支援として、(1)「コース開講科目の履修に関するガイドライン」を「長期履修学生支援室」に提出し周知を図る。(2)学生に対しては、年度始めや授業開始時に「履修に関するガイドライン」や「カリキュラム・マップ」などを用いて「学びの道筋」のオリエンテーションを行う。 ①授業内容：基礎・基本の内容をアクティブな学習を通して学生が習得できるように、教科書教材を積極的に用いて、指導案の作成や模擬授業、相互批評などを取り入れた授業内容を構成する。 ②授業方法：(1)文献調査研究法と実践的な方法とを併用するとともに、教育実践フィールド研究などでは「実践をもとにして得た課題」を検討する場を持つ。(2)発表を中心とする授業では、事前個別指導の時間を設けて、学習内容の理解を促し、教材研究・授業研究の方法を体得させる。(3)各分野の基礎的知識・理論の習得を目的として、関連した文献の紹介・資料の配付を適宜行う。 ③論文指導：(1)学習経験や学生の関心に基づいたテーマ設定を支援する。(2)修士論文中間発表会、成果発表会のほか、国内外の学会・研究会への参加を促し、多くの研究に触れさせる。	長期履修学生への支援として、(1)と(2)とを実施した。 (1)「コース開講科目の履修に関するガイドライン」を「長期履修学生支援室」に提出し周知を図っ　た。 (2)学生に対しては、年度始めや授業開始時に「履修に関するガイドライン」や「カリキュラム・マップ」 などを用いて「学びの道筋」のオリエンテーションを行った。 長期履修学生への指導として、①～③の取り組みを行った。 ①授業内容：基礎・基本の内容をアクティブな学習を通して学生が習得できるように、教科書教材を積極的に用いて、指導案の作成や模擬授業、相互批評などを取り入れた授業内容を構成した。 ②授業方法：(1)文献調査研究法と実践的な方法とを併用するとともに、教育実践フィールド研究などでは、授業実践等を行うとともに、「実践をもとにして得た課題」を検討する場を持った。(2)発表を中心とする授業では、事前個別指導の時間を設けて、学習内容の理解を促し、教材研究・授業研究の方法を体得させた。(3)各分野の基礎的知識　・理論の習得を目的として、関連した文献の紹介・資料の配付を適宜行った。 ③論文指導：(1)学習経験や学生の関心に基づき、教育実践に資するようなテーマ設定を支援した。(2)修士論文中間発表会（2015年2月28日）、成果発表会のほか、国内外の学会・研究会（全国大学国語教育学会、中国四国教育学会他）へ参加させ、多くの研究に触れさた。	コース教員が連携して、学部学生・大学院生の健全で充実した学生生活を支援していく。学生生活・就職・学習環境に関して、下記のような支援を実施する。 ○学生生活支援：(1)学年別オリエンテーションを実施し、前年度の反省を踏まえて新年度の目標を話し合う。また、授業履修や学生生活についての指導を行う。(2)日頃から学生に対しての声かけを行うなど、積極的にコミュニケーションを図り、良好な人間関係を構築する。 ○就職支援：学年別オリエンテーションを実施し、教員採用試験に対する心構えのほか、受験勉強の計画・学習方法などの指導を行う。 ○学習環境の整備：国語ゼミナール室・院生研究室・言語実験室などの学習環境の向上を図る。	○年度初めに学年別オリエンテーションを実施し、新年度の目標を話し合わせるとともに、授業履修（単位の取り落としについての確認・履修届の徹底）、学生生活（心身の健康維持・災害や事故対応）について指導を行った。 ○就職支援として、就職支援室主催の採用試験対策行事に協力したほか、年度当初のオリエンテーションでの指導や、自己PR文・論作文などの添削指導、個人・集団面接・模擬授業指導など、学生・院生の要望に応じて課外でも積極的に支援した。その結果、学部卒業生12名の内、7名の正規合格者を出した。また、現職を除く修了大学院生10名の内、3名の正規合格者、1名の国際交流基金派遣事業の合格者を出した。 ○国語ゼミナール室・院生研究室・言語実験室の学習環境を向上させるために、小・中学校教科書のほか、各種の辞書辞典を配架したほか、パソコン・プリンタなどを更新した。	国語科教育学、国語学、国文学、日本語教育学等の各分野において学界に寄与し、また社会から求められる要請に応えるため、次のような活動を通して研究を進める。 ○第29回鳴門教育大学国語教育学会を開催するとともに、機関誌『語文と教育』28号を刊行する。 ○コースの教員それぞれが、科学研究費補助金等に応募し、学部資金の獲得をめざす。また、すでに交付を受けている教員は、当該課題の研究推進に努める。 ○「鳴門教育大学リポジトリ」等を活用し、研究成果を積極的に公開する。 ○国語科授業研究に資する共同研究を進める。	○第29回鳴門教育大学国語教育学会を，平成26年8月24日に開催した（於本学総合学習支援棟，研究発表7名）。また，11編の論考を収めた『語文と教育』28号を刊行した（8月30日）。 ○平成27年度科学研究費補助金について，研究代表者として3件，研究分担者として1件の計4件の課題を新規に申請した。また，平成26年度は，研究代表者として4件，研究分担者として4件の計8件の研究を推進した。 ○「鳴門教育大学リポジトリ」において，『國傳山寶珠院地藏寺所藏文獻目録索引』，学会機関誌『語文と教育』28号を公開する準備を進めた。これらは平成27年度中に公開する予定である。また，コースウェブページの教員紹介から論文本文へのリンクを拡充した。 ○文部科学省特別経費（プロジェクト分）「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の一環として，カリキュラムマップの改訂等に貢献するとともに，『教科内容学に基づく小学校教科専門科目テキスト　国語』の改訂について検討を進めた。	○コース教員それぞれが、各種委員会及びワーキンググループの委員として、当該委員会等の会議に出席し、その職務を積極的に遂行する。 ○教員免許更新講習（選択領域）の複数開講、公開講座の複数開講を行い、その運営を積極的に行う。 ○「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の計画・実施に積極的に協力する。	○コース所属の教員それぞれが，各種委員会やワーキンググループの委員として当該の会　議に出席し，その職務を積極的に遂行した。 ○教員免許状更新講習（選択領域）において，コース所属教員が，「絵本とその読み聞かせの教育的効果」，「子どもの発達段階に応じる音読・朗読と絵本の読み聞かせ」，「国語科教育におけるリテラシーのとらえ方」を開講した。また公開講座「知ってるようで知らないことばの世界」を開催した。さらに，徳島県・大学等連携による教員研修を複数のコース所属教員が担当し，コースとして円滑な大学運営に協力した。 ○コース所属教員全員が，「専修免許状の実質化を図った修士課程実践型カリキュラムの　開発」および「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の計画・実施に貢献した。 ○教育支援人材認証協会の事業について，事業が円滑に進行し成果をあげられるように協　力し，コースの教員が，認証講座「こどもサポーター（読み聞かせ）」を担当した。	○附属学校教員と日常的に交流を図るとともに、研究発表会等での共同研究体制を充実させる。 ○学部・附属国語科連絡協議会を開催し、教育・研究に関する意見交換を積極的に行う。 ○地域の教育機関や各種校園の研修講師等の依頼に応えるとともに、各種研修を開講する。また、公開講座などを開いて研究を発信する。 ○地域の日本語学習者に対する積極的な支援活動を行う。 ○ルワンダ・トゥンバ高等技術専門学校強化プロジェクト、アフガニスタン識字教育強化プロジェクトへの専門家派遣に協力する。 ○協定校など、海外の大学からの留学生を受け入れ、交流を図る。	○コース所属教員が，附属小学校研究発表会の共同研究者，附属中学校研究発表会の指導助言者として，各校の研究の推進に協力した。 ○平成26年6月と平成27年2月に学部・附属国語科連絡協議会を開催し，教育・研究について附属学校園との情報交流を図った。 ○コース所属教員が，附属中学校の授業（「選択国語2年」）を附属中学校の教員と共同で担当した。 ○地域の教育機関や各種校園との連携を図り，各種講習，講演，指導助言，公開講座など地域の教育活動にかかわる各種事業をコース所属教員が積極的に実施した。今年度にコース所属教員が実施した事業は，県内外において50回以上になる。 ○鳴門ダイバーシティクラブが主催する外国人住民を対象とした日本語教室において，大学院の学生が毎週ボランティアとして日本語支援を行った。 ○ルワンダ・トゥンバ高等技術専門学校強化プロジェクト、アフガニスタン識字教育強化プロジェクト、ミャンマー初等教育カリキュラム改訂プロジェクトへの短期専門家派遣に協力した。 ○協定校から3名の交換留学生（中国・青島大学2名、タイ・シーナカリンウィロート大学1名）を受け入れた。また、協定校であるタイ・コンケン大学の協力を得て日本語教育実習等をタイで実施するため、コース教員が現地に赴き同大学教育学部日本語学科教員と交流を図った。	○国語科の小学校教育専修の学生1名が、本学教職大学院教員養成特別コースに進学した。これは、兵庫県の教員採用試験合格者に対する猶予制度を利用したものである。 国語科は、学生の希望や進路によって、本学教職大学院への進学を促し、本年度も含めて4名の教職大学院進学者を送り出している。
7	言語系コース（英語）	前田　一平	①授業内容：現職教員や教員免許をすでに取得している修士課程の学生が持ち合わせている学問的・実践的背景と大きく異なる背景を有することを考慮し，従来の授業では当然視して軽く扱ってきた内容も，時間をかけて分かりやすく指導する。 ②授業方法：従来型の座学及び教師中心の一方通行的な授業方法を改め，履修学生とのインターラクションをとおして学習理解度を確認にしながら，かつ，視聴覚教材や各種補助教材を活用して，さらにはグループ活動を通して互いに教え合える環境を整備して，分かりやすい授業を提供する。 ③論文指導：言語系コース（英語）では基本的に修論は英語で執筆することとなっているため，内容面の指導もさることながら，英語面での指導も加味しながら，大学院生の視点に立った論文指導を展開する。	①長期履修の学生たちは様々な学部出身で、かなり異なるバックグラウンドをもっているので、英語力に明らかな差がある。この事実に鑑みて、授業やゼミを通じて基礎英語力の養成を意識的に図った。また、専門領域の知識や見識も浅い学生がいるので、授業をわかりやすくするべく個々の教員が工夫した。 ②英語教育の実践方法であるインターアクションやグループ学習を大学院の授業にも応用し、今日注目を浴びているアクティブ・ラーニングを実践した。 ③修士論文の英語は明らかに不十分で正確さを欠いている場合が多いので、指導教員が内容のみならず英語のチェックと修正の指導に相当の時間と労力をさいた。今後は英作文力の養成を目的とした授業を設ける必要があるとの確認をした。 追記：平成27年度の英語コース大学院入学生として23人（内部定員15人）が入学手続きをしている。その多くが長期履修生であることに鑑み、上記指導を今後はさらに徹底しなければならないという認識をもった。	○　全学対象の必修科目である「英語コミュニケーション」は，予算と人事が許す限りネイティブ・スピーカーが担当することとし，本学学生の英語運用能力を高めるべく，授業改善を図る。 ○　同「英語リーディング」はTOEIC対策とし，教員採用試験や他の就職試験に役立てる。 ○　海外留学のための情報提供ならびに学習支援を行う。 ○　学部学生用の学習室（俗称，E-ポケット）を充実させ，自主学習の環境を整える。 ○　CALL教室の有効利用を図る。 ○　TOEIC IPテストを実施するとともに海外留学を希望する学生にTOEFLの受験を促す。 ○　英語資格試験の情報を学生に周知する。 ○　留学生のための学習・生活支援を行う。	○授業科目「英語コミュニケーション」はすべてネイティブ・スピーカーで実施した。今後はその効果を検証する必要がある。 ○授業科目「英語リーディング」は同じ教科書を使用してTOEIC対策とした。英語検定受験に役立てたが、今後は教育学部にふさわしい英語教育に転換する必要があるという認識をもった。たとえは、小学校英語教育の内容を盛り込むというような改善である。 ○交流協定による学生の派遣、オーストラリア語学研修、オーストラリアの中等学校に日本語助手の派遣などの支援をおこなった。 ○E-ポケットを学部生の学習環境として提供した。特に、3年生の後期と4年生の前期に教員採用試験の勉強をする学生が多かった。また、卒論作成にパソコンを利用する学生もいた。 ○CALL教室は主として授業に使用した。映画鑑賞会などにも利用した。 ○英語コースの学部生と大学院生にTOEIC　IPテストを実施し、学習効果を経年的に確認した。一般的に、年を追うごとに成績がアップしていることが確認できた。 ○TOEIC、英検、TOEFL、IELTSの受験情報を提供した。実際に受験した学生も確認している。 ○留学生の学習指導は指導教員が、生活支援はチューターを通じて遺漏なくおこなった。	○　教員各自が自己の研究を遂行できるように，教員間で協力体制をとる。 ○　英語教育上必要と考えられる研究テーマを設定し，教員相互に協力して共同研究を進める。 ○　科学研究費補助金の申請を積極的に行う。	○出張等がある場合は、教員間で委員会の代理出席をするなど、協力し合った。 ○鳴門教育大学英語教育学会において、小・中・高の各校種における英語教育の課題というテーマを設定し、シンポジウムを計画して実施した。 ○必ずしも積極的ではないが申請者はいた。申請者が少ないことは反省点である。	○　教員各自が担当する各種委員会等の職務を真摯に遂行し，大学運営に積極的に関与する。 ○　本コースの性格に鑑み，国際交流を支援し，特にコースに関係する分野において積極的に参加し協力する。	○各種委員会の委員としてコース教員全員が尽力した。また、大学の運営にコースとして適切に対応した。 ○国際交流としては、ウェスタン・カロライナ大学の学生と教員が本学を訪れ、本コース教員が附属学校観察や日本文化体験などの研修を支援した。また、光州教育大学校との交流では、本コースの教員と多数の学生が参加し、国際交流に貢献した。 ○年度目標以外では、大学院の改革において、修士課程に「小学校英語教育分野」を創設し、平成28年度から実施予定となった。それに伴って、大学院定員を5名増員し、APポストがひとつ配分されることとなった。また、小学校教員採用試験において英語の面接が課されていることを受けて、平成27年度より本コースが実施母体となって、英語実技講習の実施体制を整えた。	○　附属学校との連携については，授業での取り組みを中心に，附属学校への協力を図る。 ○　公開講座，教員免許更新講習及び教育支援講師派遣を積極的に実施し，地域との連携を強化する。 ○　海外の研究教育機関との共同研究・事業を推進する。	○学生の教育実習を参観し、授業研究会に出席して助言をおこなった。また、各附属校で研究会の助言者となり、授業科目「教育実践フィールド研究」で附属教員と共同研究をおこなった。 ○公開講座、更新講習は例年度通り実施し、教育支援講師派遣は3名が要請に応じた。 ○海外の研究機関との共同研究としては、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの教員と小学校英語教育に関する共同研究を実施した。これは継続中である。また、フィンランドのタンペレ大学の教員を研究員として受け入れた。	特に修士課程に小学校英語教育分野を創設し、文科省が策定する英語教育改革に対応し、見込まれる社会的ニーズと本学大学院の定員を満たす体制整備に貢献できたことは大きな意義があると考える。また、就職支援として小学校教員採用試験対策として英語実技講習を平成27年度から実施するべく実施体制を整えたことも、本コースによる本学全体への貢献として自負している。
8	社会系コース	立岡　裕士	教員免許の要件では、教科専門（本コースにおいては社会科）にかかわる授業が種類・時数ともに極めて薄弱である。したがって、社会系コースでは授業などにおいて教科教育学や専門諸科学の知識ならびに社会に関する事実的知識を教授するとともに、自ら学ぶべきことをの持つことが必要不可欠であり、さらにそれらを自己の知識として十分に咀嚼しえて適宜に表出できなければならない。社会系では従来からこのような根源的な力の育成をめざしてきた。本年度の重点目標はこの方針のもとで追究されうると考える。 ①授業内容：それぞれの科目においてまず本質的な問題を重視する ②授業方法：講義で扱った部分が当該科目にかかわる問題領域の全てでないことを理解させ、自ら学修を深めることができるような指導を工夫する（参考文献の呈示や討論の導入などにより）。また課題や講義中に、受講者が表現する作業・活動をつとめて取り入れる ③修論指導：修論で取り上げるテーマの背景に広く関心が向くように努める	①～③のいずれについても各教員が個別に工夫した。 それとともに、FDの際の研究会および、社会系全体の行事としての修論中間発表会（毎年10月1日開催）および卒論発表会（今年度は2月11日開催）を通して、学生に対する指導のみならず、教員間で教育方法に対する関心や問題意識を共有し討議した。	教育については、基礎的な力・認識の涵養に主眼を置き、授業や修論・卒論指導はもとより可能な限り多くの機会に、学生が自ら問いを立ててそれを解くべく調べ考えるような指導を行うよう心がける。そのために、教育内容・教育方法について各教員が個別に検討するとともに、FD活動など各自の認識や工夫を共有できるような場を設ける。 学生生活支援については、従来通り、社会系コースの教員が全体として学生に注意を払い、修学はじめ学生生活の諸側面において支援を要する問題があれば適切に対処できるようにする。	・本年度の社会系には退学・休学する学生がいたが、それらも含めて学生の生活をコース全体で支援することができた。	社会系コースにおける研究体制に特に大きな問題はないと考えられるので、本年度も昨年度と同様に、社会系コースの教員各員がその研究活動を滞りなく進められるような体制を維持することに努める。研究のベースとなる研究予算の配分方法や利用方法などについては問題が生ずれば速やかに対処する。	研究体制は例年通りに実施した。年度末に総括したが、特に問題とすべき点は見つからなかった。	例年通り、各種委員会や入試業務（学部および大学院）その他の大学運営に関わる業務をコースとして分担するにあたり、一部の教員に負担が集中することのないよう配慮しコース教員全体で協力して当たることに努める。	役職などにより業務の負担の大きい教員はいるが、負担が集中しないようコース内でできる限りの工夫を行った。	附属校との連携を緊密にし、相互の支援が継続的に行えるようにする。 公開講座・免許更新・教員十年次研修・教育支援アドバイザーなどの各種講座・講習を通して社会との連携を緊密にする。 社会系コースに受け入れた留学生に対し、十分な学習や研究ができるような環境の整備を行う。	・附属校とは特に研究会および教育実践フィールド研究を通して緊密な連携を取ることができた。 ・公開講座・免許更新講習・教員研修・教育支援アドバイザなどにより例年通り社会に対して貢献できた。 ・社会系に受け入れた留学生に対する支援も十分に行うことができた。	
9	自然系コース（数学）	成川　公昭	学校現場における教育実践において求められるものは，単に教科書に記述されたものを指導書通りに忠実に行うことではなく，その内容を多角的に見直し，その奥に隠れた真理や仕組みを実感できる教育を提供することにより，子ども達自らが興味を持って考える姿勢を養い，形式的な授業理解ではなく本質を理解し，柔軟に未知の課題解決に向き合うことが出来る力を身につけさせることである。特に学校現場の現状を見るとき，修士課程の修了学生にはこの役割を担うことが強く課せられていると思われる。以上の考えに基づき，特に長期履修学生については以下の点に注意して指導を行う。 ①長期履修生においては，教員を目指すという強い目標は持っているものの，実際の教育現場や教育内容に関する知識や認識は，教員養成の学部学生に及ばないと言わざるを得ない。したがって，授業においては，まず教科教育，教科内容いずれにおいてもその基礎と基本をしっかりと身につけるべく内容を精選して行う。 ②実際に授業を行うに当たっては，教師としての基本を身につけ基礎力を培うことが不可欠であり，このことが何より優れた教育実践に繋がるということを実感できるような工夫をすることが必要である。即ち，常に教育現場を意識し，それを取り上げることにより，現在授業で行われている内容が如何に学校教育と結びつき，現代数学の内容や考え方が，如何に学校教育を支えているのか実感できるようする。 ③長期履修生においては，それぞれ，いわゆる教育学部以外の場において学んだ見識を有する。上記のように教育現場では幅広い多角的なものの見方が必要とされることから，その経験は教師を目指す学生として極めて貴重なものである。特に，学校教育はあらゆる分野が有機的に結びついており，その貴重な経験を通して身につけた観点の重要性を再認識させ，新たに学んだ教育に関する理解の上に活かすことが出来るよう指導する。課題研究を通した修士論文の作成はその課程の最重要部分を占めており，我々は常に最初に述べた意識を持って指導に当たっている。即ち，教科の内容を十分に分析するだけの基礎力と柔軟で多面的なものの考え方，表面的なものにとらわれず，その本質を見抜き理解しようとする態度の育成が最終的な目標である。数学教育も含め，学校現場においてどのような内容がどのように教えられているのかに目を向けながら，それぞれの教員が持つ専門的な内容を十分に生かし，修士論文を作成する研究過程において上記の態度，ものの考え方，それを行えるだけの専門的力が身につくよう修士論文指導に当たる。	①1年次長期履修学生に対しては，実際の教育現場で行われている内容を意識し，それとの関わりを取り上げることにより，将来教員として身につけなければならないものを学んでいるということを実感できるよう努め，授業を進めた。各教員は，その共通認識のもと，学生が教科教育，教科内容いずれにおいてもしっかりとした基礎力を体得できるよう内容を精選して授業を行った。 ②各授業では，実際の教育現場で教えられている内容と現在大学で行われている内容が如何に関わっているか，またそれらの内容が実際に教科書でどのように取り扱われているのか，等の解説を行いながら進めた。更に，基礎的な考え方を身につけた上で，幾つかの例を挙げ問いかけることにより，学校で学び当然のこととして思っている事柄が本当に正しいのか，改めて考え直し検討することを行った。こうすることにより，自らの力で，とらわれず物事を考える力を養うよう努めた。 ③1，2年次において学んだ教師としての基礎的素養や基礎力を基盤としてテーマを絞り，それぞれの研究を進めた。教員養成以外の場で学んだ経験や社会においての経験により身につけた見識を尊重し，長期履修生が故の幅広く多角的な見方ができるという特徴が活かせるよう研究内容の設定を行った。研究の指導に当たっては，既修得の概念にとらわれず，むしろそれを活用して本質的な部分を見抜き，理解することができる力が身につくよう心を配った。また，二年の期間では教員として求められる基礎力を獲得するには十分ではないため，この点には特に気をつけ，修士論文の指導を通じてそれらを補った。	(1)クラス担当教員，指導教員，授業担当者を中心として，各学生の学生生活状況，授業受講状況等について常に目配りし，コース会議においては勿論，コース教員間で常時情報交換を行い，問題がある場合にはコースをあげてその解決に当たる。 (2)同じ目的を持ったもの同士として，学生同士が協力するとともに，互いに競い合う雰囲気を作り出すよう努めるなど，各学生が自ら積極的に充実した学生生活を送ることが出来るよう指導を工夫する。 (3)折に触れ各教員が自信の研究の一端や，興味を惹かれたことがらを学生にかみ砕いて話すことにより，学生，教員が一体となって知の集団としての大学の構築を目指す。 (4)学生が問題意識を持ち，興味を持って授業に臨むことができるよう，各教員が授業改善の取り組みを行う。 (5)卒業・修士論文の指導および進路，学生生活に関して，自由に指導教員以外の教員の指導も受けることが出来るようコースで工夫する。 (6)学生の教員就職活動を支援するため，教員試験採用対策塾を定期的に開講するとともに，模擬授業，模擬面接等の指導も行い，コースをあげて採用試験に対する学生の気運が高まるようサポートを行う。なお，これらの実施に当たっては，内容や時間に拘束されることがないことから，自由に大きな立場から行うことが可能であり，単に技術的な試験対策ではなく，多角的な考え方や見方を示すことを通してその本質にあるものが体得できるよう努める。	(1)毎月開催されるコース会議等においてクラス担当教員，指導教員，それぞれの授業担当者より，学生の生活状況や授業の履修状況の報告があり，特に問題がある場合にはコース教員全員がその問題を共有して把握するとともに，コースをあげて解決に当たった。学生と教員の間の意思の疎通を積極的に行い，学生からの要望も取り上げてコース会議で諮り，できるだけ希望に添えるよう努力した。 (2)院生は院生室において競い合って勉学に勤しんでいた。一方，学部学生が使用できるスペースの確保が難しく，会議，セミナー等と重なってしまうケースも多々あったが，空いている場合にはセミナー室，標本作製室を開放し，同じ目的に向かって協力できるよう努めた。教育実習の準備，教員採用試験，卒業研究等幅広く勉学の場として使用するとともに，教員も時間を割いてその場で指導に当たった。 (3)学生自ら勉強を行っている場合にはそれを阻害しないよう努めたが，質問があったり，世間話をしている場合には各教員が積極的にそれに加わり，一緒になって考えたり，学生とは違った角度から見た考えを述べたりするようした。研究室においては各教員が自身の専門についてのみならず，教職に就いている先輩学生の学生時代の話や，彼らからの現在の学校現場の様子などについても話題提供し，意見の交換を行った。 (4)教科専門授業では，専門的内容の指導にとどまらず，学校現場での指導における概念の正確な定義と理解の必要性について述べた。また身近な現象で数学で説明できる問題や，異なった現象の裏に潜む共通の概念の解説を行った。学校で用いることのできる教材作成に繋がる内容も盛り込み授業を行った。教科教育の授業では、算数・数学の指導事例や算数・数学的活動の具体例を紹介し演習を行った。また，生徒の数学理解を深める教材とはどのようなものであるかを学生自身に考えさせ，実際の授業で使用するための教材の開発を課した。 (5)数学は非常に広い分野にまたがっているが，それぞれの分野が密接に絡み合って発展してきており，そのことを理解することが数学研究，教育において非常に重要である。従って，各教員は当然そのことを理解した上で指導に当たっており，学生の意識もそうなっている。実際に，自由に学生が各研究室を訪れ相談や質問を行っており改めて方策を講じる必要は感じなかった。教員側も，内容に応じて適切な教員を指名し，相談や質問を行うよう自然に指導している。 (6)今年度前半の教員採用試験の直前まで，毎週金曜日二時間程度定期的に教員採用試験対策塾を行った。また，採用試験直前から試験期間中に掛けては模擬授業，模擬面接等の指導を各教員が行った。これらは授業とは異なって時間や内容に拘束されないという利点があり，単に試験対策に終わらないよう心がけ，様々な角度からの見方を示すことにより、幅広い考え方や，見方を養うことができたと評価できる。	(1)研究活動は大学教員としての使命であるという共通の意識を堅持し，それぞれの研究を互いに尊重し活発な研究活動を行う。そのために出来るだけ公平に雑事に拘束されず研究活動が推進できるよう協力体制をとる。 (2)科学研究費補助金の申請は全員が行い，出来るだけ多くの採択が得られるよう努力する。	(1) ・それぞれの研究を互いに尊重し，業務をできるだけ公平に分担して助け合うことにより，拘束される時間を極力抑え，自由な研究活動が推進できることを目指した。 ・研究活動の一環として6月20日にコース主催で東アジア国際数学教育セミナーを開催した。 (2)平成27年度の科学研究費補助金の申請は継続の者を除く全員が行った。平成26年度は研究代表者4件，研究分担者として4件を獲得し，それぞれの研究課題に対し研究を進めた。	負担が公平になるよう各種委員を受け持ち，委員としてそれぞれの会議に出席し，そこにおける情報や議題をコース，教育部での情報提供により共有することにより，コースをあげて大学運営に臨む。授業，出張等で会議に出席が不可能な場合には，コース構成員で協力し，代理としてその役目を助ける。	各自委員として学内の各種委員会に出席し，その職務を果たした。授業，出張等で出席が不可能な場合にはコース構成員で協力し，代理としてその役目を果たした。	(1)教育実践，教科内容に関し，附属小・中学校の算数・数学教員との連携を密にし，それぞれの専門の立場から一緒になって課題の提供や，解決に当たる。その際，可能な限りお互いに時間を調整して直接，大学，附属間を行き来して行うが，連絡に当たってはメールを利用する。（附属学校） (2)上記活動が，活発かつスムーズに行われるよう，コース教員と附属学校算数・数学教員との教育懇談会を行い，自由な意見を交換する。（附属学校） (3)瀬戸中学校を中心とする地域の小・中学校と連携し，協議や提案を行い，実際に算数・数学授業の改善を行う。（社会連携） (4)現職数学教員も多く会員となっている学校数学研究会の学内で開催，機関誌の発行に数学コースをあげて補助する。これらにより，数学教育における問題提起，解決のための討議の場を提供する。（社会連携） (5)教育支援講師・アドバイザー等の機会において，学校現場に実際の数学の楽しさや面白さを伝え，教師の資質の向上を図るとともに，生徒の数学離れ，学力低下を少しでも食い止める努力をする。（社会連携） (6)算数・数学教育専門家として各地で開催される各種研究会に参加し，専門的立場から問題提起やアドバイスを行う。（社会連携） (7)小学生を対象とする「算数教室」を開催する。また，徳島県教育会主催の「わくわく算数教室」を実施し，鳴門市「子どものまちフェスティバル」が開催されれば，算数紹介コーナーを設ける。これらの事業により，子ども達に数学に対する啓蒙や興味の惹起を行う。（社会連携） (8)JICAによる研修をコースで協力して行う。（国際協力）	(1) ・附属小・中学校教員と研究交流を深め，数学専門・数学教育双方の立場からそれぞれの課題に対し共同研究を行った。 ・附属中学校における数学選択総合の授業（4回、8時間）をコースの4名の教員が担当した。 (2)コース教員と附属学校算数・数学教員との教育懇親会を11月18日に開催し，意見交換を行った。 (3) ・鳴門市の中学校で数学科を担当する教員が協働で取り組む平成27年度中四国算数・数学研究大会での研究発表に向けた授業実践・研究に対する研究指導・助言を行った。鳴門市瀬戸中学校に大学院生の数学授業参観・補助の受け入れを依頼し，院生教育の充実を図った。 ・技術・科学者育成プログラムのプロジェクト（数学分野）のプレマスターコース，マスターコースを計12回（1回3時間）開設し，それを通して選抜された中学生に数学の面白さを伝えた。 (4)学校数学研究会を8月23日に学内で開催した。また，その機関誌を2回発行した。これにより数学教育における問題提起，解決のための討議の場を提供した。 (5) ・コース教員全員が教育支援講師・アドバイザーに登録し，前期は1名、後期は4名が教育支援講師・アドバイザー等事業の活動を行い，数学の楽しさ，面白さ，本質を伝え，教員の資質向上を図るとともに，生徒の数学離れ，学力低下を少しでも食い止める努力を行った。 ・2件の免許更新講習を行うとともに，県・大学連携による教職員研修を行った。 (6)算数・数学教育専門家として各地で開催される各種研究会に参加し，専門的立場から講演や助言（計20回）を行った。 (7)なるっ子わくわく教室（大学開放推進事業）の一環として，小・中学生を対象に「算数おもしろ教室」を10月4日に開催した。また，10月19日に開催された鳴門市「子どものまちフェスティバル」で算数紹介コーナーを設け，子ども達に数学に対する啓蒙や興味の惹起を行った。さらに，8月2日には，徳島県教育会が開催した「わくわく算数教室」の企画・実施をコースの教員，院生が協力して行った。これらの活動を通し，地域の教育活動に貢献した。 (8)JICAの委託事業である平成26年度地域別研修「大洋州地域における算数・数学教育に関する教授法の改善に向けた自立的研修の普及2014」をコースの全教員が協力して実施した。	1．大学院において，自然系全体の定員に近い18名の入学者を確保し，コースとしての目標を大きく上回った。 2．徳島県教育会からの依頼を受け，徳島県教育会主催「わくわく算数教室」の企画・実施をコースの教員，院生が協力して行い，地域との連携を深めた。 3．技術・科学者育成プログラムのプロジェクト（数学分野）のプレマスターコース，マスターコースを計12回（1回3時間）開設し，選抜された中学生に対し現代数学の面白さと本質を伝えた。 4．コースの4名の教員が附属中学校において数学科総合選択授業を担当した。 5．2件の免許更新講習を行うとともに，県・大学連携による教職員研修を行った。 6．1件のJICA研修団をコースで受け入れた。 7．JICAの委託により，ラオス国立教育科学研究所科学研究センター副部長を研究生として1年間受け入れ，ラオスの教科書改訂に関する指導を行った。 8．コース主催で東アジア国際数学教育セミナーを開催した。
10	自然系コース（理科）	胸組　虎胤	①授業内容について：学校教員の最も重要なところである「授業を行う」ための基盤は，その教科内容を理解していることである。このことを踏まえて，教科専門の授業においてその学問的背景を意識した授業と成績評価を行う。ただし，長期履修生は異なる学習歴を持った学生であるため，教科内容を理解するための導入部を充実させて，各学生の過去の学習内容と教科内容をつなげる工夫が必要となる。本年度はこの点が改善可能であるか検討したい。 ②授業方法について：教材の作製とその利用方法を議論する機会を設ける授業を行う。 ③論文指導について：各教員の研究指導方針を尊重しながらも，修士論文の研究テーマと教科教育との関連を意識した指導ができないか検討したい。	①授業内容について：「授業を行う」ための基盤は，その教科内容を理解していることを踏まえて，教科専門の授業においてその学問的背景を意識した授業が進行中である。長期履修生（現状では1年生が2名のみの入学）は現状としては専門の授業を受講することがほとんどないため、この計画は来年度以降に検討することが必要である。 ②授業方法について：教材の作製とその利用方法を議論する授業は初等中等理科の科目で実施され、教員としての資質向上に貢献したと考える。 ③論文指導について：各教員の研究指導方針を尊重しながらも，修士論文の研究テーマと教科教育との関連を意識した指導を行う教員が何人か増えた。修士論文発表会でも研究内容と教育との関連に触れる発表が増加したと考えられる。	○授業科目の性質を踏まえた内容の授業を行い，成績評価をする。 ○複数教員で行われる授業科目において，各教員の授業内容間の整合性を図る。 ○学生自ら計画・実行・考察する能力を向上できるよう支援する。 ○学生の研究環境の維持および改善に取り組む。特に，研究における安全の観点から改善を検討する。	○授業科目の性質を踏まえた内容の授業が適切に実施され、成績評価がなされたと考えれる。 ○複数教員で行われる授業科目のうち、大学院の広領域コア科目「数学と芸術、そして、科学間の接点を探る」では担当者が自分以外の担当者の授業を聴講し、自ら担当する授業内容を調整した。シラバス作成においても十分な調整がなされたと考える。 ○学生自ら計画・実行・考察ができるように、授業時間または時間外においての学習を進めるような課題を与える授業がいくつか展開されたと考える。教育についての成果として、佐藤勝幸教授が本年度のベストティーチャー賞を受賞した。 ○実験室における安全について、コース長としてコース会議で意見を述べた。いくつかの装置の壁面への固定等について確認した。	○各教員の研究方針を尊重する。 ○学生の研究に対し，適切に指導するとともにその環境を保証する。 ○理科コース内だけでなく，他コース，学外の教員との共同研究の機会を保証する。	○各教員の研究方針を尊重した結果，それぞれの教員が独創的な研究成果を得たと考えられる。それは卒業論文発表，修士論文発表の機会にある程度示された。 ○学生の研究に対し，適切に指導するとともにその環境を保証したことにより，上記と同じく卒業論文発表，修士論文発表の機会にある程度示された。 ○理科コース内だけでなく，他コース，学外の教員との共同研究の機会を保証した。その結果，いくつか共同研究の論文が発表されている。	○各種委員会・会議において適切な意見を述べる等，大学運営に積極的に参加する。 ○所属する教育部の運営ととコースの運営とが円滑なものであるように維持する。	○各種委員会・会議において適切な意見を述べる等，大学運営に積極的に参加した。「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」および「専修免許状の実質化を図った修士課程教員養成カリキュラムの開発」の委員会には主査として活動した教員もおり、大学運営に積極的に参加したと評価できる。 ○所属する教育部の運営とコースの運営とが円滑なものであるように維持する。コース会議を開催して，十分な議論をして，コース内の教員の合意を十分に得ることに努力した。	○付属学校園とは，研究会等への助言を与えたり，学部授業の支援を受けるなどの関係を維持する。 ○各種教員研修への協力体制を維持する。 ○地域および次世代への科学啓発活動を続ける。	○付属学校園とは，研究会等への助言を与えたり，学部授業の支援を受けるなどの関係を維持する。 付属学校における研究会に積極的に参加し、反省会などで専門の立場から積極的に発言した。 ○各種教員研修への協力体制を維持する。 コース長を通して教員に適切な連絡を行い，各種教員研修への出席を促した。 ○地域および次世代への科学啓発活動を続ける。 フレンドシップ事業，専門の学会において，教育に関する講演を行うなど活動を進めた。	教育、研究、社会との連携を通して、総合的に大学に貢献したと考えられる。これらに関係の特記事項はすでに上記に記載してある。

平成26年度　コース等による自己評価

No.	コース等名	コース長	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援，及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）教育・学生生活支援 2．点検・評価	（Ⅰ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅰ－2）研究 2．点検・評価	（Ⅰ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅰ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅰ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 1．目標・計画	（Ⅰ－4）附属学校・社会との連携、国際交流等 2．点検・評価	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
11	芸術系コース（音楽）	松岡　貴史	長期履修生に対して、学生が自らの研究テーマに沿って探究を進めるための支援を行うとともに、授業をとおして教員としての基礎的な能力を培うことによって、自律性をもった教員の育成を目指す。具体的には以下の各項目が示すように、学部授業をとおして、希望している教科の取得を可能にし、教員として、専門、教育、必須とされる声に対する能力を高めることができるように、講義研究（講演、演奏、作曲）等をとおして、学生たち一人ひとりの教育における問題意識を深まるように努める。研究指導を通じて、 ①　授業実践 教員を目指すいろやキャンパーションは学期を2期制とし授業を行なっている。 学期授業は学年単位のコマ、A,Bクロスの学期授業は第一期は、学生が一緒に授業を行う場合、教職実践ア科目や教職共通科目では、基礎的な教育的なものからハンムロクの可能性に基づいて実施していくことができるように努力している。 学生は学期授業を履修を促すとともに、その理解に基づく実践や自己の課題を明確にする。 教科の専門科目等では、音楽を形式的、内容的、文化的、技術的側面から認識し、教科内容の理解を深めることを学習内容とする。学生がそれぞれ専門とする分野をさらに、授業のなかで積極的に発揮できるようにするとともに、自己、学生に、さらに自己に内容をつかさどり育ちあえるように、 ②授業方法について 教職実践ア科目や教職共通科目では、特にローカルプレイや模擬授業、場面指導等の場において、長期履修生同士で2名からなるグループを構成し、協働的な学習課題を提供し、同時的にエンターテンの技が現れられる場を設ける。 さらに授業実践でもさらに工夫していきたい。また、希望している教科に応じた授業実践を意図した課題をもたる。 教科の専門科目等では、音楽を通じた体で現し、理論と実践が一体のものとして有機的な関連のもとに理解を深めるよう、さらに学生がエンターテンの技を、学生が、いろいろな気づきによって、教育における音楽の技術についての認識を深める機会を提供する。 ③論文指導について 「新入生」にしては、入学後すぐに本人の希望に基づき研究指導教員を決定し指導体制を明確にし、学部長履修期間においても、対話をとおして一人ひとりの問題意識や関心領域を明らかにし、研究に向けてのサポートをする。 2年次生にあたっては、学生一人ひとりの教育における問題意識および探求における学習意識状況を踏まえながら、より適切な研究課題を選択するよう指導する。 また、論文の書き方についても、学生が分かり易い視点から、自分の専門について研究をつづけて文章を書かせるようにする。 3年次生については、学生が自らの研究テーマに沿って探究を進めるための支援体制の強化を図る。 また、学生が自分の研究テーマを明確にし、研究を進めるにあたっての、自己の学習環境の充実を図る。 ④　研究指導 教員を目指すいろやキャンパーションは学期を2期制とし授業を行なっている。 学期授業は学年単位のコマ、A,Bクロスの学期授業は第一期は、学生が一緒に授業を行う場合、教職実践ア科目や教職共通科目では、基礎的な教育的なものからハンムロクの可能性に基づいて実施していくことができるように努力している。 学生は学期授業を履修を促すとともに、その理解に基づく実践や自己の課題を明確にする。 教科の専門科目等では、音楽を形式的、内容的、文化的、技術的側面から認識し、教科内容の理解を深めることを学習内容とする。学生がそれぞれ専門とする分野をさらに、授業のなかで積極的に発揮できるようにするとともに、自己、学生に、さらに自己に内容をつかさどり育ちあえるように、 ②授業方法について 教職実践ア科目や教職共通科目では、特にローカルプレイや模擬授業、場面指導等の場において、長期履修生同士で2名からなるグループを構成し、協働的な学習課題を提供し、同時的にエンターテンの技が現れられる場を設ける。 さらに授業実践でもさらに工夫していきたい。また、希望している教科に応じた授業実践を意図した課題をもたる。 教科の専門科目等では、音楽を通じた体で現し、理論と実践が一体のものとして有機的な関連のもとに理解を深めるよう、さらに学生がエンターテンの技を、学生が、いろいろな気づきによって、教育における音楽の技術についての認識を深める機会を提供する。 ③論文指導について 「新入生」にしては、入学後すぐに本人の希望に基づき研究指導教員を決定し指導体制を明確にし、学部長履修期間においても、対話をとおして一人ひとりの問題意識や関心領域を明らかにし、研究に向けてのサポートをする。 2年次生にあたっては、学生一人ひとりの教育における問題意識および探求における学習意識状況を踏まえながら、より適切な研究課題を選択するよう指導する。 また、論文の書き方についても、学生が分かり易い視点から、自分の専門について研究をつづけて文章を書かせるようにする。 3年次生については、学生が自らの研究テーマに沿って探究を進めるための支援体制の強化を図る。 また、学生が自分の研究テーマを明確にし、研究を進めるにあたっての、自己の学習環境の充実を図る。 ④　研究指導	教育支援について、平成17年度から実施している教員養成コア・カリキュラムをさらに充実させ、「教職実践演習」にスムーズに連結できるように、教育指導体制を再改正させて、そのために以下の内容を検討し、改善を図る。 ①第1ア授業「初等中等教育実践基礎演習」において、学生が大学生活にできる だけ早く慣れ、意欲的に授業に参加し、学校教員として仕事内容についてキチンと理解できるように する。 ②第2ア授業「初等中等教育教育実践1・3・4」において、教科専門と教科教育の教育のカウンセリングを通じ、教育現場の教員との連携を深めながら、それを見せ かも適切な指導を行った。学業継続の授業において は、個人の関係に対して学生を支援させ ることを目的として、学生の学業・生活に関する問題に対して、個人的に対応しながら学習を進めるように した。教科においては、一人ひとりの興味・関心や経験を重視し、自己実現の重視と教育にふさわしいモチベーションの高揚を目的とした教科内容の工夫を図ることを目標とする。 ③学生キャリアノートを充実させ、「教職実践演習」を通じ学習、指導を充実させる。 ④学生の自己評価のあり方を検討し、学生の学習意欲を高めるとともに、教育現場の教員との連携を深めながら、それを見せかも適切な指導を行った。学業継続の授業においては、個人の関係に対して学生を支援させ ることを目的として、学生の学業・生活に関する問題に対して、個人的に対応しながら学習を進めるように した。教科においては、一人ひとりの興味・関心や経験を重視し、自己実現の重視と教育にふさわしいモチベーションの高揚を目的とした教科内容の工夫を図ることを目標とする。 ③学生キャリアノートを充実させ、「教職実践演習」を通じ学習、指導を充実させる。 ④学生の自己評価のあり方を検討し、学生の学習意欲を高めるとともに、教育現場の教員との連携を深めながら、それを見せかも適切な指導を行った。 ⑤教員採用試験のために、これまでにも実施してきた模擬面接、集団面接、小論文、指導案、模擬授業、授業案作成指導等、音楽コースの全教員協力のもと実施体制を充実させる。 学生生活支援については、学生一人ひとりの個性を尊重し、学生の学習意欲を高めるように、学生の生活や進路、また音楽について困り合える場を設ける。 ⑥教員採用試験のために、これまでにも実施してきた模擬面接、集団面接、小論文、指導案、模擬授業、授業案作成指導等、音楽コースの全教員協力のもと実施体制を充実させる。	本コースでは、教員一人ひとりの専門分野における研究を重要すると同時に、これからの教育現場を見据えた教員の育成のために、研究を通じて、これから社会を担う子どもたちを、人間・人格の教育的関係を通じて、豊かな人間性を育てる教育を目指すことを目的とする。 ①　音楽コースの「カリキュラム構想するために」「学生たちの自己実現力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を検討し、科学研究費補助金の申請を行った。 ②　音楽コースの「カリキュラム構想するために」「学生たちの自己実現力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を実施に生かすために、さらなる行政庁への可能性を検討する。また、教科内容研究を推進していくために、教科教育と教科専門の共同による授業科目を必要とする理論作りを検討していく。 ③教員が多忙な時をもって研究に従事できるような環境及び組み体制をつくる。 27学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究を推進する。 31ア・カリキュラムに基づいた授業実践の具体的な取組みや指導体制の検討を通じて、PDCAサイクルを生かしたための可能性を追究する。	1）他の教員の出張・研修時等などに音楽面に代理出来てるなどして、互いに研究環境の維持に努めた。 2）音楽コースのカリキュラムの改革に向けて、「学生たちの自己実現力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を検討し、科学研究費補助金の申請を行った。 3）昨年度と同様に、コア科目の実施において、初年次教育に専念し、学修キャリアノートの活用を活用に重きをおく授業内容を工夫した。特に今年度は、学修キャリアノートの記述の仕方を指導した。コア・カリキュラムに関して「教科内容学研究プロジェクト」に積極的に協力した。 初等音楽（ピアノ）科目の実践において、教科内容学の視点に基づいて作成したテキストを使用して授業を行いテキストを試行した。「音楽環境と創作」分野では授業が1時間分の調整まで公開し、参観した教員の間でその内容と問題点について討議した。また、初等音楽（ピアノ）科目では、1年生は授業平均30名中の3分の2程度の出席率であるが、「声楽」分野の電話講師を入れるなどして、学生の音楽技術の充実を図った。	1）学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究を推進し、「教科内容学研究プロジェクト」を実施に生かすために、行為の体系化と行為の意味の探求を通じて、教科内容学研究を推進する。 2）学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究を推進し、「教科内容学研究プロジェクト」を実施に生かすために、行為の体系化と行為の意味の探求を通じて、教科内容学研究を推進する。 3）学修キャリアノートの活用を通じて、学修キャリアノートの記述の仕方を指導する。 4）学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究を推進し、「教科内容学研究プロジェクト」を実施に生かすために、行為の体系化と行為の意味の探求を通じて、教科内容学研究を推進する。 5）教育実習ポートフォリオを充実させ、「教職実践演習」を通じ学習、指導を充実させる。 6）教育実践講師・アドバイザーを迎えての、教員の学校に出向き、専門的な指導・助言を行った。（5件） 4）中国からの留学生への研究指導や希望に応じての特別レッスンを行うとともに、生活上の相談や指導を積極的に実施した。また、生徒が興味をもち楽しく学ぶ為に、音楽の魅力を感じさせ主体的に取り組む工夫を図ることが出来るよう、さらに、学生が、音楽用具や楽器、ピアノ、ピアノ調律師等、教育実践に必要な環境を充実させるよう、学生の学習意欲を高めるとともに、学生の生活や進路、また音楽について困り合える場を設ける。 ⑥教員採用試験のために、これまでにも実施してきた模擬面接、集団面接、小論文、指導案、模擬授業、授業案作成指導等、音楽コースの全教員協力のもと実施体制を充実させる。	1）教育実習について、学生が自らの研究テーマに沿って探究を進めるための支援を行うとともに、自律性をもった教員の育成を目指すとともに、教科内容の理解を深めることを学習内容とする。学生がそれぞれ専門とする分野をさらに、授業のなかで積極的に発揮できるようにするとともに、自己、学生に、さらに自己に内容をつかさどり育ちあえるように、 ②授業方法について 教職実践ア科目や教職共通科目では、学生と教員との対話を積極的に取り入れることによって、学生一人ひとりの関心を深めて問題意識に即した授業づくりの指導を進めた。また、各種模擬面接について学生どうし現おさせることにより、長期履修生それぞれがセンス教師様を深めていった。ローカルプレイや場面指導等において、協働的、対話的な演習を主体とした授業を実施した。また、すでに専門的な技術を持っている学生たちに、他の受講生の演奏や作品を聴いて、気づきを発表させ、その深浅などを問いたり、アンサンブルの際、一人の学生がピアノを弾きながら演奏者への指示を行い、他者受容様を深めるような活動を行うなど、対話的なコミュニケーション深められるようにする。学級現場での教育実践を積極的に体験し、授業・生徒の演奏を通じて、教員としての資質を高めるようにする。 ③論文指導について 「新入生」にしては、入学後すぐに本人の希望に基づき研究指導教員を決定し指導体制を明確にし、学部長履修期間においても、対話をとおして一人ひとりの問題意識や関心領域を明らかにし、研究に向けてのサポートをする。 2年次生にあたっては、学生一人ひとりの教育における問題意識および探求における学習意識状況を踏まえながら、より適切な研究課題を選択するよう指導する。 また、論文の書き方についても、学生が分かり易い視点から、自分の専門について研究をつづけて文章を書かせるようにする。 3年次生については、学生が自らの研究テーマに沿って探究を進めるための支援体制の強化を図る。 また、学生が自分の研究テーマを明確にし、研究を進めるにあたっての、自己の学習環境の充実を図る。 ④　研究指導	1）教育・研究面で活用できる資料を毎年度2回を学部宛に提供し、閲覧可能とした。また、図書機将来構を利用し、多くの教師コンクール演奏会（美術科教育部会）を助ける。 2）学習・教室および研究が伸ばされる、院生研究室の照明などの環境面を改善する。 3）学生たち、院生たちが相互聖象のため、自主的に議論を取り合える2階ラウンジを設ける。	1）科学研究費補助金の申請等、機構的に外部資金の獲得を図り、当年度、補助金を受けている事があるる。 2）実技系教員の、公募団体展、コンクール展、グループ展、個展等での作品発表を推進する。 3）学術等の学術団体における研究を推進した。	1）過去に、科学研究費補助金の申請等、機構的に外部資金の獲得を図り、当年度、補助金を受けている事があるる。 2）実技系教員の、公募団体展、コンクール展、グループ展、個展等での作品発表を推進した。具体的には年度末（2月頃）公募団体展（信長総合展団体的総展）（グループ展）等により作品発表を行った。 3）学術等の学術団体における研究を推進した。	1）全員が、部会議、コース会議で機構的に改善し、大学運営に寄与した。 2）各自が、音楽と、専門の作曲機器に出席し、機器を進行した。 3）メールを活用し、重要な事柄についてコース内での課題意識を共有した。 4）大学間の音楽交流に積極的に協力する。	1）全員が、部会議、コース会議で機構的に改善し、大学運営に寄与した。 2）各自が、音楽と、専門の作曲機器に出席し、機器を進行した。 3）メールを活用し、重要な事柄についてコース内での課題意識を共有した。特に、学生を育てる中において、メールの活用により報告や研究発表をしていた。 4）大学間の音楽交流に積極的に協力した。都道府県による募集事項の配付はもらってあるが、上記の展覧会参加の折に同じく参加している作家（美術大学教員等）に本学の説明を行い、大学間交流先設に向けた広報活動を行った。 5）教育支援アドバイザー講師を引き受けた。 6）教育支援アドバイザー講師を引き受けた。 7）地域の小学校等の行政機関と連携し地域社会に貢献した。（社会連携） 8）現在受け入れている外国人留学生を全ての協力で機構的に指導にあたった。（国際交流） 7．教員の国際学術に出張し、かつ海外での調査研究を積極的に行って、国際学会との連携を図りた。	1．附属学校間で行われた授業研究会や実地教育にできるだけ参加して指導助言する。（附属学校） 2．初等中等教育教育実践1等（学部）、教育実践フィールド研究（大学院）の授業を通して、附属学校間との連携を深める。（附属学校） 3．公開講座（デッサン教室）を開講し、地域との連携に貢献する。（社会連携） 4．大道芸講座等開など地域の美術関係の連携を図った。（社会連携） 5．地門市などの行政機関と連携し地域社会に貢献した。（社会連携） 6．現在受け入れている外国人留学生を全ての協力で機構的に指導にあたった。（国際交流） 7．教員の国際学術に出張し、かつ海外での調査研究を積極的に行って、国際学会との連携を図りた。	1．附属学校間で行われた授業研究会や実地教育に機構的に参加し、指導助言をする。（附属学校） 2．初等中等教育教育実践1等（学部）、教育実践フィールド研究（大学院）の授業を通して、附属学校間との連携を深める。（附属学校） 3．公開講座（デッサン教室）を開講し、地域との連携に貢献する。（社会連携） 4．大道芸講座等開など地域の美術関係の連携を図った。（社会連携） 5．地門市などの行政機関と連携し地域社会に貢献した。（社会連携） 6．現在受け入れている外国人留学生を全ての協力で機構的に指導にあたった。（国際交流） 7．教員の国際学術に出張し、かつ海外での調査研究を積極的に行って、国際学会との連携を図りた。	2013年度「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」に実施コース全教員によって取り組み研究が進められ、2014年度は、これを教科毎に出版に不発展させた。
12	生活・健康系コース（技術・保健体育）	綿引　勝美	1.授業内容・保健体育の専門領域は多岐にわたり、また教令ロスボーツ学やレーニング学の活用とそれぞれの分野の、スコーズでは、トレーニング学、運動生理学、バイオメカニクス、神経科学、の自然科学的な高度な専門性、及びに、体育哲学、体育社会学、体育経営学の社会科学的な専門性を内容に保証できる教材にする。修士課程では、そうした幅広い専門性を身に付ける機会を保証するコリ学術ゼミ、教員の専門科目の現在を指導する。 2.授業方法：学部学生と長期履修生の協働作業によって、課題発見探求型の授業にスパンが長過ぎる。学部学生は、他学期を卒業し、長期生から学ぶ事によって、課題的な現場を体験とされ、学部学生は現場的な現野を学ぶ機会をもつことができた。 3.論文指導・教育実践フィールド研究や代実習を試とし、課題発見探究型の論文作成を指導のやるとした。専門領域での、高度な研究課題との関係性を論文指導のなかで大意識できるように、中間発表や個別指導の機会を活用する。	1.本コースの特色である、スポーツ学やトレーニング学の活用のより成果を提案出来る点を示し、幅広い現野の可能性を提示することができた。とりわけ、修士課程においては、但来修士論文に特化して考える時間があったが、複数の専門科目の現野指導を行う事によって、幅広い専門性を身に付けさせる機会を提供することができたと考えている。 とりわけ、運動実習関係の指導は、学部学生と大学院生・長期履修生の協働作業の機会が多く、課題発見型、探求型の授業を展開することができた。 各研究室を中心とした指導、多文化的で柔軟な学術教育を展開をもち、思いに応じ的の、 2.授業方法について 教職実践ア科目や教職共通科目では、学生と教員との対話を積極的に取り入れることによって、学生一人ひとりの関心を深めて問題意識に即した授業づくりの指導を進めた。各種模擬面接について学生どうし現おさせることにより、長期履修生それぞれがセンス教師様を深めていった。ローカルプレイや場面指導等において、協働的、対話的な演習を主体とした授業を実施した。また、すでに専門的な技術を持っている学生たちに、他の受講生の演奏や作品を聴いて、気づきを発表させ、その深浅などを問いたり、アンサンブルの際、一人の学生がピアノを弾きながら演奏者への指示を行い他者受容様を深めるような活動を行うなど、対話的なコミュニケーション深められるようにする。学級現場での教育実践を積極的に体験し、授業・生徒の演奏を通じて、教員としての資質を高めるようにする。 3.論文指導は、修士論文の研究指導教員が行けてなく、コースの教員全体で指導にあたった。また、学習・生活相談を通じて学生の教員志向を高めた。 ①一2に加えて、教員採用試験の対策指導（教科専門、論作文、面接等）を行う。 ②コリ学術ゼミ指導、高い専門力と教育実践力を身につけさせるため、教科専門と教科教育の教員間の有機的連携を図り、理論と実践の両面の教育を充実させた。また、教員としての資質能力の向上を目指した授業内容を実施する。 ③修士課程では、一方的な授業を実施するのではなく、授業者と受講者がコミュニケーションを取り双方向的な授業を展開する。その際、模擬実機器も取り入れた授業を実施する。また、学生が専門職業人としての教員を志向できるよう、全教員は授業とそれ指導等を通じてキャリア教育をおこなう。 ④論文指導は、修士論文の研究指導教員が行けてなく、コースの教員全体で指導にあたった。また、学習・生活相談を通じて学生の教員志向を高めた。 ①一2に加えて、教員採用試験の対策指導（教科専門、論作文、面接等）を行う。 ②コリ学術ゼミ指導、高い専門力と教育実践力を身につけさせるため、教科専門と教科教育の教員間の有機的連携を図り、理論と実践の両面の教育を充実させた。また、教員としての資質能力の向上を目指した授業内容を実施する。 ③修士課程では、一方的な授業を実施するのではなく、授業者と受講者がコミュニケーションを取り双方向的な授業を展開する。その際、模擬実機器も取り入れた授業を実施した。また、学生が専門職業人としての教員を志向できるよう、全教員は授業とそれ指導等を通じてキャリア教育をおこなった。 ④論文指導は、修士論文の研究指導教員が行けてなく、コースの教員全体で指導にあたった。また、学習・生活相談を通じて学生の教員志向を高めた。 ①一2に加えて、教員採用試験の対策指導（教科専門、論作文、面接等）を行う。 ②コリ学術ゼミ指導、高い専門力と教育実践力を身につけさせるため、教科専門と教科教育の教員間の有機的連携を図り、理論と実践の両面の教育を充実させた。また、教員としての資質能力の向上を目指した授業内容を実施した。 ③修士課程では、一方的な授業を実施するのではなく、授業者と受講者がコミュニケーションを取り双方向的な授業を展開した

平成26年度　コース等による自己評価

No.	コース等名	コース長	（Ⅰ－1）長期履修学生への支援，及び教職大学院の定員確保について 1．目標・計画	（Ⅰ－1）教育・学生生活支援 1．目標・計画	（Ⅰ－2）研究 1．目標・計画	（Ⅰ－3）大学運営 1．目標・計画	（Ⅰ－3）大学運営 2．点検・評価	（Ⅰ－4）附属学校・社会との連携，国際交流等 1．目標・計画	（Ⅰ－4）附属学校・社会との連携，国際交流等 2．点検・評価	Ⅱ．本学への総合的貢献（特記事項）	Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）
16	国際教育コース	小澤　大成	【学長の定める重点目標】 本学大学院修士課程には、長期履修学生制度を活用し学部の授業履修で教員免許を取得するとともに修士の学位を取得する学生が学んでいる。この制度は、教員を志望する学生のニーズに応えるものであり、本学の教員養成の特色の一つとなっている。教員を目指すこれらの学生に対してどのような指導や支援を展開すればよいか、具体的コースの取り組みについて授業内容、公開実方法、活動支援の観点から示して頂いたなお、国際心理士養成コースにあっては、当該コースとして可能な支援策を示して頂いた。教職大学院においては、過去5年間の学生生員充足状況を分析・検証し、定員確保のために どのような具体的方策で取り組むか、目標達成に向けての方法を示して頂いた。	1)授業内容 教育の基礎となる人間関係を踏まえ、多様な価値観を理解する力を形成できるように、様々な経験を提案する国際的な人材の育成に携わることが可能な能力を育てることができる。 2)授業方法 教育の基礎となる人間関係を踏まえ、多様な価値観を理解する力を形成できるように、人間学・教育学・教育関係学等の内容を取り入れた。 2)授業方法 英語を教授言語とした模擬授業の実践や途上国の授業の記述・分析といった活動もふまえ、学生に主体的に議論をさせ、これらの取組に必要な考える力や表現する力をつけるようにした。 3)論文指導 修士論文のテーマに関しては、海外の教育あるいは国際開発教育という本人が希望するテーマに即し、国内外における活動や現場を実施させ、それを教員が支援した。そして内容が実践的なものとなるよう指導し、結果として修士論文に反映された。	1．目標・計画 1．現職的な講義と授業模擬・教材開発・模擬授業・リフレクションを効果的に組み合わせることを通じて、実践的な授業指導力の向上を図った。また教育教育国際協力センターと連携し、途上国の教育開発者の研修に積極的に参加させ、教育開発の事例や文化的多様性に触れさせた。 2．私費外国人留学生については直接系(英語)、自然系(数学)及び自然系(理科)のコースおよびチューターを連携し教育・学生生活支援を実施する。	1．現職的な講義と授業模擬・教材開発・模擬授業・リフレクションを効果的に組み合わせることを通じて、実践的な授業指導力の向上を図った。また教育教育国際協力センターと連携し、大洋州、ヤマンビッカ、ジブチ、広島県アフリカ広域連携国内教育開発者の研修に積極的に参加させ、教育開発の事例や文化的多様性に触れさせた。また、途上国の現状の授業を録画し、より良い方向に導く研修の在り方について明らかにした。 2．私費外国人留学生については直接系(英語)、自然系(数学)及び自然系(理科)のコースおよびチューターを連携し教育・学生生活支援を実施する。 3．教育開発国際協力センター国際教育開発研究分野での研究活動と連携させ、ユネスコスクール事業及び途上国など、国内外における持続的な発展のための教育(ESD)に関する実践的研究を行う。	1．コース構成員が代表者あるいは分担者である科学研究費補助金の申請・獲得およびコース経費を通じて、国際教育協力に関する研究を実施した。ルワンダ、メルーンおよびヤンゴンにおいて本学が主催しているJICA研修の立案・実施・評価に関する研究を実施した。調査手法は事前調査、研修時の質問票調査、フォローアップ調査である。授業改善に研修がどのように結びついているのかという研修効果の確認、途上国の現状の授業を録画し、より良い方向に導く研修の在り方について明らかにした。 1．の教育協力国際協力センター国際教育開発研究分野での研究活動と連携させ、ユネスコスクール事業及び途上国など、国内外における持続的な発展のための教育(ESD)に関する実践的研究を行う。	1．目標・計画 1．大学院の各種委員会に積極的に参加し、大学運営の活性化に貢献できるように する。 2．国際教育コースの教育に関し、学内外の関係部局・諸機関との連携を密にし、充実・内容の充実を図る。 3．大学院言語授業改善一環として、JICA長期研修生の授業に向けて、JICA関係部局に働きかけ、H27年度に1名の派遣枠を確保した。なお所属機関の都合により2名中1名が入学を辞退した。	1．大学の各種委員会に積極的に参加した。また、コース教員4名中3名が教員育成国際協力センターと兼任を行った。これらを通じて大学運営の活性化に貢献した。 2．国際教育コースの教育に関し、学内外の関係部局・諸機関との連携を密にし、方法・内容の充実を図った。 3．大学院言語授業改善一環として、JICA長期研修生の授業に向けて、JICA関係部局に働きかけ、H27年度に1名の派遣枠を確保した。なお所属機関の都合により2名中1名が入学を辞退した。	1．目標・計画 1．JICA国際と連携し、総合教育センターの国際理解教育に関する10年次経験研修を実施する。 2．国際理解教育に関する公開講座を実施する。 3．国際理解教育に関する教員免許状更新講習を実施した。 4．JICAから本学が受託する研修に、研修経験や講師として参加した。	1．JICA国際と連携し、総合教育センターの国際理解教育に関する10年次経験研修を実施した。 2．国際理解教育に関する公開講座に関しては希望者がなく、開講されなかった。 3．国際理解教育に関する教員免許状更新講習を実施した。 4．JICAから本学が受託する研修に、研修経験や講師として参加した。	
17	教職実践力高度化コース	村川　雅弘	教職大学院が創設されて7年が経過した。教職実践力高度化コース(平成24年度までは現職教職コース)(専門学・学級経営コース、学校臨床実践コース、授業実践力)キャリア開発コースの合計)の入学者数は17名、34名、27名、34名、28名と定員には未達成続いている。平成25年度より非有員第一入学者定員を定けるために現職教職コースを一本化した。その成果は目時点では見えにくいが、学校教育にかかわる3つの分野をバランスよく学習できるメリットや分野を超えた教員から指導支援を得ることができるメリットが十分に伝わっていなかったことが考えられた。コース教員を含める教育教員会や学校現場への説明がより今に活用いただき、教職大学院の定員確保のための教育研究教育総合校長会において教員が分けて、PR活行う。県内の大学院説明会においても同様である。実習校指導において特に配慮すべき点は、院生が計画・実施、各種調整等に苦労をすることがないように学校長や同僚教員に対する説明や院生への支援を大切にすることも重要である。学校現場における指導や教員研修・教育実践や地方行政法人の教育センター等、修了生のアフターサービスやネットワークづくりのために企画・運営していくことも考えている。また、教職大学院、本コースの紹介に関する。	本コースの現職院生は高い問題意識を持って入学してくる。その時点に応えるためにコース教員が従来や現在指導法や代学生や学校現場の情報を提供したり、関連資料を配布したりしている。また、院生同士の情報交換や学び合いが活性化するようにコース全体で学びの場を設定している。例えば、村川はこれまでも、年に1～2回程度修了生を中心とした研究会「専門セミナー」を企画・実施している。今後も新しいコースのために直接の先輩が在籍しない院生にこれまでの関係コースの修了生との研究・実践上の交流・情報交換の場を提供し、広く参加を呼びかけていきたい。平成26年度も修了生を中心に同じ取組が参加し、現役院生も参加した。教職大学院は、既存の大学院等で生み出すことのできない、本年度もこれまでの実績を活かし、本年度も、事故安全の同定法「ずたぼう」の活用法とも連携した、教育安全の実践研究を通じて、さらなる充実を図っていく。教職大学院ではこれまでも教育現場、学生間、学生と教員間の交流を大切にしてきた。また、1年次は教員養成特別コースの院生とともに、教職大学院、本コースの紹介に関わってきた成果である。実習校指導において特に配慮していることは、院生が計画や実施、各種調整等に苦労をすることがないように学校長や同僚教員に対する説明や院生への支援を大切にしていることである。このような長い目で見れば、定員確保に関がってくると考えるも、また、修了生のアフターサービスやネットワークづくりのために企画・運営をしている。コースとしては、2月目に教育実践交流会を実施し、多くの修了生が集う。	本コースの現職院生は高い問題意識を持って入学してくる。その時点に応えるためにコース教員が従来や現在指導法や代学生や学校現場の情報を提供したり、関連資料を配布したりしている。また、院生同士の情報交換や学び合いが活性化するようにコース全体で学びの場を設定している。例えば、村川はこれまでも、年に1～2回程度修了生を中心とした研究会「専門セミナー」を企画・実施している。今後も新しいコースのために直接の先輩が在籍しない院生にこれまでの関係コースの修了生との研究・実践上の交流・情報交換の場を提供し、広く参加を呼びかけていきたい。平成26年度も修了生を中心に同じ取組が参加し、現役院生も参加した。教職大学院は、既存の大学院等で生み出すことのできない、本年度もこれまでの実績を活かし、本年度も、事故安全の同定法「ずたぼう」の活用法とも連携した、教育安全の実践研究を通じて、さらなる充実を図っていく。教職大学院ではこれまでも教育現場、学生間、学生と教員間の交流を大切にしてきた。また、1年次は教員養成特別コースの院生とともに、教職大学院、本コースの紹介に関わってきた成果である。実習校指導において特に配慮していることは、院生が計画や実施、各種調整等に苦労をすることがないように学校長や同僚教員に対する説明や院生への支援を大切にしていることである。このような長い目で見れば、定員確保に関がってくると考えるも、また、修了生のアフターサービスやネットワークづくりのために企画・運営をしている。コースとしては、2月目に教育実践交流会を実施し、多くの修了生が集う。	本コースの教員は自らの専門的知見を現職院生の興味関心や実習校の課題と関連させながら日々の研究に臨んでいる。多くの教員が専門分野で使ってきた研究手法や、研究成果を教育実践にどう結び付けていくのか、教職院生とともに実習校での具体的な課題解決を通して明確にしていこうとしている。研究の知と実践の知を融合した成果を学会誌や本学の研究紀要、一般の教育書などで発信していきたい。そのことが教職大学院の中に人間がいてきたと考えられる。また、複数の専門分野の教員と様々な現場個人や実践課題を抱える院生とがお互いの研究知見と学校現場での経験や情報を持ち寄って、問題と実践の関連・融合を図るための授業（例えば、合同ゼミ）あるいは研究会（例えば、「専門セミナー」や「ずたぼう」）を通じて、ともに学び合うことのできるような、特定の分野にとらわれない実践的研究を展開していくことが教職大学院の役割であると評に結びしていきたい。	本コースの教員は可能な範囲において大学運営に関わる委員会等に積極的に関わっている。特に、大学改革検討委員会は大学院の教職大学院の教員が多数かかっている。具体的な内容や方法に関しては教職大学院及び教職実践力高度化コースの教員の果たすべき役割は大きかったと考える。	各教員は可能な範囲において大学運営に関わる委員会等に積極的にかかわっている。特に、近年は大学改革にかかわる委員会などに積極的に関わっている。具体的な内容や方法に関しては教職大学院及び教職実践力高度化コースの教員の果たすべき役割は大きかったと考える。	教職大学院はその性格・特色上、附属学校園の県内外の一般学校との連携・協力が極めて重要である。受け入れている院生の学校からなり、実習校指導の際に、また、その近隣の学校への指導・支援や情報発信に務めたい。今後の大学院運営への原心・意欲を高める意味でも、指導・支援を必要とする学校現場や教育委員会への協力を実現していきたい。また、教職大学院の各教員は教職教育委員会の運営事業や教員教育委員会学校支援専門家チーム活用事業でスパに関してきた。教職教育教育委員会との年間にわたる三中学校分校に対する指導支援は成果をあげ、3年間の継続が実現し、小学校を含め教職所全体への指導支援を期待されている。各教員の時期的・身体的負担に配慮しながら6教員当及び教員育成分に他の都道府県・市町村への学校現場への指導支援を進めていきたい。	教職大学院はその性格・特色上、附属学校園の県内外の一般学校との連携・協力が極めて重要である。受け入れている院生の学校からなり、実習校指導の際に、また、その近隣の学校への指導・支援や情報発信に務めたい。今後の大学院運営への原心・意欲を高める意味でも、指導・支援を必要とする学校現場や教育委員会への協力を実現していきたい。また、教職大学院の各教員は教職教育委員会の運営事業や教員教育委員会学校支援専門家チーム活用事業でスパに関してきた。教職教育教育委員会との年間にわたる三中学校分校に対する指導支援は成果をあげ、小学校を含め教職所全体への指導支援を期待されている。各教員の時期的・身体的負担に配慮しながら6教員当及び教員育成分に他の都道府県・市町村への学校現場への指導支援を進めていきたい。	平成27年度はキコースへの入学者数を大きく伸ばす結果となった。全国の教育大学・学部の教職大学院化が進む中で、いずれの教育系最も高き時流遅を迎えている。それにもかかわらず、都市圏や愛媛県あるいは高知県において、これまで通りあるいはこれまでは公の流通を経験できたこと、教育系中堅構成などで新規開拓がうまくができたことは、コース教員が県内外に対して継続的に中国地域を行って来た成果である。本学の教職大学院の定員確保とい5年の課題を解決できたことは大きい。	
18	教員養成特別コース	阿形　恒秀	教員養成特別コース（募集人員10名）の過去5年間の定員充足状況は、10名-10名(-6名)-8名-8名の40名で、充足率80%となっている。定員確保のための具体的方策として、 ①「平成25年度から実施している教員採用試験対策「100%合格プラン」を継続・発展させ、合格に向けた力量の育成に努める。 ②これまでの入学実績等を参考に、担当大学を分担して、学生募集に係る行動計画に取り組む。 ③「学院と大学院を合わせた年間のスペースで設置づけられている学校教育実践コース（平成24年度の4年次生から1期生）からの教育学者の拡充に向けて、大学院説明会や個別相談等の充実を図る。 を実施する。	○定員充足に向けたコスを年げての取組について、教員養成特別コースの平成27年度入学者は、募集人員10名に対し、21名となり、教職大学院の定員充足という重要な課題の解決を図ることができた。	コース会議における毎月の院生の状況に関する情報交換・協議の時間を確保し、コースとしての院生のニーズや直面する課題に関する教職員の情報共有・合意形成を図り、コース教員の協働による支援の充実に努める。具体的には、 ①「教員採用試験対策「100%合格プラン」の実施と、就職支援策と連携したきめ細かな情報提供などにより、教員就職に向けた支援に努める。 ②「現職院生と共にかがみ」プロジェクトにかかわて運営されて チーム総合運営」などの利用について、授業担当者の指導と並行して、コース全体としての事前指導・演習の院生の状況把握・事後の振り返りとの指導を実施する。 ③「実習科目「インターンシップ」における毎々の院生の実習状況・成果・課題について、指導教員の指導と並行し、コース全体としての情報共有・合意形成を図り、コース教員で協力して指導・支援に当たる。 ④「学生生活に関する教育相談的な支援を行う。 などに取り組む。	○教員採用試験対策については、就職支援室との連携の下で、コースの全教員の協力・分担により手厚く指導に当たった。 ①「チーム総合運営」等における現職院生との協議・協働の場は、学年院生にとって有意義な時間となった。 ②「実習科目「インターンシップ」における指導については、ゼミ担当教員ごとの指導が中心となり、コース全体としての情報共有や コース教員の協力した指導・支援は部分的にしか実現できなかった。 ③「院生の大学生活等に関する不安や悩みについては、状況把握に努め、個別のサポートを行った。	○ 教員の指導の中の専門性を活かした研究を通のるとともに、教員養成特別コースにおける教職力高めたのためのカリキュラム学校教育実践コースとかすた年一貫コースのカリキュラムについて考慮し、教員養成講座や教職大学院の取り方について研究を進める。	○ 授業の授業等については、定例化したコース会議で、情報交換やディスカッションを重ね、方向性の共有を図った。 ○ 学校教育実践コース1期生（2015年3月卒業）からの教員養成特別コースへの進学者がいなかったことを踏まえ、6年間を見通したカリキュラム組織について、合同に検証する必要がある。	文部科学省が、大学院段階の教員養成の高度化のために、修士課程の教職大学院への移行の方向性を示しているので、教員養成特別コースのこれまでの取組の蓄積や知見を活かして、本学における大学院改革の議論や立案に積極的に提案・協力していきたい。	○ コース会議や事務会議での議論を経まえながら、コースの積数名の教員が大学改革のマスタープラン策定などに関与し、積極的に提案・立案を行った。	以下の取組を今年度も継続して推進する。 ① 附属学校との授業研究等の共同研究、院生の附属学校での実習に係る運携の展開 ② 教育支援講師・アドバイザー制度等に基づく教育現場への貢献 ③ 教育委員会の諸事業への協力・参画による運携の推進	○ 附属学校における教育研究発表会や研究授業に、コースの教員や院生が積極的に参加した。 ○ 教育支援講師・アドバイザー制度による講師派遣については、今事務が一杯になるまで数多くの依頼コース教員が対応した。 ○ コース教員が附属中学校学校評議委員会の委員長として学校評議に携わった。	○ 2015年3月に卒業した学校教育実践コース1期生については、教科内容や教授方法等に偏るのではなく、総合的な教師力に係る多様な教育に基づく卒業論文をまとめさせることができた。 ○ 教員養成特別コースにおいては、募集人員を上回る学生の確保を果たし、慣業であった教職大学院の定員充足問題の解決に大きく寄与した。	